

大里郡岡部町

はら が や と たき した
原 ケ 谷 戸 ・ 滝 下

一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告

— IV —

1 9 9 3



原ヶ谷戸遺跡出土中空土偶



原ヶ谷戸遺跡出土土偶



原ヶ谷戸遺跡出土土版



原ヶ谷戸遺跡出土耳栓



原ヶ谷戸遺跡出土有孔球状土製品



原ヶ谷戸遺跡出土石棒



原ヶ谷戸遺跡出土異形台付土器



原ヶ谷戸遺跡出土手燭形土製品

序

埼玉県北部一帯は、櫛挽台地、妻沼低地など、多様な立地環境に恵まれています。また、これらの環境のもとに営まれた、人々の生活の跡が、埋蔵文化財として数多く残されています。

この地域の低地を貫いて、一般国道17号深谷バイパスが建設されることになりました。事業計画地内に存在する埋蔵文化財の取扱いについては、埼玉県教育委員会と建設省大宮国道工事事務所との間で協議が重ねられましたが、どうしても避けられない遺跡については、当事業団が発掘調査を実施することになりました。

本書はこれらのうち、岡部町に所在する原ヶ谷戸遺跡、滝下遺跡の発掘調査報告書です。原ヶ谷戸遺跡では、縄文時代後・晩期の集落跡、古墳時代前期の集落跡、古代の水田跡が検出されました。縄文時代後・晩期の資料は、本遺跡周辺では発見例が少なく、当時の地域性を考える上で、貴重な資料となりました。また、土偶や石棒などの儀礼用の道具が数多く発見されたことも注目されます。滝下遺跡からは、櫛挽台地の縁辺に沿って掘り込まれた古代の溝跡が検出されました。

本書が学術研究、埋蔵文化財の保護とその普及のための一助となれば幸いです。

刊行にあたり、発掘調査に至るまでの調整をしていただいた埼玉県教育局・生涯学習部文化財保護課をはじめ、多大なご協力を賜りました建設省大宮国道工事事務所、同熊谷出張所、岡部町教育委員会、深谷市教育委員会、地元関係各位、ならびに発掘・整理作業に携われた方々に対し、厚く感謝の意を表します。

平成5年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 荒井修二

例 言

1 本書は埼玉県大里郡岡部町大字岡字坂下1150-4番地他に所在する原ヶ谷戸遺跡、ならびに、岡部町大字岡字坂下1118-1番地他に所在する滝下遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査届に対する文化庁長官の指示通知番号は、原ヶ谷戸遺跡が昭和61年6月30日付け委保第5の799号、並びに、昭和62年5月18日付け委保第5の616号、滝下遺跡が昭和62年3月31日付け委保第5の296号である。遺跡番号は原ヶ谷戸遺跡が63-39、及び63-125、滝下遺跡が63-123である。原ヶ谷戸遺跡に関しては、旧称として「四十坂下遺跡」・「岡部町No.214遺跡」を用いたが、「原ヶ谷戸遺跡」が優先する。また滝下遺跡に関しては旧称として「岡西遺跡」を用いたが、「滝下遺跡」と変更する。なお、原ヶ谷戸遺跡A・B区は遺跡番号63-39、C・D・E・F区は遺跡番号63-125に含まれる。遺跡名の略号は、原ヶ谷戸遺跡がHRGYT,SJZKST、滝下遺跡がTKSTである。なお、原ヶ谷戸遺跡、滝下遺跡に関する文献は下記のもので発表されているが、内容等に関しては、本書が優先する。

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団『年報7,8』1987,1988

- 2 発掘調査は一般国道17号(深谷バイパス)改築工事埋蔵文化財発掘調査にともなう事前調査である。発掘調査は、埼玉県教育局指導部文化財保護課の調整を経て、建設省大宮国道工事事務所の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 3 発掘調査は、原ヶ谷戸遺跡が、昭和61年4月4日から昭和62年4月30日まで、滝下遺跡が昭和61年10月1日から昭和62年5月31日まで行なわれた。整理・報告書作成作業は、平成3年10月1日から平成5年3月31日まで実施した。
- 4 発掘調査は、原ヶ谷戸遺跡は井上尚明、山本 禎、関 義則、吉田 稔、滝下遺跡は井上尚明、山本 禎、関 義則、岩瀬 譲が担当した。整理・報告書作成作業は村田章人が担当し、新屋雅明、植木智子、金子直行、剣持和夫、瀧瀬芳之、田中広明、田中正夫、西井幸雄、橋本 勉、坂野和信、細田 勝、山川守男、山本 靖、吉田 稔の協力を得た。発掘調査及び、整理・報告書作成作業の組織は、第I章に掲載した。
- 5 発掘調査時の写真は井上、山本 禎、関、岩瀬、吉田が撮影し、遺物写真は村田が撮影した。出土品の整理、作図は、原ヶ谷戸遺跡F区の遺物を新屋、土偶を植木が担当し、他は村田が行なった。墨書土器の釈読については、埼玉県立博物館宮瀧交二氏の御教示を得た。
- 6 第2図は国土地理院1:25,000地形図「本庄」「深谷」「寄居」「三ヶ尻」から転載した。遺跡の基準点測量、航空写真は中央航業株式会社、土器の胎土分析は、(株)第四紀地質研究所 井上巖氏、動物遺存体の分析は、宮崎重雄氏、巻頭写真は、折原基久氏に委託した。
- 7 本書の執筆は、第I章第1節を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、第III章 第2節(2)、(3)イの一部を瀧瀬、第V章第1節を井上、第2節を宮崎が行ない、他を村田が担当した。
- 8 本書の編集は、資料整理第2課の村田が行なった。
- 9 本書にかかる資料は、平成5年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。
- 10 本書を作成するに当たり、下記の方々からご教示、ご協力を得た。記して謝意を表したい。

(敬称略)

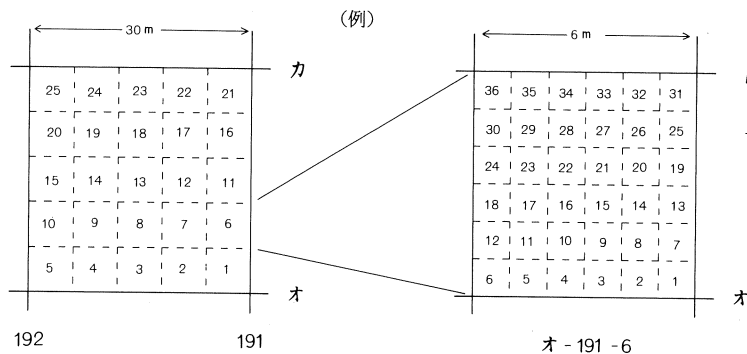
岩井重雄 植木 弘 大塚達朗 小倉 均 金箱文夫 小出紳夫 木幡成雄 近藤 敏 鈴木加津子 鈴木徳男 鈴木 正博 関 義則 土本典生 鳥羽政之 長谷川 勇 平田重之 細川修平 宮瀧交二 山内利秋 吉田健司

凡 例

1 本書の挿図における指示は以下のとおりである。

- (1) 住居跡：SJ、方形周溝墓：ST、円形周溝墓：SX、土壇：SK、溝跡：SD、ピット：P、井戸：SE
- (2) X、Yの座標表示は、国家標準直角座標第IX系に基づく座標値を表し、方位はすべて座標北を示す。
- (3) グリッドは、原ヶ谷戸遺跡では南東隅の杭名称を用い、南北、東西の順で表示している。滝下遺跡では、国家座標値のみ記した。

原ヶ谷戸遺跡では南から北へア～ク、東から西へ177～196という軸を30mに設定して大グリッドとし、その中を6×6mの中グリッド1～25に分割した。B区では中グリッドをさらに1×1mの小グリッド1～36に分割した。



(4) 縮尺率は下記を原則とし、それ以外は、個別に示した。

遺構：住居跡 1/60 方形周溝墓 1/160 土壇 1/80

遺物：土器実測図、磨石、石皿 1/4 土器拓影、土製品、打製石斧、磨製石斧、石棒
1/3 土製円盤、土偶、耳栓 1/2

- 2 遺構番号は原則として、発掘時のものを用いたが、変更しているものがあり、巻末の表に新旧名称の対応関係を掲載した。なお遺物注記の変更は行っていない。
- 3 遺構挿図におけるスクリーンは焼土を表わし、遺物挿図については、土器は破損範囲、石器は以下のとおりである。

節理



黒変部分



4 土器の断面図では、須恵器のみ、塗りつぶしで表現した。

目次

序

凡例

I	調査の概要	1
1	発掘調査に至るまでの経過	1
2	発掘調査・整理・報告書刊行事業の組織	2
3	調査の経過	3
II	周辺の環境と遺跡の立地	4
III	原ヶ谷戸遺跡の調査	10
1	遺跡の概要	10
2	A区の調査	12
	(1) 縄文時代の遺構と遺物	12
	(2) 古墳時代の遺構と遺物	21
	(3) その他の遺構と遺物	38
3	B区の調査	51
	(1) B区の調査の概要	51
	(2) 縄文時代の遺構と遺物	53
	(3) その他の遺構と遺物	304
4	C区の調査	306
5	F区の調査	309
IV	滝下遺跡の調査	329
1	遺跡の概要	329
2	遺構と遺物	329
V	自然科学的分析	345
VI	結語	360

挿 図 目 次

第1図	遺跡周辺の地形分布……………	5	第34図	第2号溝跡……………	47
第2図	原ヶ谷戸・滝下遺跡の位置と周辺の遺跡……………	6	第35図	第3号溝跡……………	48
第3図	原ヶ谷戸・滝下遺跡周辺図……………	8・9	第36図	第3号溝跡出土遺物(1)……………	48
第4図	原ヶ谷戸遺跡全測図……………	11	第37図	第3号溝跡出土遺物(2)……………	49
第5図	A区全測図……………	12	第38図	第6号溝跡及び出土遺物……………	50
第6図	第4号住居跡……………	13	第39図	B区全測図……………	51
第7図	第4号住居跡出土遺物(1)……………	14	第40図	第1号住居跡……………	52
第8図	第4号住居跡出土遺物(2)……………	15	第41図	第2号住居跡……………	54
第9図	第4号住居跡出土遺物(3)……………	16	第42図	第3号住居跡……………	56
第10図	第5号住居跡……………	18	第43図	第4・9号住居跡……………	57
第11図	第1号埋甕……………	20	第44図	第4・9号住居跡炉跡……………	58
第12図	第1号埋甕出土遺物……………	20	第45図	第5号住居跡……………	59
第13図	第1号住居跡……………	22	第46図	第6号住居跡……………	61
第14図	第1号住居跡出土遺物……………	23	第47図	第7号住居跡……………	62
第15図	第2号住居跡……………	24	第48図	第7号住居跡炉跡……………	63
第16図	第2号住居跡出土遺物……………	25	第49図	第8号住居跡……………	64
第17図	第3号住居跡……………	26	第50図	第10号住居跡……………	66
第18図	第3号住居跡出土遺物……………	27	第51図	第1号埋甕及び出土遺物……………	67
第19図	第1号方形周溝墓及び出土遺物……………	28	第52図	土壌……………	73
第20図	第2号方形周溝墓及び出土遺物……………	29	第53図	ピット……………	75
第21図	第3号方形周溝墓及び出土遺物……………	30	第54図	B区住居跡出土土器実測図(1)……………	82
第22図	第4号方形周溝墓及び出土遺物……………	32	第55図	B区住居跡出土土器実測図(2)……………	83
第23図	第5号方形周溝墓……………	33	第56図	B区住居跡出土土器実測図(3)……………	84
第24図	第1号円形周溝墓……………	33	第57図	B区住居跡出土土器実測図(4)……………	85
第25図	第1号円筒埴輪棺……………	34	第58図	B区住居跡出土土器実測図(5)……………	86
第26図	第1号円筒埴輪棺出土遺物(1)……………	35	第59図	B区住居跡出土土器実測図(6)……………	87
第27図	第1号円筒埴輪棺出土遺物(2)……………	36	第60図	B区住居跡出土土器実測図(7)……………	88
第28図	第1号礫槨……………	37	第61図	B区住居跡出土土器実測図(8)……………	89
第29図	土壌(1)……………	42	第62図	B区住居跡出土土器実測図(9)……………	90
第30図	土壌(2)……………	43	第63図	B区住居跡出土土器実測図(10)……………	91
第31図	土壌(3)……………	44	第64図	B区住居跡出土土器実測図(11)……………	92
第32図	土壌出土遺物……………	45	第65図	B区住居跡出土土器実測図(12)……………	93
第33図	第1号溝跡……………	46	第66図	B区土壌出土土器実測図(1)……………	94
			第67図	B区土壌出土土器実測図(2)……………	95

第68図	B区土壌出土土器実測図(3)……………96	第104図	B区住居跡出土土器拓影図(29)……………132
第69図	B区土壌出土土器実測図(4)……………97	第105図	B区住居跡出土土器拓影図(30)……………133
第70図	B区土壌出土土器実測図(5)……………98	第106図	B区土壌出土土器拓影図(1)……………134
第71図	B区土壌出土土器実測図(6)……………99	第107図	B区土壌出土土器拓影図(2)……………135
第72図	B区土壌・溝跡出土土器実測図 … 100	第108図	B区土壌出土土器拓影図(3)……………136
第73図	B区出土土器(ドット)実測図(1) … 101	第109図	B区土壌出土土器拓影図(4)……………137
第74図	B区出土土器(ドット)実測図(2) … 102	第110図	B区土壌出土土器拓影図(5)……………138
第75図	B区出土土器(ドット)実測図(3) … 103	第111図	B区ピット出土土器拓影図……………139
第76図	B区住居跡出土土器拓影図(1) …… 104	第112図	B区第1号溝跡出土土器拓影図(1)… 140
第77図	B区住居跡出土土器拓影図(2) …… 105	第113図	B区第1号溝跡出土土器拓影図(2)… 141
第78図	B区住居跡出土土器拓影図(3) …… 106	第114図	B区第1号溝跡出土土器拓影図(3)… 142
第79図	B区住居跡出土土器拓影図(4) …… 107	第115図	B区グリッド出土土器実測図(1)…145
第80図	B区住居跡出土土器拓影図(5) …… 108	第116図	B区グリッド出土土器実測図(2)…146
第81図	B区住居跡出土土器拓影図(6) …… 109	第117図	B区グリッド出土土器実測図(3)…147
第82図	B区住居跡出土土器拓影図(7) …… 110	第118図	B区グリッド出土土器実測図(4)…148
第83図	B区住居跡出土土器拓影図(8) …… 111	第119図	B区グリッド出土土器実測図(5)…149
第84図	B区住居跡出土土器拓影図(9) …… 112	第120図	B区グリッド出土土器実測図(6)…150
第85図	B区住居跡出土土器拓影図(10) …… 113	第121図	B区グリッド出土土器実測図(7)…151
第86図	B区住居跡出土土器拓影図(11) …… 114	第122図	B区グリッド出土土器実測図(8)…152
第87図	B区住居跡出土土器拓影図(12) …… 115	第123図	B区グリッド出土土器実測図(9)…153
第88図	B区住居跡出土土器拓影図(13) …… 116	第124図	B区グリッド出土土器実測図(10)…154
第89図	B区住居跡出土土器拓影図(14) …… 117	第125図	B区グリッド出土土器拓影図(1)…155
第90図	B区住居跡出土土器拓影図(15) …… 118	第126図	B区グリッド出土土器拓影図(2)…156
第91図	B区住居跡出土土器拓影図(16) …… 119	第127図	B区グリッド出土土器拓影図(3)…157
第92図	B区住居跡出土土器拓影図(17) …… 120	第128図	B区グリッド出土土器拓影図(4)…158
第93図	B区住居跡出土土器拓影図(18) …… 121	第129図	B区グリッド出土土器拓影図(5)…159
第94図	B区住居跡出土土器拓影図(19) …… 122	第130図	B区グリッド出土土器拓影図(6)…160
第95図	B区住居跡出土土器拓影図(20) …… 123	第131図	B区グリッド出土土器拓影図(7)…161
第96図	B区住居跡出土土器拓影図(21) …… 124	第132図	B区グリッド出土土器拓影図(8)…162
第97図	B区住居跡出土土器拓影図(22) …… 125	第133図	B区グリッド出土土器拓影図(9)…163
第98図	B区住居跡出土土器拓影図(23) …… 126	第134図	B区グリッド出土土器拓影図(10)…164
第99図	B区住居跡出土土器拓影図(24) …… 127	第135図	B区グリッド出土土器拓影図(11)…165
第100図	B区住居跡出土土器拓影図(25) …… 128	第136図	B区グリッド出土土器拓影図(12)…166
第101図	B区住居跡出土土器拓影図(26) …… 129	第137図	B区グリッド出土土器拓影図(13)…167
第102図	B区住居跡出土土器拓影図(27) …… 130	第138図	B区グリッド出土土器拓影図(14)…168
第103図	B区住居跡出土土器拓影図(28) …… 131	第139図	B区グリッド出土土器拓影図(15)…169

第140図	B区グリッド出土土器拓影図(16)…	170	第176図	B区グリッド出土土器拓影図(52)…	206
第141図	B区グリッド出土土器拓影図(17)…	171	第177図	B区グリッド出土土器拓影図(53)…	207
第142図	B区グリッド出土土器拓影図(18)…	172	第178図	B区グリッド出土土器拓影図(54)…	208
第143図	B区グリッド出土土器拓影図(19)…	173	第179図	B区グリッド出土土器拓影図(55)…	209
第144図	B区グリッド出土土器拓影図(20)…	174	第180図	B区グリッド出土土器拓影図(56)…	210
第145図	B区グリッド出土土器拓影図(21)…	175	第181図	B区グリッド出土土器拓影図(57)…	211
第146図	B区グリッド出土土器拓影図(22)…	176	第182図	B区グリッド出土土器拓影図(58)…	212
第147図	B区グリッド出土土器拓影図(23)…	177	第183図	B区グリッド出土土器拓影図(59)…	213
第148図	B区グリッド出土土器拓影図(24)…	178	第184図	B区グリッド出土土器拓影図(60)…	214
第149図	B区グリッド出土土器拓影図(25)…	179	第185図	B区グリッド出土土器拓影図(61)…	215
第150図	B区グリッド出土土器拓影図(26)…	180	第186図	B区グリッド出土土器拓影図(62)…	216
第151図	B区グリッド出土土器拓影図(27)…	181	第187図	B区グリッド出土土器拓影図(63)…	217
第152図	B区グリッド出土土器拓影図(28)…	182	第188図	B区グリッド出土土器拓影図(64)…	218
第153図	B区グリッド出土土器拓影図(29)…	183	第189図	B区グリッド出土土器拓影図(65)…	219
第154図	B区グリッド出土土器拓影図(30)…	184	第190図	B区グリッド出土土器拓影図(66)…	220
第155図	B区グリッド出土土器拓影図(31)…	185	第191図	土器出土位置図……………	221
第156図	B区グリッド出土土器拓影図(32)…	186	第192図	B区出土土製円盤(1)……………	223
第157図	B区グリッド出土土器拓影図(33)…	187	第193図	B区出土土製円盤(2)……………	224
第158図	B区グリッド出土土器拓影図(34)…	188	第194図	B区出土土偶(1)……………	228
第159図	B区グリッド出土土器拓影図(35)…	189	第195図	B区出土土偶(2)……………	229
第160図	B区グリッド出土土器拓影図(36)…	190	第196図	B区出土土偶(3)……………	230
第161図	B区グリッド出土土器拓影図(37)…	191	第197図	B区出土土偶(4)……………	231
第162図	B区グリッド出土土器拓影図(38)…	192	第198図	B区出土土偶(5)……………	232
第163図	B区グリッド出土土器拓影図(39)…	193	第199図	B区出土土偶(6)……………	233
第164図	B区グリッド出土土器拓影図(40)…	194	第200図	B区出土土偶(7)……………	234
第165図	B区グリッド出土土器拓影図(41)…	195	第201図	B区出土土偶(8)……………	235
第166図	B区グリッド出土土器拓影図(42)…	196	第202図	B区出土土偶(9)……………	236
第167図	B区グリッド出土土器拓影図(43)…	197	第203図	B区出土土偶(10)……………	237
第168図	B区グリッド出土土器拓影図(44)…	198	第204図	B区出土土偶(11)……………	238
第169図	B区グリッド出土土器拓影図(45)…	199	第205図	B区出土土版……………	239
第170図	B区グリッド出土土器拓影図(46)…	200	第206図	土偶・土版出土位置図……………	240
第171図	B区グリッド出土土器拓影図(47)…	201	第207図	B区出土土製品(1)……………	243
第172図	B区グリッド出土土器拓影図(48)…	202	第208図	B区出土土製品(2)……………	244
第173図	B区グリッド出土土器拓影図(49)…	203	第209図	土製品出土位置図……………	245
第174図	B区グリッド出土土器拓影図(50)…	204	第210図	B区出土耳栓(1)……………	247
第175図	B区グリッド出土土器拓影図(51)…	205	第211図	B区出土耳栓(2)……………	248

第212図	B区出土耳栓(3)……………	249	第248図	B区出土石器・石製品(32)……………	292
第213図	B区出土耳栓(4)……………	250	第249図	B区出土石器・石製品(33)……………	293
第214図	B区出土耳栓(5)……………	251	第250図	B区出土石器・石製品(34)……………	294
第215図	B区出土耳栓(6)……………	252	第251図	B区出土石器・石製品(35)……………	295
第216図	耳栓出土位置図……………	253	第252図	B区出土石器・石製品(36)……………	296
第217図	B区出土石器・石製品(1)……………	261	第253図	B区出土石器・石製品(37)……………	297
第218図	B区出土石器・石製品(2)……………	262	第254図	石棒・独鈷石出土位置図……………	298
第219図	B区出土石器・石製品(3)……………	263	第255図	第11号住居跡及び出土遺物……………	304
第220図	B区出土石器・石製品(4)……………	264	第256図	第1号井戸跡……………	305
第221図	B区出土石器・石製品(5)……………	265	第257図	B区出土埴輪……………	305
第222図	B区出土石器・石製品(6)……………	266	第258図	C区全測図……………	307
第223図	B区出土石器・石製品(7)……………	267	第259図	C区水田跡及び出土遺物……………	308
第224図	B区出土石器・石製品(8)……………	268	第260図	F区全測図……………	310
第225図	B区出土石器・石製品(9)……………	269	第261図	F区溝跡及び遺物包含層断面図…	311
第226図	B区出土石器・石製品(10)……………	270	第262図	F区出土土器(1)……………	312
第227図	B区出土石器・石製品(11)……………	271	第263図	F区出土土器(2)……………	313
第228図	B区出土石器・石製品(12)……………	272	第264図	F区出土土器(3)……………	314
第229図	B区出土石器・石製品(13)……………	273	第265図	F区出土土器(4)……………	315
第230図	B区出土石器・石製品(14)……………	274	第266図	F区出土土器(5)……………	316
第231図	B区出土石器・石製品(15)……………	275	第267図	F区出土土器(6)……………	317
第232図	B区出土石器・石製品(16)……………	276	第268図	F区出土土器(7)……………	318
第233図	B区出土石器・石製品(17)……………	277	第269図	F区出土土器(8)……………	319
第234図	B区出土石器・石製品(18)……………	278	第270図	F区出土土器(9)……………	320
第235図	B区出土石器・石製品(19)……………	279	第271図	F区出土土器(10)……………	321
第236図	B区出土石器・石製品(20)……………	280	第272図	F区出土土器(11)……………	322
第237図	B区出土石器・石製品(21)……………	281	第273図	F区出土土器(12)……………	323
第238図	B区出土石器・石製品(22)……………	282	第274図	F区出土土器(13)……………	324
第239図	B区出土石器・石製品(23)……………	283	第275図	F区出土土器(14)……………	325
第240図	B区出土石器・石製品(24)……………	284	第276図	F区出土土器(15)……………	326
第241図	B区出土石器・石製品(25)……………	285	第277図	F区出土土製品・石器……………	327
第242図	B区出土石器・石製品(26)……………	286	第278図	F区出土石器……………	328
第243図	B区出土石器・石製品(27)……………	287	第279図	滝下遺跡調査区配置図……………	330
第244図	B区出土石器・石製品(28)……………	288	第280図	滝下遺跡全測図……………	331
第245図	B区出土石器・石製品(29)……………	289	第281図	B-3区基本土層……………	332
第246図	B区出土石器・石製品(30)……………	290	第282図	A-1区溝跡……………	333
第247図	B区出土石器・石製品(31)……………	291	第283図	A-3区溝跡……………	335

第284図	B-1, 2区溝跡……………	336	第291図	滝下遺跡出土須恵器・陶器……………	342
第285図	B-1, 2区溝跡断面……………	337	第292図	滝下遺跡出土瓦・埴輪……………	343
第286図	B-3区溝跡……………	338	第293図	滝下遺跡表採遺物……………	343
第287図	B-3区水田跡……………	339	第294図	三角・菱形ダイヤグラム位置図…	347
第288図	B-1区出土遺物……………	340	第295図	三角・菱形ダイヤグラム……………	348
第289図	B-2区出土遺物……………	341	第296図	石英-斜長石相関図……………	350
第290図	B-3区第1, 2号溝跡出土遺物…	342	第297図	獣骨出土位置図……………	359

図 版 目 次

巻頭図版 1	原ヶ谷戸遺跡出土中空土偶 原ヶ谷戸遺跡出土土偶	図版 9	A区第1号溝跡 A区第2号溝跡
巻頭図版 2	原ヶ谷戸遺跡出土土版 原ヶ谷戸遺跡出土耳栓	図版10	B区全景 B区全景
巻頭図版 3	原ヶ谷戸遺跡出土有孔球状土製品 原ヶ谷戸遺跡出土石棒	図版11	B区第1号住居跡 B区第2号住居跡
巻頭図版 4	原ヶ谷戸遺跡出土異形台付土器 原ヶ谷戸遺跡出土手燭形土製品	図版12	B区第3号住居跡 B区第4・9号住居跡
図版 1	原ヶ谷戸遺跡A~C区全景 A区全景	図版13	B区第5号住居跡 B区第6号住居跡
図版 2	A区第4号住居跡 A区第5号住居跡	図版14	B区第7号住居跡 B区第8号住居跡
図版 3	A区第1号埋甕 A区第1号住居跡	図版15	B区第10号住居跡 B区第1号埋甕
図版 4	A区第2号住居跡遺物出土状況 A区第3号住居跡	図版16	B区第4号土壇 B区第1号井戸跡
図版 5	A区第3号住居跡遺物出土状況 A区第2号方形周溝墓	図版17	B区土偶出土状況 C区水田跡
図版 6	A区第3号方形周溝墓 A区第4号方形周溝墓	図版18	C区水田跡 D区全景
図版 7	A区第5号方形周溝墓 A区第1号円形周溝墓	図版19	E区表土掘削状況 F区全景
図版 8	A区第1号円筒埴輪棺 A区第1号礫槨	図版20	F区第1・2号溝跡 F区第1・2号溝跡

图版21	A区出土遺物(1)	图版57	B区出土土器(31)
图版22	A区出土遺物(2)	图版58	B区出土土器(32)
图版23	A区出土遺物(3)	图版59	B区出土土器(33)
图版24	A区出土遺物(4)	图版60	B区出土土器(34)
图版25	A区出土遺物(5)	图版61	B区出土土器(35)
图版26	A区出土遺物(6)	图版62	B区出土土器(36)
图版27	B区出土土器(1)	图版63	B区出土土器(37)
图版28	B区出土土器(2)	图版64	B区出土土器(38)
图版29	B区出土土器(3)	图版65	B区出土土器(39)
图版30	B区出土土器(4)	图版66	B区出土土器(40)
图版31	B区出土土器(5)	图版67	B区出土土器(41)
图版32	B区出土土器(6)	图版68	B区出土土器(42)
图版33	B区出土土器(7)	图版69	B区出土土器(43)
图版34	B区出土土器(8)	图版70	B区出土土器(44)
图版35	B区出土土器(9)	图版71	B区出土土器(45)
图版36	B区出土土器(10)	图版72	B区出土土器(46)
图版37	B区出土土器(11)	图版73	B区出土土器(47)
图版38	B区出土土器(12)	图版74	B区出土土器(48)
图版39	B区出土土器(13)	图版75	B区出土土器(49)
图版40	B区出土土器(14)	图版76	B区出土土器(50)
图版41	B区出土土器(15)	图版77	B区出土土器(51)
图版42	B区出土土器(16)	图版78	B区出土土器(52)
图版43	B区出土土器(17)	图版79	B区出土土器(53)
图版44	B区出土土器(18)	图版80	B区出土土器(54)
图版45	B区出土土器(19)	图版81	土器底部压痕
图版46	B区出土土器(20)	图版82	土器細部
图版47	B区出土土器(21)	图版83	B区出土土製円盤
图版48	B区出土土器(22)	图版84	B区出土土偶(1)
图版49	B区出土土器(23)	图版85	B区出土土偶(2)
图版50	B区出土土器(24)	图版86	B区出土土偶(3)
图版51	B区出土土器(25)	图版87	B区出土土偶(4)
图版52	B区出土土器(26)	图版88	B区出土土偶(5)
图版53	B区出土土器(27)	图版89	B区出土土偶(6)
图版54	B区出土土器(28)	图版90	B区出土土偶(7)·土版
图版55	B区出土土器(29)	图版91	B区出土土製品(1)
图版56	B区出土土器(30)	图版92	B区出土土製品(2)

図版93	B区出土土製品(3)	図版113	F区出土土器(4)
図版94	B区出土耳栓(1)	図版114	F区出土土器(5)
図版95	B区出土耳栓(2)	図版115	F区出土土器(6)
図版96	B区出土石器・石製品(1)	図版116	F区出土土器(7)
図版97	B区出土石器・石製品(2)	図版117	F区出土土器(8)
図版98	B区出土石器・石製品(3)	図版118	F区出土土器(9)
図版99	B区出土石器・石製品(4)	図版119	F区出土土器(10)
図版100	B区出土石器・石製品(5)	図版120	F区出土土器(11)
図版101	B区出土石器・石製品(6)		F区土製品・石器
図版102	B区出土石器・石製品(7)	図版121	B区出土獣骨(1)
図版103	B区出土石器・石製品(8)	図版122	B区出土獣骨(2)
図版104	B区出土石器・石製品(9)	図版123	滝下遺跡A-1区全景
図版105	B区出土石器・石製品(10)		滝下遺跡A-3区全景
図版106	B区出土石器・石製品(11)	図版124	B-1, 2区全景
図版107	B区出土石器・石製品(12)		B-1区溝跡遺物出土状況
図版108	B区出土石器・石製品(13)	図版125	B-1, 2区溝跡
図版109	B区出土石器・石製品(14)		B-3区水田跡
図版110	F区出土土器(1)	図版126	滝下遺跡出土遺物(1)
図版111	F区出土土器(2)	図版127	滝下遺跡出土遺物(2)
図版112	F区出土土器(3)	図版128	滝下遺跡出土遺物(3)

I 調査の概要

1 発掘調査に至るまでの経過

一般国道17号は、東京から新潟に至る幹線道路で、増大する交通量に対処するため、建設省では昭和37年以来、各種バイパスを建設している。深谷バイパスもその一環として計画された。

埼玉県教育委員会では、この事業と埋蔵文化財保護との調整を図るため、昭和45年に国庫補助を得て分布調査を実施してきた。

昭和46年、深谷バイパスの計画にあたり、建設省関東地方建設局大宮国道工事事務所調査課長から文化財保護室（当時）あて、昭和46年11月25日付け大国調第146号をもって、「一般国道16号線の東大宮バイパス、西大宮バイパスおよび一般国道17号線の熊谷バイパス、深谷バイパス、上武バイパスの建設予定地内における埋蔵文化財の所在について（依頼）」があり、分布調査の結果とを照合し、深谷バイパス線路上に数箇所の遺跡が確認されているため、即日、教文第854号をもって埋蔵文化財が所在する旨回答した。

昭和48年7月30日付け大国調第151号をもって、調査費用等について協議があり、調査機関、時期、経費の明細等については改めて協議するよう回答した。昭和55年財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が設立され、実施機関は事業団とし、昭和55年10月、新ヶ谷戸遺跡から発掘調査は開始された。これについては昭和57年3月に報告書が刊行された。

工事区間の延長にともなって、昭和57年12月16日付け大国調第167号をもって、大宮国道工事事務所長から県教育長あて、「一般国道17号深谷バイパス改良工事に伴う埋蔵文化財の所在について（照会）」があり、昭和58年11月8日付け教文第755号をもって、上敷免遺跡ほか4遺跡が所在する旨回答した。また、これにともない、昭和59年3月14日付け大国調第27号で発掘調査について協議があり、昭和59年3月16日付け教文第1163号で、発掘調査は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に依頼して実施するのが適当と思われる旨の回答した。これらの遺跡の調査は、昭和55年4月から実施された。

さらに、工事区間が岡部町方面に延長するにともない、その区間の埋蔵文化財の所在について、昭和60年10月9日付け大国調第147号で照会があり、昭和60年10月21日付け教文第699号をもって四十坂下遺跡のほか2遺跡が所在する旨回答した。これについては、埋蔵文化財包蔵地の範囲を明確にするため予備調査を実施し、実施については文化財保護課と協議して欲しい旨付け加えた。

この回答をもとに、大宮国道工事事務所長から県教育長あて、昭和62年3月3日付け大国調第17号をもって「一般国道17号（深谷バイパス）改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査について（協議）」があり、昭和62年3月23日付け教文第1127号で、その後新たに発見された明戸上敷免遺跡を加え、先に回答をした四十坂下遺跡、矢島遺跡、戸森遺跡の4遺跡が発掘調査を実施する必要がある、実施機関を財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団にする旨の回答をした。これらの遺跡は昭和64年4月から発掘調査が開始された。

（文化財保護課）

2 発掘調査・整理・報告書刊行事業の組織

1 発掘調査（昭和61・62年度）

主 体 者 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 長井 五郎 （昭和61年度）

副 理 事 長 岩田 明 （昭和61年度）

” 百瀬 陽二 （昭和62年度）

常 務 理 事 町田 勝義 （昭和61年度）
兼 管 理 部 長

常 務 理 事 兼 早川 智明 （昭和62年度）
調 査 研 究 部 長

管 理 部

管 理 部 長 原田 家次 （昭和62年度）

主 査 関野 栄一

主 事 江田 和美

主 事 岡野美智子

主 事 福田 浩

主 事 本庄 朗人

調 査 研 究 部

部 長 中島 利治 （昭和61年度）

副 部 長 小川 良祐 （昭和61年度）

” 塩野 博 （昭和62年度）

第 一 課 長 今泉 泰之

井上 尚明

関 義則 （昭和61年度）

山本 禎

岩瀬 譲 （昭和62年度）

吉田 稔

2 整理・報告書刊行事業（平成3・4年度）

主 体 者 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 荒井 修二

副 理 事 長 早川 智明

常 務 理 事 倉持 悦夫
兼 管 理 部 長

管 理 部

庶 務 課 長 高田 弘義 （平成3年度）

” 萩原 和夫 （平成4年度）

主 査 松本 晋 （平成3年度）

主 査 贄田 清 （平成4年度）

主 事 長滝美智子 （平成3年度）

主 事 菊池 久 （平成4年度）

経 理 課 長 関野 栄一

主 査 江田 和美

主 事 長滝美智子 （平成4年度）

主 事 福田 昭美 （平成3年度）

主 事 腰塚 雄二

主 事 菊池 久 （平成3年度）

資 料 部

資 料 部 長 中島 利治

副 部 長 兼 増田 逸朗

資 料 整 理 第 一 課 長

資 料 整 理 第 二 課 長 石岡 憲雄 （平成3年度）

専 門 調 査 員 兼 小久保 徹 （平成4年度）

資 料 整 理 第 二 課 長

調 査 員 村田 章人

3 調査の経過

(1) 原ヶ谷戸遺跡

昭和61年4月4日から昭和62年4月31日まで発掘調査を実施した。発掘対象面積は29,700㎡である。現道、水路等によりA～F区に調査区を区分して調査を進めた。A区から調査に入り、引き続きB～E区の調査を併行して行なった。F区の調査は、昭和62年度に行なった。

グリッドは南から北へア～ク、東から西へ177～196という軸を30mおきに設定して大グリッドとし、その中を6×6mの中グリッド1～25までに分割した。中グリッドは南東隅を1とし、東から西へ1～5と進み、また6～10、11～15という列が北進し、北西隅が25となる。グリッドの呼称は、南東隅の交点を使用している。また、B区では、中グリッドの中をさらに1×1mの小グリッドに分割し、中グリッドと同様、南東隅から北西隅に向かって1から36の小グリッド名を付けた。

D、E区では遺構、遺物とも、まったく確認できなかったため、昭和61年度の調査は、A区、B区、C区が中心となった。

B区の調査では、遺構の確認に困難を極めた。それとともに、多量の遺物が出土したが、時間の許す限り、出土地点を記録することに努めた。

C区では、浅間B軽石が薄く堆積していたため、慎重に除去したところ、水田跡が確認された。

A～E区の調査は、昭和61年3月31日までで終了した。

昭和62年4月1日からF区の調査に入った。F区からは、溝跡とともに縄文時代後晩期の遺物包含層が検出された。遺構等は少なく、4月31日までに図面作成、機材撤収等、すべての調査を終了した。

(2) 滝下遺跡

昭和61年10月1日から昭和62年5月31日まで発掘調査を実施した。発掘対象面積は30,140㎡である。東からA区、B区、C区の順で調査区を設定して調査を進めた。全体に浅間B軽石の堆積が見られ、その下部に水田等の遺構の存在が予想されたため、軽石の除去を慎重に行なったところ、B区から畦畔が検出された。その他、溝跡が数条検出されたが、遺物は全体に少なく、図面作成、機材撤収等の作業も、5月31日までで終了した。

(3) 整理事業

報告書作成事業は平成3年10月1日から平成5年3月31日まで実施した。平成3年度は、遺物の接合、復元を中心に行ない、併行して、図面整理、遺物実測、資料調査を行なった。平成4年度には、遺物実測、拓本、トレース、写真撮影、版組、割付、原稿執筆を行ない、3月31日に報告書を刊行した。

II 周辺の環境と遺跡の立地

原ヶ谷遺跡、滝下遺跡が所在する岡部町は、埼玉県北西部に位置する。町の北辺を利根川が東流し、群馬県との境をなす。南からは、寄居町に端を発する櫛挽台地が北東方向に向かって伸びている。櫛挽台地は比較的平坦な火山灰台地であり、藤治川、唐沢川などによって浅く侵食されている。これら侵食谷の周囲には縄文時代の遺跡が密に分布している（柿沼 1979）。櫛挽台地と利根川の間には、利根川の沖積作用によって形成された妻沼低地が熊谷方面に向かって広がる。妻沼低地には、利根川によって多量の土砂が供給され、自然堤防が発達している。自然堤防と櫛挽台地との間には、後背湿地が開け、現在は水田として利用されている。櫛挽台地の西側には小山川、志戸川が北東方向に流れ、その流域に身馴川低地が形成されている。身馴川低地と櫛挽台地の接する付近には山崎山残丘が存在する（埼玉県 1978）。

原ヶ谷遺跡は、櫛挽台地の北端部から後背湿地にかけて立地する。台地上は標高約45mを測り、五領期の竪穴住居跡、方形周溝墓、古墳の周溝と考えられる溝跡が分布する。自然堤防から後背湿地にかけて南東方向に下る緩斜面上には、縄文時代後晩期の集落跡が分布する。また、沖積低地上には、10世紀代と考えられる水田跡、古代の溝跡、縄文時代後晩期の包含層が検出されている。

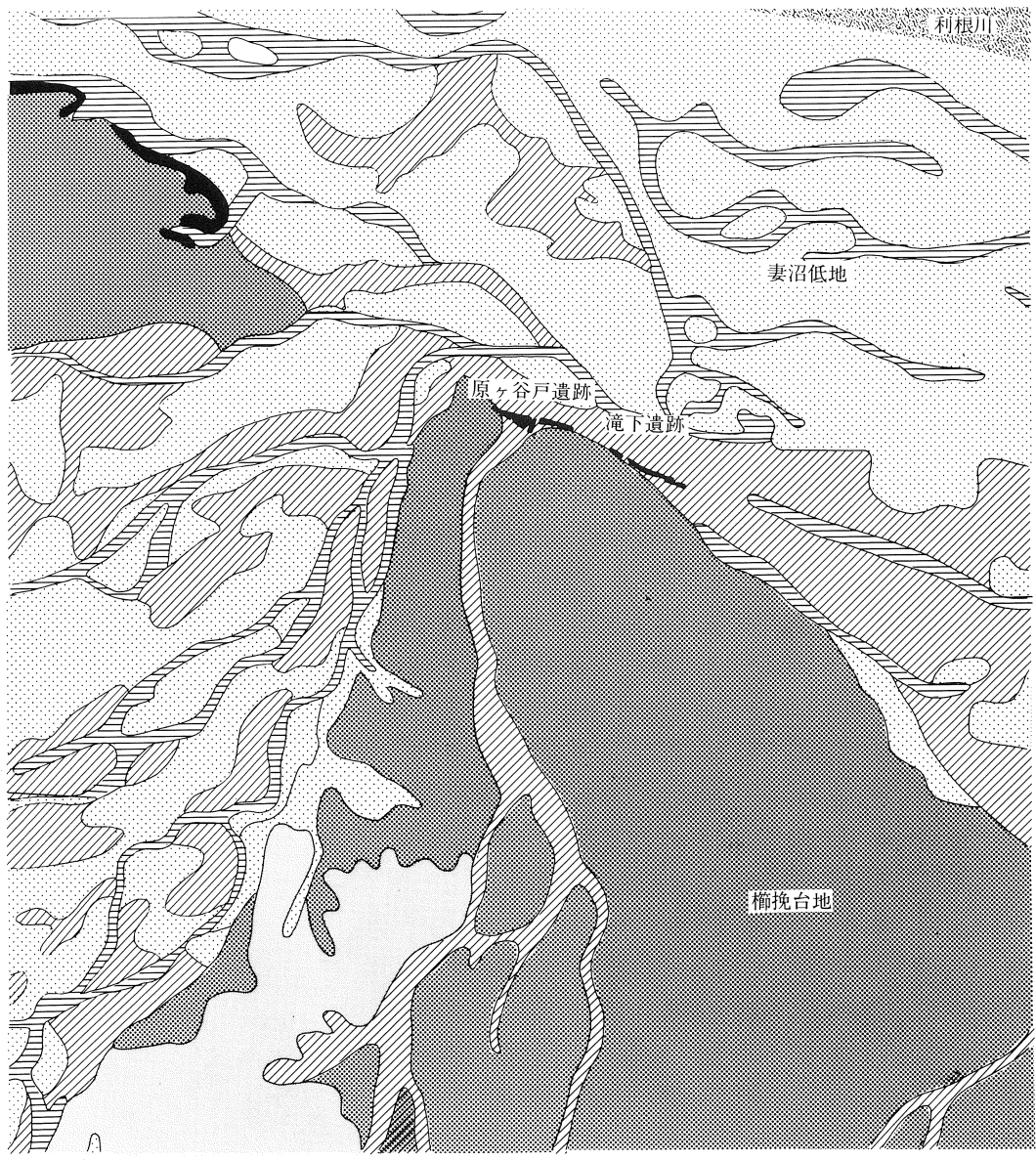
滝下遺跡は、櫛挽台地の北縁に接する沖積低地上に立地する。標高は約37mを測る。台地との比高差は約4m程である。

次に周辺の遺跡について概観する。旧石器時代の遺跡としては北坂遺跡があげられる（水村 中島 他 1981）。櫛挽台地の奥部に立地し、縄文時代早期の遺物ブロック6基とともに彫刻刀形石器、ナイフ形石器が検出されている。この北坂遺跡からは、微隆起線文土器、撚糸文土器、押型文土器、田戸下層式、条痕文土器群も検出されている。また、少量ではあるが、前期黒浜式、諸磯a・b式、加曽利E式、堀之内I式土器が検出されている。

縄文時代草創期の遺跡としては、西谷遺跡が著名である（栗原 小林 1961）。西谷遺跡は藤治川による侵食谷に面して立地し、爪形文土器、押圧縄文土器、撚糸文土器、有舌尖頭器、エンド・スクレイパー等が検出されている。表採資料ではあるが、石器と土器の関連が推測できる資料として、貴重な資料である。東光寺裏遺跡からも微隆起線文土器、諸磯b式土器が出土している。前期の遺跡としては他に西浦北遺跡があげられる（佐藤 1979）。

中期には本地域にも拠点的な集落とされる遺跡が現われる。櫛挽台地の西北部縁辺に位置する水窪遺跡からは、1次、2次調査あわせて27軒の住居跡が検出されている（栗原 佐藤 1976, 1979）。住居跡の時期は勝坂式期が1軒、加曽利E式期が26軒である。また、埋甕等も検出され、本地域における拠点的な集落であったと推測される。身馴川右岸の河岸段丘に位置する大寄B遺跡からも加曽利EⅢ式期の埋甕が検出されている（佐藤 1979）。

後晩期資料の発見例は従来少なかったが、近年、わずかずつではあるが、増加しつつある。1990年、岡部町教育委員会によって四十坂遺跡の調査が行なわれ、晩期終末～初期弥生の遺物が検出された（埼玉県教委 1992）。四十坂遺跡は、櫛挽台地の北端部に位置し、眼下に妻沼低地を臨む位



- | | |
|---|---|
|  残丘 |  河原 |
|  火山灰台地 |  旧河道 |
|  扇状地 |  崖 |
|  自然堤防 | |

第1図 遺跡周辺の地形分布



第2図 原ヶ谷戸・滝下遺跡の位置と周辺の遺跡

置に立地している。今回報告する原ヶ谷戸遺跡と隣接している。また、この遺跡は、初期弥生の土器群がまとめて出土した遺跡として、学史的に有名である(栗原 1967、栗原 石岡 1983)。条痕文が施されたもの、突帯を持つもの、沈線による変形工字文が施されたもの、櫛描文を有するもの、列点文を持つものが見られ、器種も深鉢、鉢、台付鉢、大形壺、小形壺等が出土している。埼玉県北部地域における弥生時代の開始を考える上で、非常に重要な資料である。岡部町教育委員会による四十坂遺跡の調査では、他に関山式期の住居跡、弥生時代の再葬墓、古墳時代の方形周溝墓、古墳跡、中世の建物跡が検出されている。

弥生時代の遺跡としては大寄B遺跡(中期後半)、石蒔A遺跡(終末～古墳初頭)があげられるが、本地域では、発見例が少ない。

古墳時代に入ると、身馴川低地、櫛挽台地北部で遺跡が急激に増加する。身馴川低地では、六反田遺跡、石蒔遺跡、地神祇A・B遺跡等があげられる。この地域は古墳時代を通じて集落が営まれ、奈良・平安時代にいたっても、西浦北遺跡などの大集落が形成される。

櫛挽台地北部には古墳、方形周溝墓が密に分布し、集落跡は比較的少ない。この地域が墓域としての性格を有していたと考えられている(鳥羽 平田 1992)。原ヶ谷戸遺跡では五領期の集落、墓域が確認されている。隣接する四十坂遺跡からも古墳跡が確認されており、両者の関係が注目されよう(註：鳥羽政之、平田重之両氏の御教示による)。奈良・平安時代になると、この地域にも集落としての性格を持つ遺跡が増加する。平成3年に調査された中宿遺跡からは、7世紀末から8世紀代にかけての掘立柱建物跡が多数検出され、倉庫跡群と考えられている(鳥羽 1992)。滝下遺跡は中宿遺跡の北側に隣接しており、なんらかの関連があったことが推察される。

今回報告する原ヶ谷戸・滝下遺跡は、妻沼低地南端部に位置する。従来この地域では遺跡の確認例は少なかったが、深谷バイパス、上武道路改築にともなう発掘調査によって、多数の遺跡の存在が明らかになった。隣接する砂田前遺跡では、古墳時代後期・平安時代の集落跡が検出されている。(岩瀬 1991)。今後この地域における遺跡の動態を考究する上で、妻沼低地における遺跡の展開と台地上の遺跡との関係は、重要な問題を含んでいると言えよう。

- | | | | |
|------------|-----------------|--------------|------------|
| 1. 原ヶ谷戸遺跡 | 2. 滝下遺跡 | 3. 樋詰遺跡 | 4. 砂田前遺跡 |
| 5. 四十坂遺跡 | 6. 浅間山古墳 | 7. 寅稻荷古墳 | 8. 中宿遺跡 |
| 9. 矢島南遺跡 | 10. 御手長山古墳・立掘遺跡 | 11. 岡遺跡 | 12. 熊野遺跡 |
| 13. 塚東遺跡 | 14. 内出遺跡 | 15. 菅原遺跡 | 16. 愛宕神社古墳 |
| 17. 上原遺跡 | 18. 源勝院館跡 | 19. 水窪遺跡 | 20. 新井遺跡 |
| 21. 六反田遺跡 | 22. 稲荷塚遺跡 | 23. 西浦北遺跡 | 24. 大寄B遺跡 |
| 25. 大寄A遺跡 | 26. 宮西遺跡 | 27. 川辺館跡 | 28. 東光寺裏遺跡 |
| 29. 石蒔A遺跡 | 30. 石蒔B遺跡 | 31. 棒沢六郎成清旧跡 | 32. 地神祇B遺跡 |
| 33. 地神祇A遺跡 | 34. 関畑遺跡 | 35. 西龍ヶ谷遺跡 | 36. 千光寺遺跡 |
| 37. 茶臼塚1号墳 | 38. 茶臼塚2号墳 | 39. 石原山瓦窯跡 | 40. 西谷遺跡 |
| 41. 柳原遺跡 | 42. 水久保遺跡 | 43. ダンガラ山の砦跡 | 44. 猪山祭祀跡 |
| 45. 今泉館跡 | 46. 岡部町No.82古墳 | 47. 針ヶ谷館跡 | 48. 新井館跡 |
| 49. 百間掘館跡 | 50. 安光寺古墳群 | 51. 清水谷遺跡 | 52. 北坂遺跡 |

原ヶ谷戸・滝下遺跡の位置と周辺の遺跡



第3図 原ヶ谷戸・滝下遺跡周辺図



Ⅲ 原ヶ谷戸遺跡の調査

1 遺跡の概要

原ヶ谷戸遺跡は、櫛挽台地北縁に隣接する自然堤防から、扇状地にかけて立地する。西から東に向かい、A～F区の6つの調査区が設定された。調査区の区分は、現道等によって便宜的に行なっている。以下、各調査区の概要を述べる。

A区は遺跡の西端に位置し、櫛挽台地北端部に立地する。調査区中央部はほぼ平坦で、標高約45mを測る。また、調査区東側は、扇状地に向かって傾斜する。A区からは縄文時堅穴住居跡2軒、前期の土壇1基、中期の埋甕、古墳時代前期の堅穴住居跡3軒、方形周溝墓群、円形周溝墓、円筒埴輪棺、礫槨、古墳の周溝の可能性のある溝跡、時期不明の土壇、溝跡が検出されている。縄文時代の堅穴住居跡は、1軒が後期中葉のもので、1軒は時期不明である。いずれも調査区東側に分布する。古墳時代の遺構は、調査区全体にわたって分布する。遺物は縄文土器、土師器、鉄製品等が検出された。

B区はA区の南東に位置し、台地から後背湿地にかけての緩斜面上に立地する。B区からは、縄文時代後期中葉から晩期後葉にかけての集落跡が検出されている。堅穴住居跡、土壇、溝跡等の遺構が検出された。堅穴住居跡は調査区南東側に集中する。黒色土中に遺構が掘り込まれていたため、遺構の確認は困難を極め、壁が確認できたものは3軒で、他は、柱穴、または炉が確認できた段階で住居と認定された。確認面が低かったため、住居跡内埋土に含まれる遺物と、住居跡埋没完了後に形成された包含層に含まれる遺物の区別はできなかった。そのほか、古墳時代の住居跡と考えられる遺構1基、井戸跡1基が検出されている。

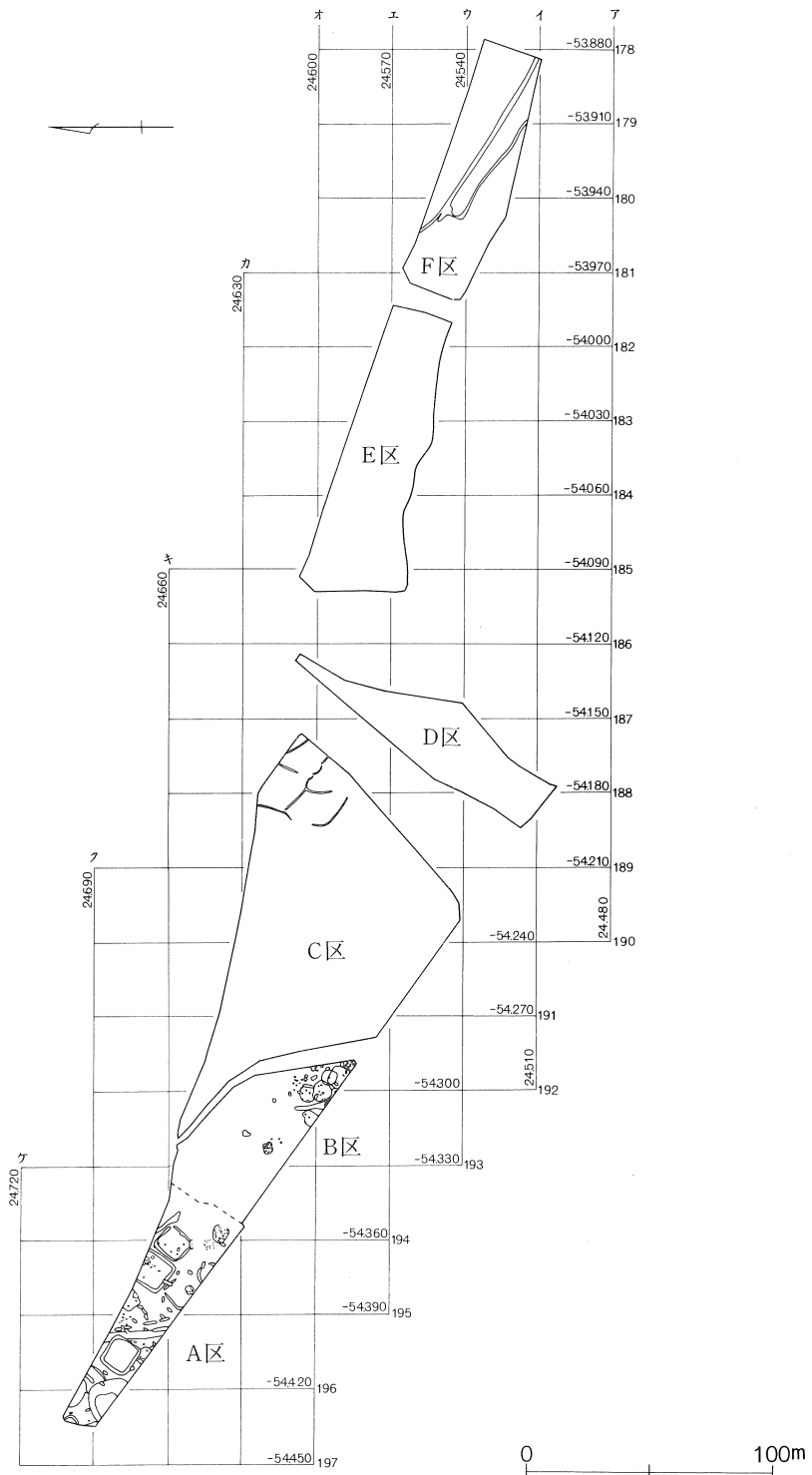
遺物としては、多量の縄文土器、石器、土製品、石製品、動物遺存体が出土した。特に、土偶、石棒など、祭祀に関わると考えられる遺物が多く発見されたことが注目される。動物遺存体は、ほとんどが火熱を受けており、儀礼に用いられたものと考えられる。

C区は台地下後背湿地上に立地する。調査区の東側から、水田跡が検出された。伴出した台付き甕の脚部から、10世紀代のもと考えられる。水路等の遺構は検出されなかったが、畦状の高まりによる区画が分布する。

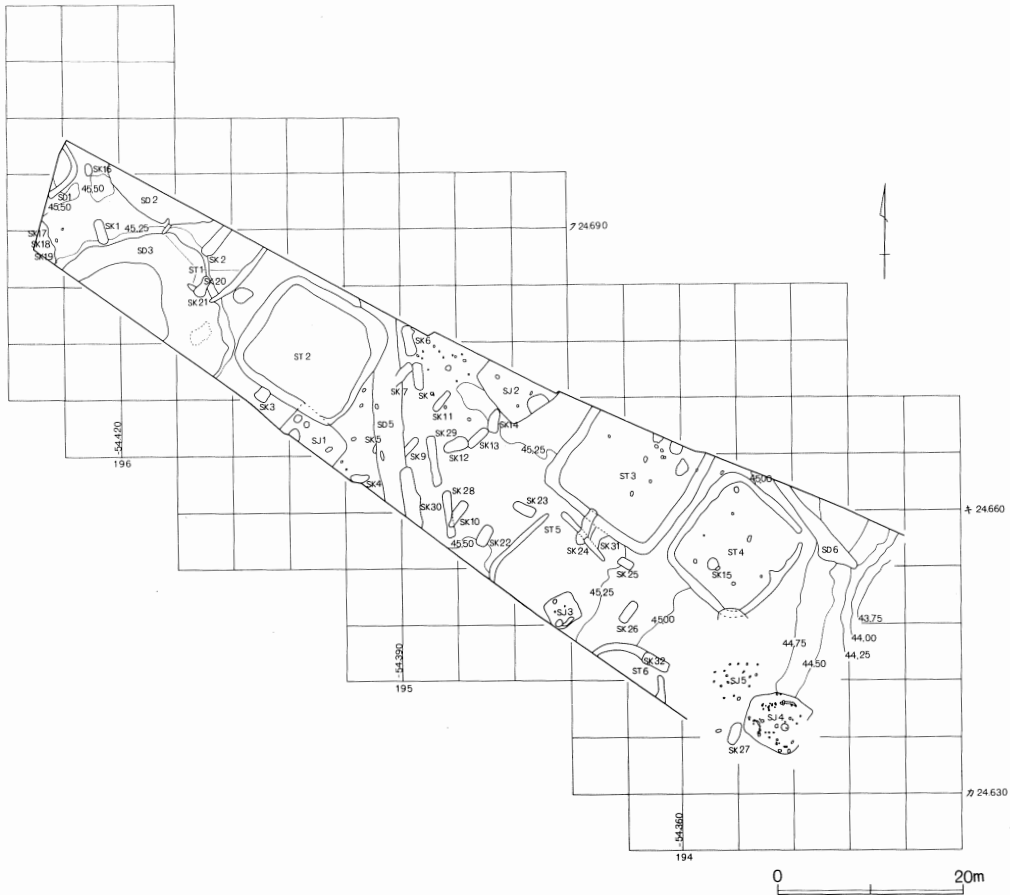
D区、E区は、後背湿地上に立地する。両調査区には浅間b軽石が部分的に分布しており、水田跡等の遺構の検出が期待されたが、遺構、遺物はまったく検出されなかった。

F区は櫛挽台地北端部に沿った後背湿地上に立地する。F区からは古代の溝跡、縄文時代後晩期の遺物包含層が検出された。溝跡は、台地に沿うように東西方向に伸びる。

縄文時代後晩期の遺物包含層は、遺構を伴わず、土器、石器が集中して分布している。遺物の所属時期はB区の集落とほぼ同時期と見られる。土器はいずれも摩滅が激しく、再堆積の可能性もある。



第4図 原ヶ谷戸遺跡全測図



第5図 A区全測図

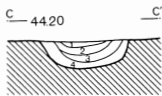
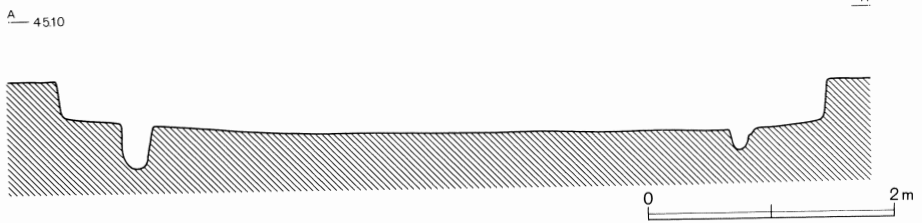
2 A区の調査

(1) 縄文時代の遺構と遺物

第4号住居跡 (第6図)

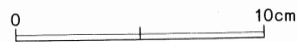
カ-193-4, 9グリッドに位置する。規模は7.4m×5.9mである。平面形は、やや歪んだ隅円方形を呈する。壁高は約35cm程である。南東部分では壁を確認することができなかった。埋土中には焼土が部分的に堆積していた。中心よりやや東よりに、炉跡が付設されている。床面を掘り凹めて作られており、炉石抜き取りの痕跡が観察された。

北東付近に周溝状の溝跡がみられる。長さは約1.5m、深さは約15cm程である。柱穴は壁のやや内側に巡り、壁際には少ない。柱穴は深さ20cm前後のものが多い。主柱穴がどのように組み合わせるかは不明である。ピットNo. 7～13または、No. 18～26が入り口を構成する柱穴群の可能性はある。



S J 4 炉跡

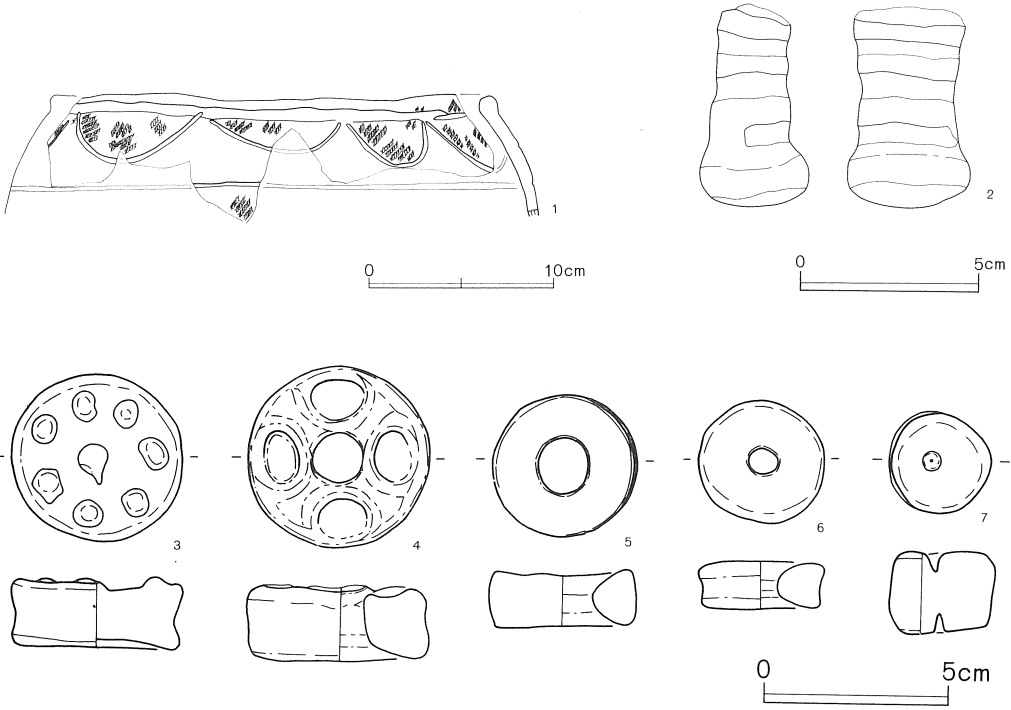
- 1層：暗褐色土。炭化物、焼土粒子を少量含む。
- 2層：暗赤褐色土。焼土粒子を多く含む。
- 3層：暗黄褐色土。炭化物粒子を少量含む。ローム粒子を少量含む。
- 4層：暗褐色土。炭化物粒子をやや多く含む。



第6図 第4号住居跡

第4号住居跡柱穴

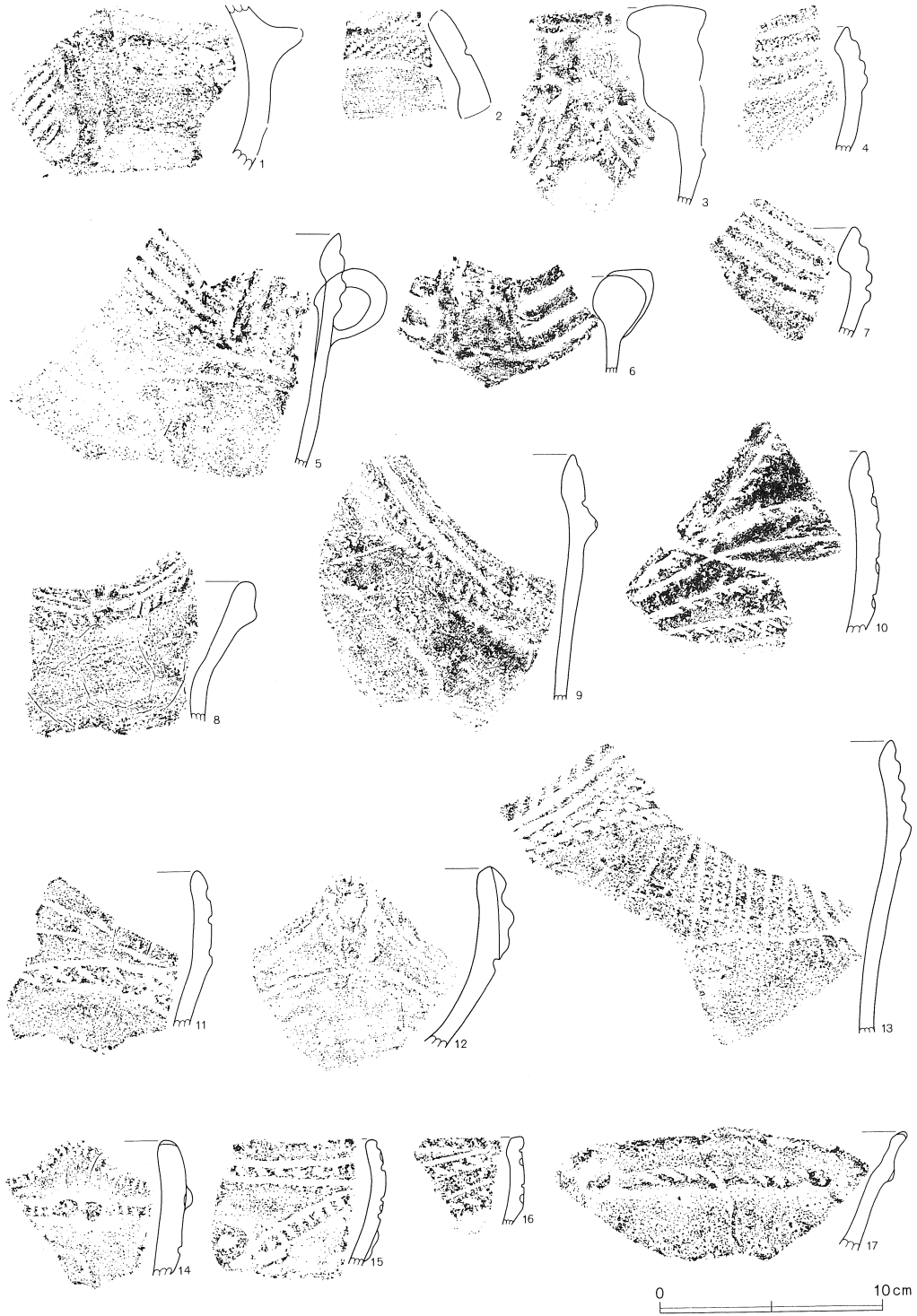
P No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
深さ(cm)	5.8	7.8	18.5	5.8	13.4	19.5	16.5	25.3	36.4	25.5	34.0	不明	18.0	7.4	20.4	16.0	13.5	42.4	15.8	15.2	14.0	24.0	10.0
P No.	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	SD	
深さ(cm)	14.5	25.5	13.5	14.0	22.0	不明	10.0	12.0	17.0	12.2	7.8	3.9	6.6	10.5	17.0	25.2	16.4	30.0	7.4	13.2	16.0	14.5	



第7図 第4号住居跡出土遺物(1)

第7～9図は本住居跡出土遺物である。第7図1は深鉢形土器の口縁部である。口縁部は内湾し、口唇部直下がやや括れ、端面は平坦につくられている。口唇部直下の括れ部には、凹線文状の、幅の広い沈線が施されている。口縁直下に下向きの弧線文が巡り、無文部をはさんで縄文帯が巡るようである。弧線施文後、内部に縄文が充填されている。原体は前々段反摺のLRr、口縁部内面には横方向のナデが施されている。

第8図2は算盤玉状になる鉢形土器の肩部破片である。3～13は大波状口縁を有する深鉢である。3～9は口唇部が内側に屈曲し、屈曲部に沈線を有する。3の突起先端は、円形に周囲に張り出すタイプである。波頂部外面に剥落痕がみられる。5, 6には橋状の把手が波底部に施されている。5は中実、6は中空である。8は、波底部に縦位に連なる2個の粘土粒貼付がみられる。頸部には細密な条線が稲妻状に施されているが、摩耗が激しく、詳細は不明である。9も波底部に縦位の隆帯が施されている。頸部には沈線によって稲妻状のモチーフが描かれている。10, 11の口縁部には屈曲は見られない。緩やかに内湾し、両者とも口縁部内面に稜を持つ。波頂部も緩やかなカーブを描くものと推定される。波状部に施される意匠は、波状縁に沿う沈線と、その下に緩やかに山形を



第8図 第4号住居跡出土遺物(2)



第9図 第4号住居跡出土遺物(3)

呈する沈線とによって構成される。沈線には刺突が伴う。12は突起部がやや低い波状縁の深鉢である。波頂部に縦長の隆帯が施され、隆帯上に凹みが施されている。13は頸部に条線文が施されている。

第8図15、16は平縁の鉢形土器である。15は緩やかに内湾する器形である。2条沈線間に米粒状の刺突が施され、文様が描かれている。胴部上半にはボタン状の粘土粒貼付がみられる。16は口唇部が短く屈曲する。内面に稜を有し、沈線と刺突によって文様が描かれている。

第9図1～9は平縁の鉢、深鉢形土器である。1～8は口縁が屈曲するものである。1, 2, 4～6は口縁部に沈線が施されている。他のものは摩耗が激しく詳細は不明だが、無文と考えられる。2は屈曲部を跨ぐように貼付されていた突起の一部が残存している。4は口縁部にボタン状の粘土粒貼付が見られる。3は屈曲部に縦位の隆帯が貼付されている。9は屈曲を持たず、直線的に外傾する鉢形土器である。口縁部内面に沈線を有する。外面は無文で、ケズリ後、ナデ調整が施されている。

10, 11は帯縄文が施されるもので、同一個体である。粘土粒の貼付がみられる。内面のナデは粗く、口縁のすぼまる器形と考えられる。12は帯縄文をもつ波状口縁深鉢の波底部である。波底部に縦位の隆帯が貼付されている。13は口唇部が肥厚する鉢形土器である。口縁部は内湾する。口唇部下に無文帯を有し、無文帯下に隆帯が横位に施される。隆帯上にはRL縄文が施され、刻みを持つ粘土粒が貼付されている。14は平縁で2個1対の突起が貼付されている。口縁部はやや外傾気味に立ち上がる。頸部には下向きの弧線文が施され、地文にはRL縄文が施されている。

15, 16は台部の破片で、同一個体である。端部は肥厚し、地文にRL縄文が施されている。内面はへら状工具によるナデ調整が施されている。

17～22は粗製の深鉢、23は鉢形土器である。17, 18は口縁部に隆帯が貼付され、やや内湾する器形を持つ。17は隆帯上に指頭圧痕がみられる。隆帯下にはケズリ調整後、10本前後の条線が一まとまりとなって、縦位に施文されている。内面は、ナデ調整後、ミガキが横位に施されている。18は隆帯上に弱い押圧が加えられている。押圧後、ナデ調整が加えられ、凹みは非常に滑らかである。外面は無文。内面はナデ調整後、ミガキが間隔を開けて施されている。19は粗製深鉢の胴部破片である。突帯上に指頭圧痕が施されている。20は18と類似するが、口唇部端面は緩やかに湾曲している。21は口縁部がやや内湾する無文の深鉢である。口唇部内面に粘土紐が巻かれ、肥厚している。外面にはケズリが施されている。22は紐線文系の深鉢。頸部は緩やかに括れ、弱く外反する器形である。平坦に成形された、やや肥厚する口唇部直下に、刺突が連続して施され、体部には条線が施されている。

土器はいずれも器面保存の不良なものが多く、また小破片がほとんどである。特に、大波状口縁のもの、口縁部が屈曲する平縁のものの器面は摩耗が激しい。

第7図2は土偶の脚部である。右脚と考えられる。端部がやや張り出している。幅広の沈線が横位に施されている。

3～7は耳栓である。3は上面中心に1単位、その周囲に7単位の粘土粒が貼付されている。4はリング状で、上面に隆帯によって楕円形のモチーフが4単位施されている。5, 6はリング状で



第10図 第5号住居跡

第5号住居跡柱穴

P No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
深さ(cm)	16.1	17.5	11.5	15.6	17.0	21.0	13.0	11.5	9.5	6.0	26.5	10.0	9.0	9.0	10.0	9.0	18.0

無文である。いずれも断面形は三角形に近い。7は内輪を持たず、上下面に鋭い刺突が施されている。

第9図24は土製円盤である。粗製深鉢の突帯部分の破片を転用したものである。

本住居跡は曾谷式～安行Ⅰ式期に属すると考えられる。

第5号住居跡（第10図）

カ-193-9, 10, 14, 15グリッドに位置する。壁は確認できず、柱穴と炉跡のみが確認された。遺存状態における規模は5.0m×4.3mである。平面形は明らかにし得ない。炉跡は中心よりやや西よりに位置する。炉跡には掘り込みはみられず、床面が部分的に焼土化しているだけであった。ピットNo. 1～6, 9, 17が支柱穴群を構成する可能性がある。遺物はまったく検出されなかった。本住居跡の所属時期は不明である。

第1号埋甕（第11, 12図）

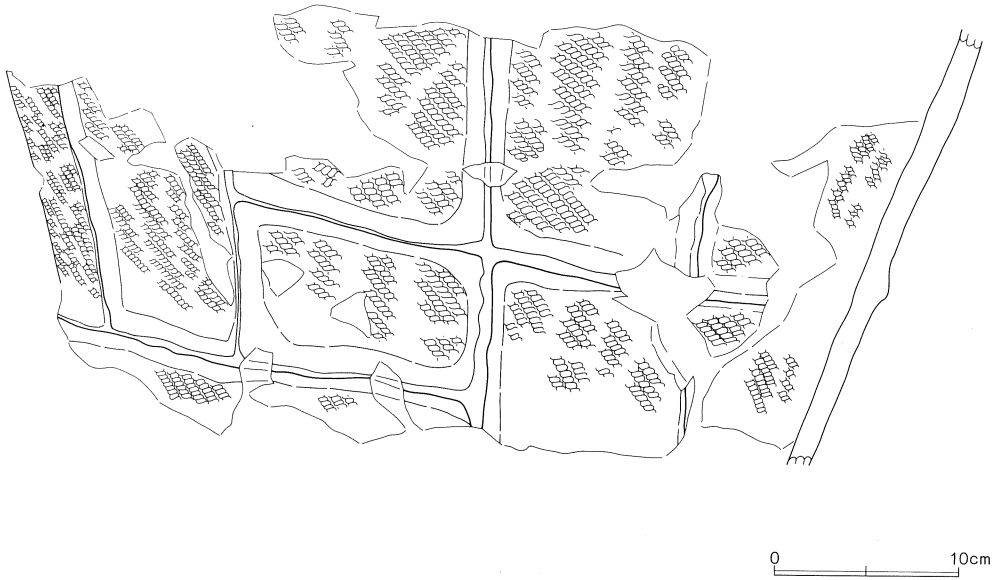
キ-194-15グリッドに位置する。口縁部、胴部下半が欠損した大形の深鉢が用いられてる。キャリパー形の括れ部と考えられる。内部の埋土には焼土を含む層がみられる。また、周囲にピットが散在することから、住居跡の埋甕炉とも考えられるが、発掘時の所見では住居跡と考えられていなかった。本報告では埋甕として扱う。

土器片を支えるようにローム混じりの土が器体に沿って貼られていた。埋甕埋土中には、火熱を受けた片岩製の礫が含まれていた。

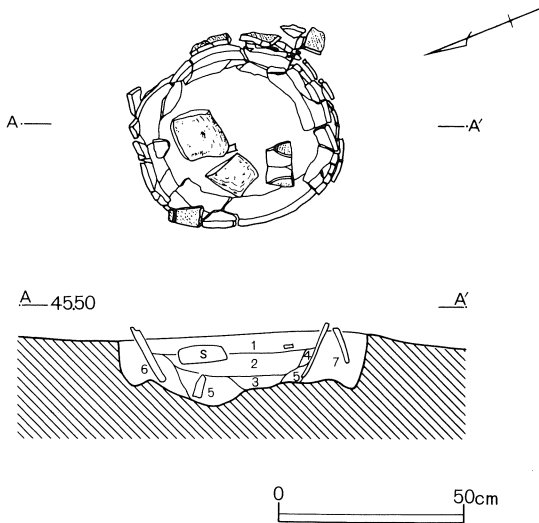
埋甕表面には隆帯と、その両脇をなでくぼめる手法によって、モチーフが描かれている。器面全体に縦囲の線とやや右傾する横位の線によって、不規則な方形の区画が描かれている。地文はLR縄文を縦方向に転がして施文されている。二次的に加熱を受けた痕跡は確認できない。加曾利EⅢ式に相当する。



第1号埋甕確認状況



第11図 第1号埋甕



1号埋甕

- 1層：暗褐色土。炭化物粒子、白色粒子を含む。
- 2層：暗褐色土。1層に比べ色調やや明るい。ローム粒子、焼土粒を少量含む。
- 3層：暗黄褐色土。焼土粒を多く含む。炭化物を微量含む。
- 4層：暗褐色土。ローム粒子を少量含む。土器を補強するため人為的に貼られた土と考えられる。
- 5層：暗黄褐色土。ローム粒子を多く含む。炭化物を微量含む。
- 6層：4層と同質。
- 7層：暗褐色土。焼土粒、炭化物を少量含む。

第12図 第1号埋甕出土遺物

(2) 古墳時代の遺構と遺物

ア 住居跡

第1号住居跡 (第13図)

キ-195-7グリッドに位置する。南側は発掘区域外にかかり、検出されたのはおよそ半分程度である。北側コーナー部分は第2号方形周溝墓に切られている。長軸の長さは6.7m、傾きはN-54°-Wである。床面までの深さは25cm前後と浅い。覆土はおおむね暗茶褐色の1層で構成され、炭化物粒子や焼土粒子の混入は少なく、均一であるが、壁際に焼土の混入が多く認められる部分がある。床面はやや茶褐色気味で、貼床をしていると考えられる。径20cmの範囲で焼土の堆積が数ヶ所に認められたが、明確な掘り込みをもつ炉跡は確認できなかった。柱穴は2基検出された。ともに40cm前後まで掘り込まれている。柱穴の他にも床面を掘り込む土壌が2基検出されたが、本住居跡に伴う施設かどうかは定かではない。

遺物はPit 2の周辺からまともに出て出土している。時期は前期五領式期である。

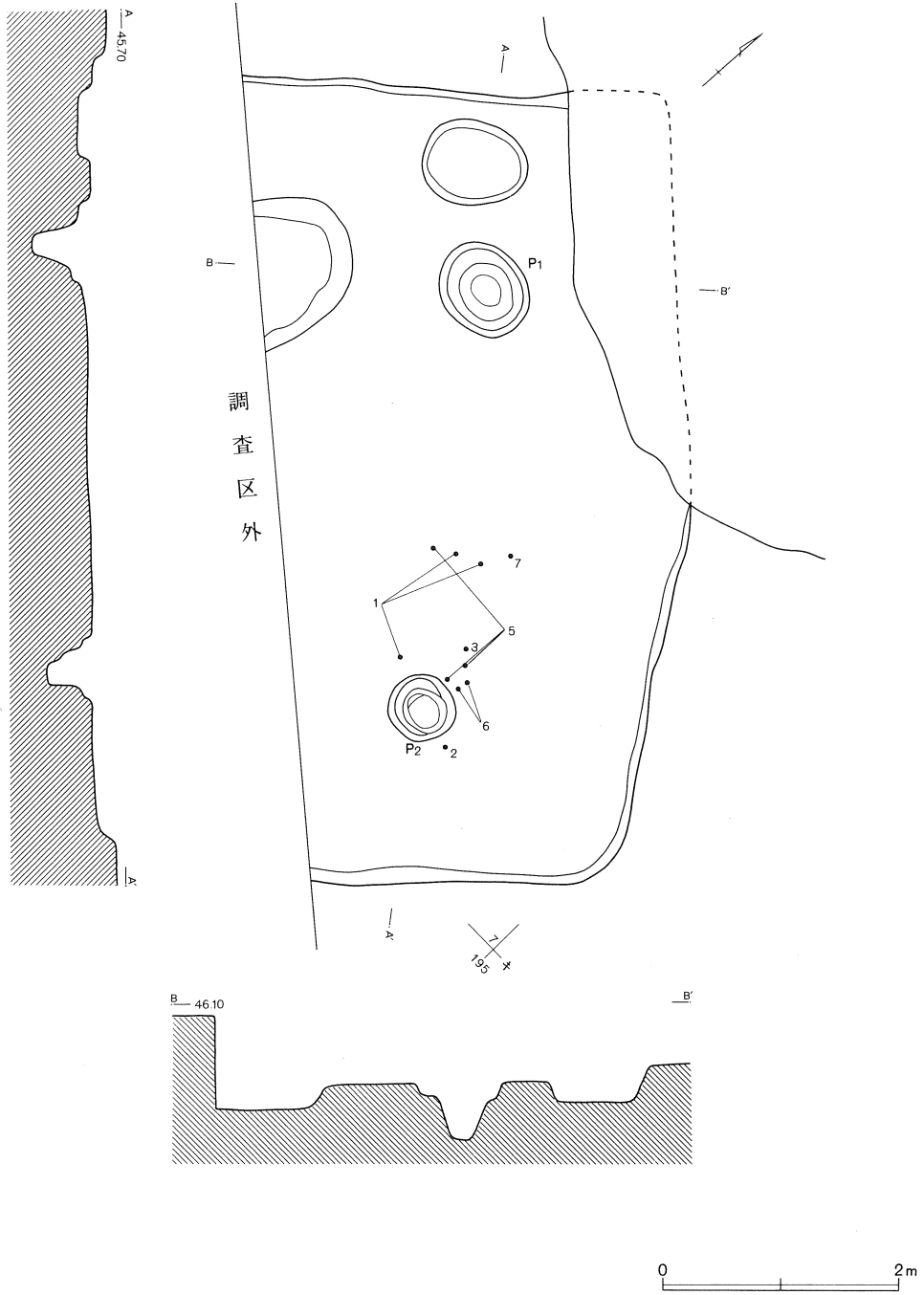
第1号住居跡出土遺物 (第14図)

1は推定口径12.4cm、底径3.6cm、平底の椀である。表面の風化が著しく調整は不明。2は高坏の脚部破片である。表面が剝離した部分にハケメ調整がみられる。3はほぼ完形の小形甕である。口径と胴部最大径は11.8cm、器高10.9cm、底径3.4cmで、外面および口縁内面にハケメ調整を施す。胎土には小礫が含まれる。4・5はS字状口縁の台付甕の口縁部破片である。4は推定口径12.8cm、Pit 2内からの出土。5は推定口径16.0cm。6は壺口縁部で、ハケメの後ナデ調整を施している。7は壺の胴部である。底部近くで粘土の継ぎ目がみられるが、それを境にハケメ調整の方向が異なる。推定底径7.2cm、胴部最大径27.2cmである。

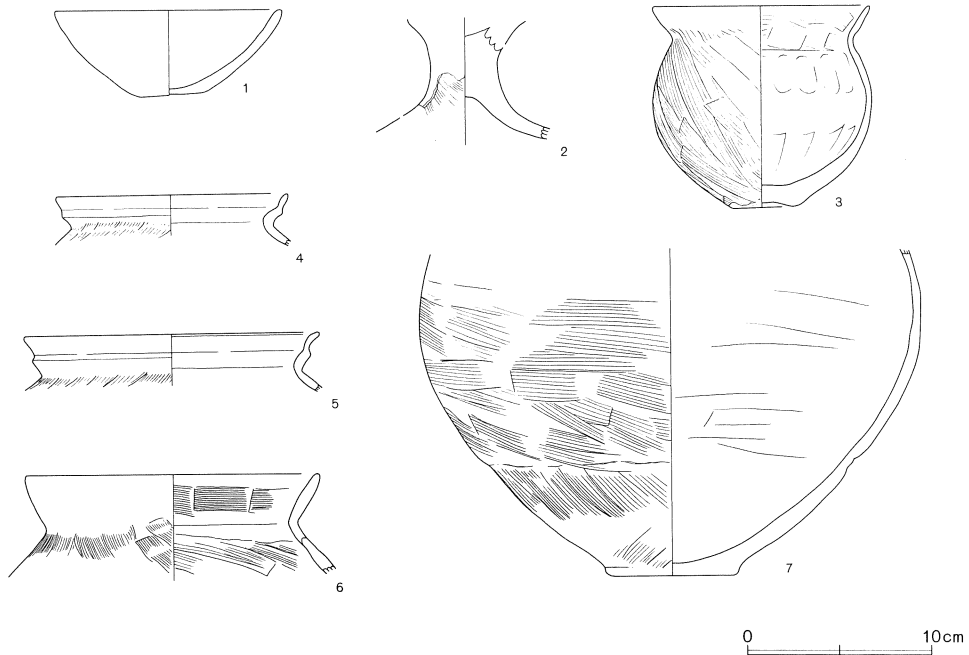
第2号住居跡 (第15図)

キ-194-8, 9, 14グリッドに位置し、北側は発掘区域外にかかる。長軸の長さは推定7.2m、傾きはN-40°-Wである。床面までの深さは25cm前後で、覆土は2層を基本とし、その堆積は均一である。ローム面を掘り込んだ後、茶褐色土を充填して床面としているが、あまり強固に踏み固められておらず、貼床としては軟弱である。中央部分はローム面を帯状に残し、そのまま床面としている。壁溝は一部でわずかに確認できる程度である。炉跡は、発掘区域外際のほぼ中央に焼土の薄い堆積が認められた程度で、掘り込みは確認できなかった。Pitは3基確認されたが、柱穴と考えられるのはPit 1と2である。ともに60cm程の深さをもつ、しっかりと掘り込みである。南側の壁際には、中央が掘り込まれた馬蹄形状の盛りあがり確認された。その位置や大きさなどから出入口施設の可能性がある。

遺物はおもにPit 1周辺のコーナー部分と中央付近の床面から出土しており、接合率は良好である。また、出入口の土壌内からは器台が1点出土している。五領式期。



第13図 第1号住居跡



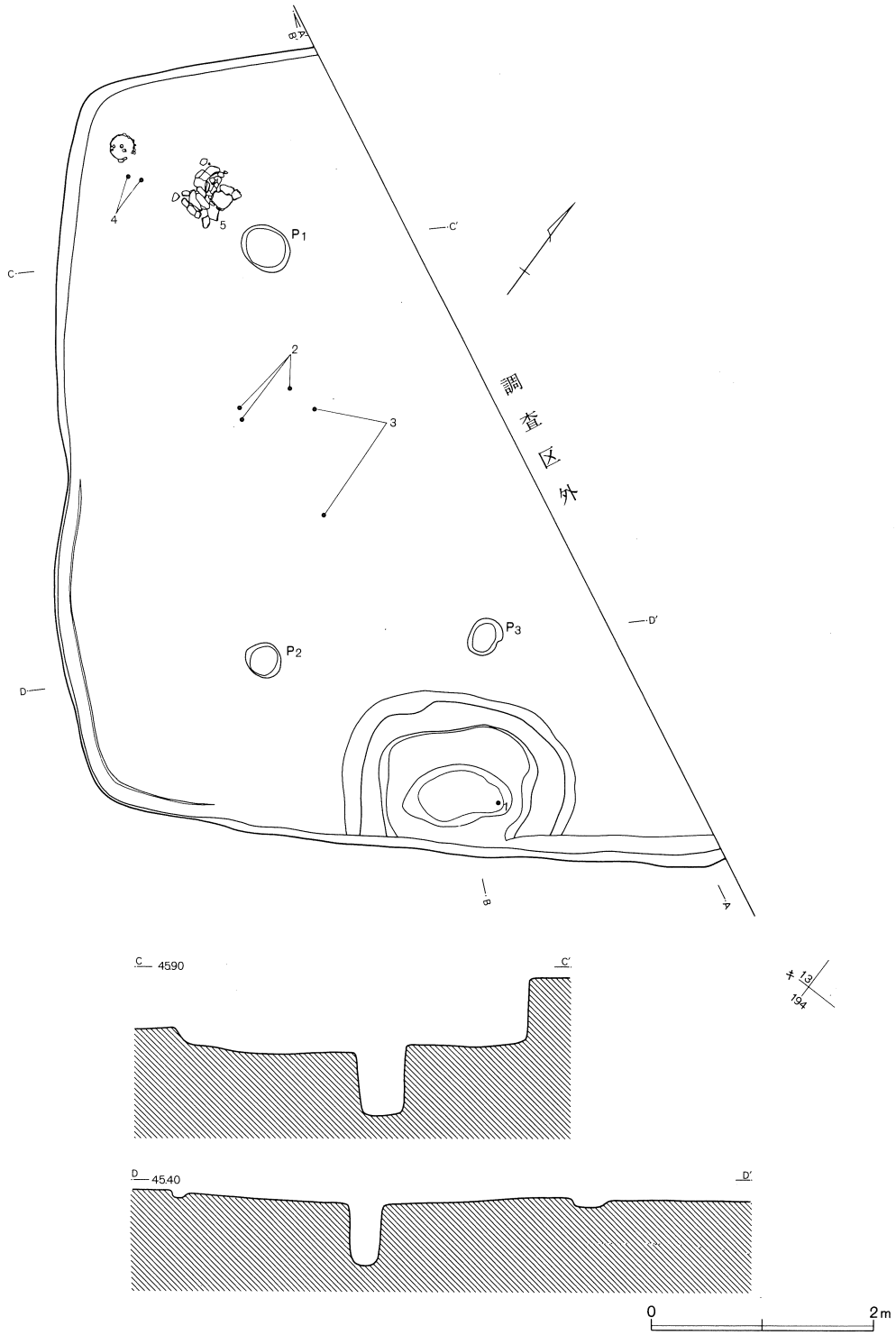
第14図 第1号住居跡出土遺物

第2号住居跡出土遺物 (第16図)

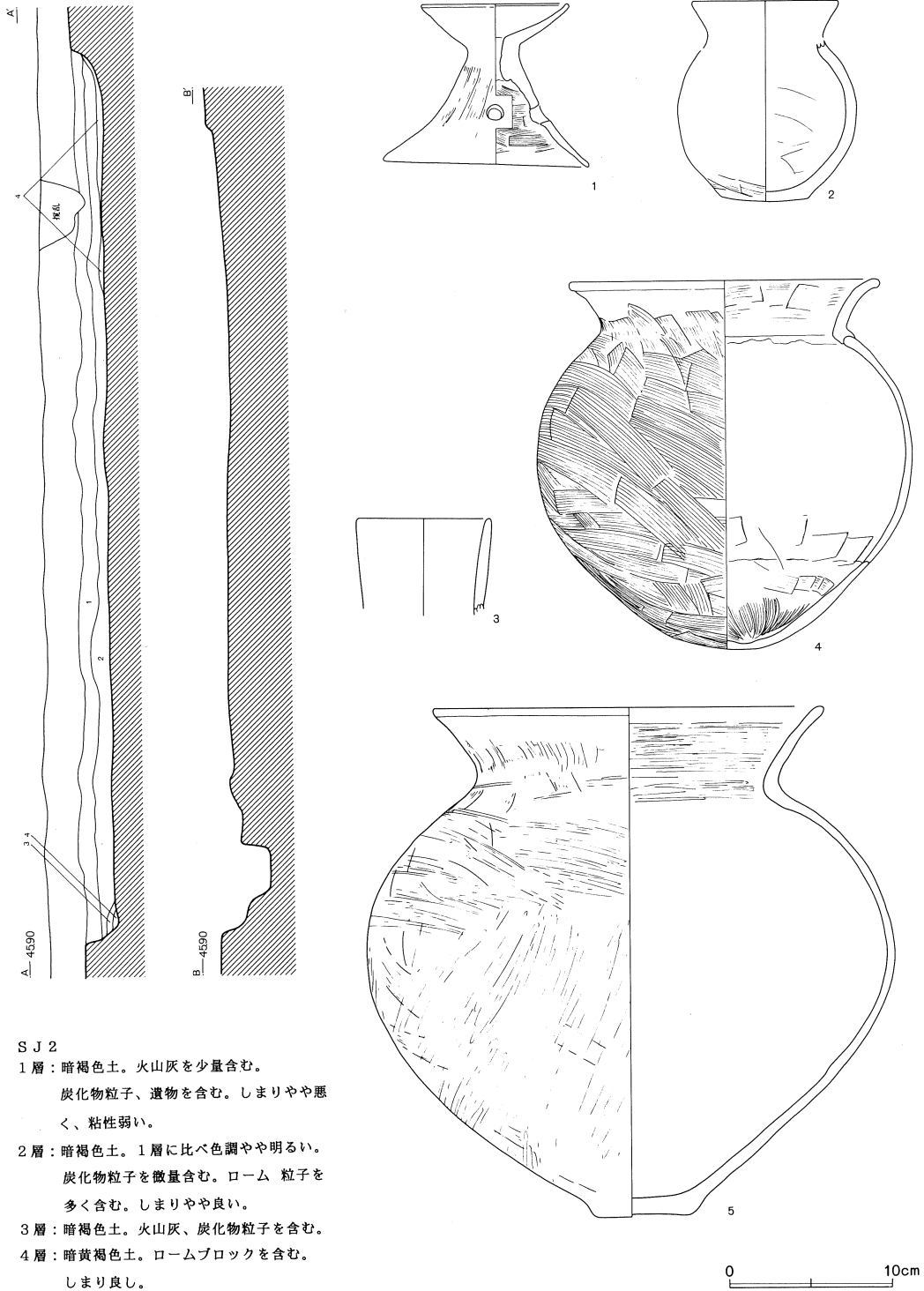
1は推定口径9.0cm、器高9.8cm、脚径12.6cmの器台である。外面はハケメ調整の後、丁寧なミガキを施している。脚部内面は横位のハケメを残す。脚部の穿孔は3ヶ所に認められる。残存率80%。色調は明赤褐色を呈する。2は口縁部を欠いた小形甕である。胴部最大径10.9cm、底径5.2cmである。外面は風化が進み明瞭ではないが、ハケメ調整の後、ナデもしくはミガキを施しているものと推定される。肉厚。3はほぼ直立する口縁部の破片である。内外面とも丁寧に横ナデされている。小形埴の口縁部であろう。4は胴部が球状になる丸底の甕である。外面は一方方向からのハケメを施す。胴部内面は丁寧にナデられており、底部近くにハケメ調整を残す。推定口径19.0cm、器高22.6cm、胴部最大径23.0cmである。胎土には礫を少量含む。残存率60%。5は胴部最大径を上位にもつほぼ完形の壺である。口径24.0cm、器高32.1cm、胴部最大径32.4cm、底径6.0cmである。外面はハケメ調整の後、ミガキを施すが、ミガキは徹底しておらず、各所にハケメが残っている。口縁内面は横方向のミガキが丁寧に施されている。色調は明赤褐色～赤黒色。

第3号住居跡 (第17図)

カ-194-18グリッドに位置し、第5号方形周溝墓に切られている。規模は長軸3.3m、短軸3.2mのほぼ正方形を呈し、長軸の傾きはN-61°-Eである。床面までの深さは25cm平均で、覆土は暗茶褐色土のほぼ1層であるが、床面直上にはローム土粒子が多く含まれている。また、壁際には焼土粒子の混入が多い部分も見受けられる。なお、第5号方形周溝墓の周溝が、本住居跡の覆土を切っ



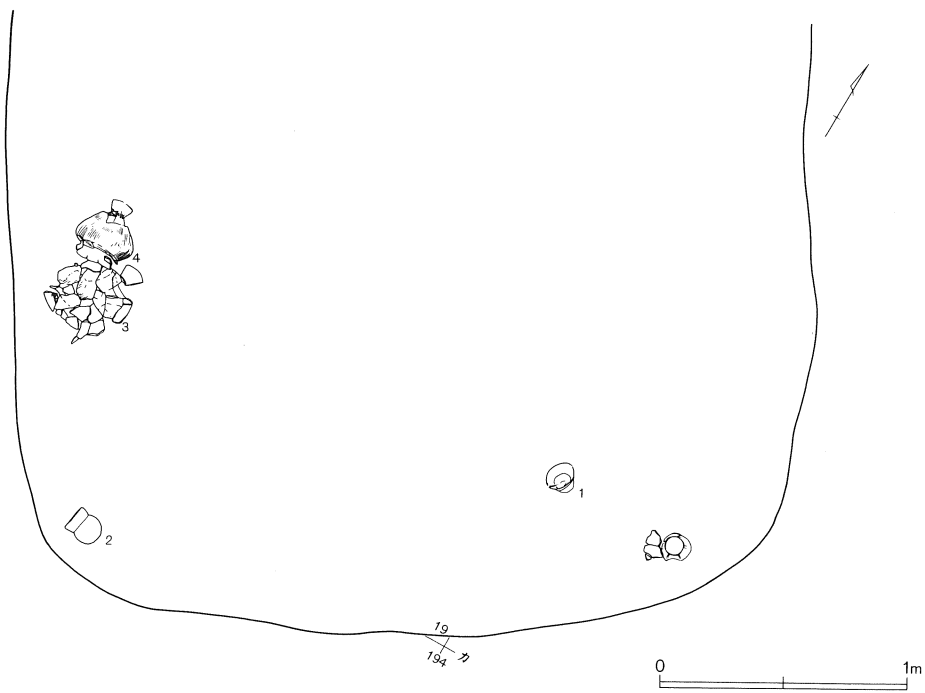
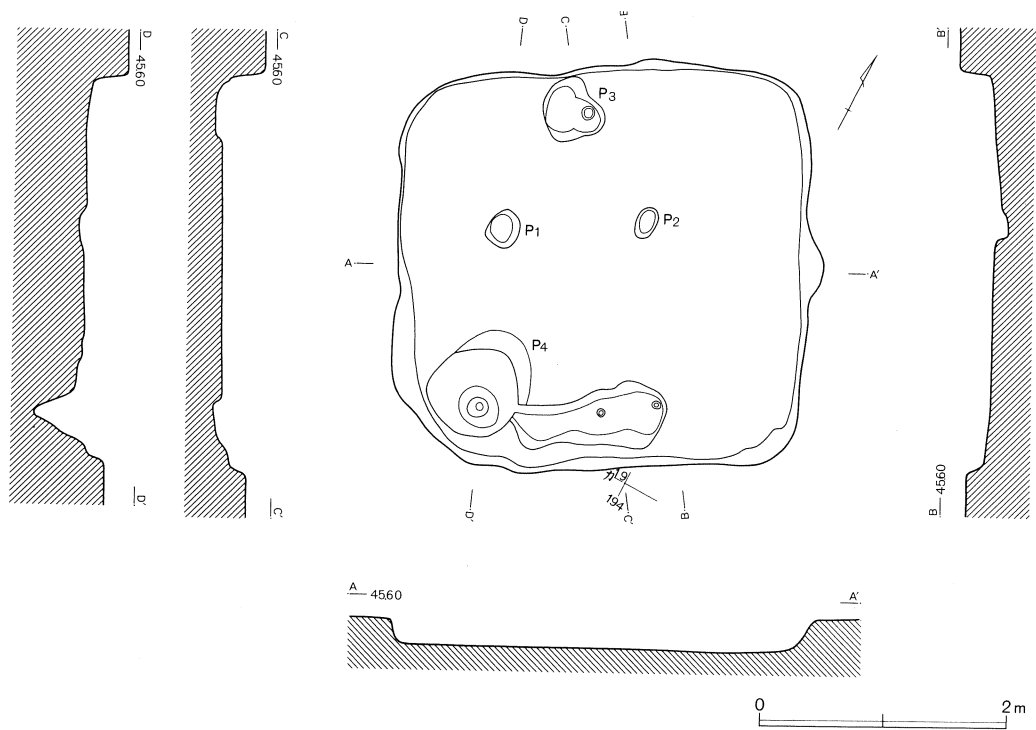
第15図 第2号住居跡



S J 2

- 1層：暗褐色土。火山灰を少量含む。
炭化物粒子、遺物を含む。しまりやや悪く、粘性弱い。
- 2層：暗褐色土。1層に比べ色調やや明るい。
炭化物粒子を微量含む。ローム粒子を多く含む。しまりやや良い。
- 3層：暗褐色土。火山灰、炭化物粒子を含む。
- 4層：暗黄褐色土。ロームブロックを含む。
しまり良い。

第16図 第2号住居跡出土遺物



第17図 第3号住居跡

ている事が判明したが、確認面からでは覆土の違いが見分けられず、掘り込みの深さもほぼ同じであったため、平面図に位置づけることはできなかった。床面にはPitや不定形の掘り込みが確認されたが、その性格は不明である。Pit 1と2が柱穴とも考えられるが、非常に浅く、置き柱であった可能性がある。炉跡の掘り込みは確認できなかった。

遺物の量は少ないが、床面直上から残りのよい土器が出土した。特に西壁際ほぼ中央から、ほぼ完形となる台付甕が2個体、折り重なるように出土している。五領期。

第3号住居跡出土遺物（第18図）

1は完形の埴で、口径11.6cm、器高7.4cm、底径2.8cmである。口縁はハの字状に開き、底部はわずかにへこむ。2も完形品である。口径11.0cm、器高13.5cm、底径3.1cmで、口縁が直立気味になる埴である。3は台付甕。口径17.4cm、器高26.1cm、胴部最大径20.3cm、脚径9.2cmである。胎土には礫が多く含まれている。4はS字状口縁の台付甕である。口径14.6cm、器高24.6cm、胴部最大径21.5cm、脚径8.3cm。外面はハケメ調整を施し、脚部はナデ。端部は小さく折り返されている。



第18図 第3号住居跡出土遺物

イ 方形周溝墓

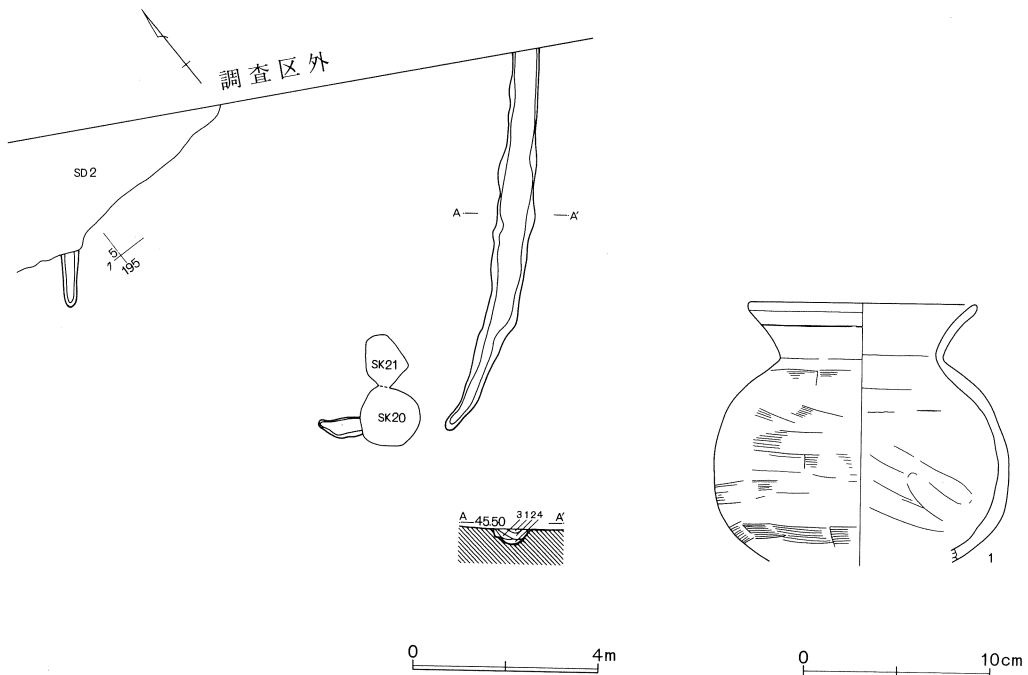
第1号方形周溝墓（第19図）

キ-195-23グリッドに位置する。北側は発掘区域外にかかり、第2号溝跡および第20号土壌に切られている。検出されたのは東溝と、西・南溝の一部である。削平を受けていると考えられ、周溝が全周するものか、隅がとぎれるものかどうかは不明である。主体部は不明。規模は東西の周溝内縁幅9.0m、方台下端幅9.1m、周溝外縁幅9.8m、周溝の幅は0.3~0.5mである。

出土遺物は少なく、図示できたのは壺1点にすぎない。1は口径推定12.2cm、胴部最大径15.8cmである。外面はハケメ調整の後、胴部下位を除いてナデられている。五領期末か。

第2号方形周溝墓（第20図）

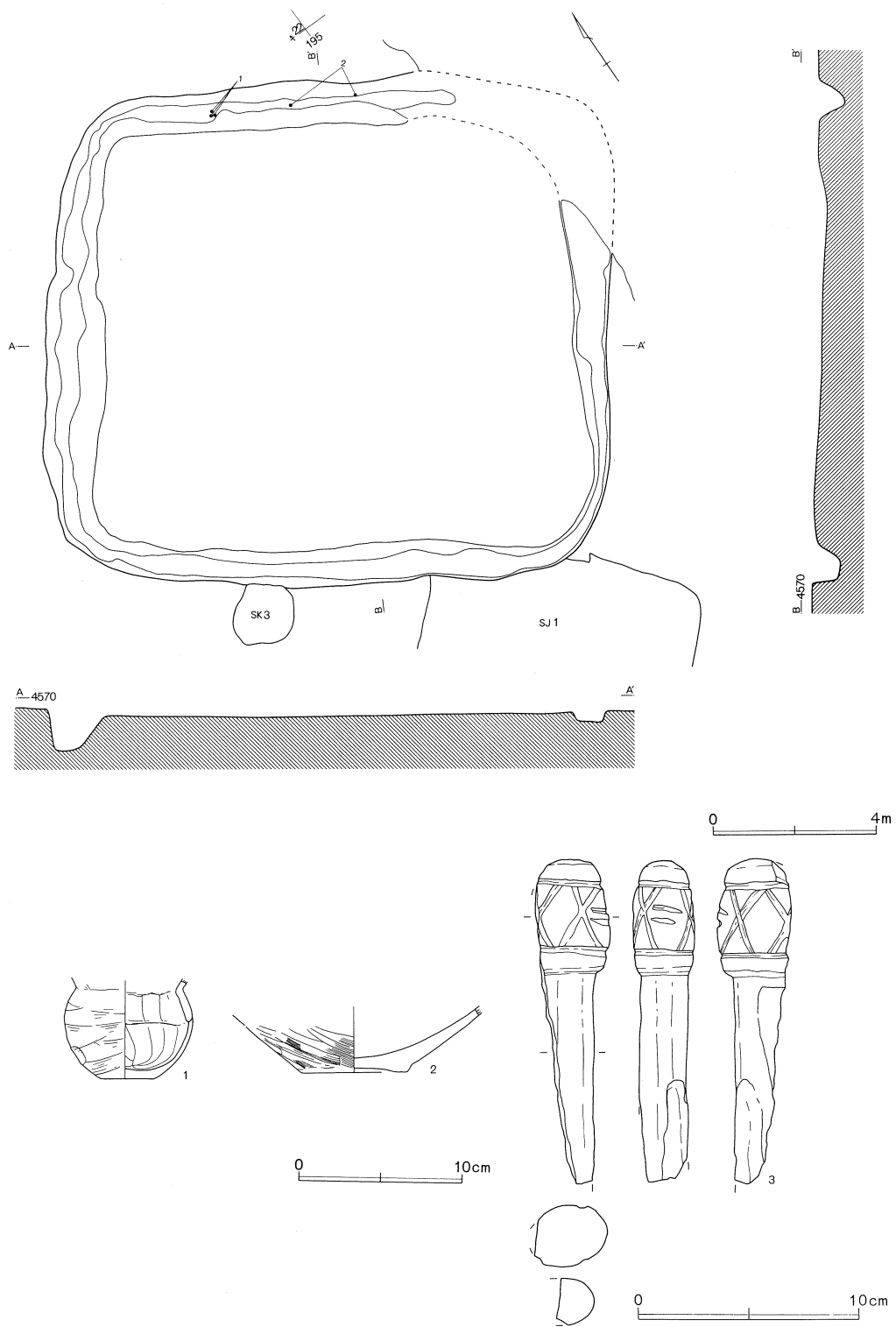
キ-195-12~キ-195-17グリッドに位置する。形態はほぼ正方形で、北東隅が第5号溝跡によって切られ、南側では第1号住居跡を切る。主体部は検出されなかった。長軸の傾きはN-52°-W、規模は周溝内縁幅11.4×10.3m、方台下端幅12.0×11.1m、周溝外縁幅14.7×12.3mである。周溝の



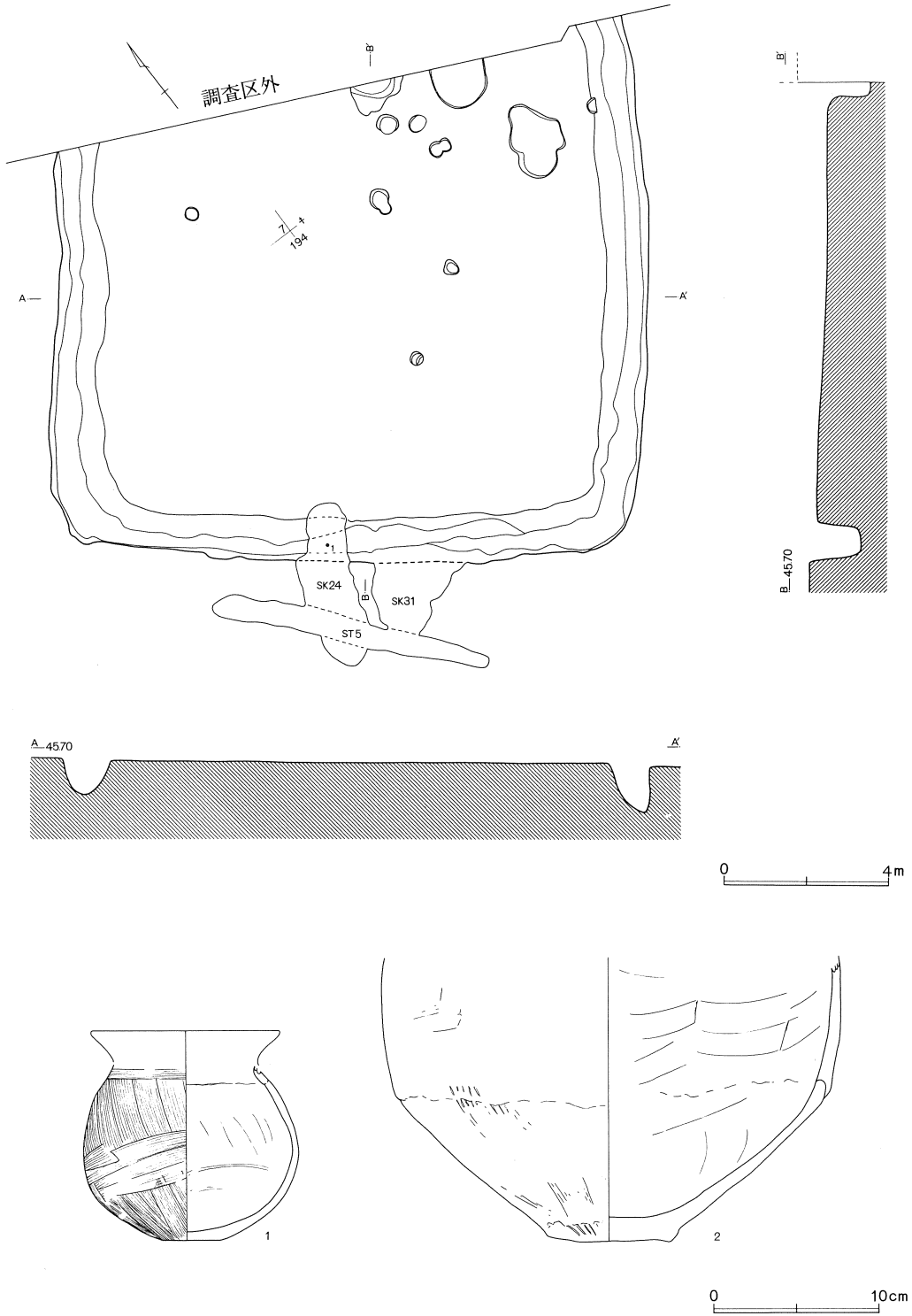
ST1

- 1層：暗黒褐色土。白色火山灰を少量含む。しまりやや悪い。
- 2層：暗茶褐色土。ローム粒子を少量含む。しまり良し。
- 3層：暗茶褐色土。ロームブロックを含む。
- 4層：暗黄褐色土。ローム粒子、ロームブロックを多く含む。しまり良し。粘性やや強い。

第19図 第1号方形周溝墓及び出土遺物



第20図 第2号方形周溝墓及び出土遺物



第21図 第3号方形周溝墓及び出土遺物

幅は0.3～1.5mで、東側が浅くなるが、全周するものと考えられる。

遺物はおもに北溝覆土から出土している。1は埴で、胴部最大径7.8cm、底径3.1cmである。外面は粗いハケメが施され、内面は丁寧な指ナデで調整されている。2は底径6.6cmの壺底部破片である。底部は多方向のケズリでややくぼむ。五領期末か。3は把頭部に装飾のある石棒。混入である。

第3号方形周溝墓（第21図）

カ-194-21, 22～キ-194-1, 2, 7グリッドに位置する。北側は発掘区域外にかかり、検出されたのは北溝以外の部分である。東西軸の傾きはN-54°-W、規模は周溝内縁幅12.4m、方台下端幅13.3m、周溝外縁幅14.2mである。周溝幅は0.9～1.1mとほぼ一定で、掘り込みは外側が急に立ち上がる。内区にはPitおよび土壌が検出されているが、本周溝墓との関連は不明。

出土遺物は少ない。1は小形壺であるが口縁を欠く。胴部最大径13.0cm、底径3.5cm。外部はハケメを施すが、その順番はまず下半に細かいハケメを施し、次に胴部中～上半に粗いハケメを2方向に施す。最後に頸部に横方向のハケメを巡らせている。内面は丁寧なナデがみられる。2は大形の壺の胴部下半である。粘土の継ぎ目の部分で急に立ち上がる。底径7.5cm、残存部の胴部最大径は27.5cmである。外面はハケメ調整の後、ナデを施すものと推定される。五領期末。

第4号方形周溝墓（第22図）

カ-193-19, 20～カ-193-24, 25グリッドに位置する。一部攪乱を受けているが、遺構の検出状況は比較的良好である。長軸の傾きはN-55°-E、規模は周溝内縁幅11.0×10.1m、方台下端幅11.2×10.5m、周溝外縁幅12.8×12.0mである。周溝幅は0.5～1.0mで、溝は4周するが、東隅を掘り残している。内区にはPitや土壌が検出されたが、本周溝墓に伴うかどうかは定かではない。

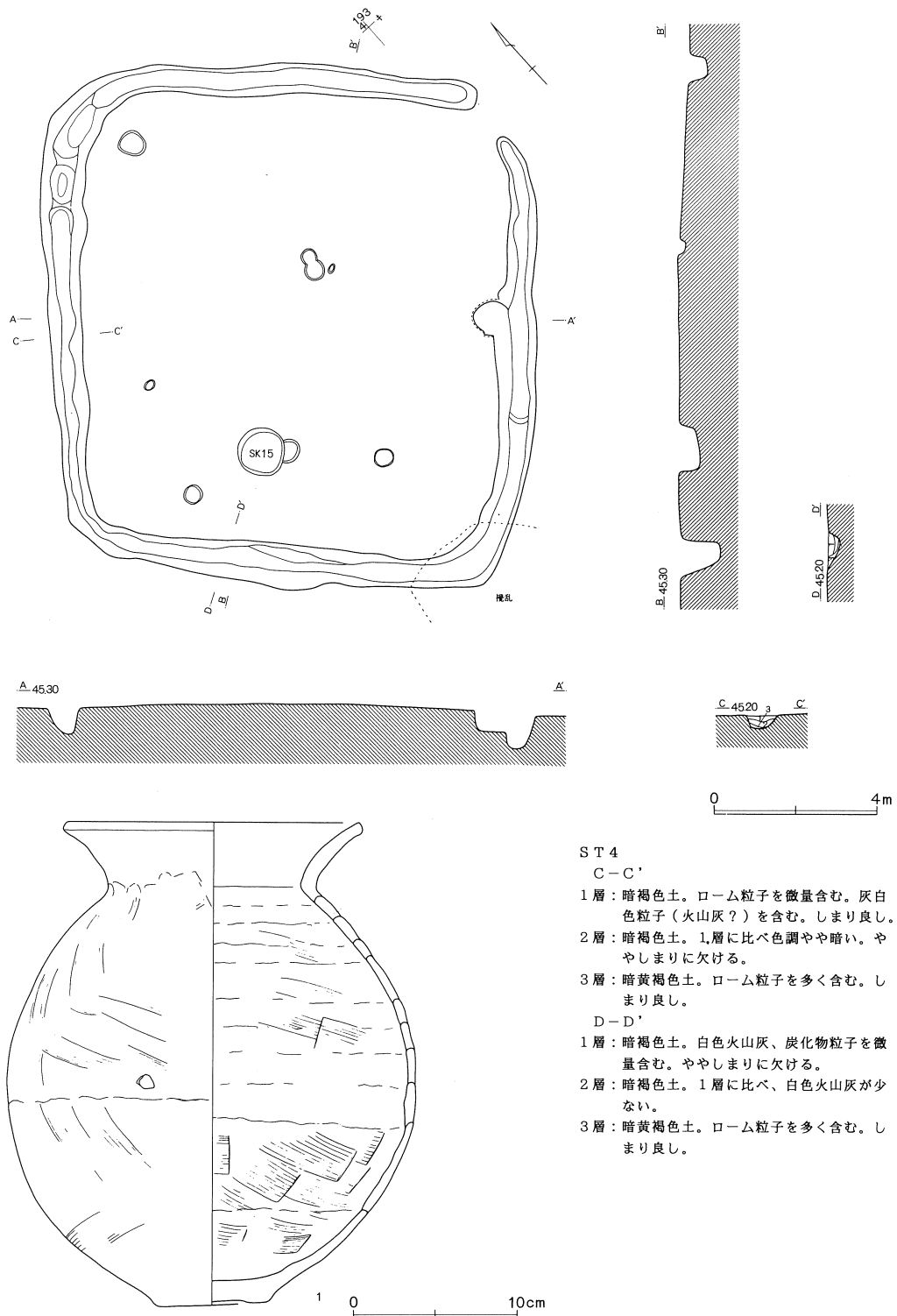
遺物は大型の壺が1点出土したにとどまる。1は口径17.8cm、器高29.4cm、胴部最大径推定24.8cm、底径7.2cmである。外面は風化のため不明瞭だが、ハケメがわずかに認められる。ハケメの後ナデもしくはミガキが施されていたものと推定される。内面は下半にハケメがきれいに残っているが、上半はハケメが弱く、輪積痕が残る。胴部中央に1ヶ所穿孔があるが、任意のものかどうかは不明。色調は明赤褐色～にぶい赤褐色を呈し、残存率は90%である。五領期末か。

第5号方形周溝墓（第23図）

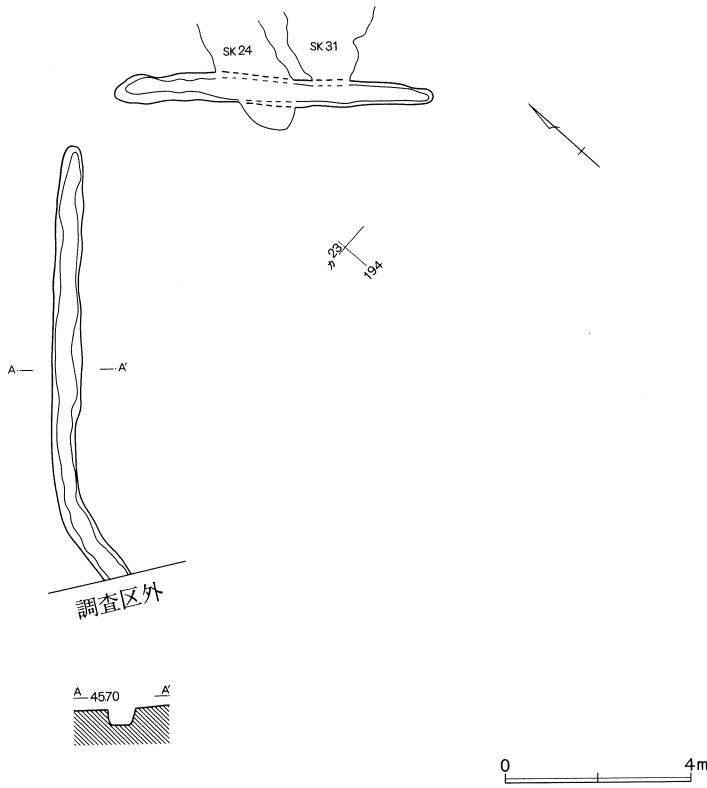
カ-194-23グリッドに位置する。とぎれた北溝と西溝が検出されたにとどまるが、第3号住居跡の覆土を切って本周溝墓の断面が観察されたため、他の部分は削平された可能性が大きい。周溝幅は約0.6mである。本周溝墓に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

第1号円形周溝墓（第24図）

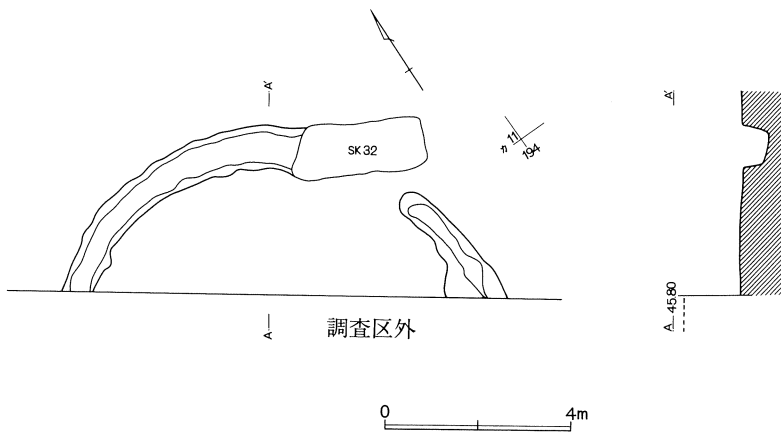
カ-194-12に位置する。南半分は発掘区域外にかかり、第32号土壌に切られている。周溝幅は0.7～1.0m、土壌と切り合う個所にブリッジをもつと考えられる。本周溝墓に伴う遺物の出土は見られなかった。



第22図 第4号方形周溝墓及び出土遺物



第23図 第5号方形周溝墓



第24図 第1号円形周溝墓

ウ 円筒埴輪棺

第1号円筒埴輪棺（第25図）

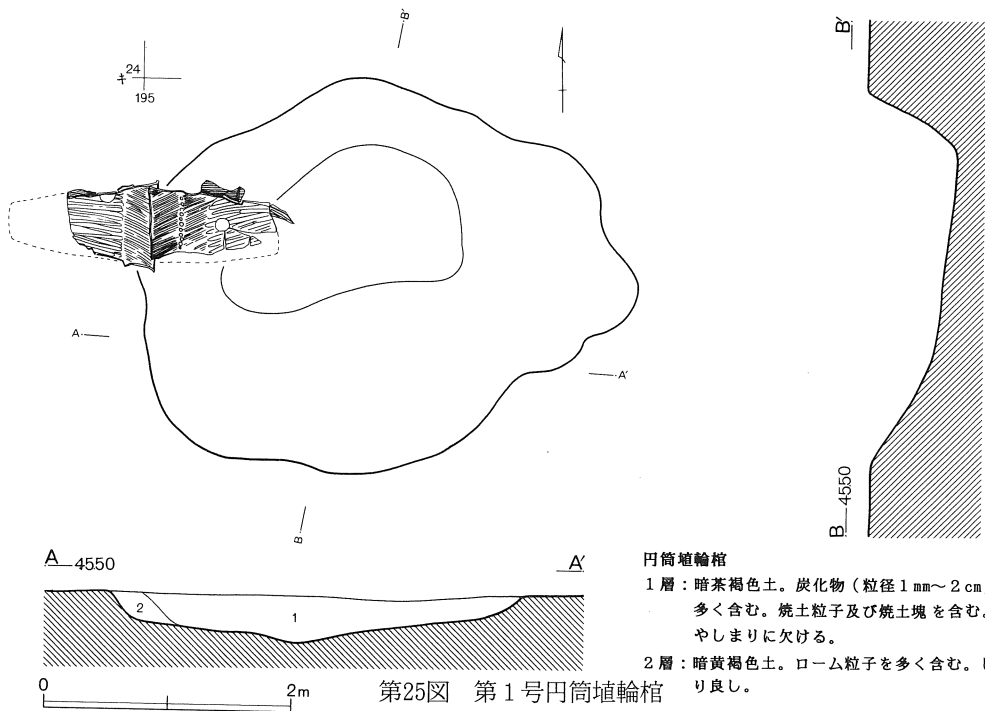
キ-195-18グリッド、古墳の周溝と考えられる第3号溝跡の東近くに位置し、主軸はほぼ東西方向を向く。明確な堀り方は不明である。周囲には地山との境界が不明瞭な暗茶褐色土の覆土が堆積していた。埴輪棺を取り上げた後でその部分を発掘した結果、不整形の掘り方が検出されたが、位置もずれており、埴輪棺の掘り方かどうか定かではない。埴輪棺は2本の円筒埴輪（1・2）の口を合わせており、底部および透孔に別の埴輪を破片にして塞いだ状態で出土した。

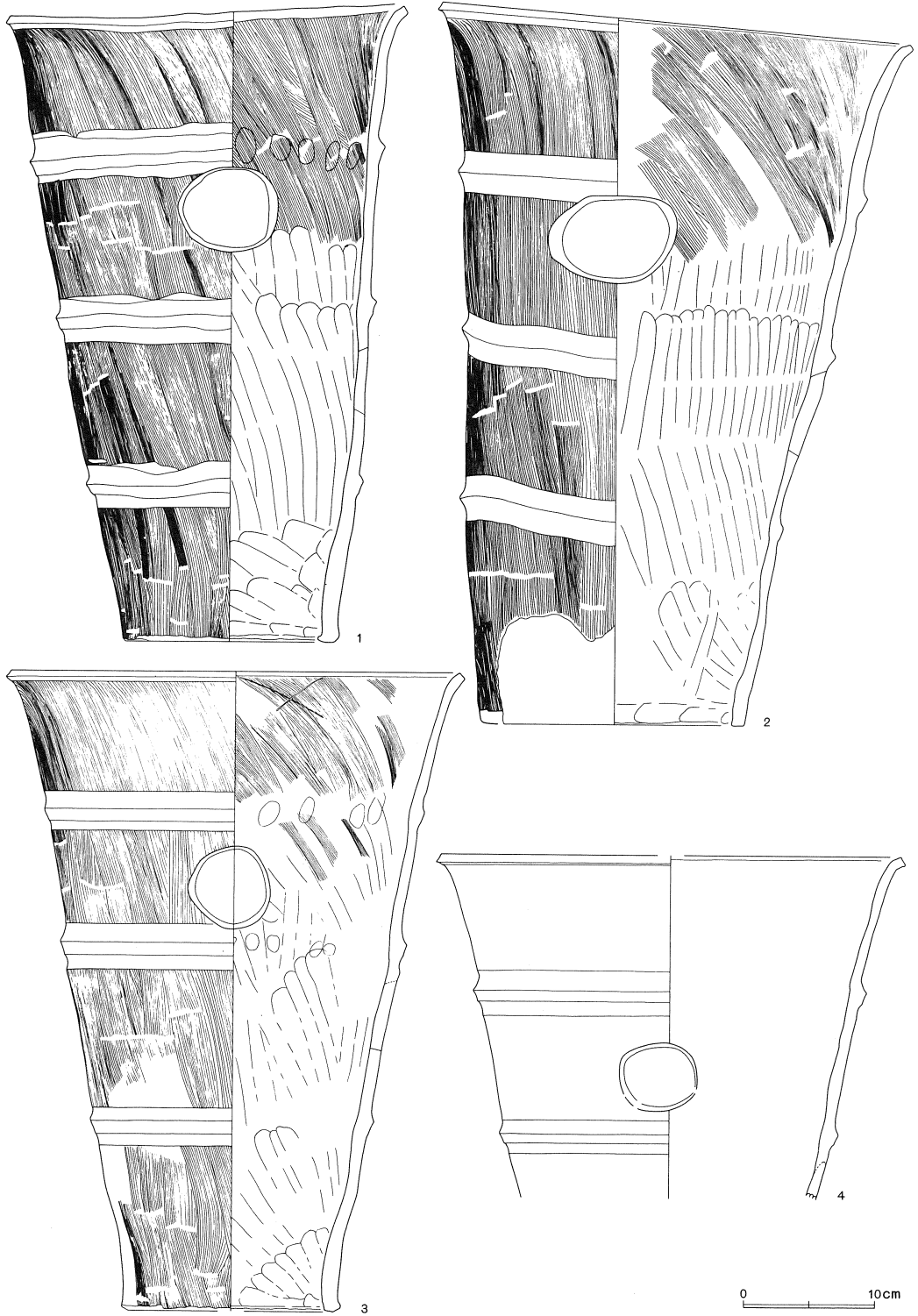
円筒埴輪（第26・27図）

1は棺主体をなす東側の円筒埴輪である。口径30.7cm、器高47.9cm、底径16.2cm。突帯は低く3段で、突帯間の円形透孔は互い違いに設けられている。底部調整は認められない。外面は細かいハケメ調整の後、突帯を貼り付ける。内面は口縁下にハケメ、残りは指ナデを施すが、突帯貼り付け時の指オサエの痕跡が明瞭である。残存率は85%。

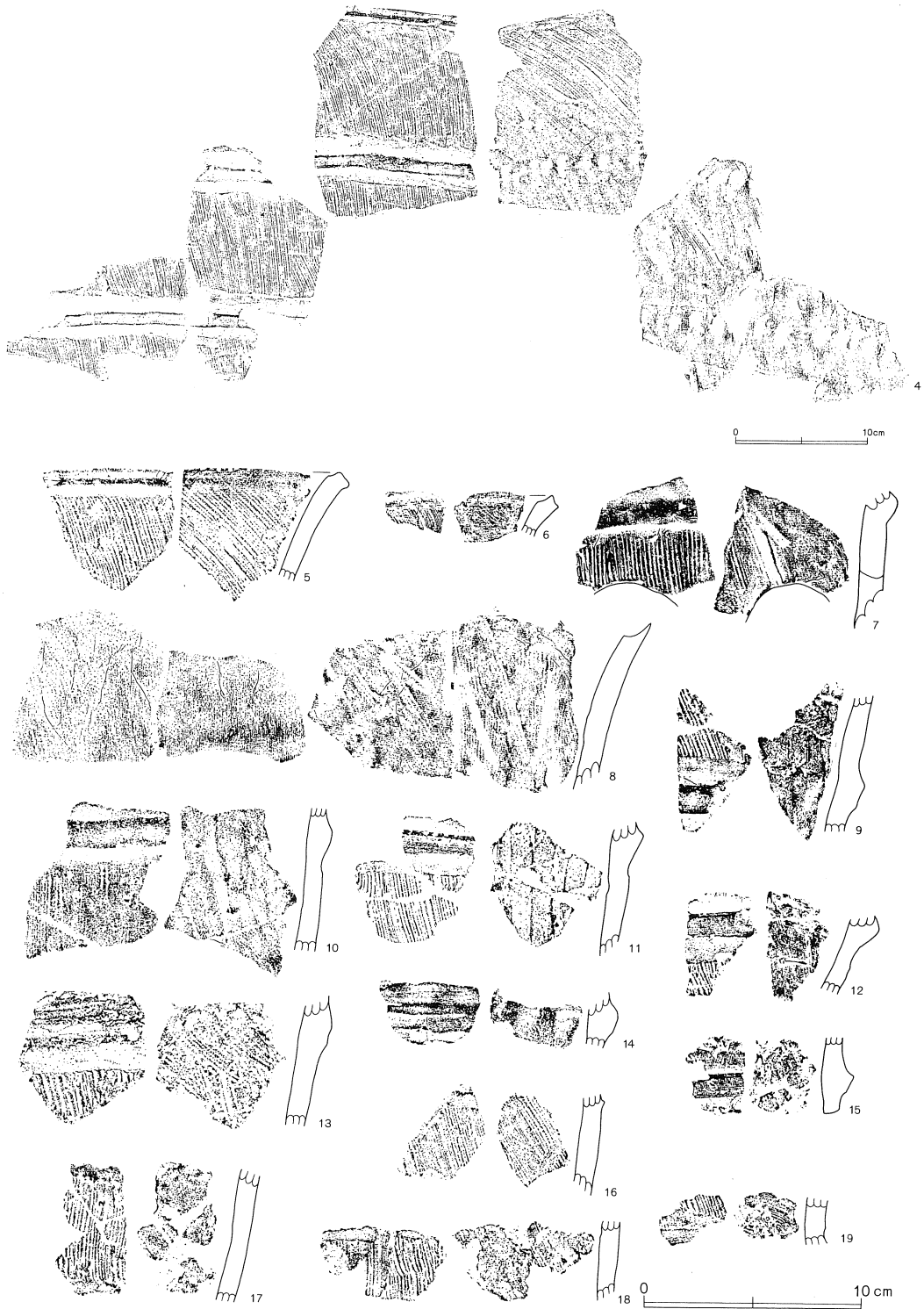
2は西側の棺である。口径36.5cm、器高53.8cm、底径20.1cm。底部の外面は剥落している部分がある。調整等は1と同様だが、突帯はさらに低い断面三角形を呈する。内面の指オサエの痕跡は観察されない。残存率60%。

3は棺主体の蓋に破片で使用されていたものである。接合の結果、全体の1/4が復元された。推定口径35.2cm、器高48.8cm、推定底径16.8cmである。1と同様に突帯内面の指オサエが明瞭である。透孔は円形でやはり交互に穿たれている。また、口縁内面に×字のヘラ記号がみられる。





第26図 第1号円筒埴輪棺出土遺物(1)



第27図 第1号円筒埴輪棺出土遺物(2)

4も蓋に使用されていた口縁および上半部の破片である。推定口径36.0cm。

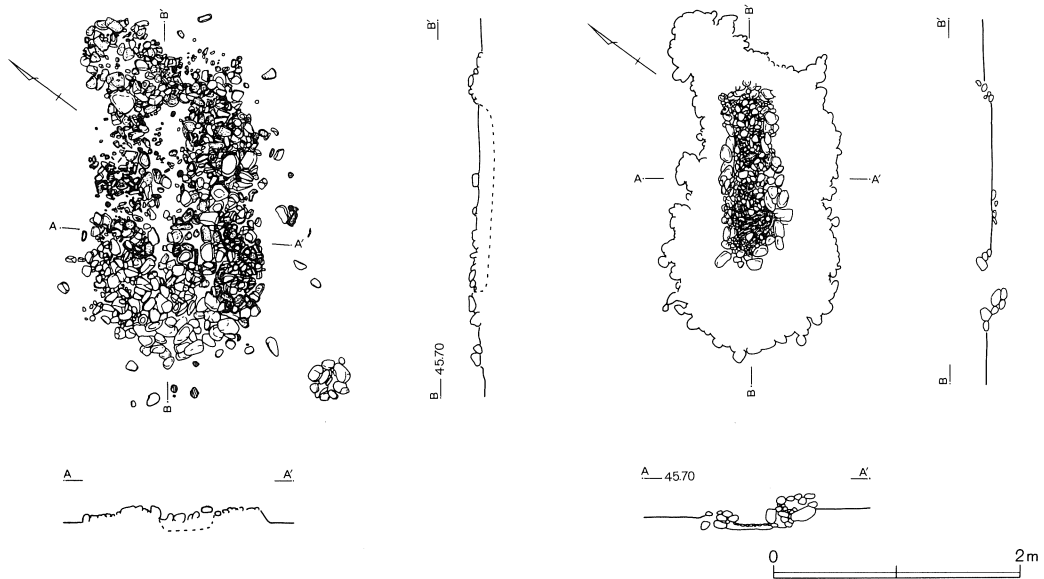
5以下の破片のうち、9～12、14～19は1～4いずれかと同じ個体のものと考えられるが、他は色調や調整等から別個体の埴輪と推定される。そのうち7と8は胎土・色調とも共通しており、同一個体と考えられる。したがって、棺の蓋には最低6個体の埴輪の破片が使用されていたことになる。なお、これらの埴輪の時期は、6世紀前半～中葉頃のものと考えられる。

エ 礫塚

第1号礫塚（第28図）

キ-195-14、19グリッドに位置し、第3号溝跡を切って構築されていた。5.5×2.5mの範囲を楕円形に浅く掘りくぼめて川原石を積み上げているが、削平を受け、原位置をとどめていない個所も見受けられる。主体部の規模は2.3×0.5mの長方形を呈し、主軸の傾きはN-55°-Eである。利用されている川原石には径40cm前後の大きなものから拳大のものまで多様であるが、側壁には比較的大きめの石を積み上げ、細かい砂礫を充填し裏込めとしている。床面は拳大～小礫の石を砂礫層のうえに敷き詰めている。

本遺構は周溝などを伴わない単独の遺構と推定されるが、出土遺物がなく、時期を判定する資料に欠ける。しかしながら、古墳の周溝と考えられる第3号溝跡が埋没した後に構築されていることから、その遺物の示す時期、おおよそ5世紀後半よりも新しい時期に属するものと考えられる。



第28図 第1号礫塚

(3) その他の遺構、遺物

ア 土壇 (第29～31図)

第1号土壇

キ-196-21、ク-196-1グリッドに位置する。主軸方向はN-17°-Wである。規模は2.8m×1.0mである。平面形は長方形を呈する。壁の立ち上がりは比較的緩やかである。埋土は6層に分層され、埋土上層から火山灰が検出されている。本土壇からは五領期に属する土師器の胴部下半の破片が検出された(第32図1)。

第2号土壇

キ-195-24グリッドに位置する。主軸方向はN-42°-Eである。調査区外に伸びるため、形状は一部不明であるが、細長い長方形を呈すると考えられる。確認された部分の規模は3.2m×1.2mである。確認面からの深さは15cmほどで、底面はほぼ平坦である。埋土は分層できず、埋土中には火山灰が含まれていた。遺物は検出されなかった。

第3号土壇

キ-195-13グリッドに位置する。平面形は不正円形を呈する。規模は1.7m×1.6mである。壁は比較的緩やかに立ち上がる。埋土は3層に分層され、上層から火山灰が検出されている。遺物は検出されなかった。時期は不明である。

第4号土壇

キ-195-1グリッドに位置する。主軸方向はN-175°-Eである。規模は2.0m×0.7mである。平面形はやや歪んだ長方形を呈する。壁の立ち上がりは比較的緩やかで、掘り込みは浅い。遺物は検出されなかった。

第5号土壇

キ-195-6グリッドに位置する。主軸方向はN-10°-Eである。調査区外に伸びるため、形状は一部不明である。規模は1.0m×0.5mである。掘り込みは浅い。遺物は検出されなかった。

第6号土壇

キ-194-15, 20グリッドに位置する。主軸方向はN-8°-Wである。平面形は細長い長方形を呈する。長軸端部に近いところに30cmほどの張り出しを有する。規模は3.4m×0.9mである。底面はほぼ平坦である。埋土は分層できなかった。遺物は検出されなかった。

第7号土壌

キ-195-11, 15グリッドに位置する。主軸方向はN-40°-Eである。調査区外に伸びるため、形状の一部は不明である。確認された部分の規模は2.5m×0.7mである。底面がややすぼまる。遺物は検出されなかった。

第8号土壌

キ-195-15グリッドに位置する。主軸方向はN-5°-Wである。平面形は細長の長方形をする。規模は2.8m×0.9mである。壁の立ち上がりは緩やかで底面はほぼ平坦である。遺物は検出されなかった。

第9号土壌

キ-194-10グリッドに位置する。主軸方向はN-41°-Eである。調査区外に伸びるため、形状の一部は明らかにし得ないが、細長い長方形を呈すると考えられる。確認された部分の規模は2.5m×0.5mである。掘り込みはかなり深く、壁の立ち上がりも急である。底面はほぼ平坦である。遺物は検出されなかった。

第10号土壌

カ-194-25、キ-194-4グリッドに位置する。主軸方向はN-32°-Eである。平面形は一端がやや狭まる細長の長方形を呈する。規模は3.1m×0.7mである。長辺の壁の立ち上がりは、一方が垂直に近く、他方はやや傾斜している。底面はほぼ平坦である。遺物は検出されなかった。

第11号土壌

キ-194-10, 15グリッドに位置する。主軸方向はN-40°-Eである。平面形は細長の長方形を呈する。規模は2.6m×0.5mである。確認面からの深さは約40cm程であるが、埋土は分層できなかった。底面はほぼ平坦である。

第12号土壌

オ-194-9, 10グリッドに位置する。主軸方向はN-70°-Eである。平面形は長方形を呈する。規模は2.6m×0.9mである。壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は2層に分層され、上層には火山灰が比較的多く含まれていた。埋土中から縄文土器片が少量出土している。

第13号土壌

キ-194-9グリッドに位置する。主軸方向はN-47°-Eである。規模は2.6m×0.9mを測る。平面形は長方形を呈する。壁の立ち上がりは緩やかである。埋土上層に火山灰粒子が多く含まれていた。埋土中から縄文土器片が少量出土している。

第14号土壌

キ-194-9グリッドに位置する。主軸方向はN-6°-E、規模は2.4m×0.8mである。平面形はやや歪んだ長方形を呈する。西側の壁は底面に向かって奥に広がっている。東側の壁は緩やかに立ち上がっている。遺物は検出されなかった。

第15号土壌

カ-193-20,25グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。規模は1.5m×1.2mである。埋土中から縄文土器の破片が検出されている。

第16号土壌

ク-196-6グリッドに位置する。主軸方向は座標北にほぼ一致する。平面形は楕円形を呈する。規模は1.2m×0.6mを測る。本土壌からは、胎土に繊維を含む深鉢の破片が出土している（第32図2～7）。すべて同一個体である。口縁部は直立し、口唇部近くでわずかに外反する。口唇部端面はやや外側につままれている。外面には0段多条のRL縄文が縦位に施文されている。早期末から前期初頭に属するものと考えられる。

第17号土壌

キ-196-22グリッドに位置する。第18号土壌と重複している。調査区外に伸びるため、形状の一部は不明であるが、不整形円形、または楕円形を呈すると考えられる。底面はほぼ平坦である。遺物は検出されなかった。

第18号土壌

キ-196-22グリッドに位置する。第17,19号土壌と重複している。長方形を呈すると考えられる。長辺の壁の立ち上がりは緩やかである。埋土中から土器片が少量検出されている。

第19号土壌

ク-196-2グリッドに位置する。第18号土壌と重複する。調査区外に伸びるため、形状の一部は不明である。遺物は検出されなかった。

第20号土壌

キ-196-19グリッドに位置する。第21号土壌とわずかに重複している。規模は1.3m×0.9mである。壁は垂直に近く立ち上がり、平面形は不整形円形を呈する。掘り込みは深く、底面はほぼ平坦である。遺物は検出されなかった。

第21号土壌

キ-195-24グリッドに位置する。第20号土壌とわずかに重複する。規模は1.3m×0.8mやや歪ん

だ楕円形を呈する。壁の立ち上がりは緩やかである。遺物は検出されなかった。

第22号土壌

カ-194-24グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し、主軸方向はN-28°-Eである。西側長辺の壁は緩やかに立ち上がる。規模は2.4m×1.0mである。遺物は検出されなかった。

第23号土壌

キ-194-3グリッドに位置する。長方形を呈し、主軸方向はN-55°-Wである。規模は2.5m×0.8mである。掘り込みは浅く、壁の立ち上がりは緩やかである。遺物は検出されなかった。

第24号土壌

カ-194-22グリッドに位置する。やや不整形な長方形を呈する。主軸方向はN-32°-Eで、規模は3.8m×1.3mと大形の土壌である。東側の壁は垂直に近い立ち上がりを有する。底面は北側が一段低くなっており、埋土は6層に分層された。遺物は検出されなかった。

第25号土壌

カ-194-21, 22グリッドに位置する。平面形は長方形を呈する。主軸方向はN-55°-W、規模は1.7m×0.9mである。掘り込みは浅く、埋土も分層できなかった。埋土には白色のパミスが含まれている。底面はほぼ平坦である。遺物は検出されなかった。

第26号土壌

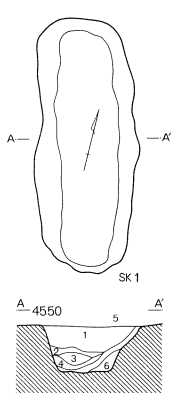
カ-194-16, 17グリッドに位置する。平面形は長方形を呈する。主軸方向はN-36°-E、規模は2.6m×1.0mである。掘り込みは浅く、埋土も分層できなかった。埋土には白色のパミスが含まれている。底面はほぼ平坦である。遺物は検出されなかった。

第27号土壌

カ-193-5, 10グリッドに位置する。平面形はやや不整形な長方形を呈する。主軸方向はN-25°-E、規模は2.4m×0.9mである。長軸両端の壁の立ち上がりは急であるが、長辺の立ち上がりは緩やかである。埋土は5層に分層され、上部に火山灰を含まれ、中位の層に焼土粒子が含まれていた。遺物は検出されなかった。

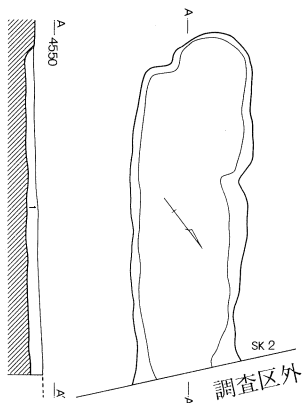
第28号土壌

カ-194-25、キ-194-5グリッドに位置する。平面形は非常に細長い長方形を呈する。主軸方向はN-7°-W、規模は5.0m×0.7mである。掘り込みは浅く、底面はほぼ平坦である。遺物は検出されなかった。



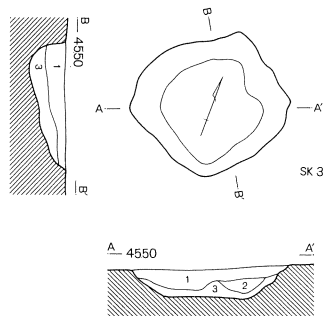
SK 1

- 1層：暗褐色土。白色火山灰、炭化物粒子を少量含む。しまりやや悪く、粘性に欠ける。
- 2層：暗褐色土。ローム粒子を多く含む。
- 3層：暗褐色土。2層に比べ色調やや暗い。炭化物粒子を少量含む。しまりよし。粘性やや悪い。
- 4層：暗褐色土。2層と同じ特徴を持つ。
- 5層：暗褐色土。4層に比べ色調やや暗い。ローム粒子を微量含む。しまりよし。
- 6層：暗黄褐色土。ローム粒子を多く含む。しまりよし。粘性強い。



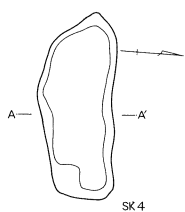
SK 2

- 1層：暗黒褐色土。白色火山灰、焼土粒子を少量含む。しまりやや悪い。

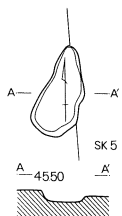


SK 3

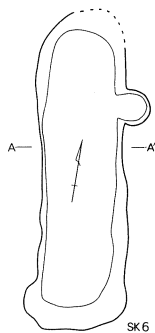
- 1層：暗褐色土。少量の火山灰を含む。
- 2層：暗褐色土。色調やや暗い。
- 3層：暗黄褐色土。ロームブロックを多く含む。



SK 4



SK 5

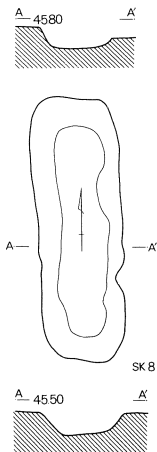


SK 6

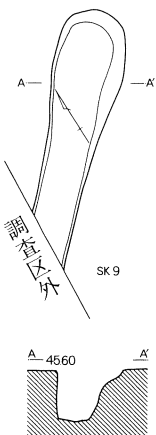
- 1層：暗褐色土。ロームブロックを多く含む。しまりやや悪い。



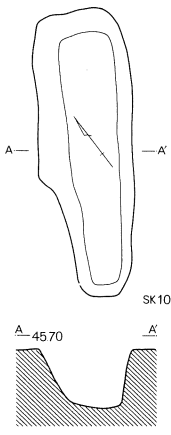
SK 7



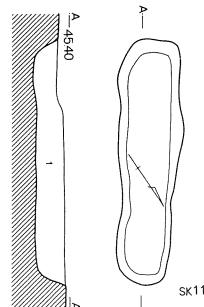
SK 8



SK 9

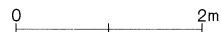


SK 10

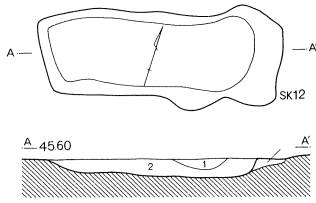


SK 11

- 1層：暗褐色土。火山灰を少量含む。微量の焼土粒子を含む。

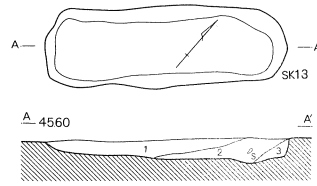


第29図 土壌 (1)



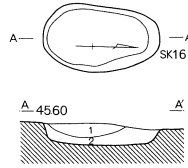
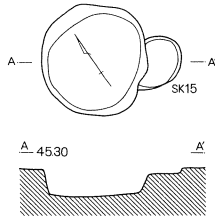
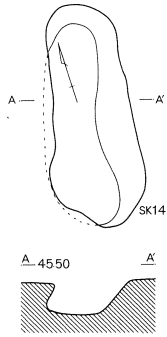
SK12

1層：暗褐色土。火山灰を多く含む。微量の焼土粒子を含む。
2層：暗褐色土。炭化物粒子を少量含む。しまりやや悪い。



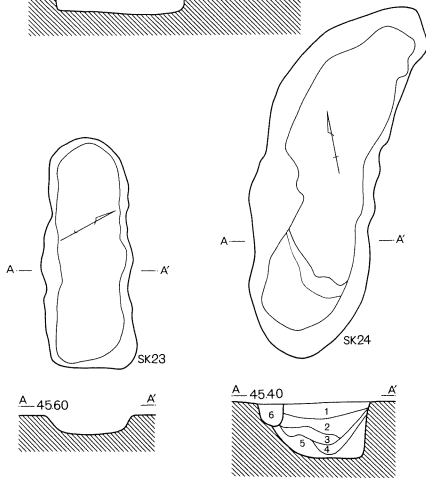
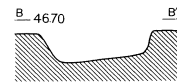
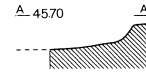
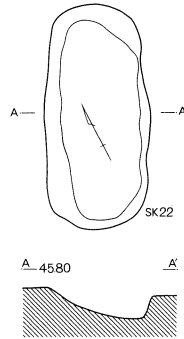
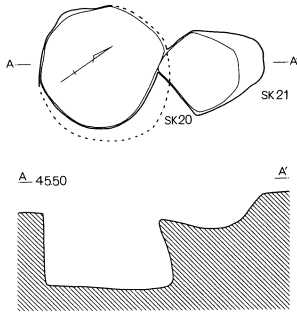
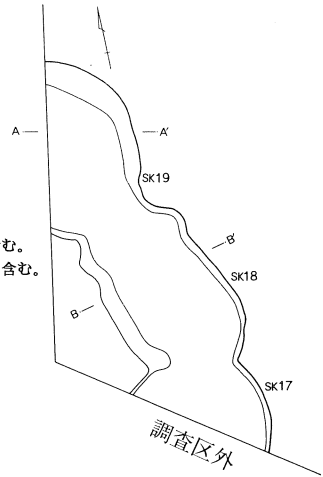
SK13

1層：暗褐色土。火山灰を多く含む。炭化物粒子を微量含む。
2層：暗褐色土。炭化物粒子、ローム粒子を少量含む。
3層：暗褐色土。ローム粒子を多く含む。しまりよし。



SK16

1層：暗褐色土。火山灰粒子を少量含む。
2層：暗黄褐色土。ローム粒子を多く含む。

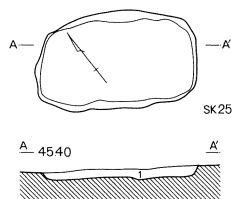


SK24

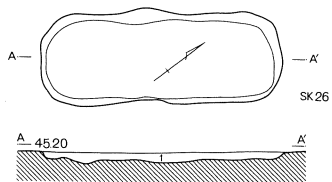
1層：褐色土。白色粒子を含む。
2層：暗褐色土。白色粒子を含む。
3層：暗褐色土。白色粒子を含む。ローム粒子を含む。
4層：明褐色土。白色粒子を含む。
5層：暗褐色土。白色粒子を含む。ローム粒子を含む。



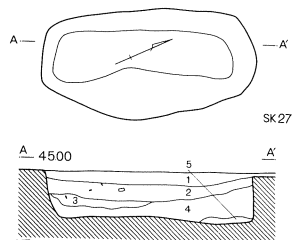
第30図 土壌 (2)



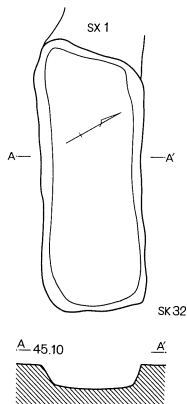
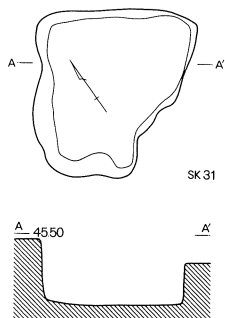
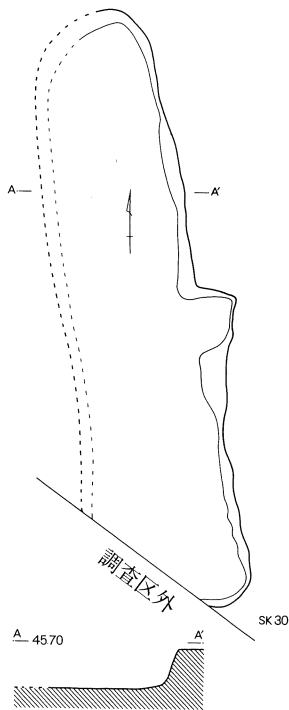
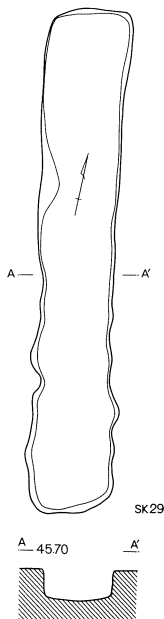
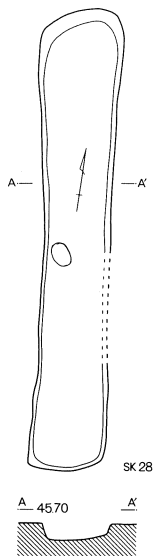
SK 25
1層：暗褐色土。白色火山灰を少量含む。



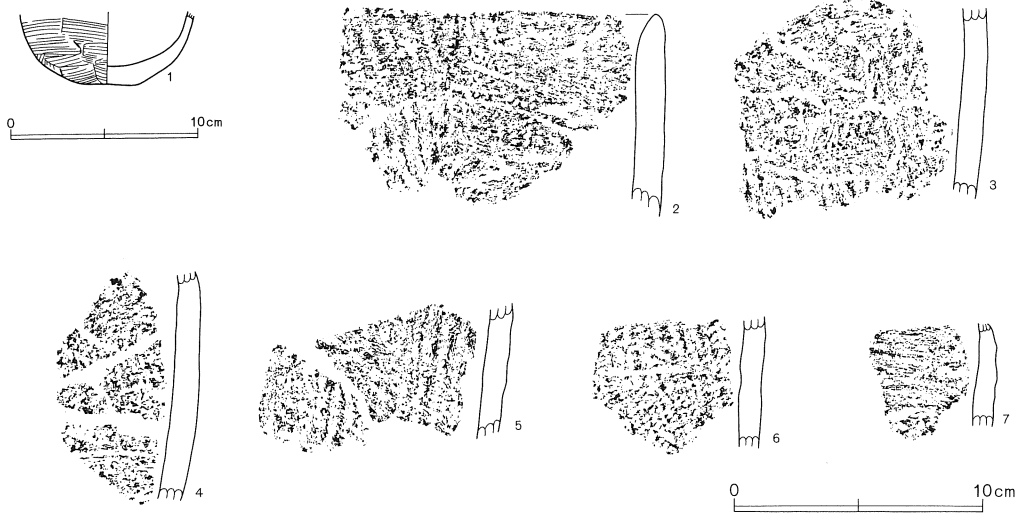
SK 26
1層：暗褐色土。白色火山灰を少量含む。



SK 27
1層：暗褐色土。白色火山灰を少量含む。
焼土粒子を少量含む。
2層：暗褐色土。ローム粒子を少量含む。
3層：暗褐色土。焼土粒子を少量含む。
4層：暗黄褐色土。ローム粒子を多く含む。
5層：暗黄褐色土。ロームブロックを多く含む。



第31図 土坑 (3)



第32図 土壌出土遺物

第29号土壌

キ-194-5, 10グリッドに位置する。平面形は第28号土壌同様、非常に細長い長方形を呈する。主軸方向はN-9°-W、規模は5.4m×0.8mである。壁の立ち上がりは急で、底面はほぼ平坦である。遺物は検出されなかった。

第30号土壌

キ-194-5グリッドに位置する。一部が調査区外に伸びるが、平面形は長方形を呈する。西側の立ち上がりは確認できなかった。主軸方向はN-12°-W、確認された部分の規模は6.6m×0.9mである。遺物は検出されなかった。

第31号土壌

カ-194-22グリッドに位置する。平面形はやや不整形な方形を呈する。規模は2.2m×1.6で、底面はほぼ平坦である。遺物は検出されなかった。

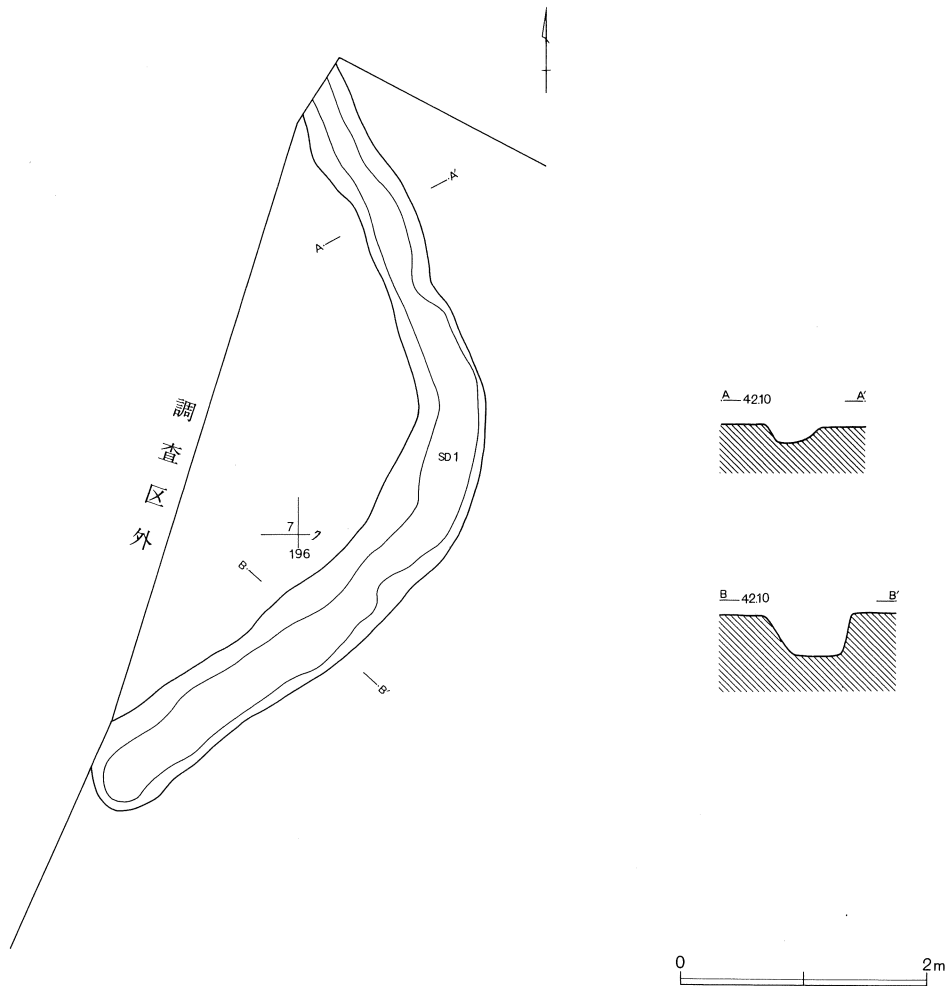
土壌は遺物を含まないものがほとんどで、時期、性格等不明なものが多い。平面形は、長方形を呈するものと、それ以外のものに大きく分けることができる。前者は埋土上層に白色の火山灰粒子を含むものがあり、調査時の記録はないが、浅間a軽石の可能性ある。長方形を呈するものは主軸方向が北東方向を向くものと、北西方向を向くものに2分できる。北東方向は20°から40°前後、北西方向は10°前後、それぞれ座標北からずれるものが多い。

イ 溝跡

本調査区からは5条の溝跡が検出されている。溝跡はそれぞれ、方形周溝墓、古墳の周溝の可能性のあるものが存在するが、調査時に溝跡として処理されていたため、ここでは溝跡として一括して扱い、性格については、個々の遺構の説明で触れることにする。

第1号溝跡（第33図）

本調査区の北西隅に位置する。確認された範囲では、長さ約8m、幅40~70cm程の溝跡である。溝の深さは10~50cm程である。壁の立ち上がりは比較的緩やかである。土層の記録はない。南端部分で収束するようである。収束部から北東に伸び、緩やかに屈曲して北西方向に向かい、調査区外に至る。全景を知ることはできないが、規模、形状から方形周溝墓の可能性もある。遺物は検出されなかった。



第33図 第1号溝跡

第2号溝跡（第34図）

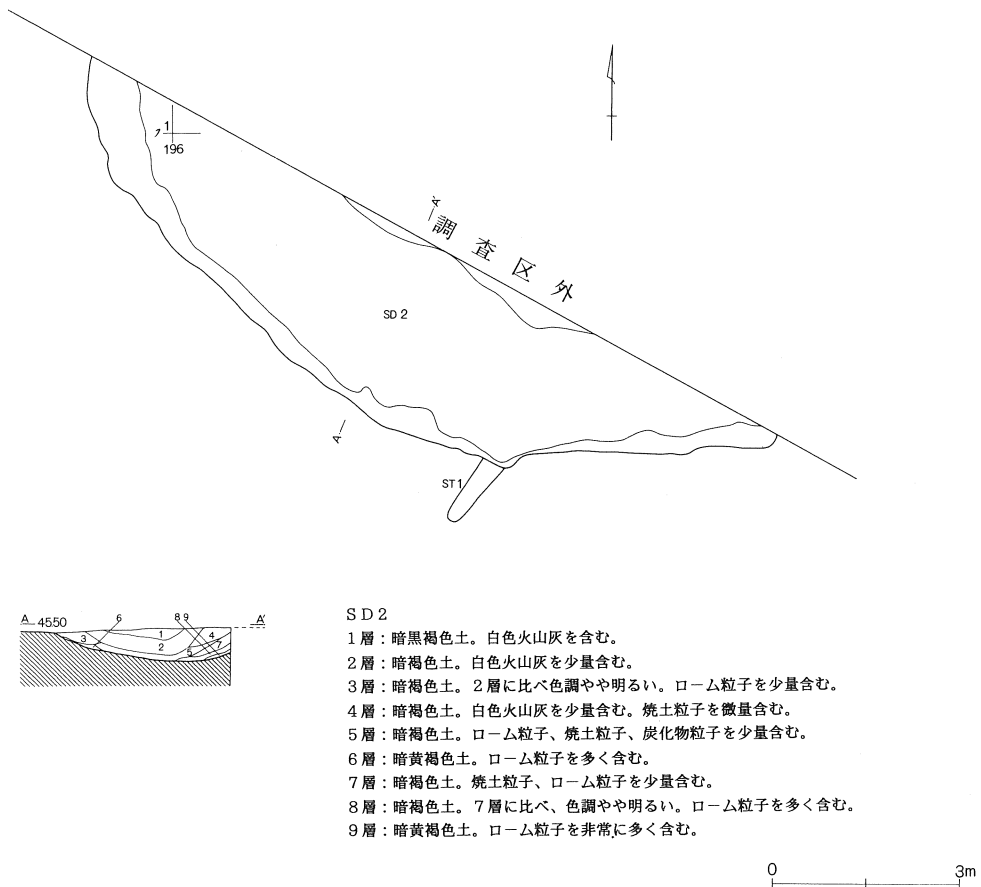
ク-195-4, 5, 10, ク-195-1, 6グリッドに位置し、大半が北側発掘区域内にかかる。検出された部分では溝の規模を明確にはできないが、上端の幅は推定で3.0m、下端の幅は2.2m、掘り込みの深さは55cm程度である。

本溝跡に伴う遺物は出土しておらず、その時期及び性格を類推する資料に欠ける。しかし、最近の岡部町教育委員会の調査により、隣接する区域から古墳群が発見されていることから、本遺構も古墳の周溝である可能性がある。

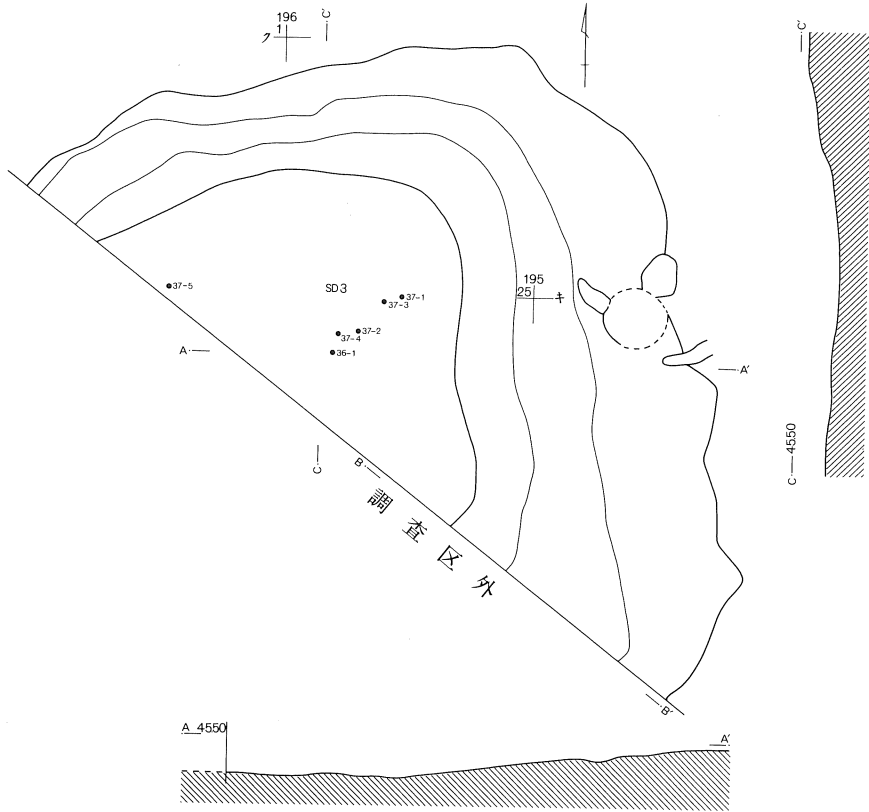
第3号溝跡（第35図）

キ-195-14, 15, 19, 20, 24, 25, キ-196, 16, 21グリッドに位置し、南西側は発掘区域外にかかる。発掘当初は方形の落ち込みと考えられたが、調査の結果、内側に3~10m入ったところにわずかに下場が認められた。内側の立ち上がりは確認されなかったが、第2号溝跡と同じ理由から、古墳の周溝と考えられる。

主な遺物は少なく、2層下部~3層上面という比較的上層から検出されている。縄文時代の遺物

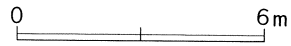
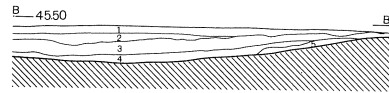


第34図 第2号溝跡

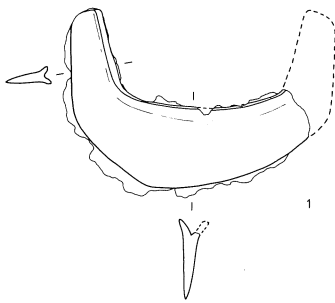


SD3

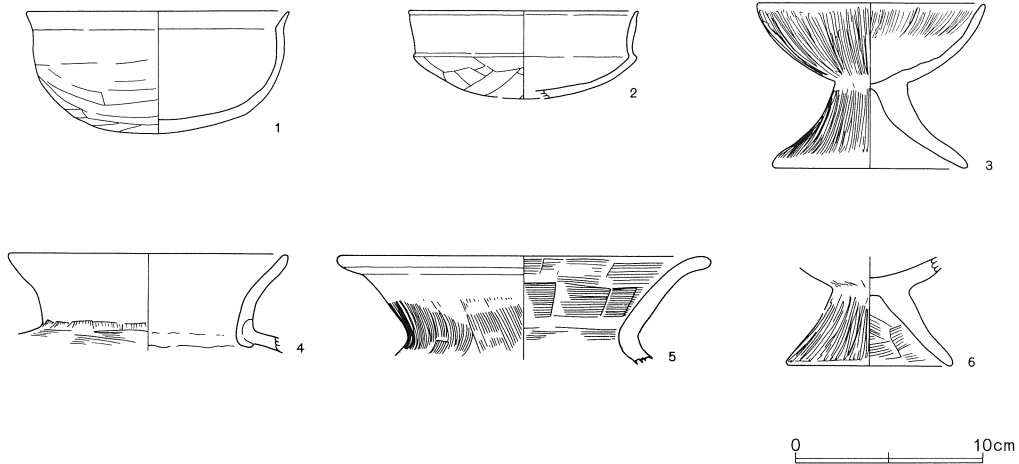
- 1層：黒褐色土。白色粒子、炭化物粒子、焼土粒を少量含む。
- 2層：黒褐色土。炭化粒子、焼土粒を少量含む。
- 3層：暗褐色砂質土。粗砂を含む。
- 4層：暗褐色土。ローム粒子を含む。粘性強い。
- 5層：暗黄褐色土。ロームブロックを多く含む。



第35図 第3号溝跡



第36図 第3号溝跡出土遺物(1)



第37図 第3号溝跡出土遺物(2)

も混在しており、すべてが本溝跡に伴うものではないと考えられるが、その一部は和泉式期末頃～鬼高式期初頭の遺物と推定される。

第3号溝跡出土遺物(第36・37図)

第36図1は鉄製鋏先である。一部欠損し全体の75%を残す。U字状を呈し、長さは推定7.2cm、幅推定10.2cm、刃幅は最大で3.4cm、重さは67.38gである。刃の形状が左右対照でないのは、研ぎ減りによるものと推定される。

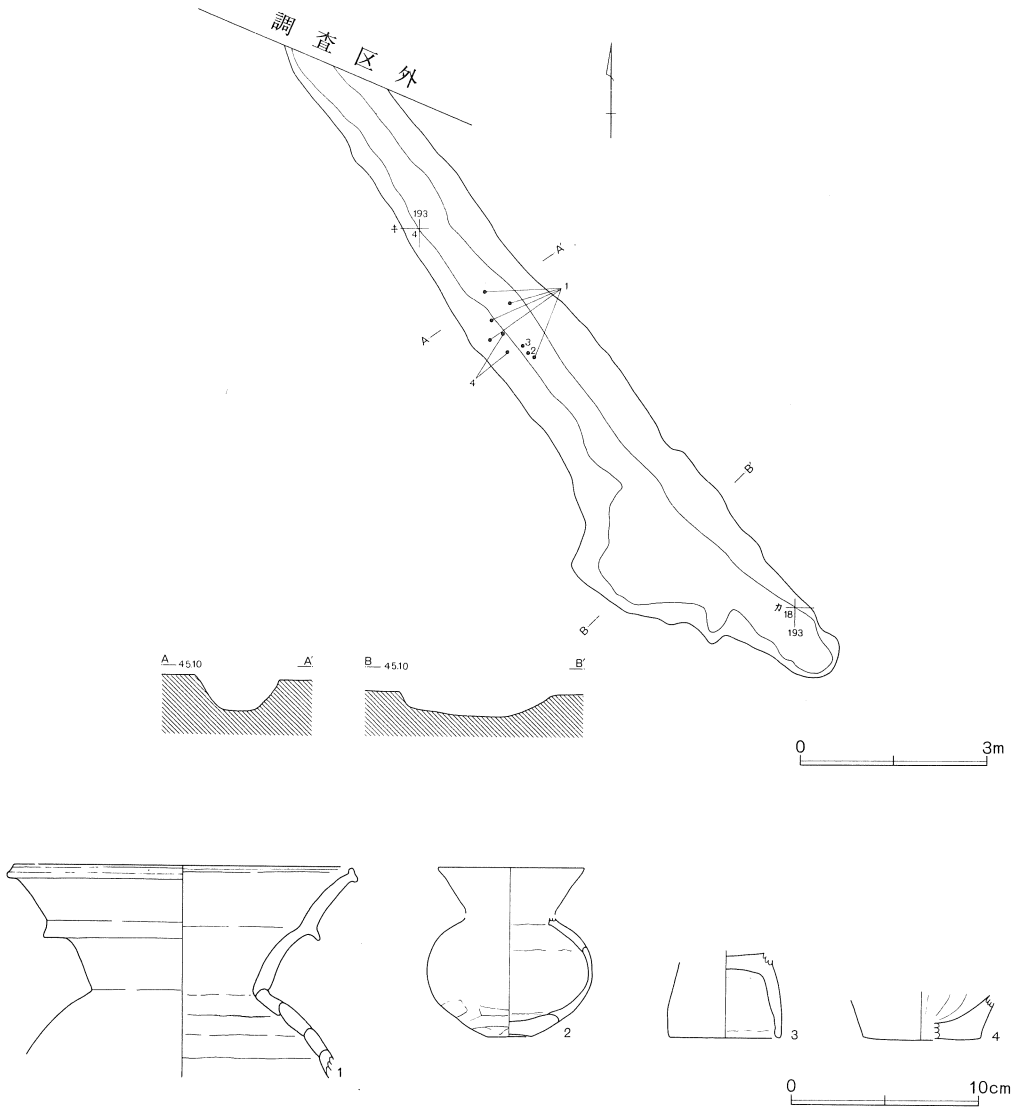
第36図2は土偶の頭部である。眉、鼻は直線的な隆帯で、目は眉直下に短い沈線によって描かれている。両耳には貫通孔が施され、口はかなり深い凹みによって表現されている。頭部背面には三日月状の隆帯が貼付され、首には刺突列が施されている。

第37図1は口径14.0cm、器高6.5cm、完形に近い丸底の椀である。体部外面はヘラケズリの後ミガキが施される。2は口径12.2cm、器高推定4.7cmの模倣坏である。残存率60%。3は高坏で外面には赤彩が施されている。口径12.2cm、器高8.8cm、脚径10.5cmで残存率は60%である。内面は特に風化が著しい。4は口径推定15.0cm、5は口径推定20.0cmの壺口縁の破片である。5は内外面ともにハケメが施される。6は脚径推定9.0cmの高坏脚部破片である。内面はハケメ調整、外面はミガキが施され、赤彩されている。

第6号溝跡(第38図)

カ-193-17, 18, 22~24, キ-193-3, 4グリッドに位置する。北側は発掘区域外にかかり、東南方向に延びる。上端幅は1.0~1.6cm、下端幅は0.4~0.6cmである。南端部のとぎれる手前は不定型に幅広となるが、その部分の幅は上端2.6cm、下端1.6cmとなる。深さはおよそ5.5cmで、わずかに南側が深く掘り込まれている。

遺物は少なく、おもに中央部分から土師器(和泉式)の破片が出土している。



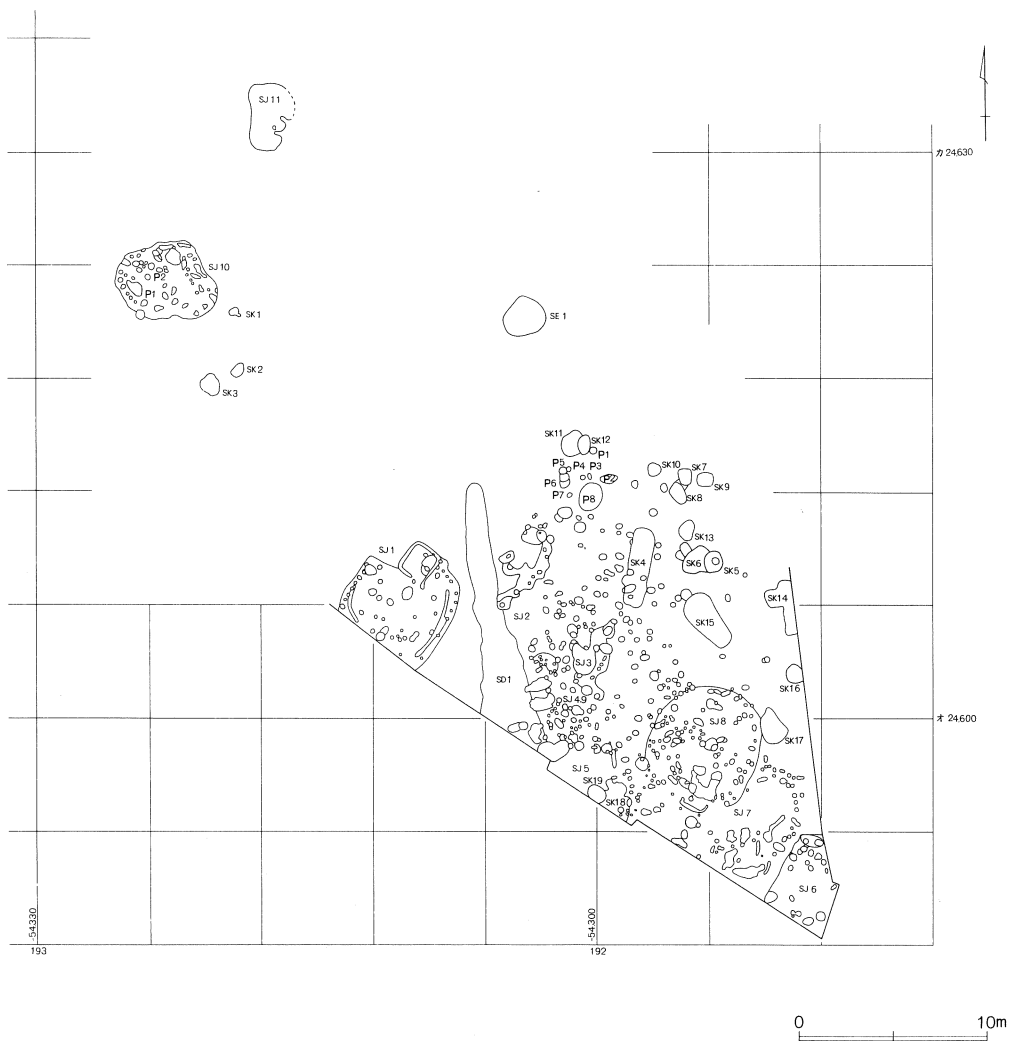
第38図 第6号溝跡及び出土遺物

1は有段口縁をもつ壺の口縁部～頸部の破片である。口径推定18.0cm。内面は粘土の輪積痕が明瞭にみられる。体部外面の調整は風化のため明瞭でない。2は口縁部を欠く埴形土器である。胴部最大径は推定8.8cm。底部は小さく凹む。胴部下半にはヘラケズリが残るが、他はミガキを施すものと推定される。残存率は40%。3は台付甕の脚部である。脚径6.0cm。風化のため器面が荒れており調整は不明。4は壺の底部破片である。底径推定6.2cm

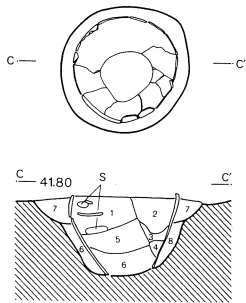
3 B区の調査

(1) B区の調査の概要

B区東半には、縄文時代後晩期の遺構が集中して見られる。調査当初、これらの遺構のほとんどが確認できず、遺構を伴わない包含層と考えて調査が行なわれていた。住居跡は、炉跡、柱穴が検出された段階で確認できたものがほとんどであった。それゆえ調査時には、住居跡内に形成された包含層と、住居埋没後に形成された包含層の区別が不可能であった。また、住居跡が切り合っている場合、大半の遺物の帰属は明らかにし得なかった。幸い、出土地点が記録されている遺物が半数

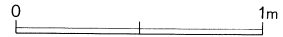


第39図 B区全測図



SJ1埋甕

- 1層：暗褐色土。炭化物粒子を少量含む。しまり良し。
- 2層：黒褐色土。炭化物粒子をやや多く含む。焼土粒を微量含む。しまり悪い。
- 3層：明褐色土。ローム粒子を多く含む。しまり良し。焼土粒を多く含む。
- 4層：暗褐色土。やや黒味を帯びる。やや粘性あり。しまり良し。
- 5層：暗褐色土。焼土粒を少量含む。しまり良し。
- 6層：暗褐色土。色調やや暗い。炭化物粒子を多く含む。やや粘性あり。しまり良し。
- 7層：暗褐色土。色調やや明るい。ローム粒子を多く含む。しまり良し。
- 8層：暗褐色土。色調暗い。やや粘性あり。



第40図 第1号住居跡

第1号住居跡柱穴

P No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
深さ(cm)	24.0	19.6	21.6	28.7	24.6	8.1	5.0	11.5	10.5	14.4	9.8	22.0	10.9	8.1	30.0	30.2	13.7	22.5	26.9	10.2
P No.	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
深さ(cm)	11.1	6.1	7.4	6.2	5.3	9.2	14.5	15.0	15.1	22.3	13.0	22.3	16.3	23.0	16.3	15.7	19.5	23.0	16.3	6.3

近くあったため、遺構底面との空間的な関係は確認できるものもある。住居跡と平面的に重なるものについては、当該住居跡に帰属する可能性があると考えられる。本報告においては、遺物の帰属は、発掘時に遺構に帰属すると判断されたもの、出土地点を検討した結果、各住居跡に帰属する可能性のあるもの、それ以外のものに分けて記述する。遺構との関係において、住居跡と平面的に重なるものは、挿図、表中では「S J_?」という形で記述した。はじめに遺構の説明を行ない、個々の遺物についての説明は後続する節でまとめて行なう。

(2) 縄文時代の遺構と遺物

ア 住居跡

第1号住居跡（第40図）

オ-192-2, 3, 7, 8グリッドに位置する。規模は、長軸6.2m以上、短軸3.5mを測る。一部調査区外にかかるため、全容は明かではない。形態はやや隅円の方形を呈する。北東側に入り口状の施設が張り出し、その張り出しから住居内にかけて、浅い溝が方形に巡る。溝によって区画された部分の北東隅に埋甕を持つ（第54図1）。埋甕は正位に置かれ、底部が欠損している。

壁高は、残りの良いところで約20cm程である。壁の内側には、周溝が部分的に巡っている。周溝の深さは10～20cmを測る。中心に炉跡と考えられる、径約50cm、深さ15cm程の落込みが見られるが、焼土、炭化物は検出されなかった。支柱穴と考えられるものも見られるが、どのような構造になるかは不明である。壁際に壁柱穴と考えられる小さなピットが見られる。

土器は第54～56図、第76～82図が本住居跡出土と確認されたもの、第57図、第83～88図が本住居跡と平面的に重複して出土したものである。調査時に本住居跡出土と判断されたものは、曾谷式に属するものが多いようである。上層のものは晩期中葉のものまで含まれる。

土製円盤では、第192図1, 2、土偶では第199図4、第200図3, 15、第202図2、第205図1、耳栓では第210図1～8, 10が本住居跡に帰属する可能性がある。

石器では、打製石斧（第219図1, 3）、石皿（第228図5）、磨石（第231図1～5、第232図3）、石棒（第242図2）が出土している。

本住居跡は調査時の所見では、床面直上の遺物から判断して、後期中葉の所産と考えられていた。床面直上の遺物についての記録が無いため、詳細は不明であるが、調査時に本住居跡に属すると確認された土器の中には、後期後葉以降のものは少ないため、本住居跡は後期中葉の所産と考えられる。

第2号住居跡柱穴

P No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
深さ(cm)	48.5	26.5	15.0	25.1	63.0	9.5	32.5	26.0	22.5	17.5	11.8	15.2	26.0	18.4	30.5	35.0	22.0	42.0	40.0	15.0	不明
P No.	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39			
深さ(cm)	不明	不明	19.2	18.8	8.2	33.0	21.0	13.7	10.2	不明	20.3	9.5	27.6	14.2	11.0	11.8	4.9	2.2			

第2号住居跡（第41図）

オ-191-5, 10、オ-192-1, 6に位置する。規模は長軸が6.8m、短軸が5.9mを測る。本住居跡は、炉跡が検出された段階で住居跡と確認されたため、正確な平面形、壁高等は不明である。おそらく、隅円方形を呈していたと考えられる。第3, 4・9号住居跡、第4号土壇と重複している。調査時には新旧関係を捉えることはできなかった。本住居跡の柱穴No. 2, 10, 11は、調査時に第3号住居跡を構成する可能性もあるとされ、両者に含まれている。それぞれ第3号住居跡の柱穴No. 25, 23, 24に相当する。

本住居跡西側に入り口状の施設が見られる。出口側が開口する浅い溝によって、方形に区画されている。溝の内部には数個の柱穴が見られる。

中央やや西寄りに石囲炉が付設されている。垂角礫を径70cm程の円形に並べたもので、遺存状態は良好である。埋土の下部には、焼土が堆積している。礫はいずれもかなりの火熱を受け、風化が著しい。

土器は第58図1、第89図、第90図1～18が本住居跡に帰属すると確認されたもので、第58図2～6、第59図1～3、第90図19～35、第91図、第92図1～13が、出土位置が本住居跡と重なるものである。第89図3, 8は柱穴No. 1、第89図11は柱穴No. 2（第3号住居跡柱穴No. 25）、第89図9, 13, 21, 22, 30～32、第90図5, 7は柱穴No. 5、第89図15, 16, 27は柱穴No. 9、第89図7, 12、第90図9は柱穴No. 16、第90図12, 15は柱穴No. 17、第89図2, 10, 14, 18, 20、第90図10は柱穴No. 27、第90図16, 18は柱穴No. 28、第90図2は柱穴No. 30、第89図5は柱穴No. 32、第89図1は柱穴No. 33から、それぞれ出土している。

本住居跡と判断されたものは、後期中葉に属するものが多く、出土位置が重なるものには晩期中葉のものまでが含まれている。

土偶では第199図7、第201図13が本住居跡から、第195図3、第199図1、第201図11、第203図2が本住居跡と平面的に重複する。耳栓では第211図1～4が本住居跡と平面的に重複して出土している。その他の土製品では、第207図4, 6のミニチュア土器が本住居跡の範囲内から出土している。

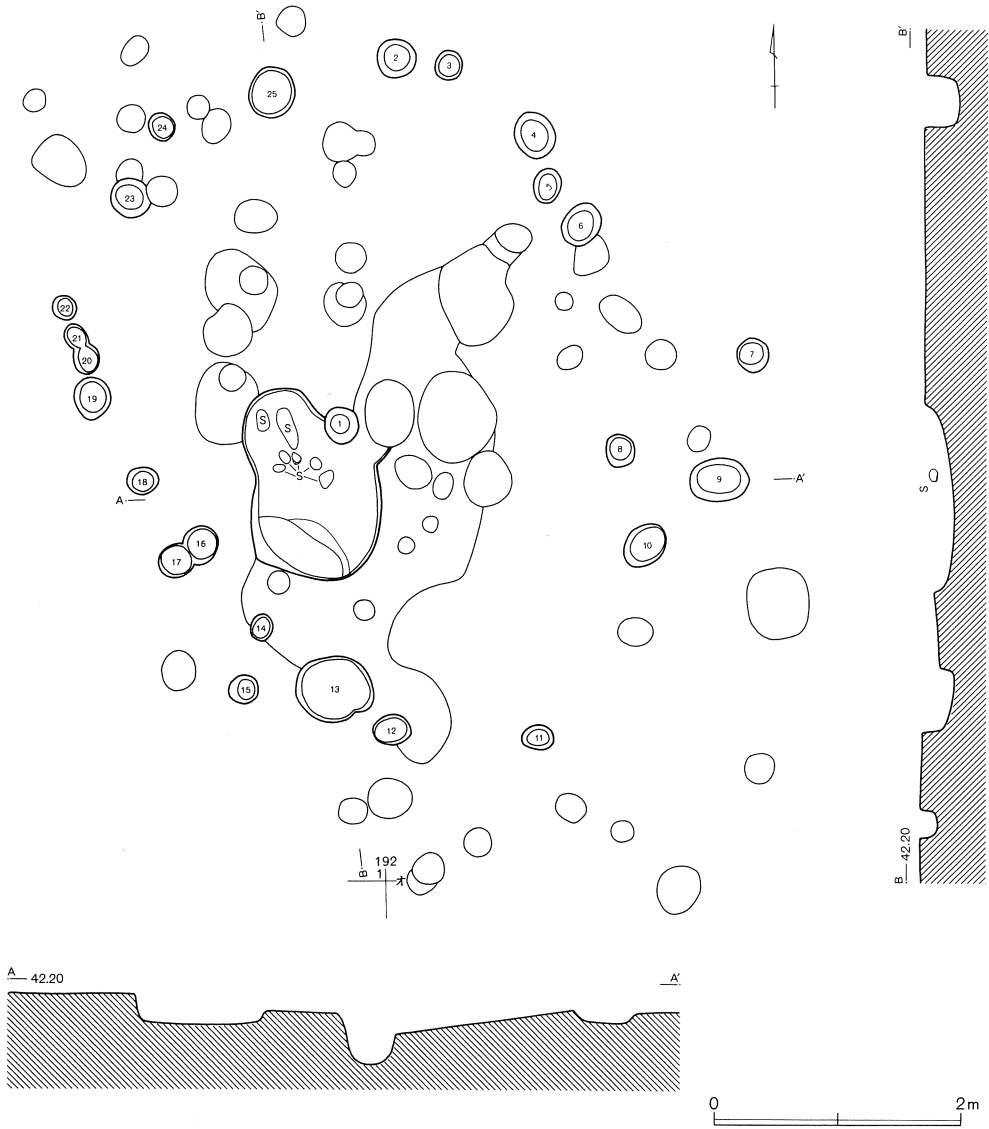
石器では、磨石（第235図1）、砥石（第251図3）が本住居跡から出土している。

本住居跡は、出土土器から見て、後期中葉加曾利B～曾谷式期の所産と考えられる。

第3号住居跡（第42図）

オ-191-5、オ-192-1グリッドに位置する。第2, 4・9号住居跡と重複関係にある。本住居跡は床面で住居跡と確認されたため、正確な平面形、壁高については不明である。確認された部分の規模は、長軸約5.4m、短軸約4.8mである。

柱穴の分布は、やや楕円形に近い。他の住居跡との重複が激しいため、本住居跡を構成する柱穴



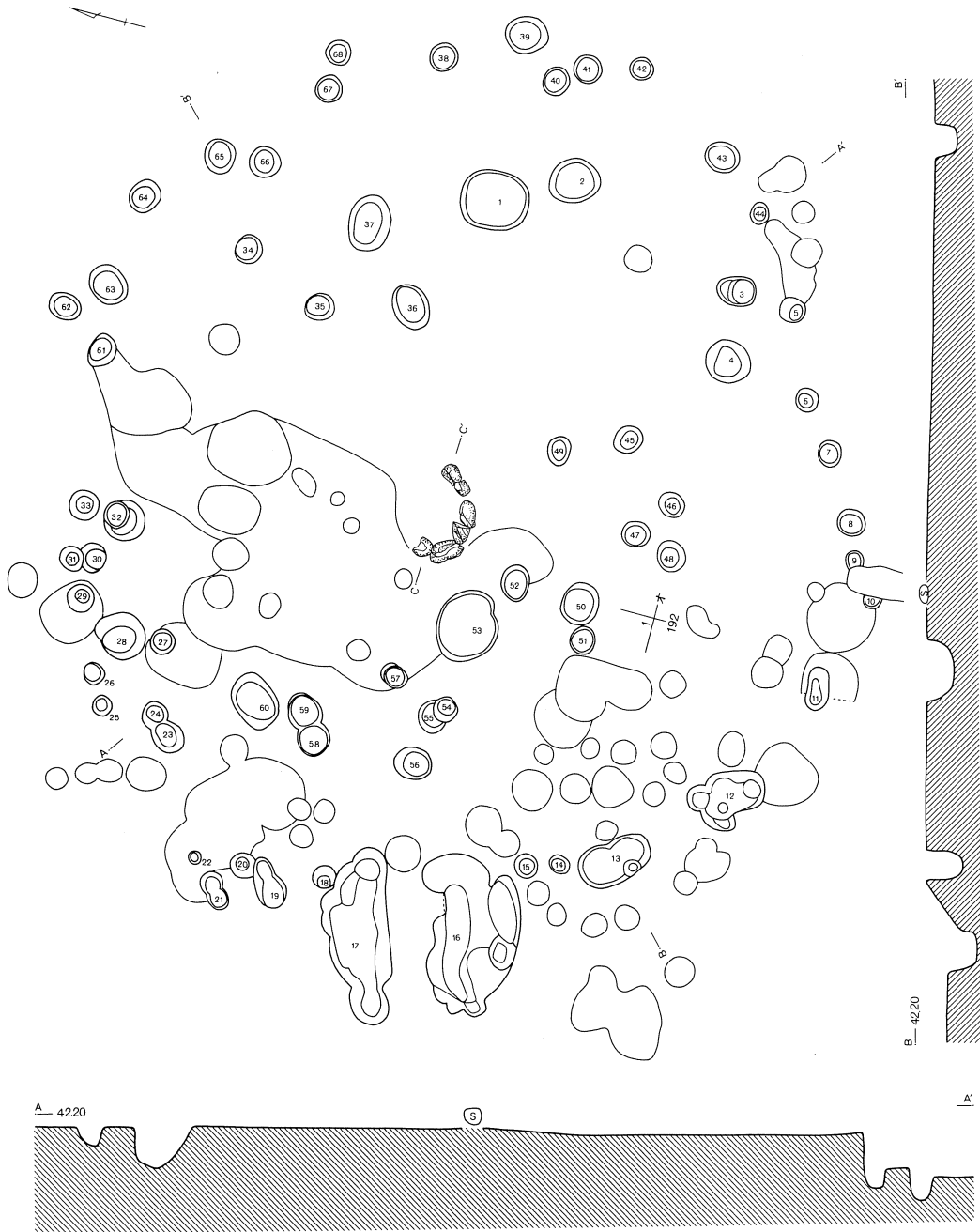
第42図 第3号住居跡

第3号住居跡柱穴

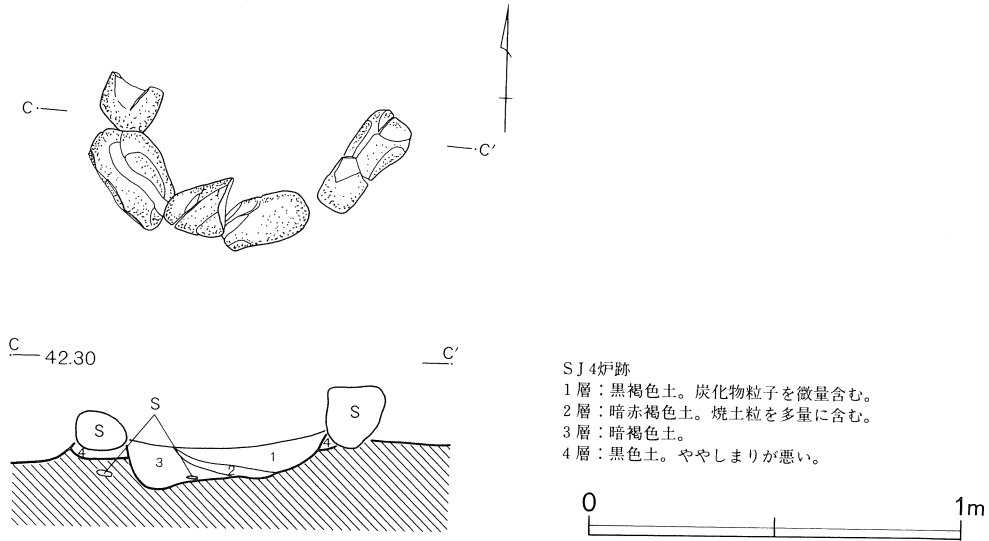
P No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
深さ(cm)	15.8	20.0	20.5	32.5	29.0	11.5	17.5	26.5	8.5	9.5	16.5	18.5	18.5	21.5	16.3	29.3	28.5	26.6	33.0	16.4	17.0	15.8	17.5	11.8	26.5

を明確にすることは難しい。第2号住居跡との柱穴の重複は前述の通りである。本住居跡の柱穴No. 5～17は、調査時には第4・9号住居跡を構成する可能性もあると判断されていた。それぞれ、第4・9号住居跡の柱穴No.62, 63, 66, 35, 37, 36, 49, 52, 53, 57, 54, 59, 58に相当する。

中央部に不整形の落込みが見られる。この落込み内部に、焼土が部分的に堆積しており、炉跡が



第43図 第4・9号住居跡



SJ4炉跡
 1層：黒褐色土。炭化物粒子を微量含む。
 2層：暗赤褐色土。焼土粒を多量に含む。
 3層：暗褐色土。
 4層：黒色土。ややしまりが悪い。

第44図 第4・9号住居炉跡

第4・9号住居跡柱穴

P No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
深い(cm)	14.0	18.0	8.0	14.0	6.8	21.0	11.0	19.5	12.1	15.0	27.2	22.3	16.4	15.4	23.3	33.8	18.4	21.1	24.0	11.0	2.5	22.4	9.6
P No.	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46
深さ(cm)	15.2	9.8	21.0	25.0	23.0	20.9	19.2	25.0	26.5	6.8	32.5	26.5	9.5	8.5	21.5	26.0	26.0	25.5	22.5	16.0	16.5	22.0	9.0
P No.	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	
深さ(cm)	17.0	17.0	16.5	16.6	14.0	18.5	18.5	16.3	26.8	32.1	21.5	28.5	29.3	27.3	13.0	29.0	11.5	31.5	不明	17.5	24.0	20.5	

破壊されたものと考えられる。周溝は確認されなかった。

本住居跡は、他の住居跡との重複が激しく、本住居跡のみに確実に伴う遺物は確認できない。他の住居跡との重複部分から出土した遺物は、第59図4、第60～62図、第92図14～26、第93～95図である。後期後葉から晩期にかけてのものが多く。

土偶では第203図4、5、耳栓では第211図5、6が本住居跡と他の遺構が重複する部分から出土している。

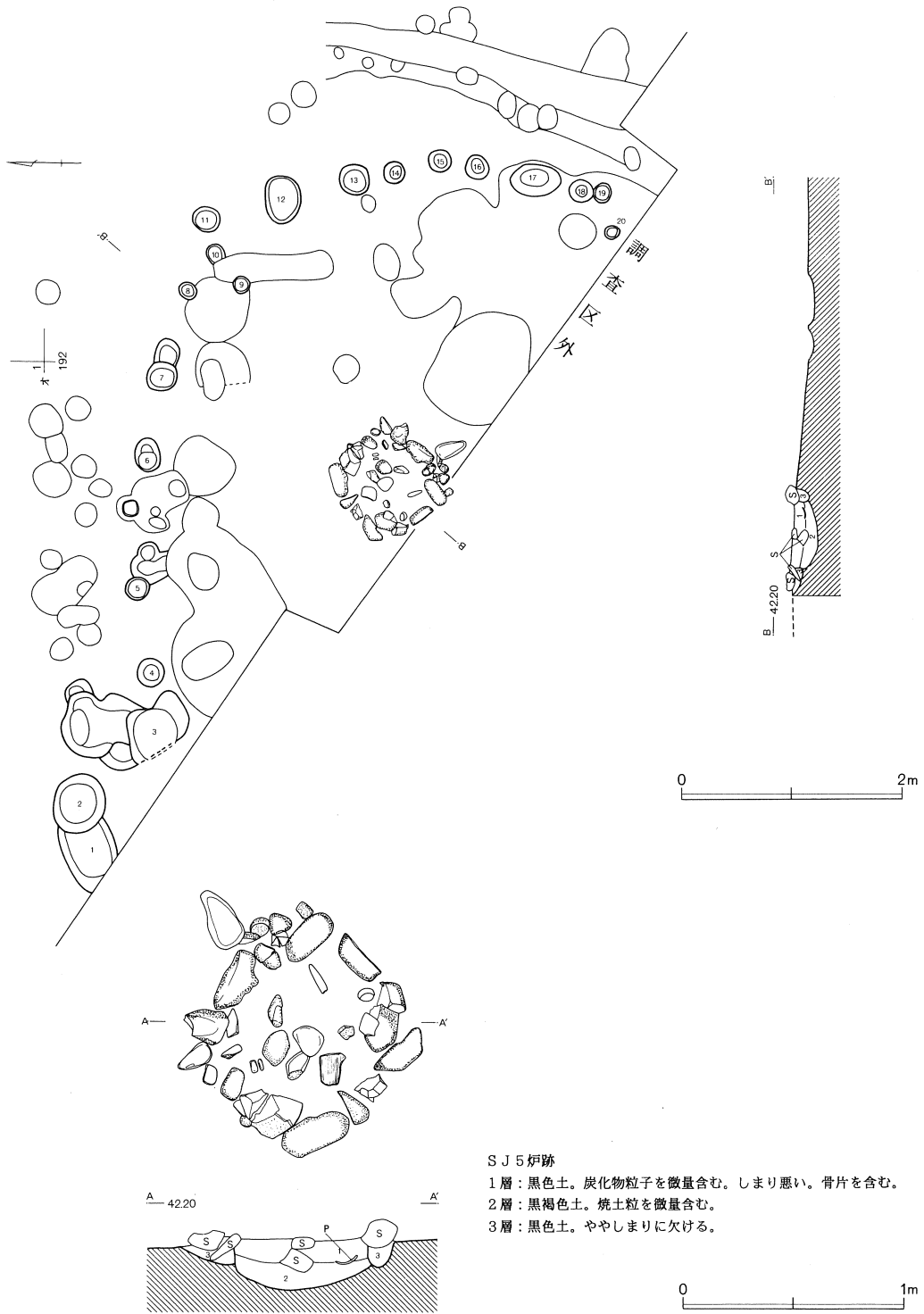
本住居跡の営まれた時期は、晩期前葉と考えられる。

第4・9号住居跡（第43、44図）

オ-192-1、オ-191-5グリッドに位置する。第2、3、5、8号住居跡と重複関係にある。調査時には一軒の住居跡と判断されていたが、柱穴の配置から重複と判断した。西側の住居跡を第4号、東側の住居跡を第9号とする。炉跡が検出された段階で住居跡と確認されたため、正確な平面形態、壁高は不明である。規模は第4号住居跡が6.5m×7.0m、第9号住居跡は5.5m×7.0mである。

中央部には石囲炉が付設されている。礫は南側のみ遺存している。径80cm程の円形を呈していたと考えられる。埋土には焼土が多量に堆積していた。第4号住居跡の西端に入口状の施設が見られる。長さ1.5m程の溝状の掘り込みが2条並列している。

本住居跡は他の住居跡との重複も激しく、柱穴の帰属を判断することは困難である。第3号住居



第45図 第5号住居跡

第5号住居跡柱穴

P No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
深さ(cm)	25.6	33.7	31.0	33.0	5.8	22.7	19.7	15.0	15.0	5.0	12.1	17.0	20.3	22.0	14.0	19.9	11.5	9.9	10.5	7.0

第6号住居跡柱穴

P No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
深さ(cm)	38.5	9.5	27.6	13.5	11.9	18.8	8.0	10.0	11.0	8.1	24.8	24.8	15.7	9.0	25.0	3.3	30.3	28.1	2.6	1.4	6.2

跡との重複関係は前述の通りである。

第97, 98図は本住居跡、または本住居跡と第3号住居跡の両者に帰属する可能性のある土器である。第97図12, 13, 40, 41、第98図23は、本住居跡炉跡下部より出土したものである。第98図16は柱穴No. 2、第98図2は柱穴No. 4、第99図1, 2, 4, 5は柱穴No.13、第97図3, 5, 9, 22, 31、第98図4, 21, 22は柱穴No.17、第98図11は柱穴No.34、第97図33、第98図1は柱穴No.36（第3号住居跡柱穴No.10）、第98図19は柱穴No.38、第98図14, 15は柱穴No.40、第97図4, 10、第99図8, 26は柱穴No.50、第97図7, 14, 16, 20, 24, 32, 34~36、第98図5, 7, 10, 35は柱穴No.53（第3号住居跡柱穴No.13）、第97図2, 23、第98図18は柱穴No.54（第3号住居跡柱穴No.15）、第61図2は、No.58（第3号住居跡柱穴No.17）、第97図29、第98図25は柱穴No.59（第3号住居跡柱穴No.16）、第97図1, 17は柱穴No.60、第97図6、第98図6は柱穴No.61、第98図30は柱穴No.62（第3号住居跡柱穴No.5）から、それぞれ出土している。後期中葉に属するものが多い。

第62図4~5、第63図1、第96図は本住居跡と平面的に重複して出土したものである。晩期前葉のものが多くを占める。

土偶では第201図14、耳栓では第211図11, 14、その他の土製品では第207図11の手燭形土製品が本住居跡の範囲内から出土している。

本住居跡は第4住居跡が加曾利B3式~曾谷式期の所産と考えられるが、第9号住居跡については不明である。両住居跡廃絶後、晩期前葉の遺物が堆積したと考えられる。

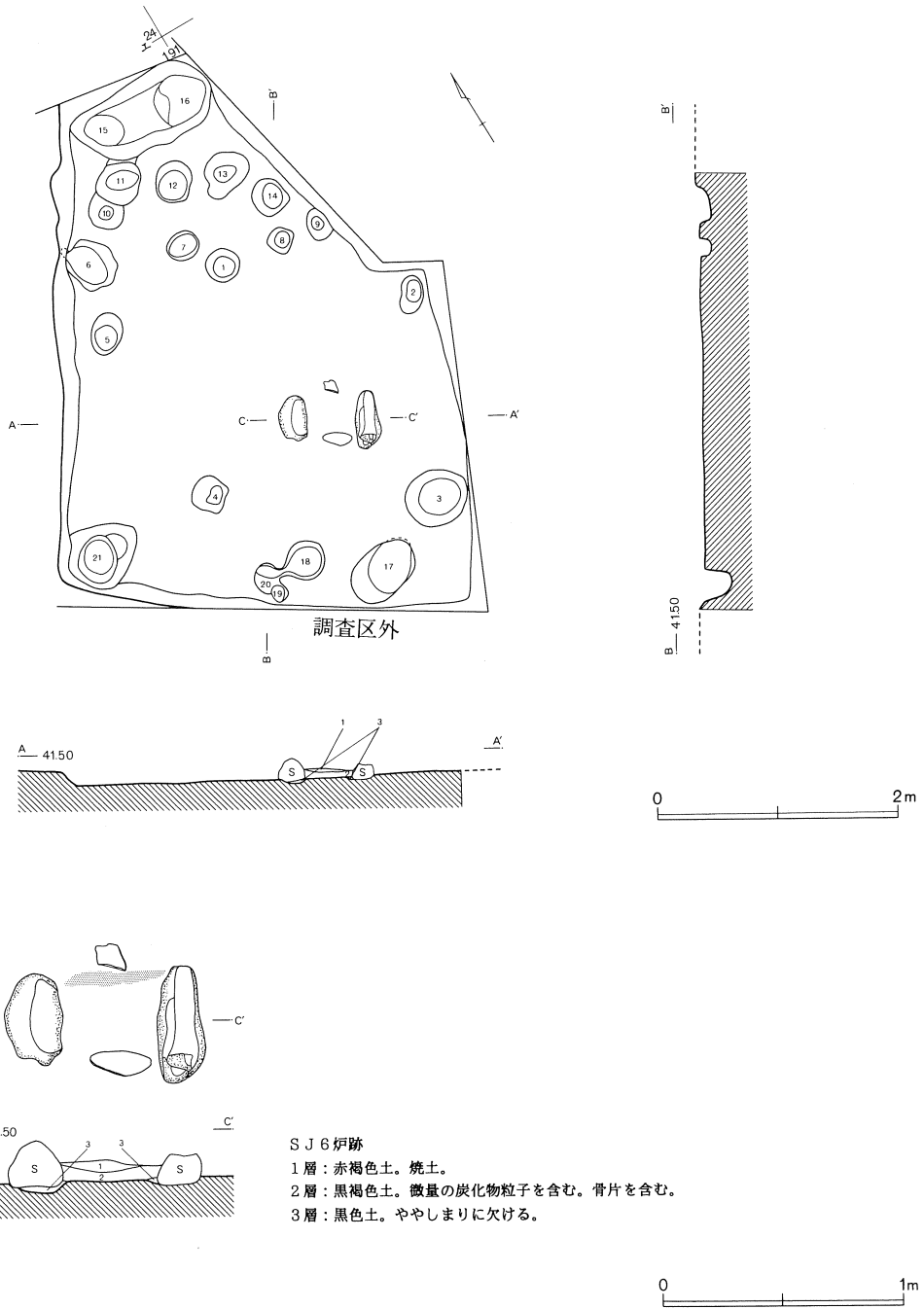
第5号住居跡（第45図）

エ-191-25、エ-192-21グリッドに位置する。大半が調査区外にかかるため、全容は明らかにし得ない。また、本住居跡も炉跡が検出された段階で住居跡と確認されたため、壁高は不明である。平面形は恐らく、方形、または隅丸方形を呈すると考えられる。規模は長軸が6m以上になる。周溝は検出されなかった。

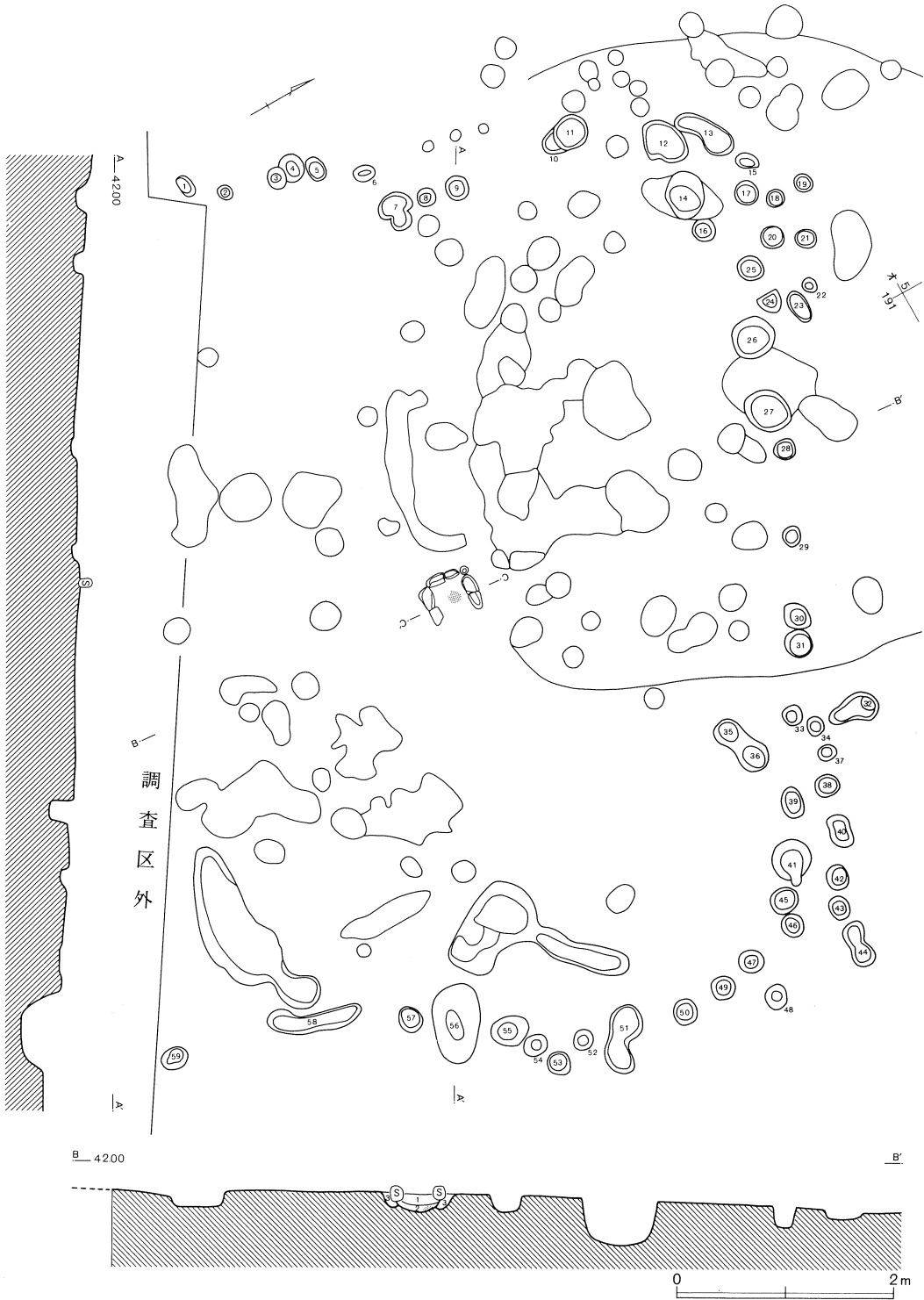
柱穴は直線的に並んでいる。主柱穴は確認されなかった。No. 1~3の柱穴が入り口部を構成する可能性がある。

中央部付近に石囲炉が付設されている。約110cm×100cm程の円形を呈する。掘り込みは深い、焼土の堆積は見られない。礫はいずれも火熱を受けており、脆くなっている。

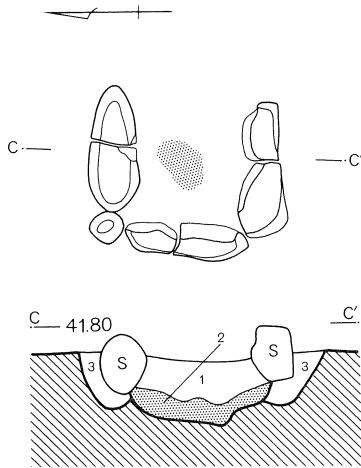
第63図3, 4が本住居跡に帰属すると調査時に判断されたもの、第99図3は柱穴No.57から、第63図5, 6、第64図1, 2、第99図19~27が、本住居跡の範囲内から出土したものである。耳栓では第211図8, 9が本住居跡に属する可能性がある。



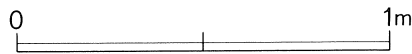
第46図 第6号住居跡



第47図 第7号住居跡



SJ7炉跡
 1層：黒褐色土。炭化物粒子を微量含む。
 2層：暗赤褐色土。焼土粒を多く含む。
 3層：黒色土。ややしまりに欠ける。



第48図 第7号住居跡炉跡

第7号住居跡柱穴

P No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
深さ (cm)	8.3	11.5	12.0	7.4	9.6	13.2	5.4	5.4	9.8	6.5	26.6	3.5	11.3	8.8	9.4	29.6	6.9	22.0	8.6	6.5
P No.	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
深さ (cm)	12.6	3.5	3.4	9.9	10.0	17.3	17.9	15.3	11.0	24.5	34.9	12.4	16.5	12.9	18.0	27.4	8.9	13.0	20.0	16.7
P No.	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	
深さ (cm)	13.3	9.0	7.9	10.3	12.9	13.2	16.0	18.4	17.2	19.0	17.9	9.5	8.0	8.0	16.7	34.5	11.9	6.5	10.2	

石器では、石皿（第228図4）、磨石（第233図5）、石棒（第244図1）が本住居跡から出土している。

本住居跡の時期は、明確にし得ないが、調査時には安行3a式期と考えられていた。

第6号住居跡（第46図）

エ-191-19グリッドに位置する。東半部が調査区外にかかるため、全容は明かではない。確認された範囲では、1辺が4.5mである。壁高約15cmを測る。恐らく方形を呈すると考えられる。第7号住居跡の一部を破壊しているようである。

中央部に石囲炉を有する。礫はかなり火熱を受けており、風化、破損している。炉跡内には焼土が堆積しており、骨片も検出された。

No. 1, 3が主柱穴を構成すると考えられるが、組み合わせは不明である。北東隅に柱穴が集中している。周溝は検出されなかった。

第64図3、第111、112図は本住居跡出土土器である。後期中葉から晩期前葉にかけてのものが多くを占める。

土製円盤では第192図9、10、耳栓では第212図4、5、石器では打製石斧（第220図1）、磨石（第234図1～7）、石棒（第244図3）、砥石（第251図2、5）が本住居跡より出土している。



第49図 第8号住居跡

第8号住居跡柱穴

P No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
深さ(cm)	26.4	18.5	15.9	14.0	11.1	25.7	1.4	24.0	23.8	33.6	24.2	27.2	16.0	19.5	28.5	20.2	32.3	19.5	12.7	25.8	18.6	30.6	30.7	8.6	4.4	6.5
P No.	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52
深さ(cm)	15.4	4.8	14.5	3.0	19.0	8.0	6.8	14.0	16.5	24.0	24.4	43.8	22.0	15.0	18.6	2.0	26.0	15.2	25.0	19.3	6.0	10.0	7.3	9.5	16.0	45.0

本住居跡は、調査時には床面出土土器より、安行3 a 式期の所産と考えられていた。

第7号住居跡（第47，48図）

エ-191-24，25グリッドに位置する。一部が調査区外に伸びるため、全容は明かではない。確認された範囲の規模は、8.6m×6.4mを測る。本住居跡は床面で住居跡と確認されたため、壁高は不明である。調査時には第8号住居跡よりも新しいと判断されていた。また、柱穴の並びから、建て替えの可能性もあろう。柱穴No.51～56と、その内側の落込みが入口を構成していたと考えられる。

平面形態は、方形を呈していたと考えられる。中央部に石囲炉が付設されている。炉は大きめの礫を方形に並べて作られており、一端が開口している。炉跡内の埋土下部には焼土が堆積している。

第103図6～10は本住居跡に帰属すると調査時に判断されたもの、第64図4～6、第103図11～13は、本住居跡に帰属する可能性のあるものである。第64図7は、第3，4，9号住居跡のものと接合している。

第204図の土偶は、本住居跡の床面から出土している。耳栓では第212図7，8，10が本住居跡に帰属する可能性がある。土製品では、第207図1、第208図5が本住居跡に帰属する可能性がある。石器では石棒（第244図4）が本住居跡から出土している。

本住居跡は、調査時には安行3 a 式期の所産と考えられていた。床面直上の遺物の記録がないため、細かい時期認定は困難であるが、住居の形態から、晩期前葉の所産と考えられる。

第8号住居跡（第49図）

エ-191-24，25、オ-191-4，5グリッドに位置する。本住居跡は、わずかながら壁が確認されている。平面形態は円形を呈する。規模は6.6m×4.7mである。柱穴No.1～3，5，6，15が支柱穴を構成すると考えられる。南側に入り口を構成する柱穴群と溝が見られる。入り口の構成からすると、拡張があった可能性が強い。

中央部と、北東隅に炉跡が認められる。いずれも床面がわずかに掘り凹められ、焼土化している。中央部の炉跡は、第7号住居跡の柱穴に破壊されている。北東隅のものは本住居跡の床面よりも高い位置で検出されたもので、本住居跡には伴うかどうか不明である。本住居跡に伴わないとすれば、この炉跡が帰属すべき住居跡が、本住居と重複して存在したことになるが、調査時には確認できなかった。

第104図19～28、第105図1～9は、本住居跡出土、第65図1～4、第105図10～21は本住居跡に帰属する可能性のあるものである。

耳栓では第212図14、石器では打製石斧（第220図3）、石棒（第245図2）が本住居跡に帰属すると調査時に確認されたものである。

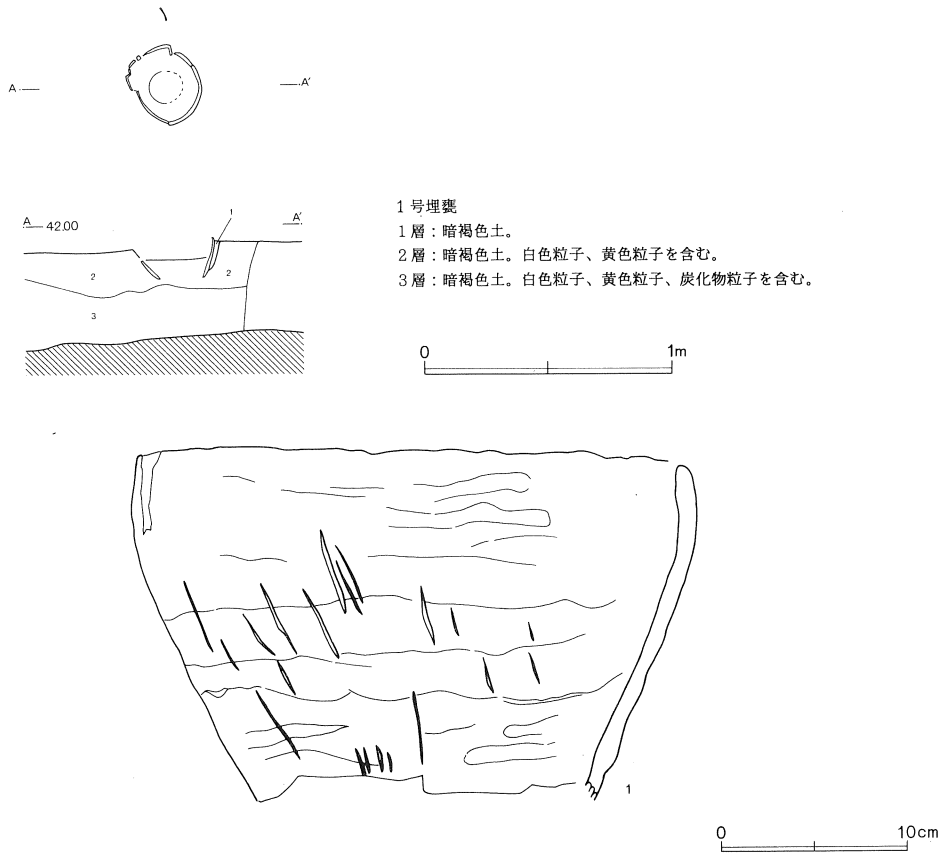


第50図 第10号住居跡

第10号住居跡柱穴

P No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
深さ(cm)	21.5	19.6	14.2	6.3	26.5	27.1	16.2	16.8	12.4	27.7	7.2	11.5	12.2	13.4	33.3	8.7	14.2	23.1	6.5	6.7	8.3
P No.	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42
深さ(cm)	14.6	8.9	10.3	6.5	8.3	7.7	4.7	27.5	10.5	7.8	7.9	6.5	8.7	11.2	15.0	12.4	8.9	14.1	6.2	6.6	17.0

明確な埋土を持たないため、本住居跡の時期を明らかにすることは難しいが、本住居跡出土と調査時に判断された土器は、後期後葉のものが多く、本住居跡もそれに近い時期に営まれたものと考えられる。



第51図 第1号埋甕及び出土遺物

第10号住居跡（第50図）

オ-192-19グリッドに位置する。張り出しを持つ不正円形を呈する。規模は5.7m×2.6mを測る。壁は確認されたが、掘り込みはごくわずかであり、実際の掘り込み面は現状よりも高いと考えられる。西側の壁際に柱穴が集中して見られる。炉跡は検出できなかった。

第65図5、第105図22～31は、本住居跡出土と調査時に確認された土器である。また磨石（第234図8）が検出されている。出土土器から、本住居跡は曾谷式期の所産と考えられる。

イ 埋甕

第1号埋甕（第51図）

オ-191-5, 10グリッドに位置する。底部が欠損する無文の深鉢形土器である。埋甕内部の土層

の特徴は不明である。

口縁部は緩やかに内湾し、口唇端部は面取りされていない。内面はナデ調整のみ、外面はケズリ痕が全面に及ぶ。内外面に幅1～1.5cm程の粘土紐積み上げ痕を残している。炭化物の付着は見られない。

ウ 土壙 (第52図)

第1号土壙

オ-192-19グリッドに位置する。平面形は不整形円形を呈する。長軸0.7m、短軸0.2m、掘り込みは約20cmを測る。南東隅にピットを伴う。第106図1、2が本土壙より出土している。1は口縁部が屈曲する鉢形土器である。口縁部は無文である。摩耗が著しい。2は舟形を呈すると考えられる。口縁部が屈曲し、屈曲部は無文で、ミガキが施されている。胴部はケズリ痕のみ観察される。口縁部内面の一端に隆帯が土手状に貼付されている。曾谷式に属すると考えられる。

第2号土壙

オ-192-19グリッドに位置する。やや歪んだ楕円形を呈する。主軸方向はN-42°-Eである。長軸0.7m、短軸0.5m、掘り込みは約20cmを測る。北東端にピットを伴う。遺物は検出されなかった。

第3号土壙

オ-192-14に位置する。平面形態は不正円形を呈する。主軸方向はN-32°-W、規模は1.2m×0.9mである。掘り込みは約15cm程で、北東隅にピットを伴う。第106図3が本土壙より検出されている。平縁で、口縁部が屈曲する鉢形土器である。摩耗が著しい。

第4号土壙

オ-191-10グリッドに位置する。平面形態は長方形を呈する。西側に2箇所張り出しが見られる。第2号住居跡と重複している。主軸方向はN-9°-E、規模は4.2m×1.2mを測る。

埋土から多量の土器が検出されている(第66、67図、第68図1、第106図4～25、第107図1～15)。後期中葉から後葉にかけてのものが多くを占める。

第66図1は、平縁の台付鉢である。口縁部がわずかに外傾する。口唇部断面は丸く、外面の口唇部直下に浅く括れている。口縁部内面には緩やかな稜が見られる。外面はケズリ後、部分的にナデ調整が施されている。2は口唇部が肥厚する大形の深鉢である。外面はケズリ、内面はケズリ後、軟質工具によってナデ調整が施されている。3は無文の深鉢である。胴部は内湾し、口縁部はわずかに直立気味に立ち上がる。口唇部が肥厚する。ケズリ調整後、部分的にナデ調整が施されている。

第67図1も無文の深鉢である。口唇部は肥厚する。外面はケズリ後、部分的にミガキ調整が施されている。内面はナデ後、口縁部は横方向、胴部は部分的に斜め方向にミガキが施されている。2も無文で口唇部が肥厚する深鉢である。口縁部の隆帯上には部分的に指頭圧痕が見られる。口唇部

端面はやや内傾する。隆帯の直下は丁寧になでつけられている。外面はケズリ後、部分的にミガキが施されている。内面はナデ調整である。口縁部直下に補修孔が見られる。3は平縁の鉢である。口縁部は屈曲して、わずかに内傾する。口唇部端面は外傾する。屈曲部に連続的な刻みが施され、胴部には羽状の条線が施されている。外面は、口縁部はミガキ、胴部はケズリ調整、内面は横方向のケズリ後、部分的にミガキが施されている。

第68図1は、胴部が括れる平縁の深鉢である。口唇部直下に稜を有する。口縁部内面には幅の広い沈線が巡る。外面はケズリ後部分的にミガキ、内面は軟質工具によるナデ調整が施されている。

第106図11は横断面が肥厚する突起を持つ鉢、13, 14, 18は口縁部が屈曲する平縁の鉢である。13は屈曲部にLR縄文が施されている。14は無文、18はRL縄文が施されている。15, 16は平縁の鉢で、口唇部に突起が付される。外面には平行沈線が施されている。17は安行2式の鉢であろう。19は平縁の鉢で、おそらく胴部が括れる器形を持つと考えられる。弧線の連結部に縦長の粘土粒が貼付されている。地文は0段多条のLR、または無節のLrと考えられる。第116図20～25、第117図1～4は口縁部が外傾する平縁の鉢である。第116図20, 23～25は口縁部内面に沈線を有する。23, 25は数条の条線がまとまったものが縦方向に施されている。第117図1, 2は斜め方向の条線が施されている。1は口唇部が肥厚するため、波状縁の可能性もある。第117図5～12は深鉢である。5, 6は隆帯上に指頭圧痕が施されている。外面の調整は、いずれもケズリ後、部分的にミガキ調整が施されている。

第69図5はほとんどが第15号土壙出土の破片であるが、本土壙出土の破片1点と接合している。

第200図4の土偶の脚部も本土壙から出土している。

遺物は本土壙に伴うものと考えられ、加曽利B2式～曾谷式の所産と考えられる。本土壙の性格は不明である。

第5号土壙

オ-191-9グリッドに位置する。第6号土壙と重複している。平面形は不整円形を呈し、規模は1.3m×0.9m、掘り込みは約40cmである。第107図16～28が本土壙から出土している。曾谷式に含まれるものが多い。第107図21は瓢形土器の括れ部直下の破片である。地文はLR単節である。28は注口で、注口部接続部付近にLR縄文が施されている。石器では石皿（第229図4）、磨石（第234図6, 9）、石棒（第246図2）が出土している。

第6号土壙

オ-191-10グリッドに位置する。第5号土壙と重複している。平面形態から、複数の土壙が重複していると考えられる。掘り込みは約55cm程である。第108図1～14が本土壙より出土している。4は、頸部が外傾しているが、器形は不明である。弧状の沈線が施され、その間が掘り凹められている。肩部に粘土粒が貼付されている。5は波状縁の深鉢である。粘土粒の上下は三叉状に掘り凹められている。地文はLR単節である。6, 7は口唇部が肥厚する深鉢、8～11は折返し口縁の深鉢である。

第7号土壌

オ-191-15グリッドに位置する。平面形態は方形を呈する。長軸の方向はN-5°-W、規模は0.9m×0.6m、掘り込みは約50~60cmである。本土壌からは、第68図2、第108図15,16が検出されている。第68図2は、胴部が括れ、口縁部は屈曲して内傾している。口唇部から口縁部屈曲部にかけて、突起が4単位（3単位現存）貼付される。口唇部には刻みが連続的に施され、屈曲部には隆帯が巡り、隆帯上には刺突が施されている。胴部上半には矢羽状の沈線が施され、下半は無文である。曾谷式の所産であろう。15は無文で小波状口縁の浅鉢である。口縁部に緩やかな屈曲があり、体部はケズリが施されている。

本土壌は、調査時には墓墳の可能性が指摘されていたが、埋土に関する記録がなく、詳細は不明である。

第8号土壌

オ-191-10グリッドに位置する。やや歪んだ長方形を呈する。規模は1.1m×0.6m、長軸方向はN-40°-Wである。掘り込みは約45cm程である。第108図17の底部破片が出土している。

第9号土壌

オ-191-15グリッドに位置する。平面形態は方形を呈する。長軸方向はN-90°-E、規模は1.0m×0.8mである。掘り込みは約35cmである。本土壌からは第69図1~3、第108図18~26が出土している。第69図1は、口唇部が肥厚する平縁の深鉢である。隆帯上には指頭圧痕が断続的に見られる。口縁部内面はわずかに肥厚している。外面はケズリ後、部分的にナデ調整が施され、内面は軟質工具で丁寧にナデ調整が施された後、部分的にミガキが施されている。2は無文の鉢で、口唇部がわずかに肥厚している。3は台付鉢の、脚接合部の破片である。2条の沈線間に刺突が施されている。

第108図18,19は同一個体である。波状縁で、口縁部にLR縄文が施され、頸部には細い沈線で、弧状のモチーフと斜め方向の条線が施されている。20は波状縁の波頂部の破片である。縦長の隆帯が貼付され、隆帯上に刻みが連続的に施されている。口縁部に沿って帯縄文が見られる。21は注口、または壺形土器と考えられる。22,23は口縁部が直線的に外傾する平縁の深鉢、25は安行1式の紐線文土器、26は口唇部が肥厚する深鉢である。曾谷式~安行1式であろう。

第10号土壌

オ-191-15グリッドに位置する。平面形は不整形円形を呈する。規模は0.8m×0.7m、掘り込みは約35~40cmである。第108図27が本土壌から出土している。

第11号土壌

オ-192-11グリッドに位置する。第12号土壌と重複している。不整形円形を呈する。長軸は1.4mである。第109図1~4が本土壌より出土している。1は頸部が外傾する算盤玉状の鉢形土器である。加曾利B3式であろう。

第12号土壙

オ-192-11グリッドに位置する。第11号土壙と重複する。不整形円形を呈する。規模は1.1m×0.6m程である。本土壙からは遺物は検出されなかった。

第13号土壙

オ-191-10グリッドに位置する。やや歪んだ長方形を呈する。長軸方向はN-26°-E、規模は1.1m×0.7m程、掘り込みは約40cmである。第109図5が本土壙より検出されている。大波状口縁の深鉢で、波頂部が欠損している。口縁部内面は肥厚し、外面には2条の沈線と、隆帯が施されている。内外面ともよく磨かれている。

第14号土壙

オ-191-9グリッドに位置する。調査区外にかかるため、全容は明かではない。平面形態から、複数の土壙が重複している可能性がある。規模は長軸1.1mを測る。掘り込みは約40cm程である。第69図4、第109図6が本土壙より出土している。

第69図4は、算盤玉形を呈する鉢の口縁部と考えられる。加曾利B3式であろう。

第15号土壙

オ-191-4、5、オ-191-9、10グリッドに位置する。細長い楕円形を呈する。長軸方向はN-40°-W、規模は3.3m×1.1m、掘り込みは10~20cmである。本土壙は、規模、形態とも第4号土壙に類似し、位置も近い。

土器では、第69図5、6、第70図、第71図1、2、第109図7~21、第110図1~16、石器では磨石(第234図10、11)が本土壙より出土している。

第69図5は前述の通り、本土壙出土の破片と、第4号土壙出土の破片1点が接合している。口縁部が屈曲してやや内傾する平縁の深鉢である。胴部上半に矢羽状の沈線が施されている。6は6単位の波状口縁を持つ鉢。口縁部内面が肥厚している。胴部は括れ、下半は欠損している。第70図1は小形の注口土器で、口縁部、注口部が欠損している。頸部は直立し、肩が張る器形である。頸部、肩部には平行沈線が重畳し、沈線間には刺突が加えられている。文様帯には円形の粘土粒が縦位に並ぶものが、器面に4単位施されている。底部外面には、木葉の圧痕が見られる。2は最大径部が大きく張る器形で、頸部、胴部下半以下が欠損している。破片の上端には、接合痕が観察され、外傾、または直立気味に立ち上がる頸部があったと考えられる。肩部にはへら描きの沈線文で、不規則な曲線的モチーフが描かれている。モチーフは2本1組、または3本1組で描かれる。破片の下端には平行沈線が施されている。注口、または壺であろう。後期中葉に属すると考えられる。3は、口唇部が肥厚する無文の深鉢である。第70図4、第71図2は口縁部が屈曲する深鉢で、口縁部に縄文が施される。前者はやや内傾、後者は直立気味に立ち上がる。第70図4はLr縄文である。第71図2はLr、または前々段反撚のLRrと思われる。第71図1は同じく口縁部が屈曲するが、無文の深鉢である。

第109図17は口縁部が屈曲する波状縁の深鉢である。波頂部に粘土粒が2個貼付され、2条の沈線が巡る。口縁部には前々段反撚のLRr縄文が施されている。胴部には斜め方向の条線が施されている。

出土土器は加曾利B2式～曾谷式期のものが多くを占める。また第4号土壙との接合例もあり、両者が埋没する時期は近接していたと考えられる。

第16号土壙

オ-191-4グリッドに位置する。調査区外にかかるため、全容は明かではない。確認された範囲の規模は、長軸が1.1mである。本土壙からは、第71図3、第72図2、第110図7、8が検出されている。第71図3は口縁部に屈曲を持つ平縁の深鉢である。無文である。第72図1は屈曲する口縁部に2条の沈線を有する。上側は波状、下側は直線的に口縁を巡る。沈線の波頂部にはボタン状の突起が貼付されている。地文はLR縄文である。第110図7は屈曲する口縁を有し、口唇部と屈曲部に突起が施されている。口縁部には弧線が、地文にはLR縄文が施されている。8は矢羽状の条線が施される波状縁の深鉢である。

第17号土壙

オ-191-24グリッドに位置する。北東部分は攪乱を受けているようである。掘り込みは約40cmほどである。第72図2、第110図19～21が本土壙より検出されている。第72図2は大洞系の浅鉢である。口縁部に3条の平行沈線が引かれ、下端の沈線が文様帯を区画している。文様帯以下は無文である。文様帯内のモチーフは、欠損部分は不明であるが、区画文（藤沼 1983）の崩れたものと考えられる。沈線は施文後磨かれてはいるが、歪みが著しい。地文は直前段3本撚のLR縄文で、条、節とも細かいものである。充填縄文と考えられる。内外面には炭化物の付着がみられる。大洞C₂式前半に併行するものと考えられる。

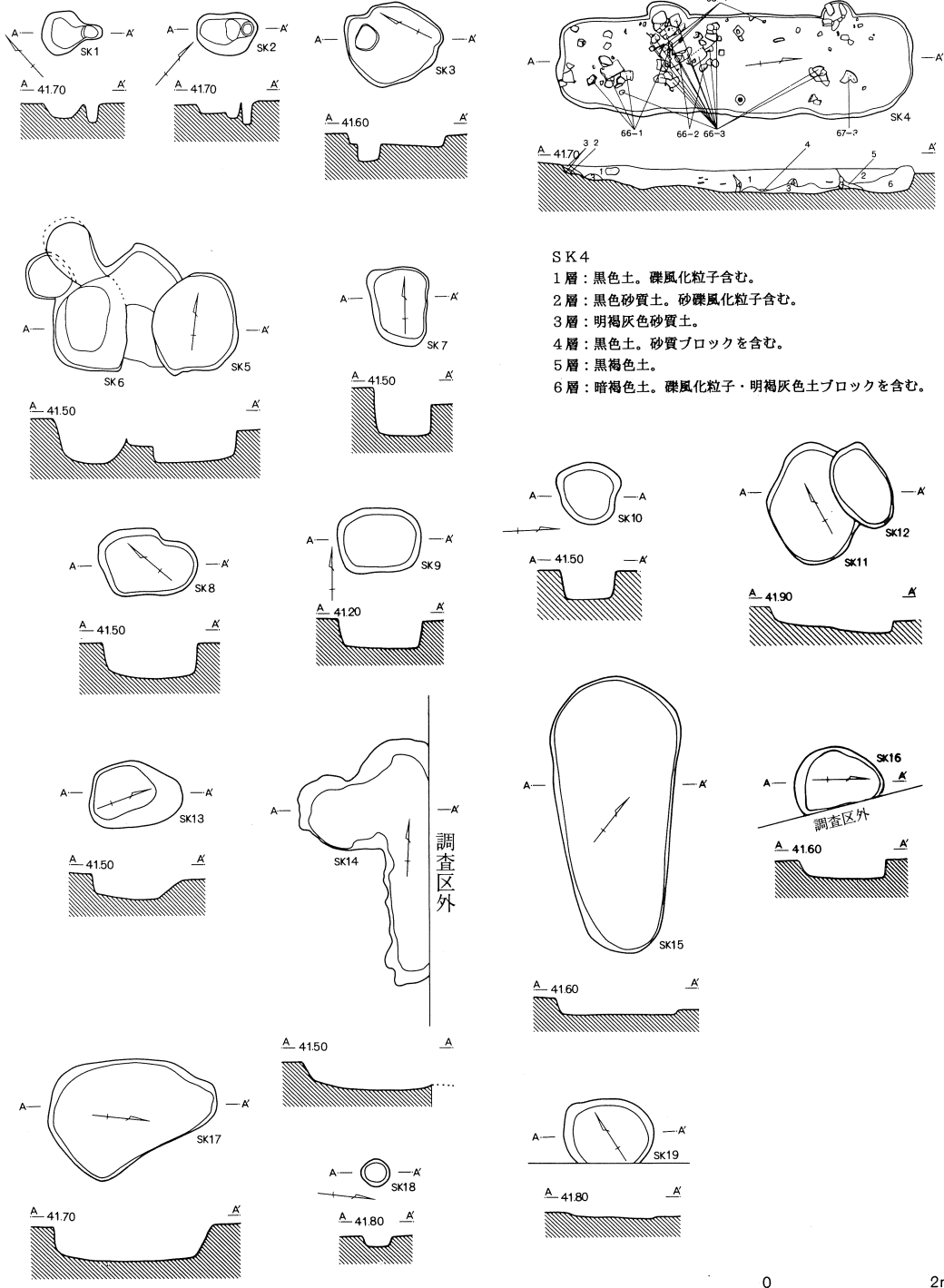
第110図19は2条の隆帯を持つ深鉢、20は口唇部が肥厚する深鉢である。21は口唇部に突起を持つ平縁の深鉢である。やや深めの沈線で、モチーフが描かれているが、構成は不明である。

第18号土壙

エ-191-25グリッドに位置する。0.4m×0.3mの円形を呈する。第110図22～25が本土壙より検出されている。25は大洞系の浅鉢で、口唇部にはやや彫刻的な刻みが施されている。文様帯内の無文部は、やや彫刻的な手法によって描かれている。地文は直前段3本撚のLRである。大洞C₁式に併行すると考えられる。

第19号土壙

エ-191-25、エ-192-21グリッドに位置する。調査区外にかかるため、全容は明かではないが、楕円形を呈するようである。長軸は1.1mを測る。本土壙からは遺物は検出されなかった。



- SK 4
- 1層：黒色土。礫風化粒子含む。
 - 2層：黒色砂質土。砂礫風化粒子含む。
 - 3層：明褐色砂質土。
 - 4層：黒色土。砂質ブロックを含む。
 - 5層：黒褐色土。
 - 6層：暗褐色土。礫風化粒子・明褐色土ブロックを含む。

第52図 土壌

エ ピット (第53図)

B区には住居跡を構成する柱穴の他に、組み合って遺構を構成する可能性の低い柱穴がいくつか存在する。土壌との区分は明確ではなく、形態的特徴からすれば土壌に含められるものもあるが、調査時に柱穴として記録されたものは、「ピット」としてまとめて扱う。ここでは、遺物の出土しているもののみ概述する。

第2, 6～8号ピット

オ-191-5, 10, オ-192-6, 11グリッドに位置する。隣接しているが、相互の関係は不明である。第6～8号は深さ20～30cmと浅いものである。第2号は深さ70cmを測る。

第2号ピットからは第111図1～6が出土している。1は口縁部が内湾する鉢、口縁部は無文で、頸部に刺突が施されている。2, 3は口唇部が肥厚する深鉢、口唇部に指頭圧痕が見られる。口縁部は直立する。2には斜め方向の条線が認められる。4は内面に1条の沈線が認められる。成形、施文とも丁寧ではなく、脚部かも知れない。5, 6は安行2式の平縁の鉢である。同一個体。

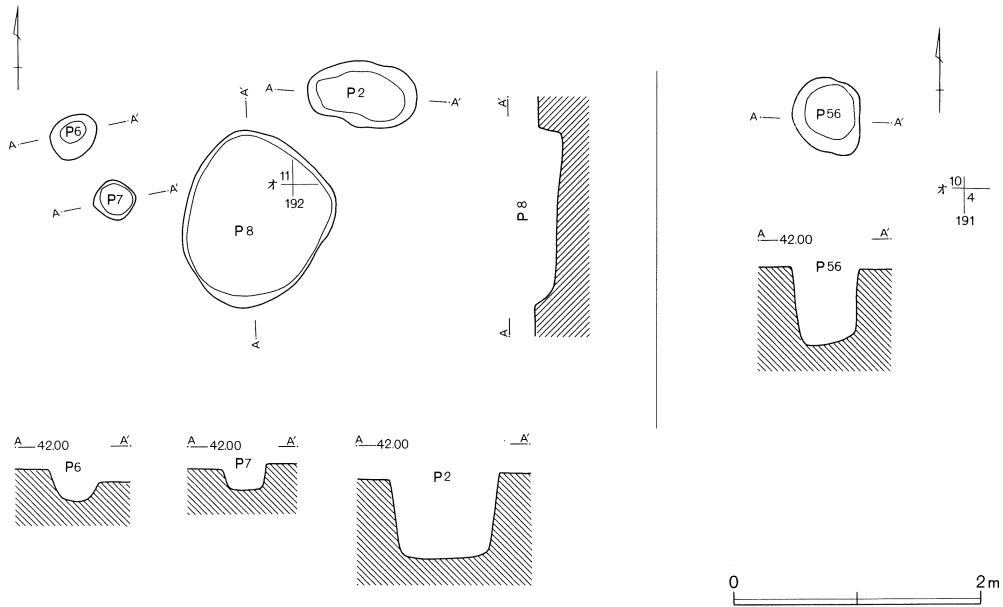
第6号ピットからは第111図7～9が出土している。7は算盤形の鉢、8は口縁部が内湾する鉢で、胴部に隆帯と刺突が施されている。9は口縁部が外傾する平縁の深鉢で、内面に幅の広い沈線が1条施されている。外面には数条の沈線が束になった条線が施されている。

第7号ピットからは第111図10, 11が出土している。10は大波状口縁の波底部である。中実の把手が付される。11は大洞C₁式小形壺の胴部破片と考えられる。彫刻的手法が発達しており、つくりは丁寧である。

第8号ピットからは第111図12～29が出土している。後期中葉から後葉に含まれる。12, 13は突起が付される平縁の深鉢、14は大波状口縁、17は口縁部にLr、またはLR r 縄文が施されている。22は帯縄文系の鉢で、口縁部にRL縄文が施されている。23, 24は波状口縁の深鉢、24の無文部は、かなり深くなでつけられている。23はRL、24はLR縄文が施されている。25, 26は瘤付系の深鉢である。25は縦長で、細い刻みが連続して施され、26はへら描き文と突起のみが施されている。29は台付鉢の底部である。

第56号ピット

オ-191-10グリッドに位置する。深さ約60cmを測る。第111図30～38が出土している。30は口縁部が内湾する鉢、31は口縁部が屈曲する平縁の深鉢である。32は波状縁の深鉢、または鉢で内面が肥厚し、段が見られる。33は口縁部に突起が付され、突起頂部に刻みが施されている。口縁部にはRL縄文がみられる。34は平縁の鉢、または深鉢で、内面に沈線、外面にわずかな稜が見られる。35～38は、口唇部がやや肥厚する深鉢である。



第53図 ピット

オ 住居跡出土土器

第1号住居跡（第54～57図、第76～88図）

第54図1は、本住居跡の埋甕である。推定口径約38cm。口縁部内面が肥厚し、外面はわずかに肥厚する。内外面とも、ミガキが施されている。2は胴部が括れ、口縁部が外傾し、恐らくは5単位の波状縁を持つ深鉢である。3は口縁部が屈曲して立ち上がる深鉢。口縁部には縄文が施されており、原体はLrか、前々段の撚りの弱いLRと考えられる（図ではLrで表現）。第55図1は同じく口縁部が屈曲して立ち上がる深鉢である。無文で、口縁部は軟質工具によってナデが施されている。2は口縁部に2条の沈線が施され、縦長の粘土粒が貼付される。ヘラ描きの工具は、先端の粗いものである。3は胴部が緩やかに括れ、口縁部が外傾する深鉢である。平縁で口唇部外面が肥厚し、よく磨かれている。口唇部の突起は4単位と考えられる（2個現存）。口縁部から胴部にかけて矢羽状の沈線文が施されている。はじめに右傾するもの、後に左傾するものが施文されている。4は曾谷式期の異形台付土器口縁部と考えられる。肩部には縦位の沈線とLR縄文がみられる。5は口縁部が内湾する平縁の鉢で、口縁部には横位の隆帯と縦位の突起が貼付されている。第56図1は平縁で帯縄文系の鉢である。文様帯を縦断して6単位の突起が貼付される。隆帯間の無文部はよく磨かれており、沈線文につぶれが見られる。2は平縁の深鉢で、口縁部には横位の刻みが施された縦長の粘土粒が貼付されている。3は口縁部が内湾する深鉢。RL縄文施文後、平行沈線、タスキ掛け状のモチーフが描かれている。器形、モチーフとも歪みが激しい。安行1式の所産と考えら

れる。4は胴部の張る破片で、三叉状入り組み文が施されている。文様帯下端の沈線間には、器面に対して斜め方向からの刺突が施されている。内面は軟質工具によってナデ調整が施され、ミガキは加えられていない。地文はLR。

拓影図では第76～82図が調査時に本住居跡に帰属すると判断されたものである。第76図は柱穴出土であるが、出土ピット名は不明。後期中葉が中心であるが、晩期前葉から中葉にかけての粗製深鉢も出土している(24, 25, 28, 29)。

埋土のものは加曾利2式～曾谷式が中心である。第77図31～42、第78図は、大波状口縁の深鉢である。口縁部の装飾には、隆帯が貼付されて口唇部が肥厚し、沈線・刺突が組み合うもの、口唇部下に隆帯が貼付され、沈線・刺突が組み合うもの、口縁部に沿って沈線のみが巡るものなどがある。口唇部は肥厚するものと、しないものが存在する。波頂下に細密な沈線によって稲妻状、または斜行するモチーフが描かれるものもある。第78図6, 15にはI文様帯にRL縄文が施されている。ヘラ描きの工具は、先端が粗いものが多用されたらしく、沈線内に、工具の微細な凹凸が引きずられてできる擦痕が観察できるものが多い。

第79図4は内湾する深鉢で、波状口縁と考えられる。2条の沈線が施され、器面はよく磨かれている。21～23は同一個体で、口縁部に平行沈線が引かれ、背の高い粘土粒が文様帯に貼付されている。沈線間には刺突が施される。曾谷式併行のものと考えられる。28は粘土粒が縦位に3単位施され、その間に弧線が描かれる。台部の可能性もあるが、図の上端は波状を呈するため、口縁部と考える。35, 45は安行1式、42は平縁で、突起を持つ深鉢。無文地に曲線的なモチーフが描かれている。後期後葉～晩期前葉に属すると考えられる。

第80図1は入り組み文が施された鉢である。3は曾谷式併行と考えられる。4は波状口縁、無文の深鉢で、波頂部、肩部に縦長の粘土粒が貼付されている。晩期前葉の所産と考えられる。

第80図5～23、第81, 82図は粗製土器である。加曾利B2式に伴うものから、晩期前葉に属すると考えられるものまでが出土している。口唇部が肥厚するものでは、第81図9～14が指頭圧痕を有し、15～22にはごくわずかな凹みが観察される。前者は加曾利B2, B3式に伴うと考えられるが、後者が曾谷式に伴うか否かは、検討を要しよう。

第57図、第83～88図は出土位置から見て、本住居跡に帰属する可能性のあるものである。1は壺の口縁部。肩部にはやや彫刻的な装飾が見られる。摩耗が著しいため詳細は不明であるが、大洞C₁式系壺形土器の可能性も有ろう。3は脚部、4は頸部に縄文が施される鉢である。地文は直前段3本燃りのLR。主文様は不明である。4は無文の鉢で、外面はケズリ調整が施されている。内面下半に炭化物が認められる。5は折返し口縁の深鉢である。摩耗著しく、詳細不明。

第83図は20が堀之内式の粗製土器で、他は後期中葉のものである。第84図8, 12～30、第85～88図は、後期後葉から晩期に属するものと粗製深鉢である。第84図12は安行系の波状口縁深鉢で、口唇部は無文の隆起帯となっている。13は12と同一個体かも知れない。14, 15, 17は三角形区画文を構成する沈線が弧線化しているものである。20は波頂部下に突起の剝落痕が見られる。24, 25は同一個体の浅鉢。口縁部内面に三叉状の彫去が見られ、後期中葉のものと考えられる。29, 30は平縁の深鉢。頸部文様帯にやや幅広の沈線で、曲線的なモチーフが描かれている。安行2式または3

a式と思われる。

第85図3はほぼ平縁の深鉢で、口唇部に突起を持つ。口縁部がやや内湾し、頸部が浅く括れる。口縁部には幅の広い沈線で弧線、十字状のモチーフが描かれ、その間に四叉状のモチーフが埋め込まれる。モチーフの要所には、凹みの浅いボタン状の粘土粒が貼付される。文様帯の下端には沈線が施され、沈線下は無文である。類例は寡聞にして知らないが、四叉文の配置、沈線の特徴から晚期中葉大洞系、または前浦式との関連が考えられる。16は波頂下にボタン状の突起を持ち、棒状工具の先端による刺突が施されている。18~20は無文の波状口縁深鉢で、波頂下に突起が施される。23~33は粗製深鉢である。33は折返し口縁の隆帯部に、撚紐末端の押圧、肩部には撚紐の側面圧痕が加えられている。

第86図1~18は折返し口縁の深鉢、19は縄文施文、20~24、第87図1~8は無文の鉢、深鉢である。5は頸部が外反し、口唇部に棒状工具の側面の押圧による刻みが施されて小波状を呈している。6は口唇部に、間のあいた2個1対の突起が施されている。第87図15~17は同一個体で、頸部が外反し、沈線間に刺突を持つものである。口唇部には逆「ハ」の字状のB突起と刺突が施されている。胴部は無文。大洞C₁式系のものであろう。18、19は口縁部に沈線間の刺突が施されたものである。19は口縁部がわずかに内屈している。20は胴部が緩やかに括れ、頸部には平行沈線と、S字状の曲線文が施されている。口唇部には棒状工具により刺突が施され、B突起を持つ。

第88図1~5は大洞C₁式併行のもの。1は口縁部が内湾する浅鉢。口唇部は無文で丸く収まる。地文は直前段3本撚のLRで、モチーフは彫刻的に描かれている。大粒の砂粒を含み、形状にはやや歪みがみられる。2は口縁部がわずかに外反する鉢で、底部はやや膨らむと考えられる。モチーフは無文地に彫刻的手法によって描かれている。4は赤彩で、無文地に彫刻的手法によってモチーフが描かれている。内面の調整は、ナデ調整のみで、器面も平滑化していない。また、破片の上下端がやや内湾気味であり、天地逆の浅鉢の可能性は低い。壺の肩部と考える。5は恐らく大洞C₁式系注口土器の肩部破片と考えられる。黒褐色を呈し、直線的な雲形文が彫刻的手法で描かれている。7は大洞BC₁式~C₂式前半の鉢形土器である。地文はLRである。8は摩耗が著しく、詳細は不明だが、大洞C₁式~C₂式前半の鉢形土器である。口唇部に弧線による装飾が施されている。16は大洞C₁式浅鉢の底部である。やや上げ底状である。12はC字状文が描かれているが、時期不明。17は関西系の影響を受けた鉢形土器と考えられる。18は鉢の体部で、重畳する弧線が無文地に描かれている。19は口縁部に刺突列が巡る深鉢である。異系統土器の可能性があろう。20は曲線的なモチーフが不安定な沈線で描かれるものである。後期後葉に所属する可能性があろう。

本住居跡に帰属するとされたものは、後期中葉のものがほとんどを占め、安行1式がわずかに存在するだけである。本住居跡に帰属する可能性のあるものは、後期中葉から晚期中葉までを含む。大洞系のものは晚期中葉のものが多いようである。

第2号住居跡（第58~59図、第60図1~5、第89~92図、第93図1~12）

本住居跡出土土器と、その可能性のあるもの、また第3、4号住居跡との重複部分出土のものを一括して説明する。第58図2は本住居跡No.5ピット出土の赤彩の浅鉢である。内外面ともよく磨

かれている。胴部下端に3条の沈線が引かれ、下側の沈線間に刺突が施されている。刺突は米粒状で滑らかな曲面を有している。加曾利B式に伴うと考えられる。

第89図は11以外が本住居跡の柱穴から出土したものである。加曾利B3式から曾谷式期までが中心である。16の地文は無節のLである。29は算盤玉型の頸部と考えられる。第90図1～18は調査時に本住居跡に帰属すると確認されたものである。後期中葉から後葉の粗製土器が多いが、16は大洞C₂式前半の半精製鉢形土器と考えられる。口唇部にへら状工具の掻き取りによる刻みを持ち、頸部には直前段3本撚りの地文が施されている。口縁部内面にも1条沈線が巡る。

第58図2～6、第59図1～3、第90図19～35、第91図、第92図1～13は本住居跡に帰属する可能性のあるものである。第58図2は注口土器で、頸部、注口部が欠損している。胴屈曲部に突起が貼付されている。恐らく3単位であろう（2単位現存）。突起貼付後、2条の沈線が施され、沈線間に刺突が施されている。胴部下半には矢羽状の沈線文が施されているが、沈線は上段から下段の順に施されている。3は恐らくは4単位の波状縁深鉢である。口縁部には三角形区画文、頸部には刻文帯と矢羽状沈線文が施されている。口縁部と三角形区画文の内部には、R1縄文が充填される。隆帯上には刻みが連続して施され、隆帯間はかなり深く凹められている。内面はナデ調整のみで、作りは全体にやや粗雑である。5は頸部が短く外傾する深鉢で、菱形状の螺旋文を中心にモチーフが描かれている。内面は口縁部付近が横方向、胴部が縦方向のミガキが施されている。第59図2は頸部がやや括れる深鉢で、口縁部付近に5単位の隆帯が巡る。隆帯上には刺突が施される。隆帯の貼付は、上端がナデ付けで、下端にはナデ付けが認められない。曾谷式併行と考えられる。

第90図19以降は加曾利B2式から曾谷式にかけてのものである。28は屈曲する口縁部に凹線状の沈線が3条引かれている。34は口縁部に沿ってLr縄文が施される。35は波底部に半円状の突起が貼付され、口縁部には2条の沈線を持つ。第91図2は扇状の波頂部を呈している。14は瘤付き系の深鉢。16は波頂下に円形の粘土粒が貼付され、レンズ状の区画が縦位に描かれる。波頂部から下がる弧線と、頸部下端の向上く弧線が対向する。地文はLr。安行3b式に属すると考えられる。18は内面の調整から、広口壺形と考えられる。地文は直前段3本撚り。20は先端の粗い工具による三叉文が描かれている。安行3c式であろう。21,22は曲線的なモチーフの中に棒状工具による刺突が施されたものである。24は無文地に曲線的なモチーフが描かれる深鉢である。

第92図1～3は折返し口縁のもので、2は頸部が外傾するものである。4は幅4mmほどの粘土紐で、人面状の構成を描いているものである。粘土紐上にはLR縄文が施文される。ポタン状の突起が1つ見られるが、対になる位置のものは剥落している。5～10は大洞系と、その可能性のあるもの。大洞C₁式併行のものが多い。5,8,9,11は大洞C₁式系で、5は小形壺。8は注口土器肩部の破片と考えられる。9は浅鉢、11は壺の肩部である。7,10は器種不明、6は安行3a式かも知れない。11は拓影図上端に粘土粒の貼付がみられる。

第92図14～26、第93図1～12は本住居跡と第3号住居跡の重複部分から出土したものである。後期中葉のものが多い。3は第91図16に類似するが、地文はLRで、波頂部が三分されている。11は口縁部が内屈するもので、後期中葉の注口土器と考えられる。

本住居跡は、柱穴に加曾利B3式～曾谷式を含み、晩期中葉までのものが埋土に帰属する可能性

がある。

第3, 4・9号住居跡 (第59図4、第60～62図、第63図1, 2、第93図13～28、第94～98図)

第4・9号住居跡は重複部分が多く、両者の遺物は一括して扱う。また、第3号住居跡は範囲が明確でなく、固有の遺物はない。この3軒の住居跡出土と、その可能性のあるものについて述べる。

第59図4、第60図1, 2は本住居跡群と第2号住居跡の重複部分より出土したもの。第59図4は口縁部が立ち上がる鉢である。突起は4単位と考えられる(2個現存)。第60図1, 2は無文平縁の鉢。2には4単位の口唇部突起が貼付される(3個現存)。両者ともミガキが施されているが、前段階の平滑化が雑である。3は第4・9号住居跡No.61ピット出土破片と第2, 3号住居跡重複部分出土の破片が接合したもの。口唇部に刺突が巡り、口唇下にも山形の刺突列が施文される。Ⅱa文様帯には弧線が引かれ、RL縄文が充填される。波底部には刻み列を跨いで縦長の突起が貼付される。4は帯縄文系の浅鉢、地文はRLである。帯縄文の隆起はごく弱い。5は頸部が無文の鉢である。Ⅱ文様帯には配置文が施文される(藤沼 1983)。縄文は直前段3本撚のLRで、節の大きいものである。沈線の幅も広く、前浦式との関連が考えられよう。6は第3号住居跡と第4・9号住居跡の重複部分から出土したものである。平縁で、内面はヘラナデ、外面は磨きが施されている。沈線間の刻みは丁寧なもので、加曾利B式に属すると考えられる。7は隆起帯縄文が施された鉢で、地文はRL。突起は6単位である。

第61図1は口縁が舟形を呈するもので、長軸端部に突起がつく。突起の形状から、曾谷式～安行1式と考えられる。補修孔が見られる。2は頸部に縄文を有する浅鉢。直線的な玉抱き三叉文が重畳し、縄文が充填される。地文はLrで直前段3本撚である。意匠は5単位で構成される。口唇部突起は、1つが複雑なもので、他の7個はB突起である。口縁欠損部にB突起があったかは不明。安行3a式新段階のものである。3は大洞C₁式の鉢。頸部に羊歯状文が施される。口唇部にはB突起と刻みが施され、B突起の中心からは弧線が垂下して文様帯区画沈線と合体している。羊歯状文の浮文化はあまり発達していない。入り組み部も刺突のみに変化している。地文はLR、内面は軟質工具によるナデ調整のみである。4は頸部が外反する鉢で、口縁部にB突起が貼付されている。B突起間にごくわずかに彫去が認められ、大洞C₁式系と考えられる。地文は直前段3本撚LR。5は頸部が無文の鉢である。口唇端部に短沈線状の刺突が施されている。文様帯の構成、口唇部装飾は第60図5に類似する。

第62図1は大洞C₁式系の粗製浅鉢。口唇端部に斜めの刻みが施され、内面に2条の沈線を持つ。地文はLR。口縁部沈線はやや歪んでおり、施文後の調整によるつぶれが見られる。2は平縁の鉢で、体部全面に曲線的な装飾がやや不規則に施文されている。口縁部、底部縁辺に刺突列が巡っている。安行3c式併行か。3は無文の鉢で口唇部内面のみわずかに肥厚する。4は口縁部が屈曲する深鉢で、口縁部には沈線と瘤の貼付、LR縄文がみられる。5は波状縁深鉢である。波頂部は魚尾状で、縦方向の単沈線が施される。波頂部、波底部には瘤が貼付され、瘤上に横方向の沈線が施される。文様は、菱形の区画の中に、弧状の入り組み文を中心に三叉文が巻き込んで対向する意匠が配されている。口縁下の無文帯と、胴部上半のレンズ状無文帯は滑らかに凹んでいるが、他は

平板な磨消縄文による。口唇部に肥厚は見られない。沈線はやや深めで、地文はLR rか、前々段の撫の弱いLRと考えられる（図版82）。6は壺の口縁部、7は注口部で、注口基部に玉抱き三叉文が施される。第63図1は頸部に縄文が施された浅鉢で、文様帯には磨消縄文を伴う弧線文が描かれる。沈線は浅く、よく磨かれている。

第97, 98図は柱穴出土土器の拓影図である。加曾利B3式～曾谷式が中心である。出土柱穴については前述した。第98図14, 15は同一個体。先端の粗い工具でへら描きされ、棒状工具の先端による刺突が施される。胴部はやや括れ、胴部以下は無文である。粗製深鉢は口唇部が肥厚するものが多い（第98図17～26）。

第93図13～28、第94, 95図は第3, 4・9号住居跡の範囲から出土したものである。第93図14～19は加曾利B式後半の波状縁深鉢、20～26は曾谷式の波状縁深鉢である。第94図2は口縁部にLR r縄文が施される。22～24は帯縄文系の波状縁深鉢で、23は波頂部が欠損している。地文はL r。第95図1, 2は三叉状入り組み文が施されるもの。4は安行1式の台付鉢であろう。10～18は折返し口縁の深鉢で、17は口縁部に刺突、18は貫通孔を持つ。22, 23は瘤付系の深鉢、27は口唇部にやや斜めの刻みを持ち、S字状文が施される。大洞C₁式系か。28も口唇部刻みとB突起を持ち、大洞C₁式系と思われる。26は台付だが、天地逆の可能性もある。

第96図は第4・9号住居跡の範囲から出土したものである。1は称名寺式。14はI文様帯に3条の沈線と刻み帯を持つ。16は波頂下にやや下端の張り出す豚鼻状突起を2単位縦列するもので、三角形区画文が沈線間の刻みによって描かれている。安行3b式。25は大洞C₁式系浅鉢の底部である。26は器種不明。へら描きで逆「コ」の字状のモチーフが無文地に描き出されている。後期中葉のものと思われる。

第5号住居跡（第63図2～6、第64図1, 2、第99図3, 6～27、第100図）

第63図2は本住居跡と第4・9号住居跡の重複部分出土である。頸部が無文で、II文様帯に弧線文と三叉状の彫去が施されている。地文はLR。3は頸部がすぼまる深鉢で、背の低い波状を呈する。文様帯の上下を沈線間の刻み帯で区画し、胴部には弧線文が施されている。文様は鋭利な沈線で描かれる。安行3d式。5は無文の鉢。6はRL縄文を縦方向に施文している。口唇部端面にも縄文が施文され、B突起が貼付される。時期は不明。第64図1は無文の深鉢、2は異形の注口土器で、曲線的なへら描き文が施される。胴部にはB突起状の粘土粒が貼付される。

第99図3は本住居跡の柱穴出土、19～17は本住居跡出土と調査時に確認されたもの。後期後葉のものが多い。6～18は本住居跡と、第4・9号住居跡の重複部分より出土したものである。第100図は本住居跡に帰属する可能性のあるもの。後期中葉から晩期前葉のものまで含まれる。第99図3は曾谷式、6は縦長の瘤に横位の刻みが施されている。口縁部には隆帯上に刺突が施されている。13は台付鉢で、レンズ状のモチーフが施文される。14は安行1式、20は曾谷式～安行1式であろう。第100図1は加曾利B式後半、2は曾谷式。4は扇状の波頂部突起に刺突が巡るものである。ボタン状突起の周囲にも刻みが施されている。おそらく曾谷式併行のものと考えられる。10は安行2式の注口部、11も安行2式だが器種不明。12, 13は瘤付系の深鉢。16は波状部と胴部上半に磨消縄文

を伴う弧線文が描かれている。地文はRL。安行3b式であろう。19は口唇部に瘤状のB突起が貼付され、突起間に短い弧線が引かれている。IIc文様帯には沈線間に刻みが見られる。文様は磨消縄文による雲形文が施されている。古い要素が残存した大洞C₂式前半のものと考えられる。

第6号住居跡（第64図3、第101、102図、第103図1～5）

曾谷～安行1式が中心である。第101図5、7～9は波状縁深鉢、10～16は口縁部が屈曲する深鉢である。20は小波状口縁を呈し、直線的な三叉文が施されている。6は体部に綾線文を伴う縄文が施されており、晩期前葉～中葉の土器の可能性ある。21、22は平縁の深鉢で、21はRL、22はLR縄文が施される。26は大洞C₁式系の浅鉢でLR縄文が施される。27は大洞C₂式前半の鉢、28は大洞C₁式系の壺、または注口である。29は口縁部に刺突列が施される。30は器種不明。棒状工具先端による刺突が施されている。粗製土器は口唇部が肥厚するもの、安行1式の紐線文土器、折り返し口縁の深鉢がみられる。

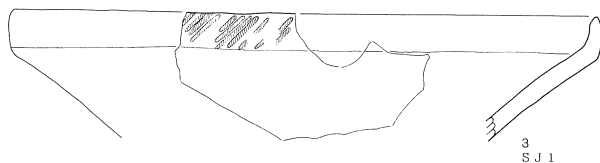
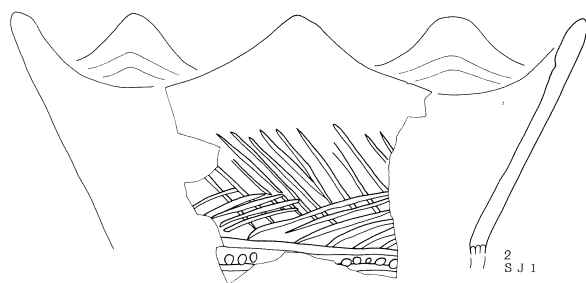
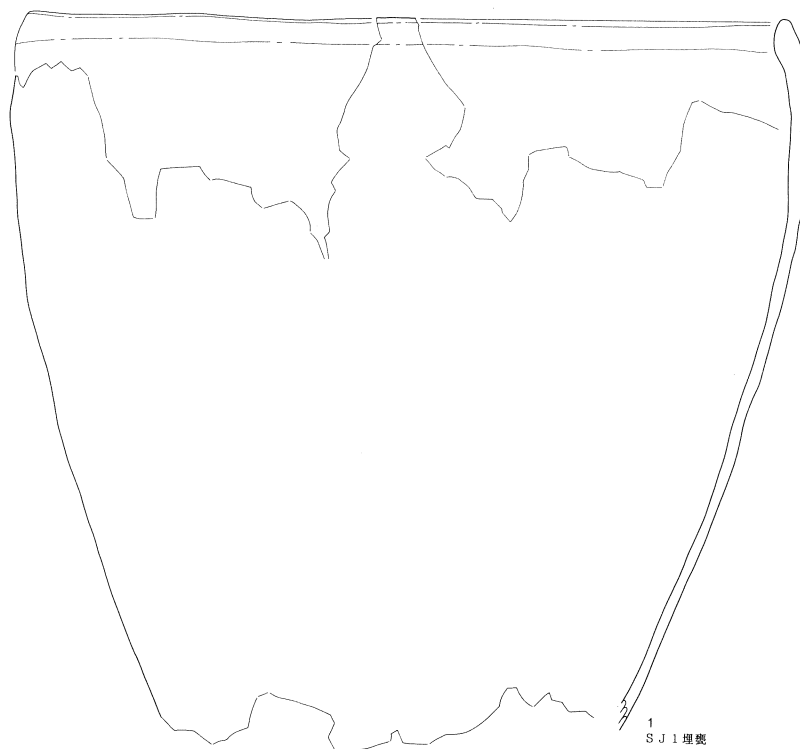
第7号住居跡（第64図4～7、第103図6～33、第104図1～17）

加曾利B式後半から晩期中葉までの土器が出土している。第64図4は安行3a式の浅鉢。対向する三叉文の中心には、沈線が引かれた突起が貼付されている。炭化物の付着が見られ、胴部には弧線文が施される。5～7は無文の鉢で、6は粘土紐積み上げ痕が消されずに残っている。第103図6～10は無文の鉢、深鉢。11は内湾する鉢で、12は3単位の突起を持つ深鉢である。14は瘤付系の鉢、15は波頂部に豚鼻状の突起が貼付される。16は隆帯で弧線が描かれ、口縁部にRL縄文が施文される。17、18は小形の鉢、19は三叉状入り組み文が施されている。21は粗い沈線で入り組み文が描かれている。22～24は大洞C₁式系。24は赤彩されている。25は磨消縄文を伴う壺。27は隆帯上に刺突が施されている。28は突起上に刻みが見られる。

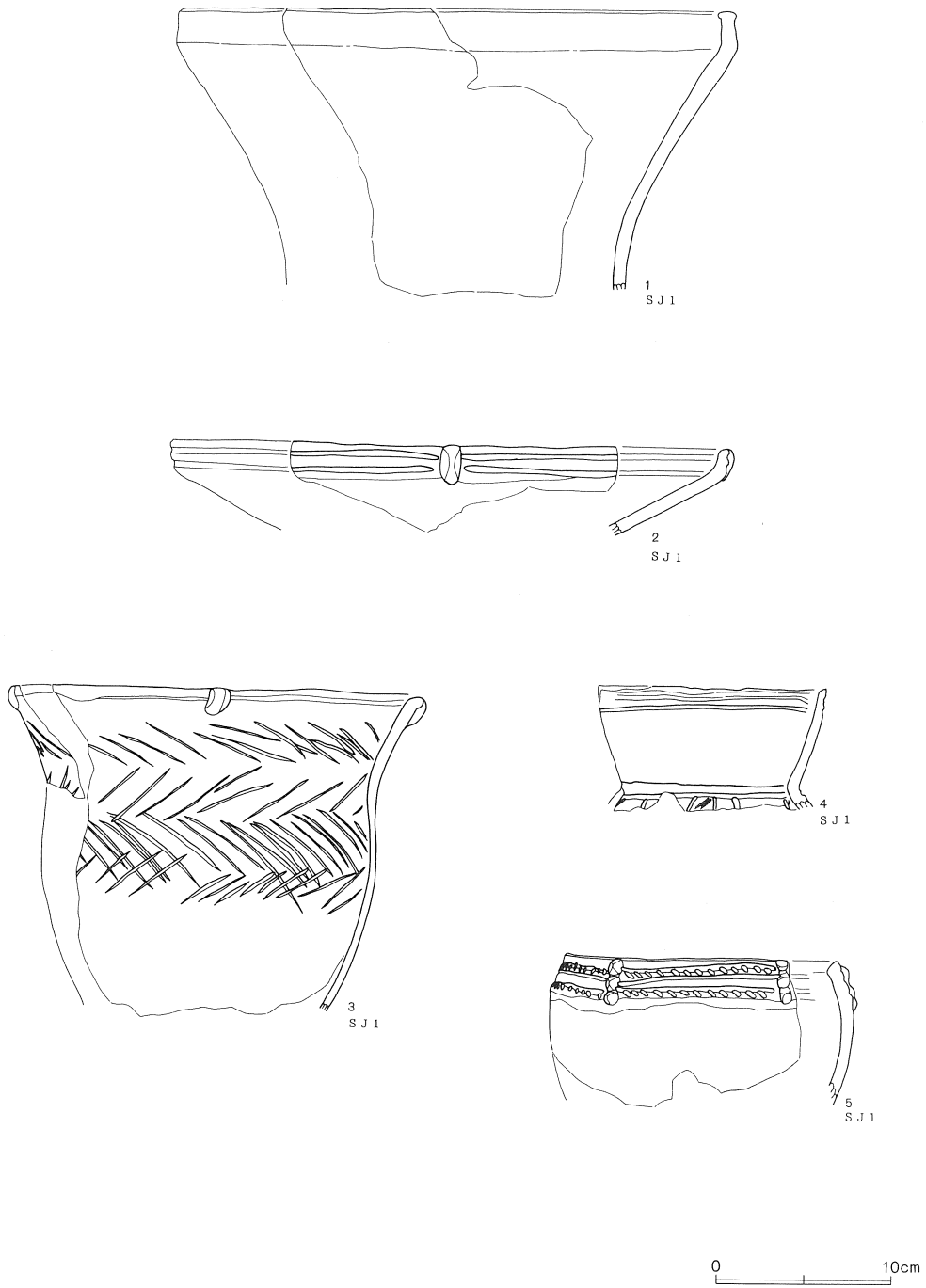
第104図1～18は本住居跡と第8号住居跡の重複部より出土している。1は鉢の肩部、2は小波状縁の浅鉢、3～5は曾谷式期の波状口縁深鉢、6は口縁部にLR縄文をもつ鉢、7は波状縁深鉢で、RL縄文が施される。8は豚鼻状突起が3個重畳する。9～11は晩期前葉、12は安行3d式の鉢。13は口唇部が肥厚し、押圧が加えられたもの、14、15、17は折返し口縁の深鉢である。

第8号住居跡（第65図1～4、第104図18～28、第105図1～21）

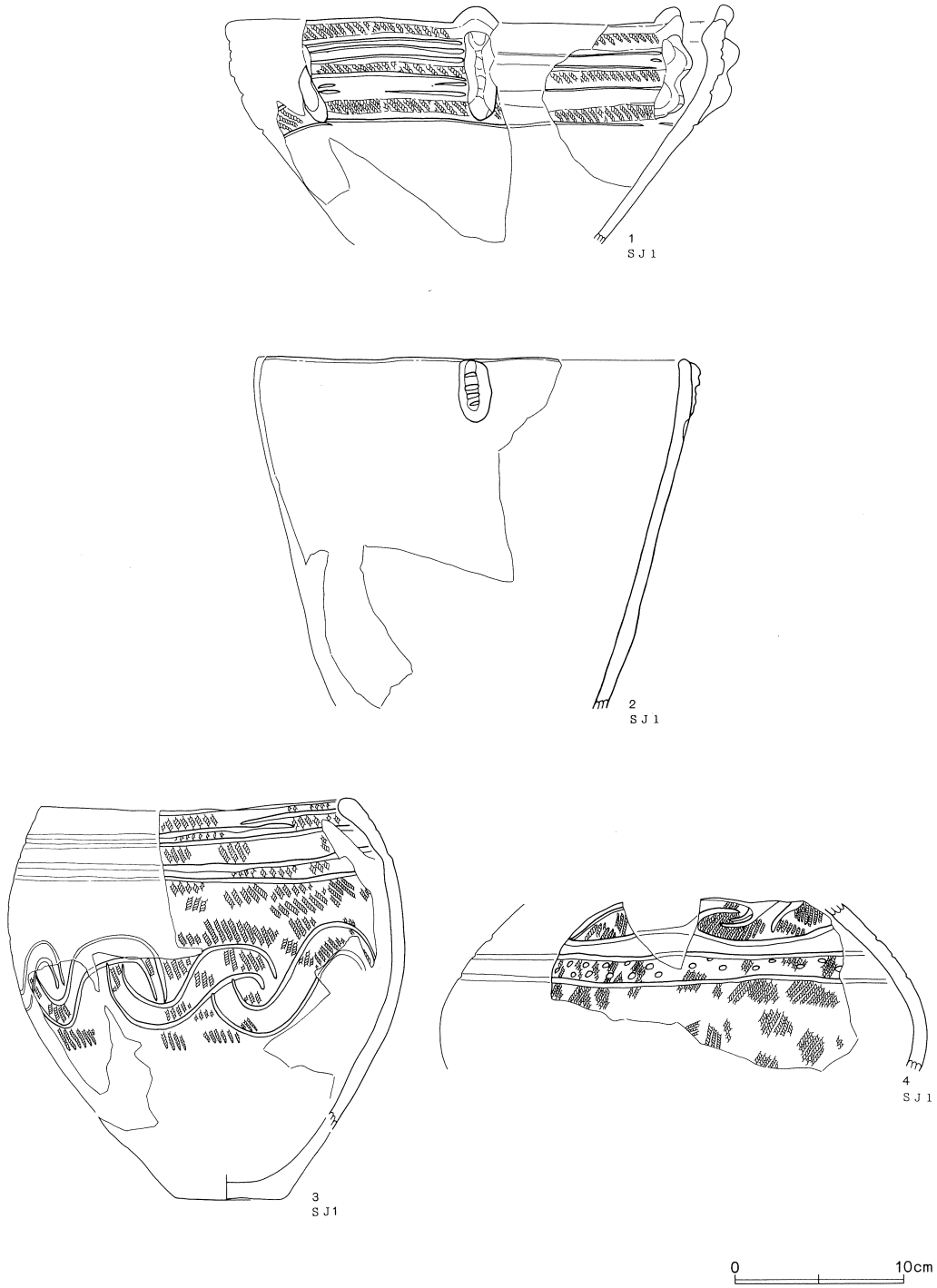
第65図1は口縁部が外傾する深鉢で、弧線文と曲線文が施文されている。口唇部は押圧を加えて小波状にしている。2は折返し部に刺突が施されている。3は無文の注口で、注口部先端が欠損している。4は脚部。第104図18は小波状縁の浅鉢、19、20は鉢、21は波状口縁深鉢の頸部、22～24は深鉢であろう。26は扇状の波頂部を持ち、縦長の突起2個が重畳し、その下の粘土粒上に刺突が施されている。口縁部、刻文帯下にはRL縄文が施される。27は堀之内式の粗製深鉢。第105図1～8は粗製土器、10は口縁部が内湾する鉢で、赤彩。11は頸部に縄文が施され、焼成前に穿孔されている。肩部の沈線は弧線で区切られている。12は波底部、14は安行3b式。16は胴部破片で、拓影図上端から外反するようである。文様帯の下端は沈線間の刺突で区切られている。17は平縁の鉢で、



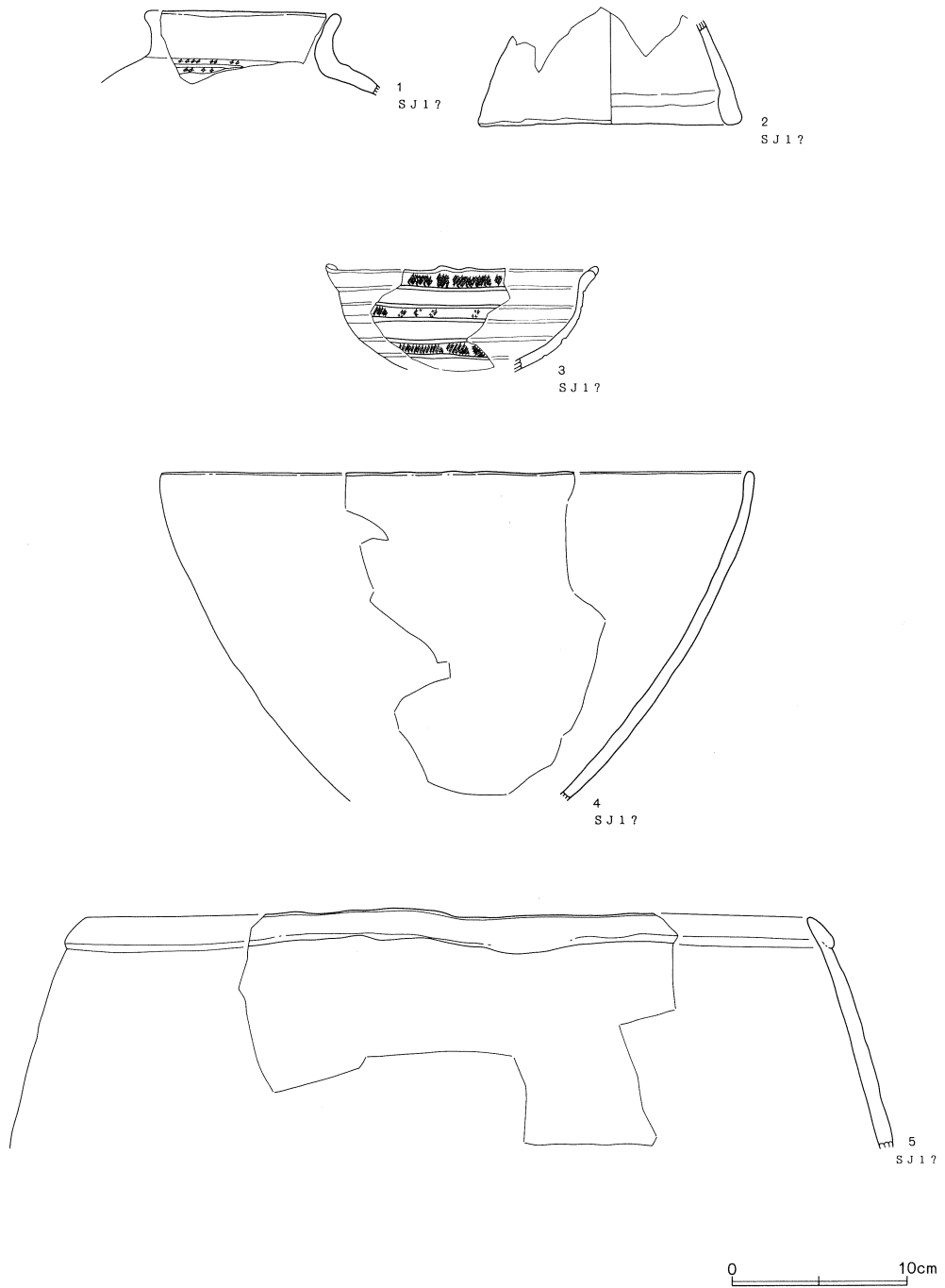
第54図 B区住居跡出土土器実測図(1)



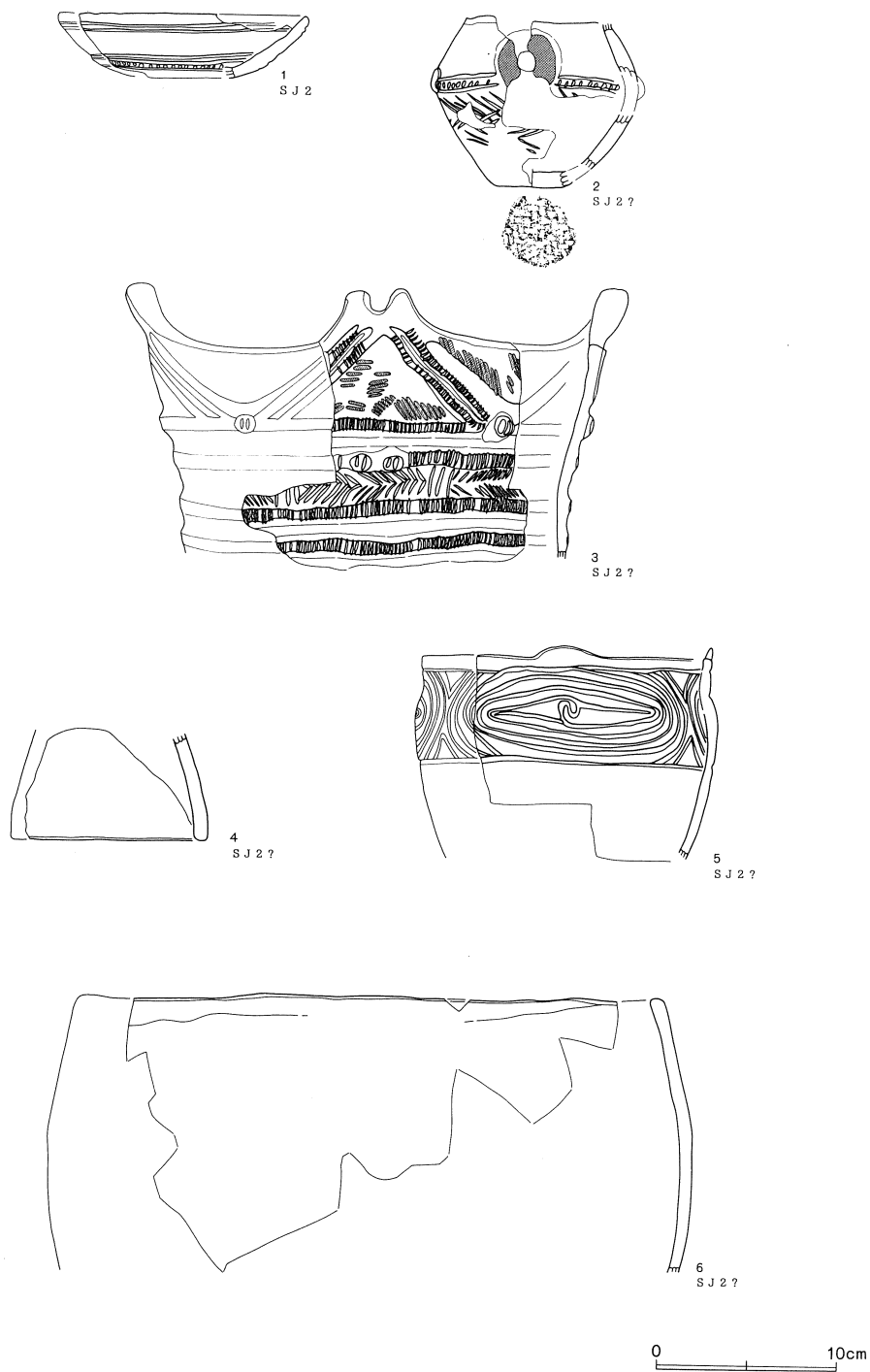
第55図 B区住居跡出土土器実測図(2)



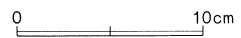
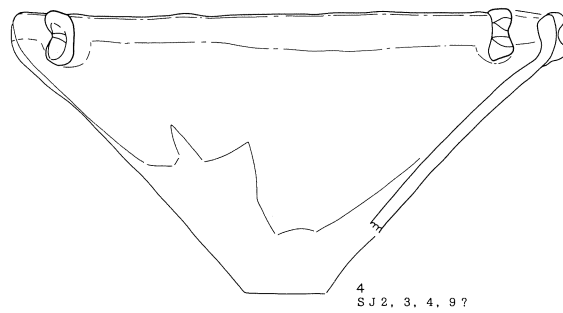
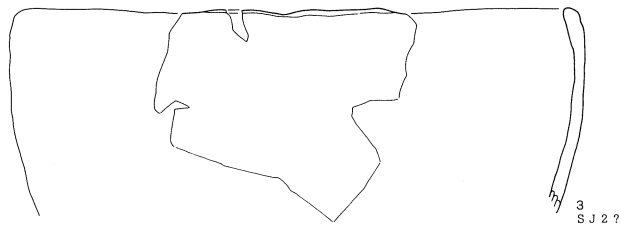
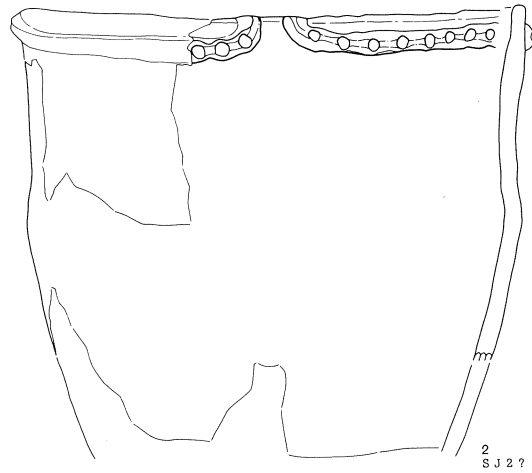
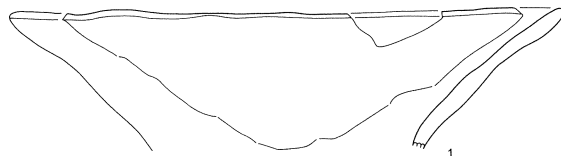
第56図 B区住居跡出土土器実測図(3)



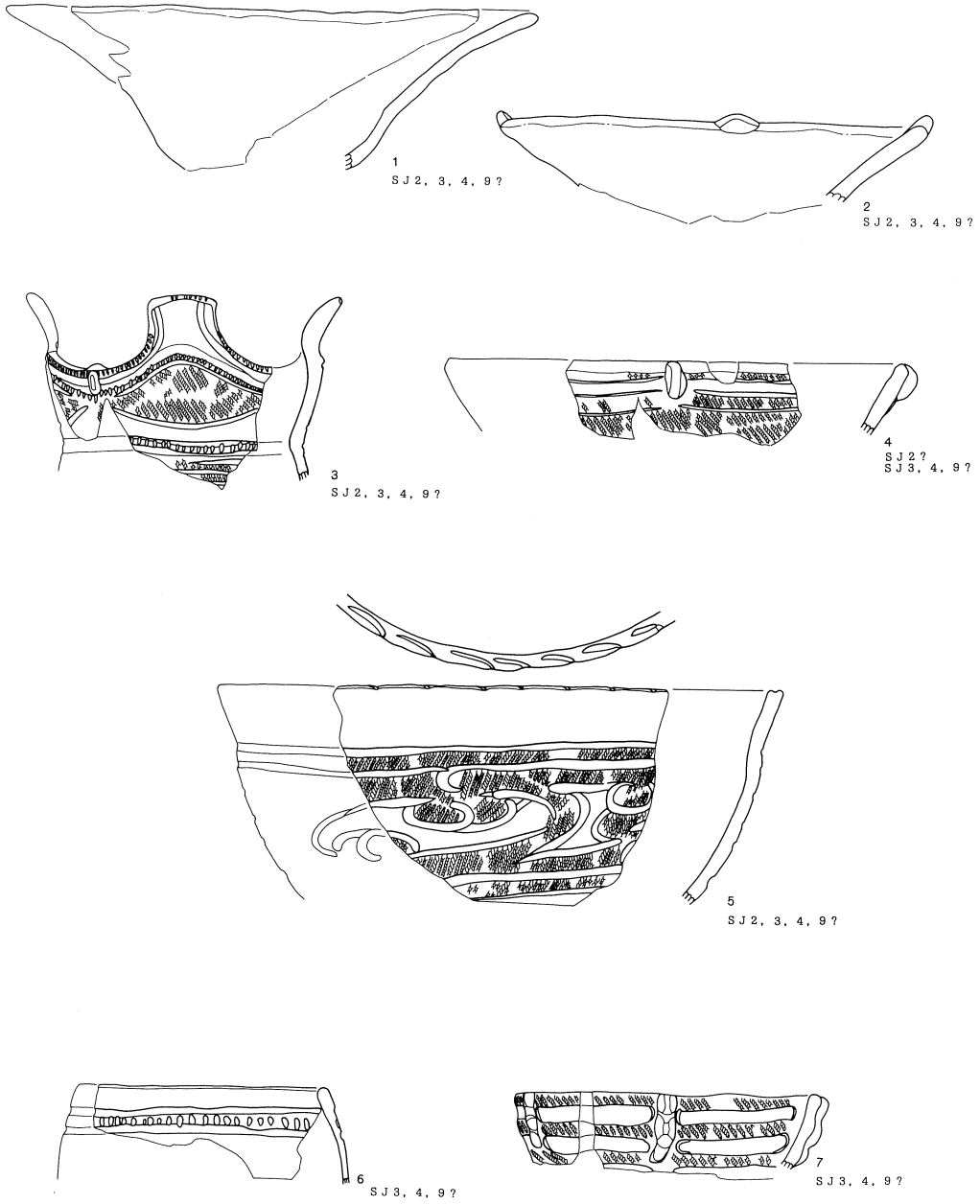
第57図 B区住居跡出土土器実測図(4)



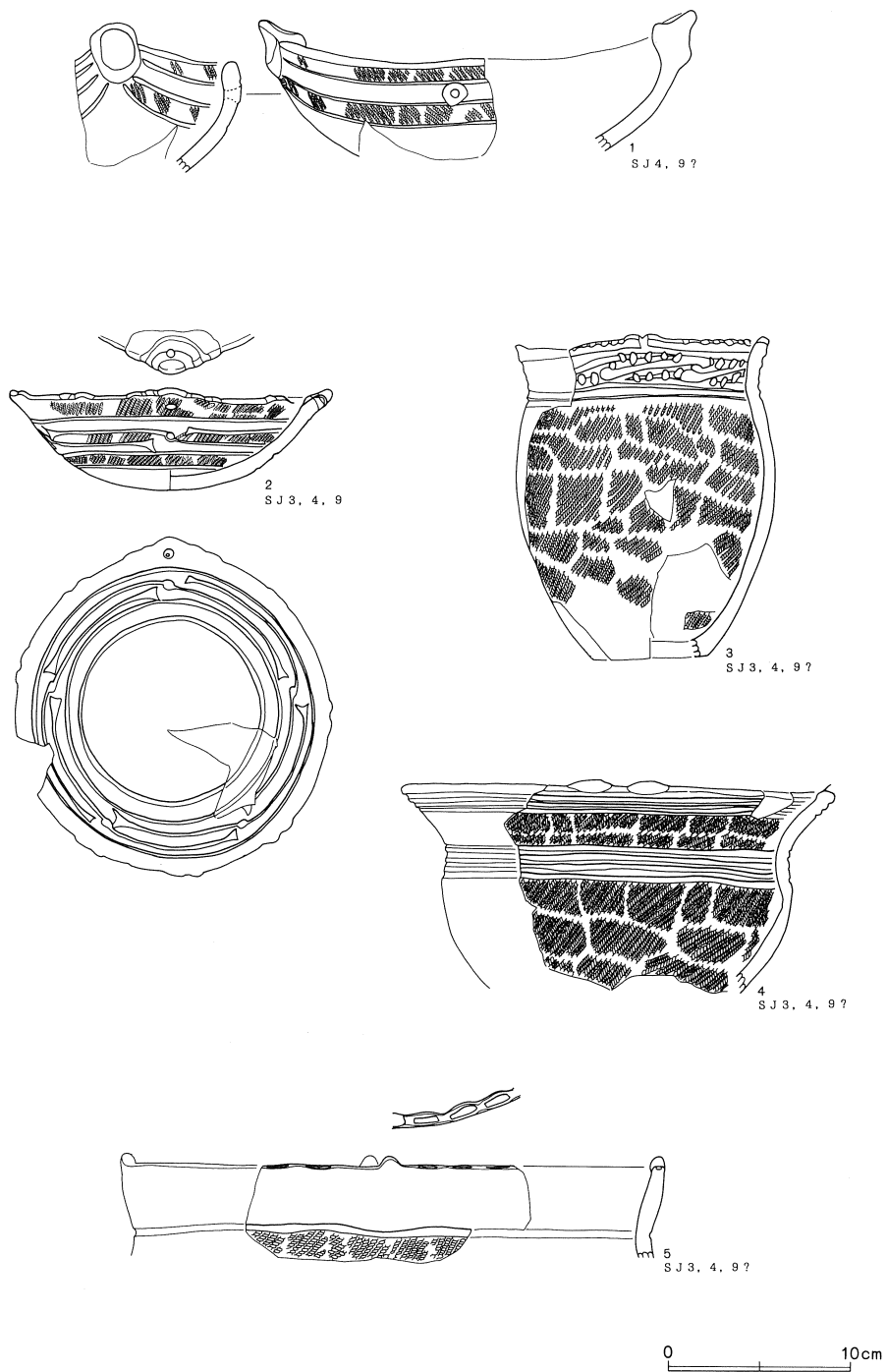
第58図 B区住居跡出土土器実測図(5)



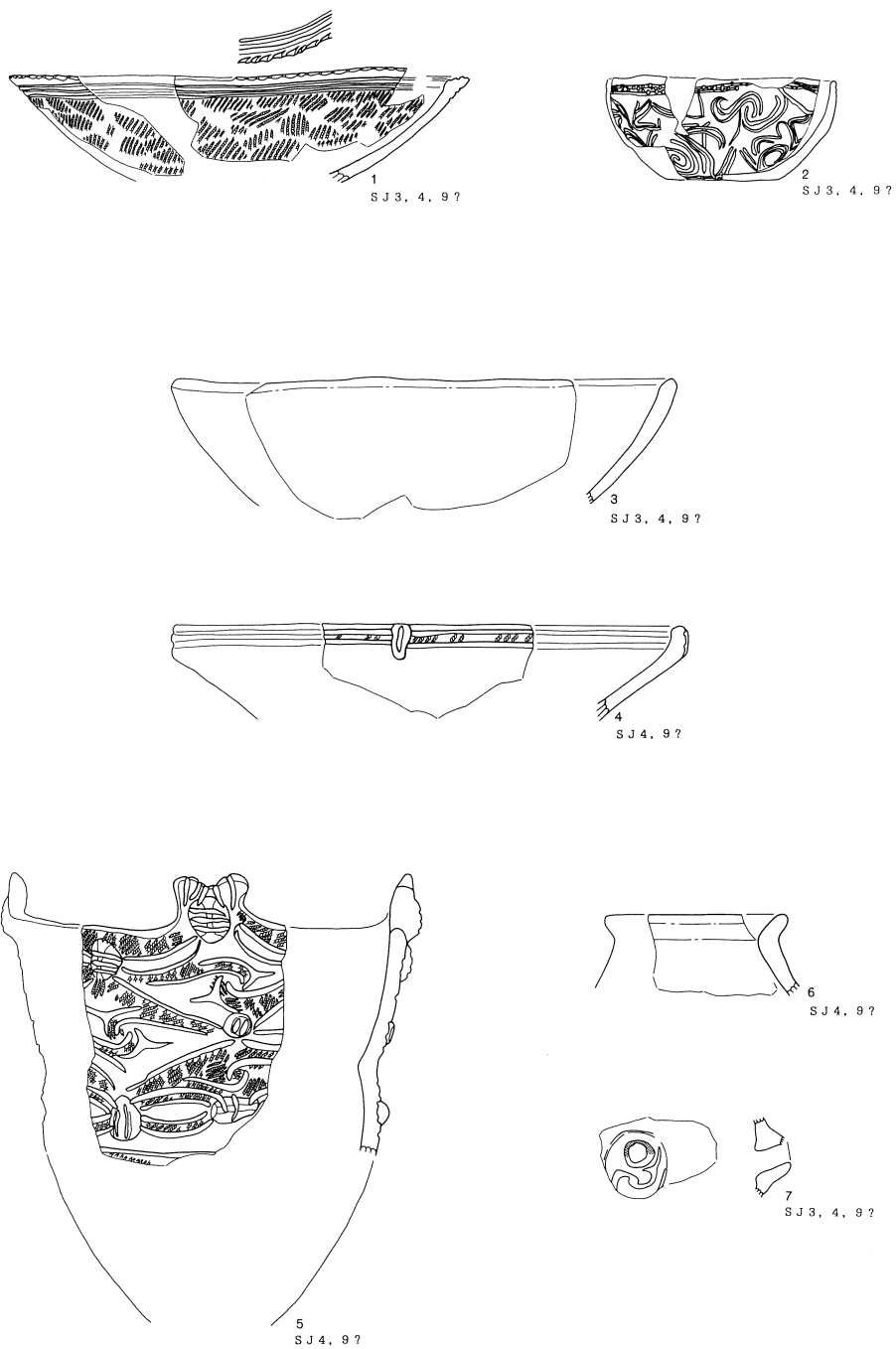
第59図 B区住居跡出土土器実測図(6)



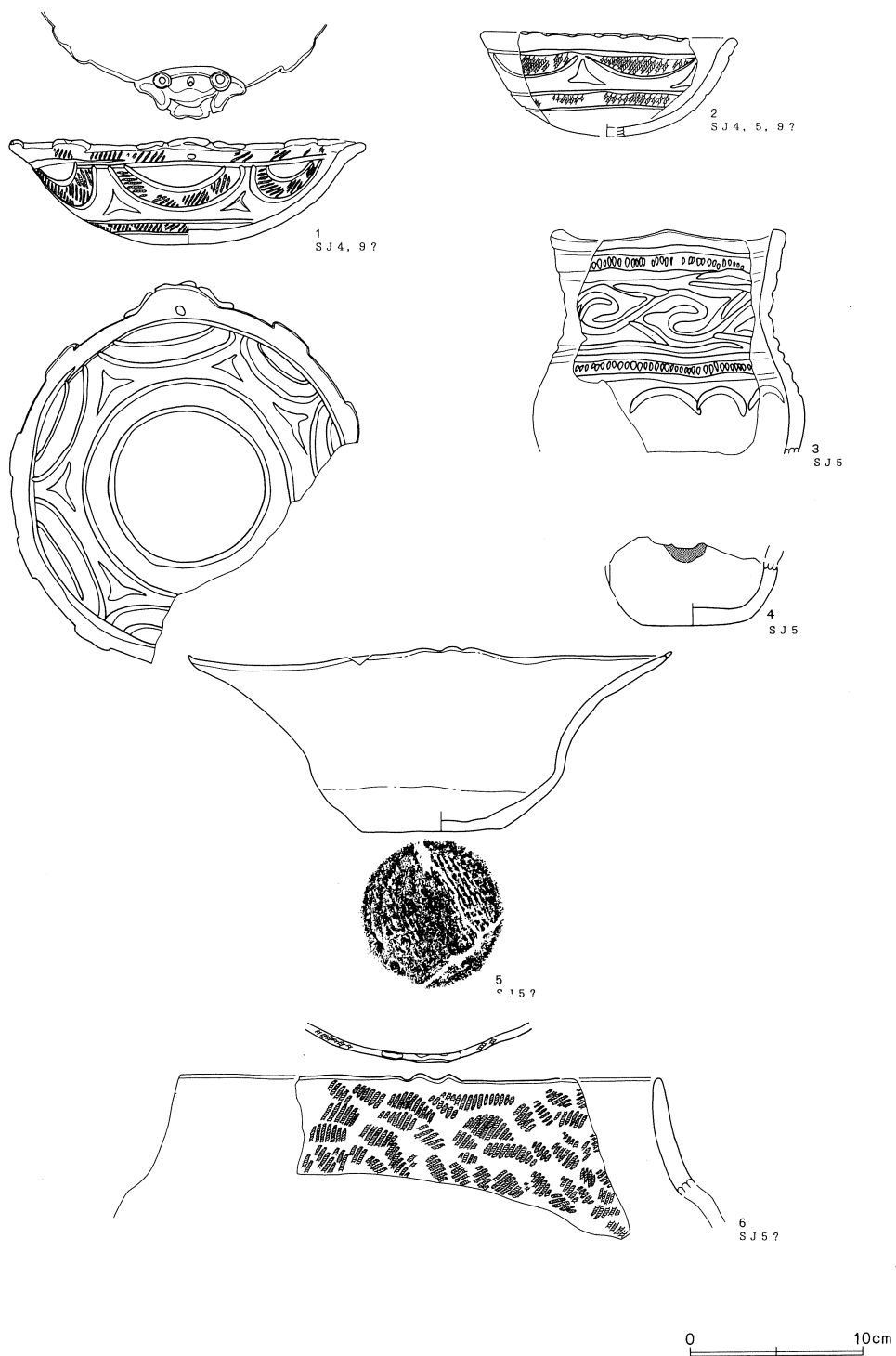
第60図 B区住居跡出土土器実測図(7)



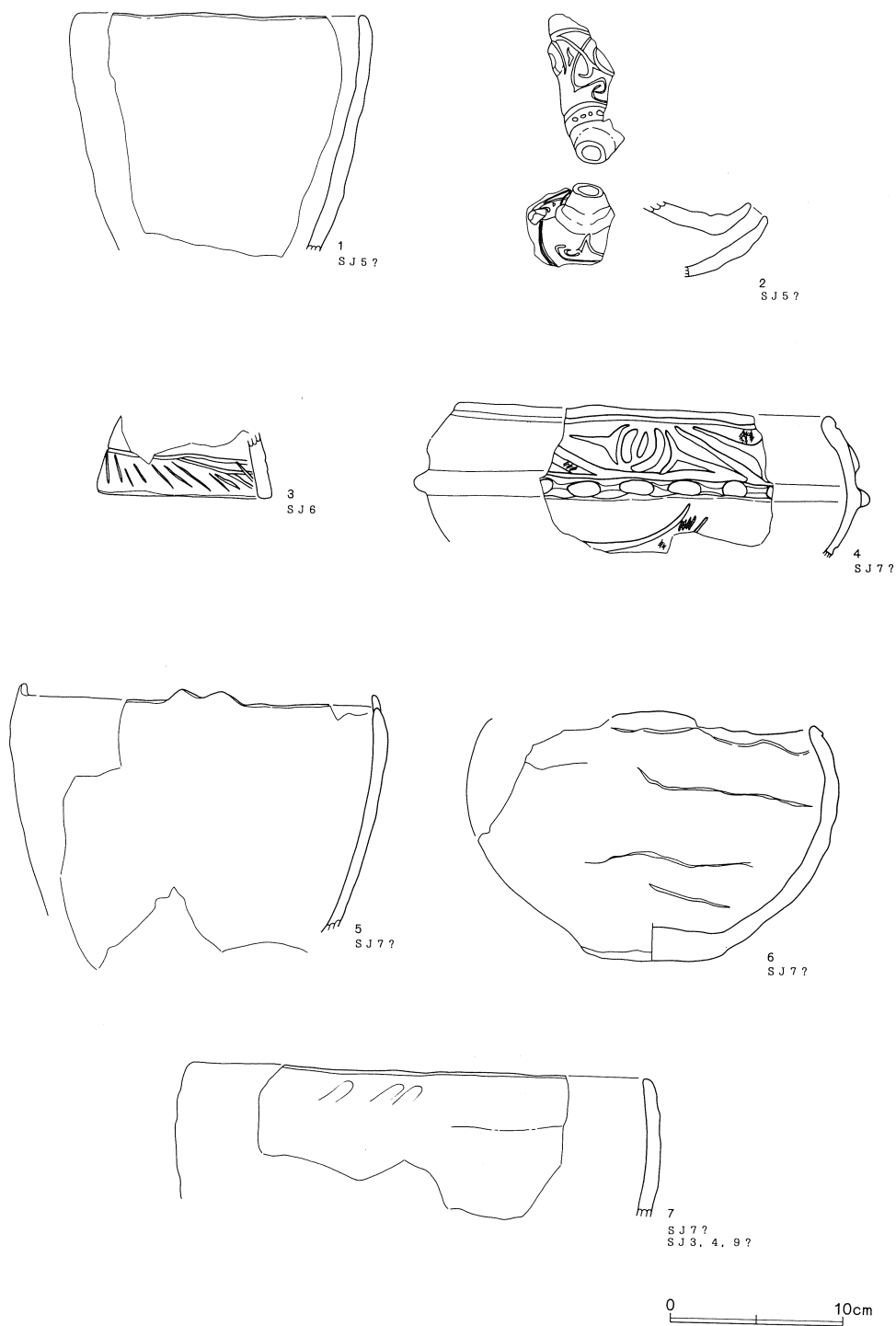
第61図 B区住居跡出土土器実測図(8)



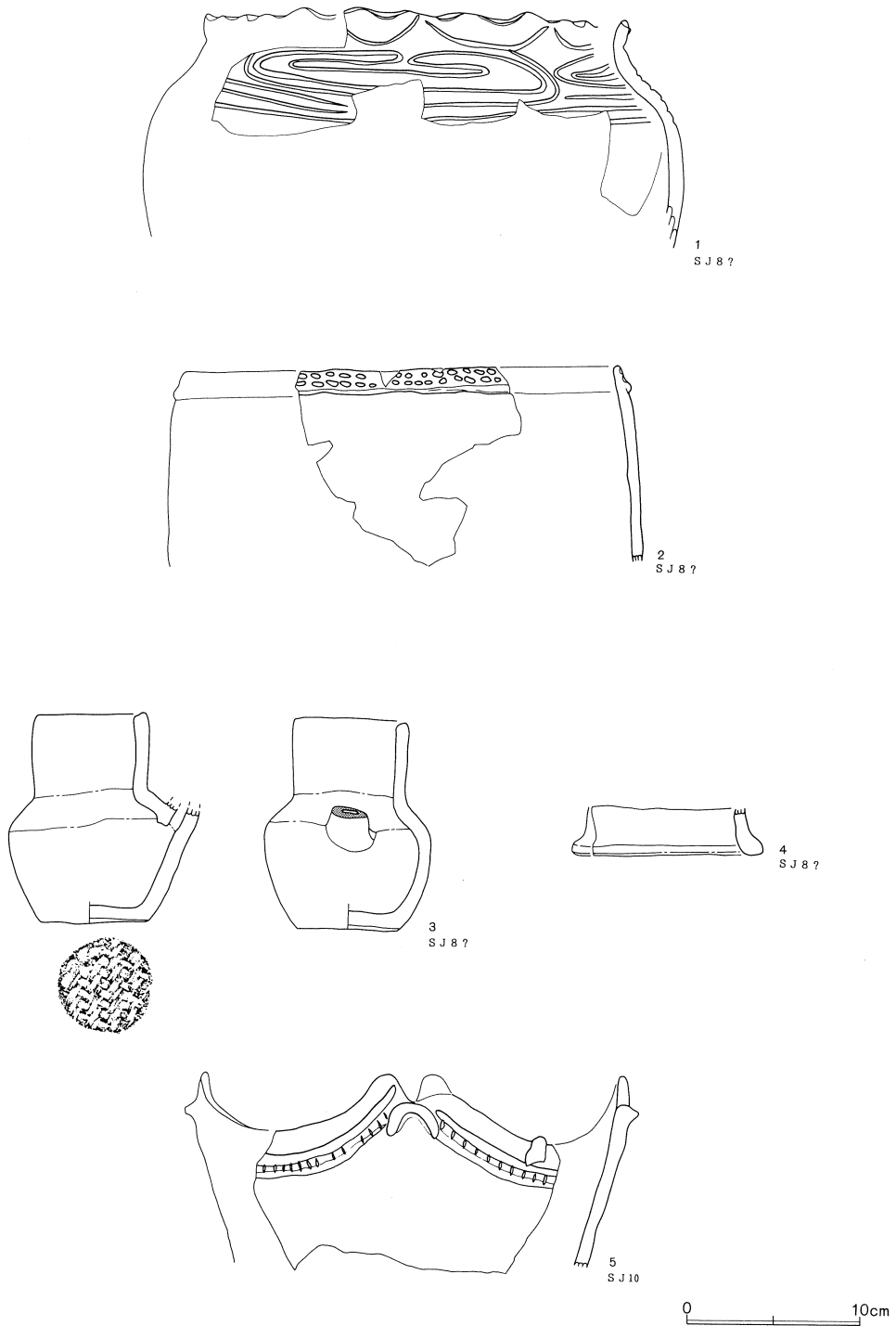
第62図 B区住居跡出土土器実測図(9)



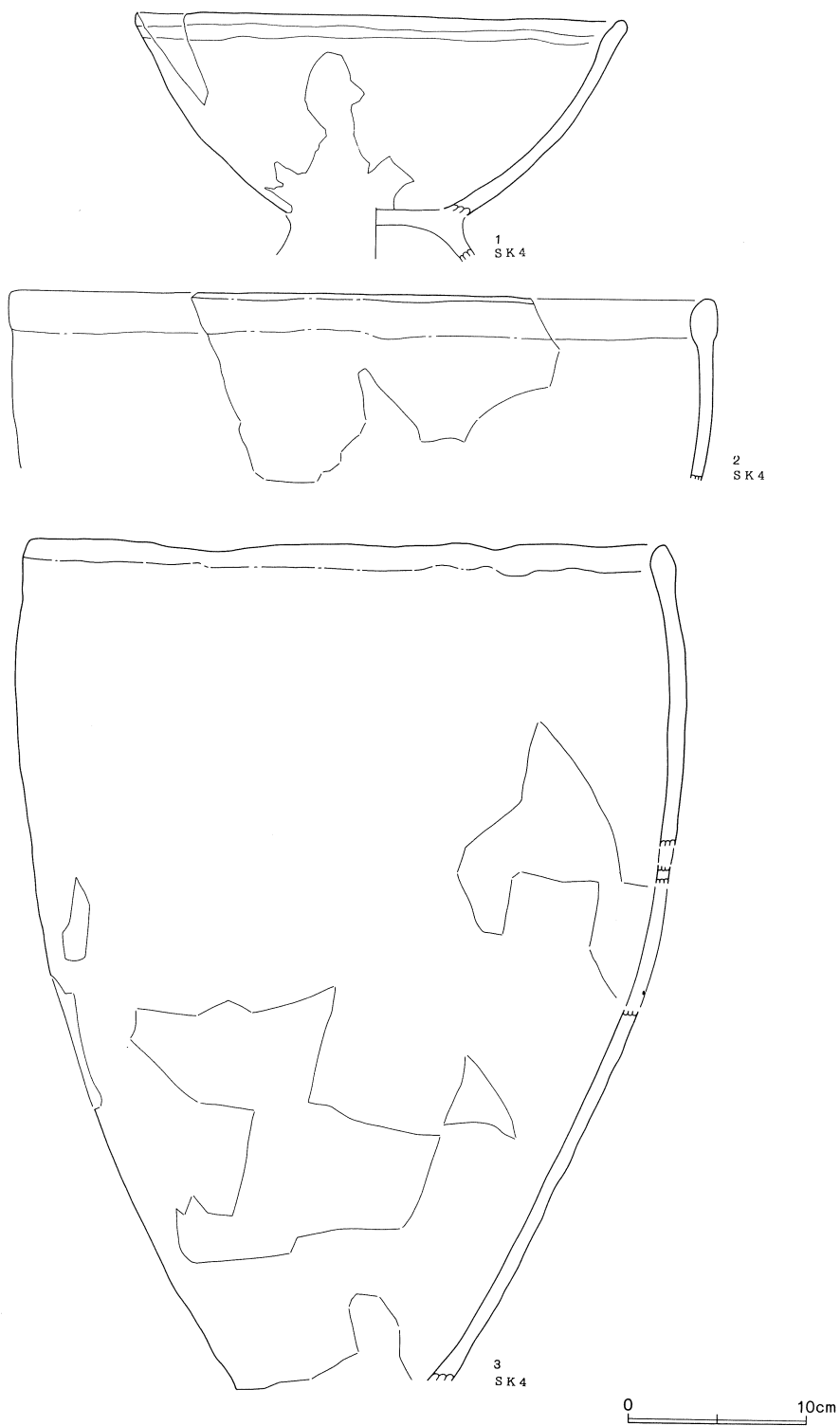
第63図 B区住居跡出土土器実測図(10)



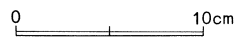
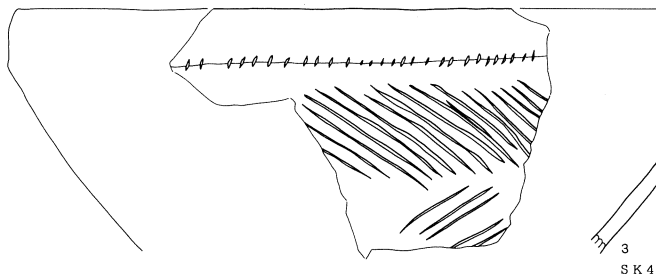
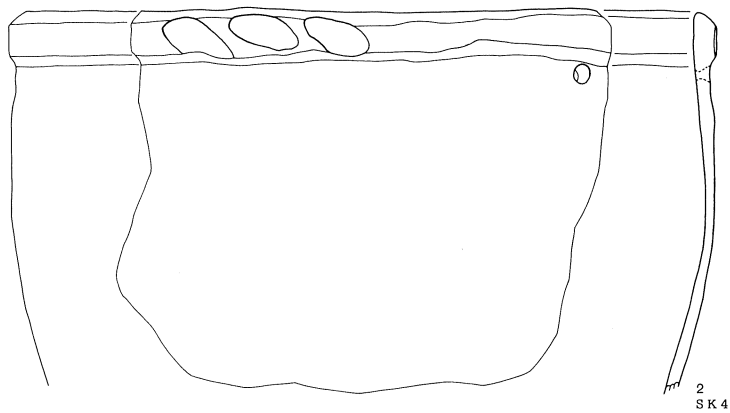
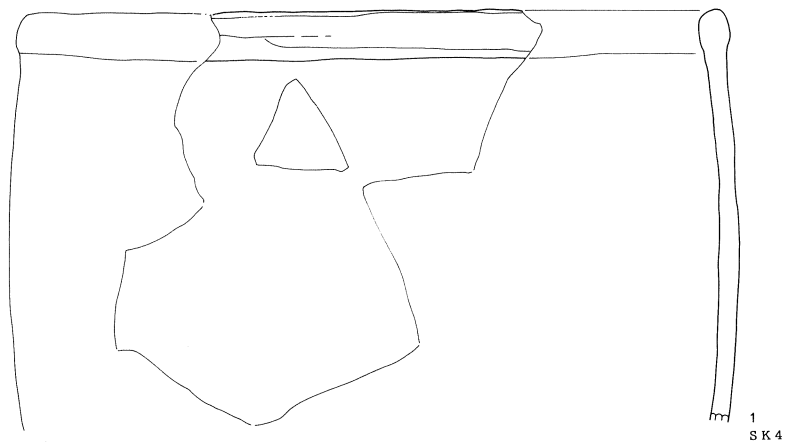
第64図 B区住居跡出土土器実測図(11)



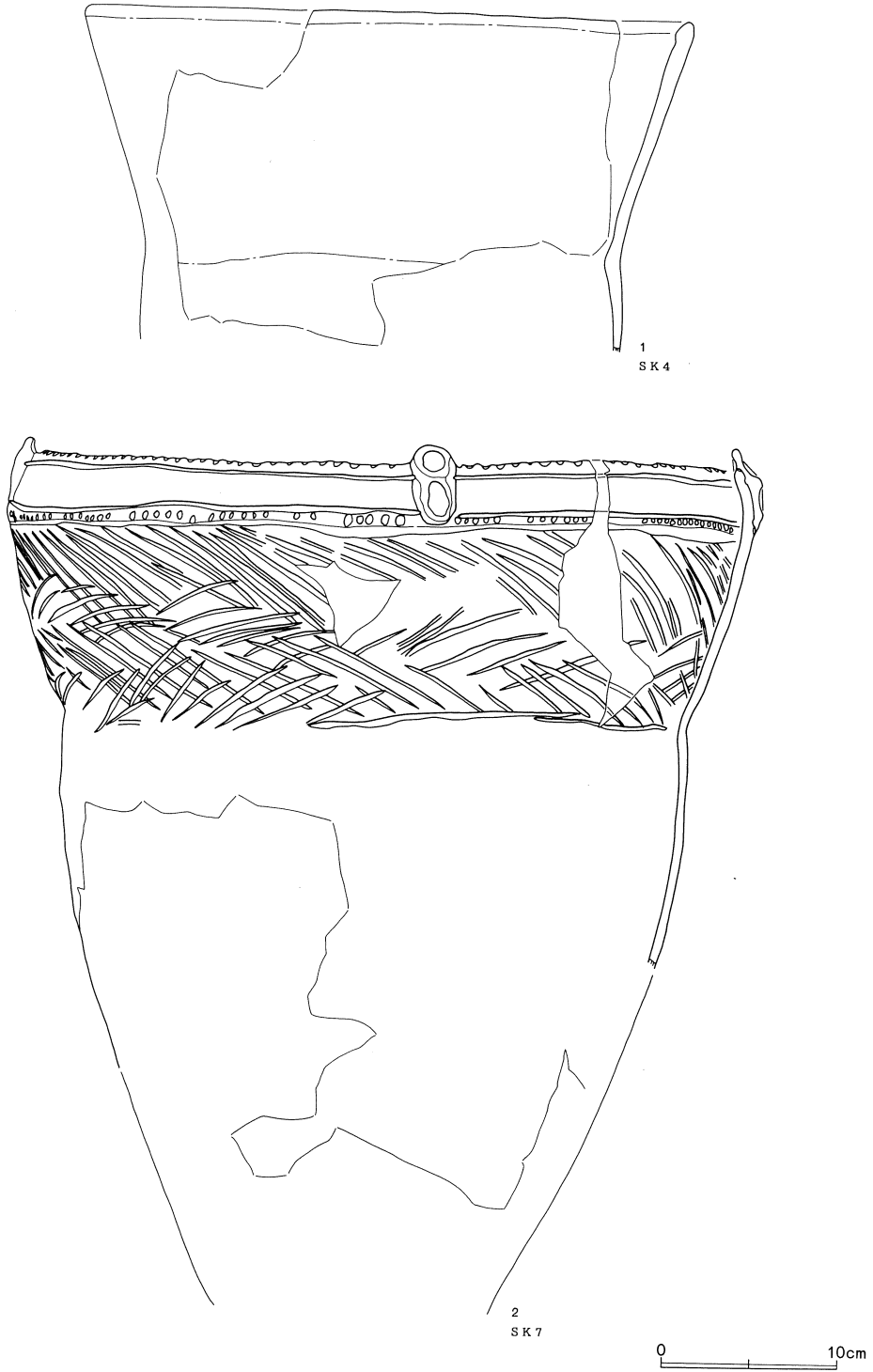
第65図 B区住居跡出土土器実測図(12)



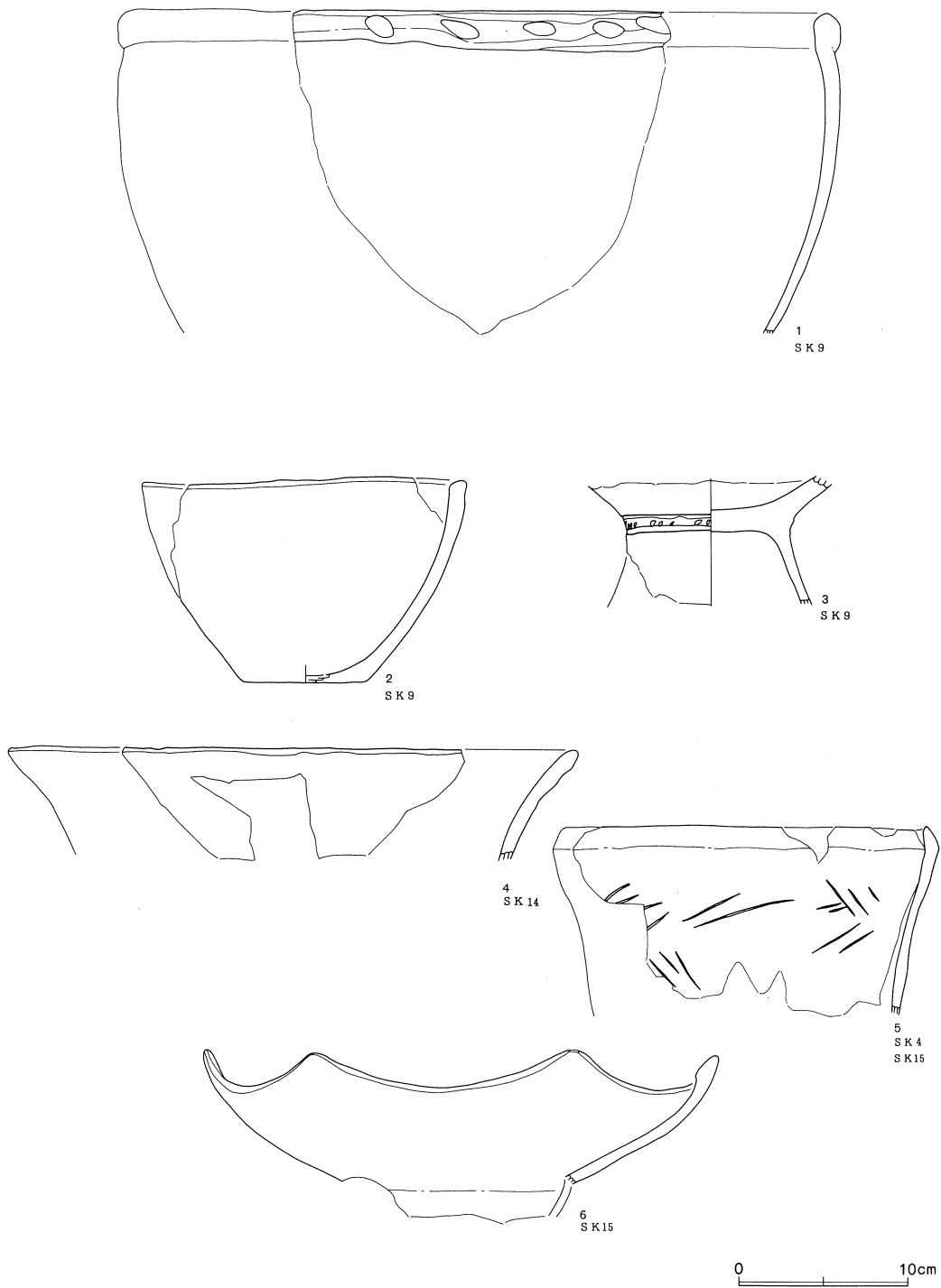
第66図 B区土壙出土土器実測図(1)



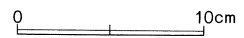
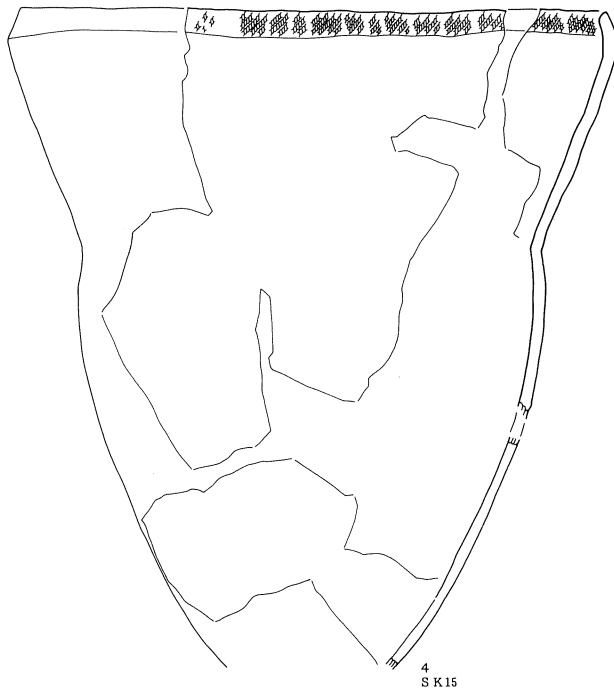
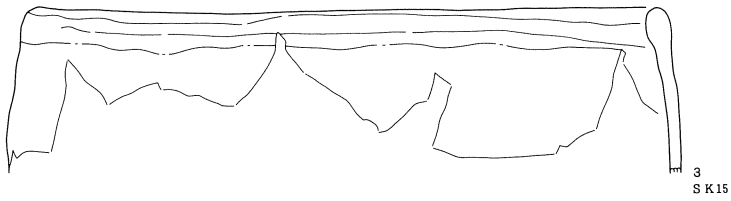
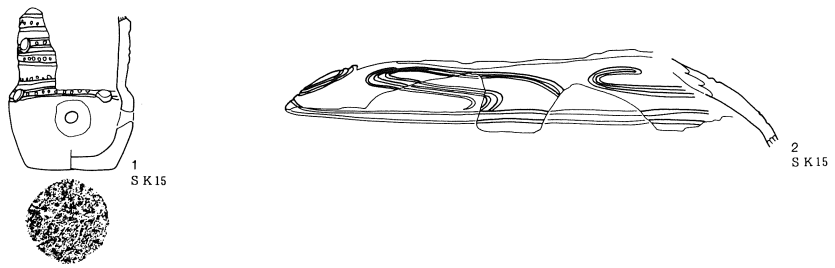
第67図 B区土壙出土土器実測図(2)



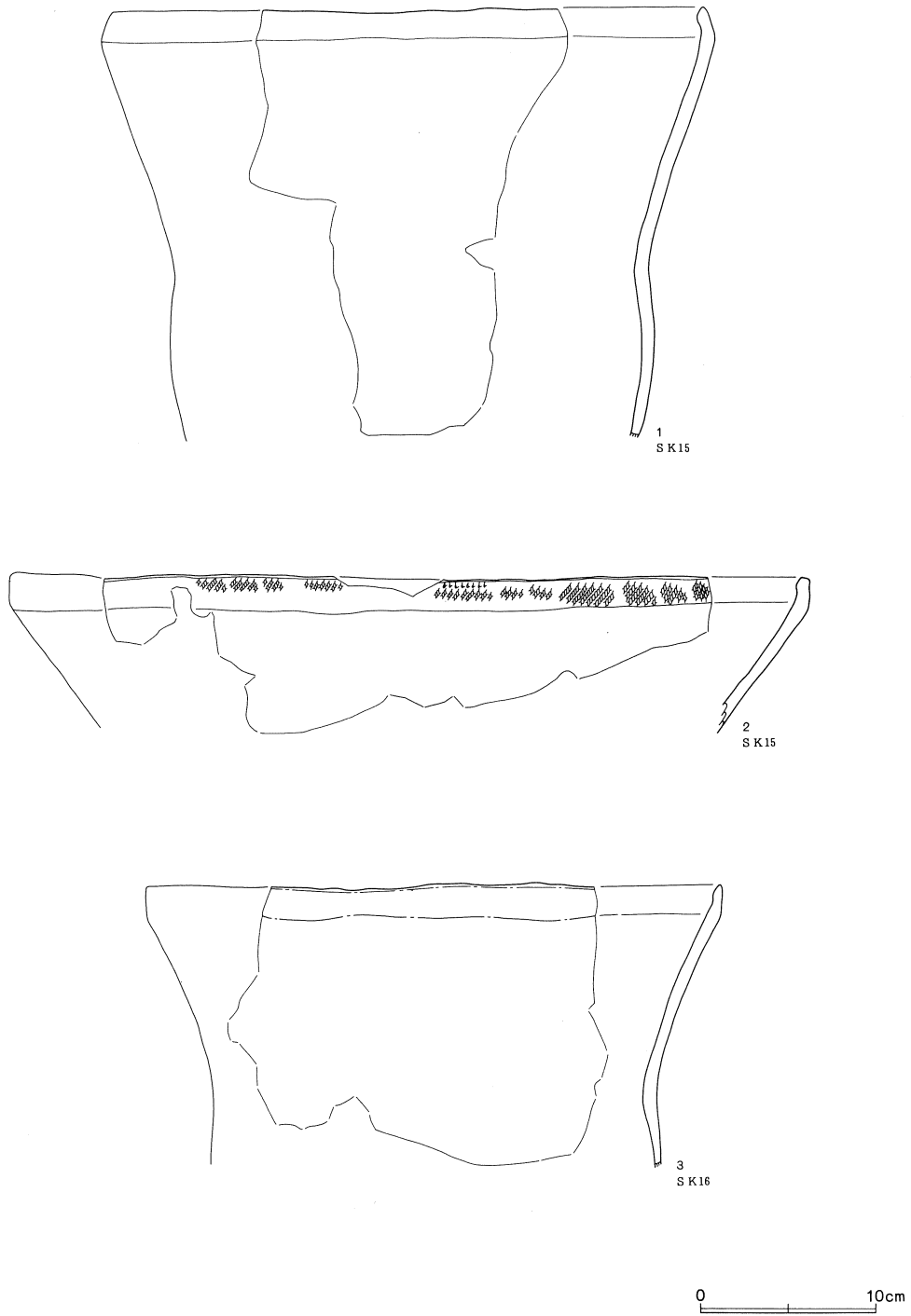
第68図 B区土壇出土土器実測図(3)



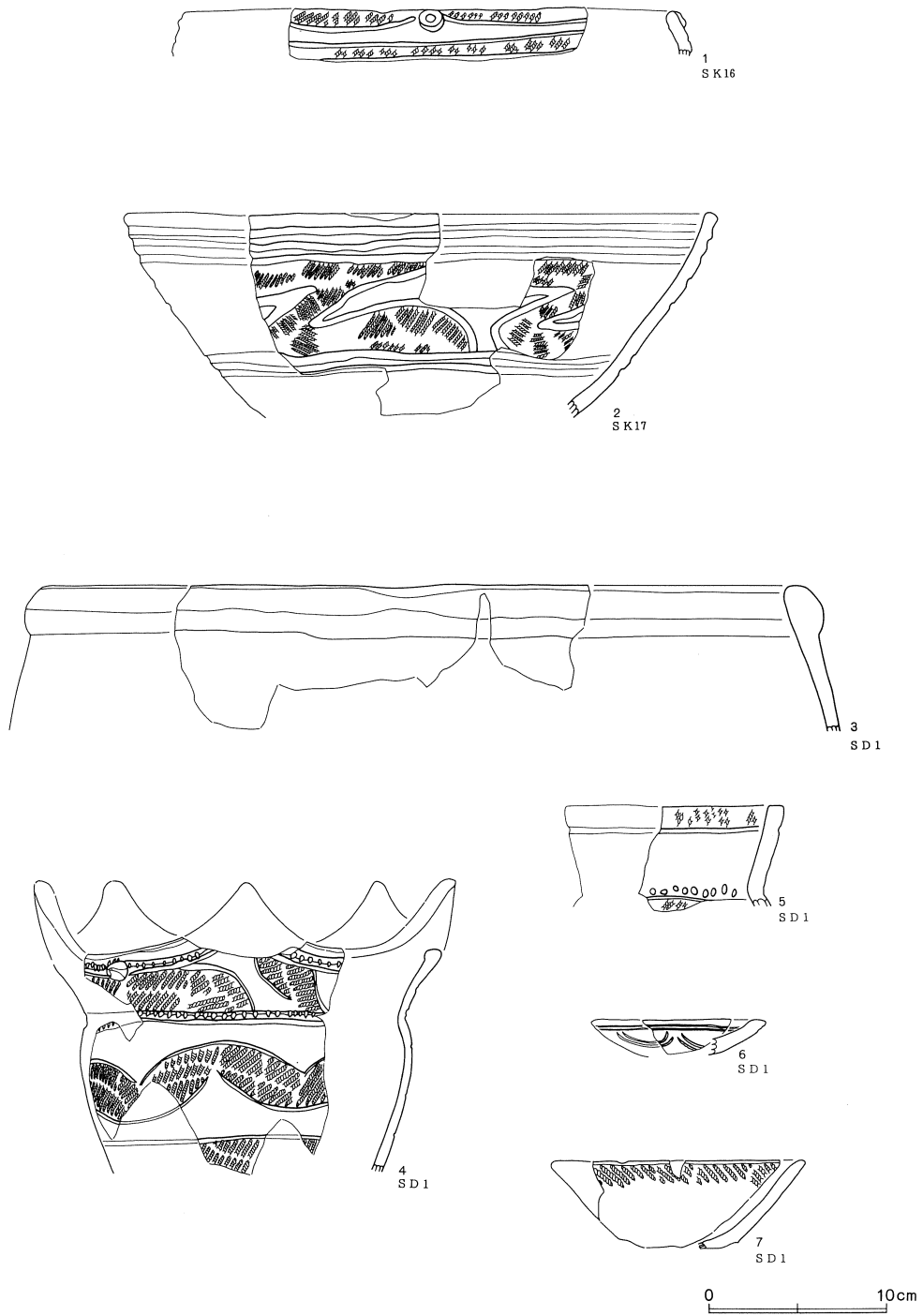
第69図 B区土壙出土土器実測図(4)



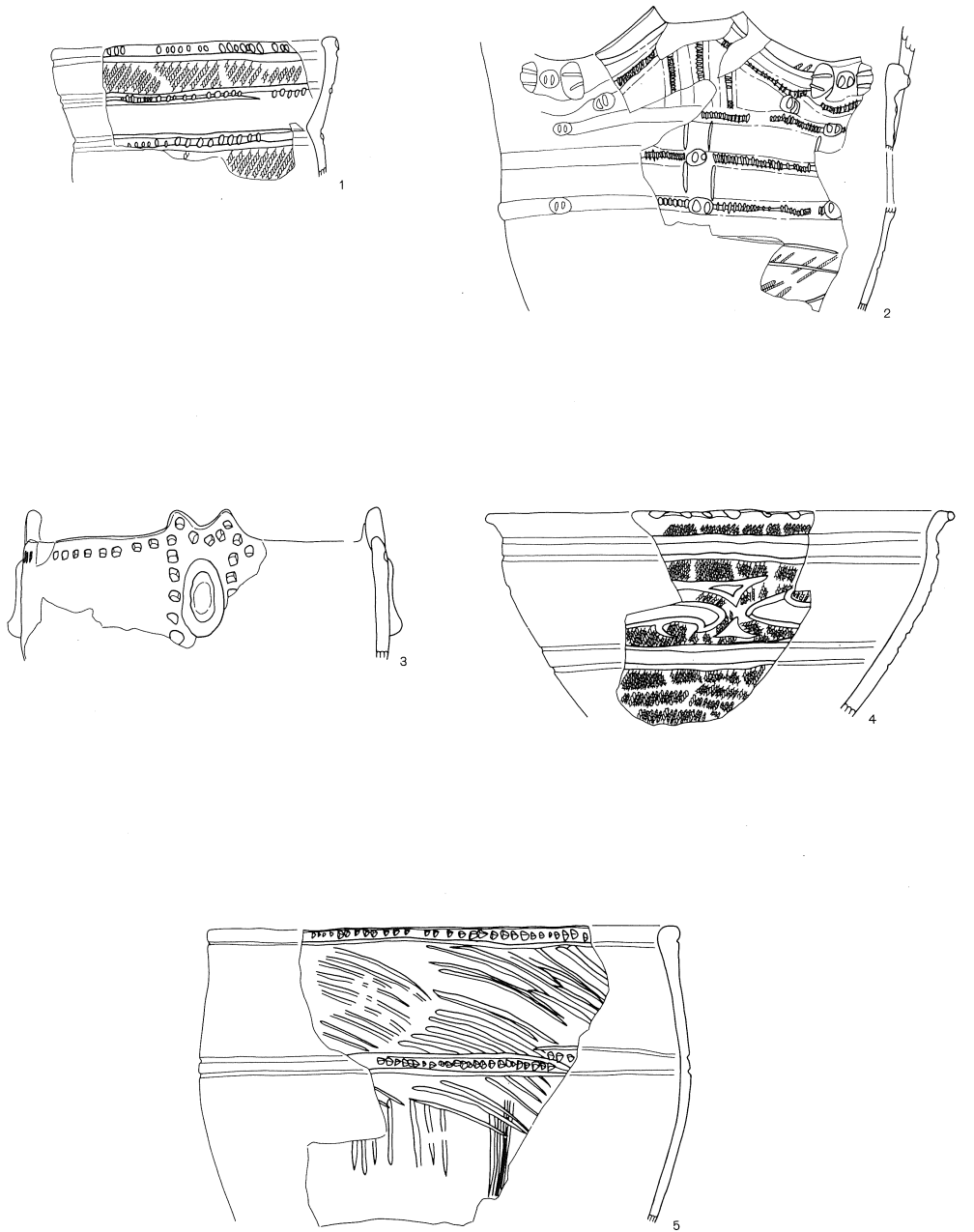
第70図 B区土壇出土土器実測図(5)



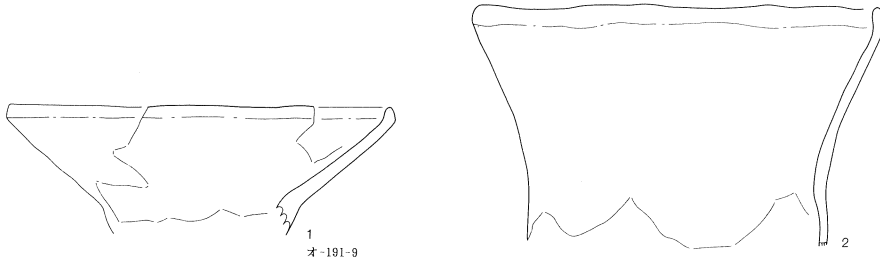
第71図 B区土壇出土土器実測図(6)



第72図 B区土壇・溝跡出土土器実測図

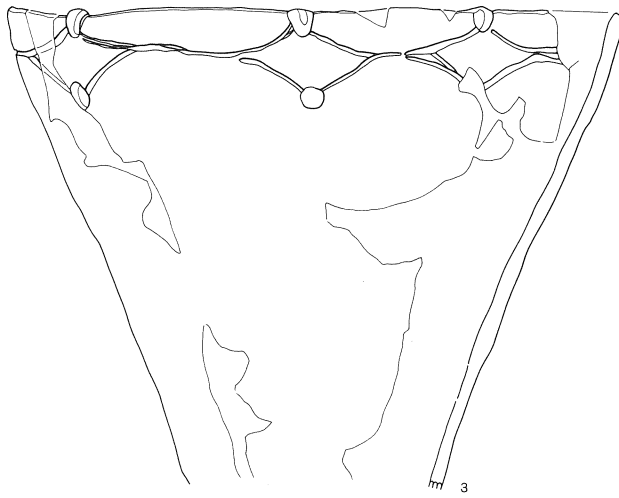


第73図 B区出土土器（ドット）実測図（1）

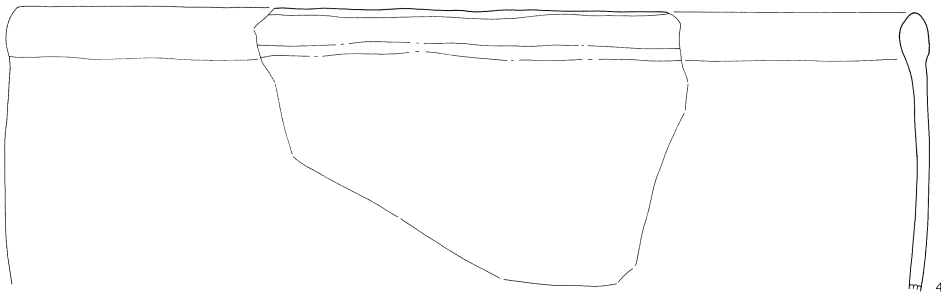


1
オ-191-9

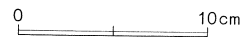
2



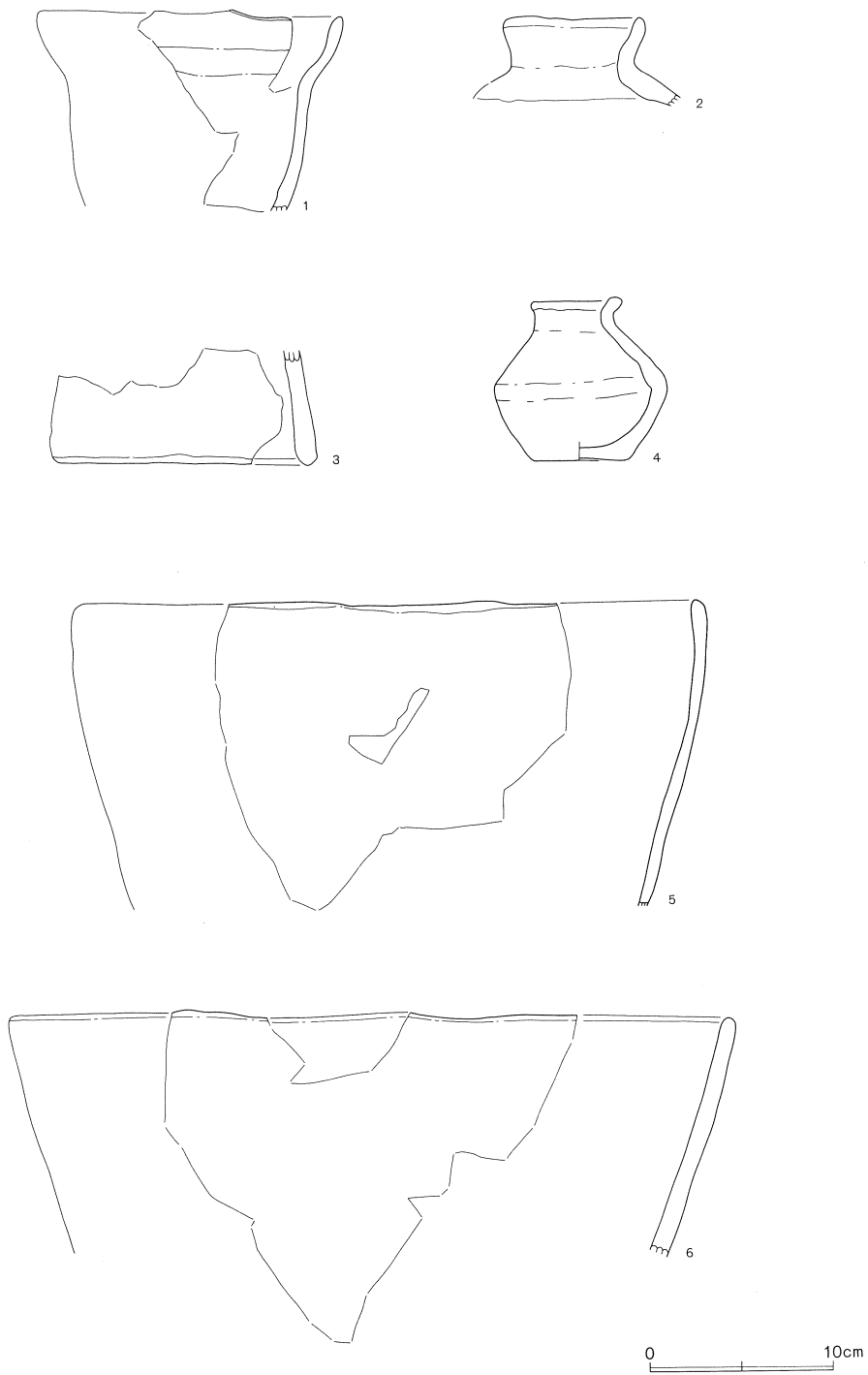
3



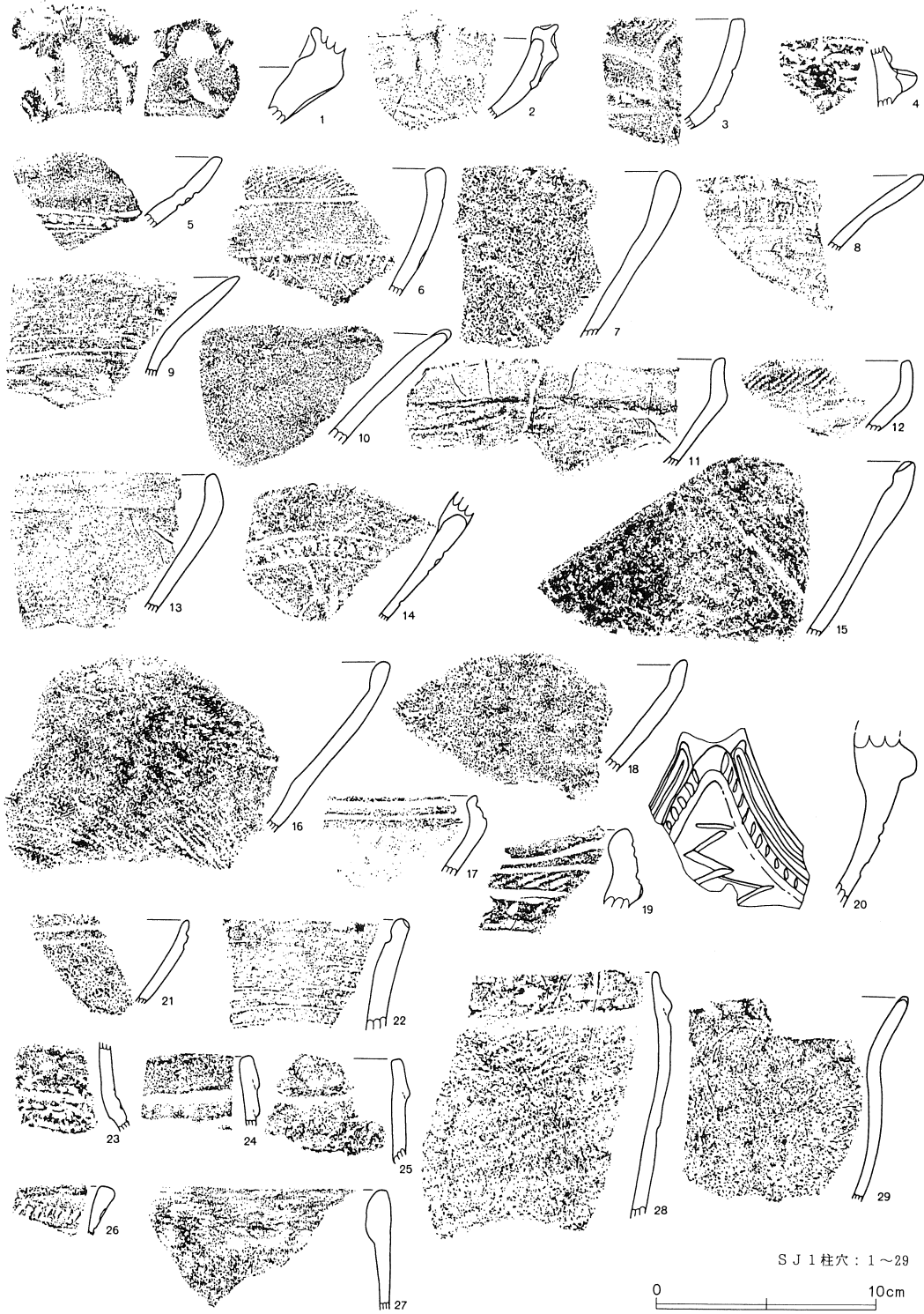
4



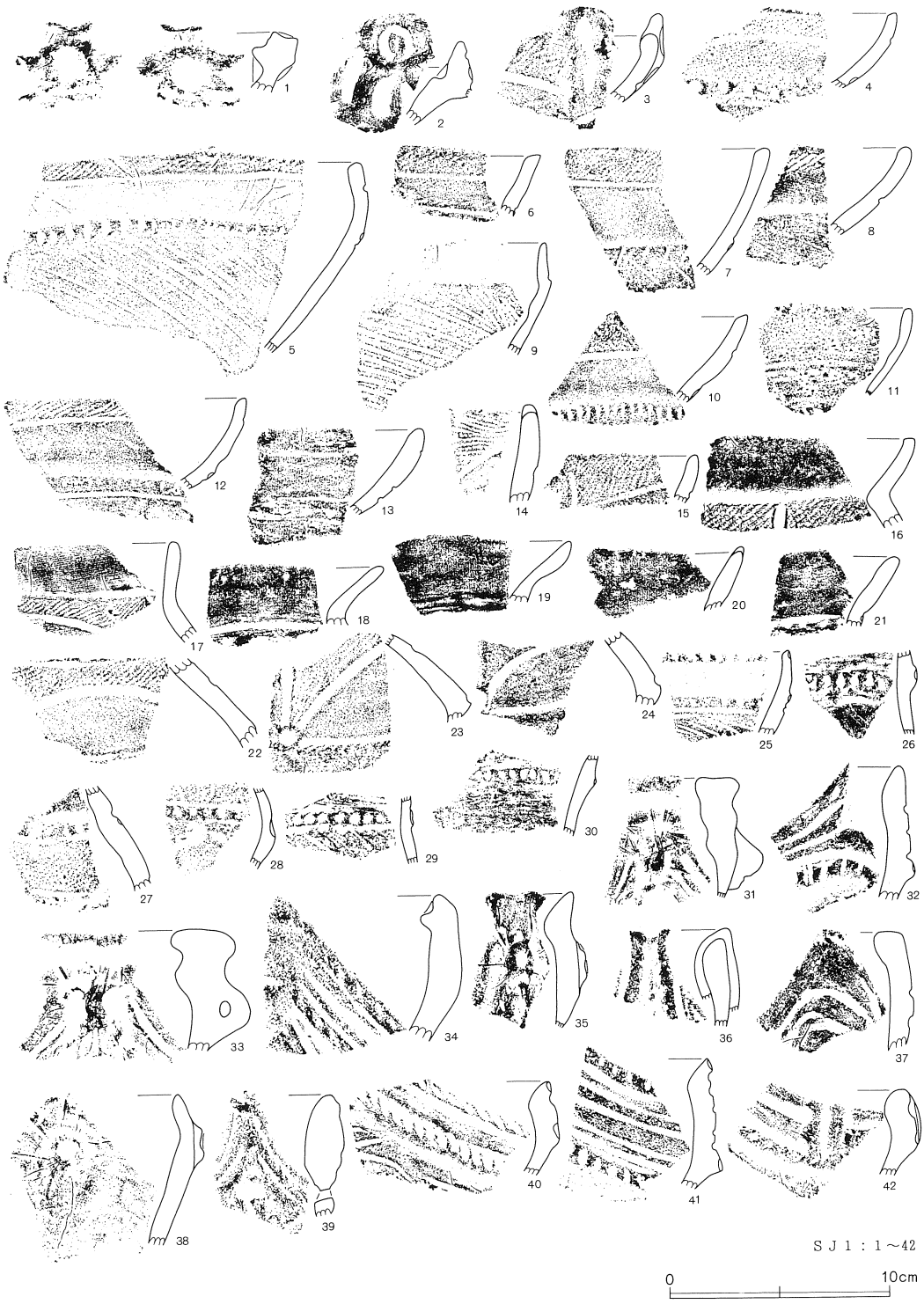
第74図 B区出土土器（ドット）実測図（2）



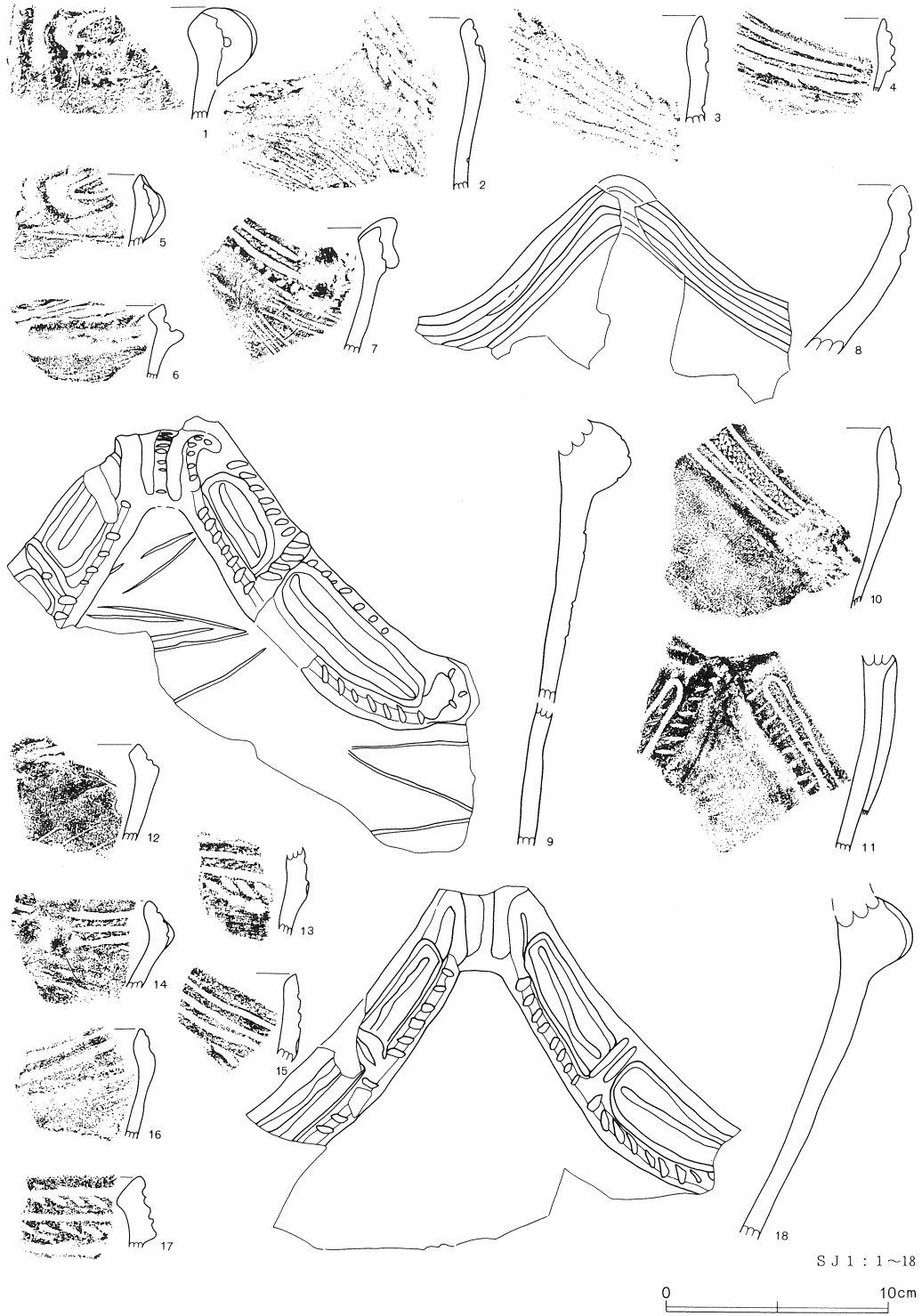
第75図 B区出土土器（ドット）実測図（3）



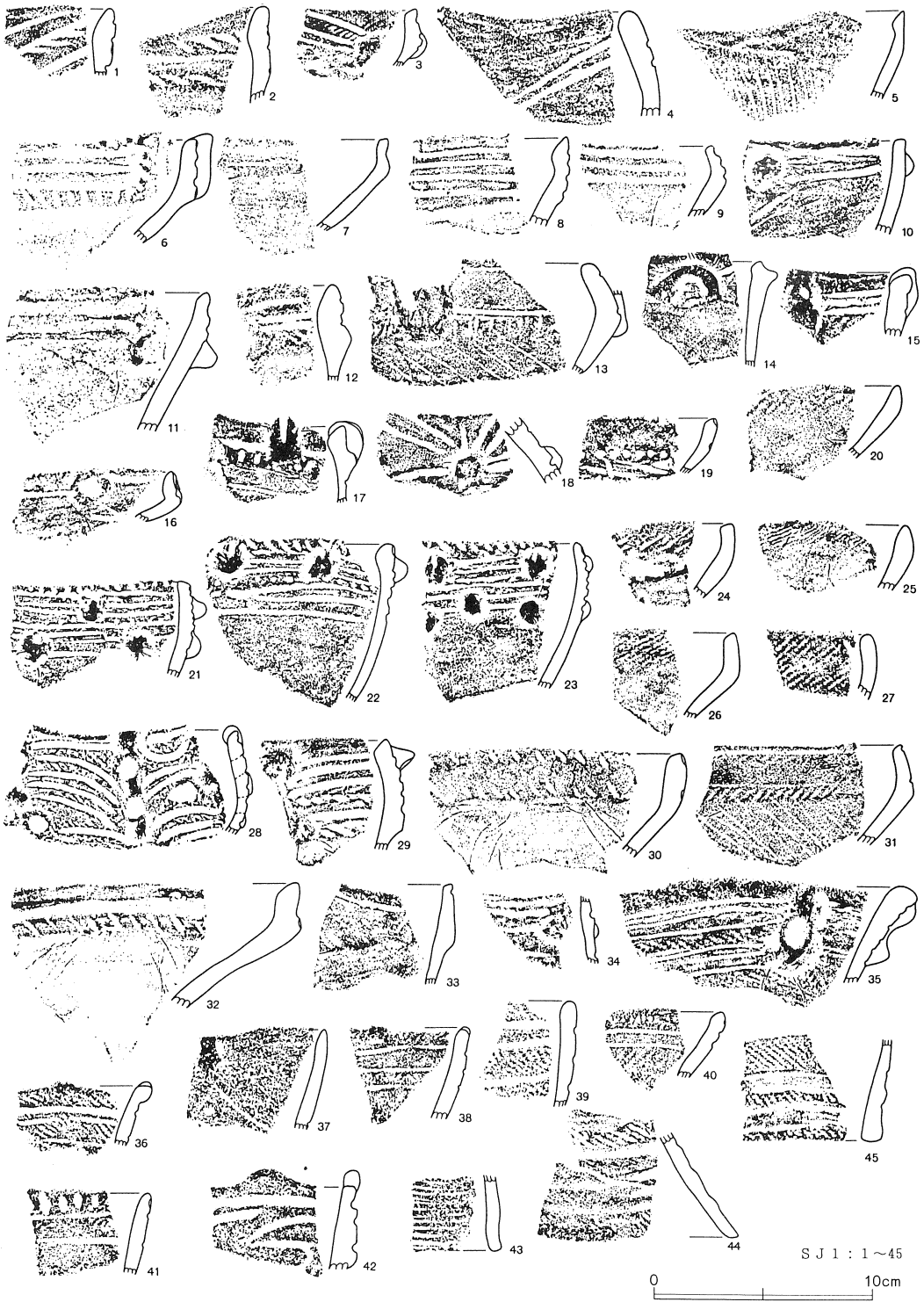
第76图 B区住居跡出土土器拓影图(1)



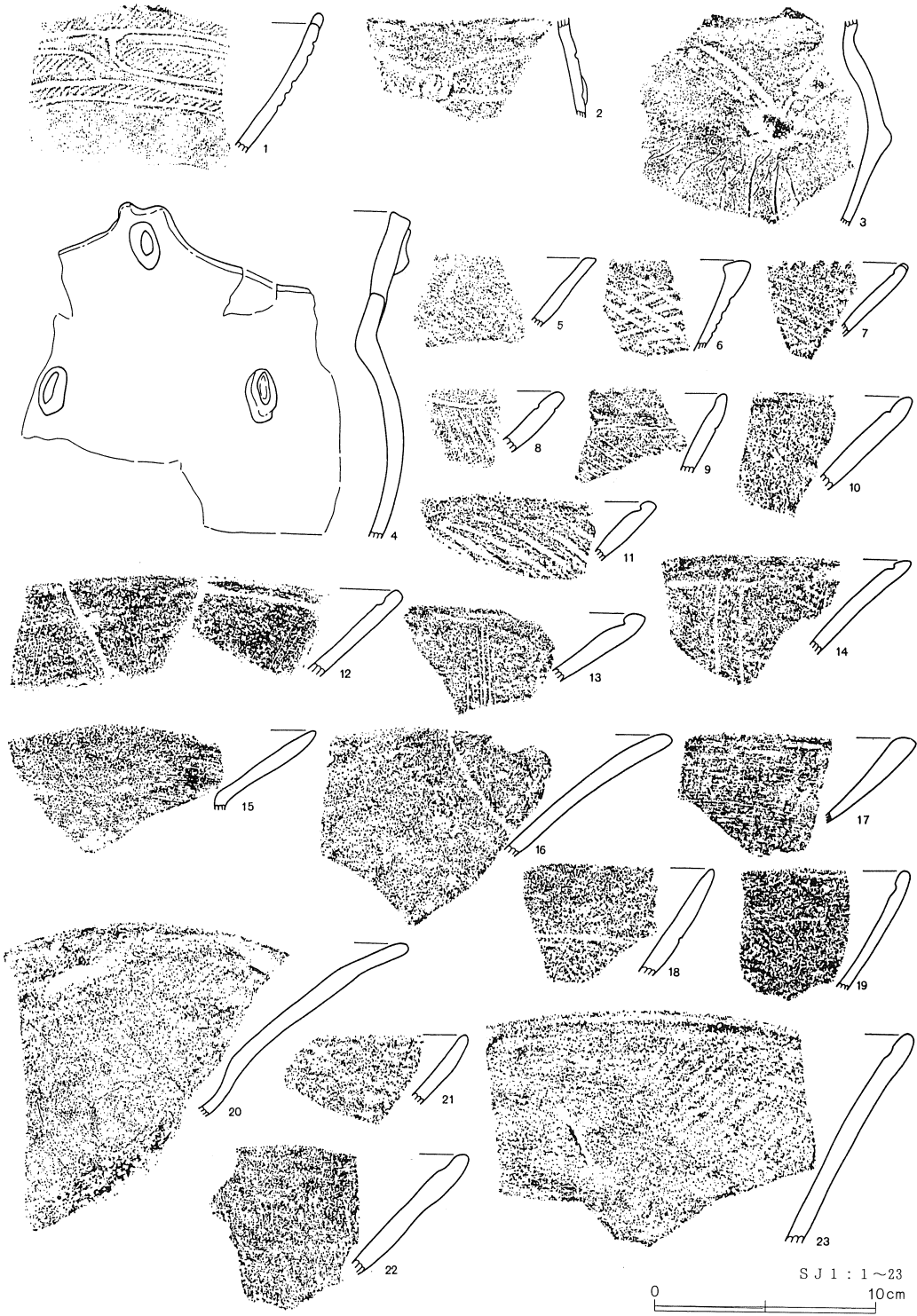
第77図 B区住居跡出土土器拓影図(2)



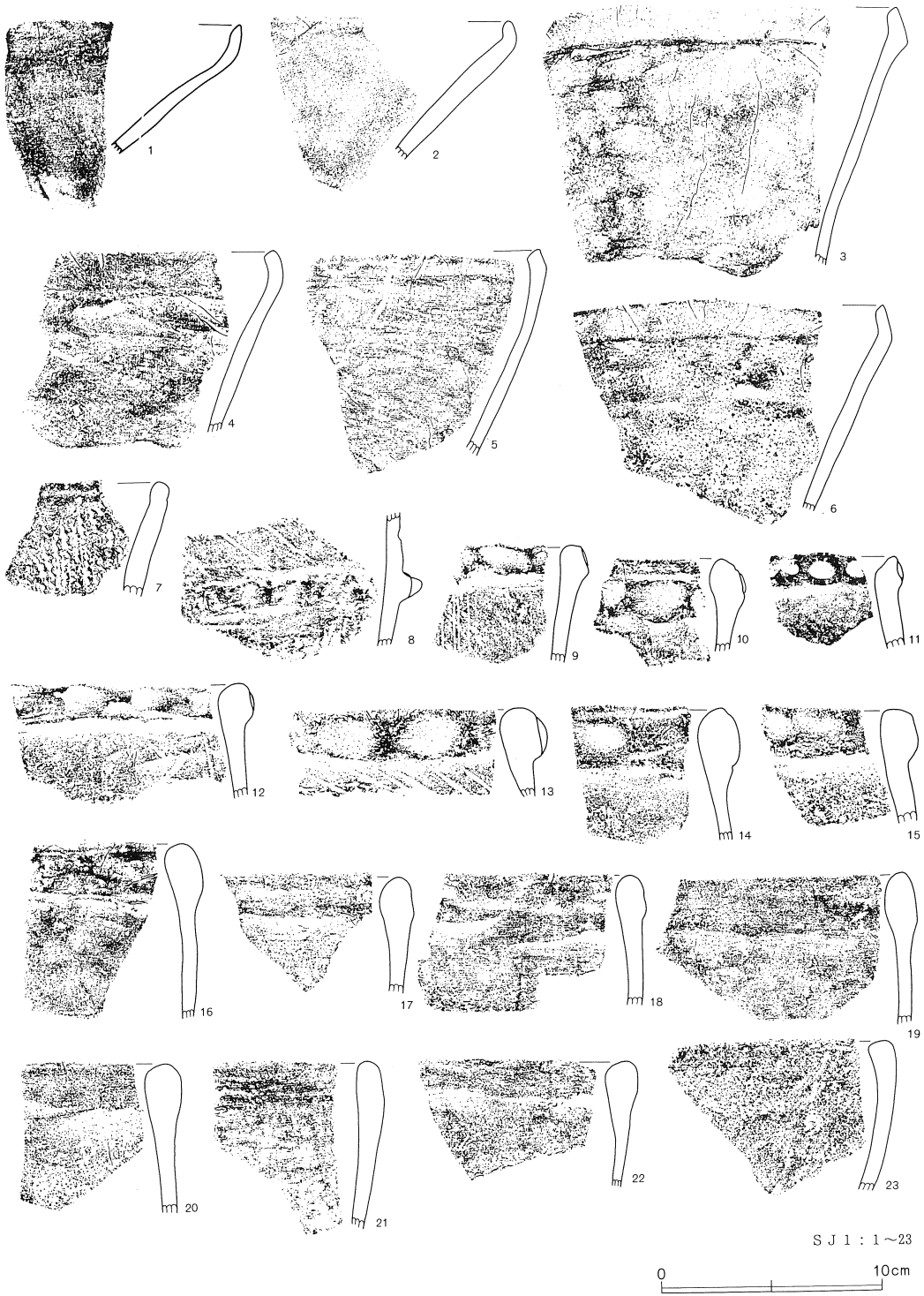
第78図 B区住居跡出土土器拓影図(3)



第79图 B区住居跡出土土器拓影图(4)



第80图 B区住居跡出土土器拓影图(5)



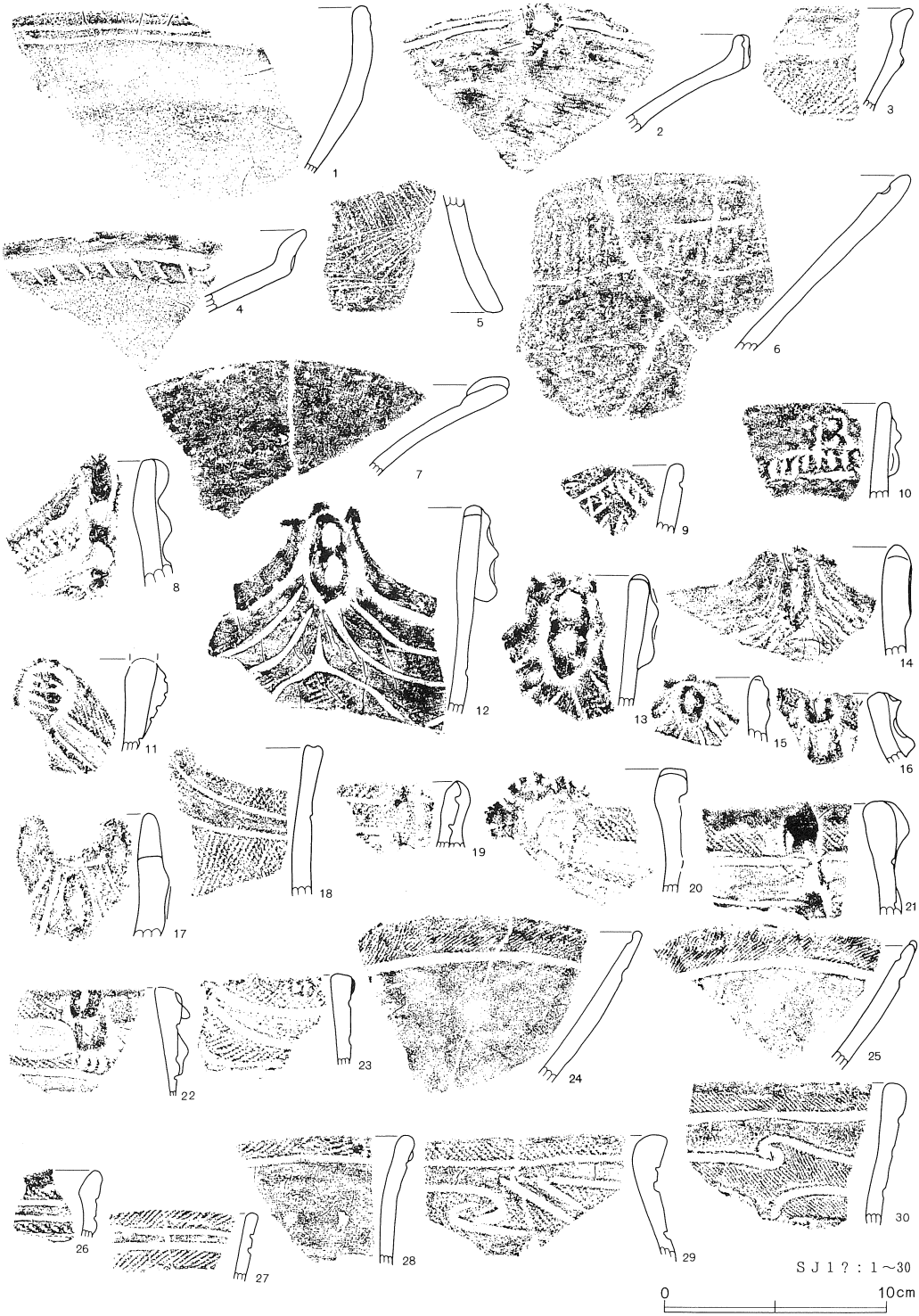
第81図 B区住居跡出土土器拓影图(6)



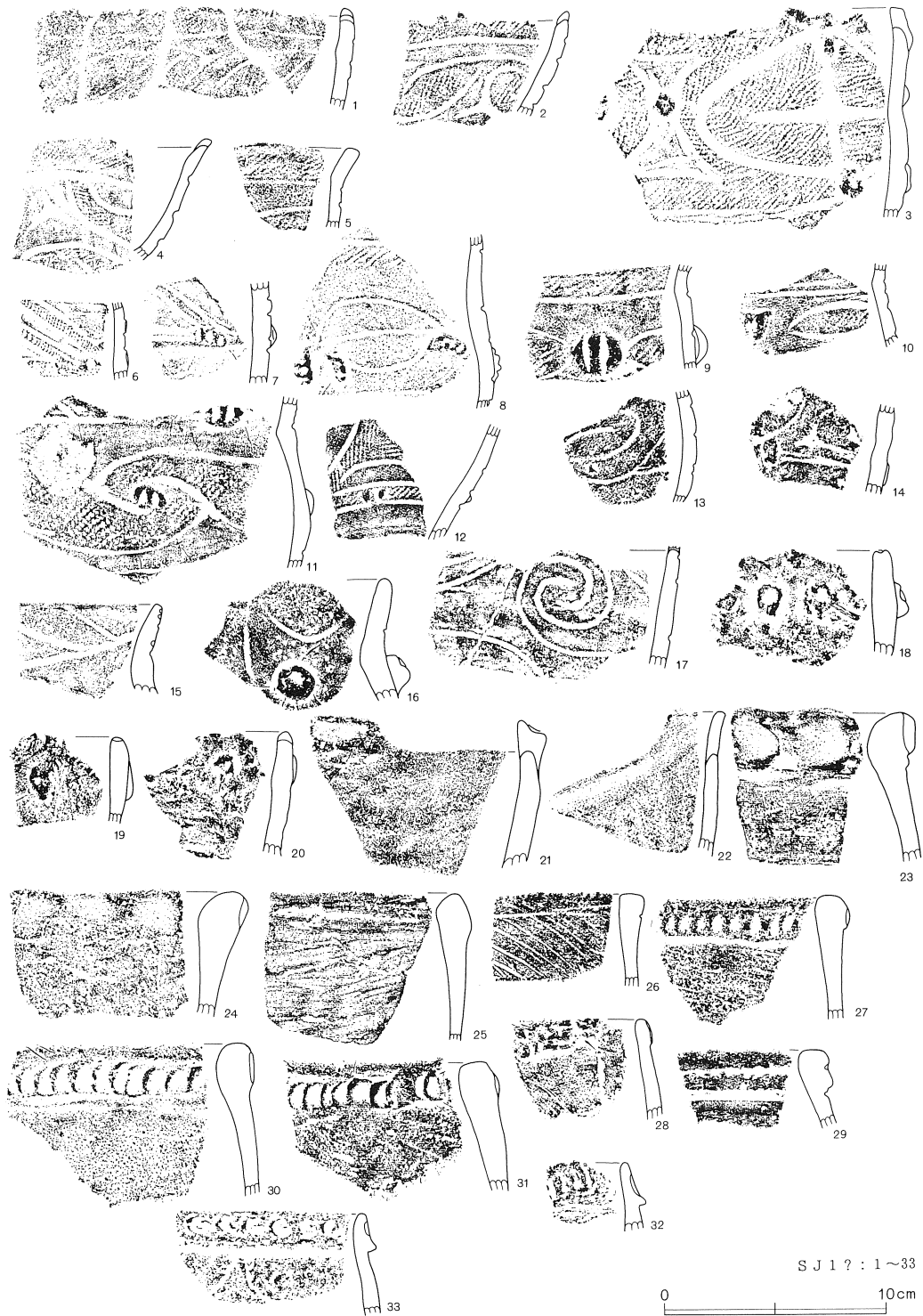
第82図 B区住居跡出土土器拓影图(7)



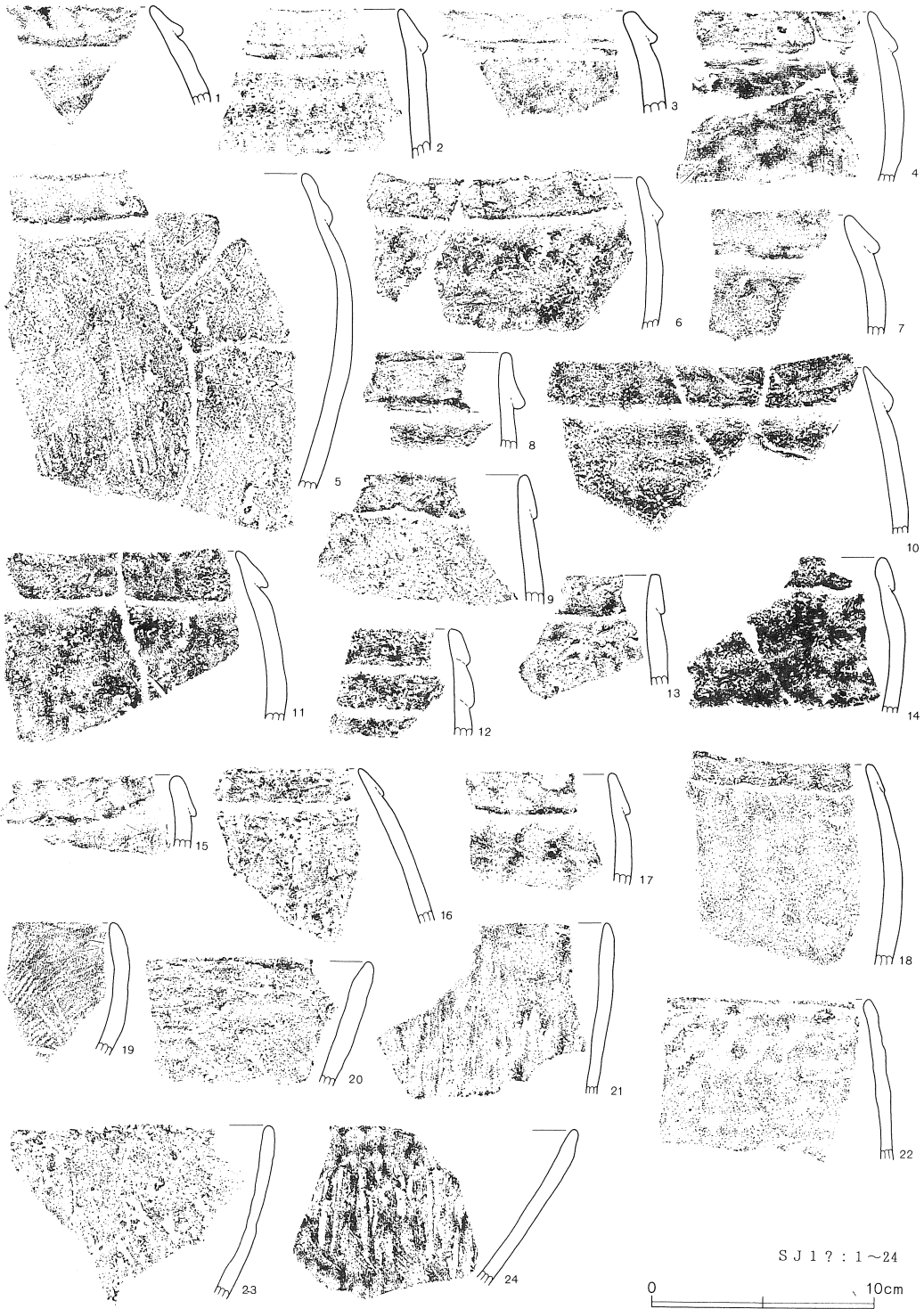
第83图 B区住居跡出土土器拓影图(8)



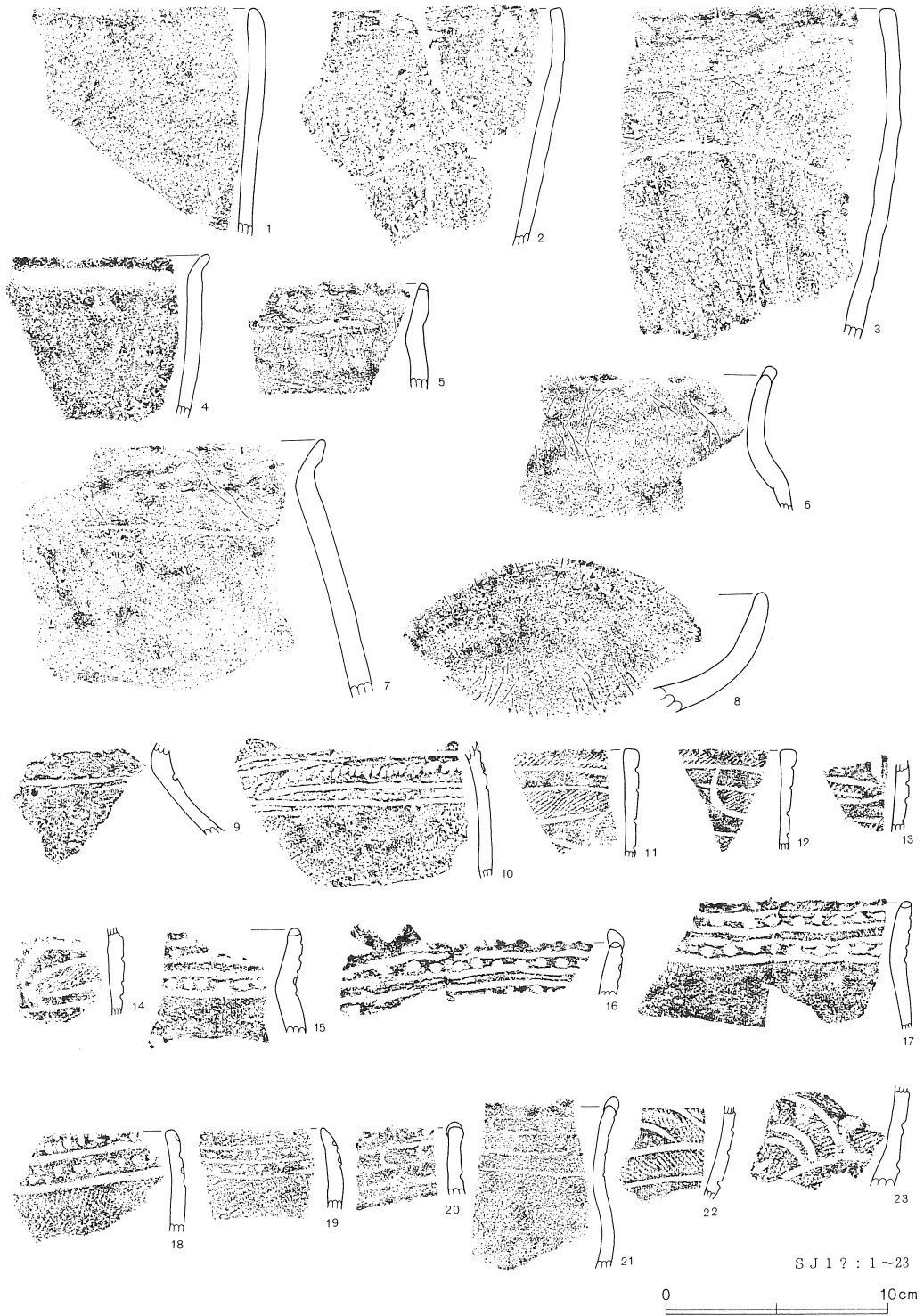
第84図 B区住居跡出土土器拓影図(9)



第85図 B区住居跡出土土器拓影図(10)



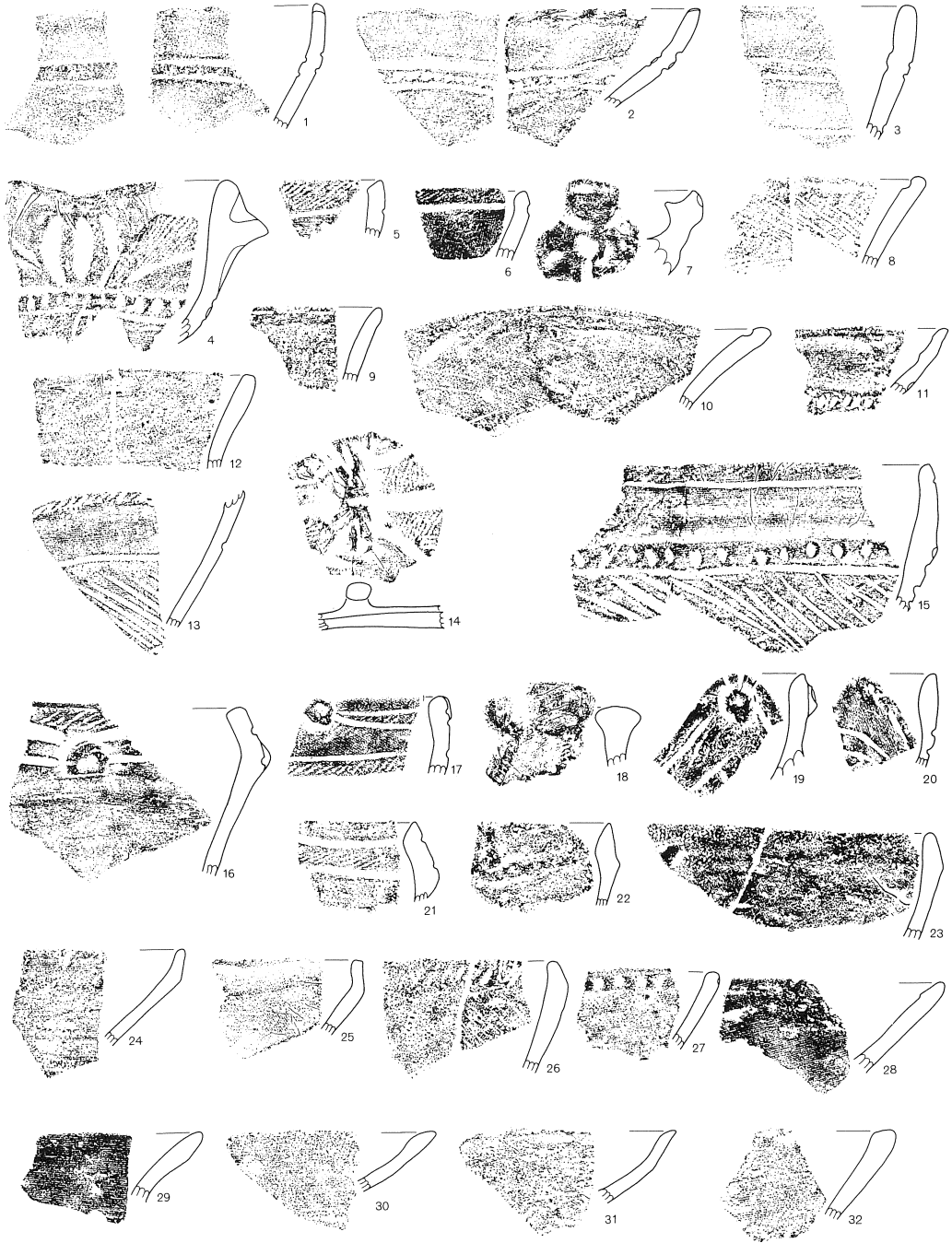
第86図 B区住居跡出土土器拓影图 (11)



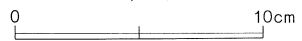
第87図 B区住居跡出土土器拓影图*(12)



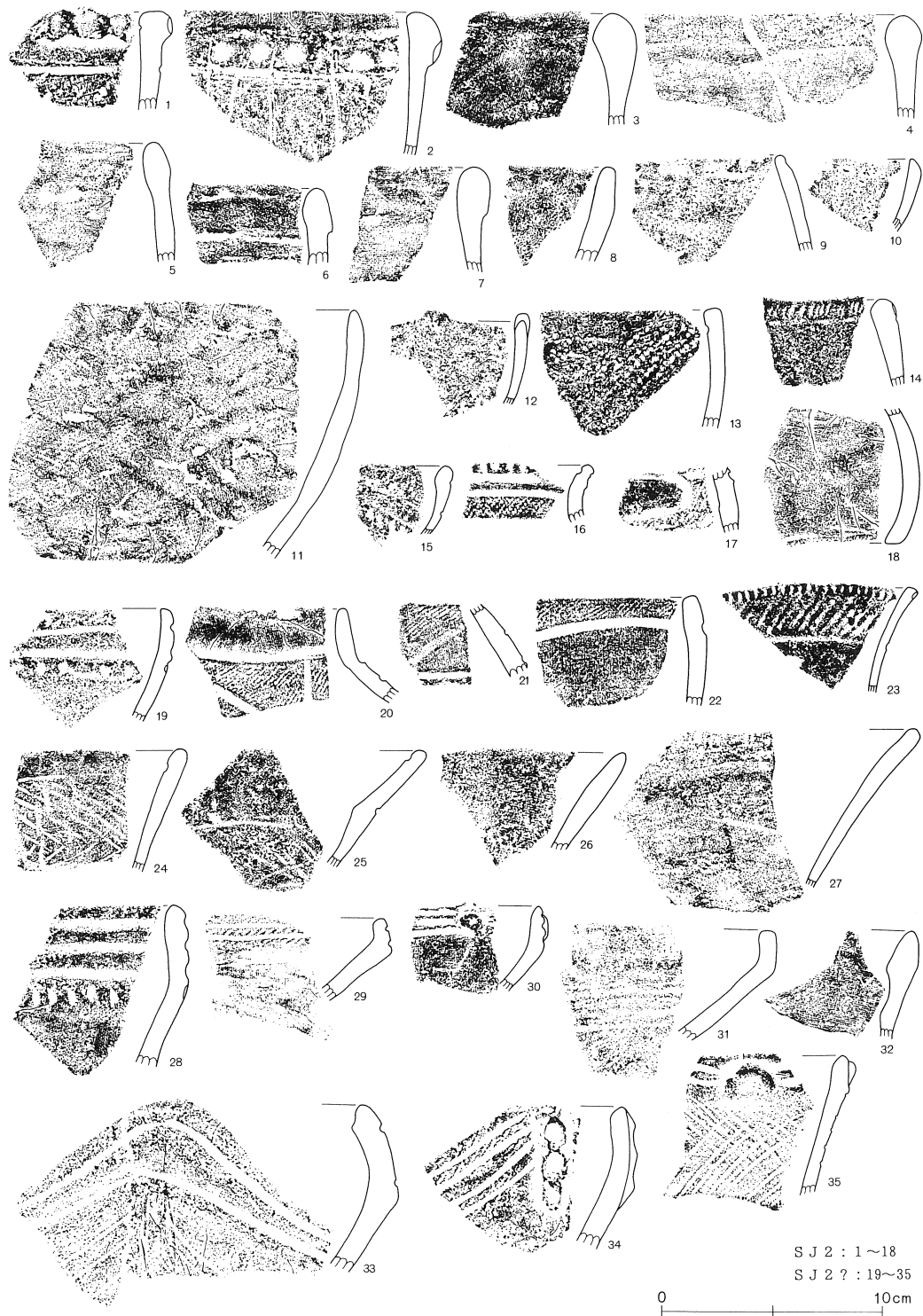
第88图 B区住居跡出土土器拓影图(13)



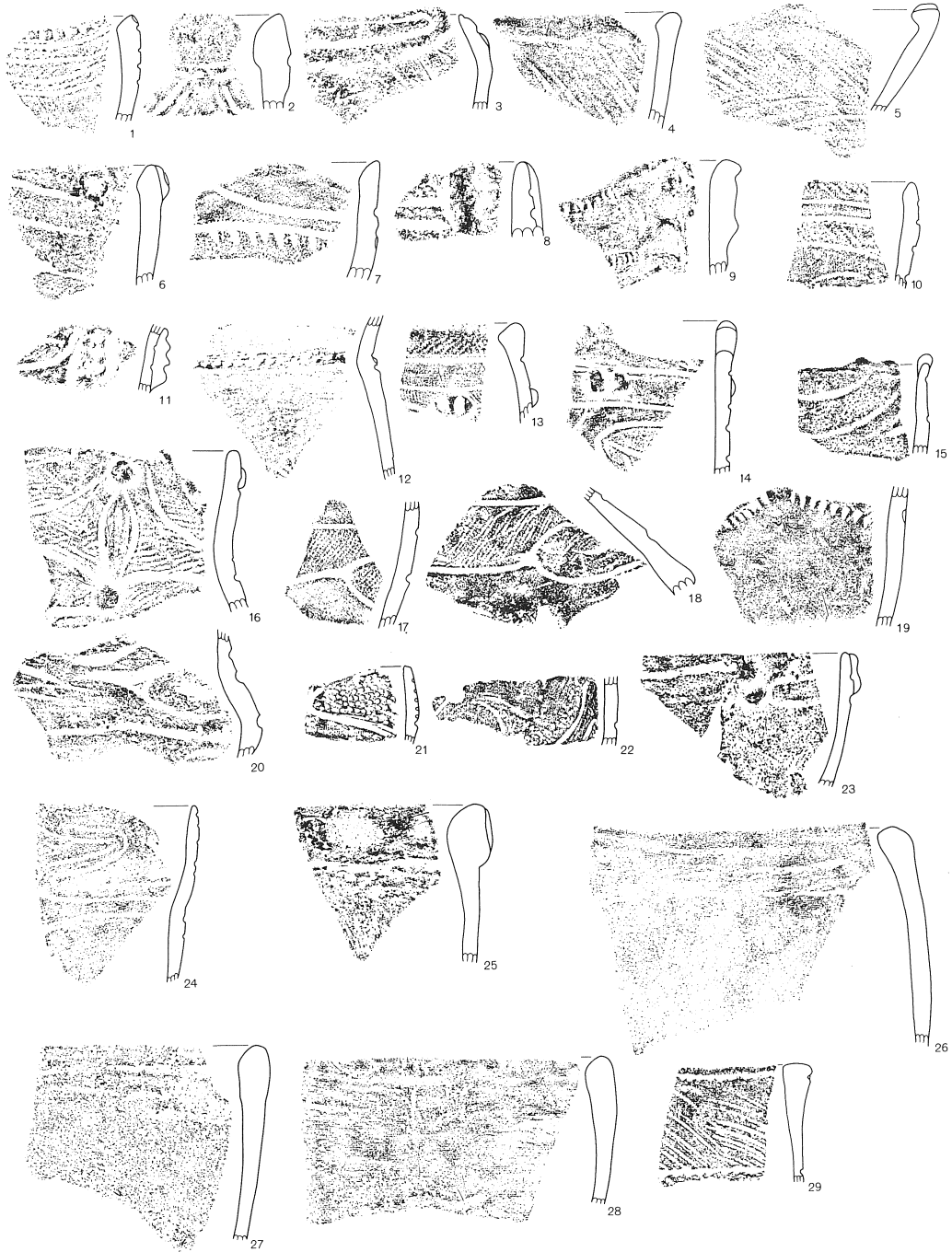
S J 2柱穴 : 1~10, 12~32
S J 2, 3柱穴 : 11



第89图 B区住居跡出土土器拓影图(14)



第90図 B区住居跡出土土器拓影図 (15)



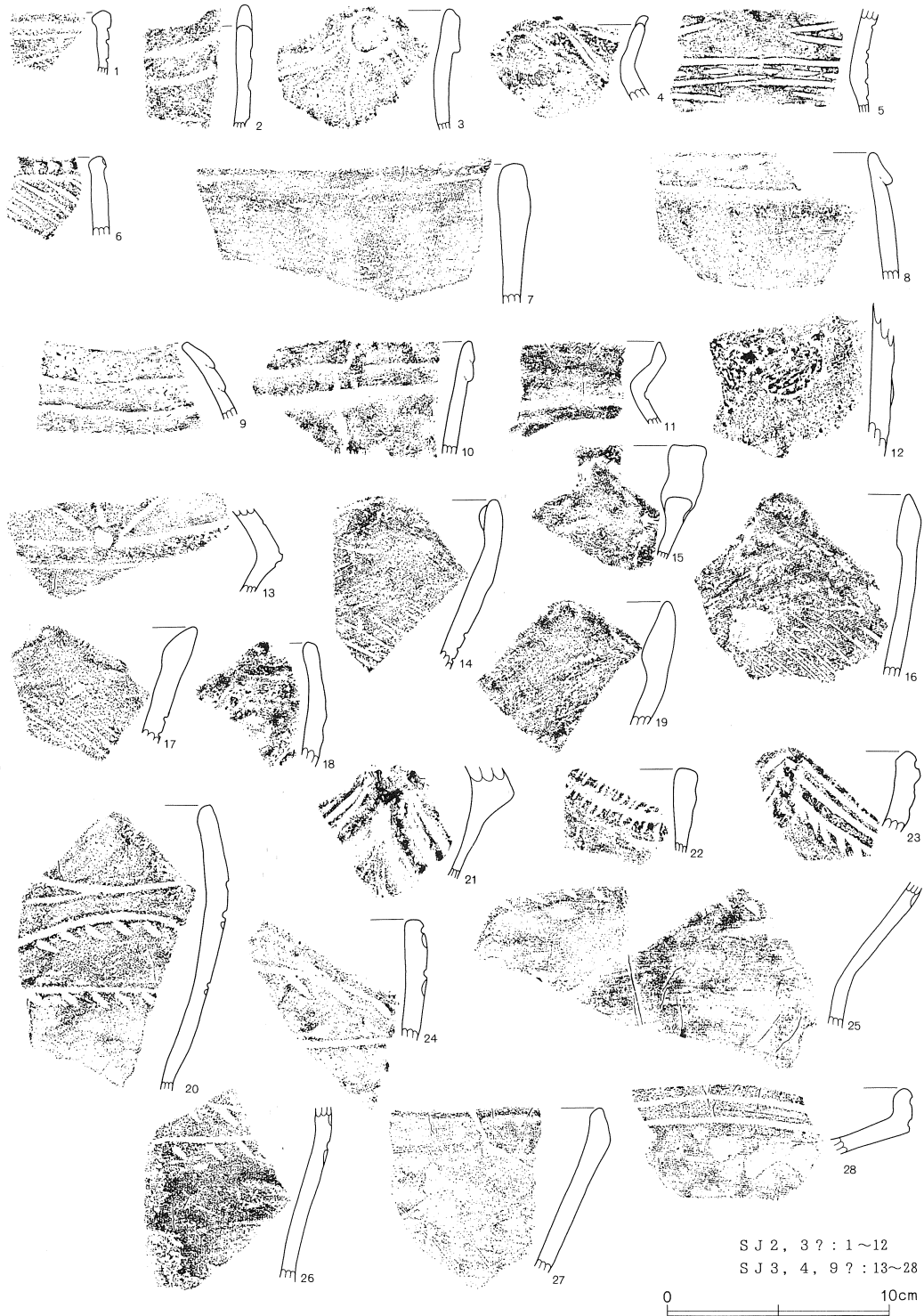
S J 2 ? : 1 ~ 29

0 10cm

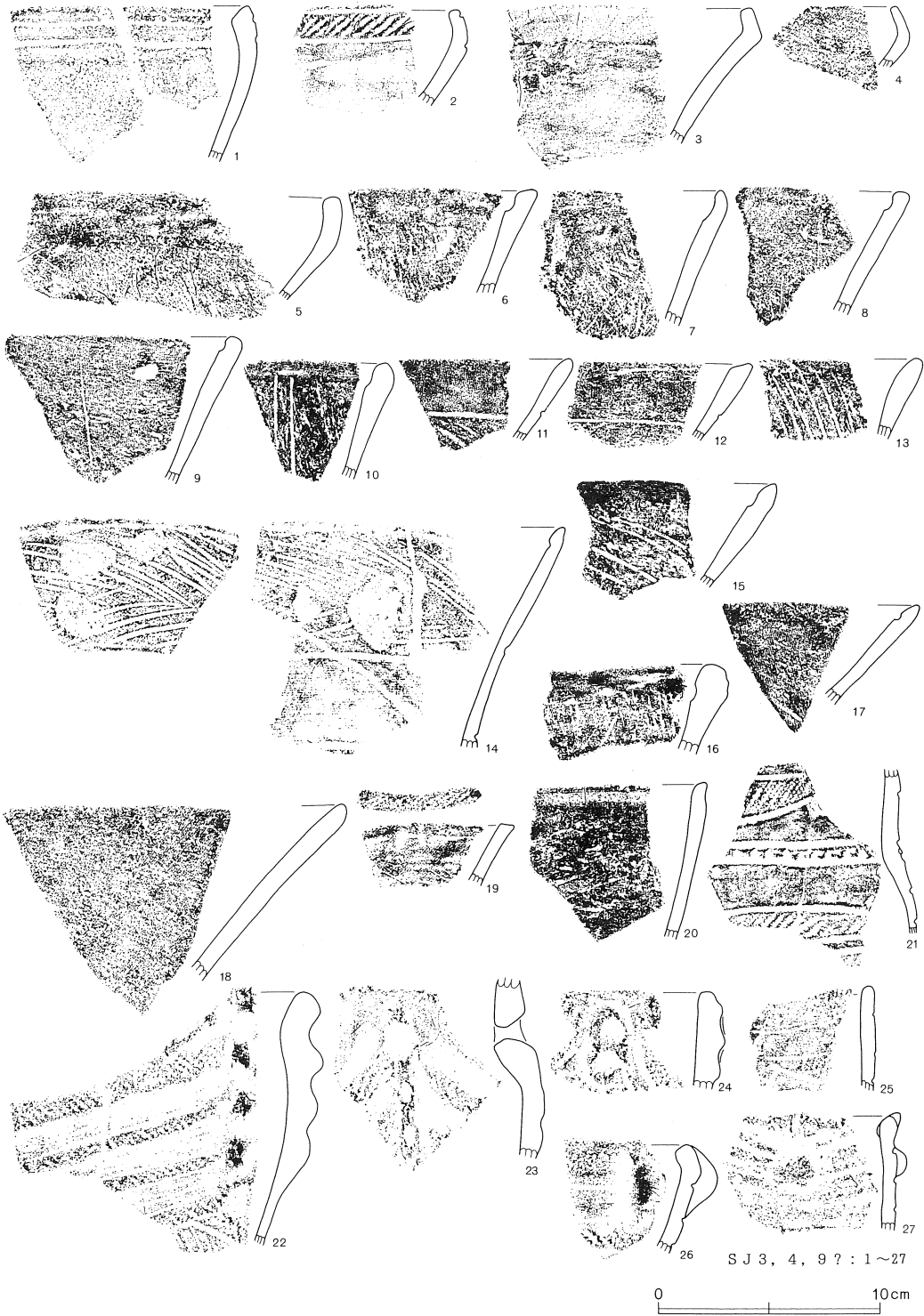
第91図 B区住居跡出土土器拓影图 (16)



第92図 B区住居跡出土土器拓影図 (17)



第93图 B区住居跡出土土器拓影图 (18)



第94図 B区住居跡出土土器拓影図 (19)



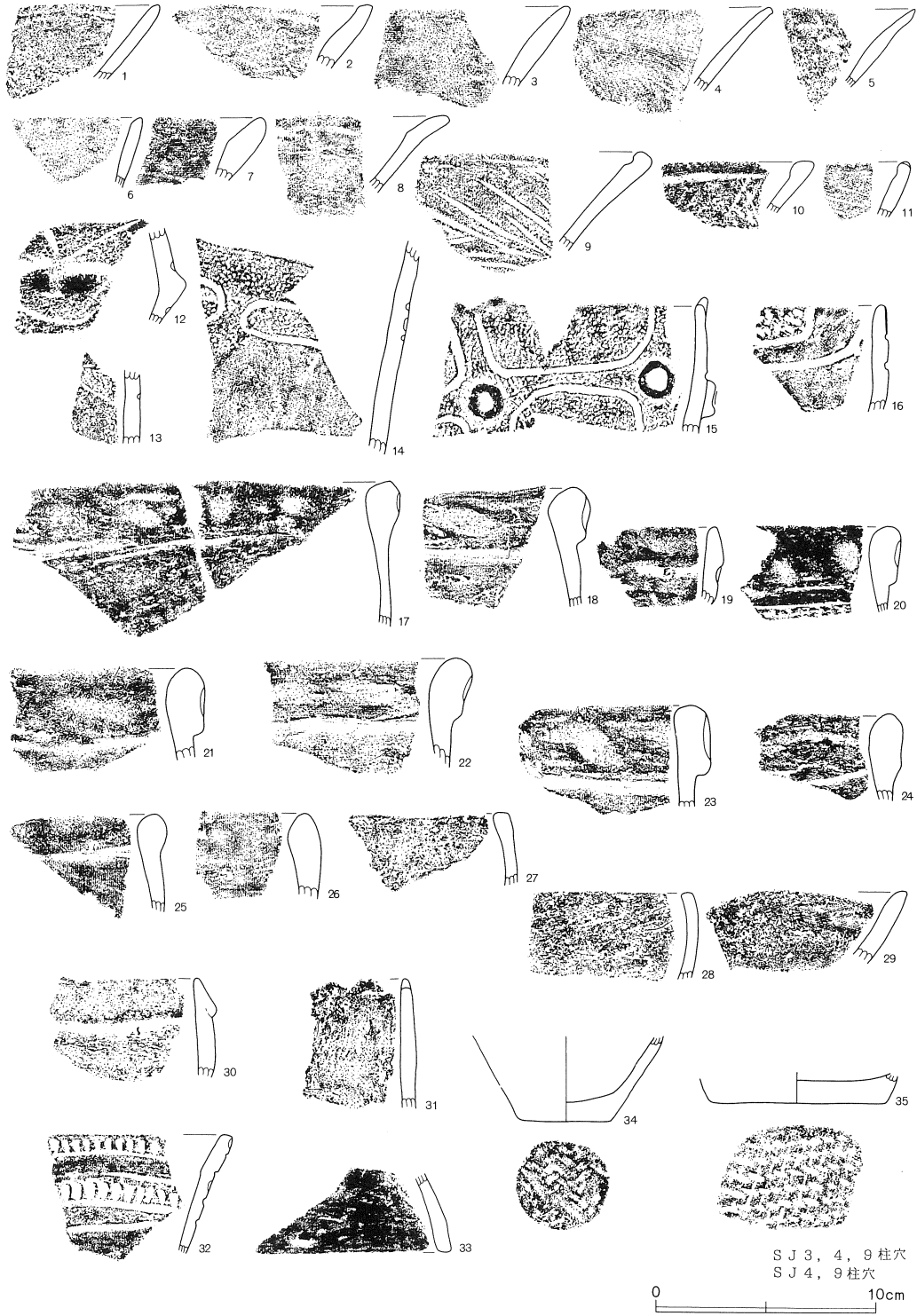
第95図 B区住居跡出土土器拓影図 (20)



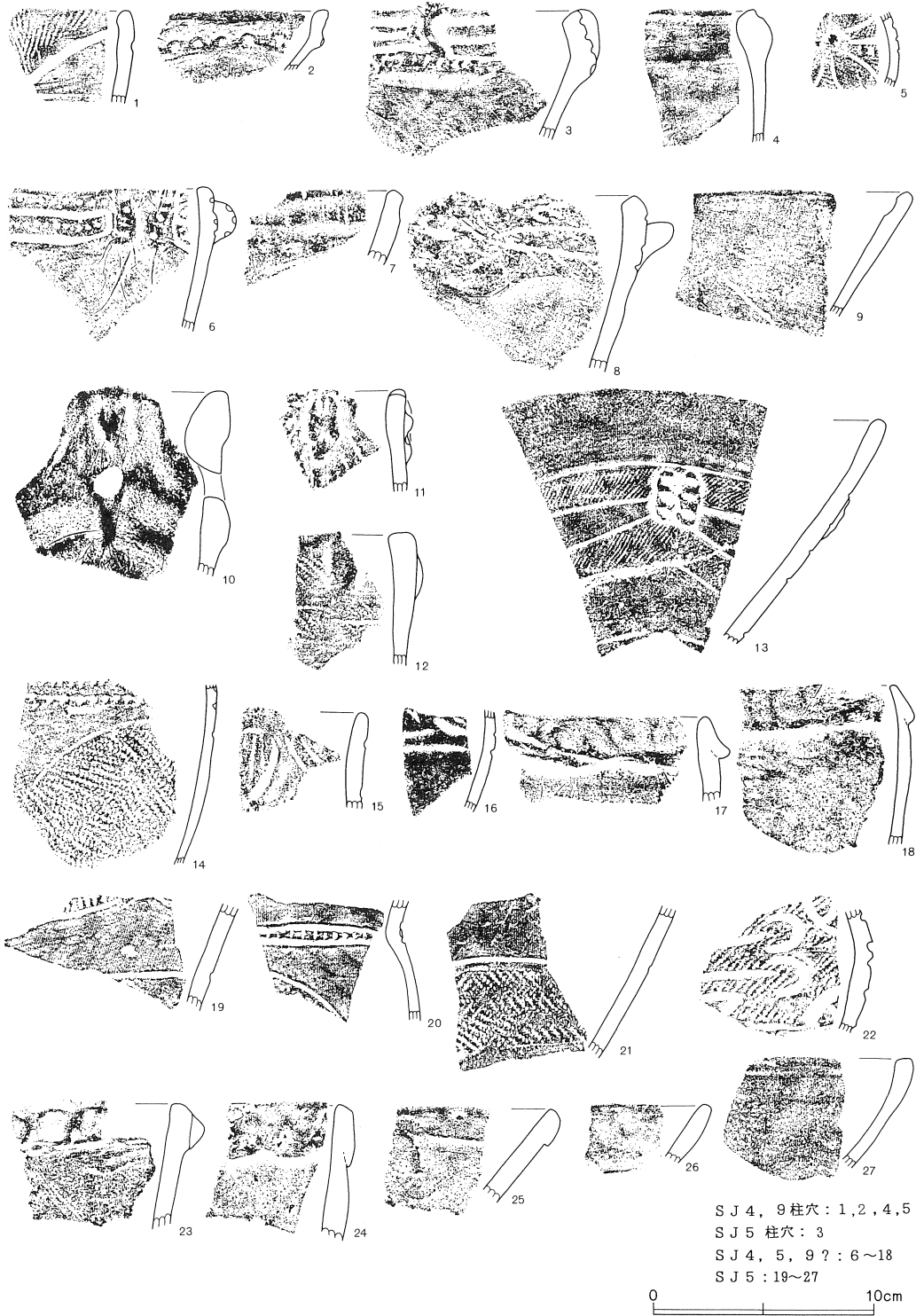
第96図 B区住居跡出土土器拓影図 (21)



第97图 B区住居跡出土土器拓影图 (22)



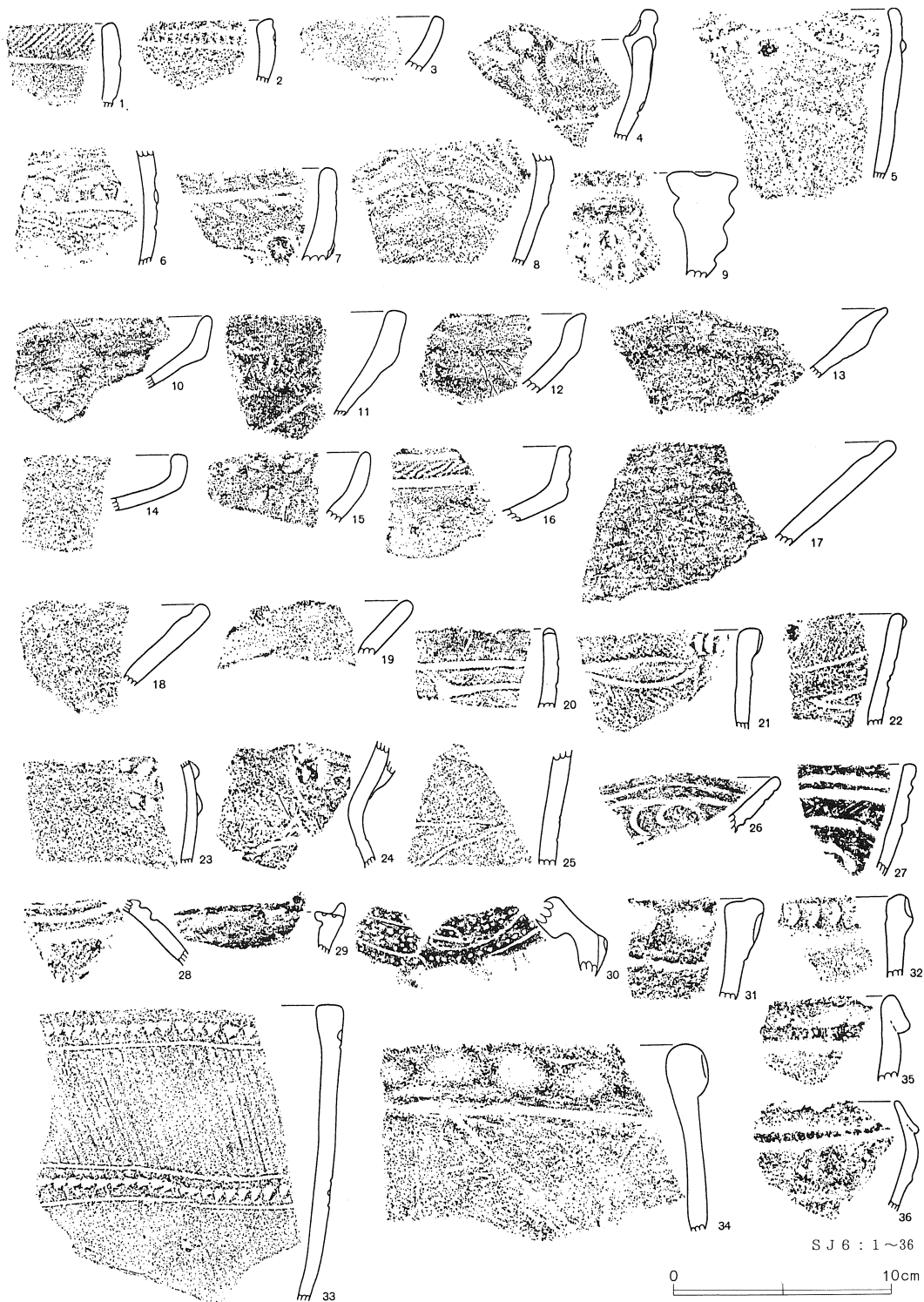
第98图 B区住居跡出土土器拓影图 (23)



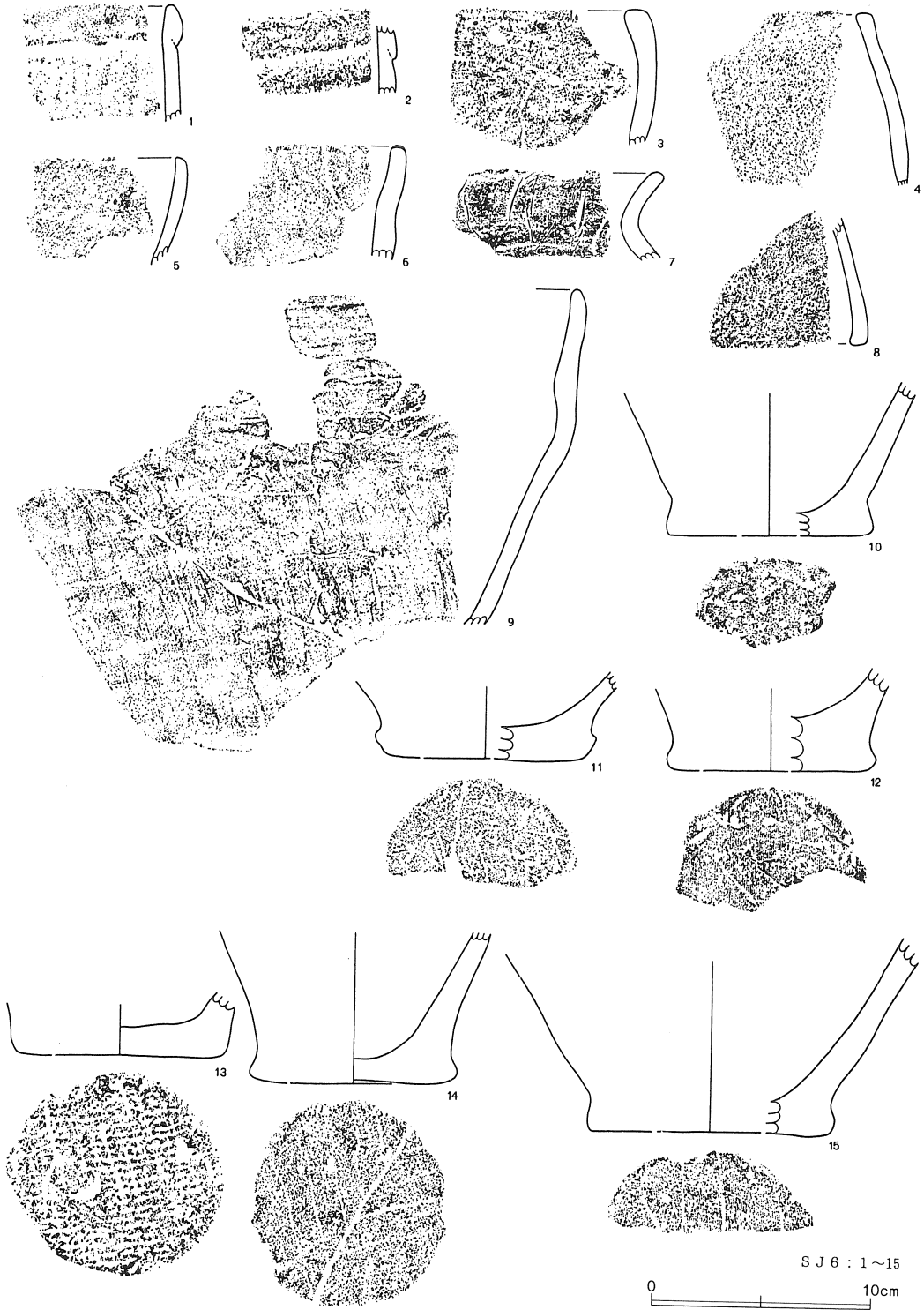
第99图 B区住居跡出土土器拓影图(24)



第100图 B区住居跡出土土器拓影图 (25)



第101図 B区住居跡出土土器拓影図(26)



第102図 B区住居跡出土土器拓影図 (27)



第103图 B区住居跡出土土器拓影图 (28)



S J 7, 8 ? : 1~17
S J 8 : 18~28

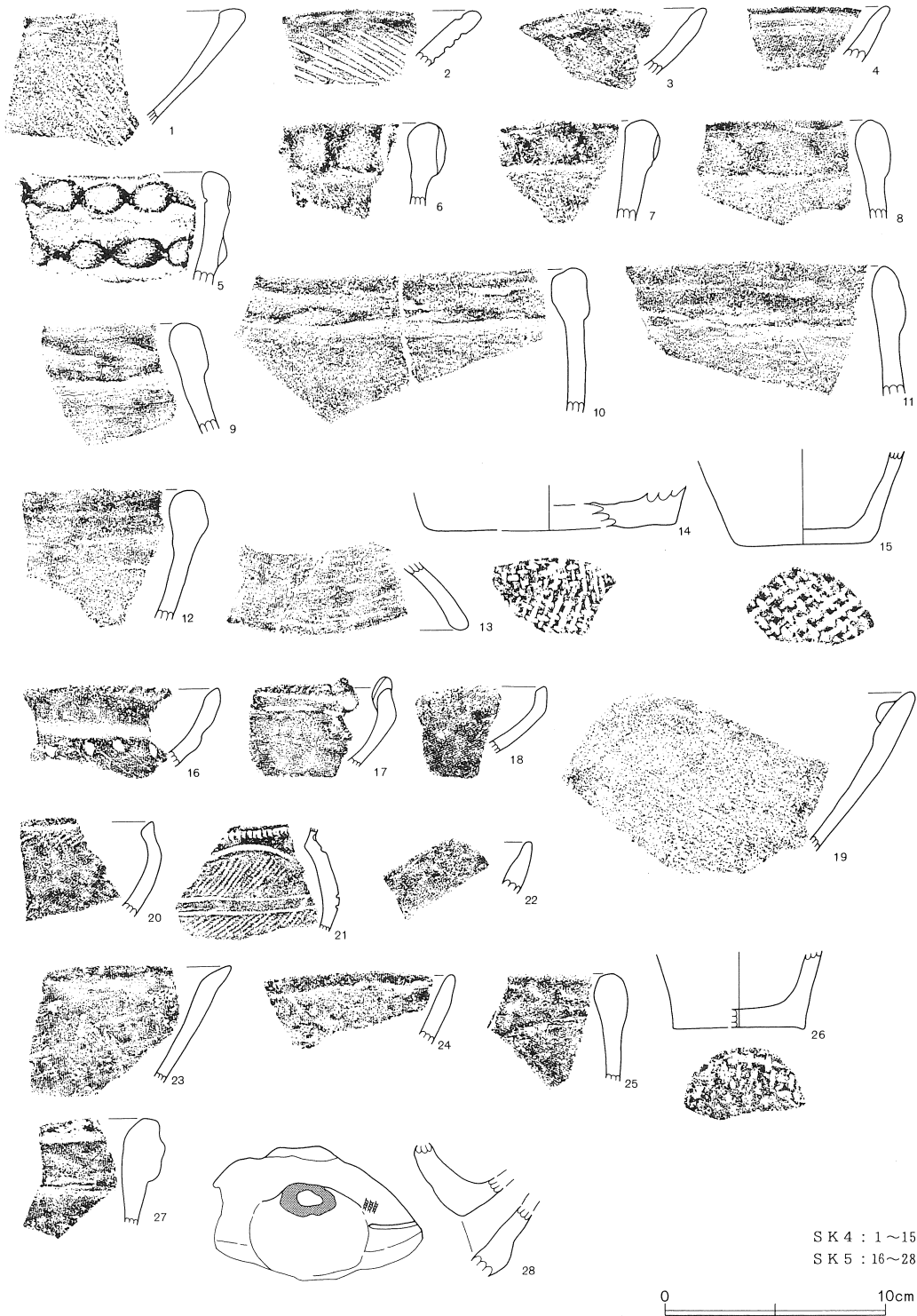
第104図 B区住居跡出土土器拓影図 (29)



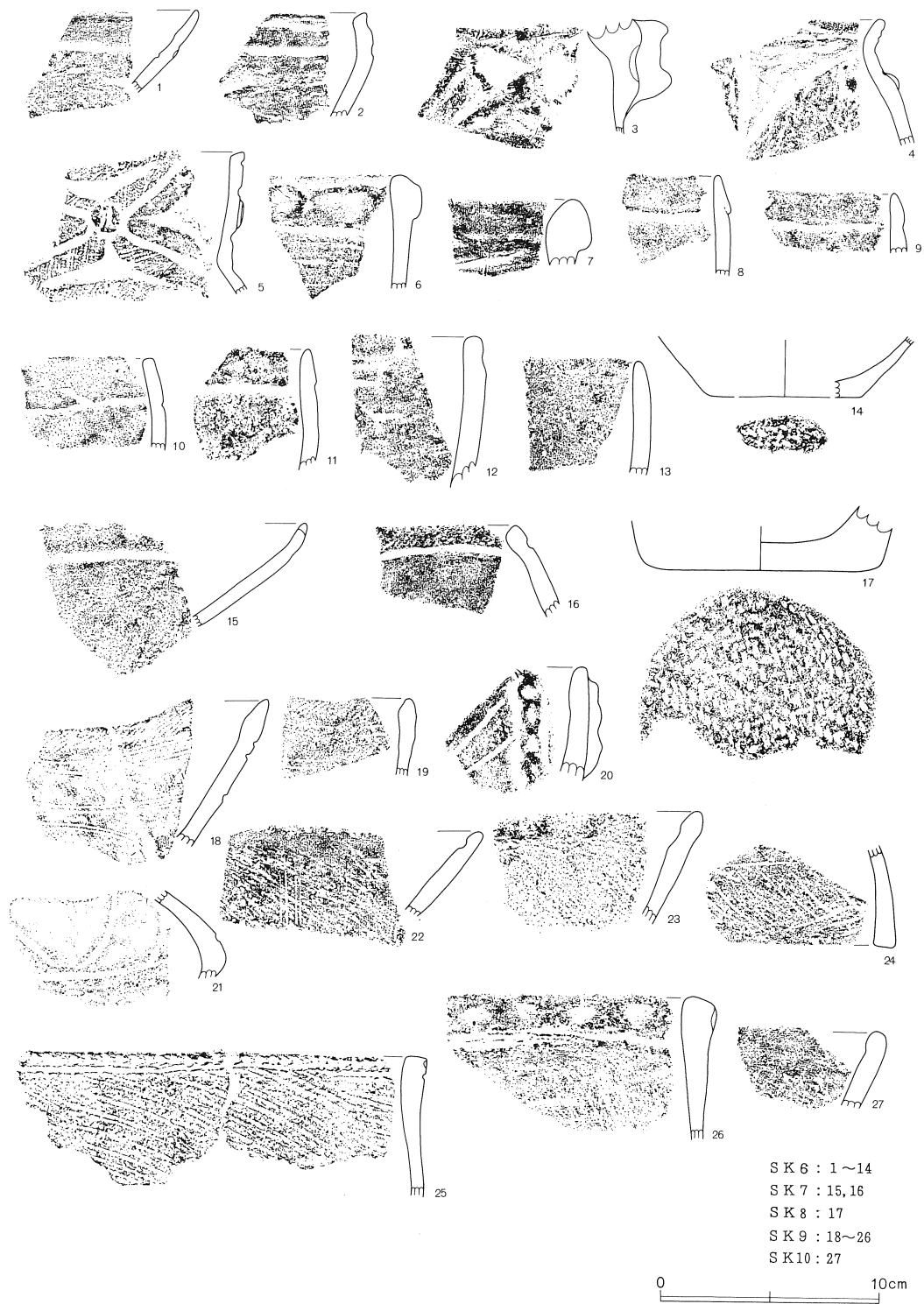
第105図 B区住居跡出土土器拓影図(30)



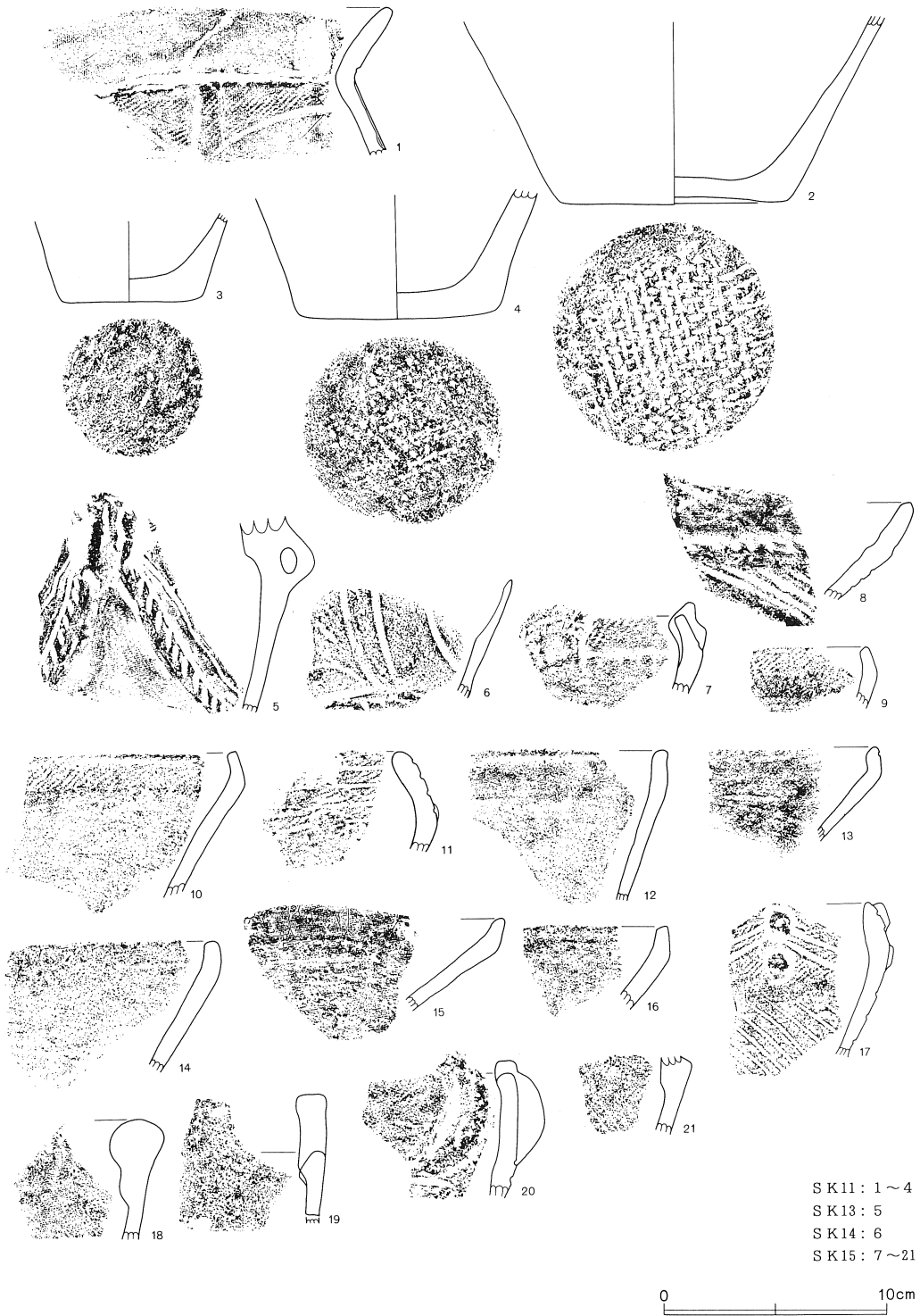
第106図 B区土壇出土土器拓影図(1)



第107図 B区土壙出土土器拓影図(2)



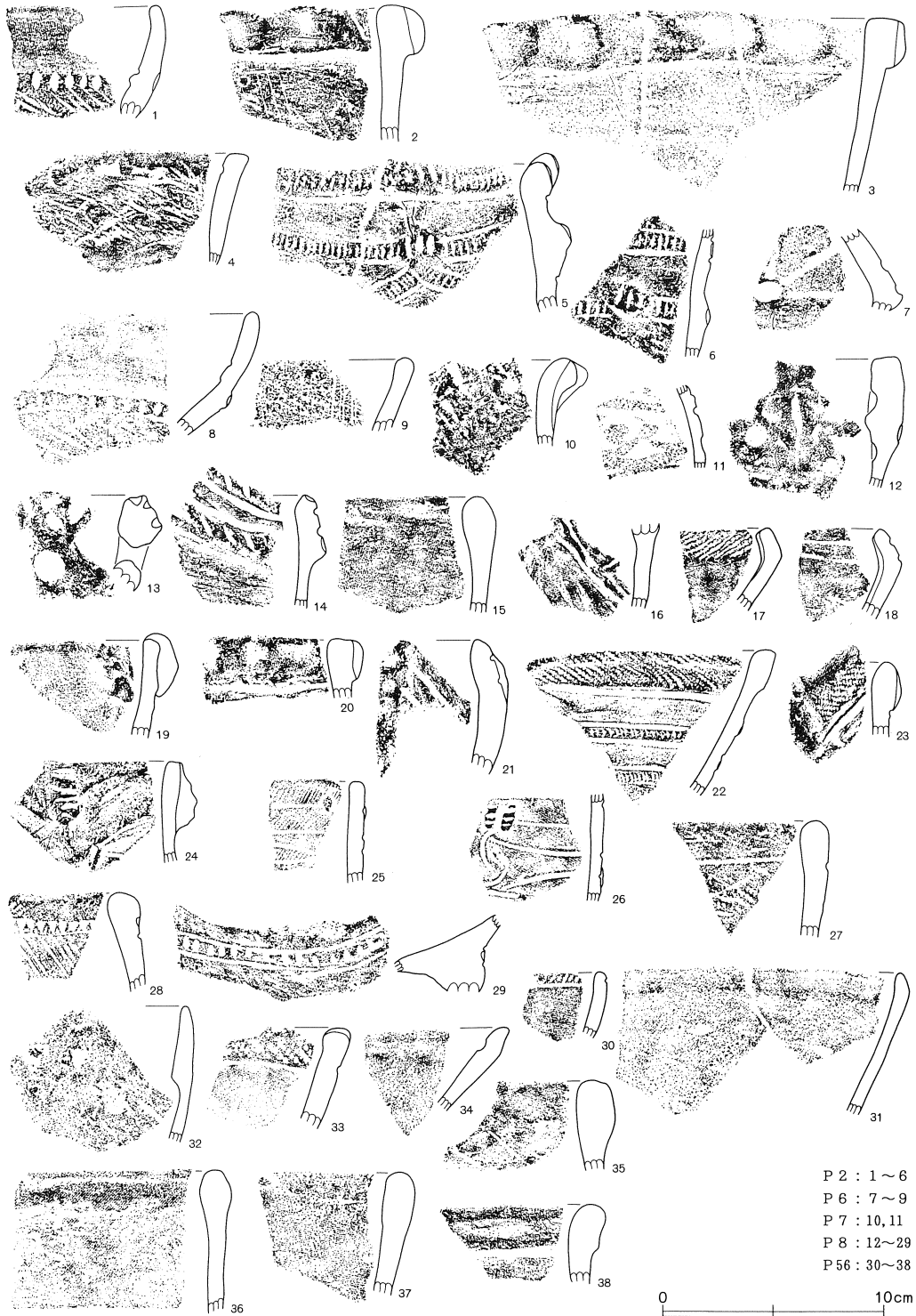
第108图 B区土壙出土土器拓影图(3)



第109図 B区土壇出土土器拓影図(4)

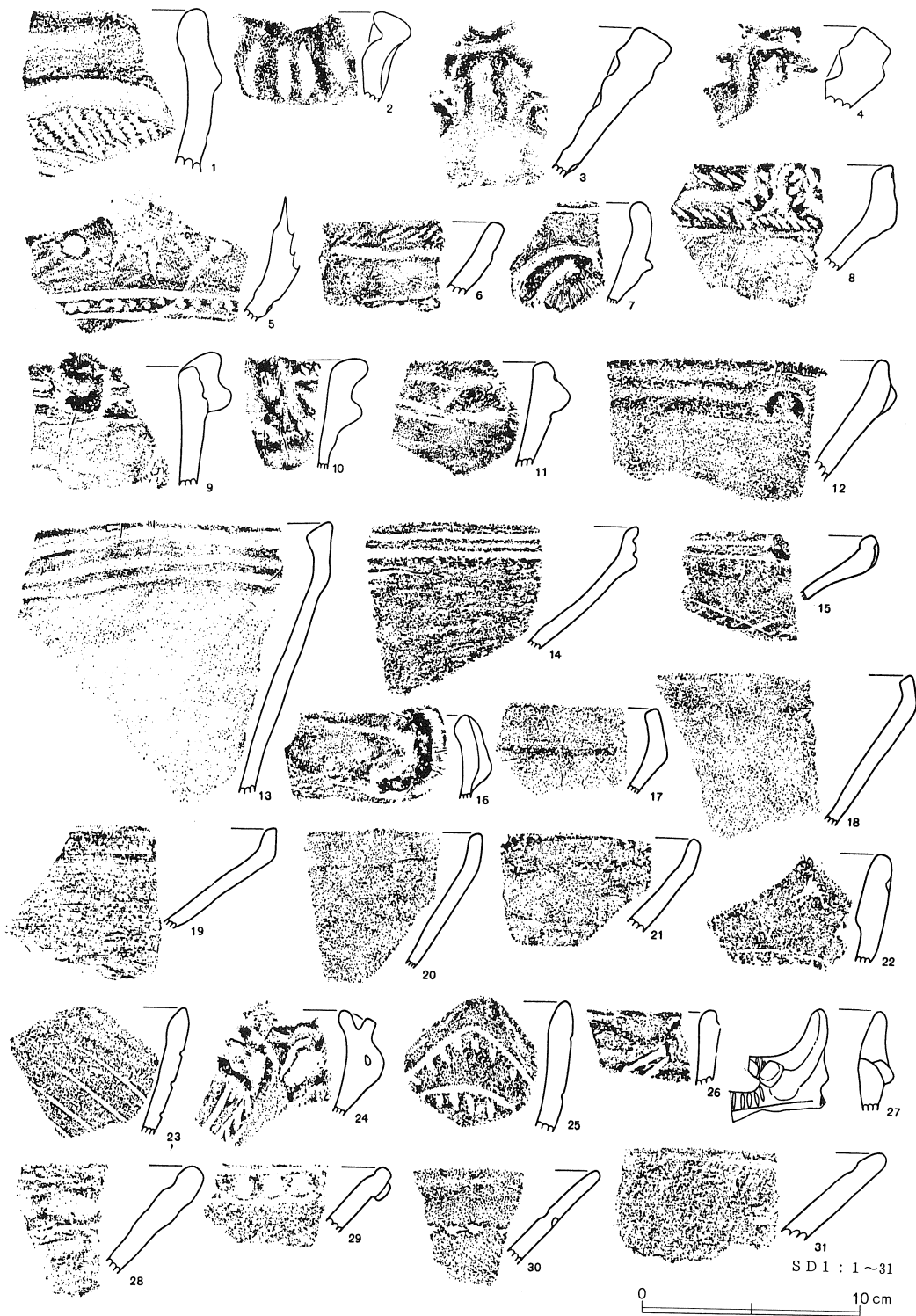


第110图 B区土壤出土土器拓影图(5)

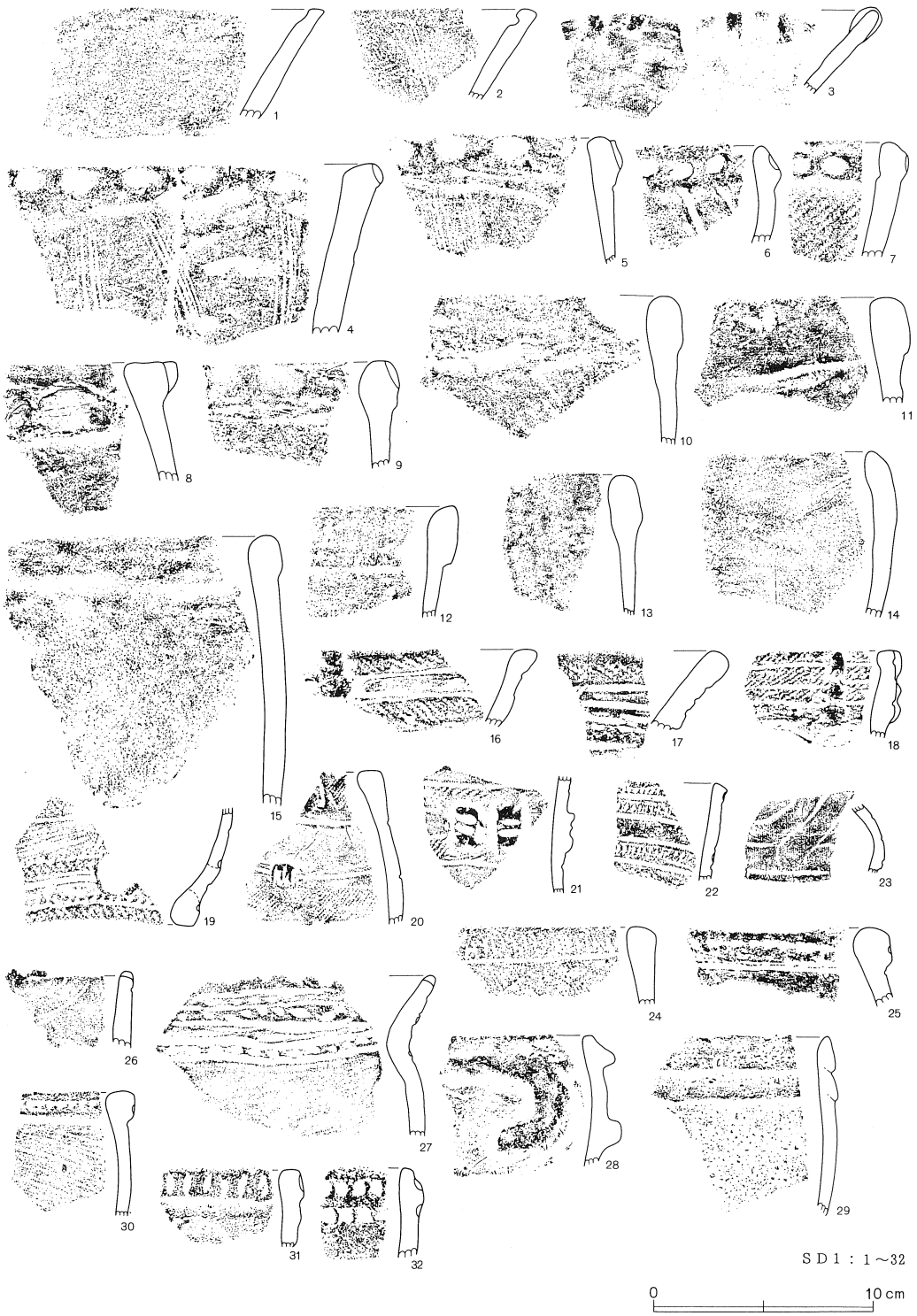


P 2 : 1 ~ 6
 P 6 : 7 ~ 9
 P 7 : 10, 11
 P 8 : 12 ~ 29
 P 56 : 30 ~ 38

第111図 B区ピット出土土器拓影図



第112図 B区第1号溝跡出土土器拓影图(1)



第113图 B区第1号溝跡出土土器拓影图(2)

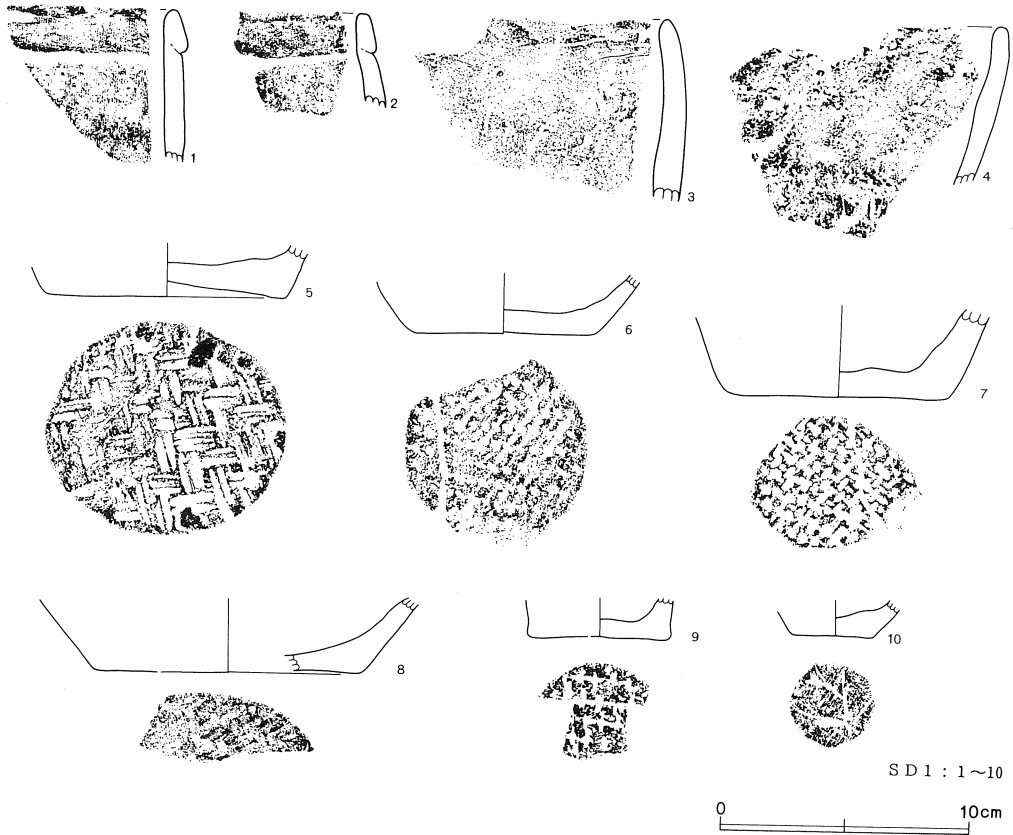
無文地にヘラ描き文が見られるが、構成は不明。19は口唇部が肥厚する深鉢。20は無文、21は安行1式期の紐線文土器である。

第10号住居跡（第65図5、第105図22～31）

第65図5は波状口縁深鉢で、突起が波頂下、波底部に貼付される。第105図22は口縁部が屈曲する深鉢、23は口縁部に沈線が施される。24、25は凹線状の沈線が口縁部に施文される。30は深鉢で、沈線と刺突が組み合って斜行するモチーフが施文されている。31は口縁部が外傾する深鉢で、小波状縁を呈する。

カ 第1号溝跡出土土器（第72図4～7、第112～114図）

第1号溝跡は近世以降に掘り込まれたもので、出土遺物に一括性は低いが、土器について概述する。第72図4は肥厚する口唇部に刻みが施され、その下に沈線が沿っている。波底部には粘土粒が貼付され、弧線文にはLR縄文が充填される。5は瓢形を呈すると思われる。6は赤彩された小形浅鉢で連弧文が無文地に施される。7は台付鉢と思われる。口縁部にRL縄文が施される。赤



第114図 B区第1号溝跡出土土器拓影图（3）

彩。第112図1は加曾利EⅢ式、その他は後期中葉から晩期中葉のものである。2～5は突起を持つ深鉢、8～21は口縁が屈曲する深鉢、22～25は波状縁の深鉢である。27は赤彩で、粘土粒貼付、刻みが施される。第112図28～31、第113図1～15は後期中葉～後葉の粗製土器、16～22は後期後葉、24、25、30は紐線文土器である。27は体部無文の大洞系深鉢、28には隆帯が施される。31、32は口縁部に刺突が見られる。第113図29、第114図1、2は折返し口縁の深鉢、3、4は無文の深鉢である。

キ B区出土土器（ドット）（第73～75図）

出土地点が確認できるが、遺構に帰属しないものを一括する。第73図1は頸部が括れる平縁の深鉢。口唇部内面が肥厚する。縄文帯、無文帯による文様構成である。2は波状縁深鉢で、三角形区画文内に縦位の刻文帯が貼付される。やや寸胴で、体部にLr縄文が施される。3は突起下に縦長の楕円形粘土粒が貼付される。口縁と突起下に角張った刻みが施される。4は大洞C₂式系の鉢。配置文と対向する三叉文が描かれる。地文は直前段3本撚のLR。内面には、口縁部が縦、胴部が横方向のミガキが施される。5は紐線文土器。第74図1、2は口縁部が屈曲する深鉢、3は口縁部に7単位の弧線連結文がみられる。粘土粒は沈線施文後に貼付される。沈線は非常に粗い工具で施文されている。4は外面が肥厚する深鉢。第75図はすべて無文土器である。1は口縁部がやや開く器形。2、4は壺で、つくりは雑である。3は脚部。5、6は直線的に外傾する深鉢である。

ク グリッド出土土器（第115～190図）

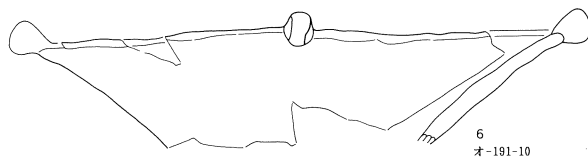
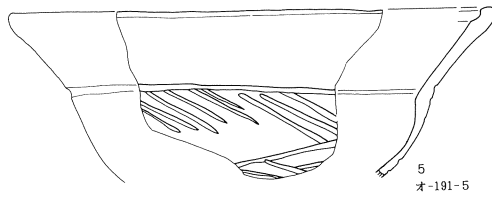
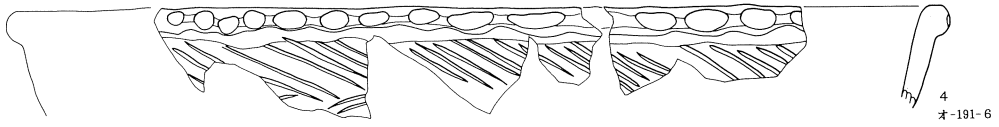
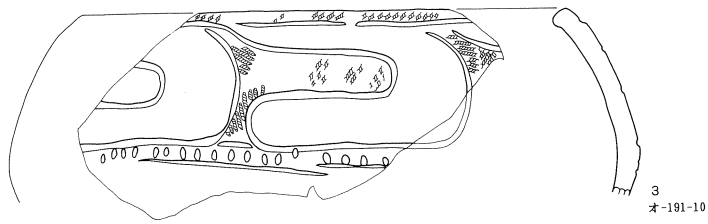
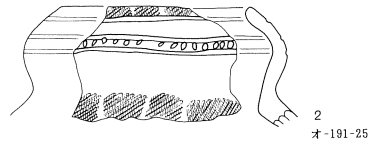
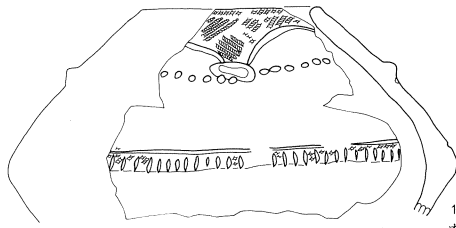
実測図は、全グリッドを一括して、拓影図は、グリッドごとに南東から北西の順で掲載した。ここでは、実測図を中心に説明する。拓影図については、異系統のもの、類例の乏しいものについてのみ触れ、他は結語の分類を参照して頂きたい。

第115図1は口縁部が内傾する鉢である。口縁部に弧線と縦位のRL縄文が施文される。2は口縁部が屈曲して内傾するもの。後期中葉の注口土器と考えられる。地文はLr。3は内傾の度合いが弱いもので、口縁部に「つ」の字状の磨消縄文が施される。地文はLr。4は加曾利B式前半の粗製土器、5は口縁部が無文で、体部に矢羽状沈線が施される。6、第116図1は無文平縁の鉢で、6は4単位の突起が付く。2は口縁部が無文で、体部にやや粗雑な弧線が施文される。3は頸部がすぼまるもので、半円形の突起が貼付され、突起間に2本1組の沈線が引かれる。4は瓢形の鉢で、磨消縄文を伴う弧線文が施される。括れ部には刺突が施され、地文はLRである。5は脚部。6、7は口縁部が屈曲する鉢で、口縁部には刺突が施される。6は凹線状の沈線が施される。7は4単位の突起を持つ。第117図1は小形の鉢で、押圧が施された隆帯が貼付される。2は平行沈線が施文される脚部、3は波状縁深鉢で、刻文帯が2条並列して施文される。刻文帯は隆起せず、瘤付系の影響が窺われる。4は胴部が括れ、口縁部が内湾する深鉢である。連弧文が2段施される。5、6は口縁部が屈曲する深鉢、口縁部に縄文が施される。5の縄文はLRrと考えられる。第118図1、2は口縁部が屈曲する無文の深鉢、3は口唇部が肥厚するものである。4も口唇部が肥厚する。5

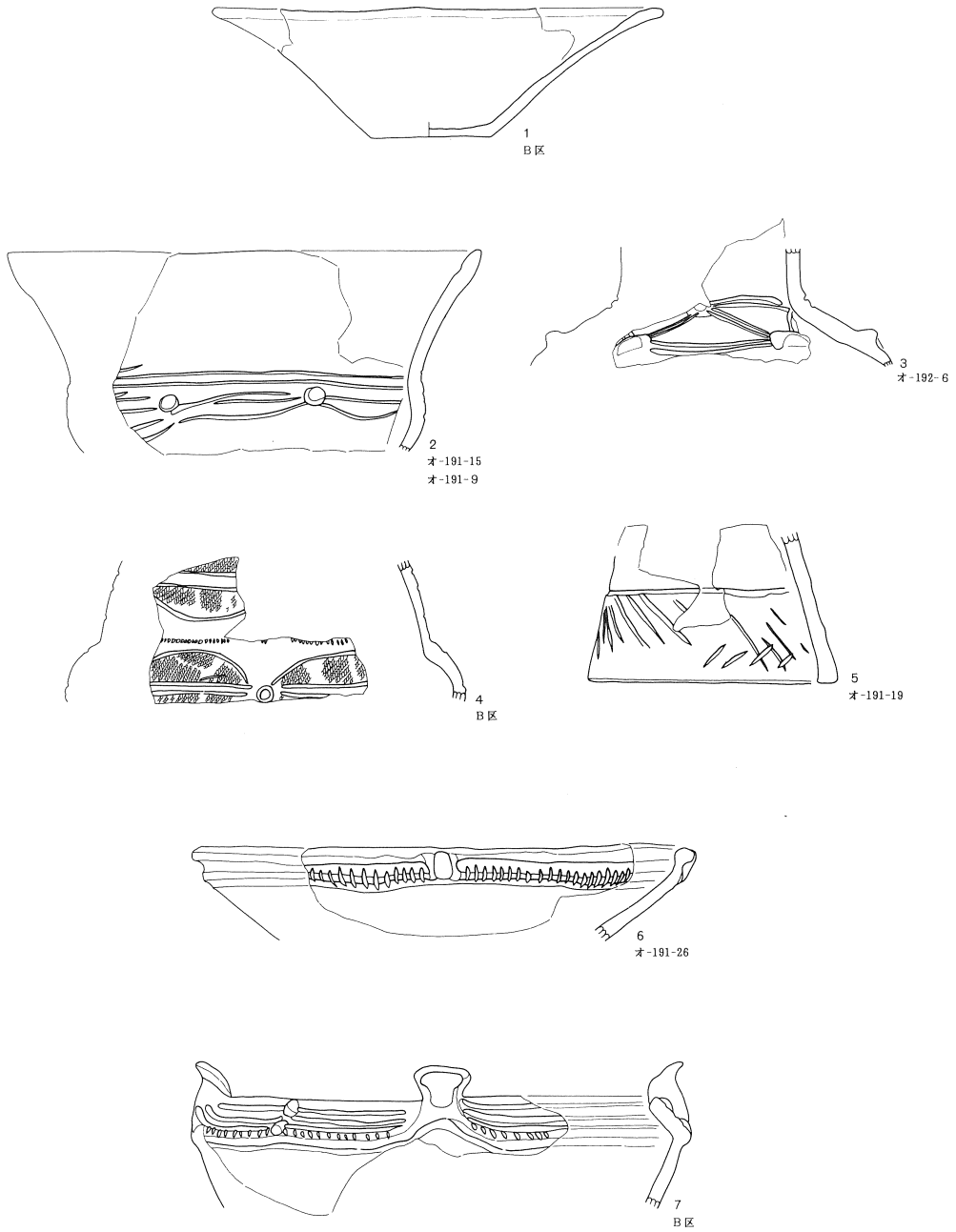
は口縁部が開くもの、6は脚部である。第119図1～3は口縁部が屈曲する深鉢で、1,2は無文、3は口縁部に縄文、体部に矢羽状沈線が施文される。4は波状縁で、波底部に三日月状の突起が貼付される。5にも同様の突起が貼付され、平行沈線、粘土粒と組み合って文様を形成する。6は刻文帯が貼付される平縁の鉢である。摩耗が著しい。第120図1は平縁で隆起刻文帯が貼付される鉢で、体部には縦位の条線が施される。2は隆起刻文帯と条線が施される脚、3は角底である。4は小形の波状縁深鉢、隆起帯縄文による三角形区画文で、地文はLr。内面はヘラナデである。5は壺の口縁部、縄文帯にはLR縄文が施文される。6は瘤付系の注口土器であろう。縄文帯はわずかに隆起する。地文はLR。7も注口または壺の頸部と考えられる。8,10は無文の鉢。9は直線的玉抱き三叉文が重畳し、LR縄文が施されるものである。11は頸部に縄文が施される鉢。直線的玉抱き三叉文が施文される。第121図は注口土器の口縁部と考えられる。2は脚部で、透かしが施されている。端部には弧線を中心に対向する三叉文が施される。地文はLR。3,4は大洞C₁式系の浅鉢である。彫去は浅く、磨消部分の縁辺と、充填される三叉状モチーフがやや深く彫り込まれている。口唇部はやや硬直した刻みによって小波状を呈する。地文はLR。4は配置文の間に三叉状のモチーフが対向している。地文はRL、またはR。底部は上げ底状である。5は大洞C₁式系の注口土器体部である。器面の摩耗著しい。6は平縁の浅鉢で、口唇部端面に刻みと4単位のB突起、体部には無文帯下に弧線文が組み合うモチーフが施文される。弧線は不規則な向きであり、ヘラ描きの工具先端はかなり粗いものである。胎土は小礫を含んでいる。

第122～124図は粗製土器である。第122図1～4は折り返し口縁の深鉢で、4のみ口縁部に刺突が見られる。5は無文で、斜位に指頭圧痕が残っている。6は粘土紐積み上げ痕が顕著に認められるものである。やや厚手で、指頭痕が見られる。7、第123図は無文で口縁部が直線的に外傾するもの、いずれも器面にミガキは見られない。第124図1～3は口縁部がやや内湾する無文の深鉢である。

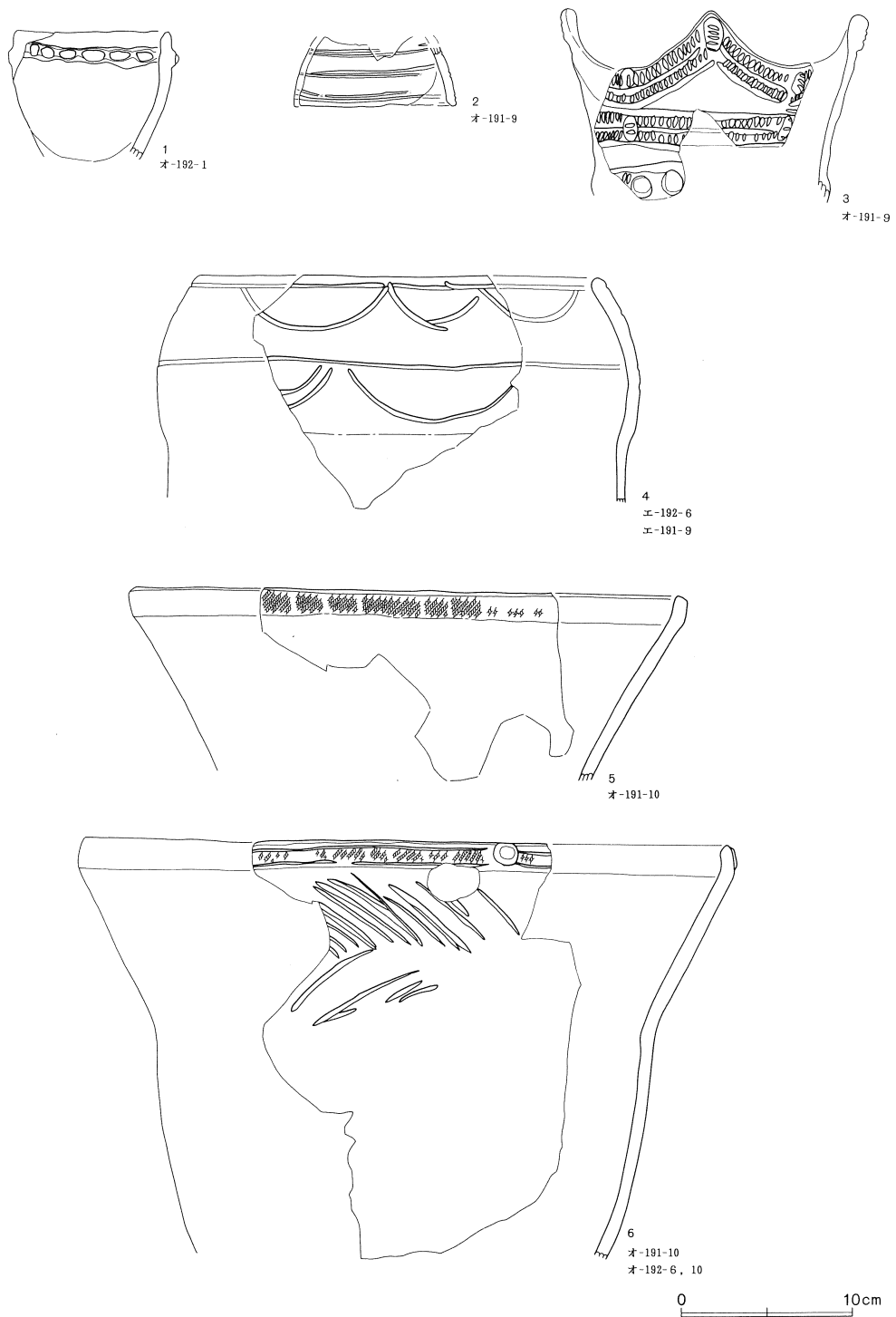
第129図1～4は同一個体である。無文地文で、厚手の突起が付く。3の右側の突起内面には2条の短沈線が斜位に施されている。7は第120図11と同一個体の可能性がある。第132図8はやや舟形を呈する。波頂下には縦長の瘤が配され、弧線が入り組むモチーフが施文されている。地文は前々段の撚の弱いRL。14は頸部に縦位の沈線が施され、刺突が充填される。22は大洞C₁式系の壺、23は工字文状のモチーフと三叉状の彫去が組み合うものである。第135図1はケズリ後、無文地にヘラ描きが施されている。推定口径は50cmを超える。第136図21～27は刺突がモチーフ内に充填されるものである。22,27は同一個体の可能性がある。器形は寸胴で、先端の粗い工具で太い沈線が引かれる。21,23～26も同一個体である。胴部が括れ、口縁部がやや外反する。先端が滑らかで、細い工具によって施文されている。29,30も同一個体。大洞C₁式系の、やや大形の浅鉢である。第137図1は大洞C₂式新段階に併行する浅鉢である。口唇部は丁寧に磨かれている。第140図17は瘤付系の古段階のもの、胎土に雲母を多く含んでいる。22は波状縁である。第141図7は注口土器の体部、入り組み文が施されている。10は拓影図下端に綾線文が見られる。14は大洞C₁式系浅鉢の底部である。第145図21は胴部が括れる深鉢である。下段の縄文帯には羽状縄文が施文されている。地文はLRRと考えられるが、断定できない。第146図6,7は同一個体。注口と思われる。10は大洞C₁式系浅鉢。18は大洞C₂式系の鉢。第150図12は摩耗著しく明確ではないが、大洞C₁式系の鉢であろう。13は肩



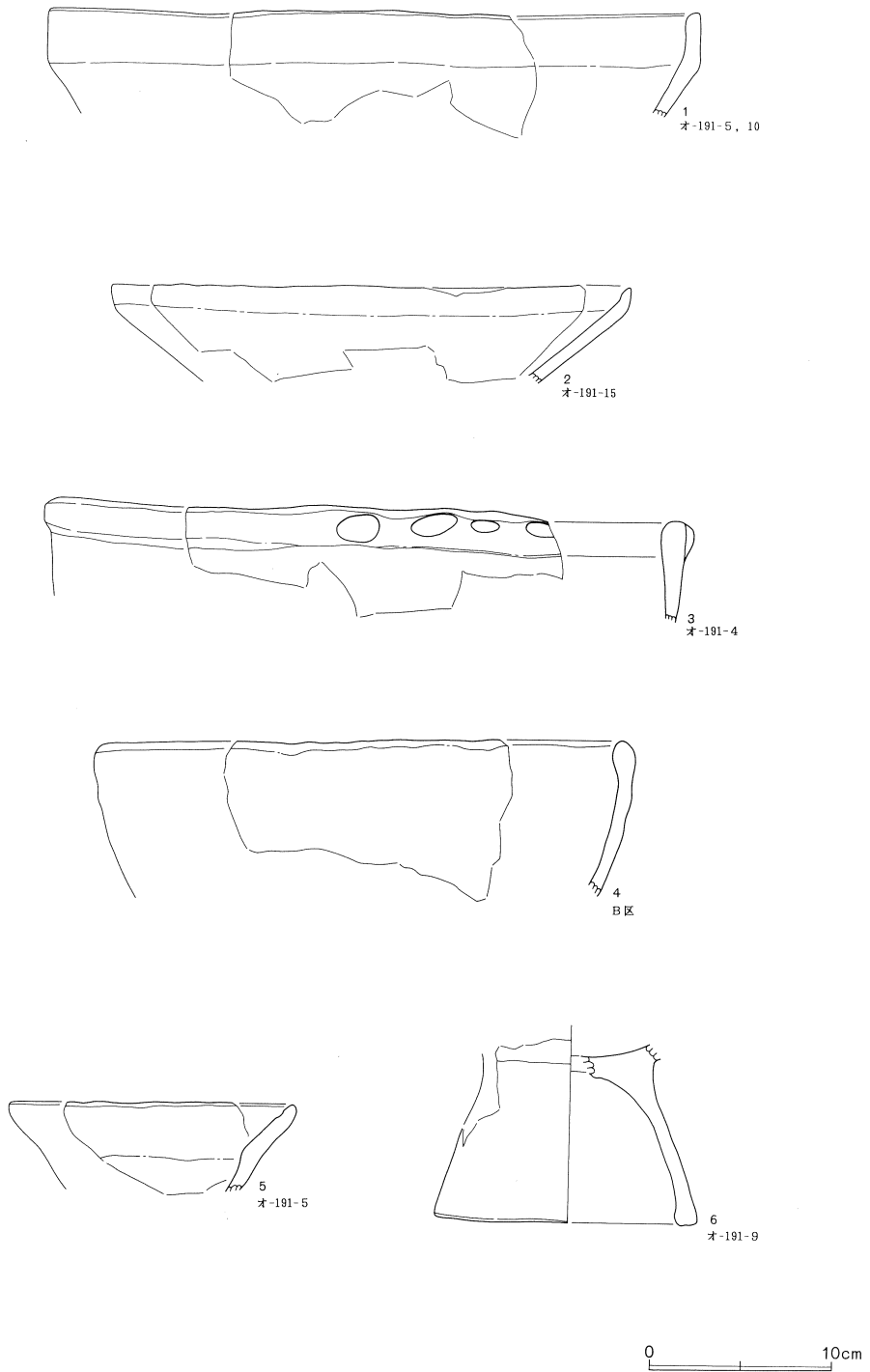
第115図 B区グリッド出土土器実測図(1)



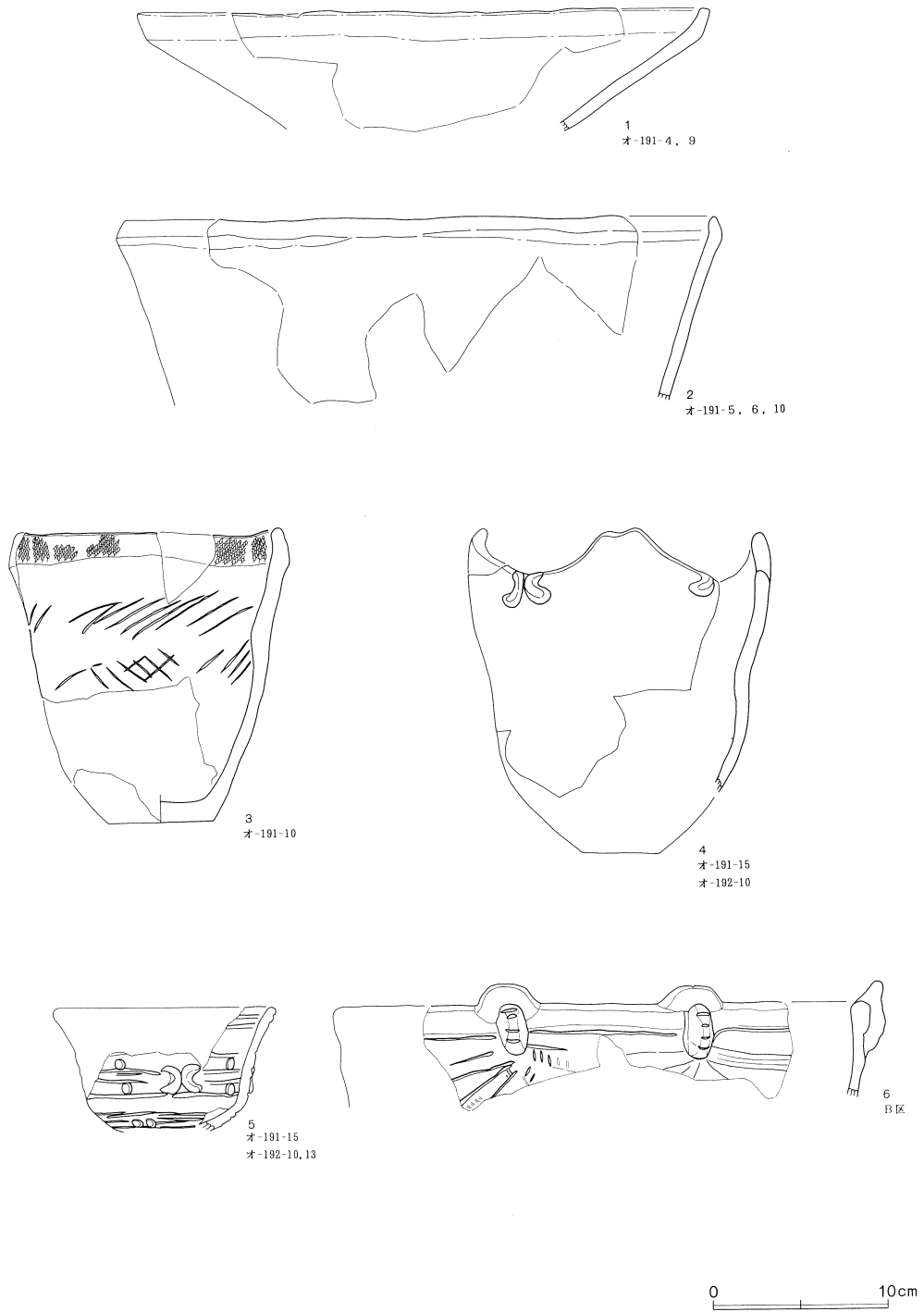
第116図 B区グリッド出土土器実測図(2)



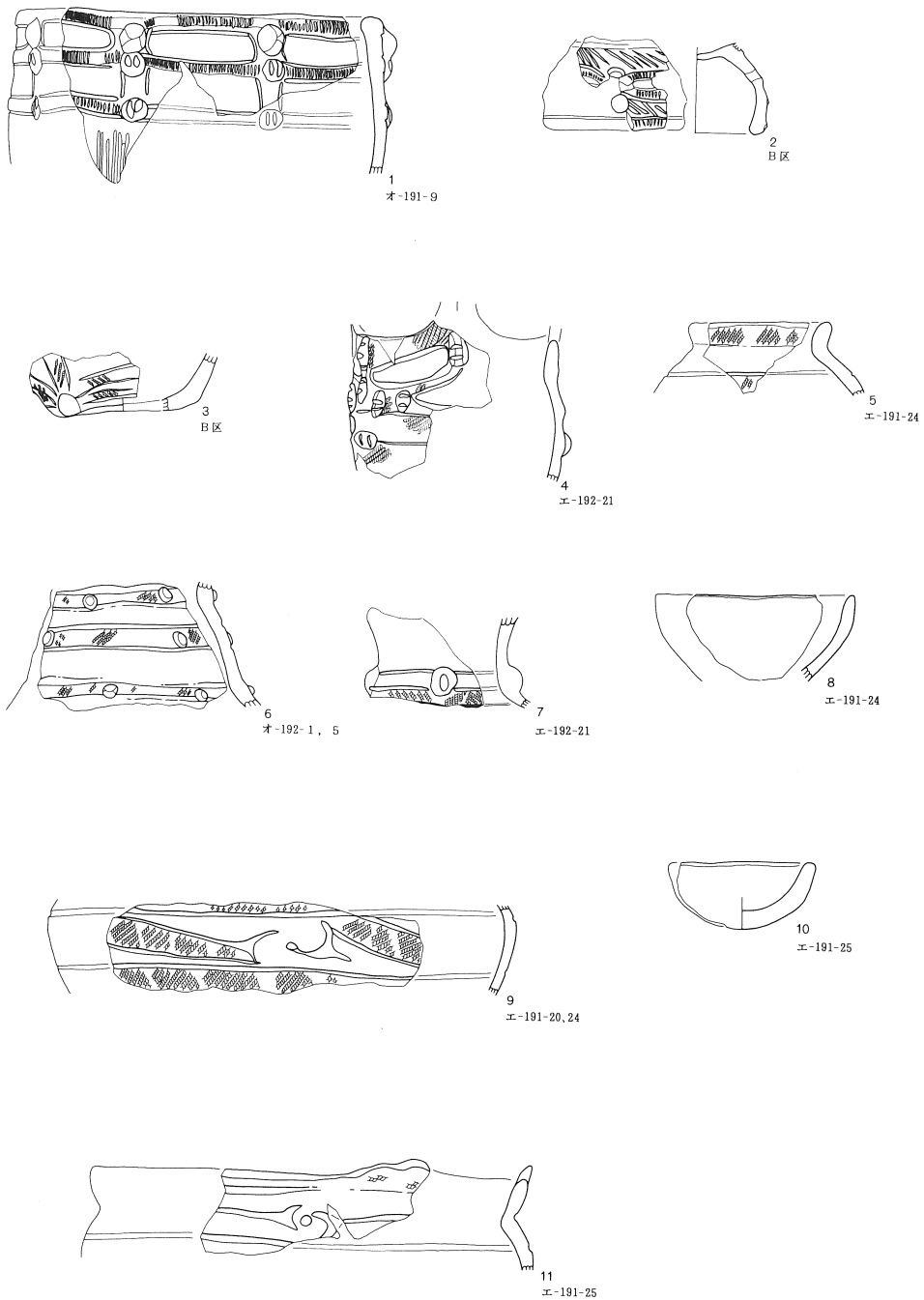
第117図 B区グリッド出土土器実測図(3)



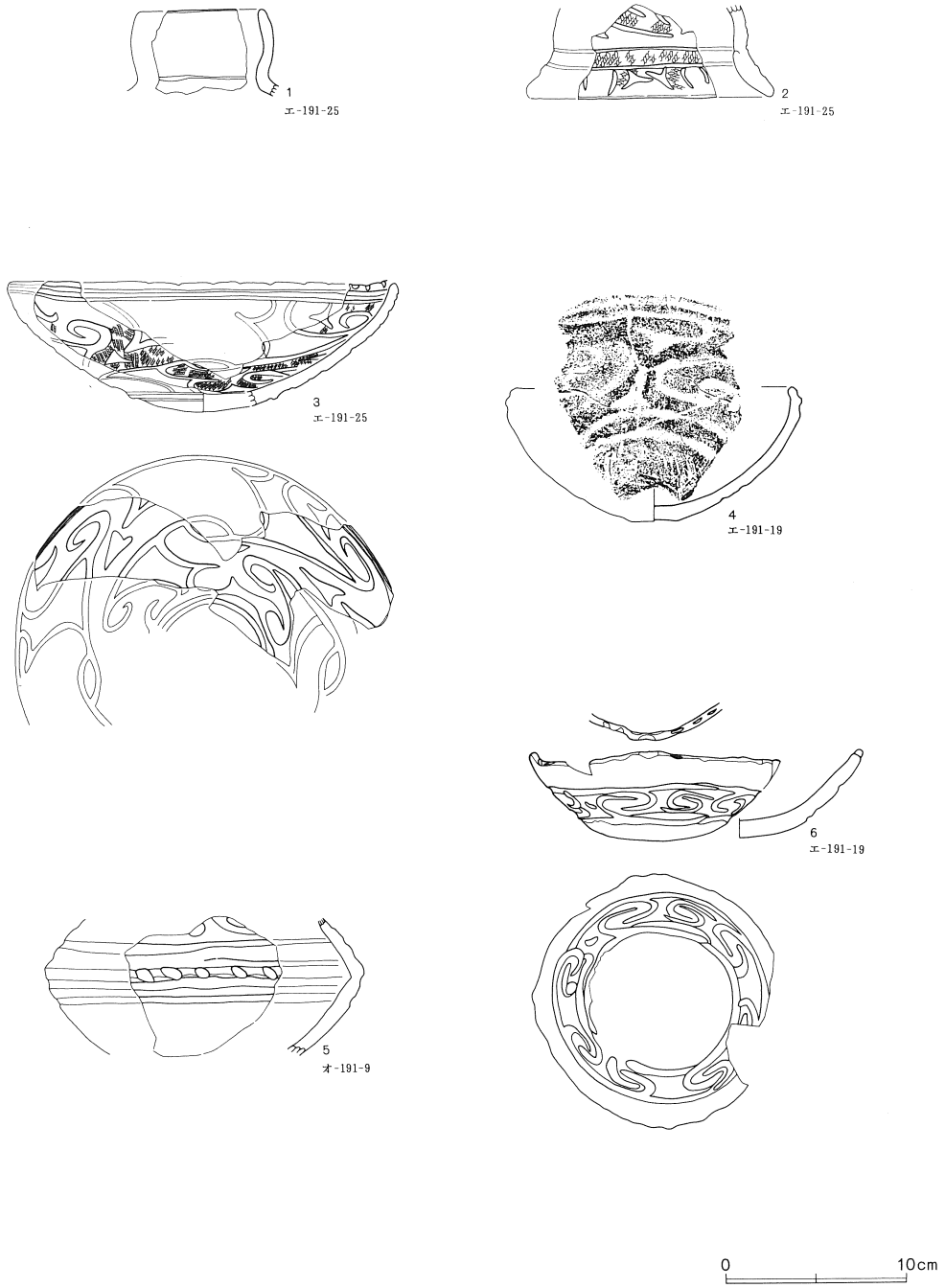
第118図 B区グリッド出土土器実測図(4)



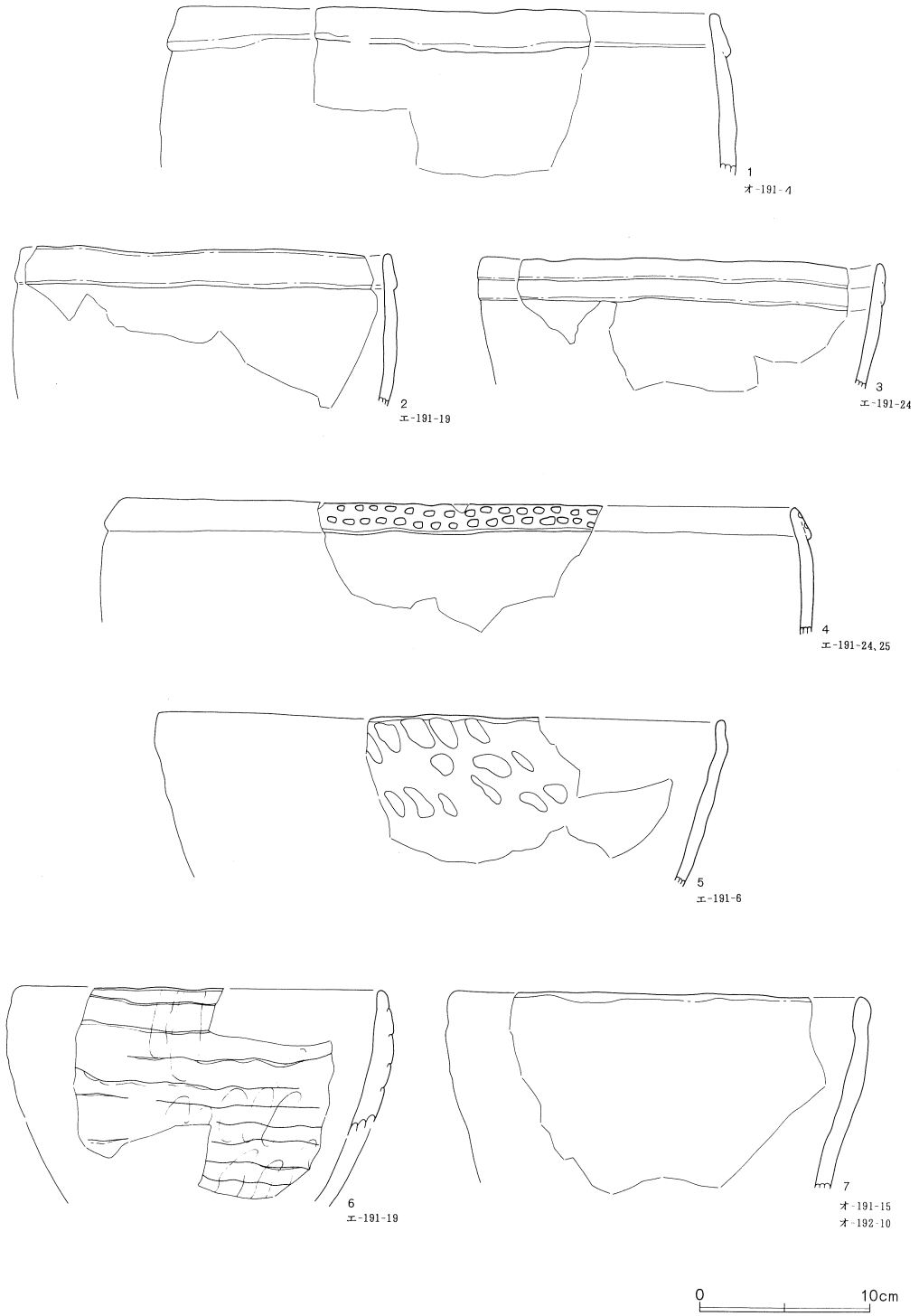
第119図 B区グリッド出土土器実測図(5)



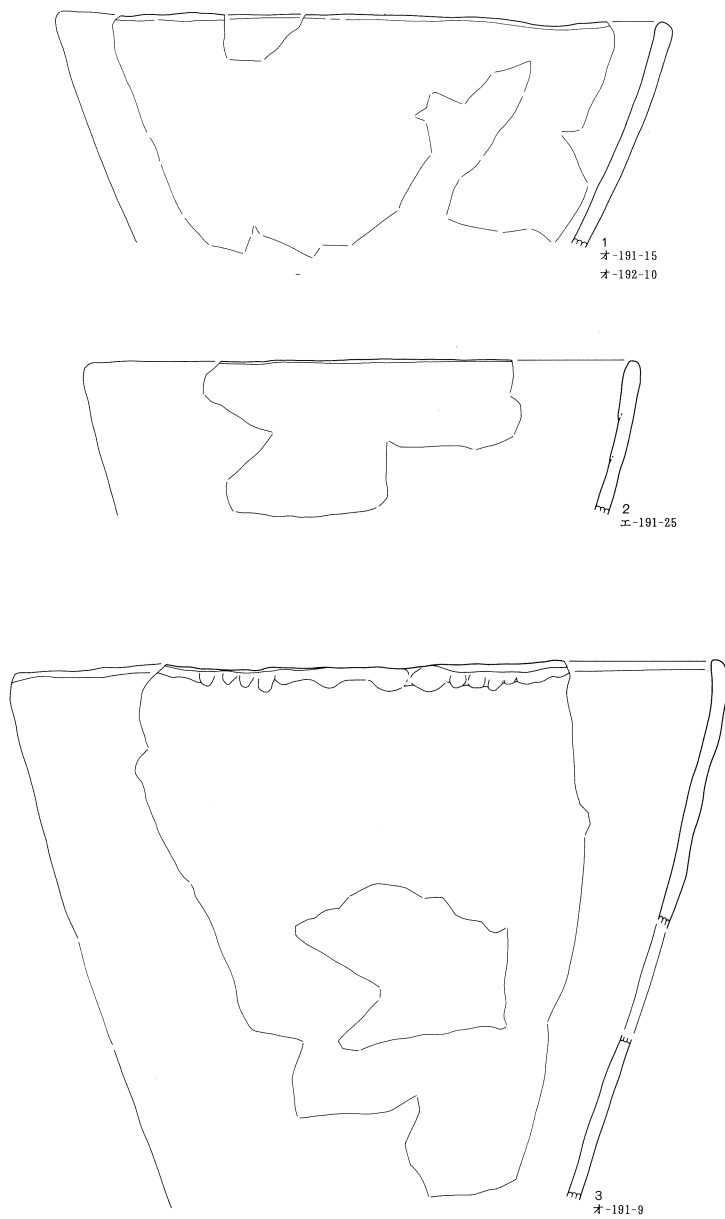
第120図 B区グリッド出土土器実測図(6)



第121図 B区グリッド出土土器実測図(7)

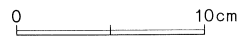
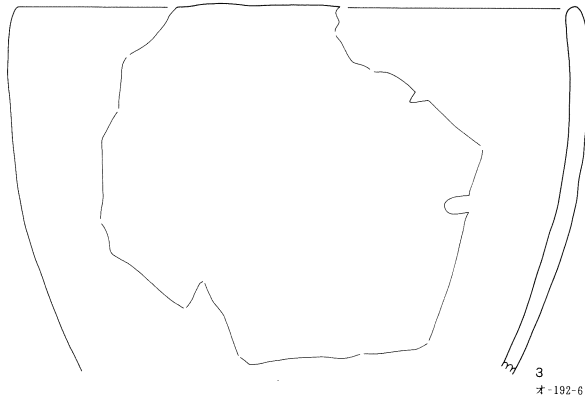
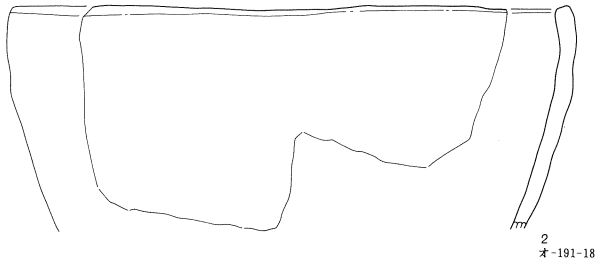
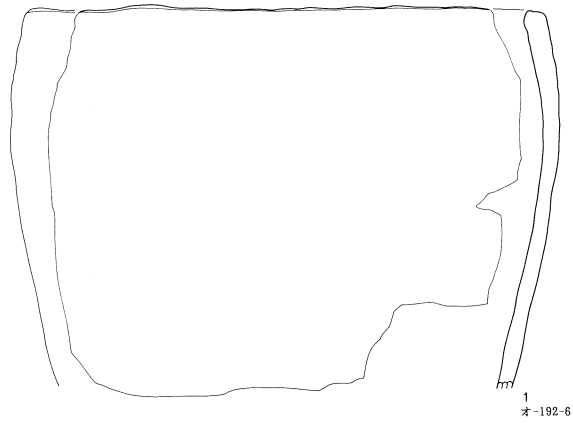


第122図 B区グリッド出土土器実測図(8)



0 10cm

第123図 B区グリッド出土土器実測図(9)



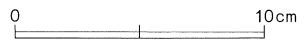
第124図 B区グリッド出土土器実測図 (10)



第125図 B区グリッド出土土器拓影図(1)



エ-191-20: 1~8
エ-191-24: 9~33



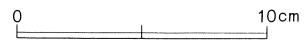
第126図 B区グリッド出土土器拓影図(2)



第127図 B区グリッド出土土器拓影図(3)



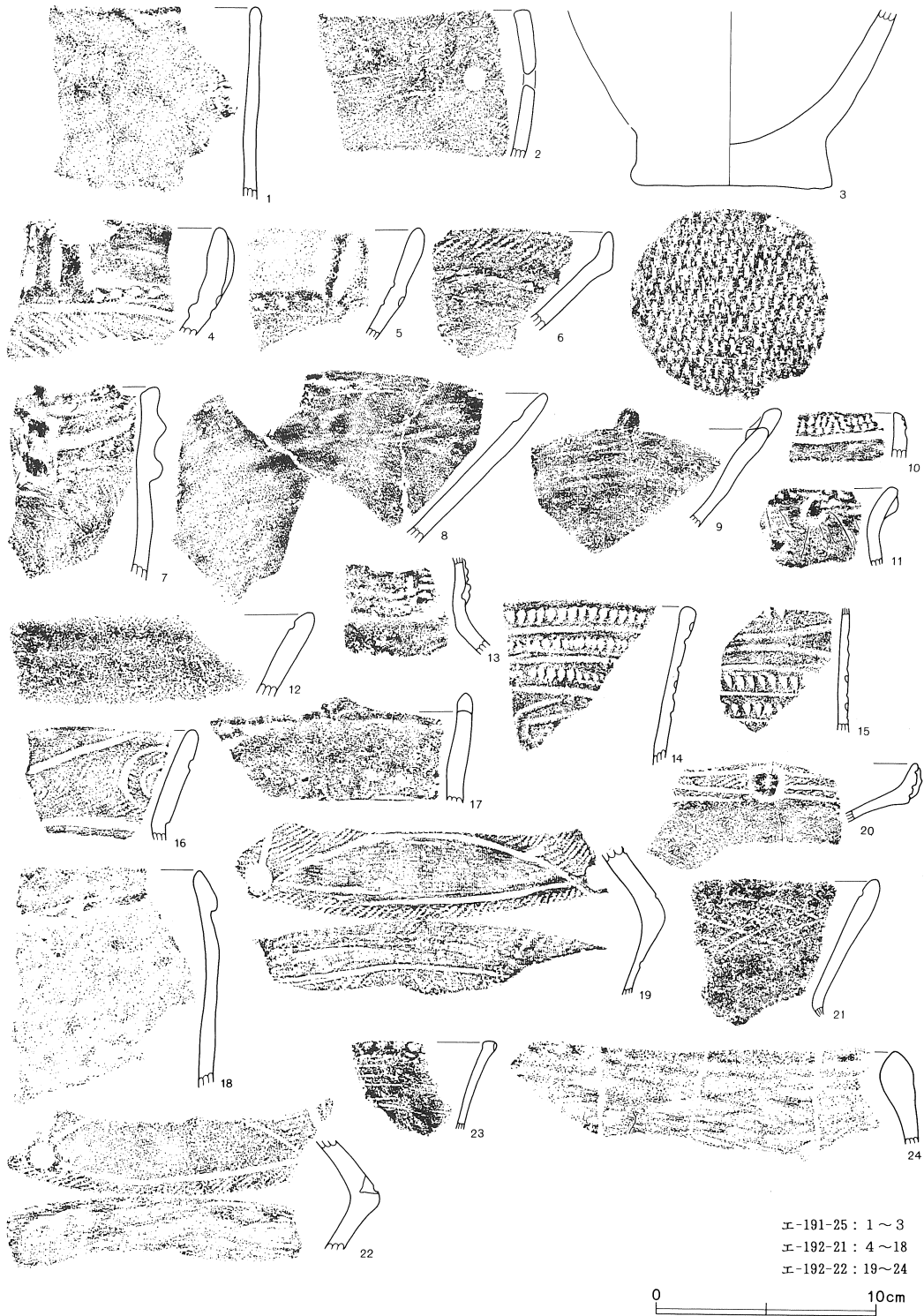
エ-191-25 : 1 ~ 28



第128図 B区グリッド出土土器拓影図(4)



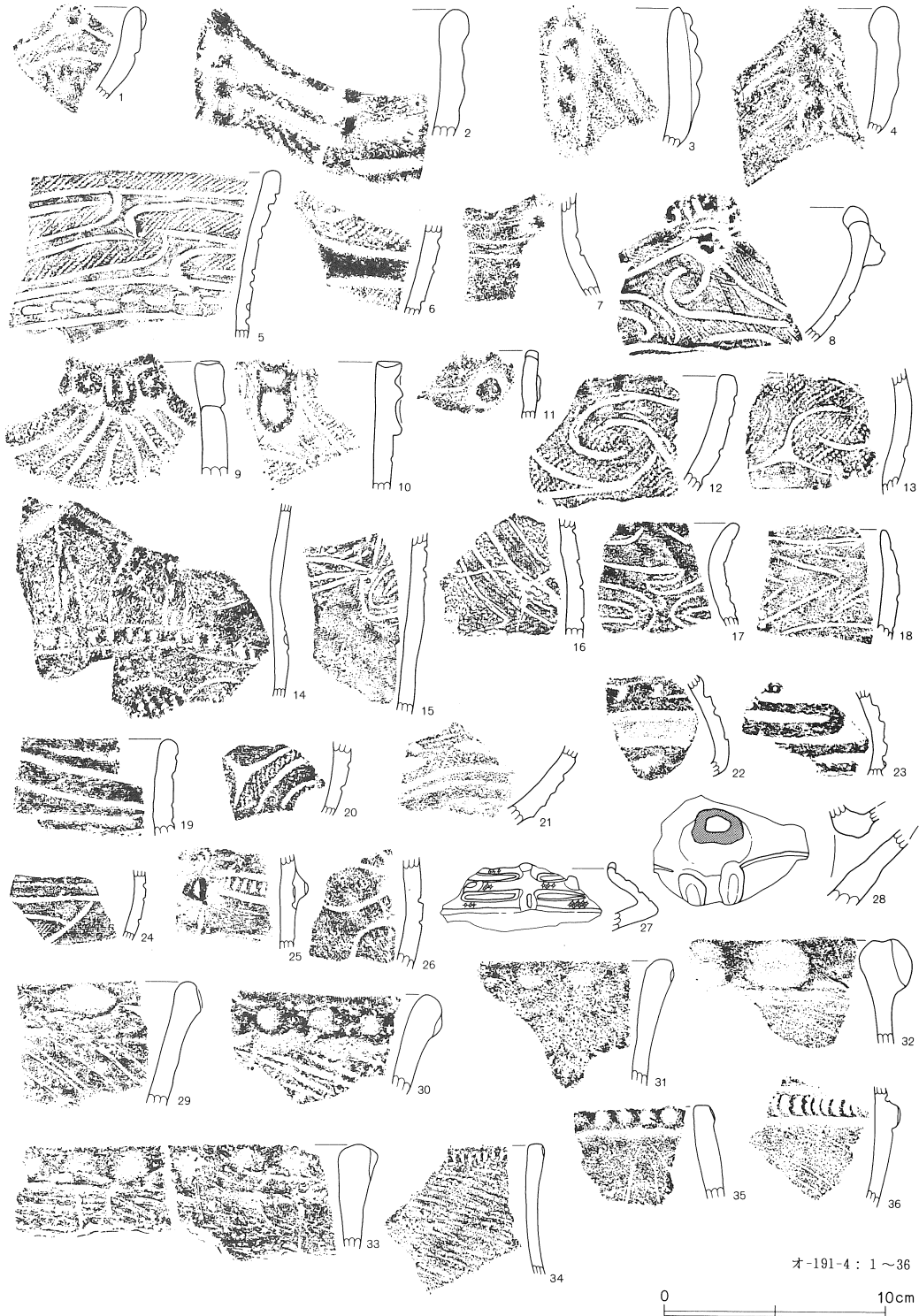
第129図 B区グリッド出土土器拓影図(5)



第130図 B区グリッド出土土器拓影図(6)



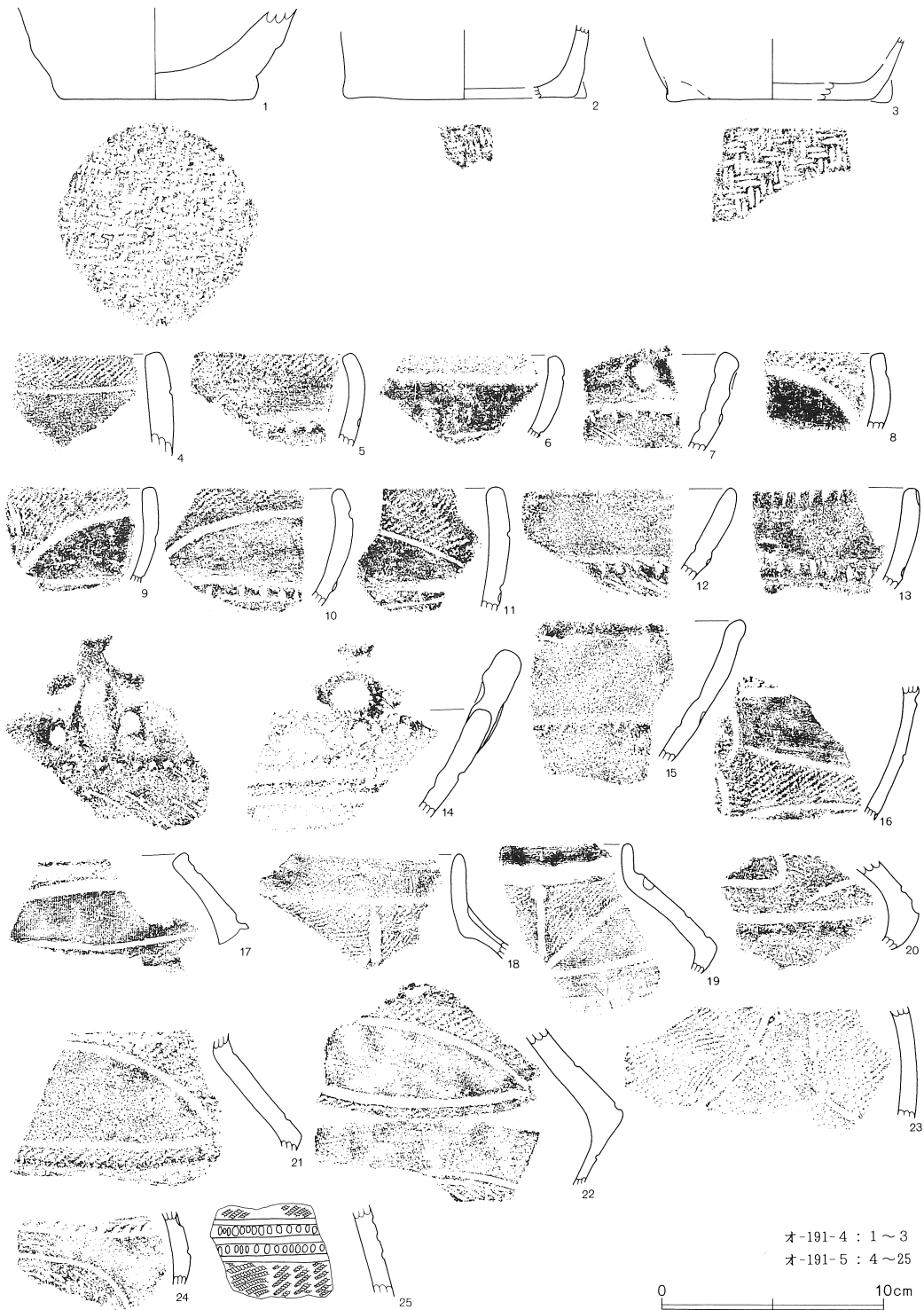
第131図 B区グリッド出土土器拓影図(7)



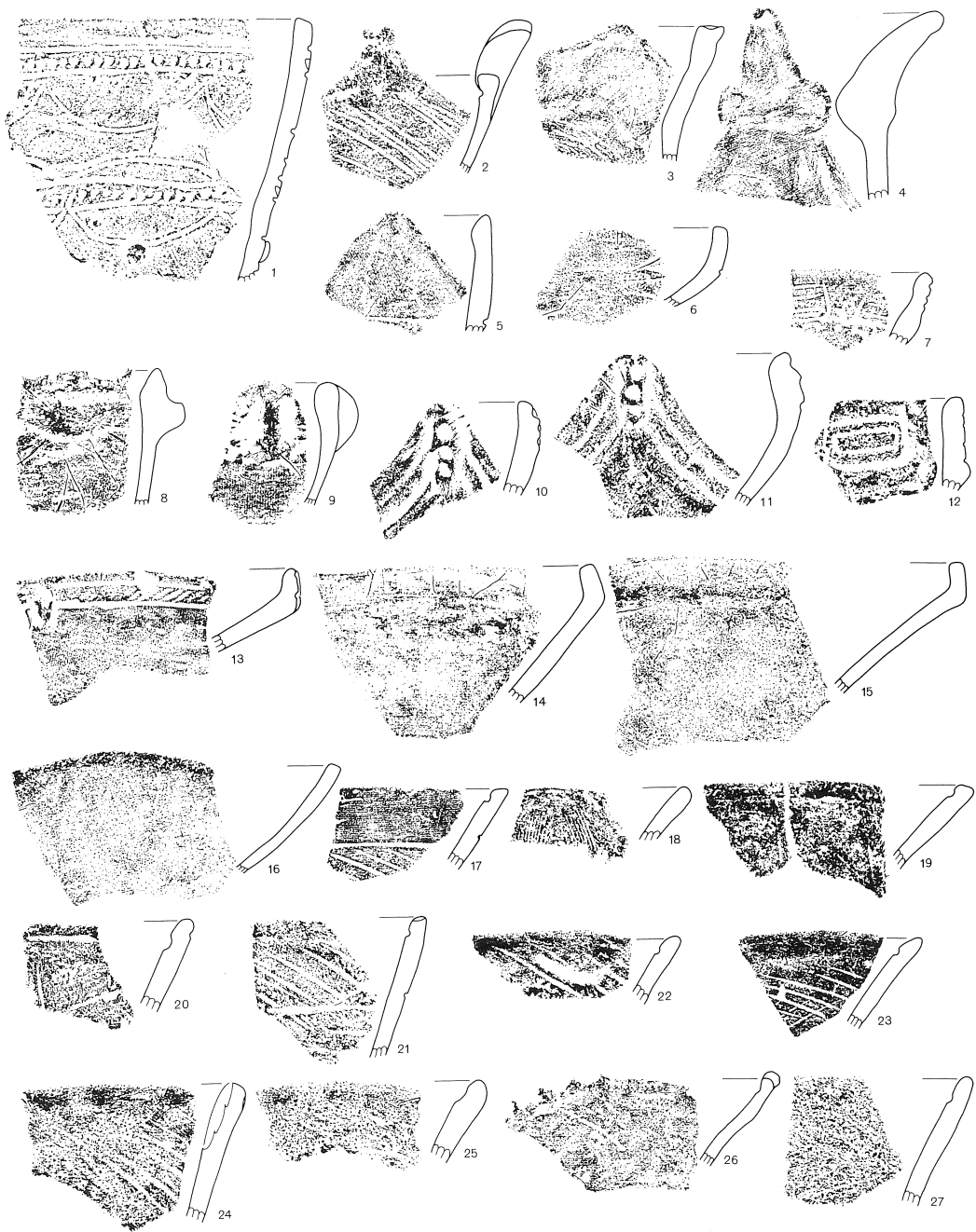
第132図 B区グリッド出土土器拓影図(8)



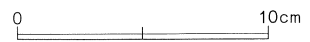
第133図 B区グリッド出土土器拓影図(9)



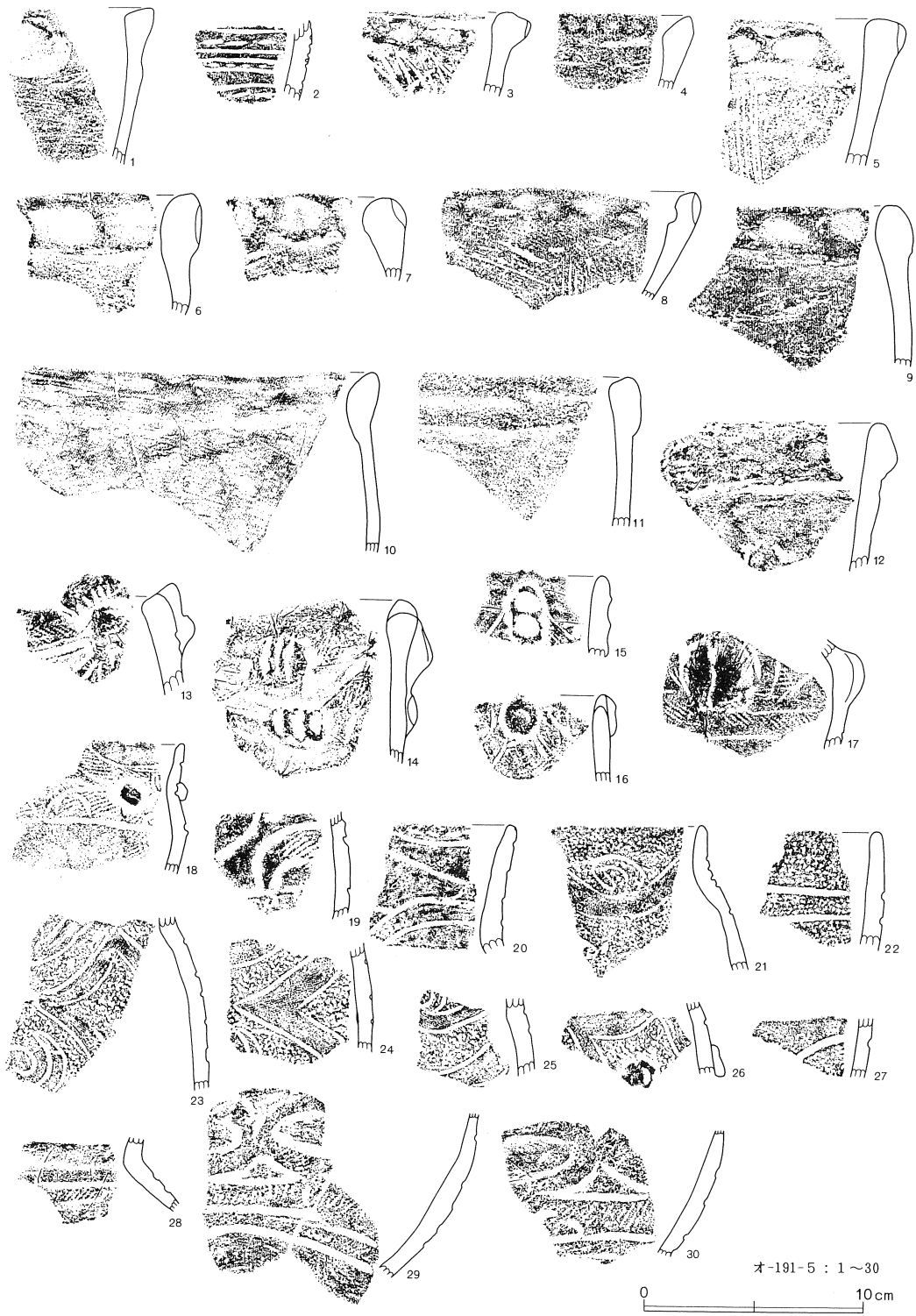
第134図 B区グリッド出土土器拓影図 (10)



オ-191-5 : 1~27



第135図 B区グリッド出土土器拓影図 (11)



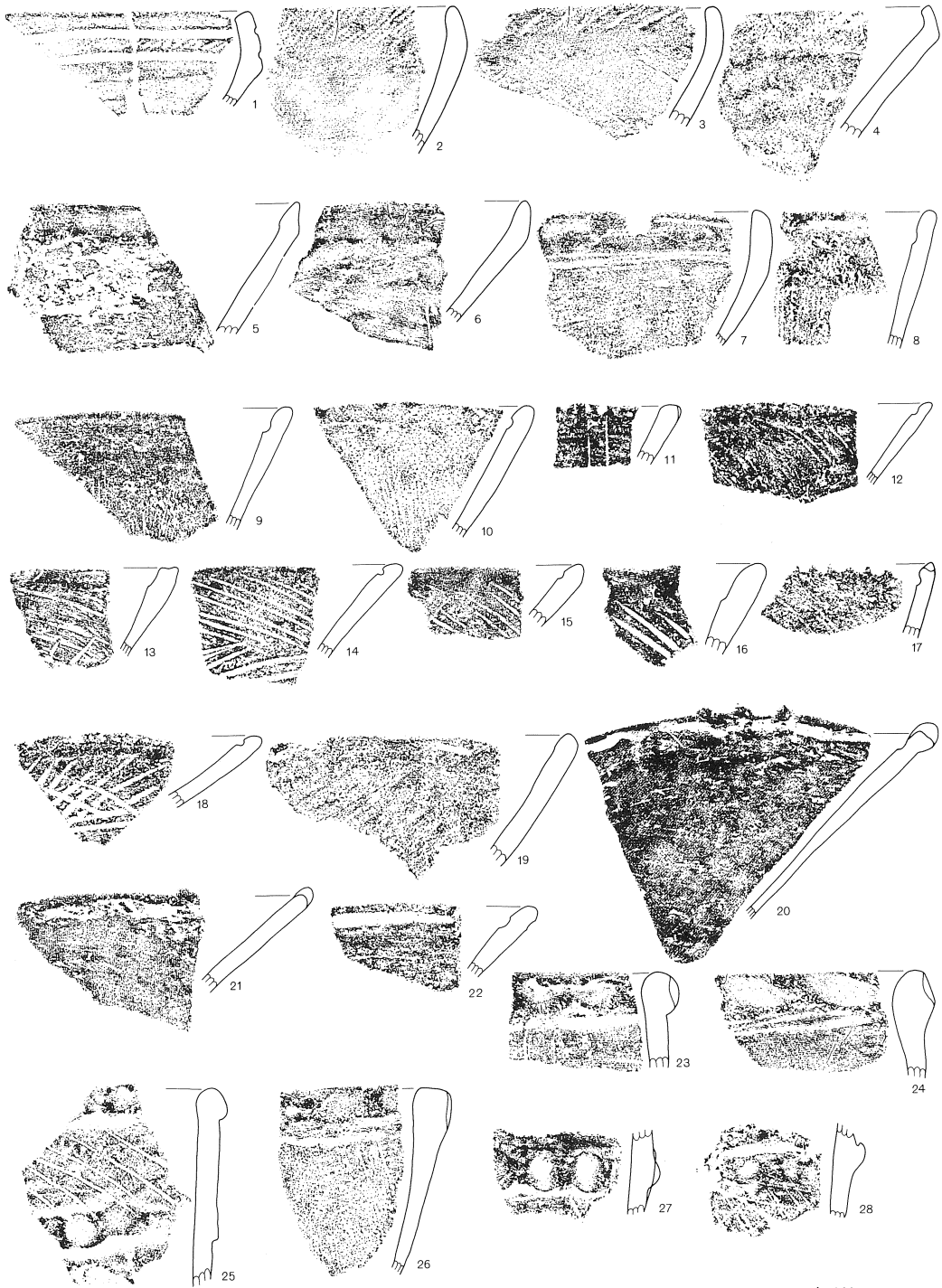
第136図 B区グリッド出土土器拓影図 (12)



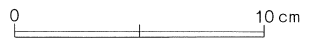
第137図 B区グリッド出土土器拓影図 (13)



第138図 B区グリッド出土土器拓影図 (14)



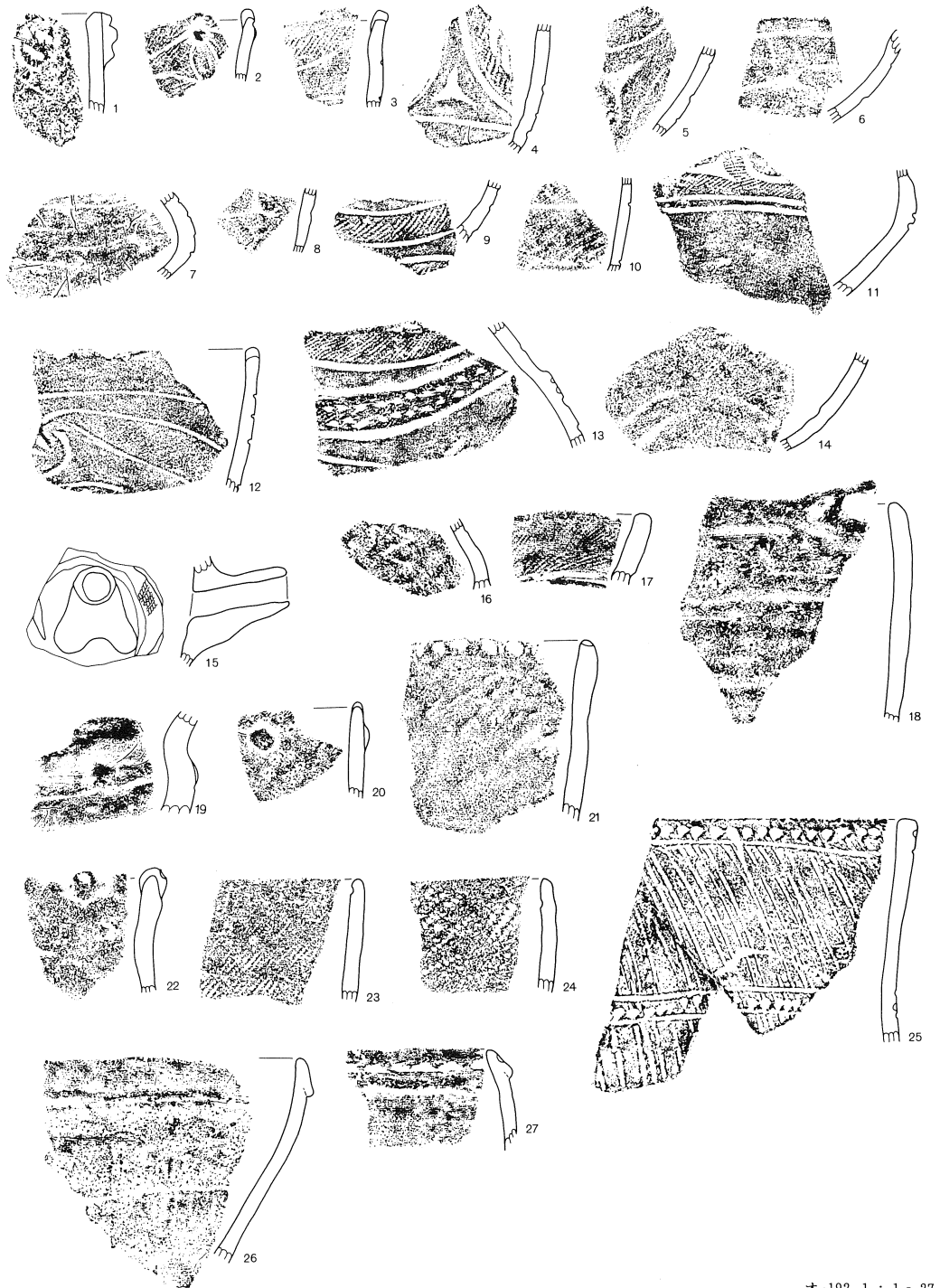
オ-192-1 : 1~28



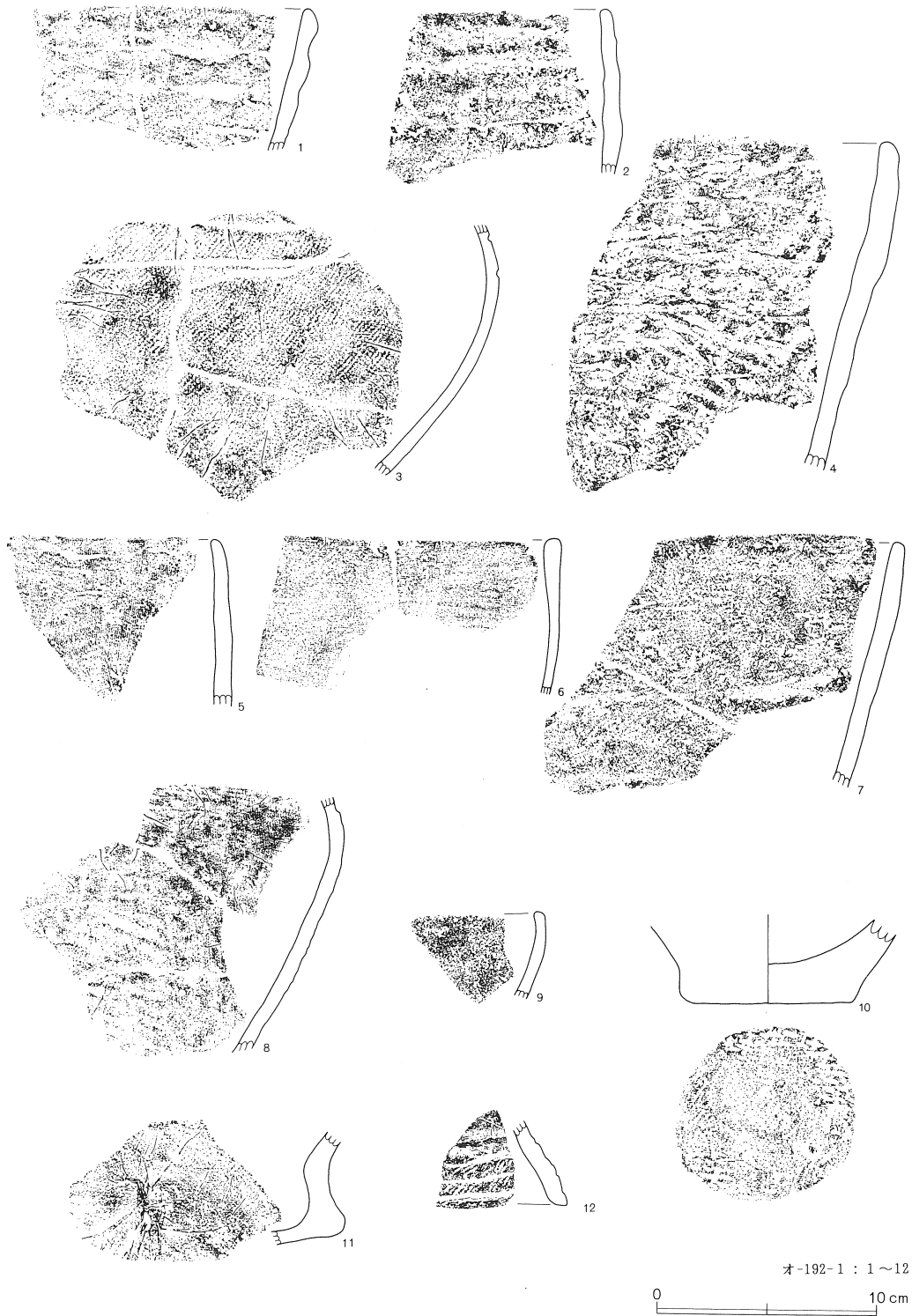
第139図 B区グリッド出土土器拓影図 (15)



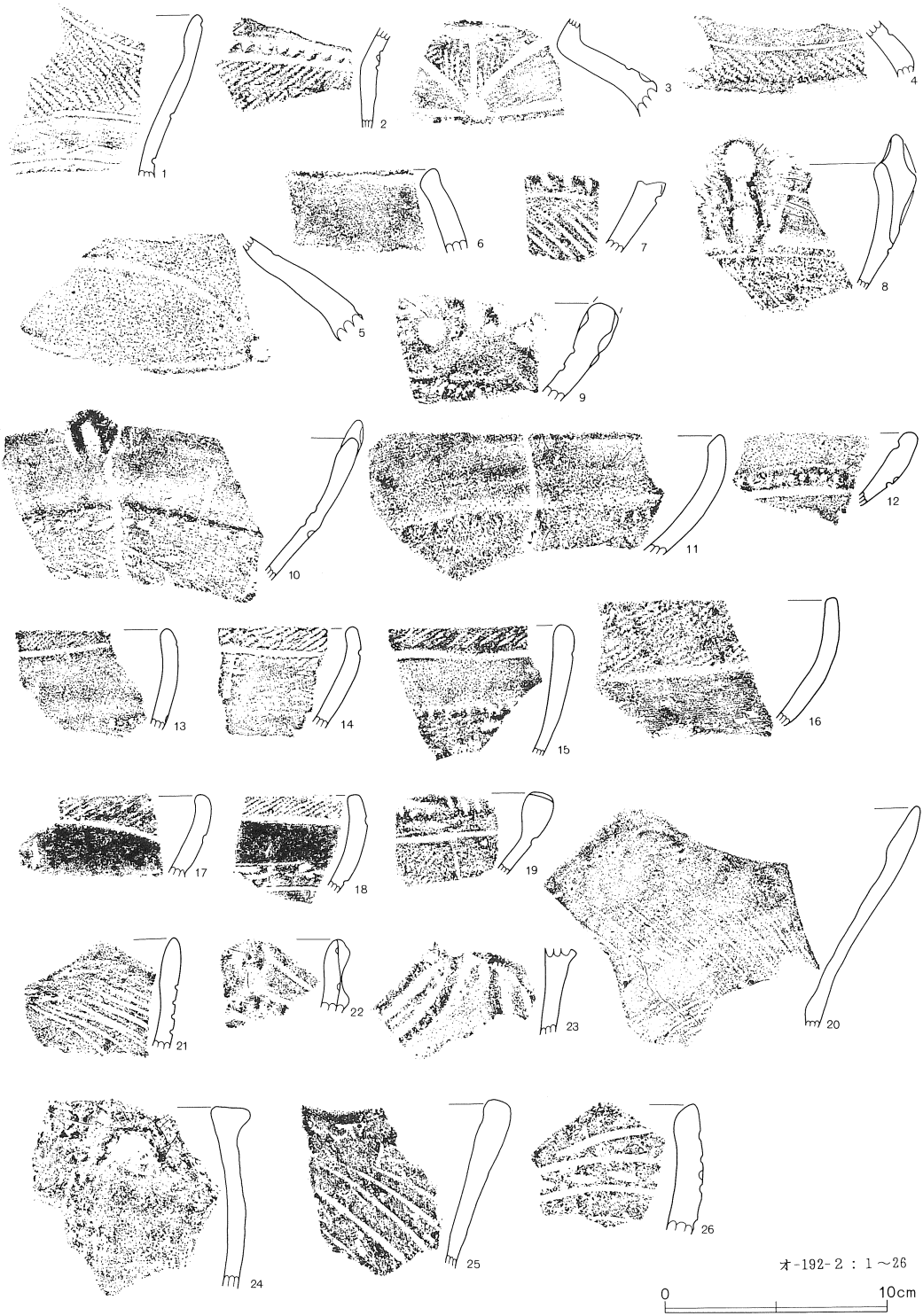
第140図 B区グリッド出土土器拓影図(16)



第141図 B区グリッド出土土器拓影図 (17)



第142図 B区グリッド出土土器拓影図(18)



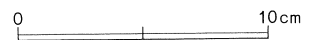
第143図 B区グリッド出土土器拓影図 (19)



第144図 B区グリッド出土土器拓影図 (20)



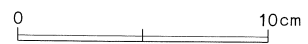
オ-192-2 : 1~21



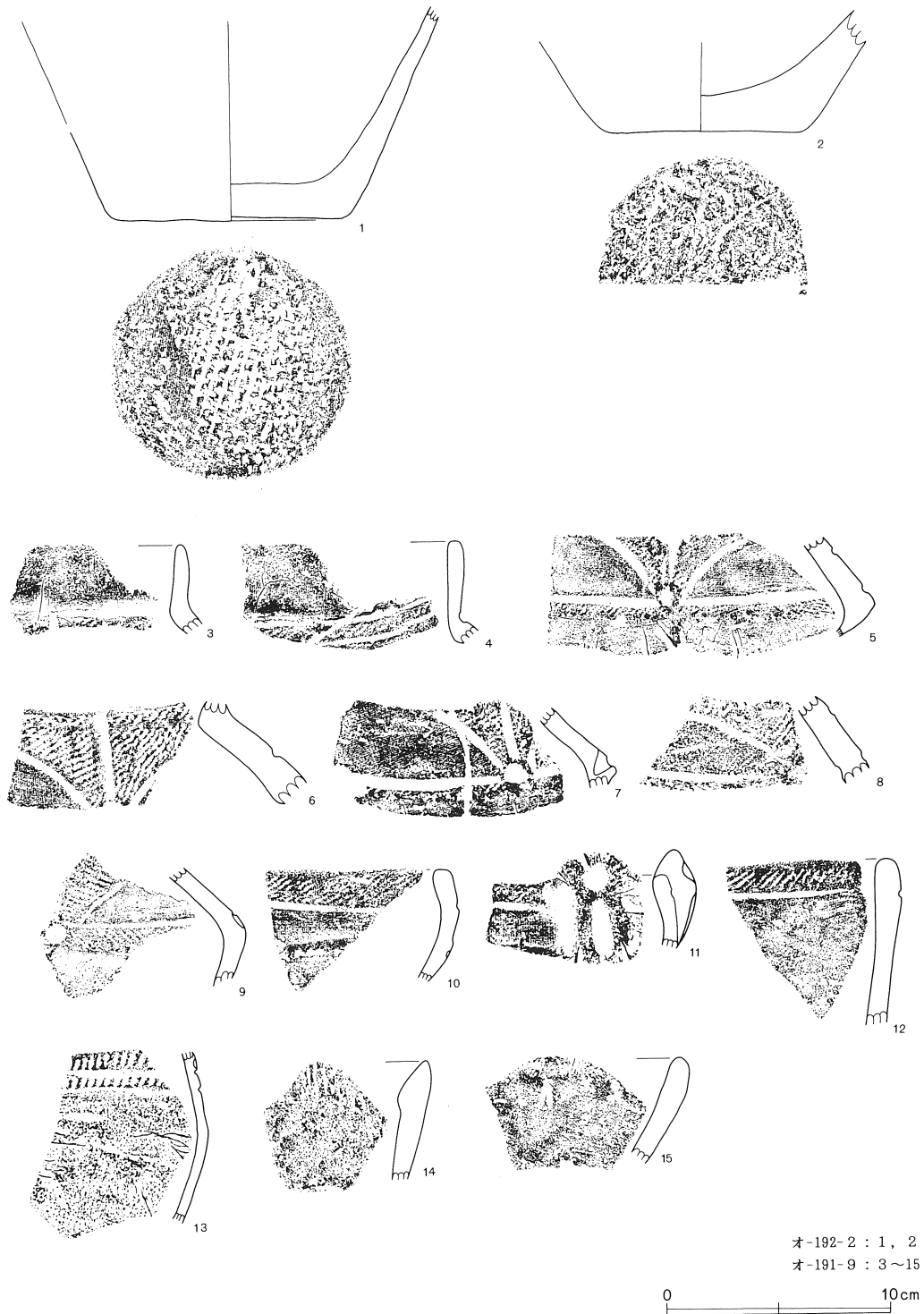
第145図 B区グリッド出土土器拓影図 (21)



オ-192-2 : 1~27



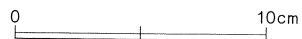
第146図 B区グリッド出土土器拓影図 (22)



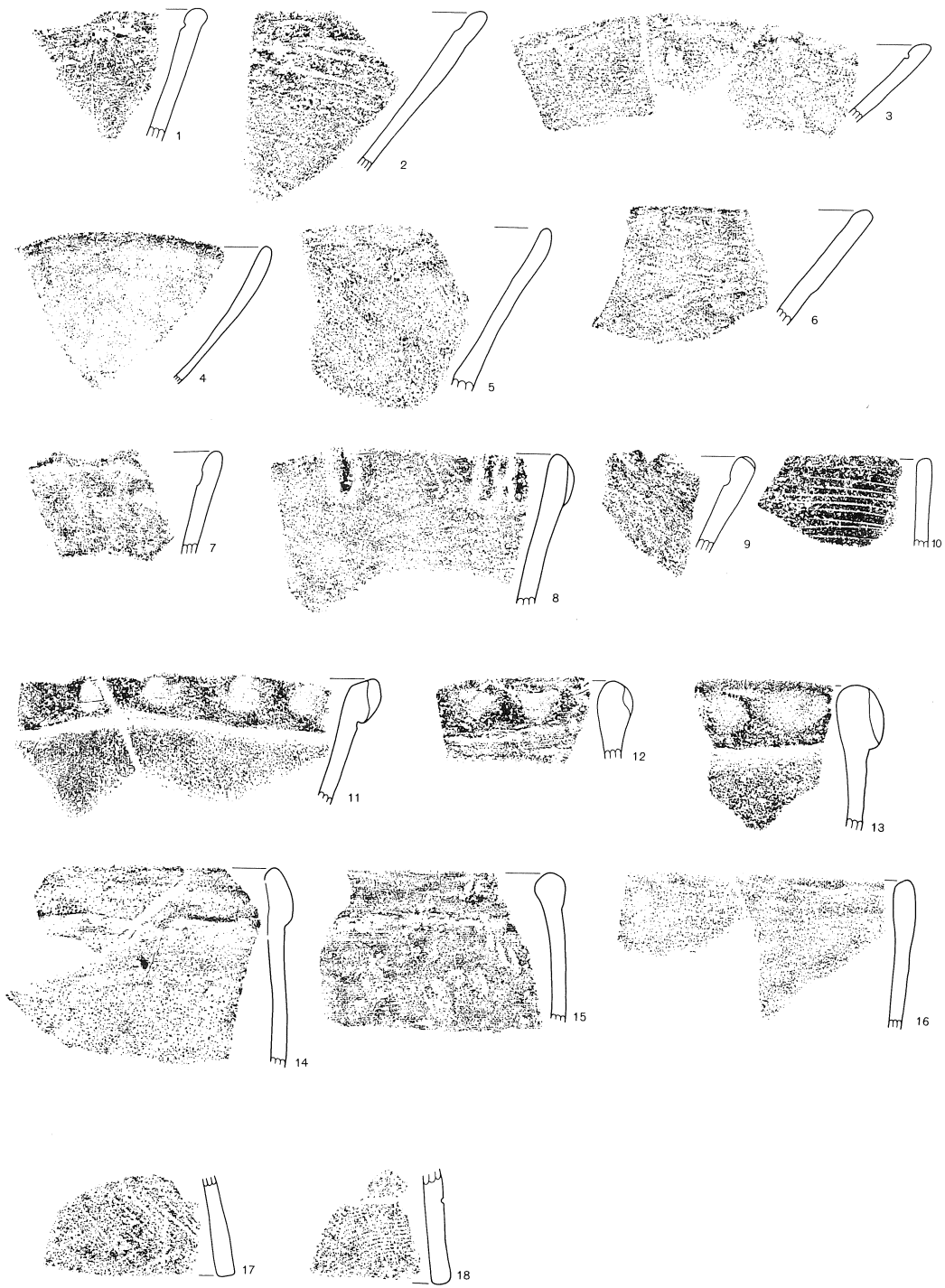
第147図 B区グリッド出土土器拓影図 (23)



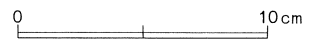
オ-191-9 : 1~19



第148図 B区グリッド出土土器拓影図(24)



オ-191-9 : 1~18



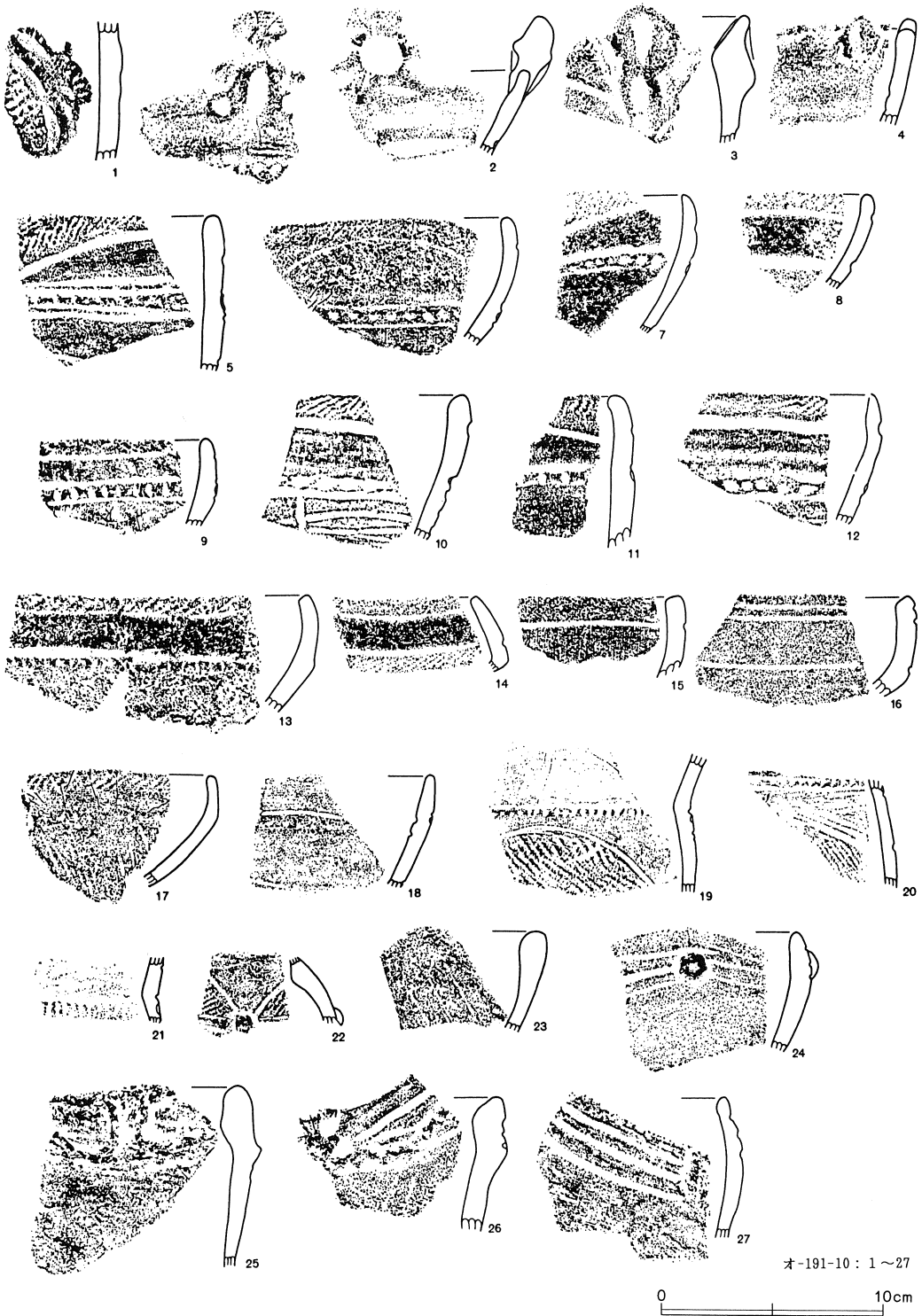
第149図 B区グリッド出土土器拓影図 (25)



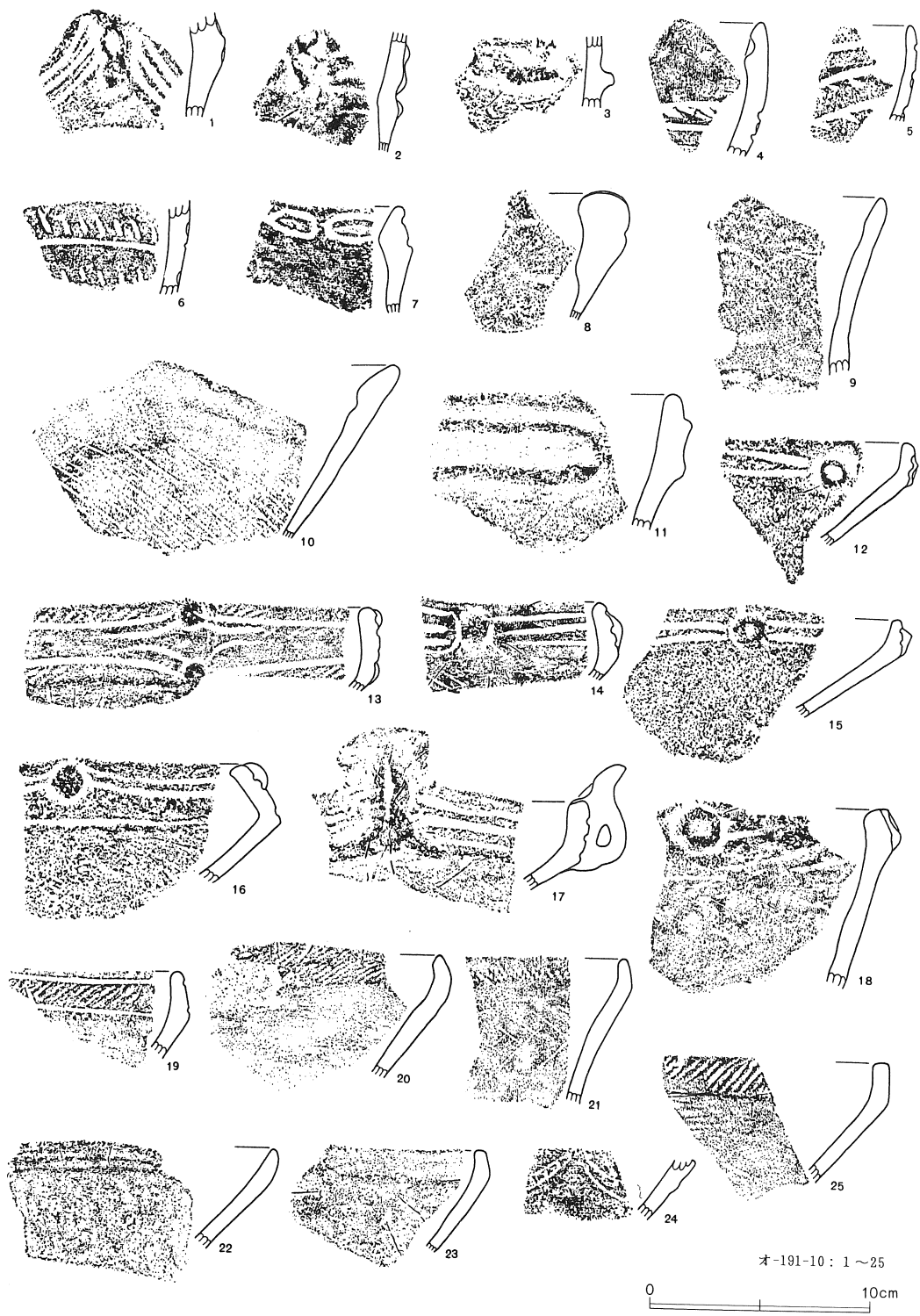
オ-191-9 : 1~25

0 10cm

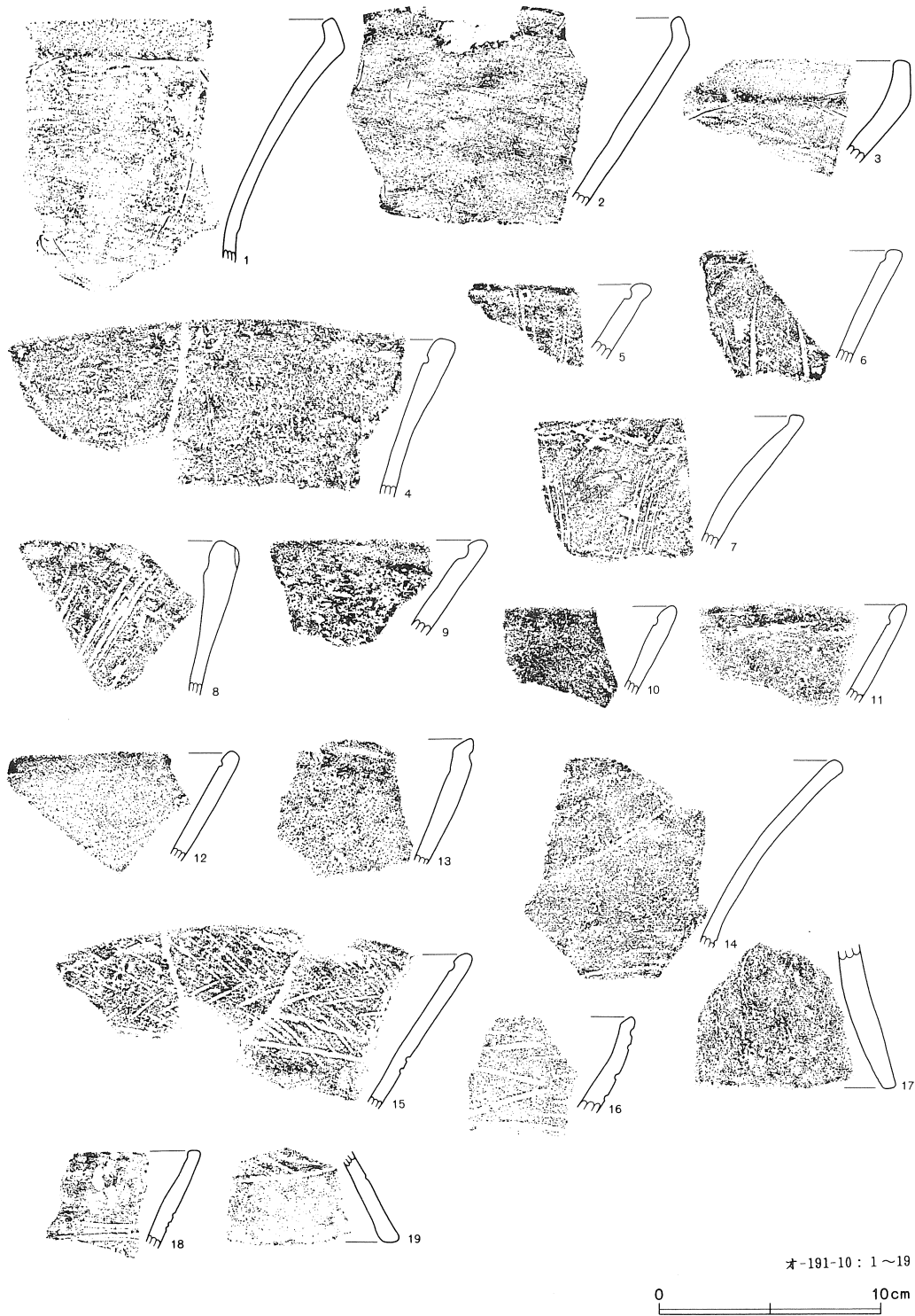
第150図 B区グリッド出土土器拓影図 (26)



第151図 B区グリッド出土土器拓影図 (27)



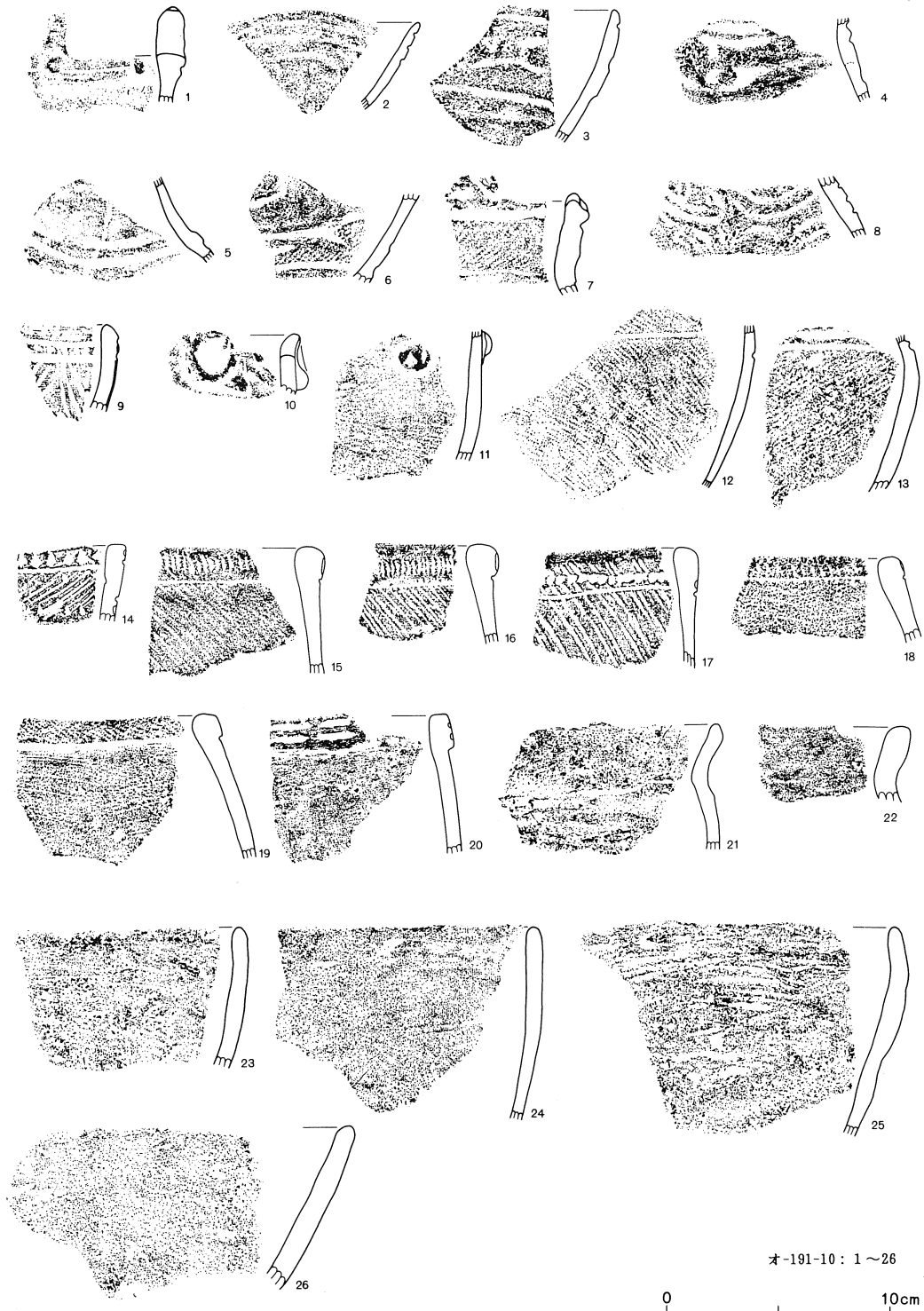
第152図 B区グリッド出土土器拓影図 (28)



第153図 B区グリッド出土土器拓影図 (29)



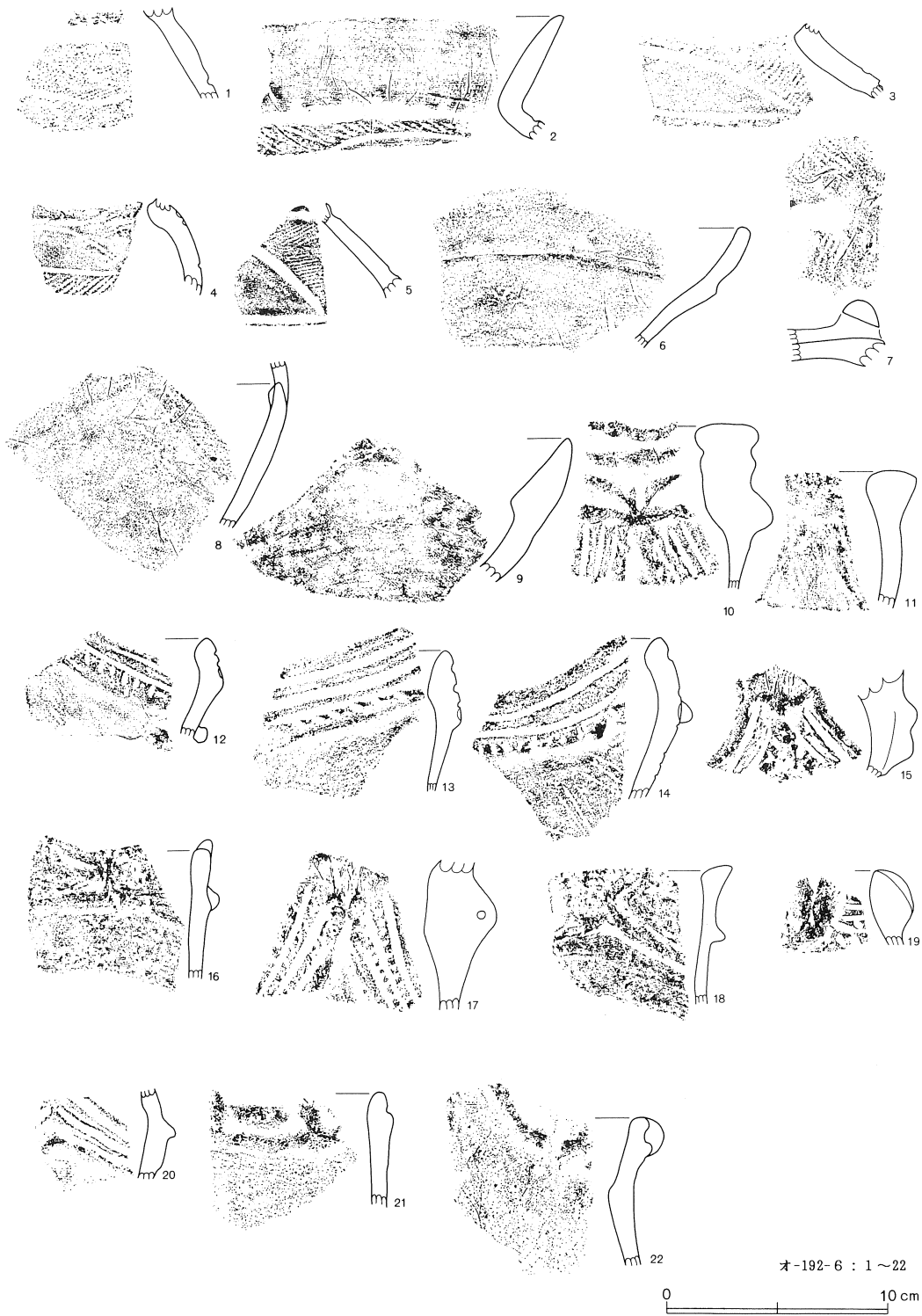
第154図 B区グリッド出土土器拓影図 (30)



第155図 B区グリッド出土土器拓影図 (31)



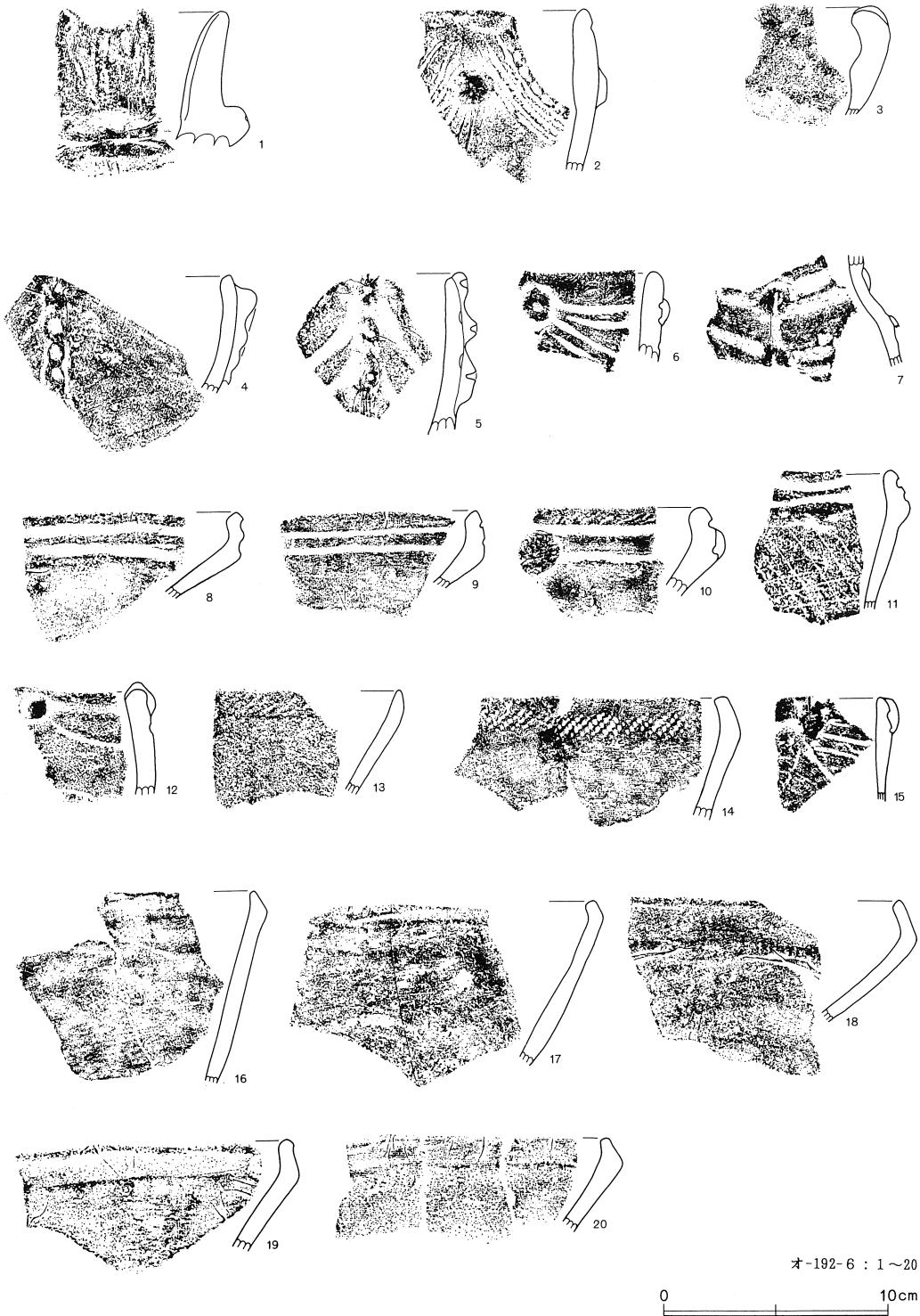
第156図 B区グリッド出土土器拓影図 (32)



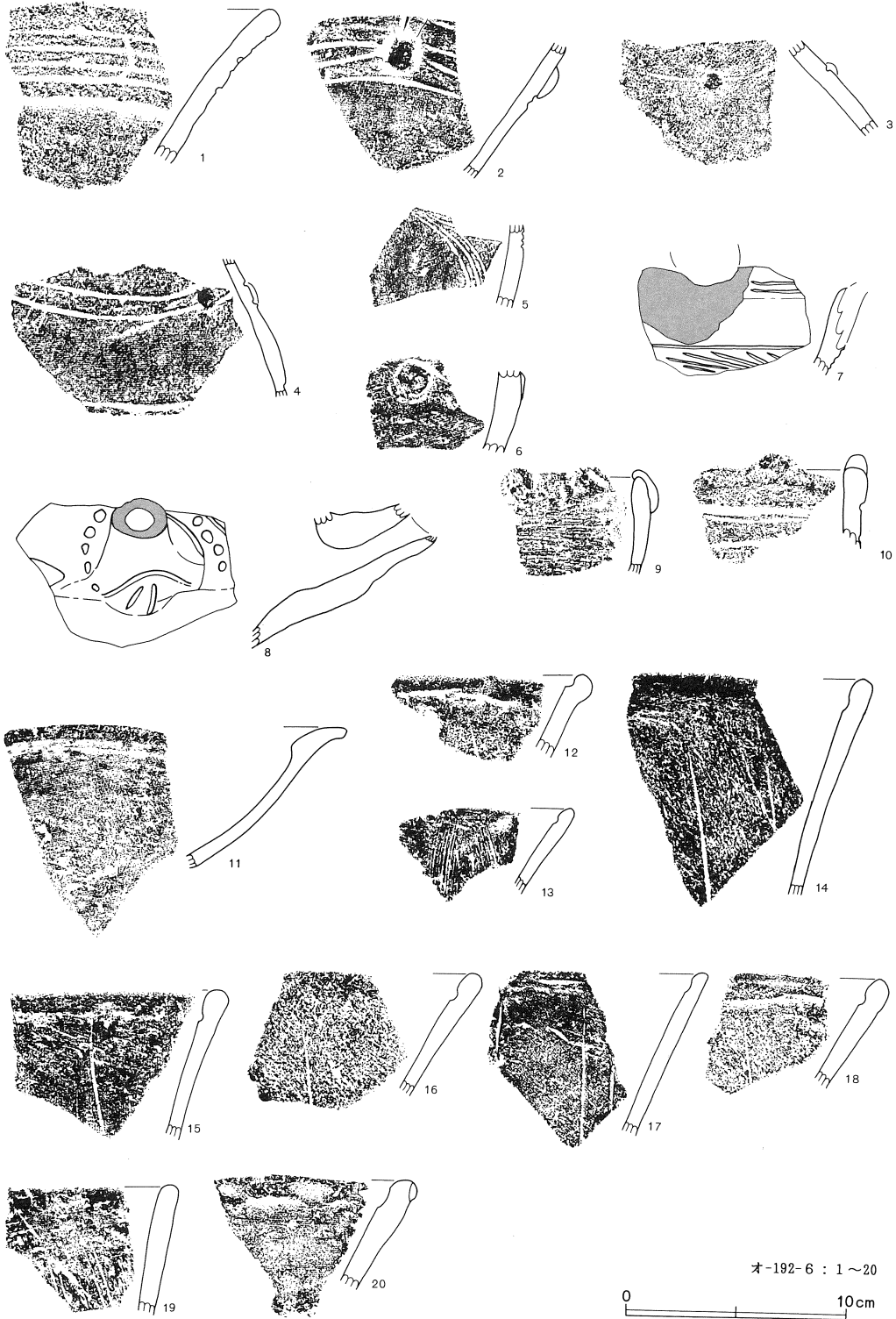
第157図 B区グリッド出土土器拓影図 (33)



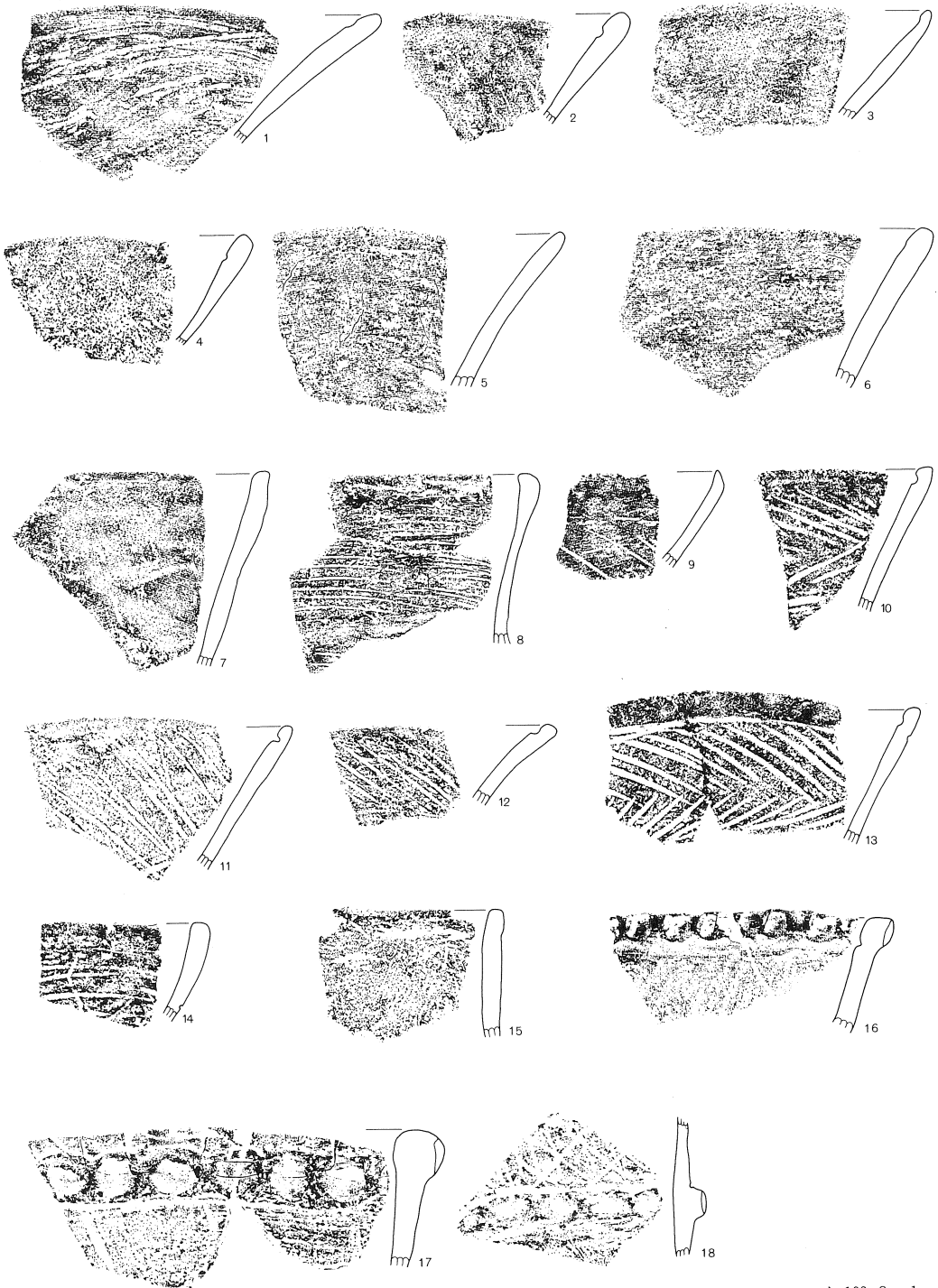
第158図 B区グリッド出土土器拓影図 (34)



第159図 B区グリッド出土土器拓影図 (35)



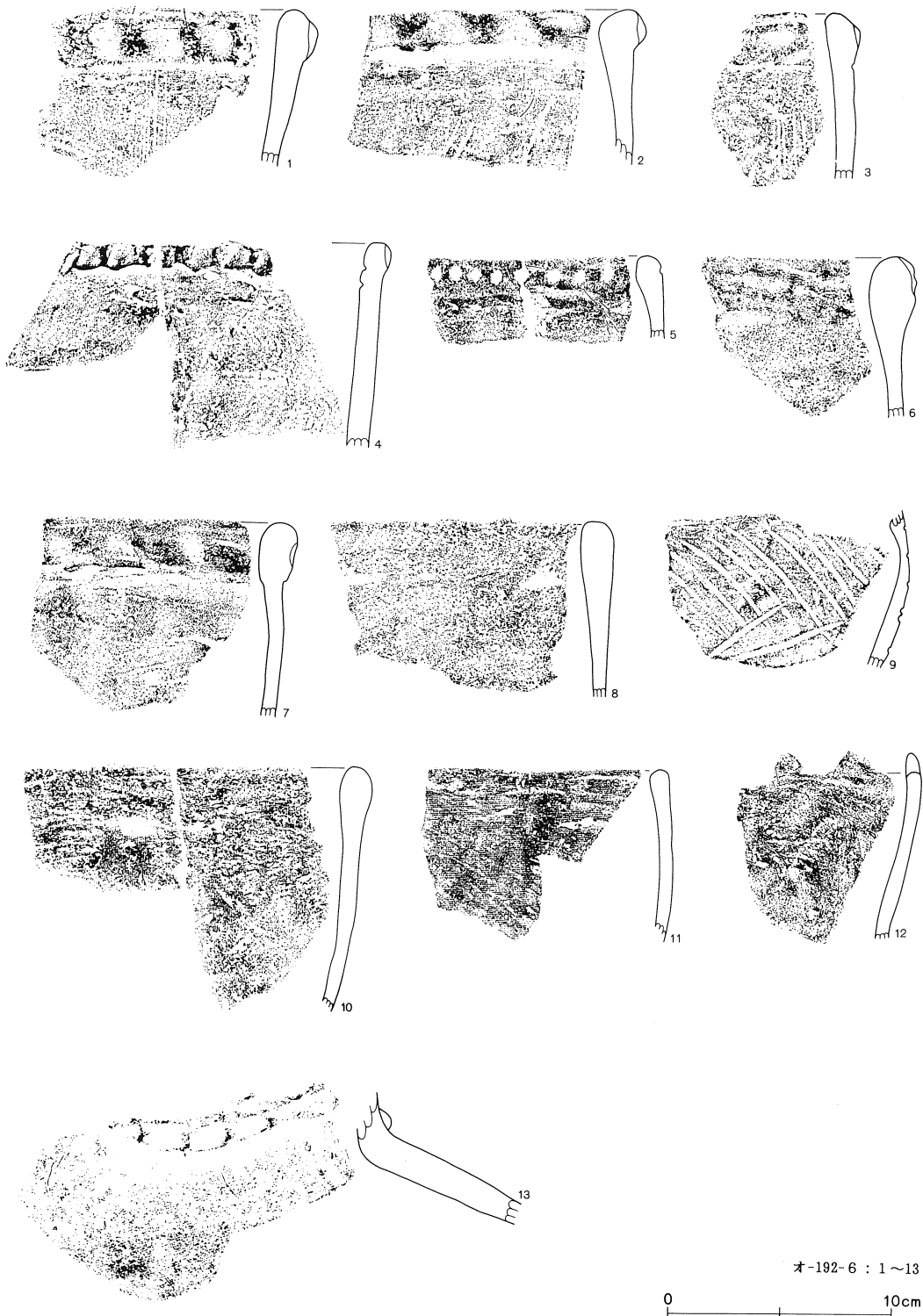
第160図 B区グリッド出土土器拓影図 (36)



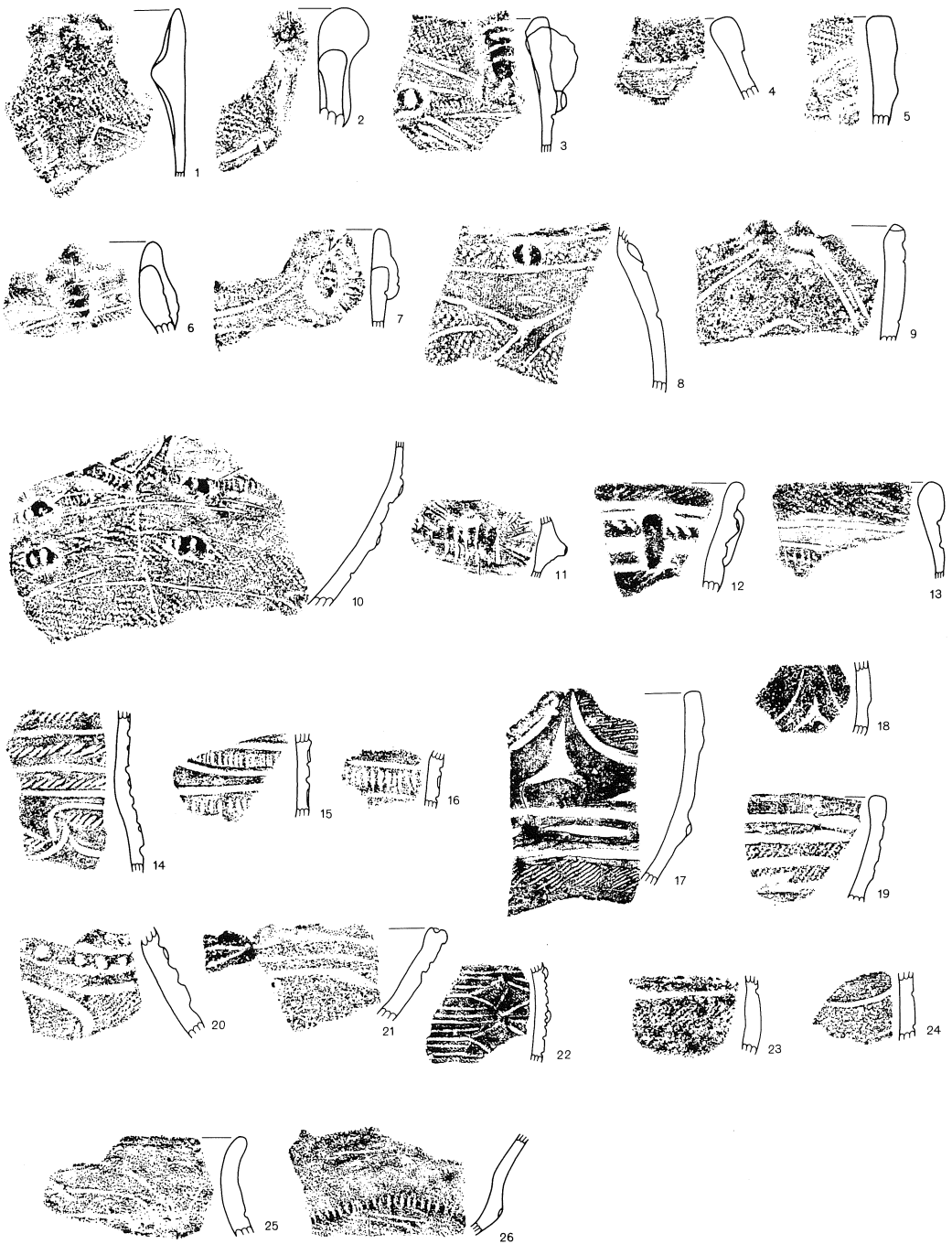
オ-192-6 : 1~18

0 10cm

第161図 B区グリッド出土土器拓影図 (37)



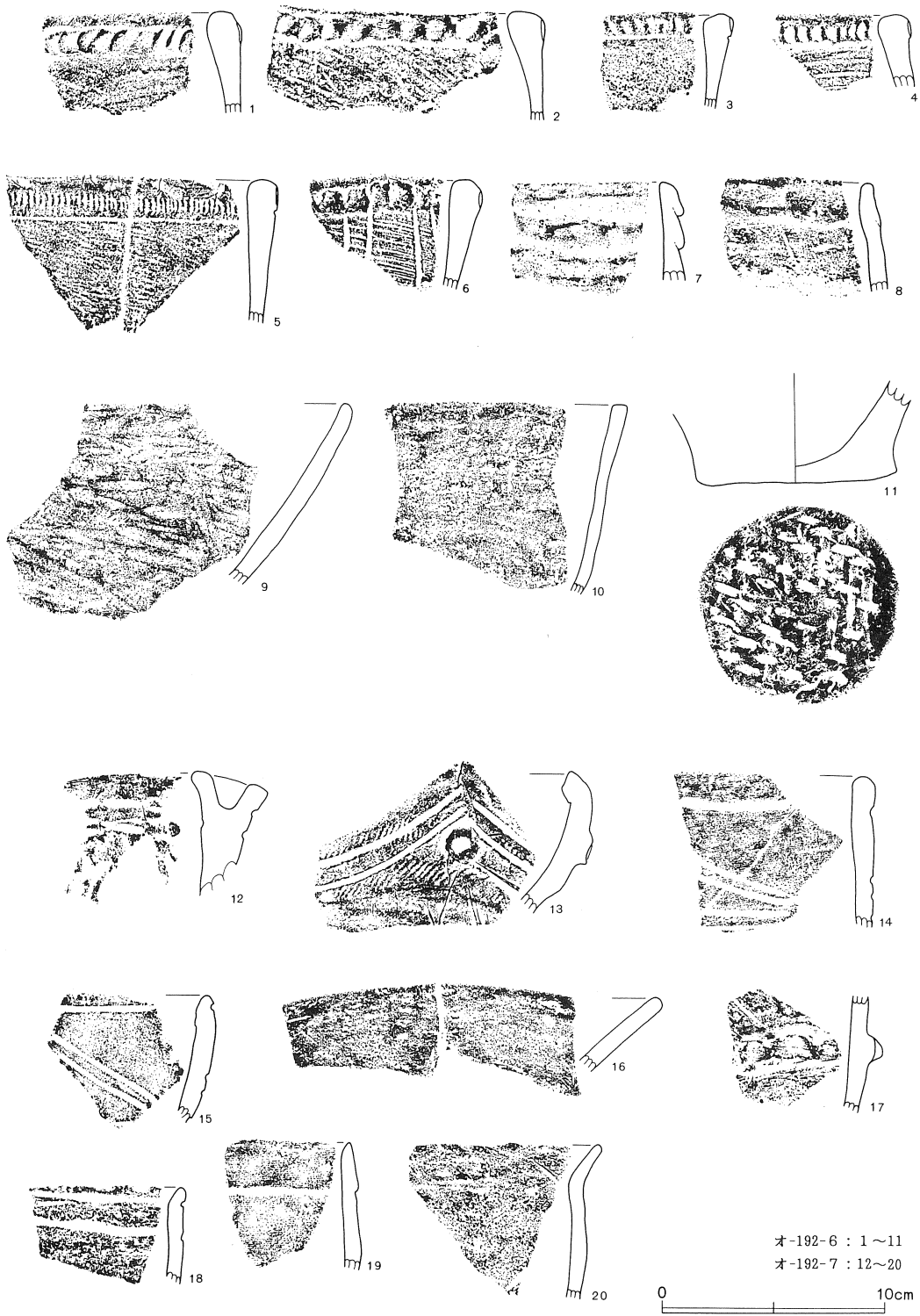
第162図 B区グリッド出土土器拓影図 (38)



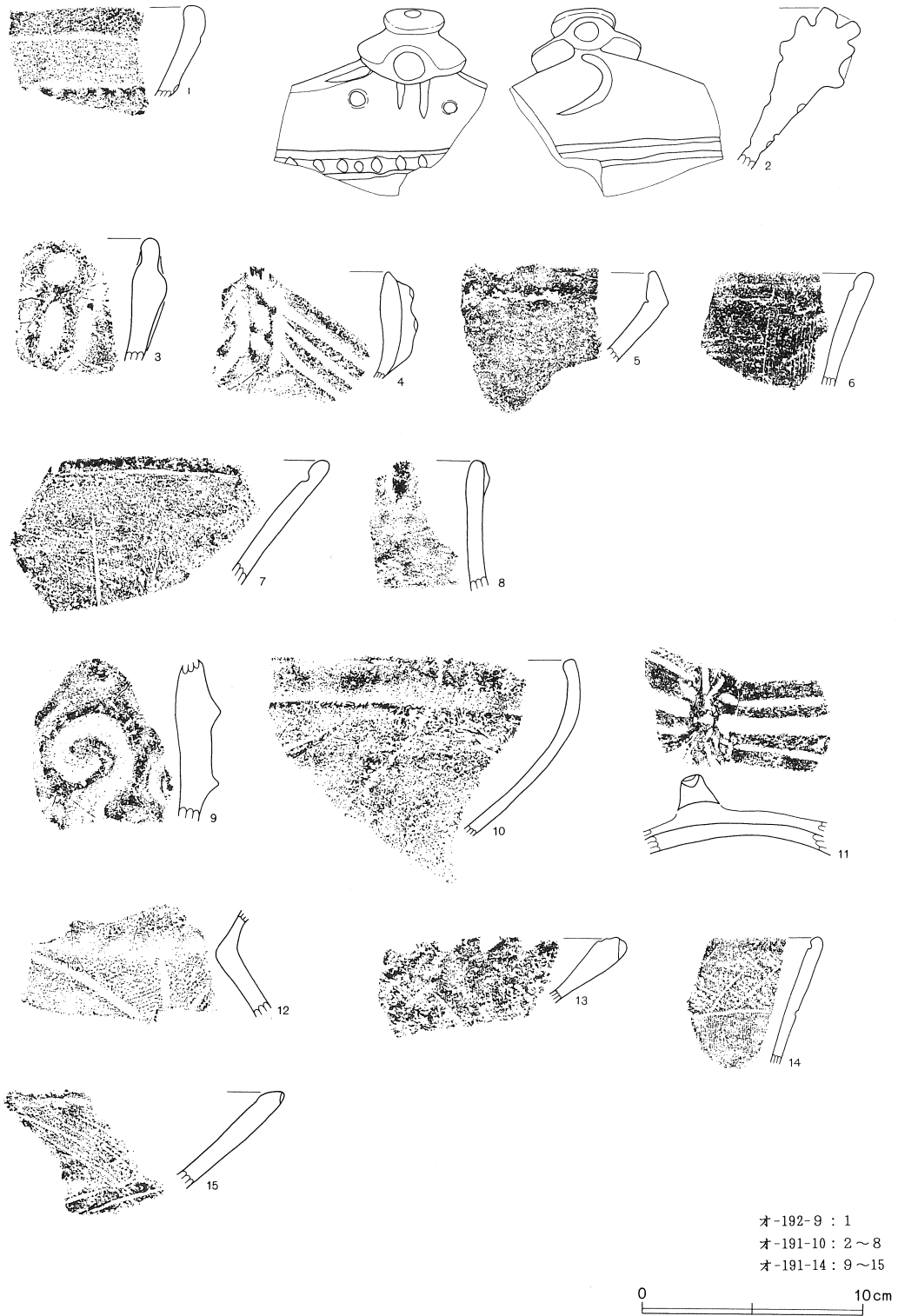
オ-192-6 : 1~26

0 10cm

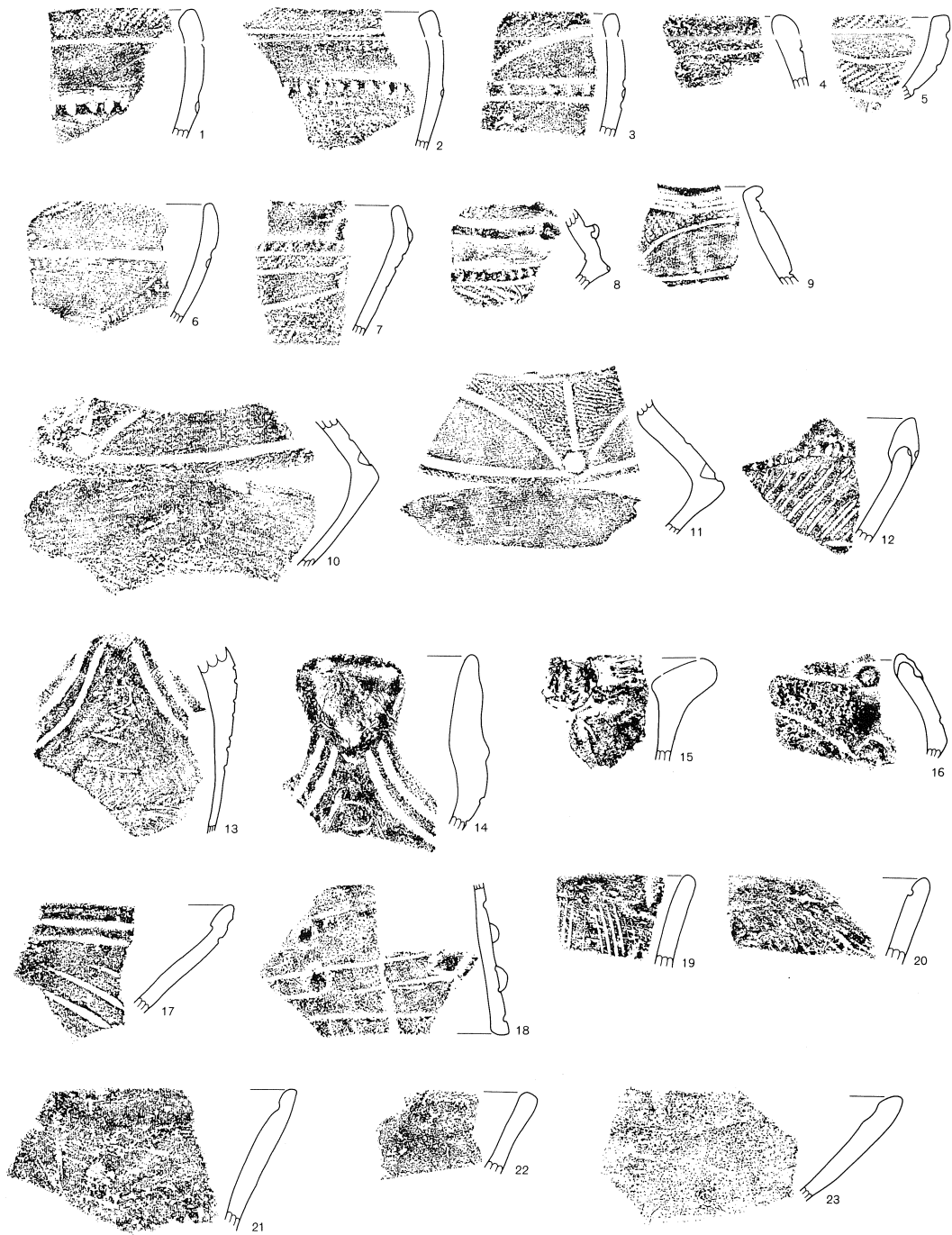
第163図 B区グリッド出土土器拓影図 (39)



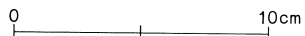
第164図 B区グリッド出土土器拓影図 (40)



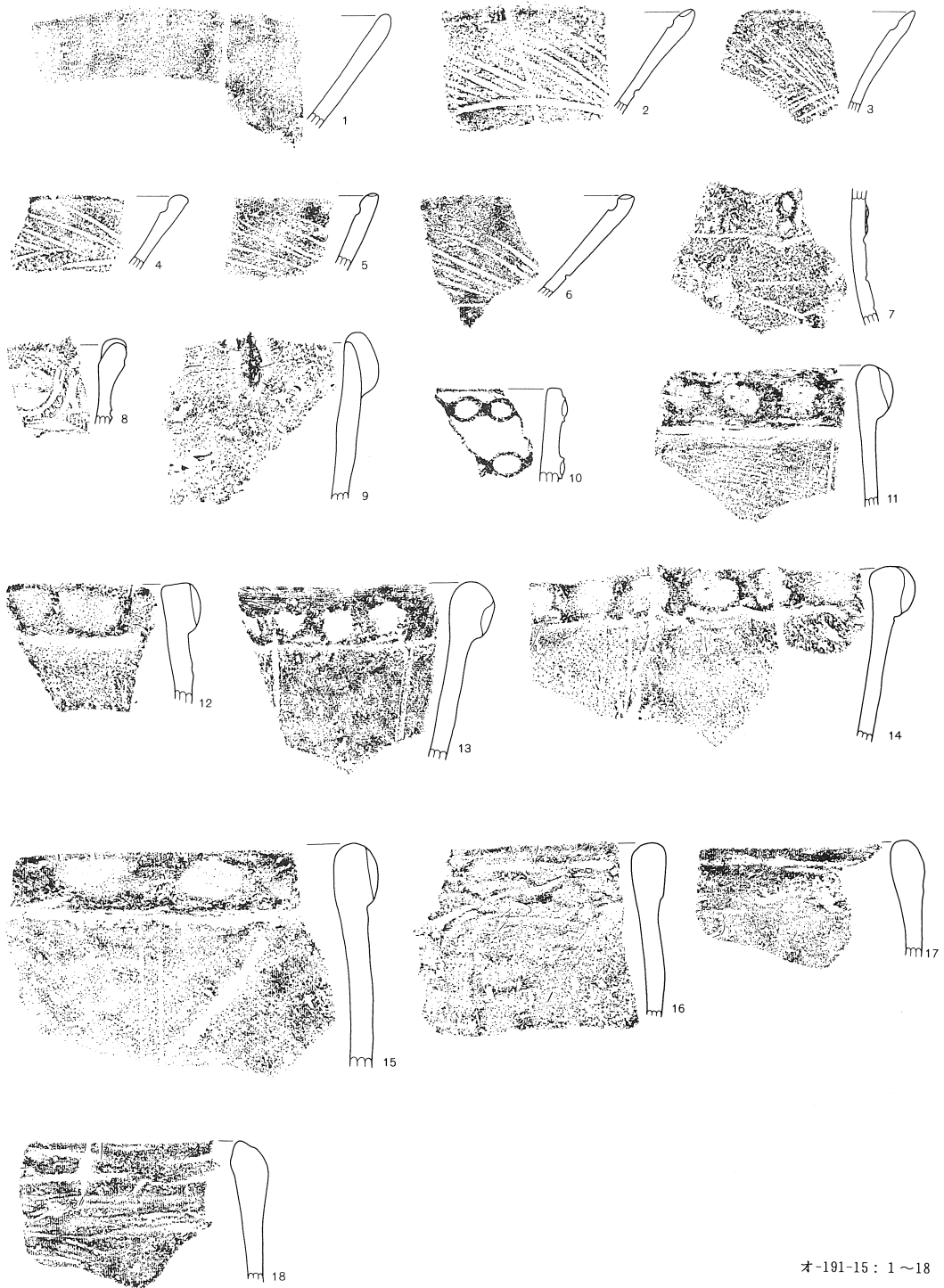
第165図 B区グリッド出土土器拓影図 (41)



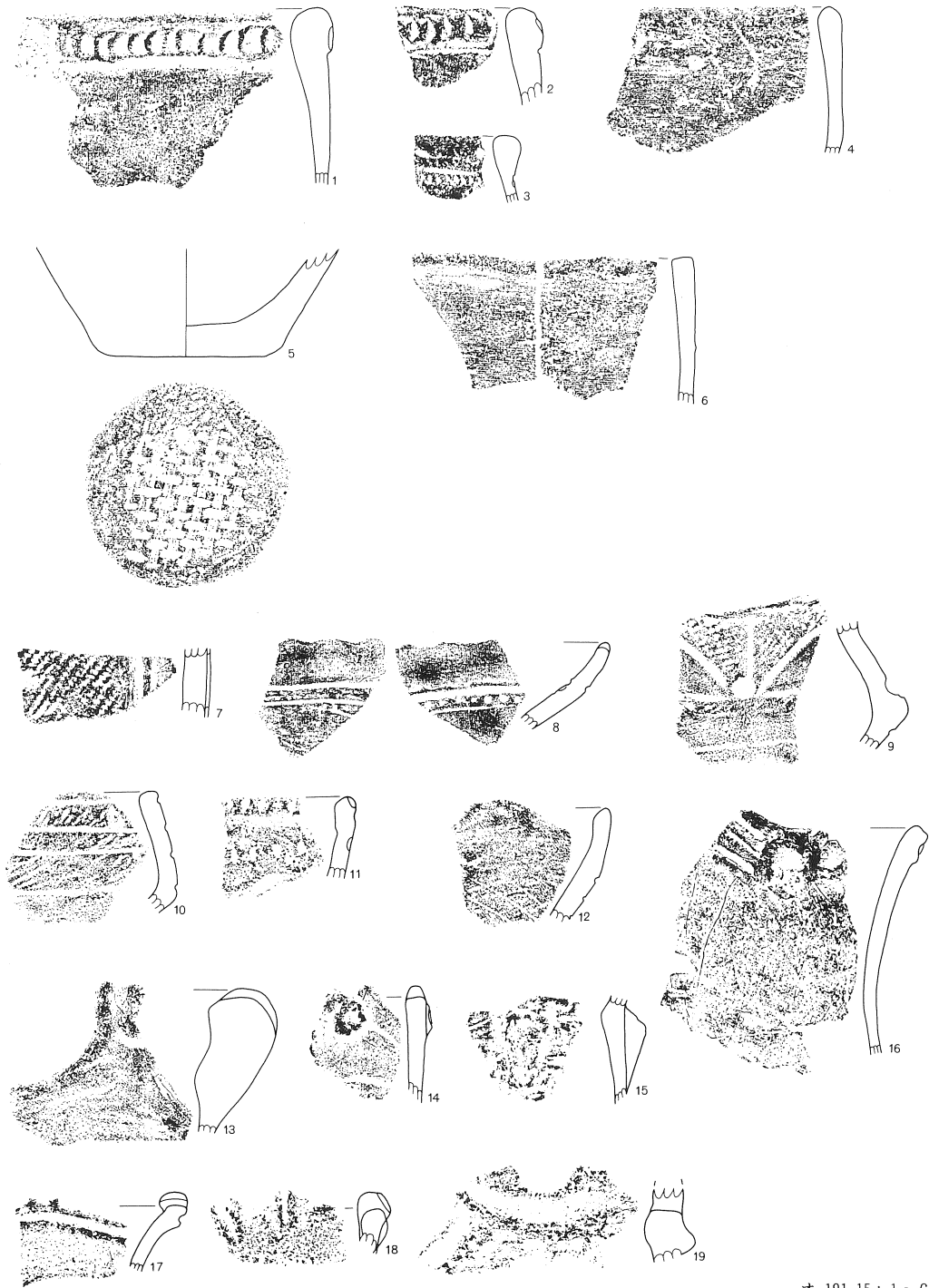
オ-191-15 : 1~23



第166図 B区グリッド出土土器拓影図(42)



第167図 B区グリッド出土土器拓影図 (43)

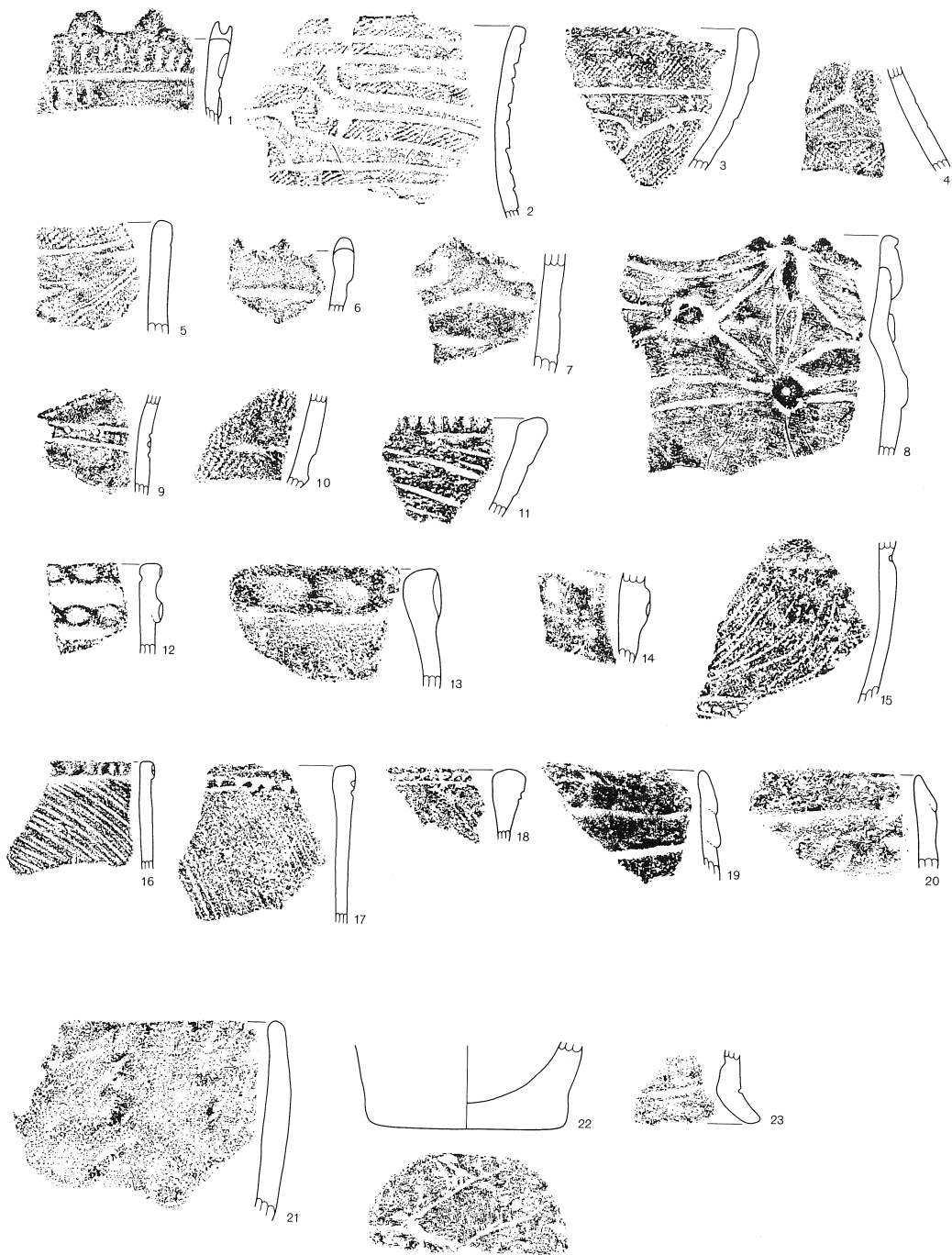


オ-191-15 : 1~6
オ-192-11 : 7~19

第168図 B区グリッド出土土器拓影図 (44)



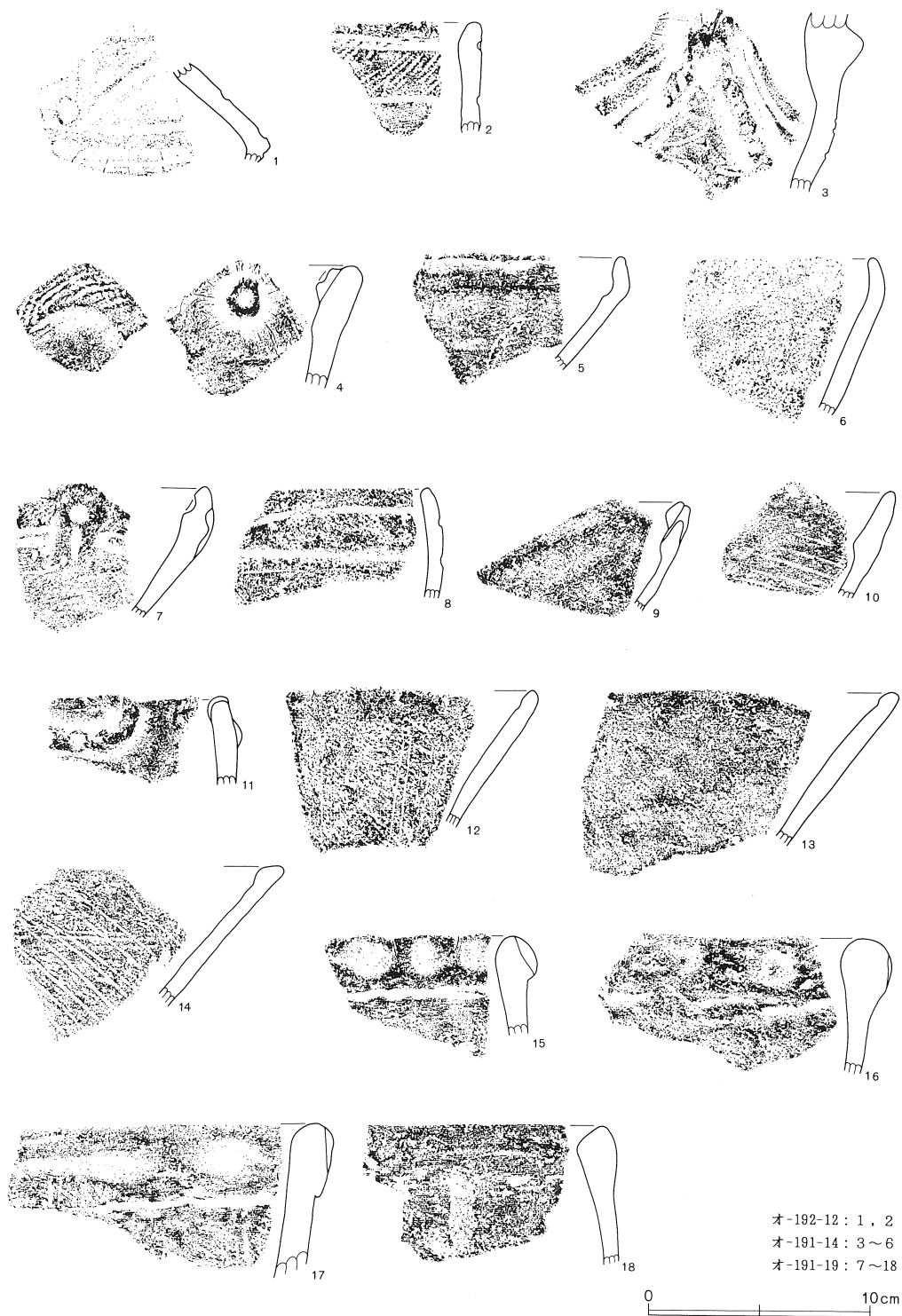
第169図 B区グリッド出土土器拓影図(45)



オ-192-11: 1~23

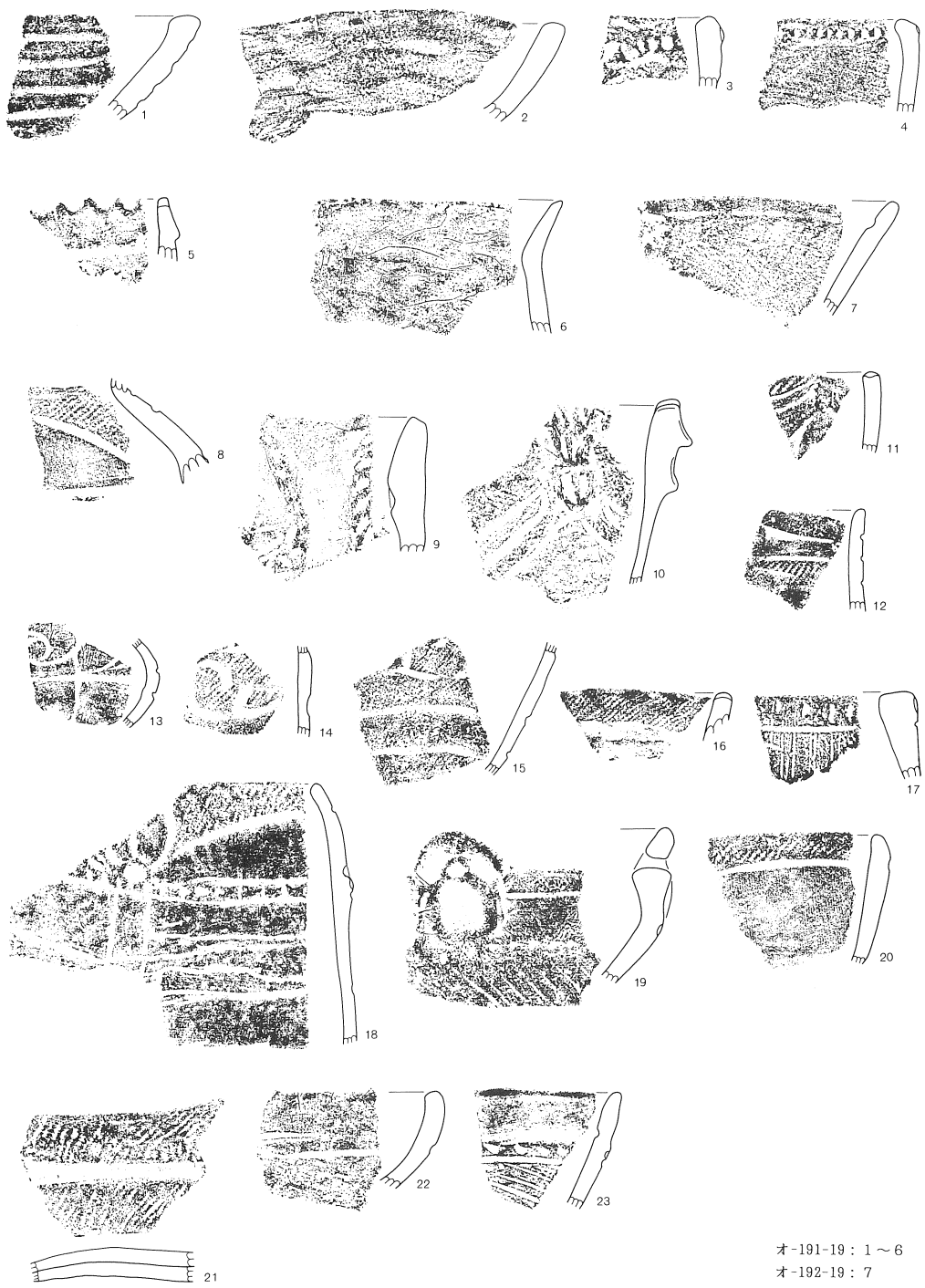
0 10cm

第170図 B区グリッド出土土器拓影図(46)

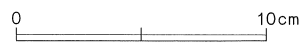


オ-192-12: 1, 2
オ-191-14: 3~6
オ-191-19: 7~18

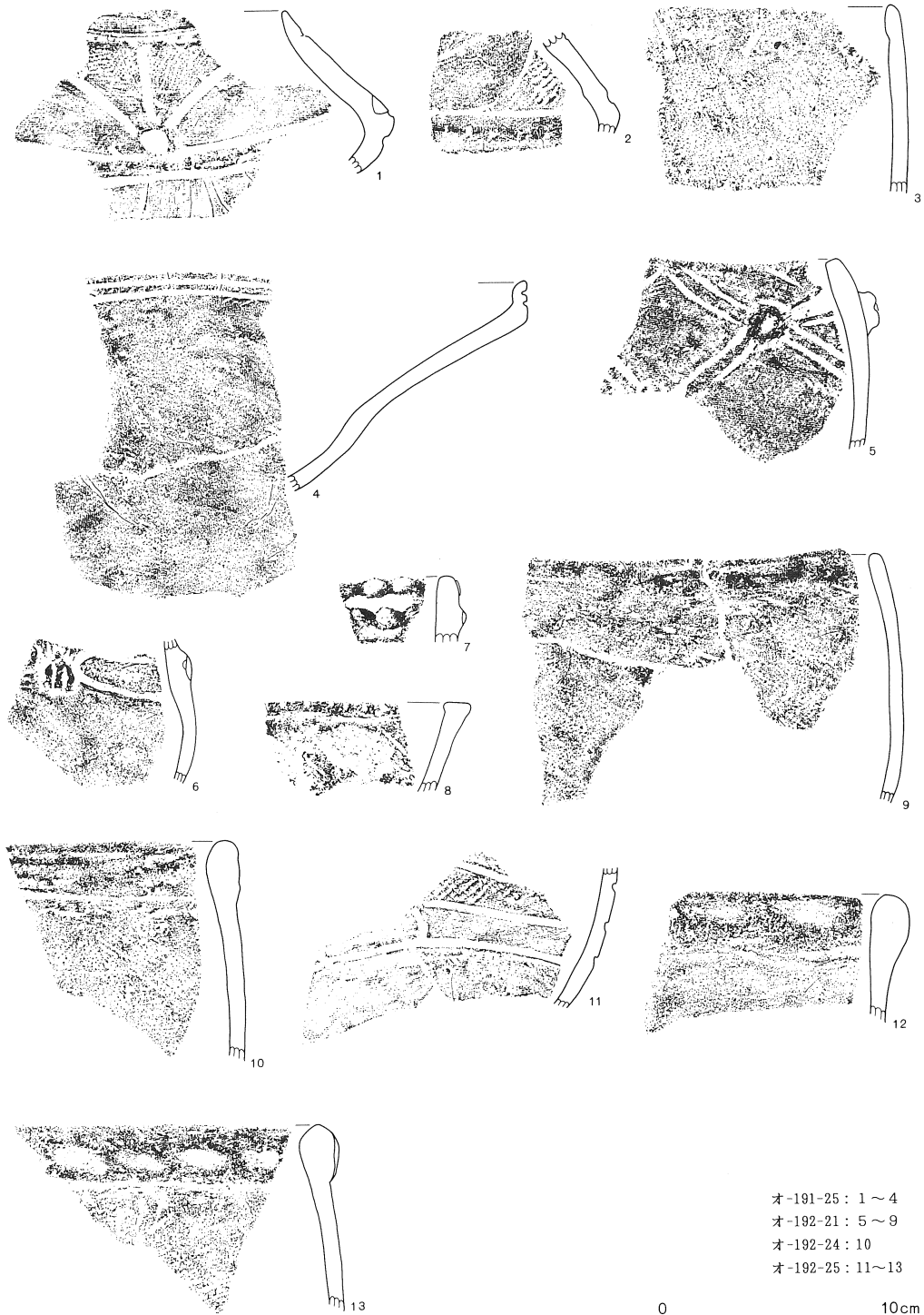
第171図 B区グリッド出土土器拓影図(47)



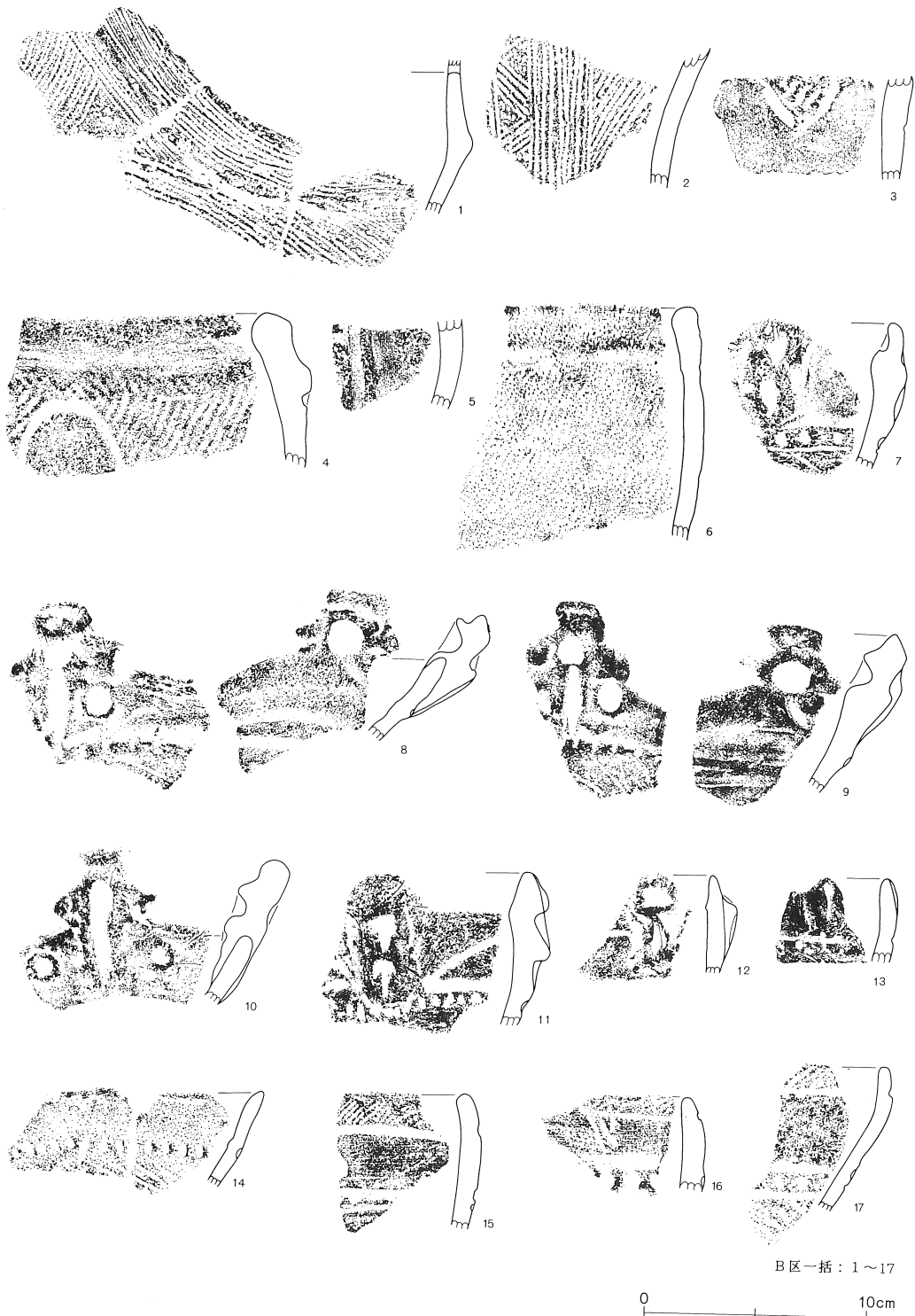
オ-191-19 : 1 ~ 6
オ-192-19 : 7
オ-191-25 : 8 ~ 23



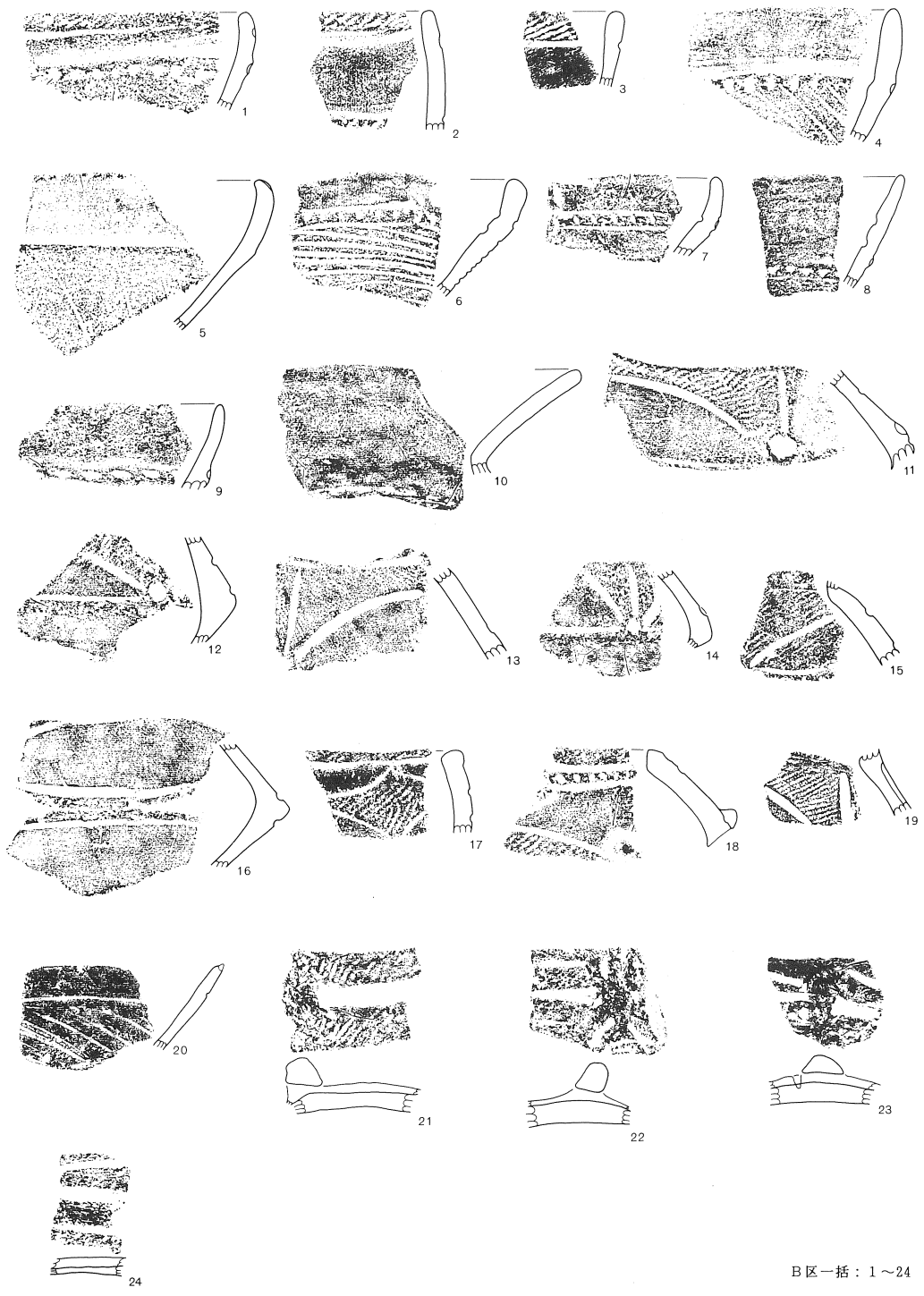
第172図 B区グリッド出土土器拓影図 (48)



第173図 B区グリッド出土土器拓影図 (49)



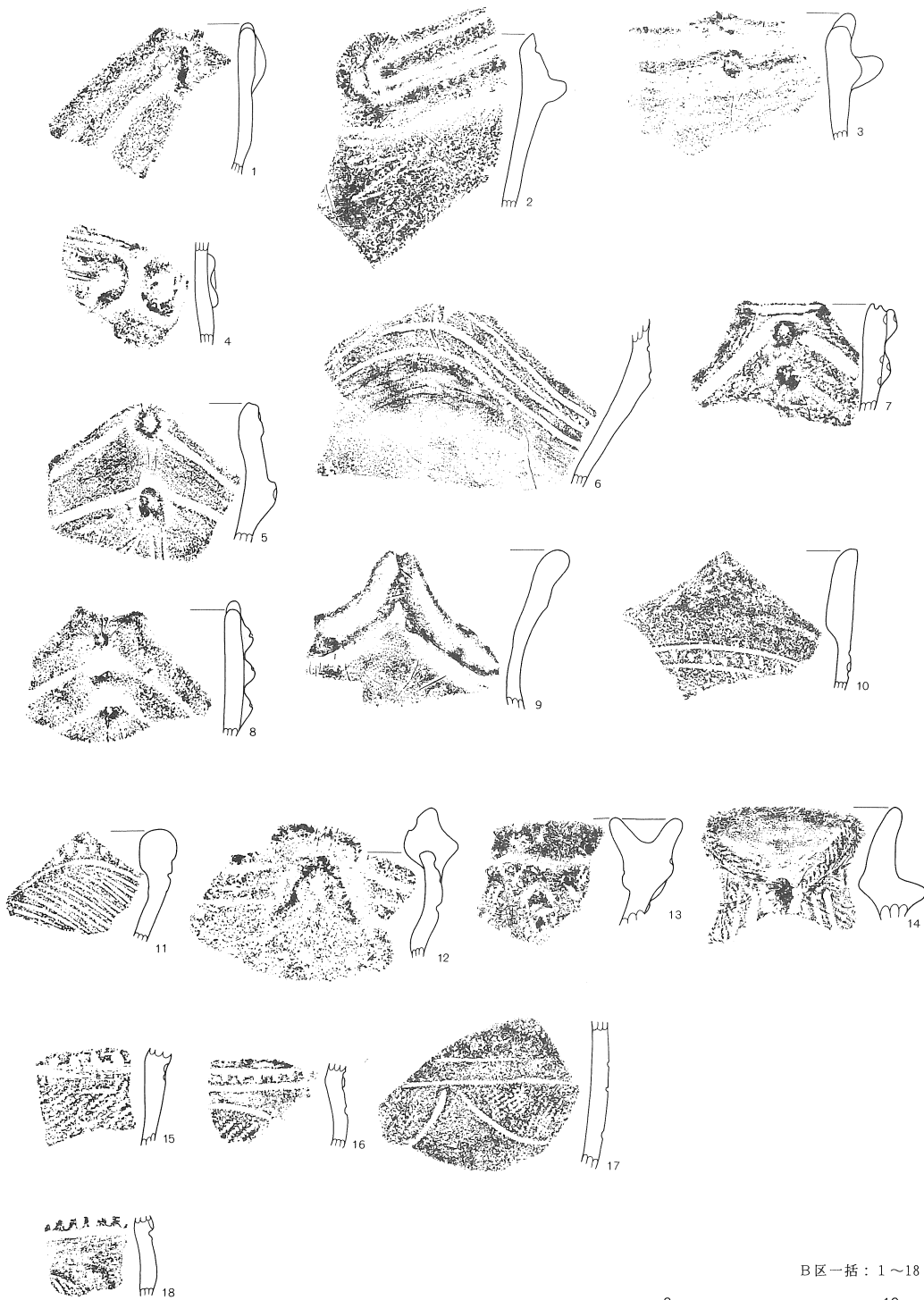
第174図 B区グリッド出土土器拓影図 (50)



第175図 B区グリッド出土土器拓影図 (51)



第176図 B区グリッド出土土器拓影図 (52)



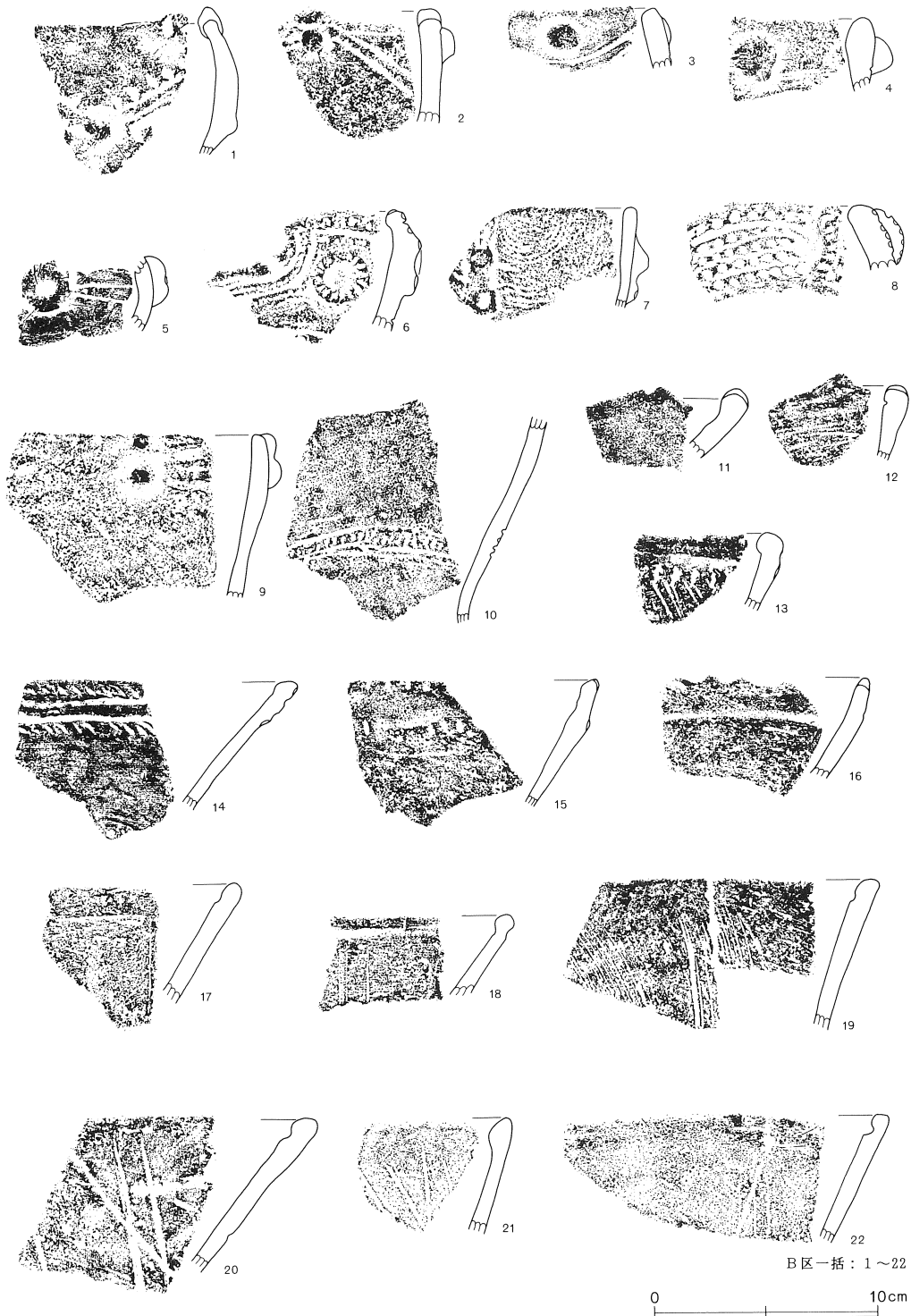
第177図 B区グリッド出土土器拓影図 (53)



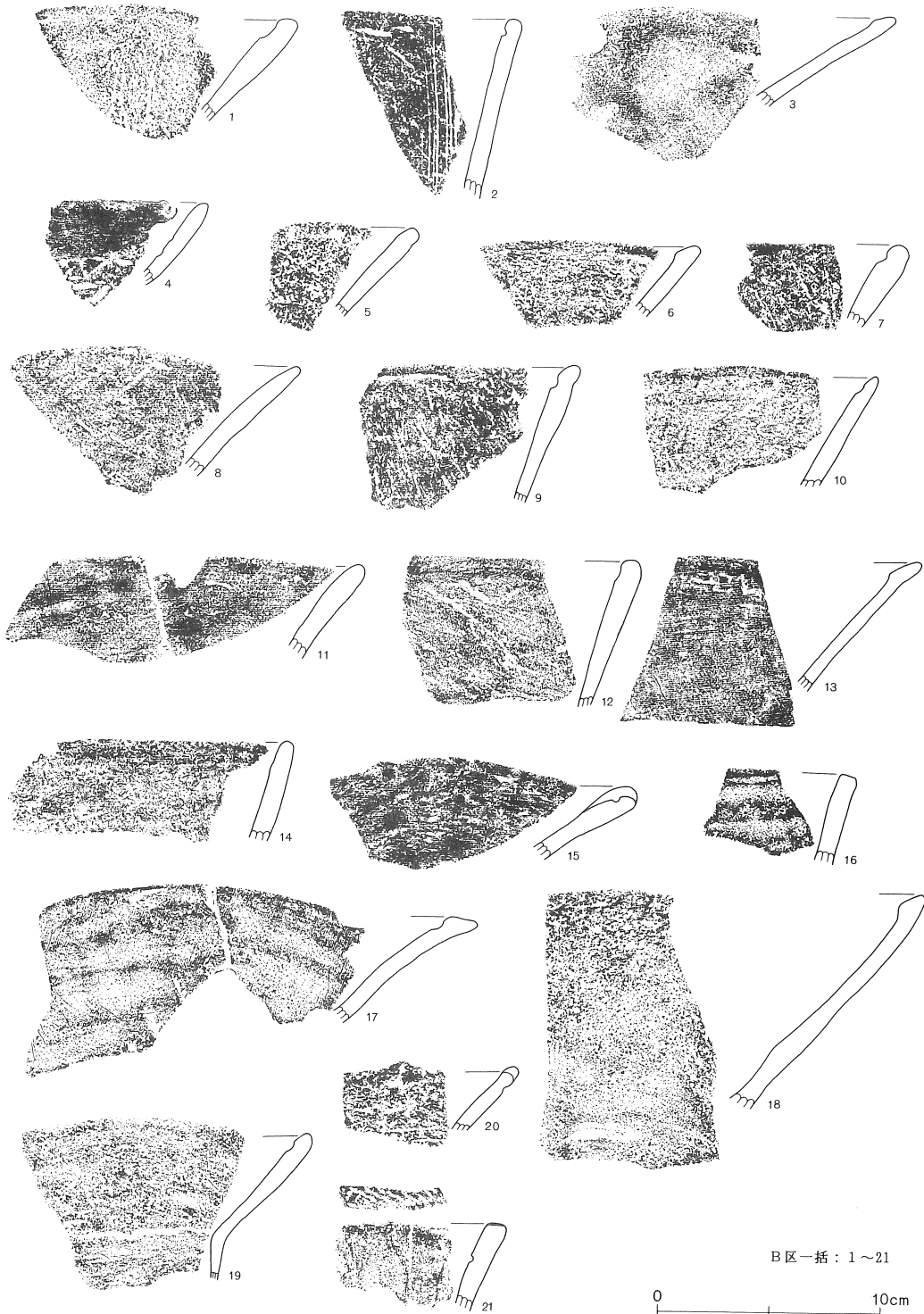
B区一括：1～14

0 10cm

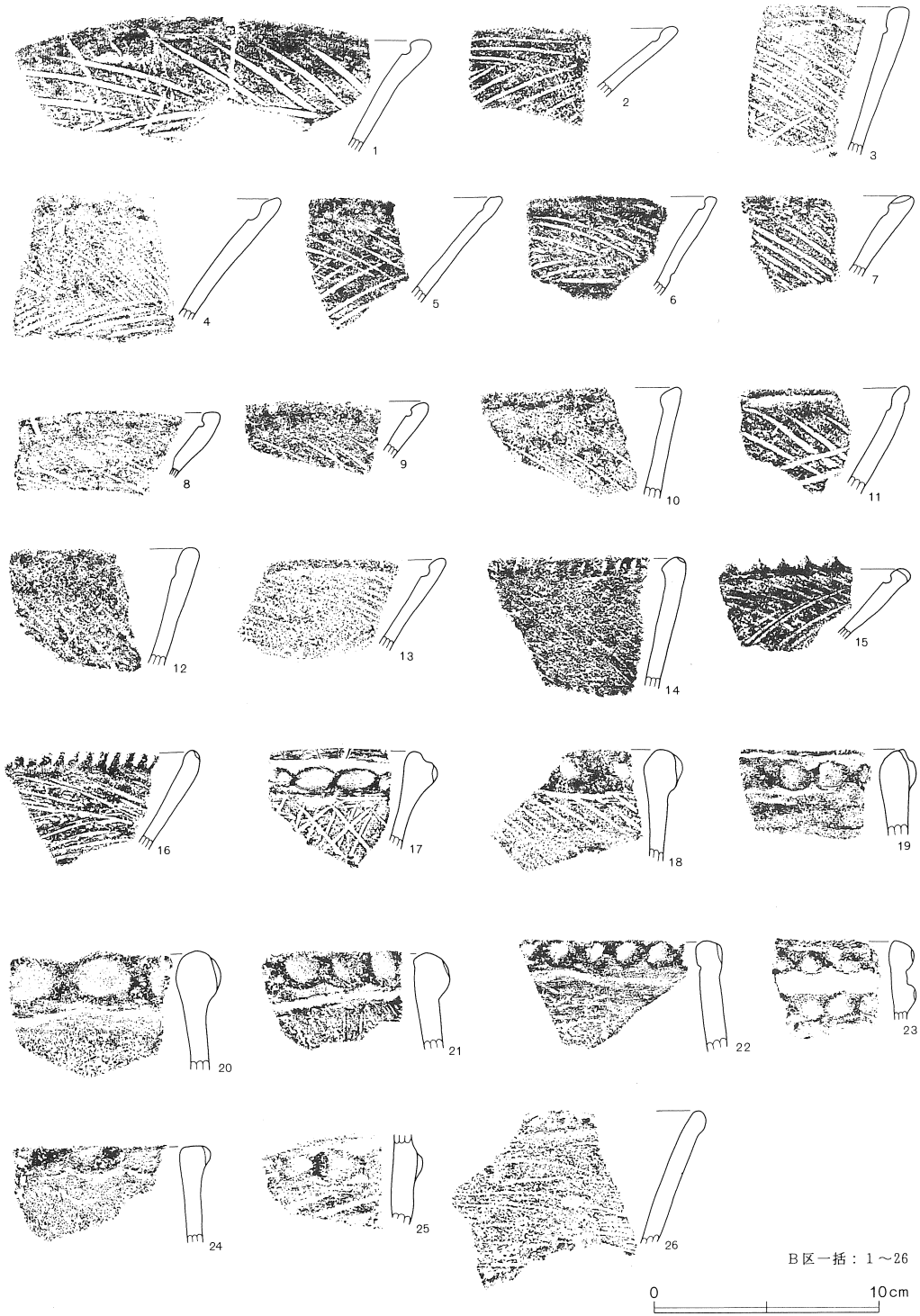
第178図 B区グリッド出土土器拓影図 (54)



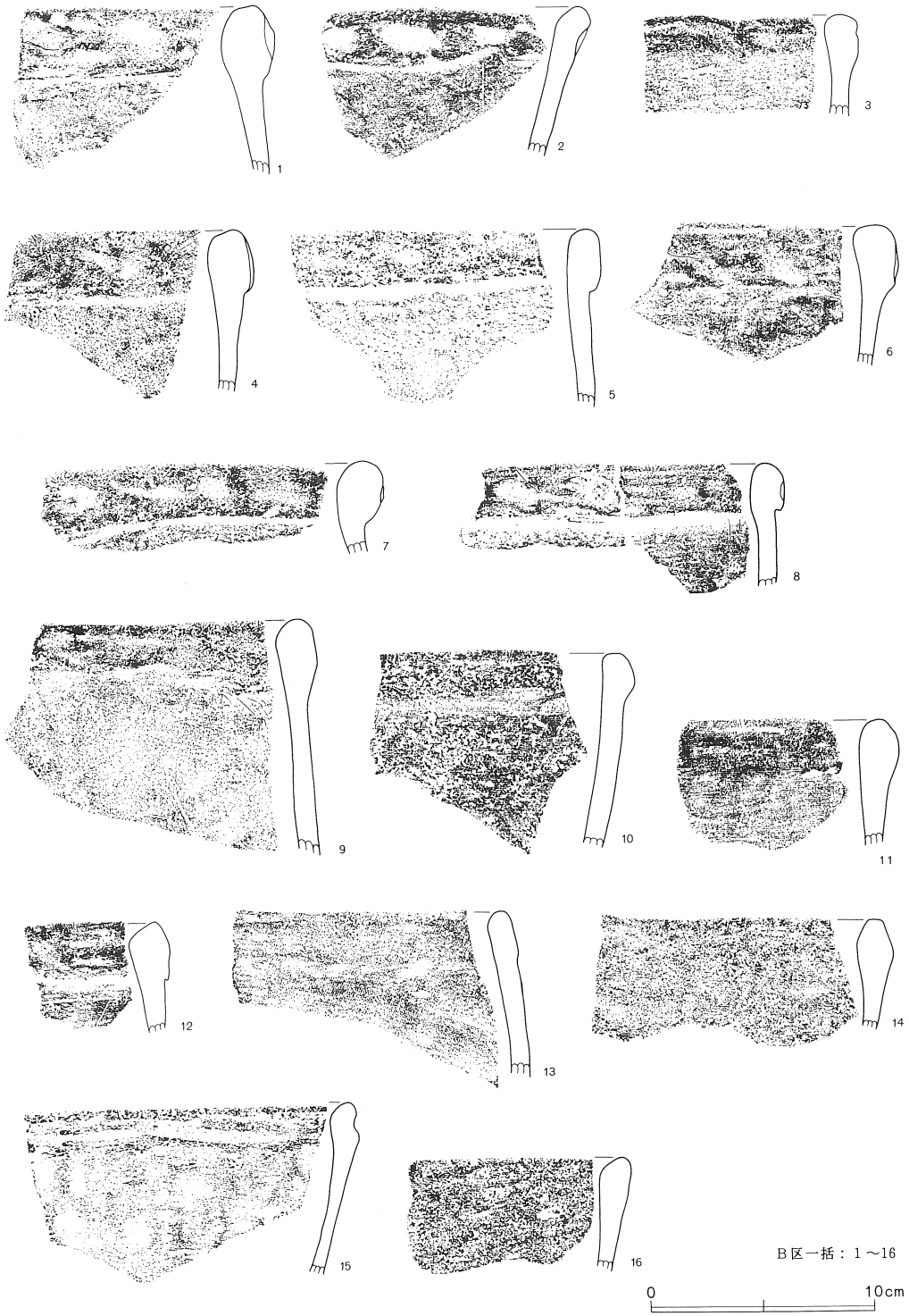
第179図 B区グリッド出土土器拓影図 (55)



第180図 B区グリッド出土土器拓影図 (56)



第181図 B区グリッド出土土器拓影図 (57)



第182図 B区グリッド出土土器拓影図 (58)



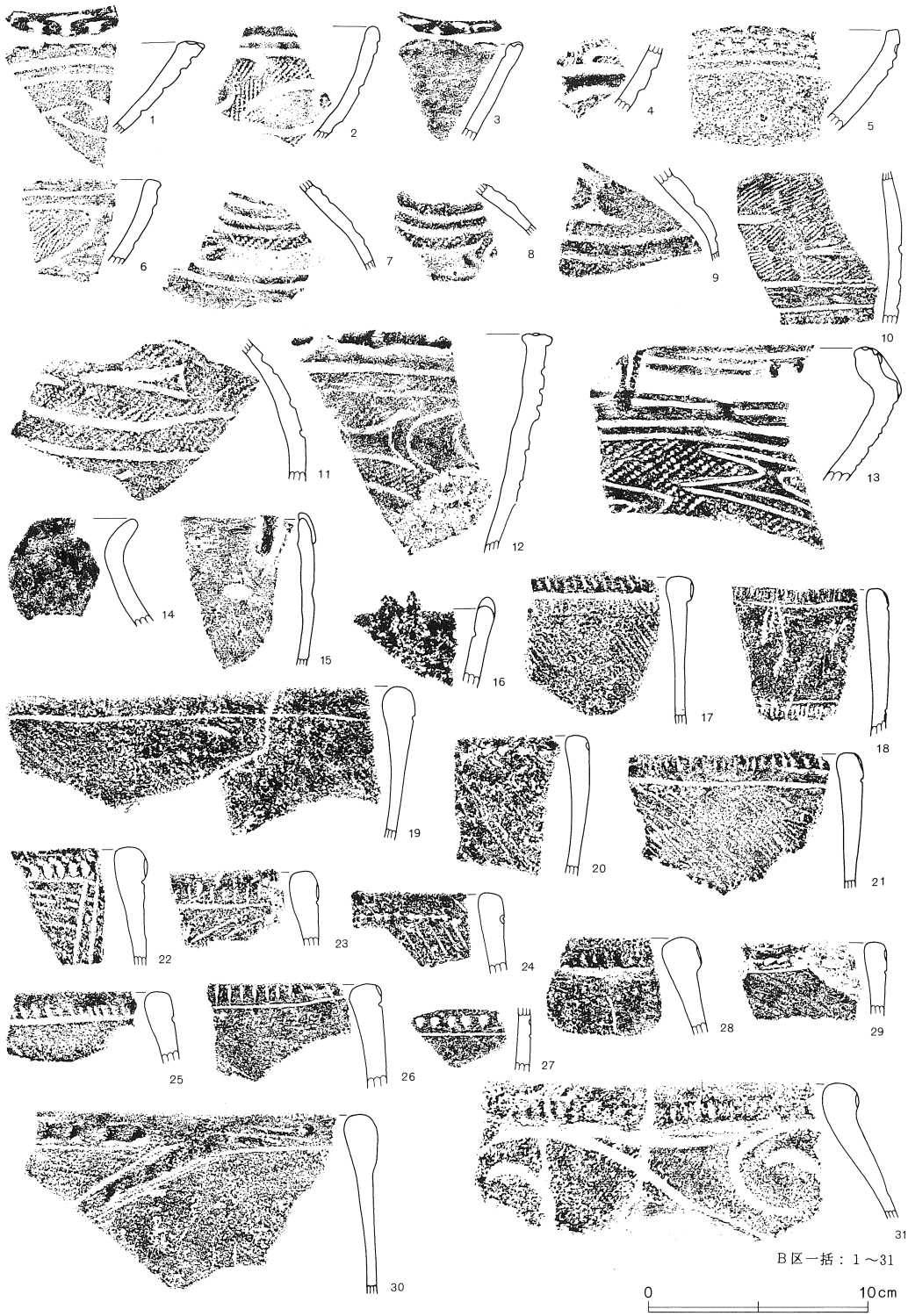
第183図 B区グリッド出土土器拓影図 (59)



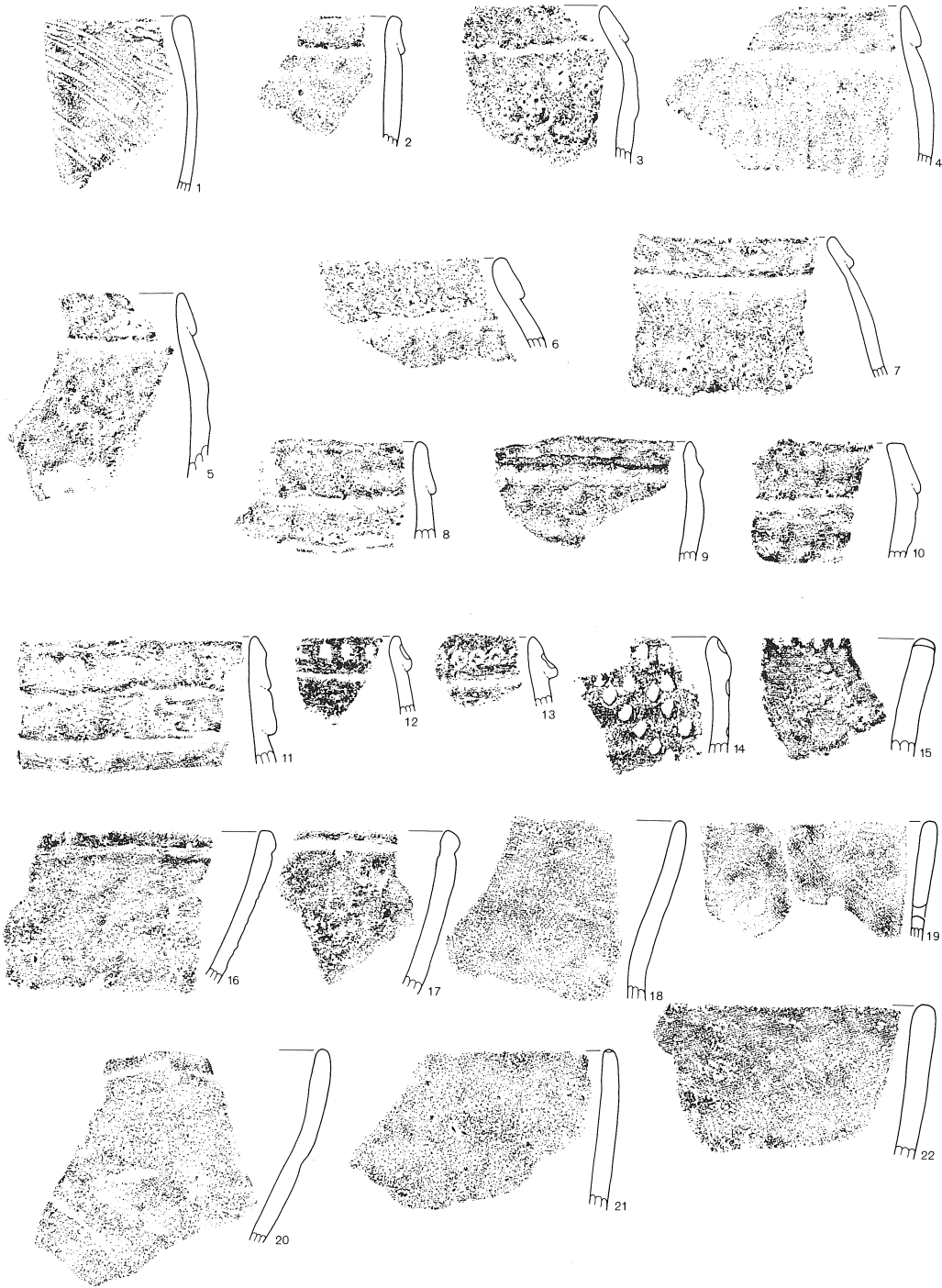
第184図 B区グリッド出土土器拓影図 (60)



第185図 B区グリッド出土土器拓影図 (61)



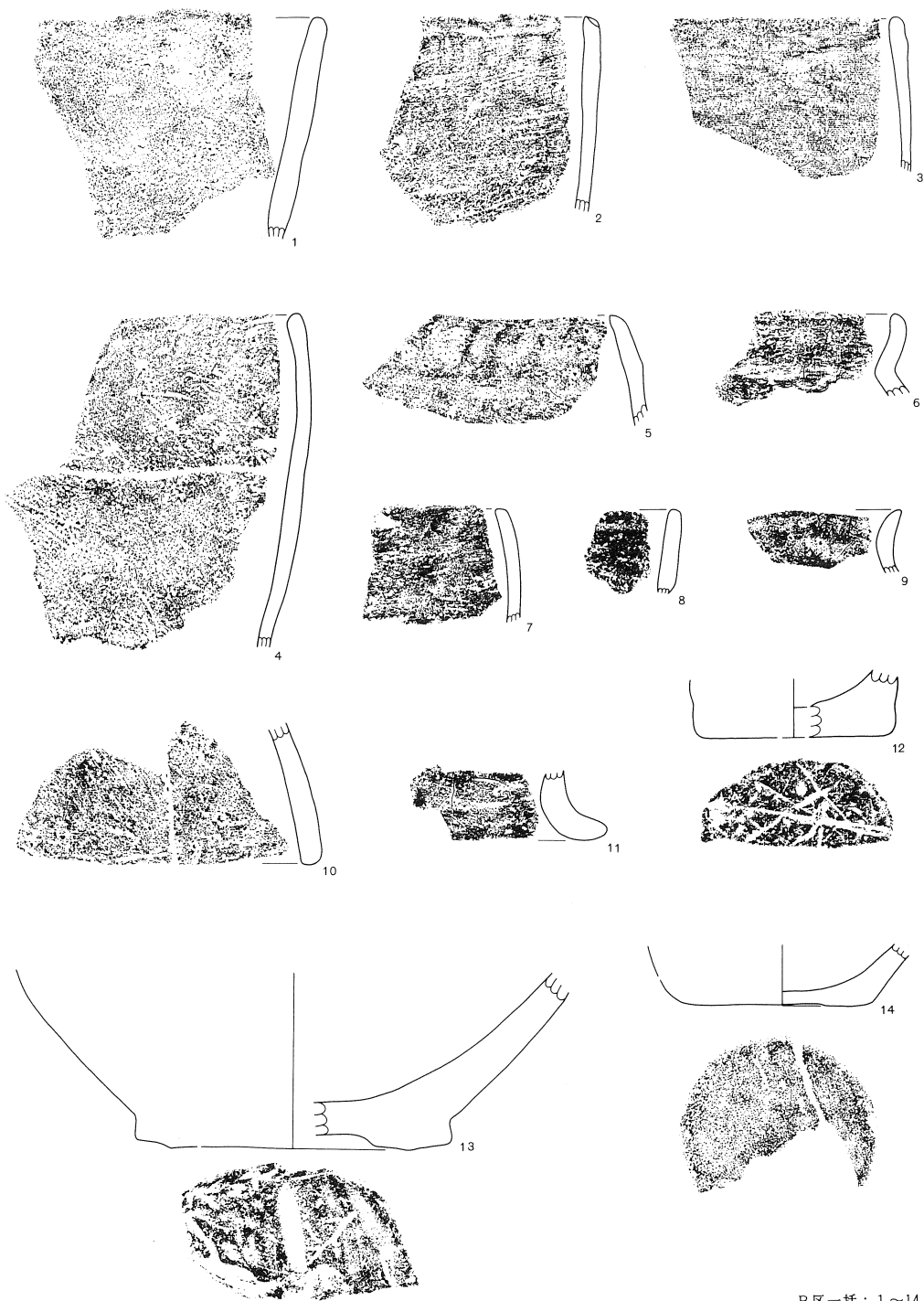
第186図 B区グリッド出土土器拓影図 (62)



B区一括：1～22

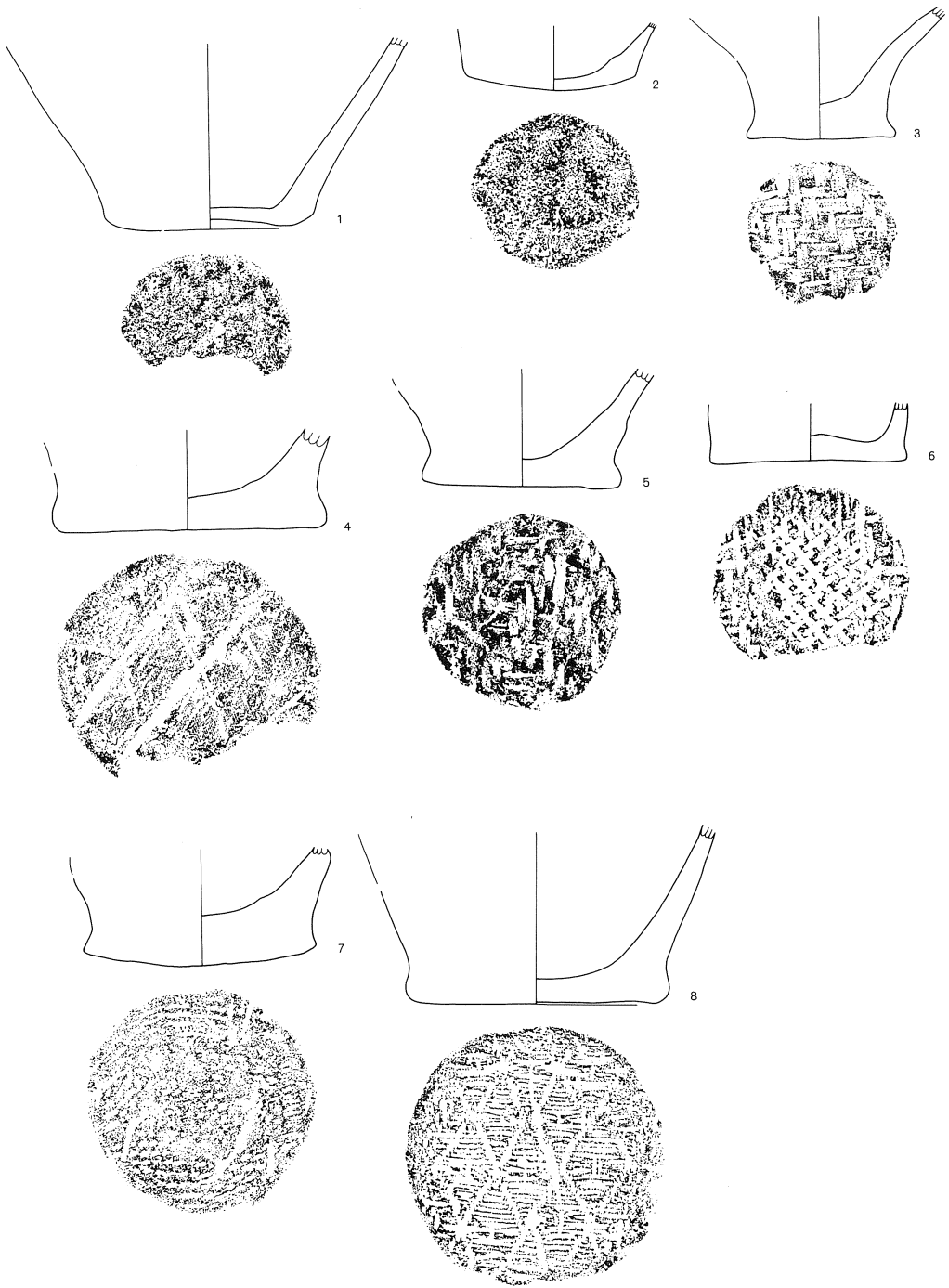
0 10cm

第187図 B区グリッド出土土器拓影図 (63)



B区一括：1～14

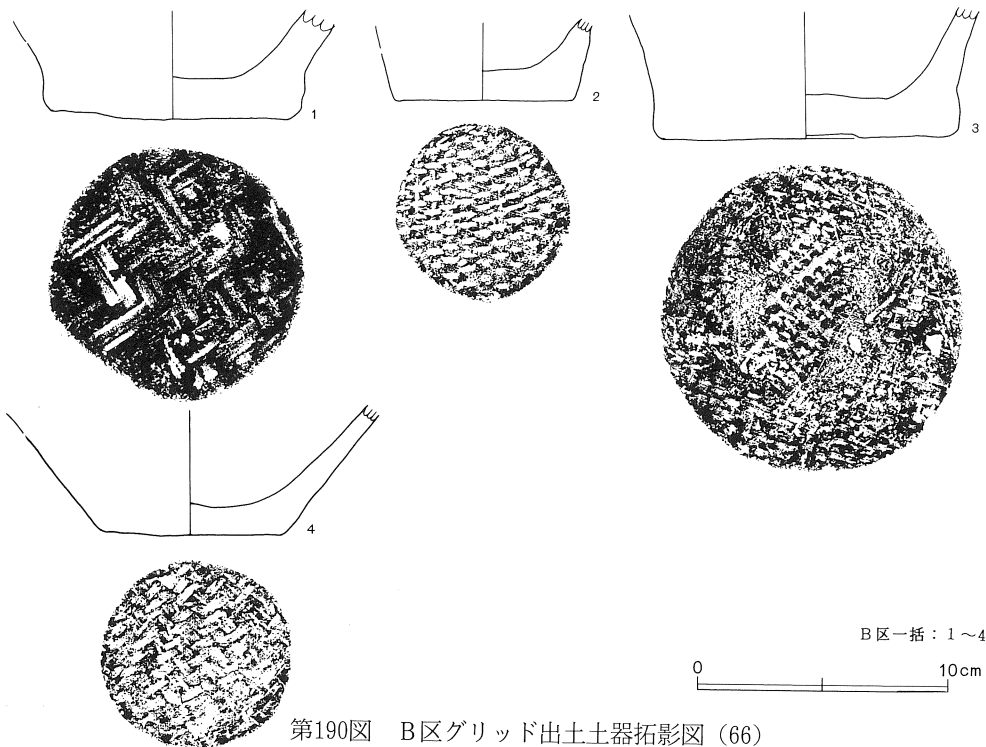
第188図 B区グリッド出土土器拓影図(64)



B区一括：1～8

0 10cm

第189図 B区グリッド出土土器拓影図 (65)



第190図 B区グリッド出土土器拓影図(66)

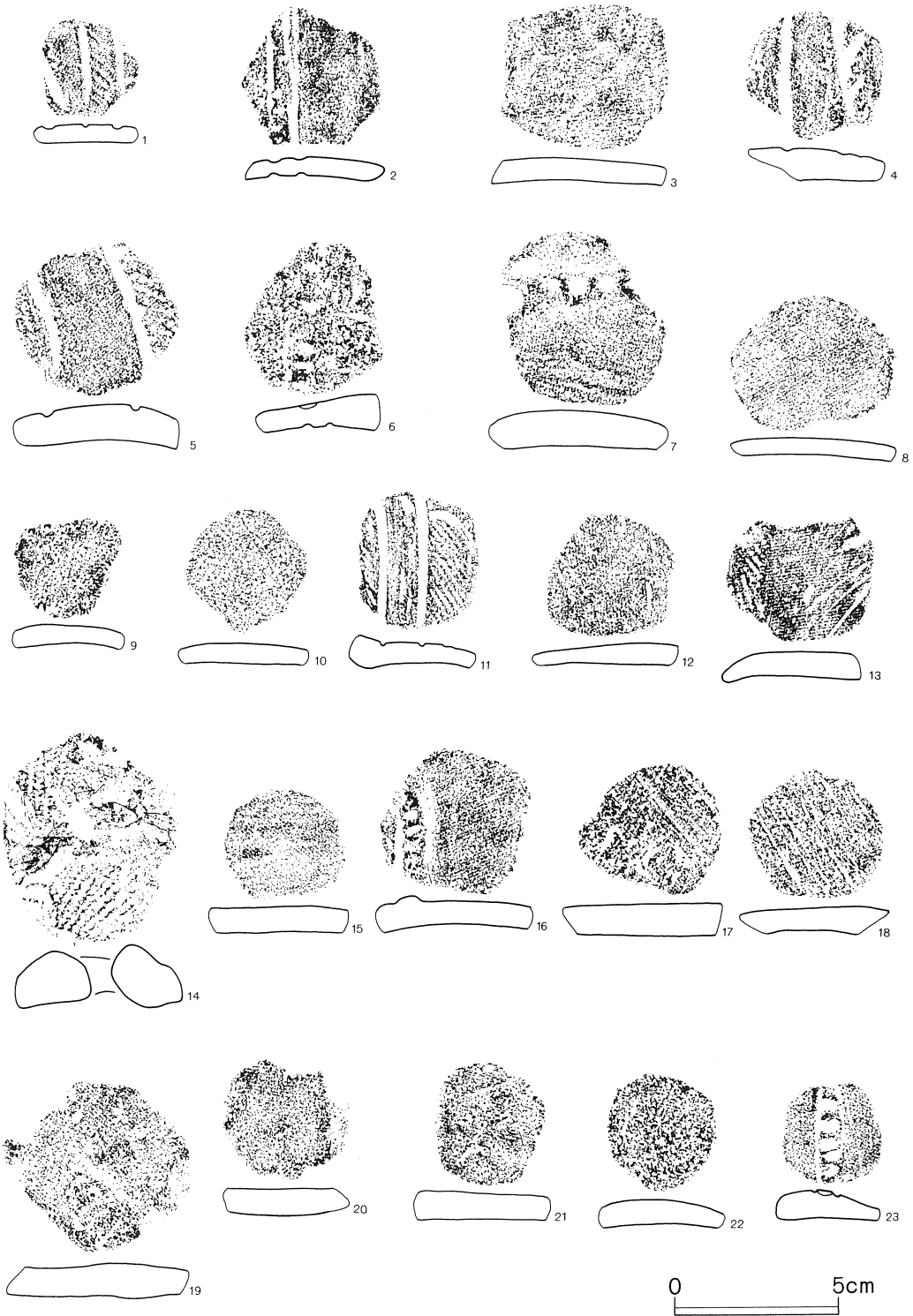
部に磨消縄文を伴う工字状のモチーフが施文されている。大洞C₂式併行の壺と考えられる。14は口唇部裝飾から、大洞C₁式の影響を受けたものと判断されるが、体部文様は不明。15は版組終了後、第186図12と接合することが判明した。大洞C₂式前半期の鉢である。16は大洞C₁式の注口土器。17は無文地に3条の沈線で連弧文が施されている。関西系の影響を受けたものと思われる。第155図1～7は東北系。5は壺の頸部、7は鉢の口縁部である。突起に弧線が施されている。9は鋸歯文が施されており、関西系の影響を受けたものと思われる。第163図21は大洞C₁式系と考えられるが、体部は無文である。22は滋賀里式の影響を受けたものと考えられる。沈線、三叉状の彫り込みとも、浅いものである。第170図2は入り組み文系深鉢で、口唇部突起が欠損している。入り組み文結節部の三叉状モチーフはかなり彫り込まれている。10は大洞C₂式系の鉢。第174図1, 2は同一個体である。口縁部は内屈し、波状縁を呈する。櫛歯状の工具で、波状部には弧線、体部には縦位、鋸歯状に施文されている。諸磯c式の初頭のものと考えられる。3, 4は加曾利EⅢ式。第179図6は靴べら状の突起を持つ深鉢で、ボタン状突起の縁辺にも刻みが施されている。第100図4と同一個体と考えられる。曾谷式であろう。第179図8は口縁部が内湾するもので、弧状の隆帯が貼付される。隆帯上、沈線間に円形の刺突が連続して施される。曾谷式併行のものか。第185図21は大洞C₁式併行期の深鉢であろう。23は胴部がやや括れ、口縁部が外傾する鉢である。口唇部内面は面取りされ、端面は外傾する。先端に刻みが施される。口唇部直下に縄文が施され、直線化した羊歯状文が2段にわたって施文されている。

地文は直前段3本摺のLR。第186図3は無文の浅鉢、7～9は壺と考えられる。13は大洞C₂式新段階の浅鉢。口縁部無文帯を縦断する隆帯が貼付され、その上に沈線が引かれている。口唇部には2条の沈線が施され、下端にB突起が貼付されている。Ⅱ文様帯のモチーフは上端が文様帯区画沈線から離れるもので、下端の状況は不明。地文はLR。

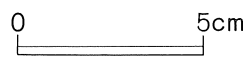
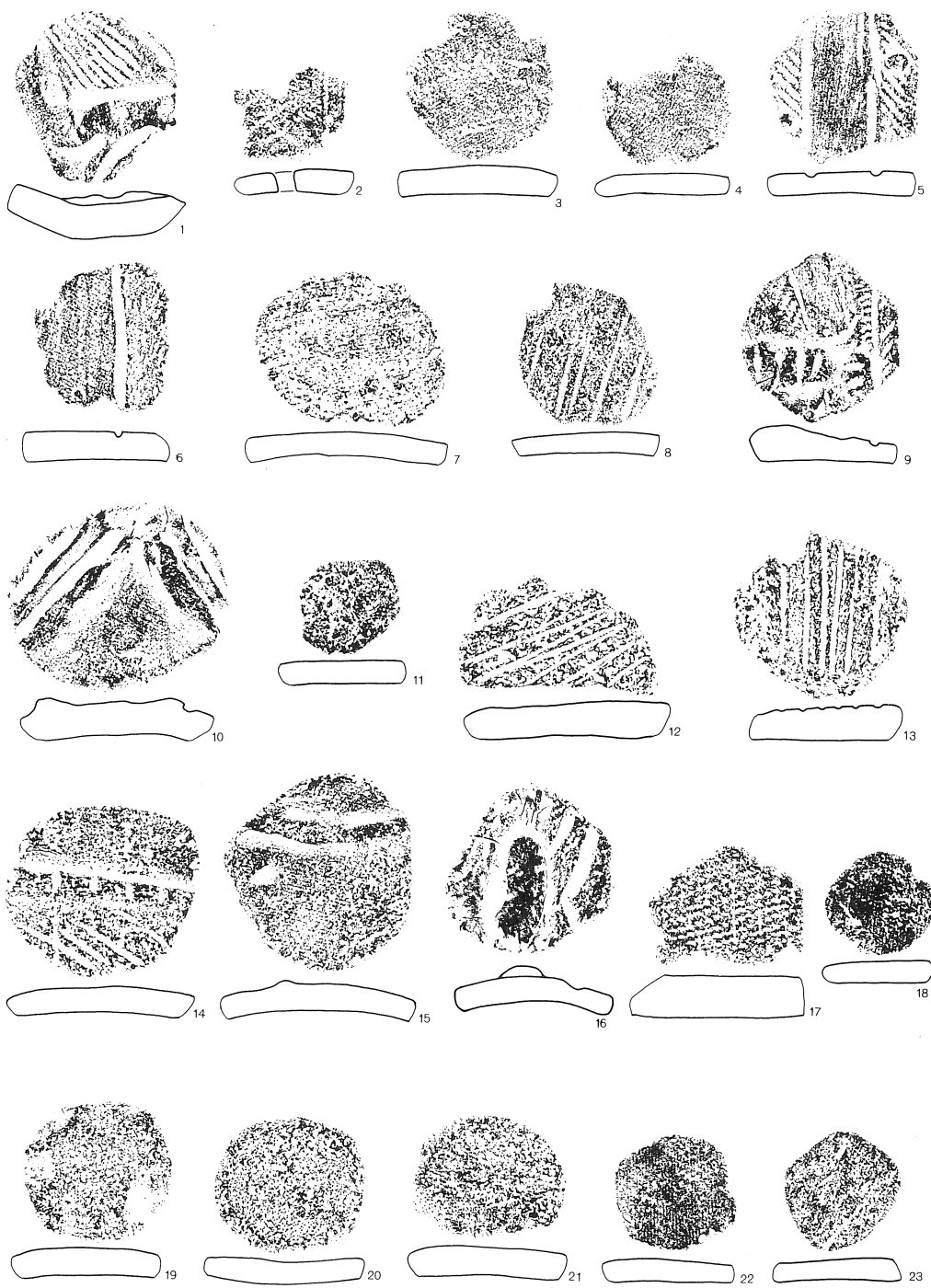
ケ 土製円盤（第192, 193図）

B区からは46点の土製円盤が出土している。第192図1, 2は第1号住居跡出土、3～5は第1号住居跡の可能性のあるものである。1は磨消縄文が施されているが、モチーフは不明。2は口縁部破片で、加曾利B3式の深鉢と考えられる。4は深鉢の破片である。6, 7は第2号住居跡に帰属する可能性のあるもの。6は内面に2条の沈線が施されている。後期中葉に属する。7は隆帯上に刺突が施されている。8は、第3号住居跡と第4・9号住居跡の重複部分から出土している。薄手で、無文である。9, 10は第6号住居跡出土。いずれも薄手で、無文である。11は第5号住居跡と第7号住居跡の重複部分から出土している。肩部の屈曲部分の破片と思われる。LR縄文が施されている。12は第7号住居跡と第8号住居跡の重複部分から出土している。無文。13は第8号ピット出土。深鉢の口縁部破片が用いられている。LR縄文と、斜行する条線が施されている。14～23は遺構外出土。14は安行1式波状口縁深鉢の波頂部の破片が用いられている。エ-191-24グリッド出土。15, 16はオ-191-4グリッド出土。15は無文、16は隆帯上に刺突が施されている。18はオ-192-1グリッド出土。17, 19, 20はオ-192-1-35グリッド出土である。18は条線が施されているが、他は無文である。21～23はオ-192-2グリッド出土。21は小グリッド16、22, 23は小グリッド13出土である。23は屈曲部に沈線と刺突が施されている。

第193図1はオ-191-10-2グリッド出土。胴部の括れ部の破片が用いられている。括れ部直上に隆帯、Lr縄文が施されている。2, 3, 5, 6はオ-192-6グリッド出土。2には補修孔が見られる。3は無文、5は深鉢口縁部の破片が用いられている。縄文帯に粘土粒が貼付されている。6は沈線によって、ケズリ痕が残る部分と、ミガキが施される部分が区画されている。4はオ-192-6グリッド出土。無文。7はオ-191-15～オ-192-10グリッド出土。無文で、ナデ調整のみである。8はオ-191-15-6グリッド出土。条線が施されている。9はオ-191-15-12グリッド出土。安行2式波状口縁深鉢の波底部の破片が用いられている。10はオ-191-15-18グリッド出土。曾谷式の波状口縁深鉢の波頂部の破片である。11はオ-192-11-8グリッド出土。条線がわずかに認められる。12～23は表採、または出土地点不明のものである。12, 13は条線が認められる。14は口縁部が内湾する鉢で、屈曲部に隆帯と刺突、胴部に条線が施されている。15は隆帯が貼付されている。16は安行2または3a式の鉢と思われる。粘土粒が貼付され、隆帯上にわずかに沈線が認められる。縄文はRL単節。17は底部破片を利用したもので、網代痕がみられる。18～23は無文である。



第192図 B区出土土製円盤(1)



第193図 B区出土土製円盤(2)

コ 土偶 (第194～205図)

B区からは、67点の土偶が出土している。以下、部位ごとに記載を進める。

第194～197図は、顔面が残存しているものである。第194図1は頭部が突出するもので、頭部付近に横方向に貫通する孔を持つ。頭部中央に縦位の沈線が施される。眉と鼻は隆帯で直線的に表現されている。眉から上と背面上半部に無節R縄文が施文される。眼は、隆帯直下に直線的な沈線によって表現されている。顔面両脇に各1つ貫通孔が見られるが、右側の孔の下には貫通していない孔が見られる。貫通孔はいずれも正面から開けられており、背面側の周囲に粘土の盛り上がりが見られる。顔面中央部に黒斑が見られ、そこだけミガキ痕が残っている。正面下半と背面中央部が剥落している。

2は顔面の半分のみ残存している。眉は隆帯で表現されており、隆帯直下に直線的な沈線によって眼が描かれる。頭部背面には連続的な刺突が見られる。顔面下半にも隆帯が見られる。耳の中央に貫通孔が見られるが、焼成前に正面から開けられたものである。全体にミガキ痕が観察される。

3も隆帯によって眉と鼻が表現されている。眼は、眉から独立した隆帯の内部に沈線を施すことによって描かれている。口は粘土の突出部に凹みをいれることによって表現されている。両耳には貫通孔がある。いずれも正面側から開けられたものである。胸部には三日月状の隆帯が貼付される。手と胴部下半以下は欠損している。背面には頭部と胴部上半に沈線と刺突によって、弧状のモチーフが描かれている。頭部と胴部は、間に刺突を持つ2条の沈線によって区画されている。全面にミガキ痕が観察される。

4は全体に剥落が激しく保存状態が不良である。顔面は1～3のような括れを持たず、楕円形を呈する。眉と鼻は隆帯によって表現され、口は凹みによって表現される。頭部と胴部は1条の沈線によって区画される。胸部には粘土粒が貼付される。正面、背面とも刺突が連続的に施されていたようであるが、詳細は不明である。出土地点不明。

第195図1は頭部から胴部上半まで残存している。眉、口の周辺はやや弓なりになる隆帯で、眼は細い短沈線で表現されている。口は隆帯上にごく浅い押圧が加えられて作り出されている。頭部背面に三日月状の粘土粒が貼付されている。胴部背面にはごく細い沈線が弧状に引かれている。器面は全面磨かれている。

2は頭部のみ残存している。眉は直線的な隆帯で表現され、鼻は眉にかぶるように、短い隆帯で表現されている。眼は粘土粒を貼付し、刻みをいれることによって作り出される。顔面下端には弧状の隆帯が貼付され、口はその上に押圧を加えることによって表現されている。耳には貫通孔が開けられている。頭部背面に三日月状の粘土粒が貼付され、その横にごく小さい刺突列が施されている。全面ミガキが施されていたようであるが、剥落のため調整の詳細は不明である。

3は頭部から胴部上半まで残存している。眉は顔面上端に隆帯が貼付されて表現されている。眼の独立した表現はない。口は凹みで表現される。両耳には貫通孔が開けられている。頸の回りに2段の刺突列が巡る。頭部背面には三日月状の粘土粒が貼付され、細い沈線と刺突列で鬚のような意匠が描かれている。胴部背面にも同じ工具によって、文様が描かれている。丁寧になでられた

後、部分的にミガキが施されている。

第196図1は頭部のみ残存している。頭頂部は欠損している。隆帯とその直下の沈線によって、眉と眼が表現されている。鼻には隆帯上に2個の鼻孔の表現がみられる。顔面部下半が前方に張り出し、口は、深い刺突によって表現されている。耳の孔は貫通していない。頭部背面は大きく剝落している。

2は頭部から胴部上半まで残存している。頭頂部は欠損している。顔面の周囲に隆帯が貼付され、顔面下半がやや前方に張り出している。眉と鼻は隆帯で、眼は粘土粒に沈線を施すことで表現されている。口はかなり深い凹みで表現されている。胴部正面中心に縦位の沈線が施される。胴部背面には、2条沈線間に刺突列を持つ表現で、文様が描かれている。全体によくならされ、平滑化しているが、ミガキはみられない。

3は頭部から胴部上半まで残存している。頭頂部は欠損している。顔面周囲に隆帯が貼付される。眉と鼻は直線的な隆帯で表現され、眼は、眉とは独立して、粘土粒に刻みをいれることで表現されている。口は凹みで表現されている。背面には沈線が見られるが詳細は不明である。耳の背面に貫通していない孔が施される。オ-191-5グリッド出土。

4は頭部のみ残存している。頭頂部は欠損している。鼻はややいびつな隆帯で表現される。眼は眉から独立して刺突のみで、口も刺突のみで表現されている。出土地点不明。

第197図1は頭部のみ残存している。眼の表現は認められない。鼻は隆帯で表現されている。耳には正面から開けられた貫通孔が見られる。頭部背面は丸く張り出し、上半部と頭頂部に刺突が施される。頭頂部のものは正面側に貫通している。刺突はいずれも深く鋭いもので、魚骨などによって開けられたと考えられる。

2は頭部から胴部上半まで残存している。顔面周囲に隆帯が巡っている。眼は、粘土粒を貼付し凹みを施すことによって表現されている。耳、口は剝落している。手の表現がわずかに認められる。頭部背面には粘土粒の剝落痕が見られる。翼状突起の痕跡と考えられる。オ-191-10グリッド出土。いわゆる「みみずく土偶」に含まれよう。

3は頭部、左足、両前腕が欠損している。乳房は粘土粒の貼付で表現されている。胴部中心にやや浅い縦位の沈線が施されている。腰に隆帯が巡り、やや左右に張り出している。脚は直線的で、脚端部は張り出している。胴部背面の中心部に浅い凹みが施されている。背面に赤彩が残存している。

第198, 199図は頭部の欠損している胴部の破片である。第198図1は左乳房が欠損している。正面中心に縦位の沈線が施されている。背面には胴部と頭部を区画するような沈線が施され、磨消縄文手法によって文様が描かれている。体部は2本の棒状粘土によって成形されている。オ-192-1グリッド出土。

2は右胸部のみの破片である。乳房から肩を巡り背面にいたる隆帯が施されていたようであるが、肩から背面部の隆帯は剝落している。内部の中心に空洞部があり、おそらく胴部下端から孔が開けられていたと考えられる。オ-191-1グリッド出土。

3は右胸部、右肩部の破片である。乳房から、中心と下方に向かって滑らかな隆帯が伸びる。

背面には2条沈線間に刺突が施された表現によって文様が描かれている。全体によく磨かれている。エ-192-21グリッド出土。

4は左手先端が欠損している。正面に隆帯が貼付され、隆帯上に爪による刺突が施されている。爪形は隆帯外にも見られる。背面にも隆帯が施されている。体部に芯棒状の中空部がある。オ-191-10グリッド出土。

第199図1は胴部だけの破片である。正面中心部に縦位の沈線が施されている。腹膨隆部が剥落している。背面には、沈線と刺突によって文様が描かれている。体部は2本の棒状粘土で成形されている。

2は腹部だけの破片である。正面、背面ともに爪形状の刺突が施されている。正面には直線的な隆帯が貼付される。剥落激しく、詳細は不明である。出土地点不明。

3は腹部と脚部が残存している。腹部中央に粘土粒が貼付される。脚先端は前方につまみ出されている。

4は脚先端が欠損している板状の土偶である。2本の棒状粘土を合わせて成形されている。背面には横位の沈線が1条施され、その上下に細かい刺突が施される。脚端部直上には沈線が部分的に見られる。

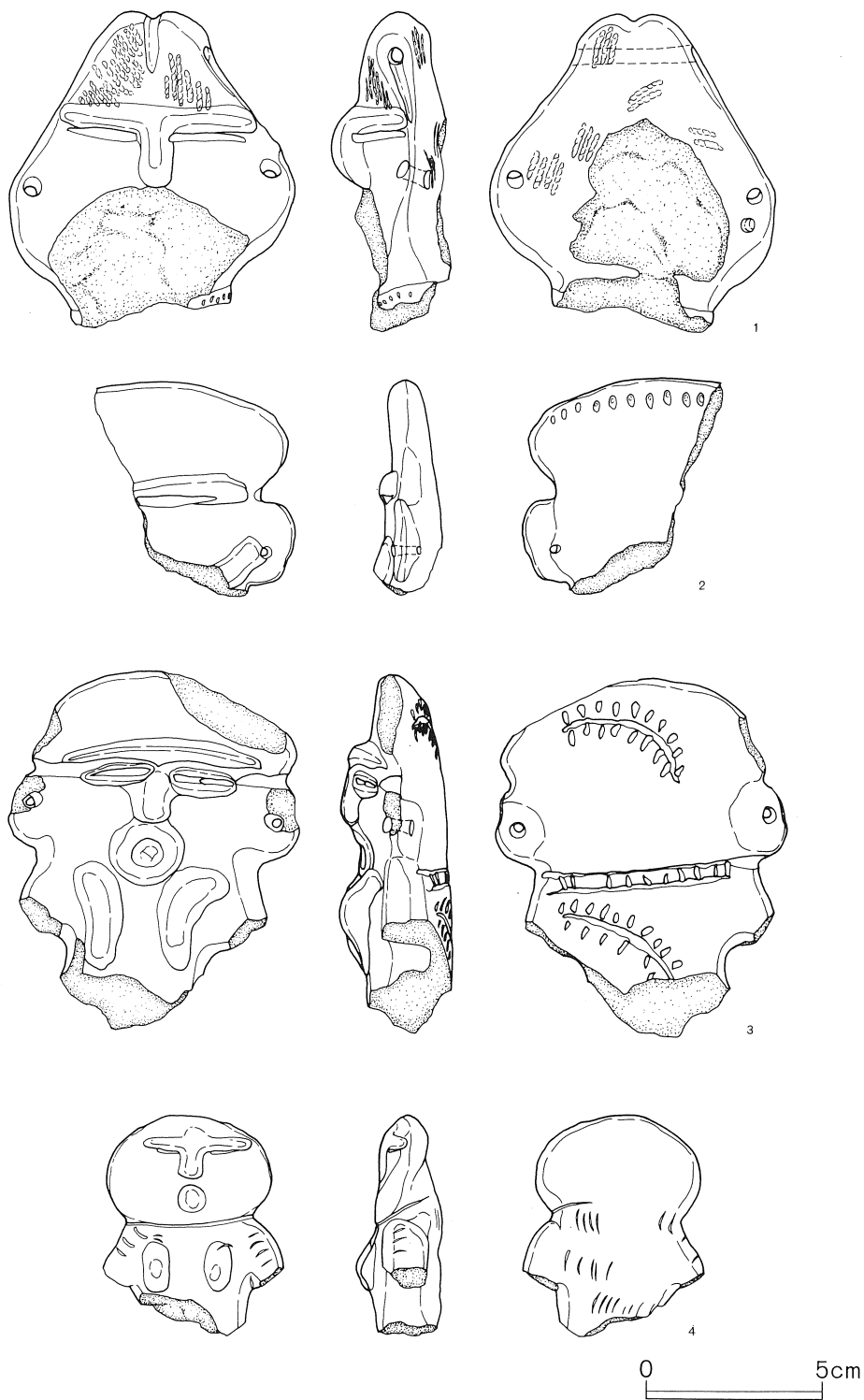
5は腹部と両脚部が残存している。6は波状縁深鉢の突起の可能性もあるが、ここで説明しておく。腹部と両脚部が残存している。腹部中央に粘土粒が貼付され、下方から2個の刺突が施されている。脚先端に粘土紐が巻かれて膨らんでいる。赤彩されている。出土地点不明。

7は脚と腹部が残存している。背面腰下にも剥落痕があり、脚を折り曲げた姿勢をとっていたと考えられる。胴部背面に横位の沈線が施されている。胴部下端から上に向かって刺突が施されている。第2号住居跡出土。

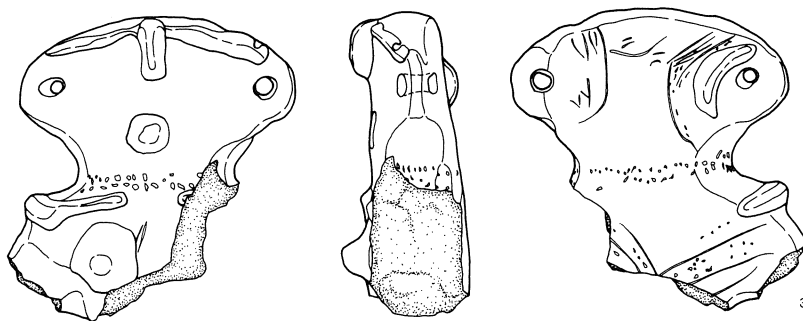
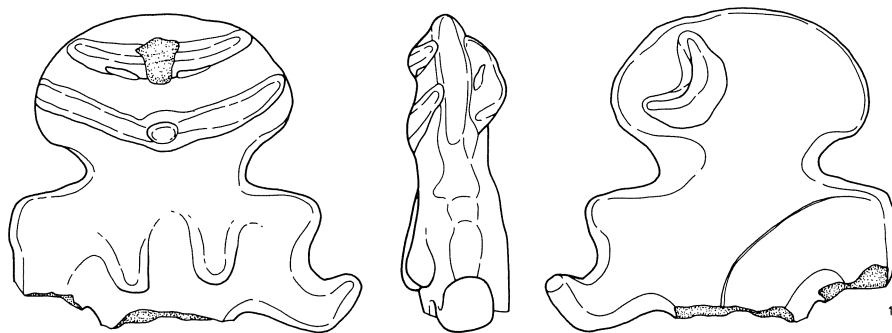
第200図1～3は腕部、第200図4～15、第201～203図は脚部である。第200図1は左右不明、エ-191-24グリッド出土。2は左、3は右腕と考えられる。4～12は膝に粘土粒貼付による表現が見られるものである。4は脚下端近くに刺突列が巡る。第4号土壌出土。5～8は爪先がつまみ出されているものである。5はオ-192-24出土。6は第1号溝跡出土。7は出土地点不明。9はオ-192-1グリッド出土。10は脚端部が張り出すものである。第2号住居跡出土。11も第2号住居跡出土。12は出土地点不明。

第200図13～15、第201図1～3は爪先の表現が見られるものである。13は右脚である。正面中央に黒色化している部分があり、粘土粒の剥落痕と考えられる。縦位のナデ痕が見られる。14も右脚である。オ-192-1グリッド出土。15は左脚である。第1号住居跡出土。第201図1は右脚。2は右脚。出土地点不明。3は左脚と考えられる。4は脚端部がすばまるもので、爪の表現のような刺突が見られる。5は右脚と考えられる。第6号住居跡出土。

第201図6～14は脚端部の底面が平坦で、やや張り出すものである。6は右脚である。端部の張り出しは弱い。7は右脚と考えられる。エ-191-24グリッド出土。8は左右不明。第4号住居跡出土。9は右脚と考えられる。10は左脚と考えられる。端部の張り出しは弱い。エ-191-25出土。11は左脚と考えられる。12は左右不明。13は左脚と考えられる。図上面の破損面は接合痕のようである。

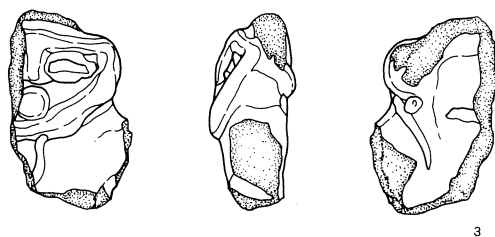
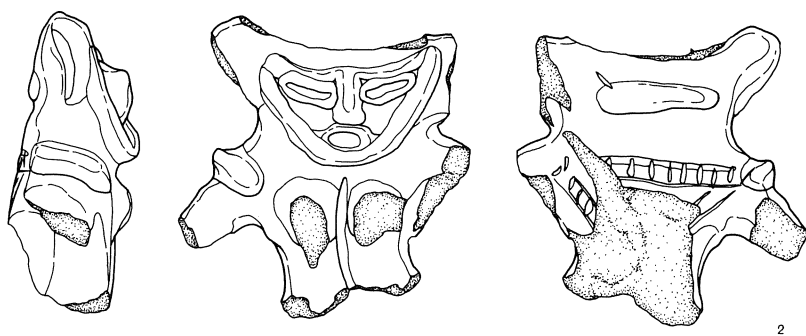
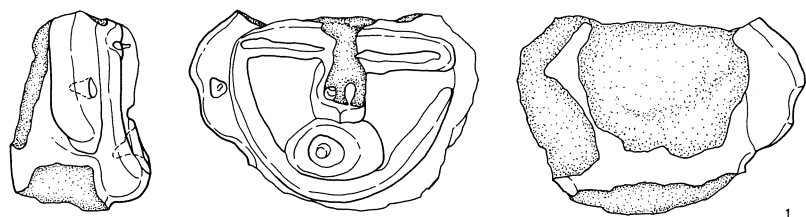


第194図 B区出土土偶(1)

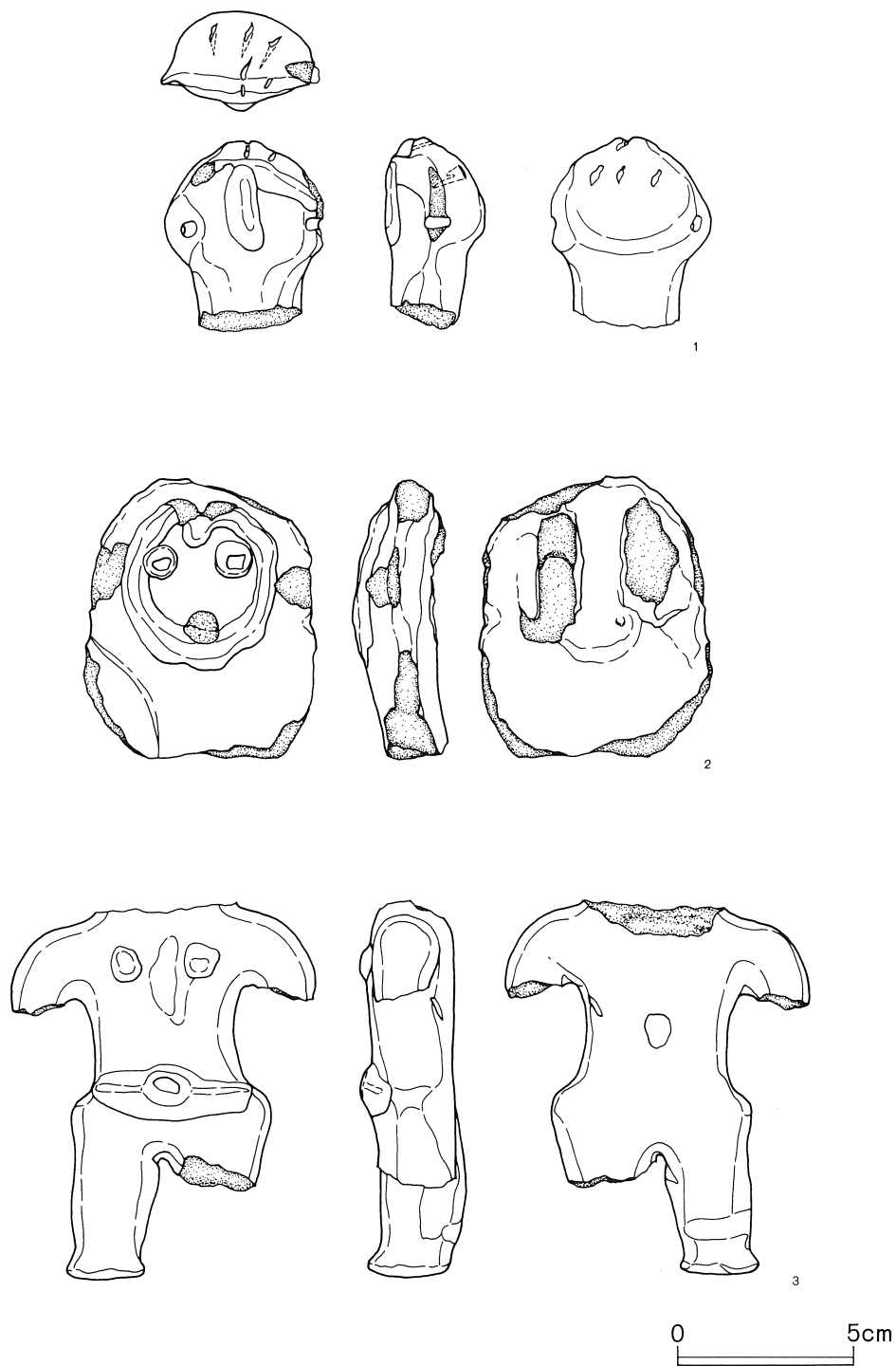


0 5cm

第195図 B区出土土偶(2)



第196図 B区出土土偶(3)



第197図 B区出土土偶(4)



第198図 B区出土土偶（5）



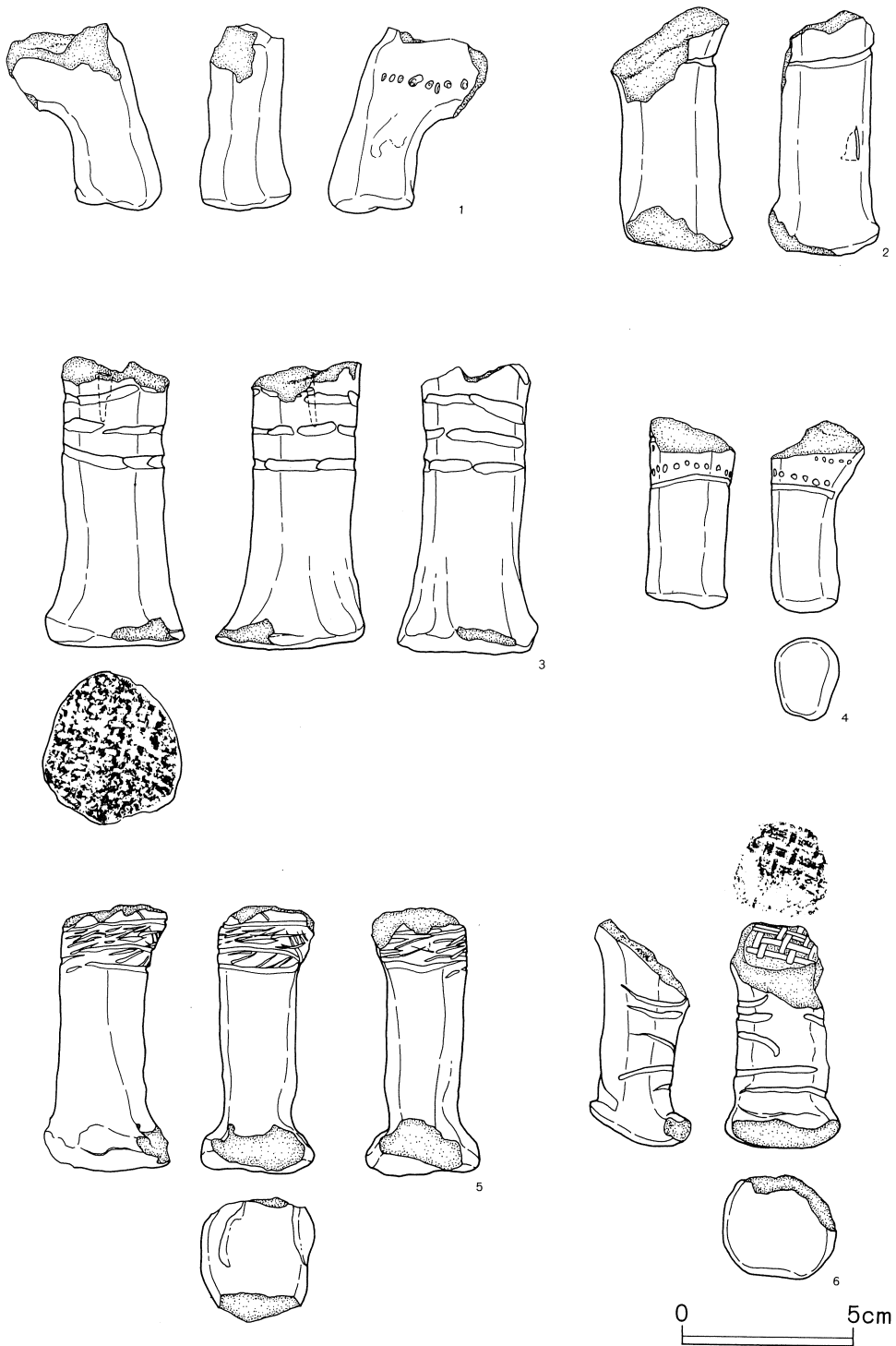
第199図 B区出土土偶(6)



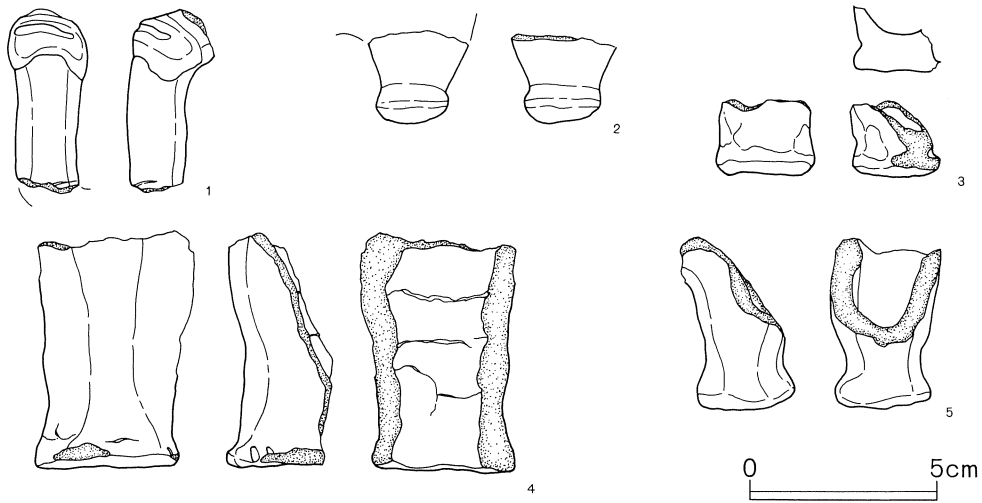
第200図 B区出土土偶(7)



第201図 B区出土土偶(8)



第202図 B区出土土偶(9)



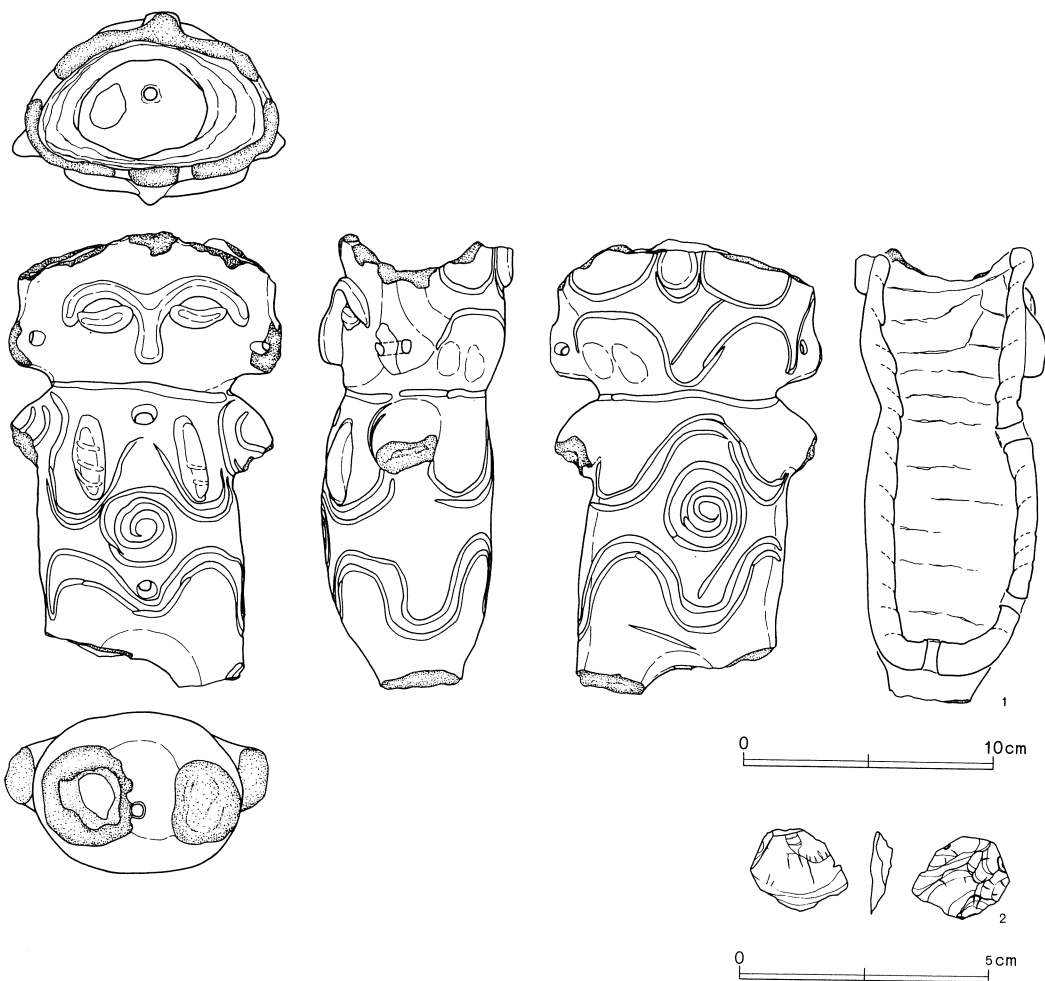
第203図 B区出土土偶 (10)

第2号住居跡出土。14は右脚である。正面中央部に小孔が見られる。破損面に棒状の粘土塊が見られる。成形痕であろう。

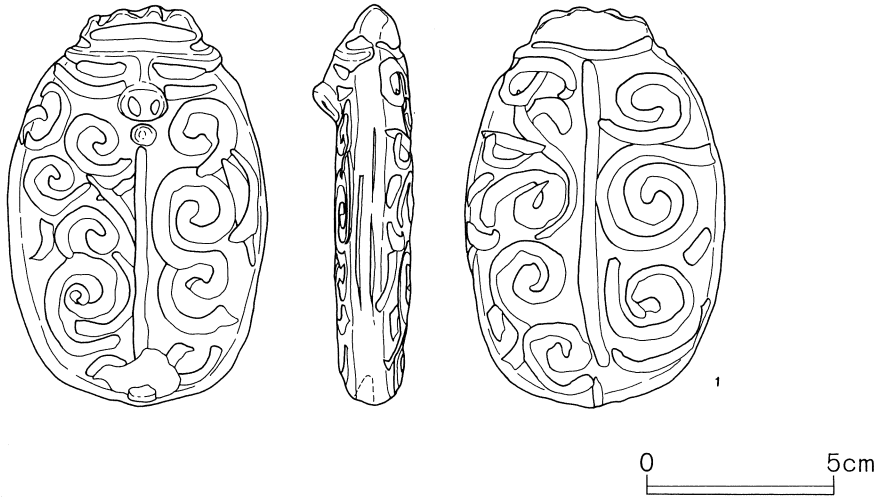
第202, 203図はその他の脚部である。第202図1は左脚である。背面に刺突列が施されている。ヘラ状工具でなでられた後、やや雑に磨かれている。破損面は凹んでおり、接合痕の可能性ある。黒色で、器面の保存は良好である。オ-191-5グリッド出土。2は脚上半部に横位の沈線が施されている。左脚と考えられる。背面中央部に深く鋭い刻みを持つ。刻みの最深部は9mm程である。3は左脚。脚上半部に3条の横位の沈線が施されている。底面に網代痕を持つ。破損面の中心付近に径3mm程の空洞部が見られる。縦位にミガキが施される。オ-191-5グリッド出土。4は右脚。上半部に横位の沈線と刺突列が施されている。オ-192-15~10出土。5は直線的で端部が張り出す形態を持つ。上半部には、斜方向の沈線施文後、横位の沈線が施されている。縦位のケズリ痕が見られ、ミガキ痕は見られない。オ-191-5グリッド出土。6は左脚、脚端部が張り出している。横位の沈線が数条施されている。破損面に網代痕のポジ転写された痕跡が見られる。製作手法を知る上で興味深い資料である。

第203図1は右脚と考えられる。脚端部が欠損している。屈曲部に隆帯が貼付され、隆帯上に短い沈線が施されている。オ-191-9グリッド出土。2は左脚と考えられる。脚上半部が膨らみ、端部が張り出している。破損面は滑らかに凹んでおり、接合痕と考えられる。3は左脚と考えられる。内部は中空である。外面にはおさえ痕が観察される。出土地点不明。4は右脚である。中空で、端部も開口している。端部はやや張り出している。内面には粘土紐の積み上げ痕が観察される。積み上げ後、部分的に縦方向になでられている。最下部の積み上げ痕に、内面から粘土を貼り足した痕跡が見られる。5は左脚と考えられる。中空で、端部は張り出している。外面にはナデ痕のみ観察される。

第204図は中空の、やや大形の土偶である。色調は褐色～赤褐色である。胎土には、細砂から小礫に近いものまでの砂粒を含む。頭部には、現存している部分にさらに粘土紐が積み上げられていたようである。腕、脚は欠損している。頭部正面の上端はやや前方に張り出している。眉は弧状の隆帯で表現され、鼻の隆帯もそれに接続する。眼は、眉の下に短い隆帯を弧状に貼付し、眉との間をやや凹めることで表現されている。口の表現は見られない。耳はやや左右に張り出し、中心に貫通孔を有する。頭部背面には粘土粒の貼付が1単位みられ、上向き、下向きの弧線文が対向している。頸には横位の沈線が1条巡っている。頸直下に内面に貫通する孔を持つ。乳房は縦長の隆帯で表現され、隆帯上に横位の沈線が施されている。胸部から腹部にかけて山形の曲線的な沈線文が描かれている。胸側の曲線文は正面と裏面で独立しているが、腹側の曲線文は左脇から裏面に連続している。右脇では連続していない。腹部の正面と裏面に渦巻き文を持つ。正面の渦巻き文は山形の曲線文と連結している。正面腹部と両脚の間に、内面に開口する孔が開けられている。肩から腕の付け根の部分に弧状の沈線文が施されている。左脚の付け根にも沈線がみられる。意匠を構成する沈



第204図 B区出土土偶 (11)



第205図 B区出土土版

線はいずれも浅く、施文後の調整はあまり丁寧ではない。

頭部の内面には粘土紐の積み上げ痕が顕著に見られる。頭部を形作る粘土紐は、正面と裏面で、それぞれ独立しており、頭部を巡るような形では積み上げられてはいない。胴部内面の積み上げ痕は頭部のものほど顕著ではない。外面は軟質工具でなでられ、平滑化しているが、ミガキ痕は観察できない。本土偶の内部からチャート製の剥片が検出されている（第204図2）。頭部が開口しているため、埋没時の混入の可能性もあり、意図的に入れられたものかどうかは不明であるが、事実として報告しておく。第7号住居跡出土。

第205図は顔面付きの中実土版である。やや不整形な楕円形を呈する。色調は黒褐色～黄褐色を呈する。胎土には細砂を含んでいる。内外面に渦巻状の沈線文を持ち、上端正面に顔面状の装飾が施されている。頭頂部は粘土粒を貼付した後、刻みが施されている。眉と鼻は隆帯で作り出されており、眼は眉直下に沈線を施すことによって表現されている。鼻は短い隆帯で表現され、鼻孔状に2個の刻みが施されている。口は鼻直下にやや深い凹みで表現されている。口直下から縦位の沈線が下端に向かって施され、沈線直下に深さ7mm程の凹みが開けられている。縦位の沈線の左右に渦巻文が描かれている。

背面も正面同様、縦位の沈線の左右に渦巻き文が描かれている。頭頂部は沈線で区画され、無文となる。左右の側面には沈線が引かれている。モチーフを構成する沈線は、いずれも浅い。沈線施文後に調整が加えられている。それ以外の部分にはミガキ痕は観察されない。

土偶の出土地点は、調査区の西半部にやや集中するようである（第206図）。



第206図 土偶・土版出土位置図

サ 土製品 (第207, 208図)

ここでは、所謂土製品のうち、土製円盤、土偶、耳栓以外のものを扱う。他のものはそれぞれの節を参照して頂きたい。

第207図1は細い頸部を有する壺形の土製品である。高さ11.1cm、口径1.8cm、最大径5.5cmを測る。口唇部の一部が欠損している。頸部は無文で磨かれ、頸部下端に結節沈線が施された突帯を持つ。無文部を挟んで、肩部に文様帯を持つ。文様帯は、上下が沈線で区画される。文様帯内部には縦区画の沈線が2本1組で4単位、対向する弧線のモチーフがその間に施され、弧線の内部には細密沈線が羽状に施される。体部には解けかかったLr縄文が施され、下端が横位の沈線で区画される。この沈線は歪みが激しく、水平が保たれていない。内部は中空である。

2～7はミニチュア土器である。2は高さ7.2cm、口径2.8cm、最大径4.2cmを測る。胴部に括れをもつ器形で、底部は丸底、無文である。3は高さ5.9cm、口径3.8cm、最大径5.8cmを測る。球形に近い形態で、体部中位に下向きの弧線文が沈線によって不規則に描かれている。厚手のつくりで、底部は上げ底である。4は高さ6.1cm、口径4.3cm、最大径6.1cmを測る。丸底で、口唇部に向かって緩やかに内湾する形態を持ち、口唇部はややつまみ上げられたように作出されている。2～4は手づくねで作られている。5は円筒形に近い浅鉢とも言うべき形態である。内面は滑らかに湾曲している。口唇部に3単位のB突起が現存する。内面に、漆のような黒褐色物質がごく微量付着している。作りは全体にいびつである。6は浅鉢形で、LR縄文が施されている。7は高さ8.1cm、口径3.1cm、最大径6.2cmを測る。口縁部がすばまる形態である。肩部には、径5mm程の孔が内面に向かって、やや上向きに貫通している。外面に縦方向の調整痕(ナデ?)を有する。底部はやや上げ底気味である。

8はスタンプ形土製品である。底面には細い沈線で文様が描かれている。斜めに単方向、部分的に格子目状に沈線を施した後、縦方向に断続的に沈線を施して、文様を描き出している。そしてその間に斜めに単方向、または羽状に短い沈線を施している。底面の縁にも細かい刻みが施されている。

9はスプーン形の土製品の一部と考えられる。全面に軟質工具によるナデ痕がみられる。10は円形の土製品で、径7.1cmを測る。外縁に無節の縄文が施されている。中心よりややずれて、2単位の粘土粒の貼付が見られる。

11は手燭形の土製品である。容器状の部分と把手状の部分からなる。把手状部分を成形後、容器状部分を積み上げて作られている。容器状部分の口唇部には8単位の粘土粒貼付があったと考えられるが、現存しているのは3個のみである。口唇部から2条1組の沈線により下向きの弧線文が2単位施される。胴部上位に先端がやや尖る耳状の突起を2単位有する。突起の内部は中空で、容器状部分の内部に貫通している。孔は外面から内面に向かって開けられており、接続部分の孔の周囲に粘土の盛り上がりが見られる。耳状突起の下部には、突起を取り巻くように2条1組の沈線が施される。沈線の上端部は接続している。把手状部分は先端が細くなる形態で、中程に隆帯が1条貼付される。隆帯と先端部の間に小孔が1単位貫通している。小孔は焼成前に穿孔されており、下面

には容器状部分に向かってひっかかれたような工具痕が見られる。小孔に隣接して、細い沈線によって、格子目状のモチーフが描かれている。容器状部分の外面には、縦方向の砂粒の動きがみられるが、ケズリではなく、ナデに伴う痕跡と考えられる。内面には軟質工具による、横方向のナデ痕が見られる。突起接続に伴う粘土の盛り上がりは内面調整痕にかぶっている。把手状部分もナデ調整が施され、全体にミガキ痕は見られない。

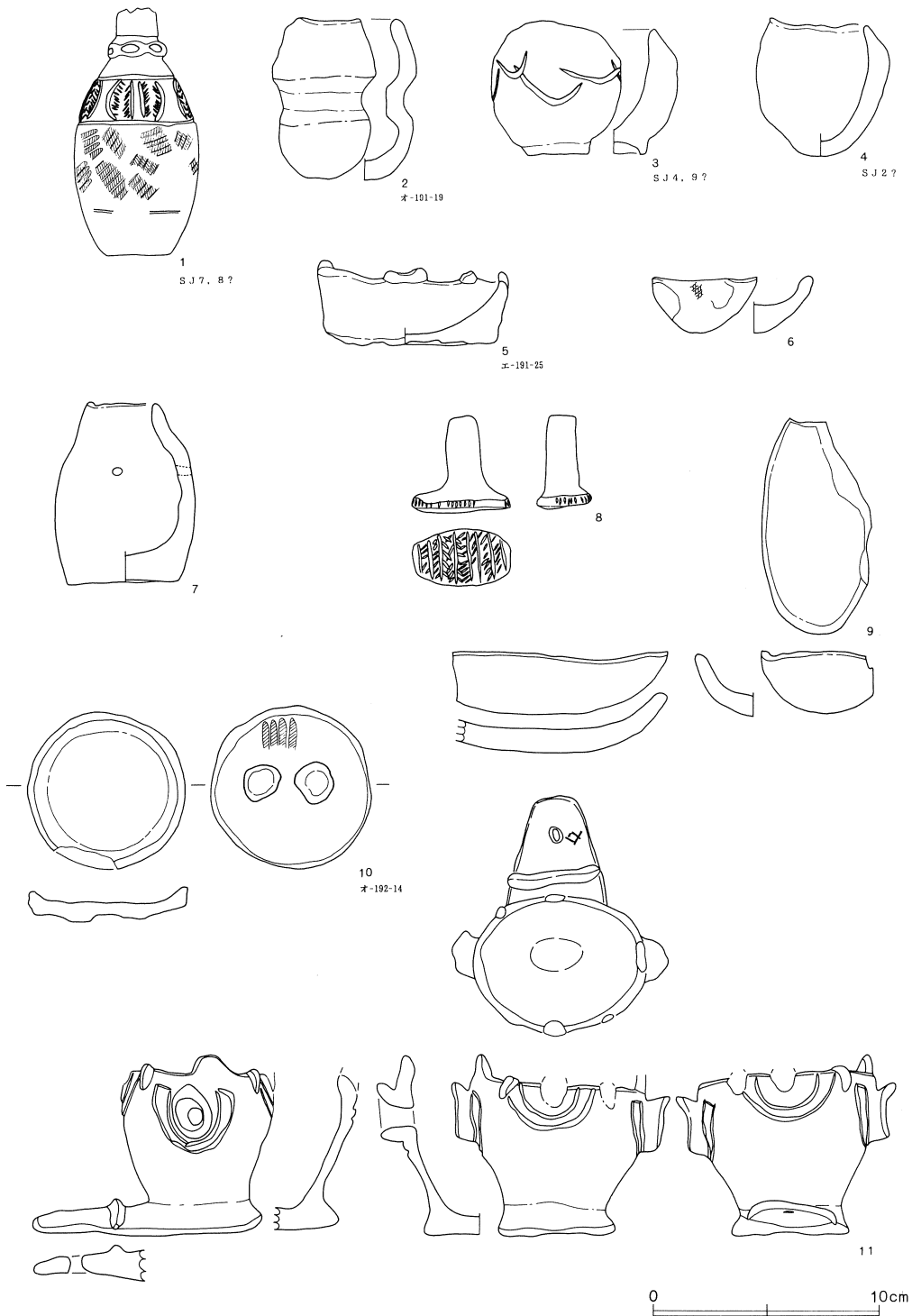
第208図1～3は、所謂「有孔球状土製品」である（小島 1980）。いずれも中位が膨らみ両端がすぼまる形態である。1、2はラグビーボール状に、両端部に向かって滑らかにすぼまるが、3は両端部の形態が他と異なり、段差を介して端部にいたる。いずれも両端をつなぐように、径8mm程の孔が直線的に貫通している。文様は器面全面に巡るように施される。1は両端部が欠損している。現存する高さが7.2cmを測る。最大径は5.0cmである。両端部が沈線によって区画される。胴部中位には、2条1組の沈線間に刺突を持つものが横位に巡っている。器面の文様帯はこれによって2つに分割されている。胴部中位から両端部に向かって、内部に刺突を持つ2条1組の沈線が、羽状の構成をとって施される。地文にはLR縄文が施されている。

2も1と同様両端部がわずかに欠損している。現存する高さは7.0cm、最大径は5.8cmを測る。横位に巡る沈線によって文様帯が2つに分割される。両端部は3条1組の沈線で区画される。文様帯内部には羽状の短い沈線が充填される。器面はよく磨かれており、丁寧な作りである。

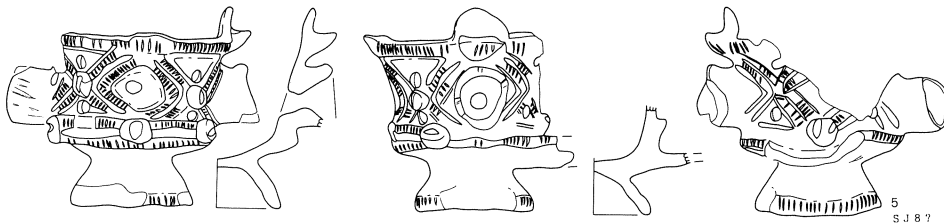
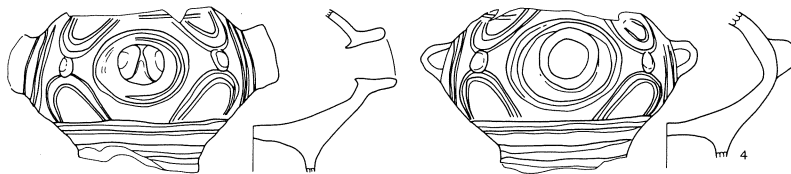
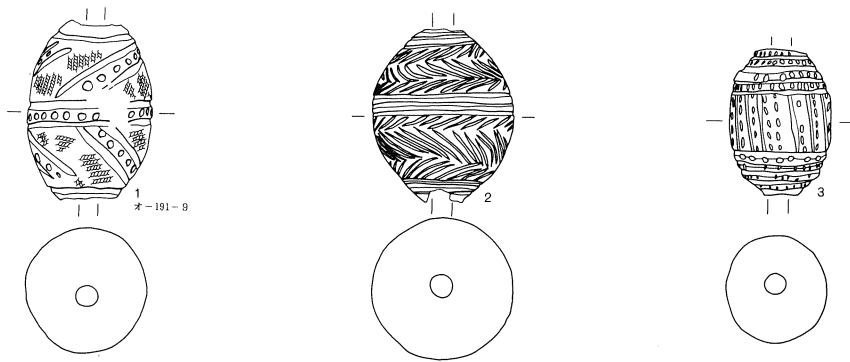
3は高さ5.9cm、最大径4.1cmを測る。両端近くに数条の沈線が施され、それを繋ぐようにやや右傾する縦位の沈線が施されるという構成を持つ。両端部付近の横位の沈線間には細かい刻みが連続的に施される。縦位の沈線の間にはそれぞれ縦長の刺突が施されている。縦位の沈線間の刺突は1列が基本であるが、1箇所、2列になっている部分がある。1～3の「有孔球状土製品」には使用時の痕跡と考えられるものは観察されなかった。

4、5は異形台付土器である。4は口唇部、台部が欠損している。胴部中位が膨らむ球形を呈する。最大径は9.6cmを測る。胴部中位に耳状の突起を2単位有する。突起内部は中空で、器体内部に貫通している。器体内面における突起接合部の周囲には、粘土の盛り上がりが見られる。耳状突起間に、小さな把手状の粘土粒が2単位貼付され、さらにそれぞれの突起、粘土粒の間に4単位の小粘土粒の貼付が見られる。これらの突起等によって、器面は8分割されている。突起と粘土粒を取り巻くように、沈線によって円文が施される。円文の間には、小粘土粒をはさんで弧線文が上下に向かい合っている。沈線はいずれも浅いが、施文後よく磨かれている。器面は全体に風化が激しく、外面の器面調整は明らかではないが、部分的にミガキ痕が残存している。内面には膨大部下に粘土紐の接合痕がみられる。内面には軟質工具による器面調整痕がみられ、突起接合部周囲の粘土の盛り上がりは、内面調整にかぶっている。

5は高さ8.3cm、口径(7.5)cmを測る。台部の高さは2.3cmである。口縁部には、大小の突起が1単位ずつ現存する。大きな突起には内外面、小さな突起には外面のみに縦方向の幅の狭い刻みが施される。口唇部外面には隆帯が巡り、隆帯上にヘラ状工具による幅の狭い刻みが密に施される。胴部には2単位の筒状の突起を有する。突起は中空で、内面に貫通する。突起外面には、幅の狭い沈線が、突起の付け根から先端に向かって施されていたようである。この突起の端部にも刻みが見ら



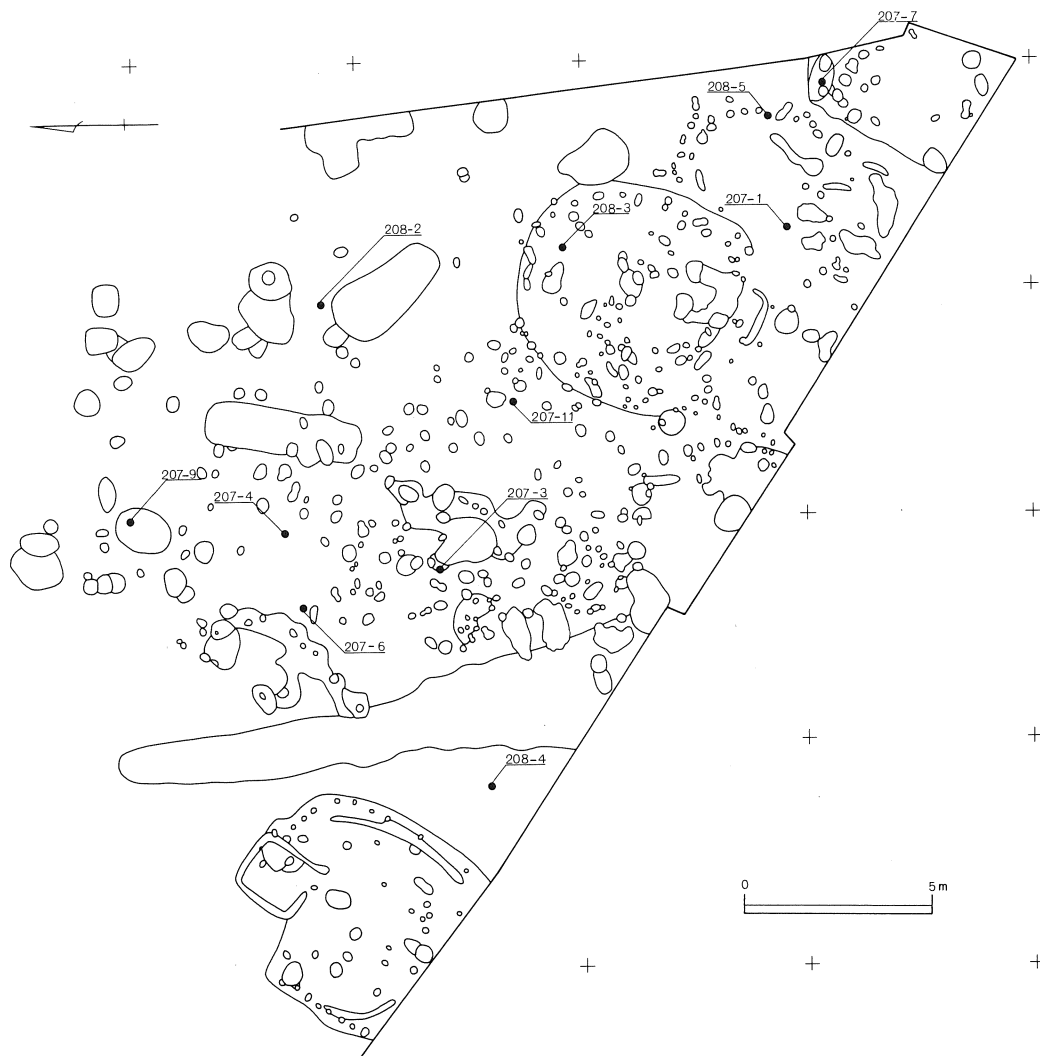
第207図 B区出土土製品(1)



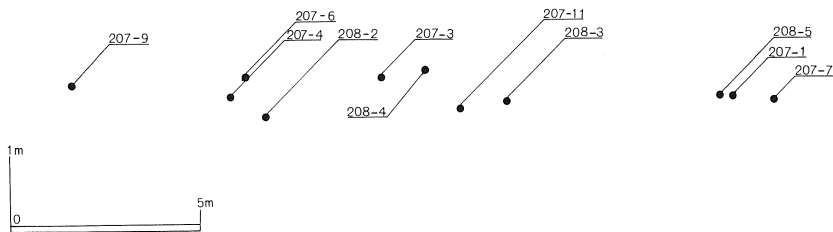
0 10cm

第208図 B区出土土製品(2)

れる。胴部の下端に把手状の部分が付設されていたが、破損しているため、形状は不明である。胴部には、隆帯と沈線による菱形状のモチーフが4単位あったと推測される。隆帯上には口唇部同様の刻みが施される。菱形の中心と、交点の上下には、直径が5mm程の孔が貫通する。隆帯の交点には中心に刻みのある突起が貼付される。胴部下端には、2条の隆帯が巡り、その間には、結節沈線が施され、結節部には突起が3個残存する。この突起は、中心の1つが縦方向の刻み、左右の2つが横方向の刻みを中心に有する。把手状のものが付設される部分の直上には、豚鼻状突起が貼付される。把手状の部分の下面には幅0.5mm以下の、条線状のものが何本か見られるが、風化が激しく、詳細は不明である。台部の下端にもごく薄い隆帯が巡り、隆帯上には刻みが施されている。全体に風化が激しく、装飾、調整の詳細は不明である。



.4250



第209図 土製品出土位置図

シ 耳栓（第210図～第215図）

耳栓は図示したものは88点である。図示可能なもののほとんどを遺構順に掲載した。個々の資料の詳細については表を参照して頂きたい。表中の器面調整痕の分類は以下の通りである。

ミガキ1類：溝状の工具痕単位を持ち、光沢があるもの。

ミガキ2類：溝状の工具痕単位の縁辺があいまいなもの。

ナ デ1類：工具痕単位は明確ではないが、多孔性がなく、のっぺりとしているもの

ナ デ2類：粘土が引きずられた痕や、砂粒を引きずった痕による擦痕が見られるもの。乾燥が進んでから再加湿されたと考えられる。

ナ デ3類：粘土が引きずられた擦痕を有するもの。乾燥の進まぬうちに調整したと考えられる。

ヘラナデ：ヘラ状工具の「あたり」が見られるもの

耳栓は大きさ、形態にいくつかの変異を持つ。大きさは外径が2 cm以下のものから、8 cm弱のものまで存在する。平面形はリング状を呈するものがほとんどであるが、内輪を持たないもの、橋状の部分を持つものも安定して存在する。

リング状を呈するものには、断面形に以下のものが認められる。

a. 三角形、またはそれに近いもの。

b. 棒状、またはレンズ状になるもの。

c. 内側面の下側に凹み、屈曲を有するもの。

a類は無文で粗製のものが多い。b類は比較的小形のものが多いようである。本遺跡からの出土点数は少ない。c類は有文精製、または無文でも端正なつくりのものが多く見られる。内輪を持つもので有文のもの断面形は、ほとんどがこのタイプである。

内輪を持たないものの断面形には、以下のものが見られる。

d. 円筒状になるもの。

e. 上下面とも凹むもの。

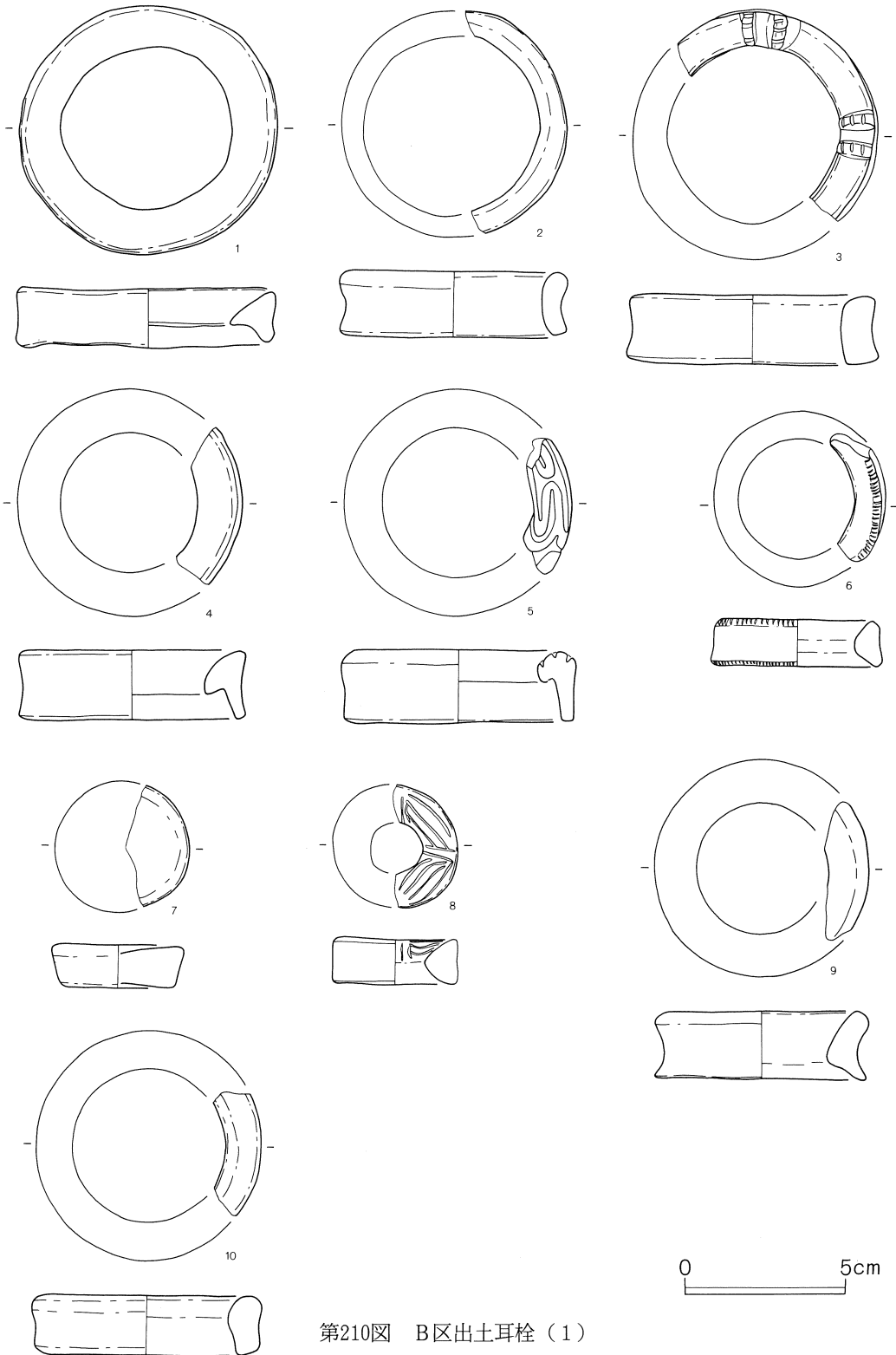
f. 下面のみ大きく凹み、内部が空洞になるもの。

d類は小形で無文粗製のものが多い。また、他のものに比べ、厚みのあるものが多い。e類には大きさ、装飾の有無に変異が見られる。f類は第212図3, 15のみであるが、いずれも同心円状のモチーフが施されている。

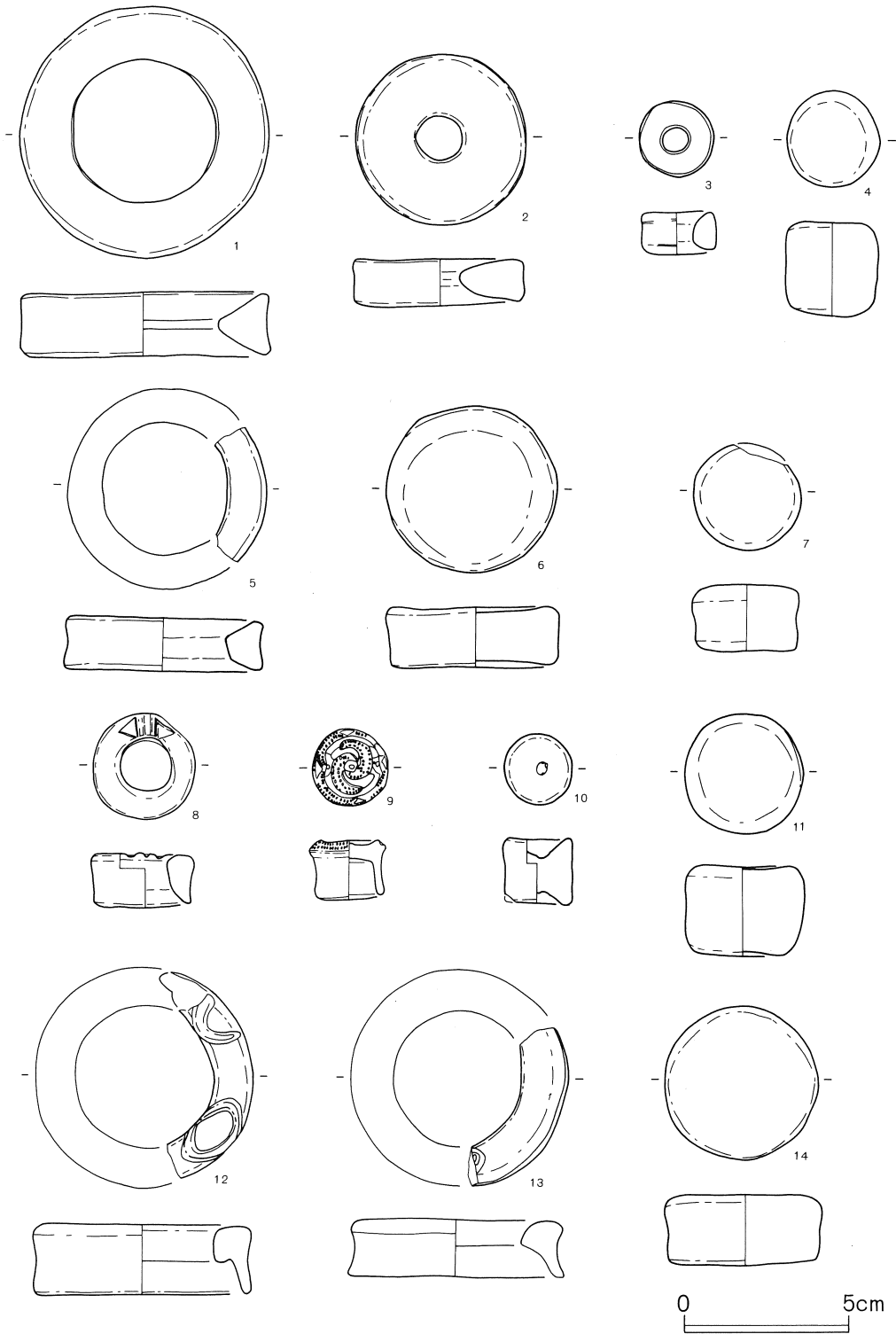
モチーフは、平面形がリング状のものの場合、上面の平坦部、または湾曲部に施されるものがほとんどである。外側面に装飾を持つものは少ない。第211図3、第213図11, 20, 21は外側面に平行沈線、または刺突が施されている例である。

成形手法について知り得る資料は、第212図10のみであった。小形の精製有文のものであるが、側面の下半に明瞭な接合痕が観察される。無文粗製のものは、おそらく手づくねによって成形されたと考えられる。

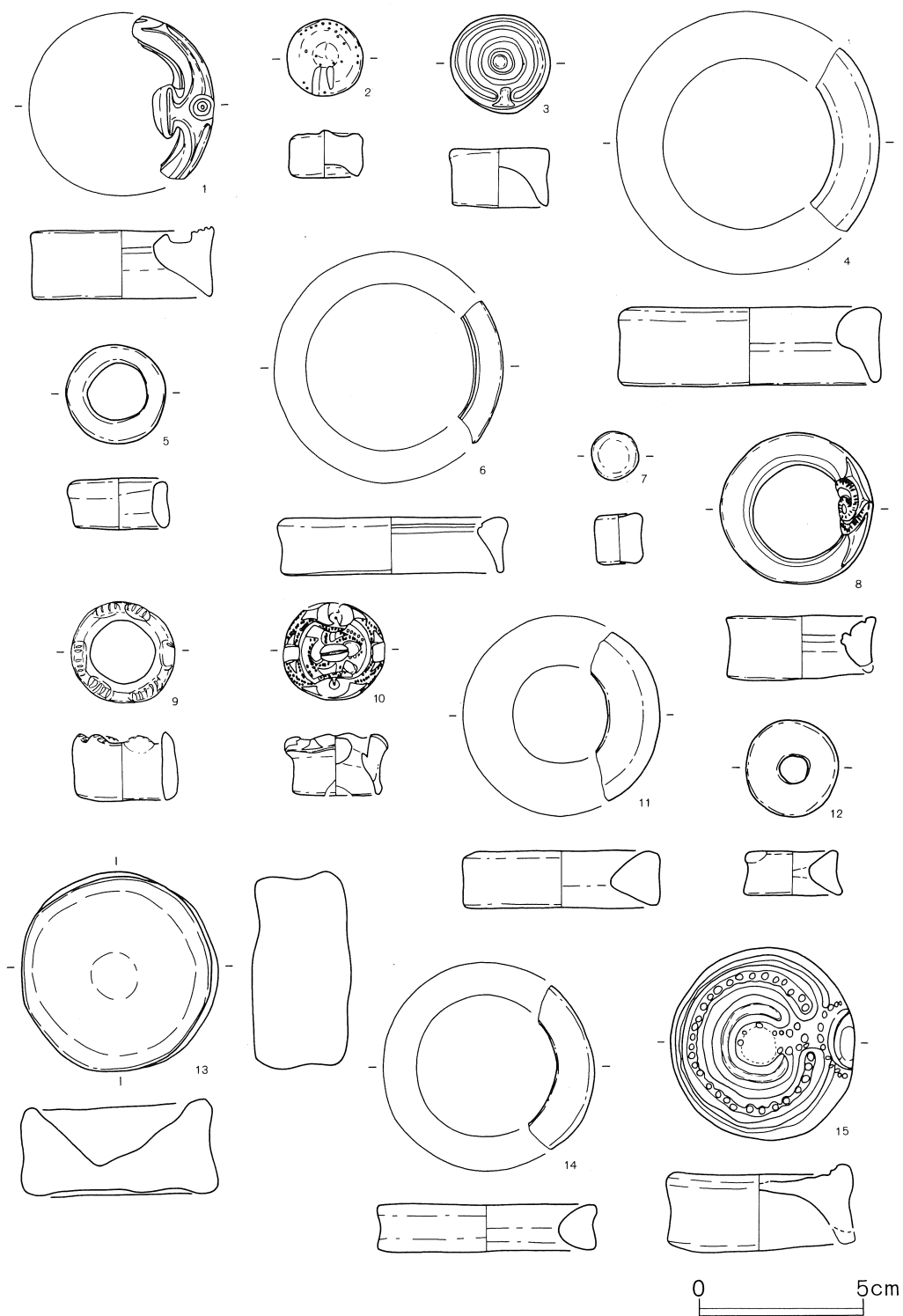
第216図は耳栓の出土位置を示したものである。土偶の出土位置が調査区西半に片寄るのに対し、耳栓は、ほぼ調査区全体から出土している。



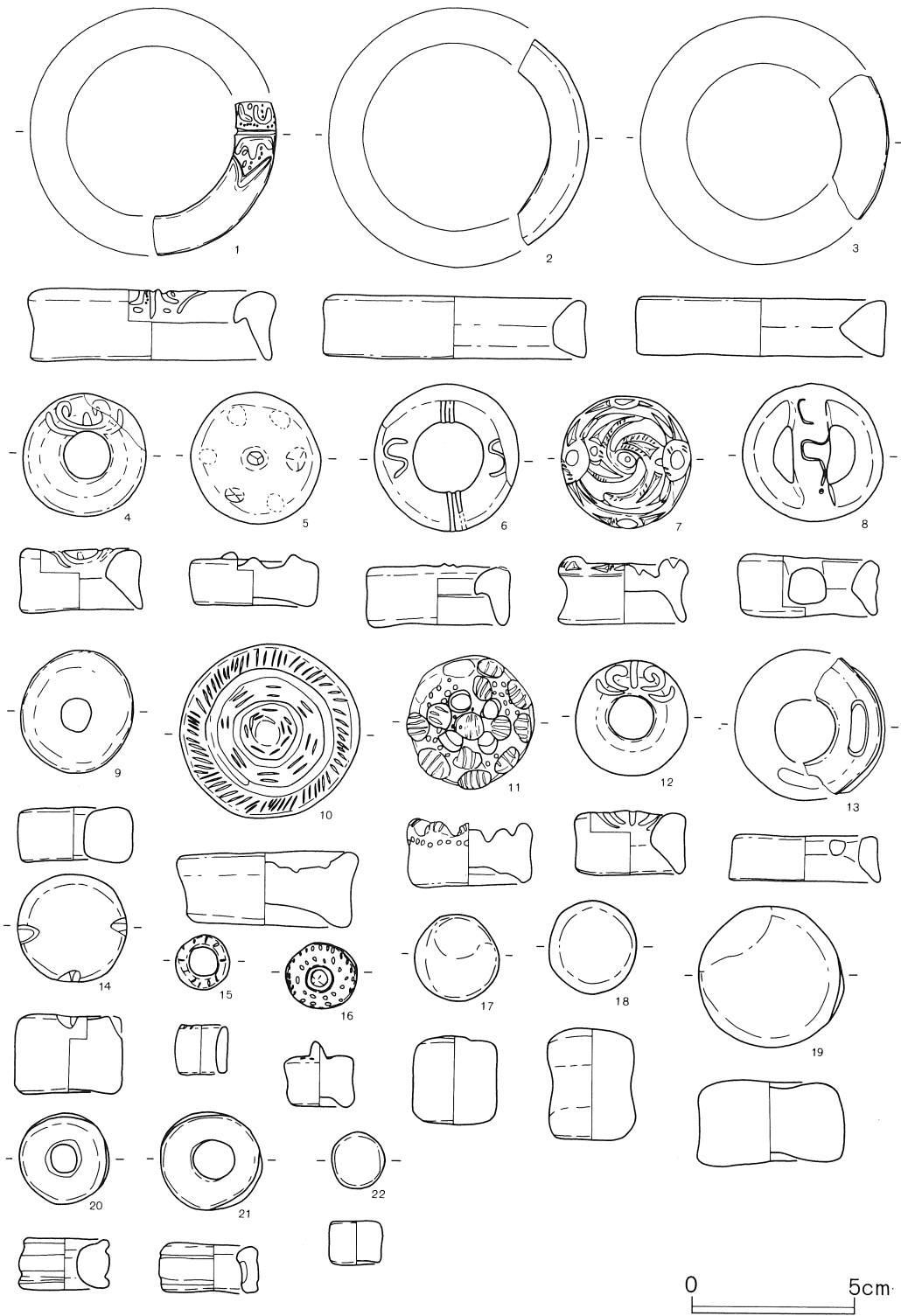
第210図 B区出土耳栓（1）



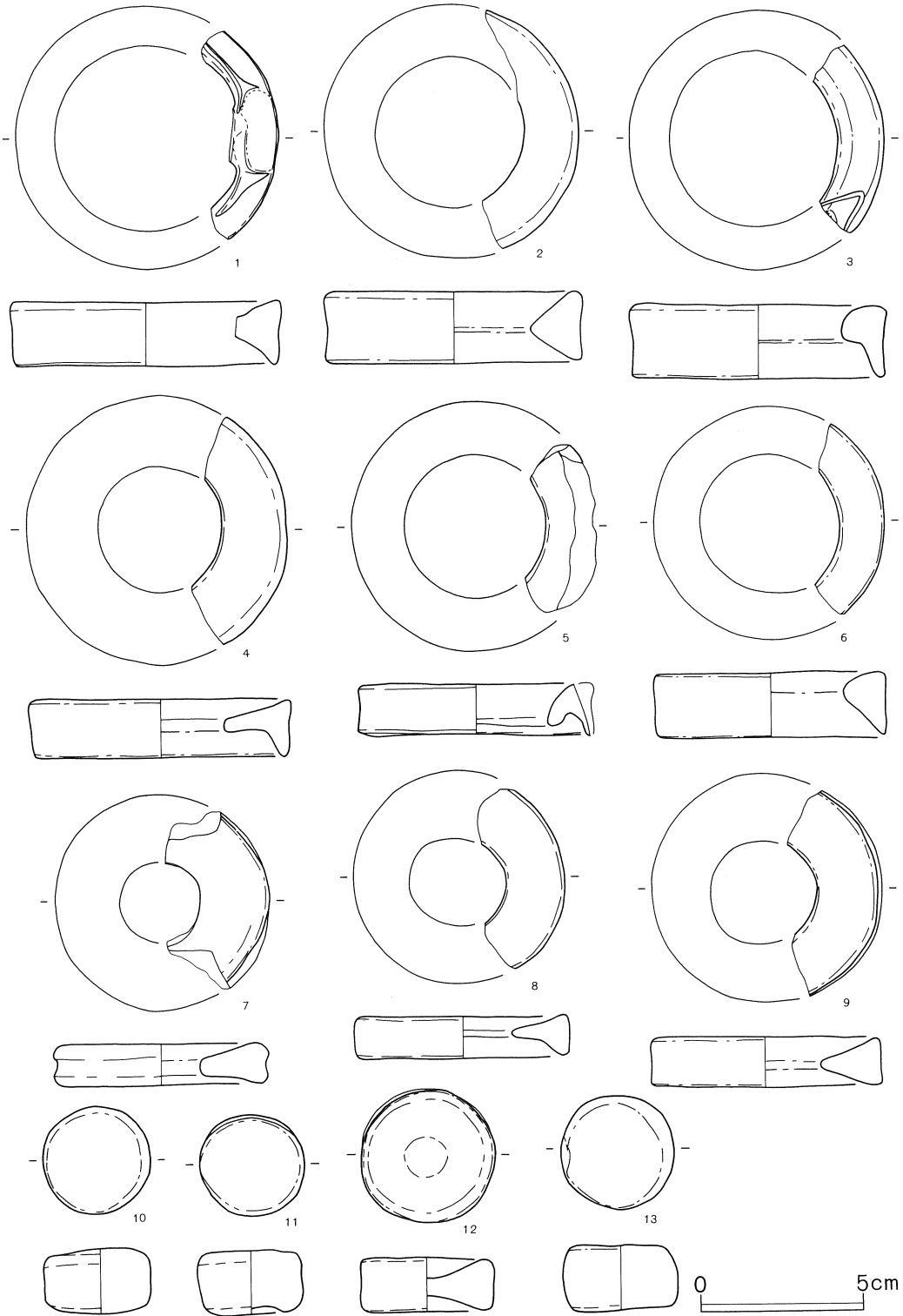
第211図 B区出土耳栓（2）



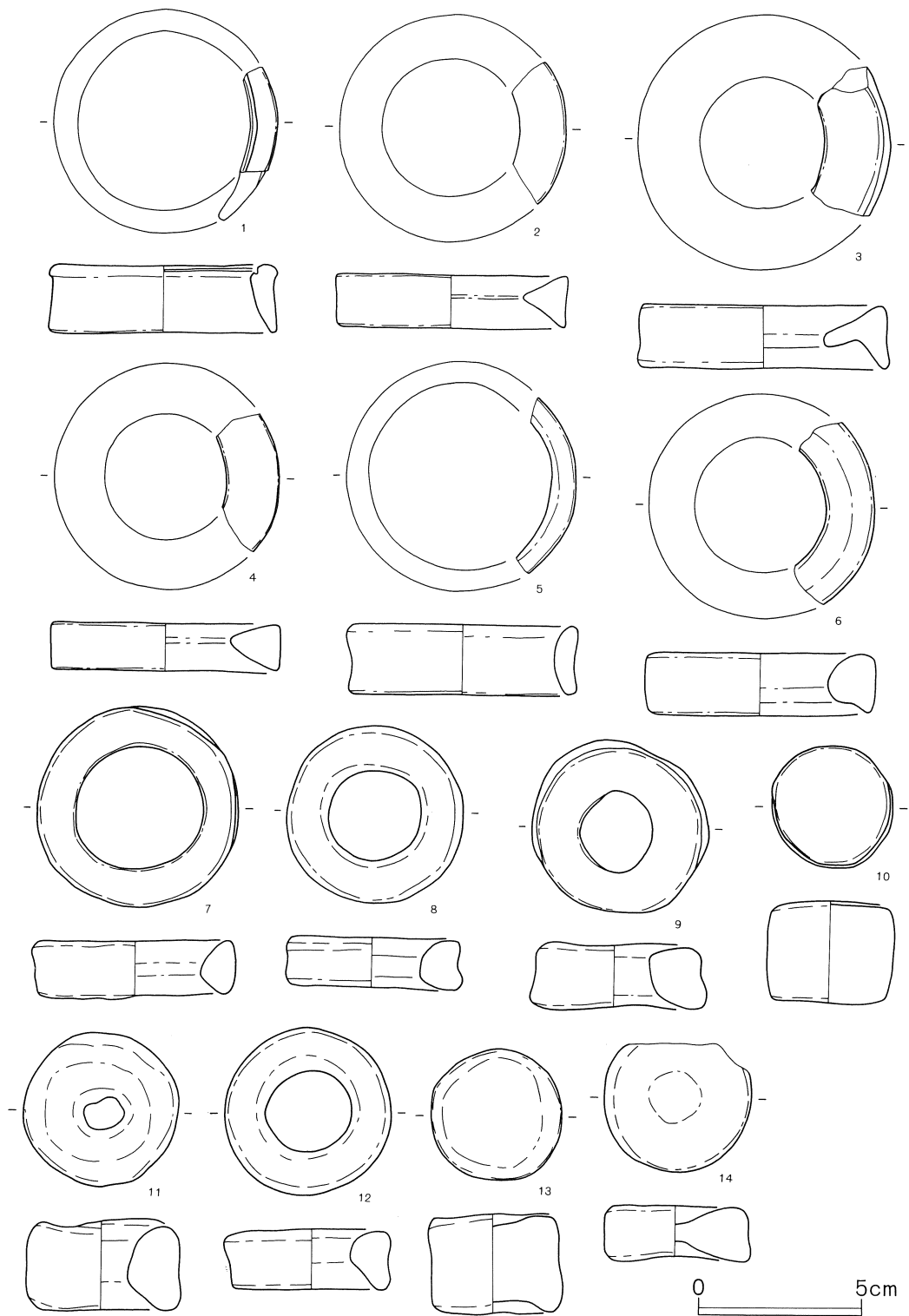
第212図 B区出土耳栓(3)



第213図 B区出土耳栓（4）



第214図 B区出土耳栓（5）



第215図 B区出土耳栓（6）



第216図 耳栓出土位置図

耳栓属性表(1)

図版番号	出土地点	外径	内径	厚さ		
第210図	1	SJ1	8.0 (cm)	5.3 (cm)	1.8 (cm)	赤褐色。粗砂、小礫を含む。ミガキは見られない。下面にナデ2類が施される。粗雑なつくりである。
	2	SJ1?	(7.9)	(5.4)	2.0	灰褐色。細砂をわずかに含む。外側面に軟質工具による丁寧なナデ2類が見られる。内側面は調整痕不明。
	3	SJ1,2	(7.5)	(5.3)	2.2	灰褐色。粗砂をわずかに含む。外側面はナデ1類後、ミガキ1類が加えられる。内側面にナデ1類が見られる。上面に2個1対の突起2単位残存。突起上に3列の刻みあり。SJ1、SJ2の埋土出土のものが接合している。
	4	SJ1?	(7.0)	(4.2)	2.1	暗褐色。細砂をわずかに含む。上面に丁寧なミガキ1類、下面に横方向にナデ2類、内側面にはナデ2類、外側面はミガキ1類が見られる。
	5	SJ1?	(7.1)	(4.7)	2.1	灰黄褐色。細砂を多く含む。外側面には軟質工具によるナデ2類がわずかに見られる。内側面の調整痕不明。下面にはケズリの「かす」が附着する。上面に彫刻的手法によって流水状のモチーフが描出される。鋭角的な工具で乾燥してから削られている。
	6	SJ1	(5.3)	(3.6)	1.4	橙灰色。細砂をわずかに含む。器面の摩耗が進んでいるため調整不明。上下面ともに外縁部に幅0.2~0.5mm程のヘラ状工具による刻みが施されている。端整なつくりである。
	7	SJ1?	(4.1)	-	1.3	赤褐色。粗砂を多く含む。上下面とも調整痕ははっきりしない。やや粗雑なつくりである。
	8	SJ1?	(3.8)	(1.6)	1.3	橙灰~黒色。細砂を含む。調整不明。上面に全周を4分割すると思われる細い沈線文がある。かなり乾いてからひかくように削られている。
	9	SJ2?	(6.6)	(4.1)	2.1	橙灰~黄褐色。細砂を多く含む。器面は摩耗がすすんでいるため調整不明。
	10	SJ1?	(7.0)	(4.7)	1.8	暗赤褐色。粗砂を含む。上面に横方向のナデ1類?下面不明。外側面にはケズリ、内側面にはヘラナデが見られる。器面保存良好。
第211図	1	SJ2?	7.5	4.3	1.9	橙~黒褐色。細砂をわずかに含む。黒褐色部分は器面がよく残っていて、光沢が見られるが、工具痕は見られない。橙色部分は器面が荒れているため調整不明。
	2	SJ2?	5.1	1.4	1.2	灰黄褐色。細砂を多く含む。器面の剝落が激しいため調整不明。やや粗雑である。
	3	SJ2?	2.3	0.8	1.3	橙~黒褐色。粗砂を多く含む。器面剝落が激しいため、調整不明。外側面に2条の沈線の痕跡が見られる。
	4	SJ2?	2.9	-	2.8	橙色。細砂をわずかに含む。器面が摩滅しているため、調整不明。
	5	SJ3,4・9?	(6.0)	(3.8)	2.6	赤褐色。細砂をわずかに含む。器面の摩耗がすすんでいるため調整不明。粗雑なつくりである。
	6	SJ3,4・9?	5.2	-	1.8	灰黄褐色。細砂を多く含む。器面が荒れているため、調整不明。
	7	SJ3,4・9?	3.2	-	2.0	灰黄褐色。粗砂を多く含む。ほとんど未調整。
	8	SJ5?	3.1	1.5	1.6	橙灰色(赤褐色)。粗砂を多く含む。器面の剝落が激しいため、調整不明。上面に対向する1対の三叉状の彫り込みとその中に2本1対の隆線が見られる。
	9	SJ5?	2.3	-	1.9	赤褐色。細砂をわずかに含む。外側面にはナデ2類が見られる。乾燥がすすんでから調整しているようである。内側面は不明。上面に4つの三叉状の彫り込みがあり、その上面に細かい刺突列が見られる。赤彩。
	10	SJ5,4・9?	2.1	-	1.9	灰褐色。砂粒をほとんど含まない。側面にナデ3類。上面中央寄りにくぼみがあり、中に細かい刺突痕がある。下面中央右寄りにも同様なくぼみがある。
	11	SJ4・9?	3.6	-	3.7	暗灰~橙灰色。粗砂を多く含む。器面はほとんど未調整。
	12	SJ5,4・9?	(6.5)	(4.2)	2.0	灰褐色。細砂を多く含む。器面の摩耗がすすんでいるため調整不明。上面に粘土紐が貼り付けられている。おそらく4~5単位であろう。端整なつくりである。
	13	SJ5,4・9?	(6.5)	(3.8)	1.8	黒色。砂粒をほとんど含まない。内面から下面は鋭角的な工具、おそらくフレイク等によるケズリ。上面は軟質工具によるミガキ、外側面はナデ3類、部分的に光沢があり、上面に沈線文が見られる。端整なつくりである。

耳栓属性表(2)

図版番号	出土地点	外径	内径	厚さ	
第211図 14	SJ5,4・9?	4.7 (cm)	— (cm)	2.0 (cm)	赤褐色。粗砂を多く含む。器面の剥落が激しいため調整不明。やや粗雑なつくりである。
第212図 1	SJ5,4・9?	(5.6)	—	2.0	黒褐～淡黄褐色。細砂を多く含む。側面は軟質工具によるナデ2類、下面にフレイクによるものと思われるケズリ痕が見られる。上面に沈線文、4単位と推定される突起、ボタン状突起が見られる。内面には一重の沈線がめぐる。ボタン状突起部分に赤色物質が残っている。
2	SJ5,4・9?	(2.3)	—	1.4	橙灰色に黒い斑点がある。細砂を多く含む。側面にナデ3類が見られる。上面中央に突起があり、周囲に刺突が見られる。下面はくぼんでいる。
3	SJ5,4・9?	3.0	—	1.8	黒褐～淡黄褐色。粗砂を含む。明確な調整痕は見られない。上面に同心円状のモチーフが施文される。赤彩痕が見られる。やや粗雑なつくりである。
4	SJ6	(7.9)	(5.1)	2.3	橙灰～暗灰色。細砂を含む。全体に溝状工具痕が見られる。端整なつくりである。
5	SJ6	3.0	1.8	1.6	灰黄褐色。粗砂を多く含む。外側面にナデ3類が見られる。粗雑なつくりである。
6	エ-191-19-29	(6.9)	5.1	1.7	灰褐色。砂粒をほとんど含まず。器面は摩耗がすすんでいるため調整不明。上面に沈線が1本見られる。端整なつくりである。
7	SJ7?	1.4	—	1.5	灰黄褐色。細砂を多く含む。器面は摩耗がすすんでいるため調整不明。粗雑なつくりである。
8	SJ7?	4.7	2.6	1.9	淡黄褐色。砂粒をほとんど含まず。器面は摩耗がすすんでいるため調整不明。かなり乾燥してから成形、彫り込みを施している。文様は沈線を中心に巻き込むような沈線の端に三叉状の彫り込みが見られる。沈線間の隆帯部には細かい刻みが施される。端整なつくりである。
9	オ-192-6-31	3.1	2.0	1.4	橙褐～暗褐色。粗砂を多く含む。外側面に横方向のナデ2類が見られる。上面に2個1対の突起3単位存在する。突起上面にヘラ状工具による刻みが施される。
10	SJ7?	3.1	—	2.9	暗褐～黒褐色。砂粒を殆ど含まず。調整の工具痕は観察できないが、光沢が見られるため、乾燥後に皮等で磨いたと考えられる。鋭利な工具により彫刻され、装飾が施されている。中心部に楕円状部分があり、その中心に沈線が引かれる。上面全体刺突されている。側面の一部に明瞭な接合痕がある。
11	SJ7,8?	(6.0)	(2.9)	1.7	暗褐色。粗砂(亜角礫)を多く含む。上下面は少々多孔質であるが、ナデ1類が見られる。側面にはナデ2類。端整なつくりである。
12	SJ7,8	2.8	0.9	1.3	灰黄褐色。細砂を含む。精製品をまねているが、形状はいびつである。上下面にケズリ痕があり、側面には上下面からの粘土のマクレが残る。
13	SJ7,8?	5.9	—	2.9	橙灰褐～黒褐色。粗砂を多く含む。中心部が片側から大きく窪む。底面には弱い光沢がある。
14	SJ8	(6.4)	(4.2)	1.4	橙灰色。粗砂を含む。器面は摩耗がすすんでいるため調整不明。やや粗雑なつくりである。
15	SJ8?	5.6	—	2.4	橙灰色。粗砂を多く含む。側面には指によると思われるナデ2,3類が見られ、下面には工具痕は観察できないが、粘土の「うき」がみられ、指頭によって、ならしたと考えられる。上面には、一端が開く同心円状のモチーフが沈線で描かれたのち、沈線間に刺突が施されている。上面中心部には、粘土粒の剥落痕が見られる。
第213図 1	SJ5,4・9?	(7.5)	(5.1)	2.1	暗褐色。細砂を多く含む。外側面はナデ2類、内側面は先端の細い工具によるヘラナデが見られる。上面にヘラ描きによる沈線文があり、周囲に棒状工具による刺突が見られる。端整なつくりである。
2	SJ8?	(7.9)	(5.7)	1.9	橙灰色。細砂を含む。器面は摩耗がすすんでいるため調整不明。端整なつくりである。
3	SJ8?	(7.5)	(4.7)	1.7	橙灰色。細砂を多く含む。器面は摩耗がすすんでいるため調整不明。端整なつくりである。

耳栓属性表(3)

図版番号	出土地点	外径	内径	厚さ	
第213図	4 SJ8?	3.8 (cm)	1.5 (cm)	1.9 (cm)	赤褐色。粗砂を多く含む。器面の剥落が激しいため調整不明。上面曲面上に弧線の組み合わせによるモチーフが1単位。端整なつくりである。
	5 SJ8?	4.0	-	1.6	淡黄褐色。細砂を多く含む。ほとんど未調整。上面中心に1個、その周縁に6個の粘土粒が貼りつけられていたが、周縁部には2個のみ現存している。
	6 SJ8?	4.4	2.1	1.9	橙灰色。細砂を多く含む。外側面には軟質工具によるナデ2, 3類が施される。S字状の沈線と2条1対の隆線が2単位施される。沈線施工後調整はない。隆線は1本の粘土紐を貼りつけ、その中に沈線をいれることによって作り出されている。
	7 SJ8?	4.0	-	2.1	黒褐色。細砂をわずかに含む。全体に乾燥がすすんでから彫刻を施している。外側面には、工具痕は認められないが、多孔質ではなく光沢がある。上面縁辺と橋状部に縦長の細い刻みがあり、玉抱き三叉文を基調とするモチーフが描かれている。
	8 SD1?	4.4	-	1.9	橙灰色。粗砂を含む。器面が荒れているため調整不明。中央部のブリッジ上に断面V字状の、蛇行する沈線文が見られる。ブリッジは中央部が下がっているが、両端は上面端部に連結されている。
	9 SD1	3.4	0.9	1.6	淡黄褐色。粗砂を多く含む。器面の剥落が激しいため調整不明。
	10 オ-191-1	5.5	-	2.2	橙灰色。細砂を多く含む。器面の剥落が激しいため調整不明。沈線のマクレが目立つ。またラインも不安定、中央部に粘土粒が貼付されている。
	11 オ-191-10	3.9	-	2.1	淡黄褐色。粗砂を含む。外側面はナデ2類。内部に交差する橋状部を持つ。外縁に9個、ブリッジ上に4個、中央に1個、計14個の突起が貼付される。突起上には3~4本の刻みが施される。平坦面にはランダムな刺突が認められる。
	12 B区一括	3.4	1.4	1.9	灰黄褐色。細砂を含む。器面は摩耗がすすんでいるため調整不明。上面の一端にヘラ描き文が1単位見られる。下面は斜めに直線的に成形されている。
	13 エ-191-25	4.6	1.9	1.4	灰橙色。白色細砂を含む。器面は摩耗がすすんでいるため調整不明。上面から下面に貫通する楕円形の孔が2単位現存するが、おそらく4単位あったと考えられる。
	14 オ-192-11-20	3.4	-	2.4	橙灰色。砂粒を含む。全面未調整。上面に3箇所の抉りが見られる。
	15 エ-192-21	1.7	0.9	1.6	橙色。細砂をわずかに含む。調整不明。上面に11単位の刻み痕が見られる。
16 B区一括	2.2	-	2.0	橙灰色。砂粒をわずかに含む。器面の剥落が激しいため調整不明。上面に先端が尖った突起があり、周囲には沈線が見られ、その外側にやや不規則な二重の刺突列が見られる。やや粗雑なつくりである。	
17 オ-192-2-13	2.6	-	2.7	灰黄褐色。粗砂を含む。おさえ痕のみ観察される。上面に整形時の粘土のあまりと思われる盛り上がりが見られる。	
18 B区一括	2.6	-	3.4	灰黄褐色。砂粒を含む。器面保存状態は良いが、調整不明。粗雑なつくりである。	
19 B区一括	4.5	-	2.6	灰褐~黒褐色。細砂を含む。全面はほぼ未調整である。粗雑なつくりである。	
20 オ-192-2-12	2.8	0.8	1.5	淡黄褐色。細砂を含む。器面が荒れているため調整不明。沈線を引いたのちに、上、下面が調整されている。全面に赤色塗彩の痕跡がある。	
21 B区一括	3.1	1.3	1.5	橙灰~灰褐色。細砂を多く含む。器面の剥落が激しいため調整不明。上、下端の平坦面を最後に成形しているので、内側面にマクレが見られる。	
22 B区一括	1.6	-	1.4	灰褐色。砂粒をほとんど含まず。ナデ2類、おさえ痕に近い。	
第214図	1 エ-191-19	(8.1)	(5.4)	1.9	灰黄褐色。粗砂を多く含む。内面はヘラナデの後に軟質工具によるナデ2類。上面に剥落痕を中心に対向する三叉文が施される。端整なつくりである。
	2 エ-191-25-32	(7.8)	(4.5)	2.2	暗赤褐色。砂粒を含む。上、下、外側面はナデ1類。工具痕は見られない。端整なつくりである。
	3 エ-191-24	(7.8)	(5.2)	2.2	暗褐色。細砂を多く含む。上、側面ともにナデ1類。上面に沈線文が見られるが、意匠全体の構成は不明である。端整なつくりである。
	4 エ-191-25	(8.0)	(3.9)	1.7	橙~暗褐色。細砂を含む。器面は摩耗がすすんでいるため調整不明。粗雑なつくりである。

耳 栓 属 性 表 (4)

図版番号	出土地点	外径	内径	厚さ		
第214図	5 エ-192-21	(7.5) (cm)	(4.3) (cm)	1.6 (cm)	暗褐色。細砂を多く含む。器面の剥落が激しいため調整不明。下面に棒状工具のあたりが見られる。	
	6 オ-192-1-34	(7.0)	(4.3)	2.0	橙灰色。粗砂を多く含む。上面にナデ1類、下面にケズリ、外側面に横方向のケズリが見られる。端正なつくりである。	
	7 エ-191-24	(6.6)	(2.4)	1.2	暗褐色。細砂を多く含む。上面にナデ1類、下面はナデ2、3類。外側面には上下からのマクレがある。多孔質ではないが、明瞭な調整痕は見られない。粗雑なつくりである。	
	8 オ-191-9	(6.5)	(2.9)	1.2	橙灰色。白色細砂を多く含む。器面は摩耗がすすんでいるため調整不明。比較的端正なつくりである。	
	9 B区一括	(7.1)	(3.3)	1.5	灰黄褐色。粗砂を多く含む。器面は摩耗がすすんでいるため調整不明。比較的端正なつくりである。	
	10 SJ7,8?	3.3	-	2.0	橙色。粗砂を多く含む。器面の剥落が激しいため調整不明。	
	11 エ-192-21	3.2	-	2.0	橙色。粗砂を含む。器面が摩滅しているため調整不明。	
	12 B区一括	4.1	-	1.6	黒～灰黄褐色。粗砂を多く含む。調整不明。上、下面は緩やかにくぼんでいる。	
	13 エ-192-21	3.5	-	2.0	橙色。粗砂を多く含む。全面未調整。	
	第215図	1 オ-191-1	(6.9)	(5.3)	2.0	暗褐色。細砂をわずかに含む。側面には棒状工具痕、内側面には斜め方向のヘラナデ痕、上面はナデ1類、柔らかいうちに施されたと思われる1条の沈線がある。
		2 オ-191-5	(7.0)	(4.2)	1.6	黒～灰黄褐色。亜角礫を含む。上面に軟質工具によるものと考えられるミガキがあり、弱い光沢がある。下面は不明。端正なつくりである。
		3 オ-191-5	(7.8)	(3.9)	2.0	黒褐色。砂粒を含む。上面から外側面にはミガキ1、2類、内側面から下面にはヘラ状工具によるナデが見られる。
4 エ-191-24		(7.0)	(3.8)	1.4	橙灰色。粗砂を多く含む。器面は摩耗がすすんでいるため調整不明。端正なつくりである。	
5 オ-191-10		(7.0)	(5.6)	2.1	橙灰～暗褐色。亜角礫を含む。側面にはケズリの後、部分的にミガキ1類が施される。	
6 B区一括		(6.9)	(4.0)	1.9	橙灰色。粗砂を多く含む。器面は摩耗がすすんでいるため調整不明。端正なつくりである。	
7 エ-191-24		6.2	4.0	1.7	暗灰褐色。粗砂を多く含む。器面は剥落が進んでいる。	
8 オ-191-9		5.5	2.9	1.6	橙色。細砂を多く含む。器面が荒れているため調整不明。粗雑なつくりである。	
9 エ-191-21		5.4	2.2	2.1	橙色。粗砂を多く含む。器面が荒れているため調整不明。	
10 エ-191-4		3.8	-	3.1	橙灰色。砂粒をほとんど含まず。全面はほぼ未調整。粗雑なつくりである。	
11 オ-191-9		4.1	1.3	2.8	灰黄褐色。細砂を多く含む。器面は摩耗がすすんでいるため調整不明。粗雑なつくりである。	
12 オ-191-9		5.0	2.6	1.9	橙灰色。細砂を多く含む。外側面はナデ3類?内側面下半をヘラナデ後、上半にナデを施す。	
13 オ-191-4-16		4.0	-	3.1	淡黄褐色。粗砂を多く含む。全面未調整。	
14 エ-191-4		4.6	-	1.7	橙灰色。砂粒を含む。器面は摩耗がすすんでいるため調整不明。上下面とも中心部が緩やかにくぼんでいる。	

ス 石器・石製品

石器は器種別に掲載し、1器種に属する個体数の多いものについては、概ね遺構順に掲載している。掲載したものは、ツールのみである。図示したもの以外に、打製石斧、石棒では、破損品、摩耗の著しいものが若干ある。磨石は定形品の約6割程を図示した。計測値等は表に掲載した。

石鏃（第217図1～7）

7点出土している。1, 3, 5～7は有茎で、2, 4は基部が凸型になるものである。周縁の調整は比較的人念である。

石錐（第217図8, 9, 11）

3点出土している。9は基部が欠損している。11は先端部が欠損している。

スクレイパー（第217図10, 12、第218図1, 2、第220図4, 7、第224図3）

第217図10は左右の縁辺は両面から調整が加えられている。12は篋状石器様の形態を有する。細かい調整剥離はわずかしか見られない。第218図1は側縁は両面から、先端部は片面から調整が加えられている。全体にやや摩滅している。2も側縁は両面から人念な調整が加えられ、先端部は素材腹面のみ調整が加えられている。第220図4は粘板岩製である。自然面を一端に有し、そこから剥離が加えられている。7は大形の剥片を素材とし、1側縁に両面から調整剥離を加えたものである。第224図3は両極打法による剥片を素材としたもので、打面の1つは自然面である。腹面の自然面側には2つの打点が見られる。腹面にやや大きめの剥離、背面には細かい剥離が加えられている。

角錐状石器（第218図3）

チャート製である。火熱を受けている。先端部が欠損している。様々な方向から剥離を繰り返すことによって角錐状に仕上げている。比較的大きな剥離面が多く、未製品とも考えられる。

打製石斧（第219図～第225図）

大きさ、形態、石材ともに変異が大きい。第219, 220図は遺構に伴う可能性のあるものである。第219図1は大形の礫素材のもので、分銅形を呈する。2は背面に自然面を大きく残す剥片素材である。やや撥形を呈する。3も分銅形を呈する。火熱を受けているようである。4は片岩を素材とする。抉りは浅い。5も自然面を大きく残している。一端が欠損している。縦長で小さい抉りをもつ。6も背面に大きく自然面を残す剥片を素材としている。刃部背面に縦方向の擦痕が見られる。基部の背面にも部分的な摩耗痕が見られる。第220図1は基部が欠損している。火熱を受けている。刃部はかなり摩耗している。2は片岩製である。両側縁に浅く小さな抉りを有する。3も背面に大きく自然面を残す剥片素材である。火熱を受けている。抉りは小さく、やや撥形を呈する。5は小形で、抉りもごく浅いものである。背面側の刃部に縦方向の擦痕が見られる。6は自然面を打面とす

る剥片素材である。火熱を受けている。抉りはごく浅い。

第221図～第225図はグリッド出土または表採である。第221図、第222図1～5, 7は分銅形を呈するものである。抉りの大きさや全体のプロファイル等に変異が見られる。第221図1は基部、背面に自然面を残す。2は抉りの浅い、短冊形に近いものである。剥片の軸を横方向にして成形している。3もやや短冊形に近い。4は背面に大きく自然面を残す剥片素材である。5は片岩製。やや撥形を呈する。6は分銅形で、火熱を受けている。片面に自然面を残している。7は基部にわずかに自然面が残っている。刃部は欠損している。第222図1は大形で、厚みも大きい。2は抉りが大きいもので、抉り部と刃部付近の稜には摩耗痕が見られる。3は片面に自然面を残している。やや厚みがある。中央部の稜には摩耗痕が見られる。抉りは大きい浅い。4も抉り部付近の稜に摩耗痕が見られる。刃部、基部にも摩耗痕が認められる。5は小形でやや厚みのある分銅形である。中央部付近の稜には摩耗痕が観察される。刃部、基部付近の稜にも摩耗痕が認められる。7は片面に自然面を大きく残している。火熱を受けている。図上方が摩耗しているため、こちらが刃部の可能性もある。

第222図6は形状不明である。厚みが大きく、片面に自然面を大きく残している。側縁には細かい剝離を重ねて抉りが整形されている。

第223図1は抉りがやや上半部に位置している。片面に自然面を大きく残している。火熱を受けている。2は楕円形を呈し、ごく小さな抉りを有する。火熱を受けている。3も2に類似する形態を有していたと考えられる。刃部は欠損後、再生されているようである。4は背面に自然面を大きく残す剥片素材である。片側の側縁に縦方向の擦痕が顕著に見られ、それを切って抉りが入れられている。やや問題が残るが、打斧に含めた。5は両側縁に調整が加えられ、三角形状を呈する。背面に自然面を残している。腹面には擦痕が認められる。これもやや問題が残るが、打斧に含めた。6は礫素材である。未製品と考えられる。7は両側縁と刃部に調整が加えられている。火熱を受けている。スクレイパーの可能性もあるが、ここでは打斧に含めた。8は火熱を受けており、詳細は不明である。第224図1は短冊状に近く、両側縁はごく浅く湾曲している。片面に自然面を残している。2は自然面を打面とする剥片素材である。刃部は欠損している。

第224図4～7、第225図1は撥形を呈するものである。4は背面に自然面を大きく残すものである。火熱を受けている。5も背面に自然面を残す剥片素材である。刃部には細かい剝離が見られる。6はやや厚みのある撥形の打斧である。刃部付近の一部に自然面を残す。7も背面に自然面を残している。やや火熱を受けている。第225図1は基部付近に自然面を残している。剥片を横方向に用いている。

第225図2は片方の端部に抉りを有している。一部欠損しているため、形状は不明である。火熱を受けている。第225図3は片岩製の非常に大きな打斧である。細かい調整によって分銅形に仕上げられている。端部の片方に摩耗痕が見られる。

磨製石斧（第226, 227図）

第226図1は大形で、厚みも大きい。刃部は欠損している。火熱を受けており、表面の擦痕はごく一部しか確認できない。

第226図2～6、第227図1～4、6は中形品である。第226図4、第227図2以外は側面を有するいわゆる定角式磨製石斧である。第226図2は完形品で、欠損が見られない。刃部もよく研ぎ出されている。3は刃部が一部欠損しているが、研ぎ直されている。表面がやや風化している。4は横断面がレンズ状を呈する。刃部、基部とも大きく欠損している。表面に敲打痕が残存し、未製品の可能性もある。5は基部が大きく欠損している。欠損した面に敲打痕が見られる。6は刃部がやや斜めになっている。再生した刃部と考えられる。基部に欠損が見られる。第227図1も刃部が斜めになる。基部に欠損している。刃部付近に敲打痕が見られ、その上に擦痕がかぶっている。2は片岩製で、形状も不安定なものである。横断面はレンズ状を呈する。刃部の作り出しもあまり丁寧ではなく、未製品の可能性がある。3はやや細身の定角式磨斧である。刃部が欠損し、研ぎ直している。基部にも欠損が見られる。4は基部が大きく欠損している。わずかに側縁が確認できる。刃部にも欠損が見られるが、研ぎ直しは見られない。6は刃部が大きく欠損している。基部にも欠損が見られる。

第227図5、7は小形品である。いずれも非常に丁寧に磨かれている。5は基部に欠損している。刃部は直刃である。7は刃部が欠損している。側縁を有している。

第227図8は表面の滑らかな礫の一端に刃を研ぎだして、磨斧としている。全体に擦痕は見られるが、敲打痕は確認できず、現在の形状に近い礫を素材としたと考えられる。9は全面に敲打痕が見られる未製品である。側縁、刃部に剝離面が痕跡的に確認できる。擦痕は見られず、敲打の段階終了直前で放棄されたものと考えられる。

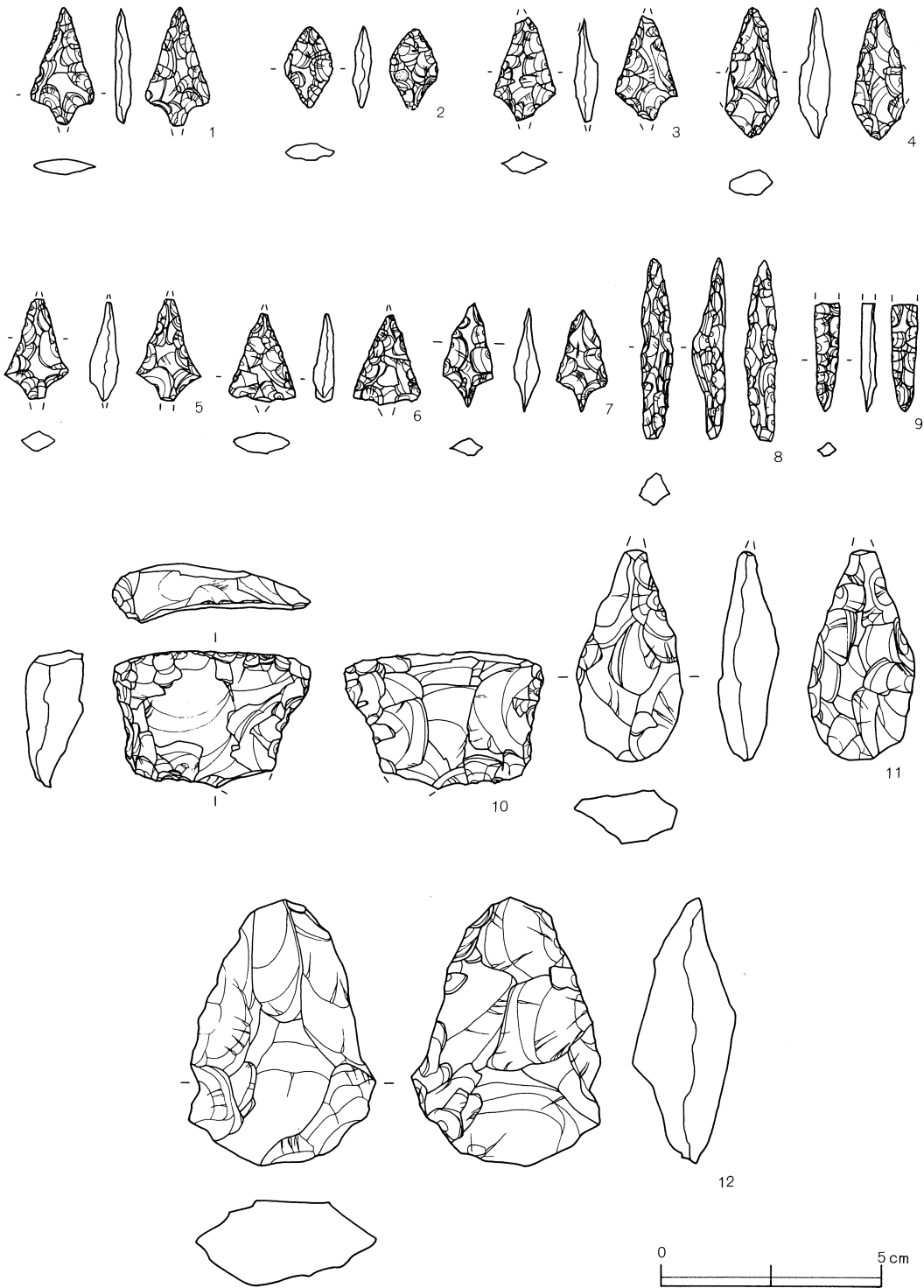
石皿（第228～230図）

破損品が多く、全体の形状の明らかなものは少ない。石材は多孔質安山岩がほとんどで、片岩、安山岩がわずかに見られる。1は円形で、正面に大きな凹みを持ち、裏面に多数の小さい凹みを有する。2は安山岩製。磨石の可能性もある。3、4も円形を呈する。5はやや楕円形である。6は楕円形で、片面に凹みを有する小形のものである。7は大形のもので、正面に大きな凹み、裏面に複数の小さな凹みを有する。第229図1は楕円形の大形品である。正面はやや凹んでおり、裏面にも複数の小さな凹みを有する。2は形状は明かではないが、正面に大きな凹み、裏面に複数の小さな凹みを有する。3は両面に大きな凹みを持ち、凹部中心の厚みは極めて薄い。4、第230図1は片岩製である。4は後述する「加工痕ある片岩」の可能性もある。

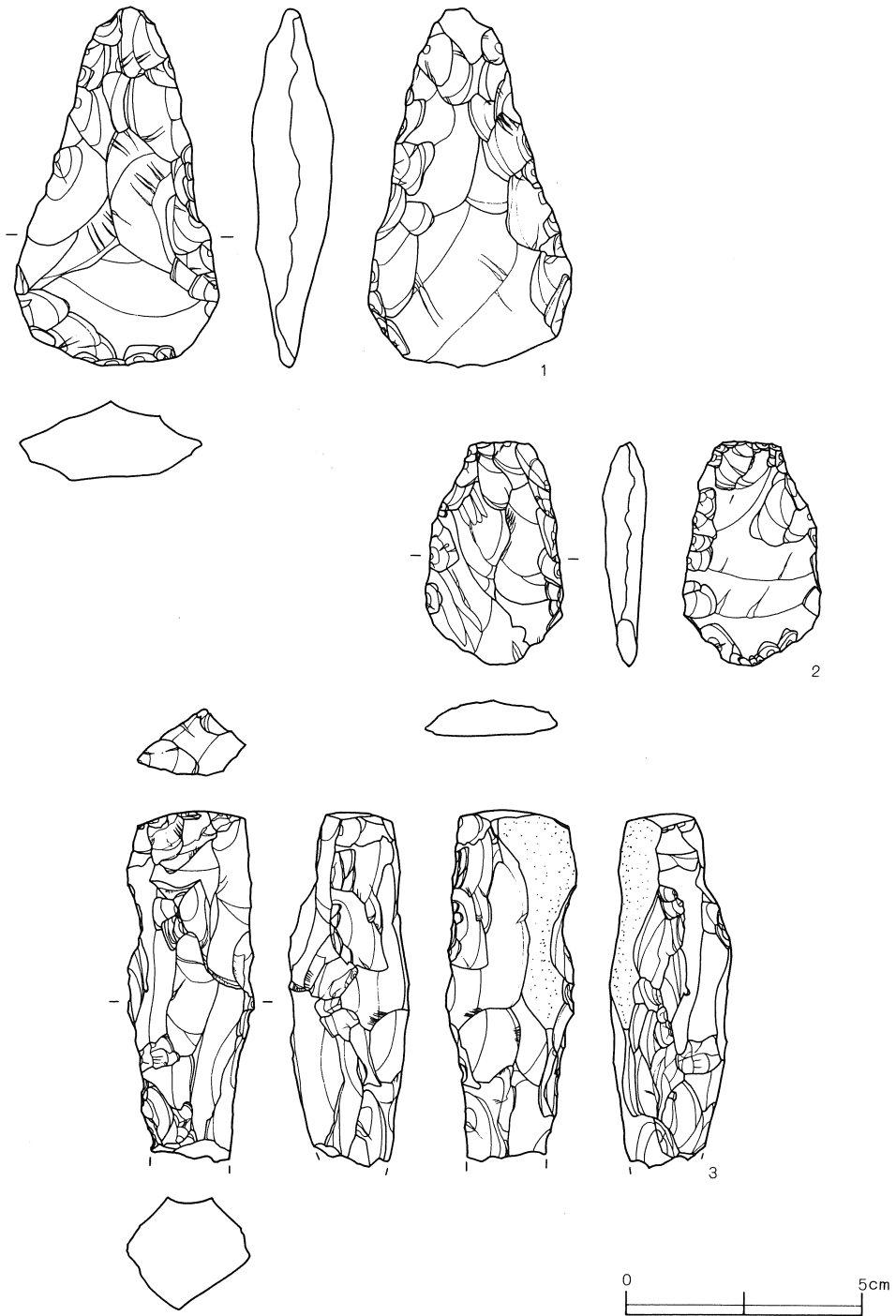
磨石、敲打石、凹み石（第231～241図）

摩耗痕のあるもの、敲打痕のあるもの、凹部を有するものを一括して、本器種に含めた。スクリーントーンは黒色化している部分を示してある。ほとんどのものがほぼ全面摩耗しているため、摩耗痕の範囲は特に図示しなかった。図示したもの以外に、破損品が多量にある。

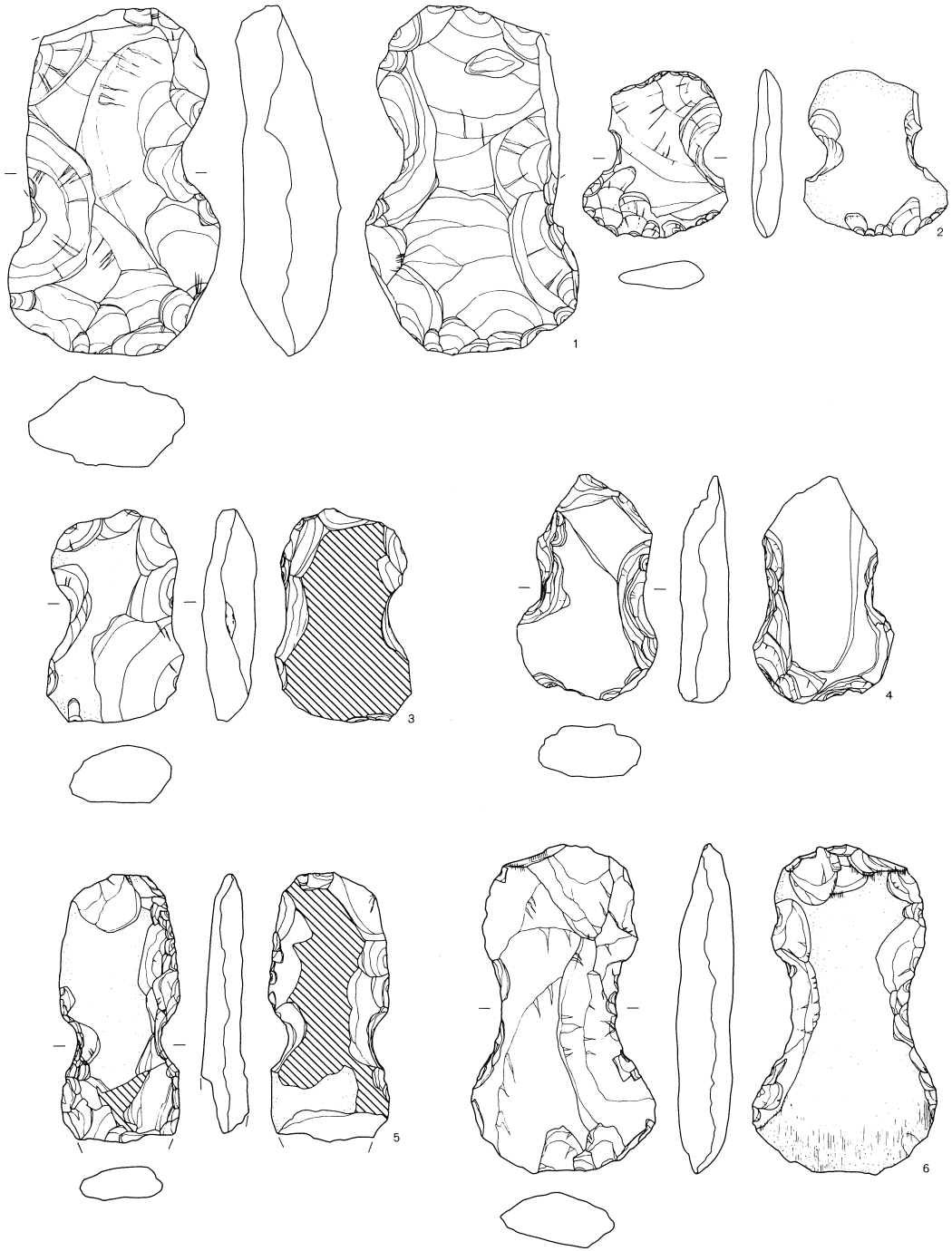
形状は楕円形を呈するものが多く、隅丸方形のものは比較的少ない。敲打痕の位置は長軸の端部、または平坦面の中央部が多く、側面のものはずかである。石材はほとんどが安山岩で、砂岩のものはごくわずかである（第239図7）。



第217図 B区出土石器・石製品（1）



第218図 B区出土石器・石製品(2)



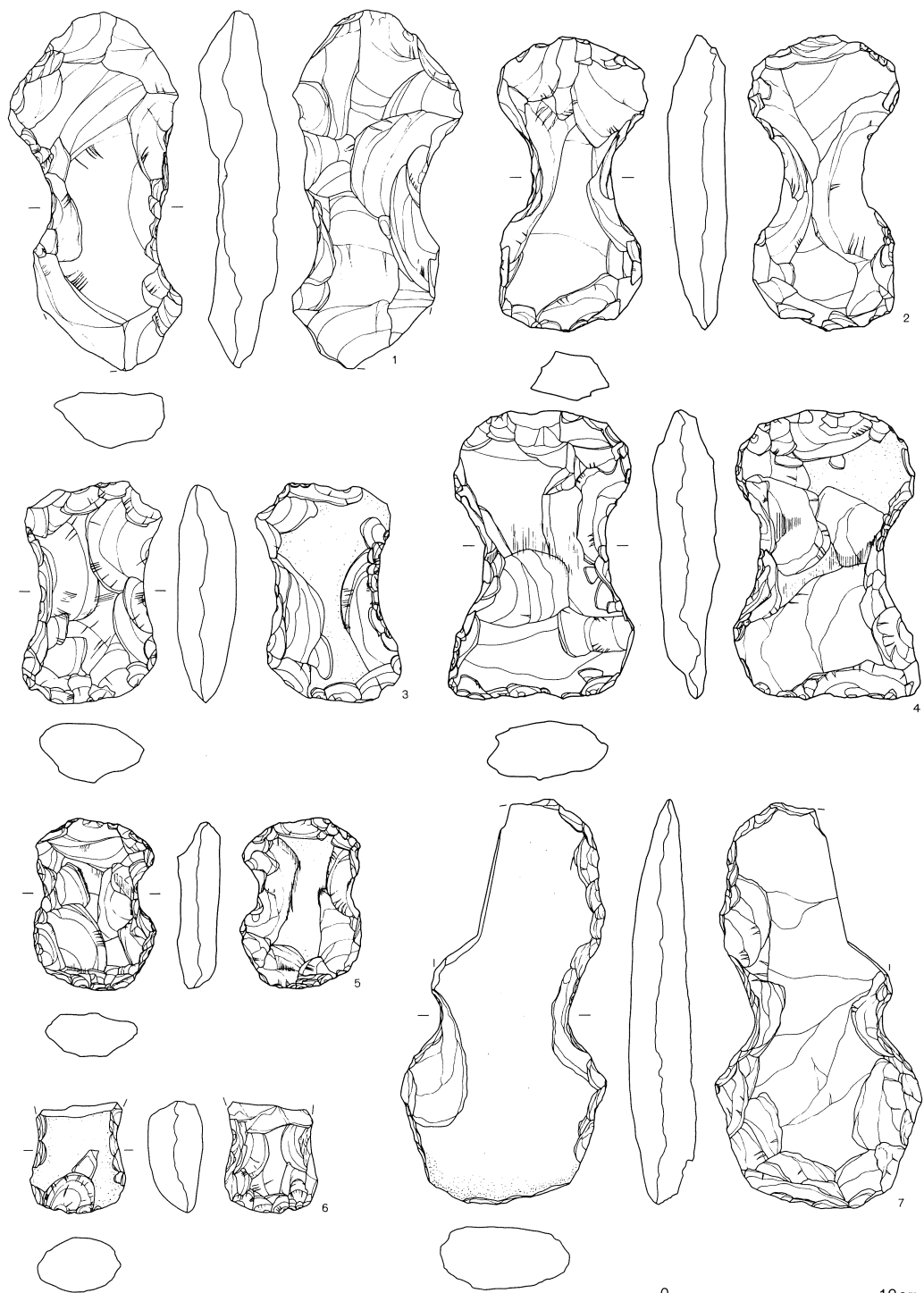
第219図 B区出土石器・石製品(3)



第220図 B区出土石器・石製品(4)



第221図 B区出土石器・石製品（5）



第222図 B区出土石器・石製品(6)



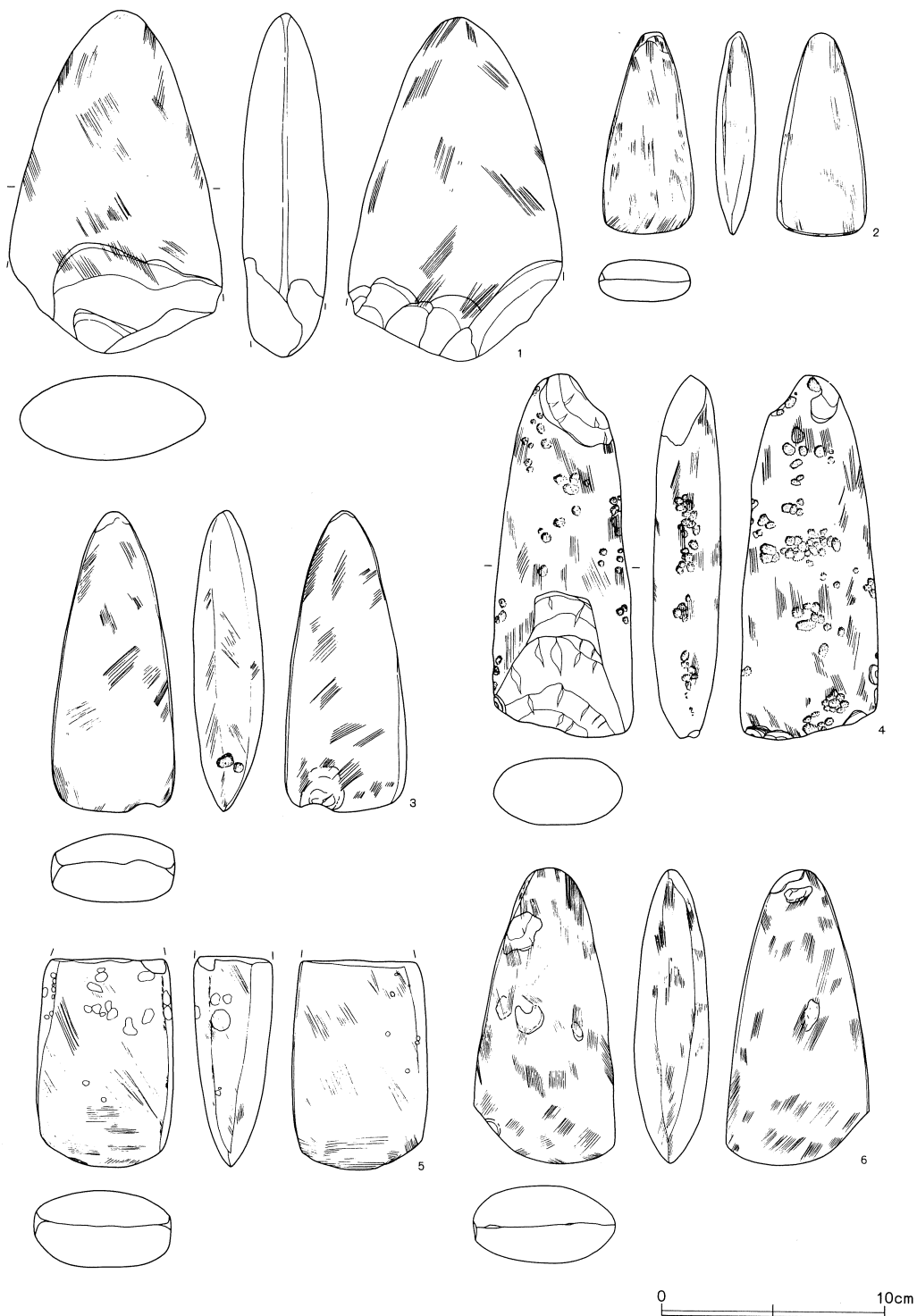
第223図 B区出土石器・石製品(7)



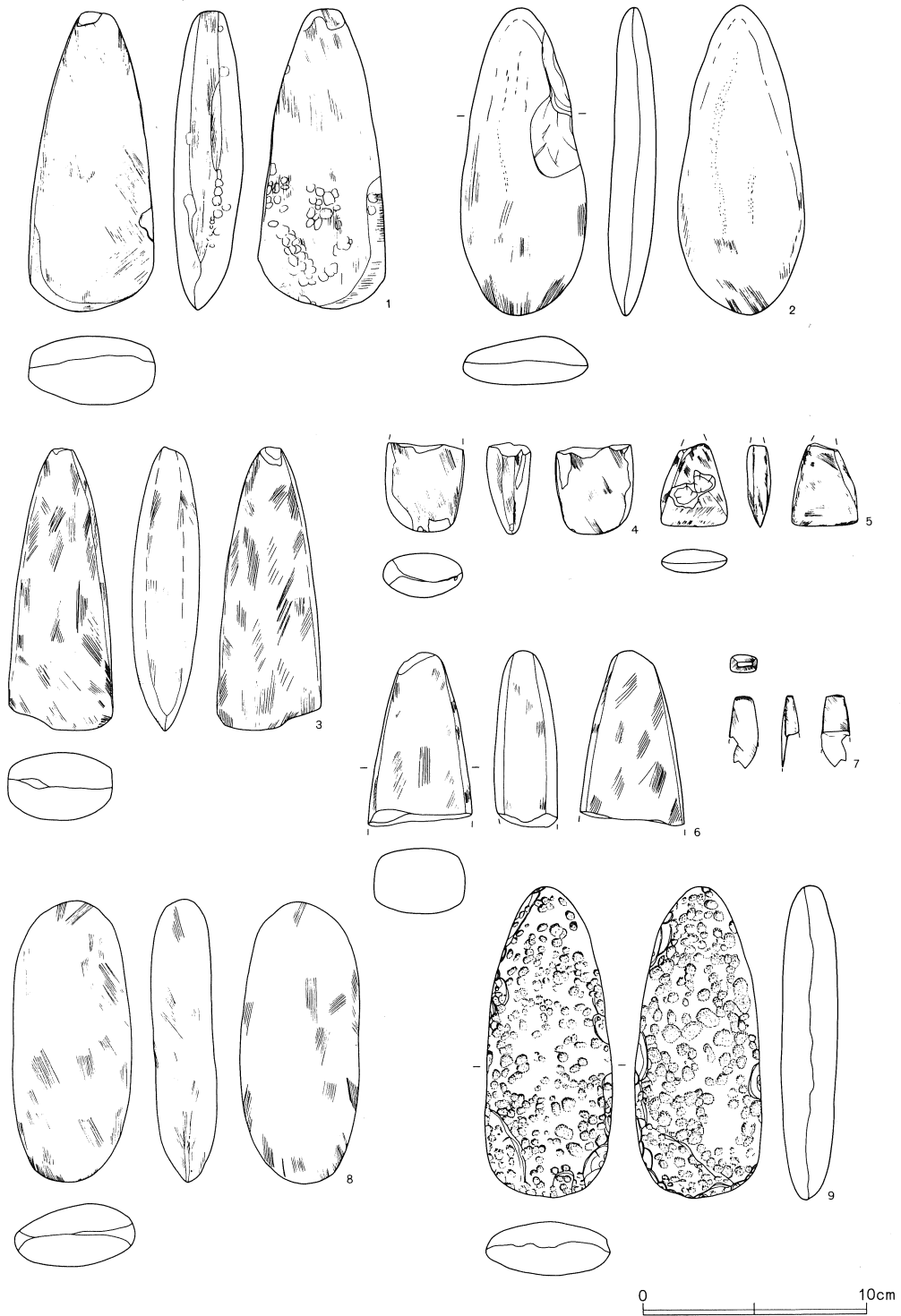
第224図 B区出土石器・石製品(8)



第225図 B区出土石器・石製品(9)



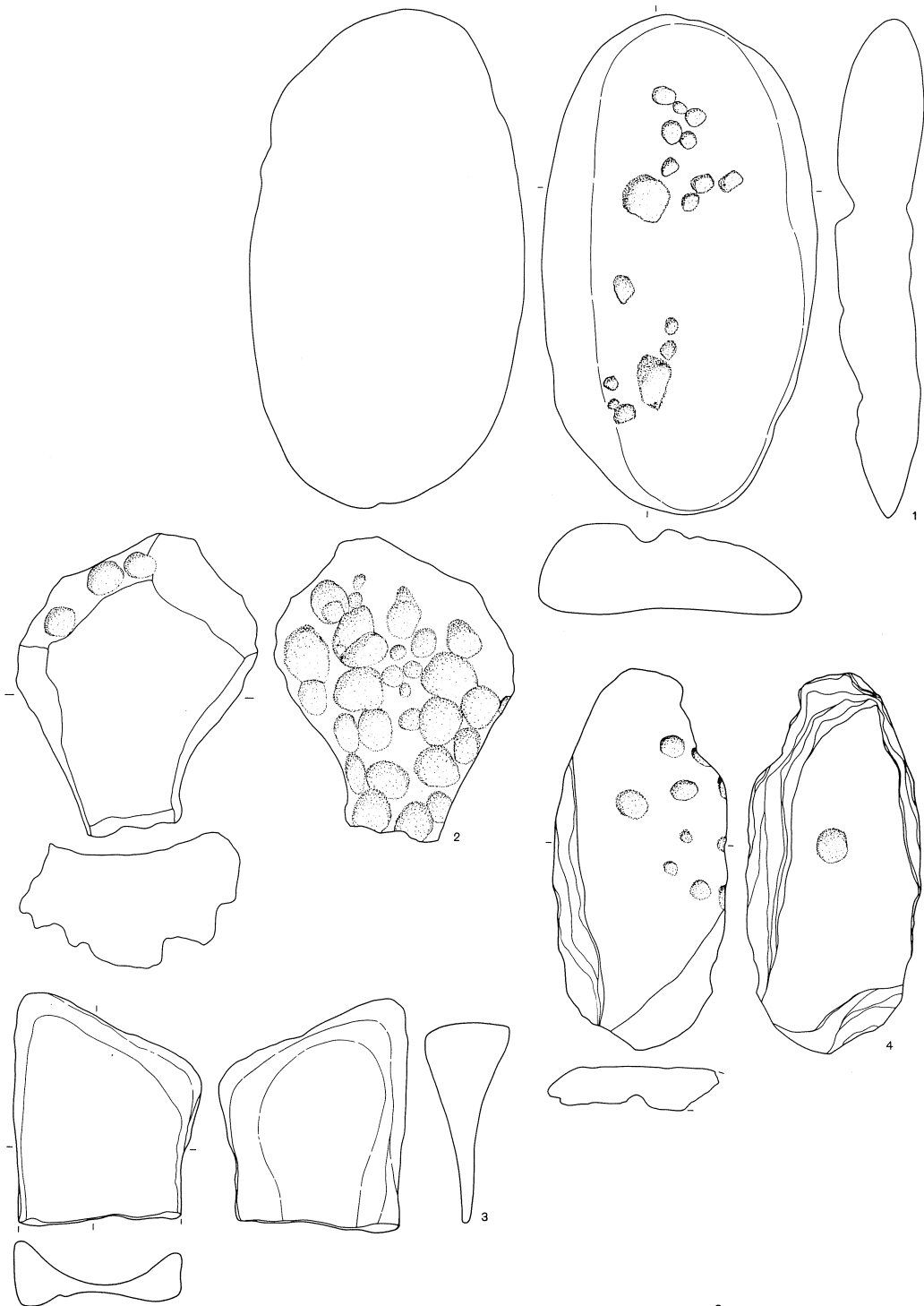
第226図 B区出土石器・石製品 (10)



第227図 B区出土石器・石製品 (11)



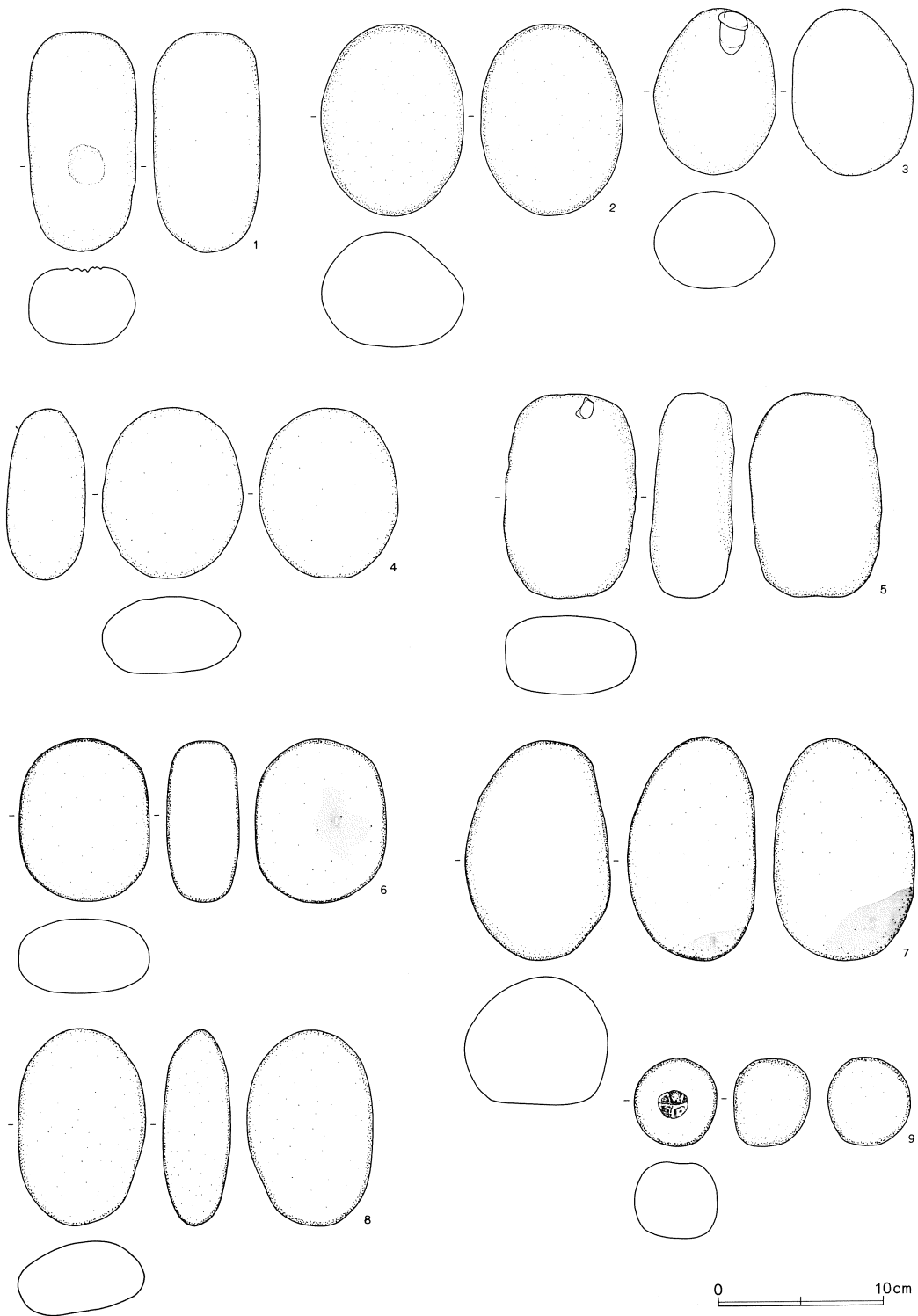
第228図 B区出土石器・石製品 (12)



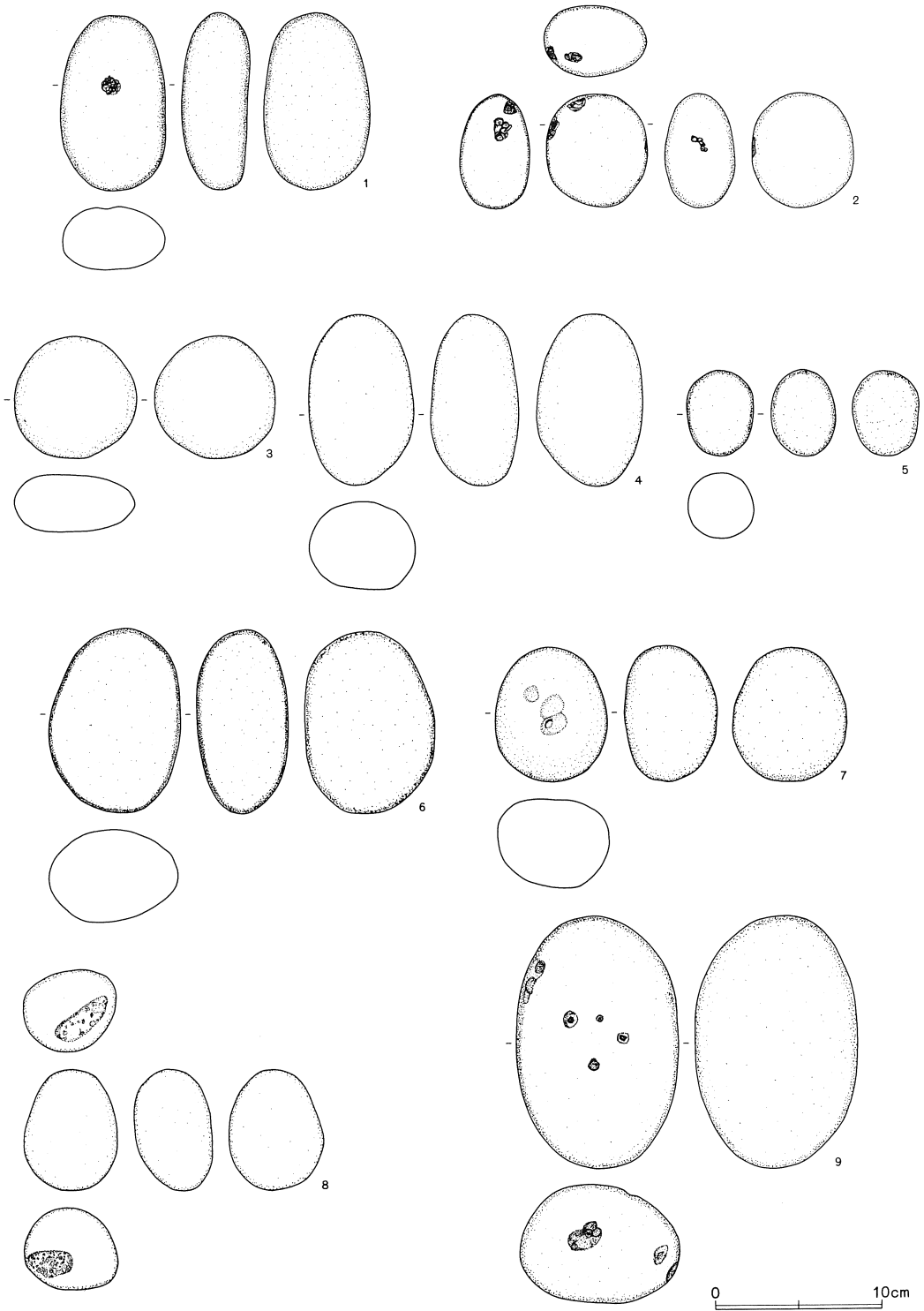
第229図 B区出土石器・石製品 (13)



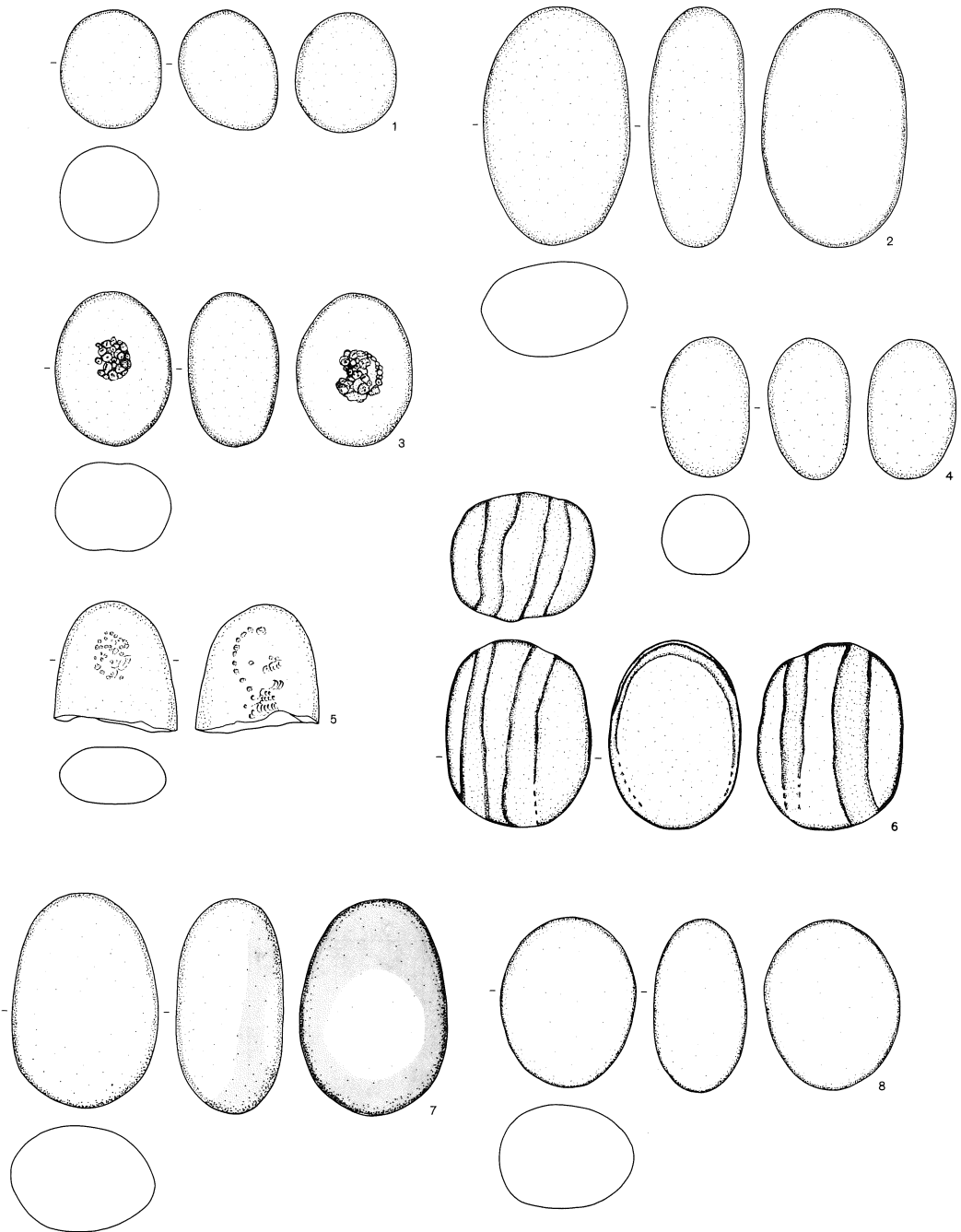
第230図 B区出土石器・石製品 (14)



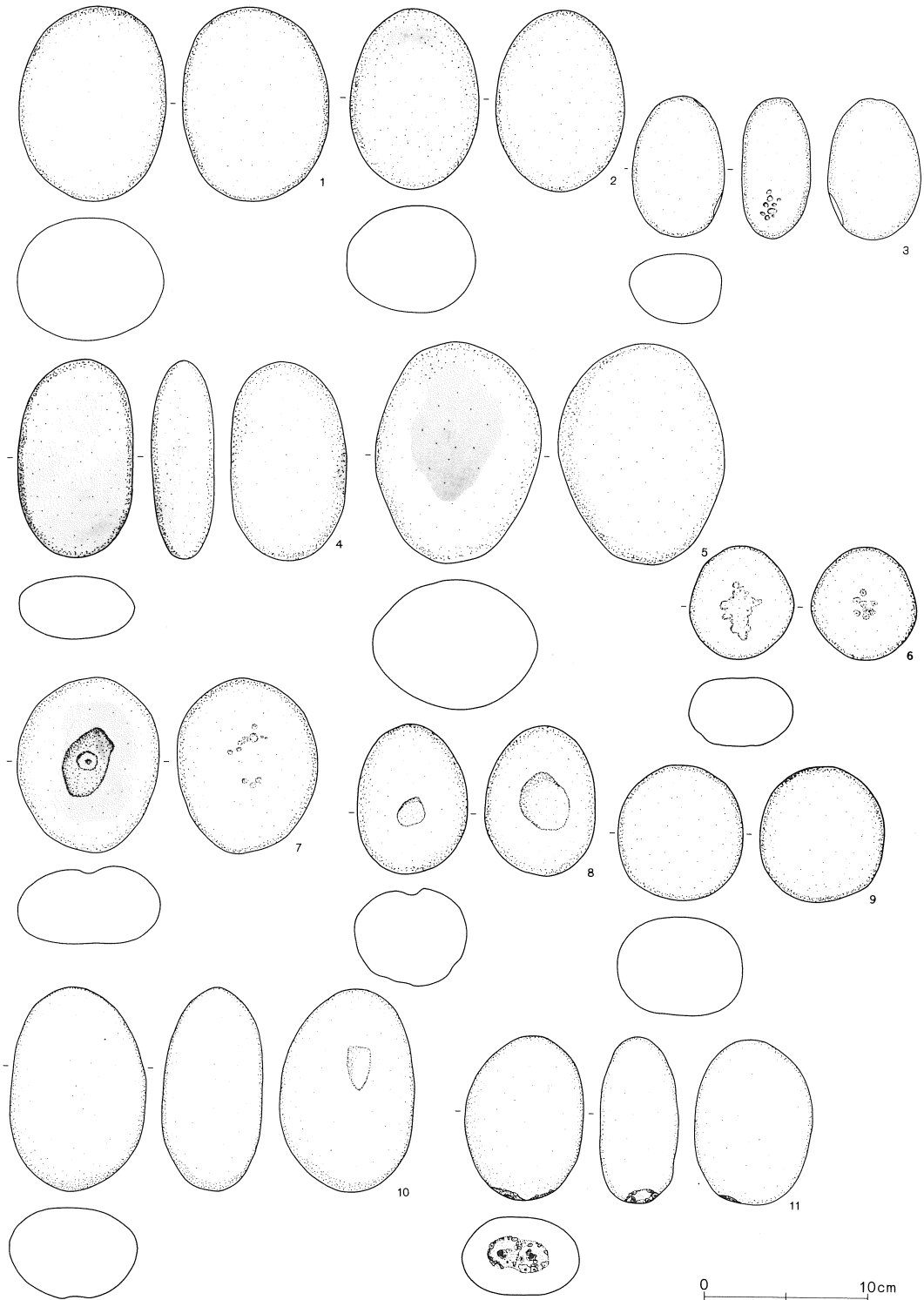
第231図 B区出土石器・石製品 (15)



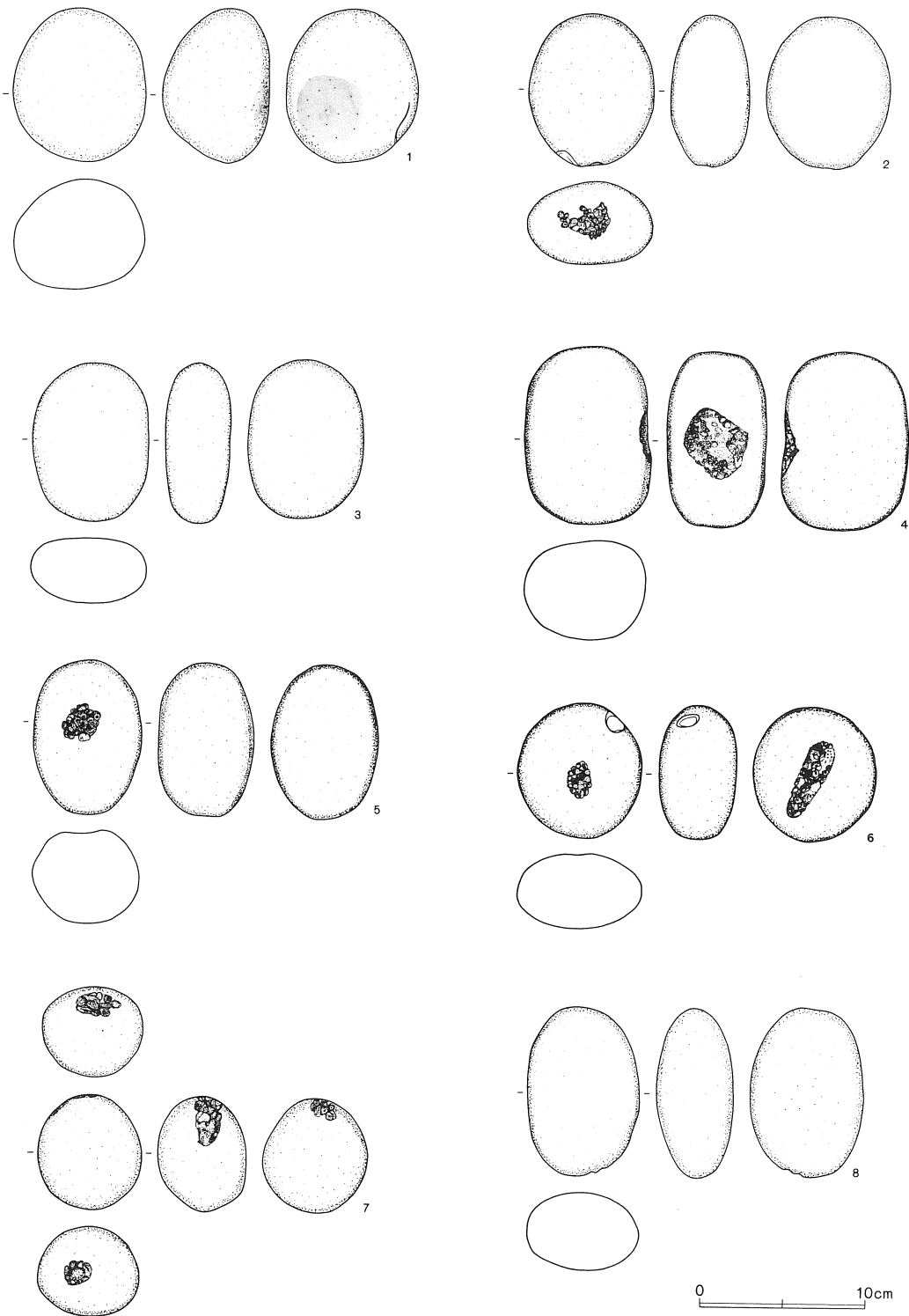
第232図 B区出土石器・石製品 (16)



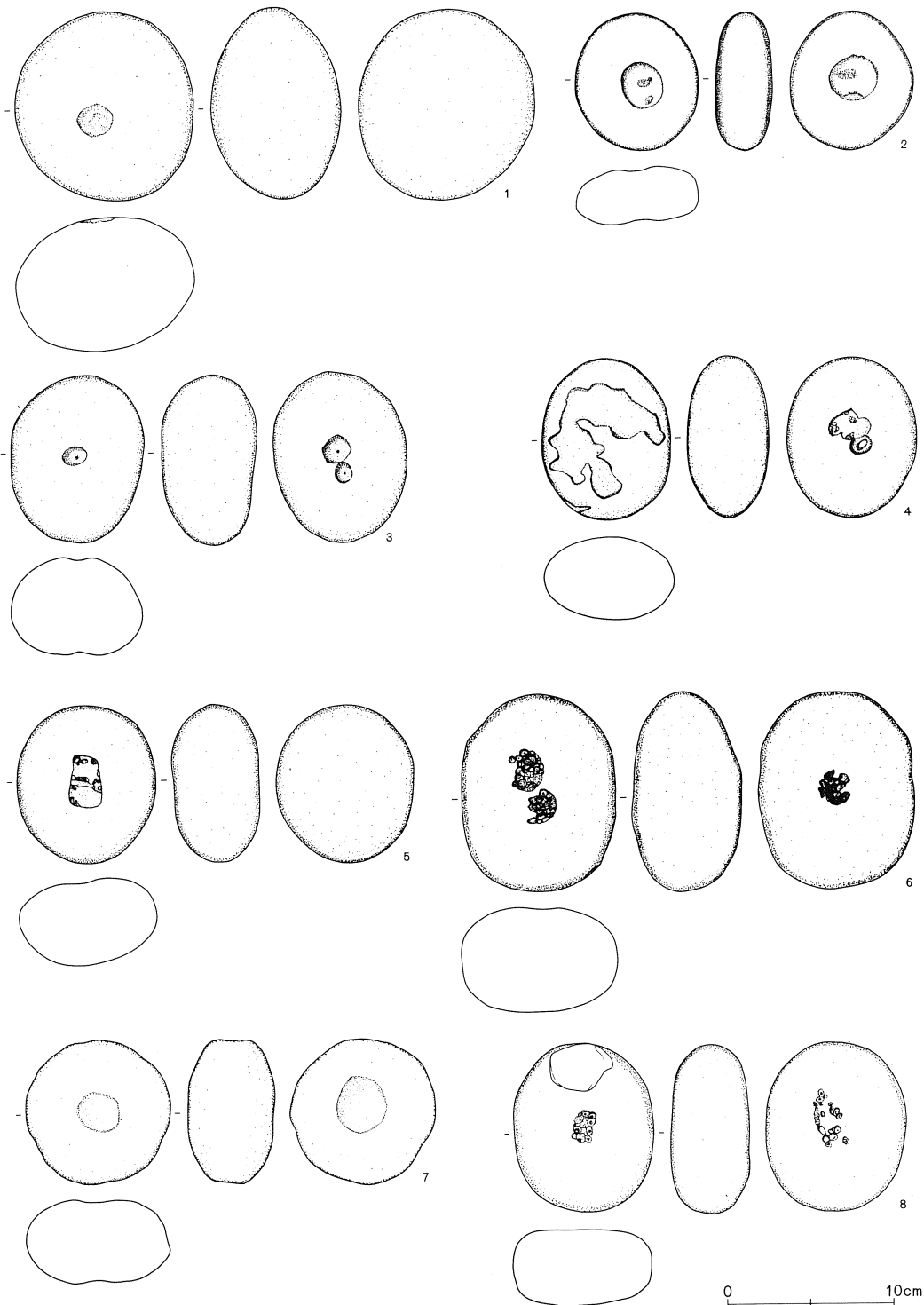
第233図 B区出土石器・石製品 (17)



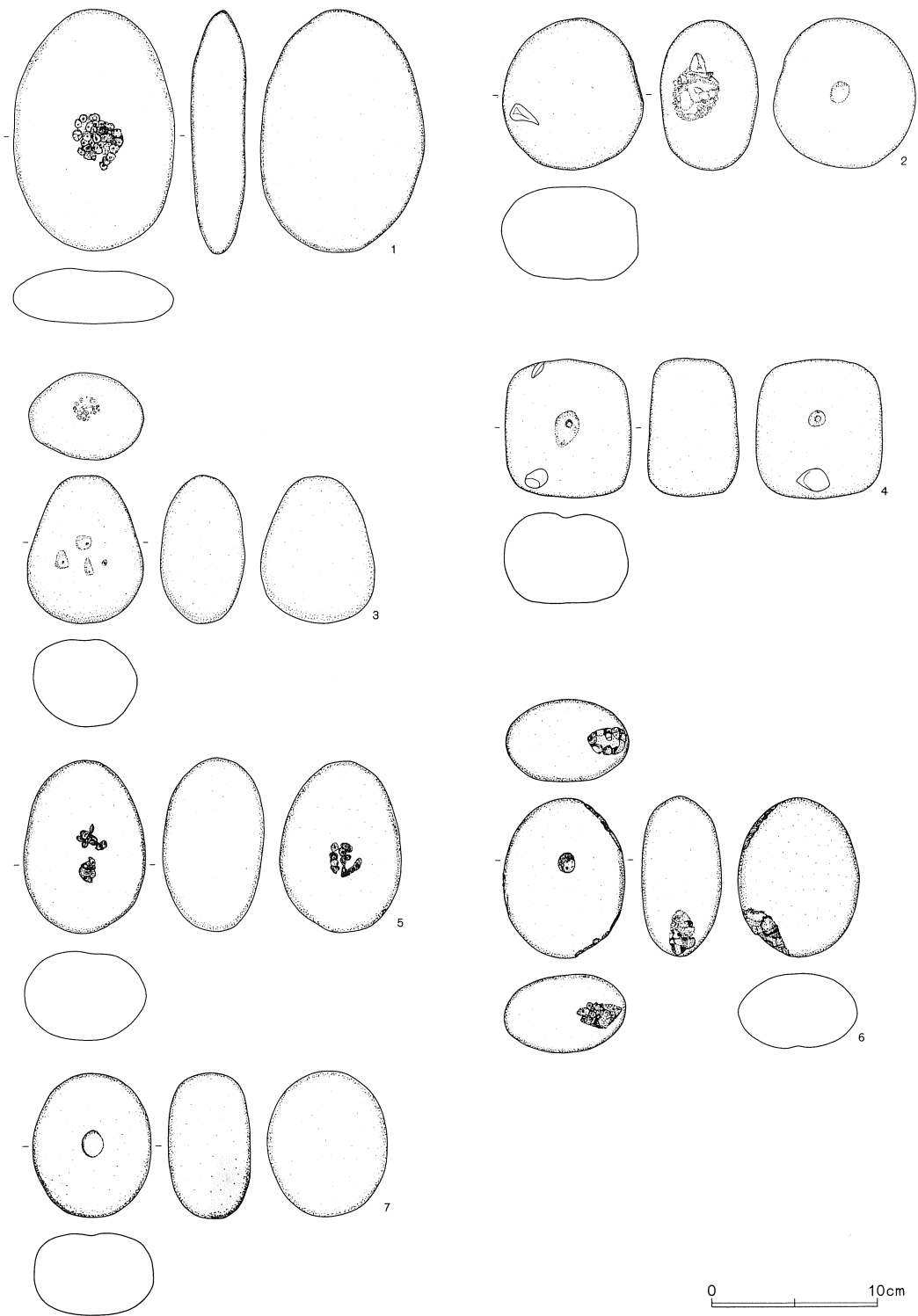
第234図 B区出土石器・石製品 (18)



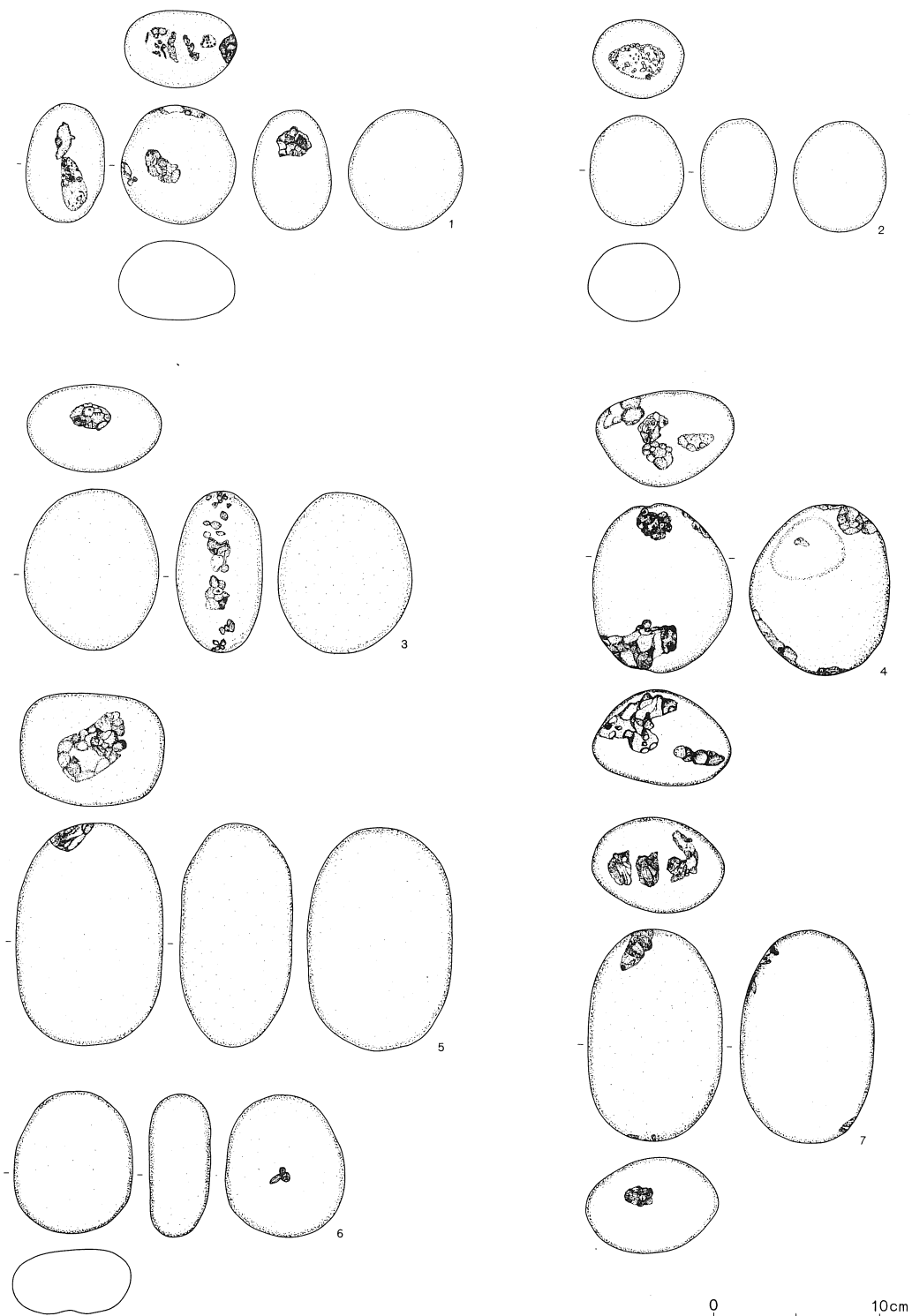
第235図 B区出土石器・石製品 (19)



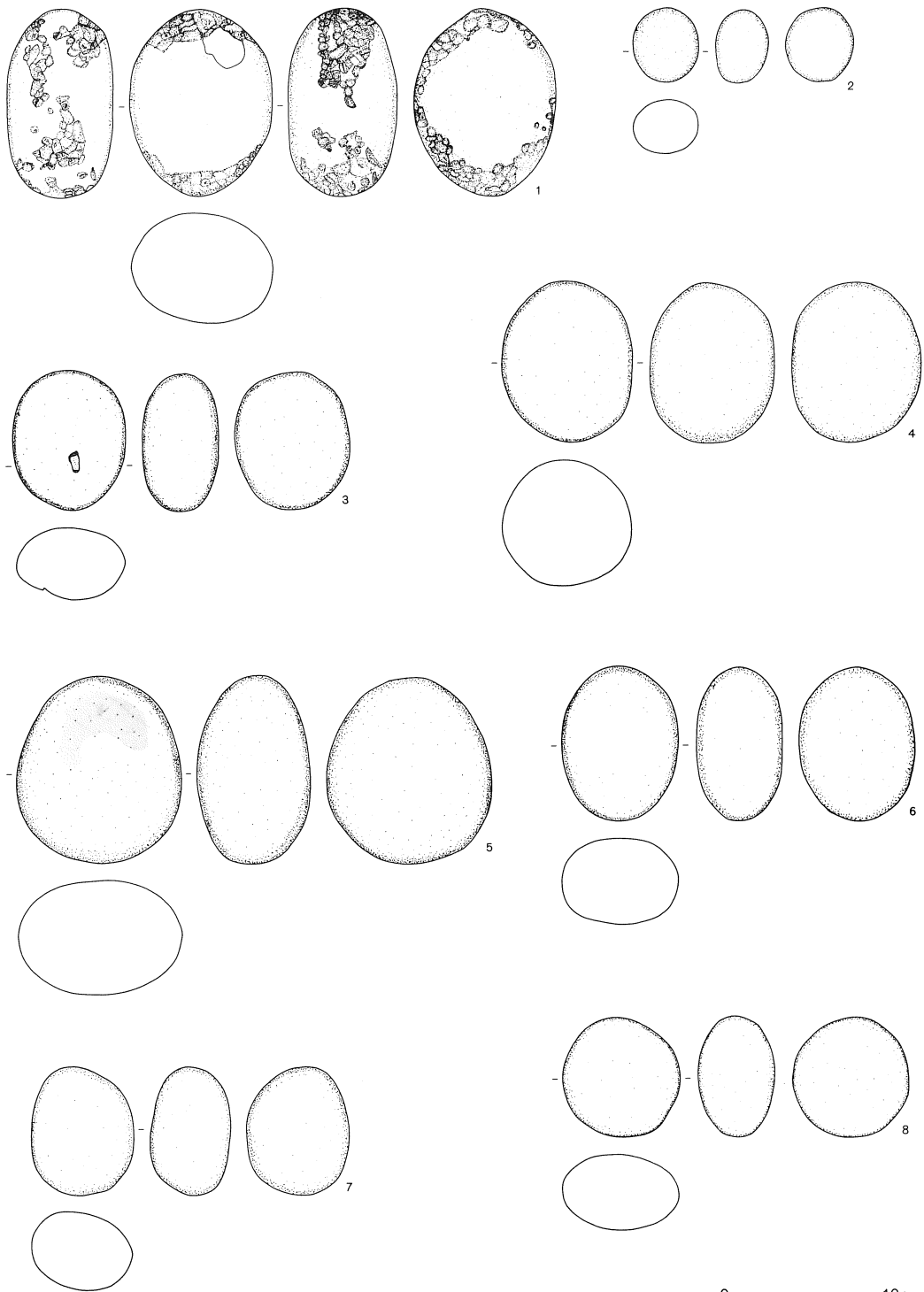
第236図 B区出土石器・石製品 (20)



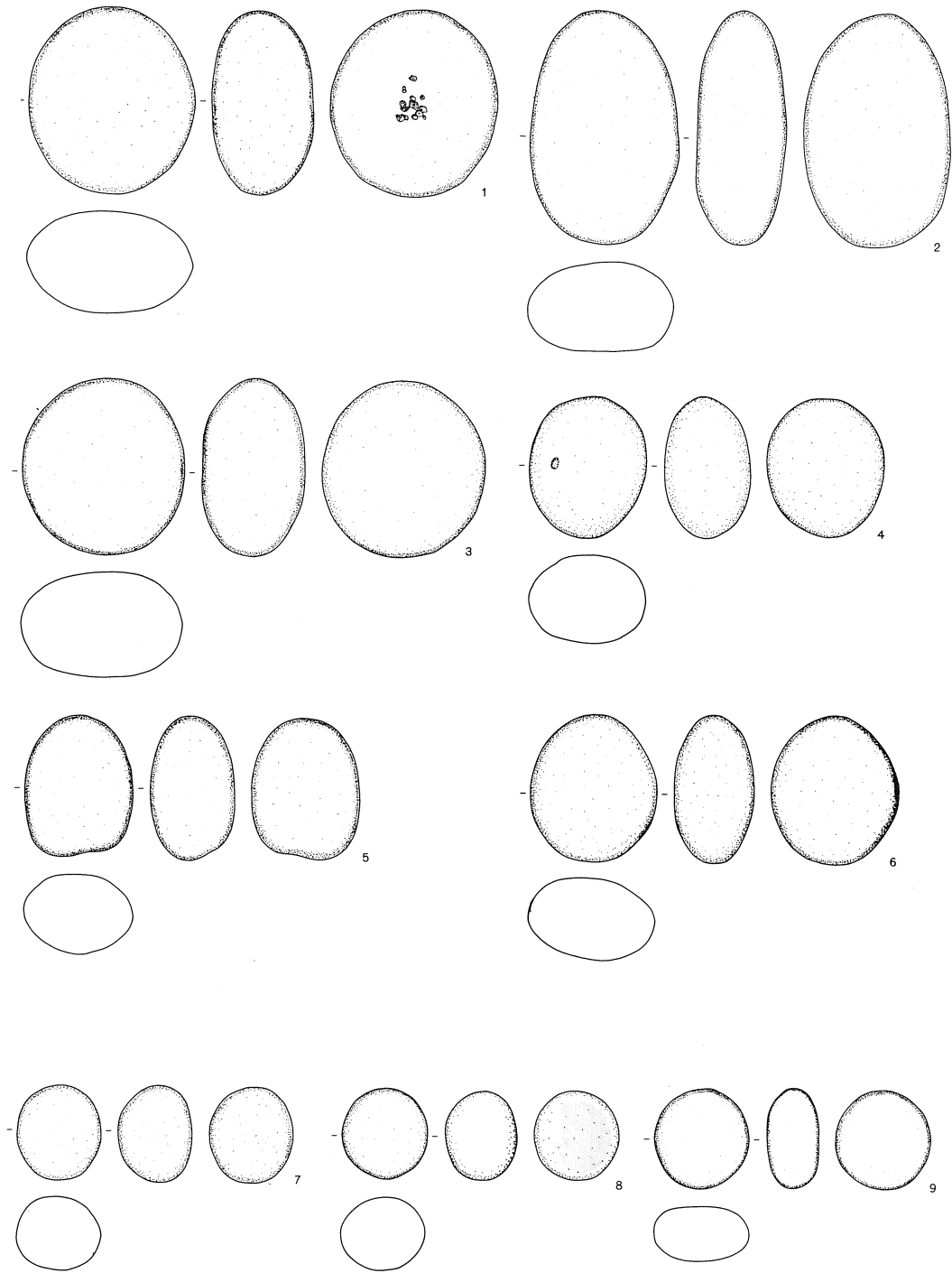
第237図 B区出土石器・石製品(21)



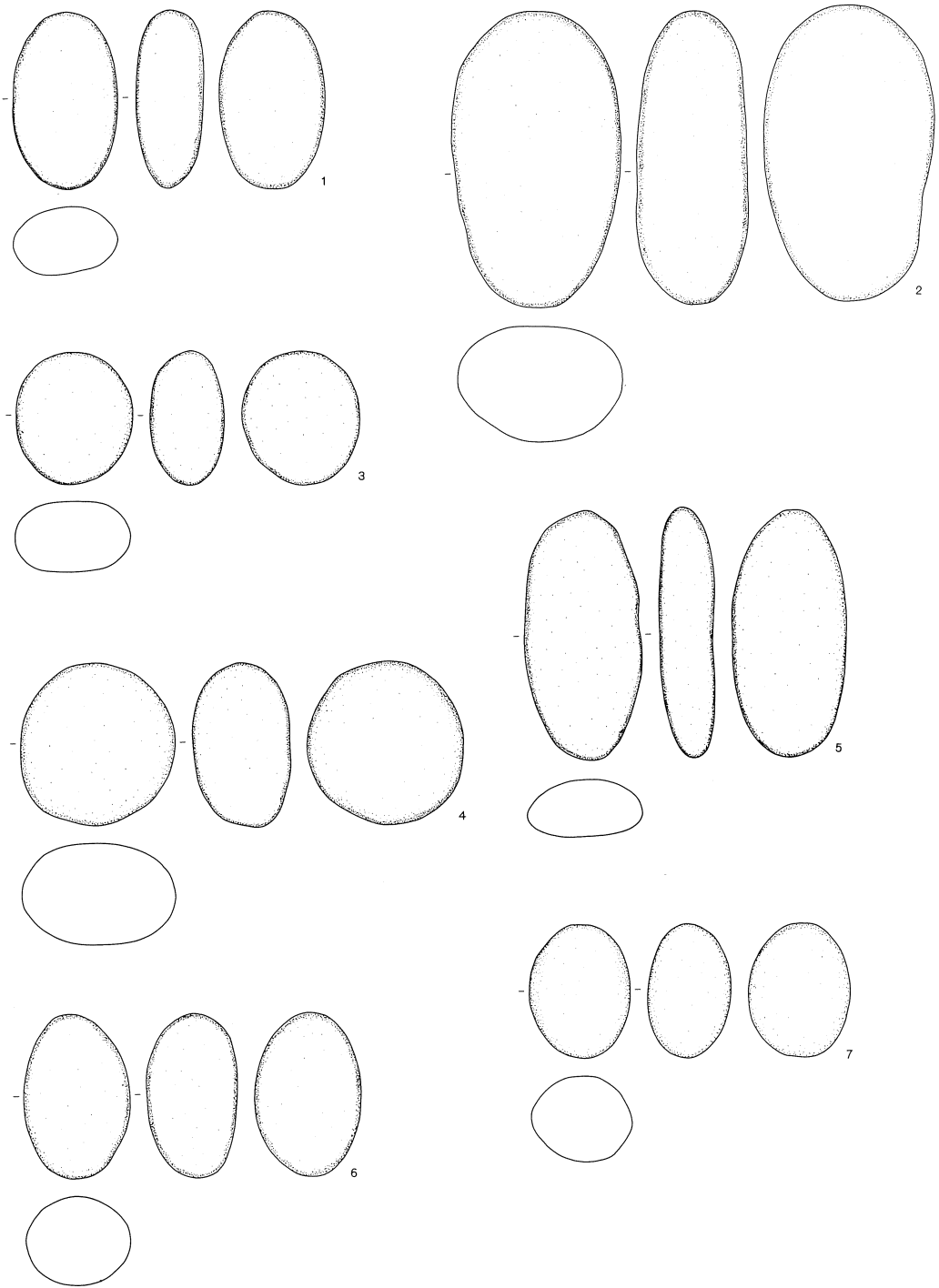
第238図 B区出土石器・石製品 (22)



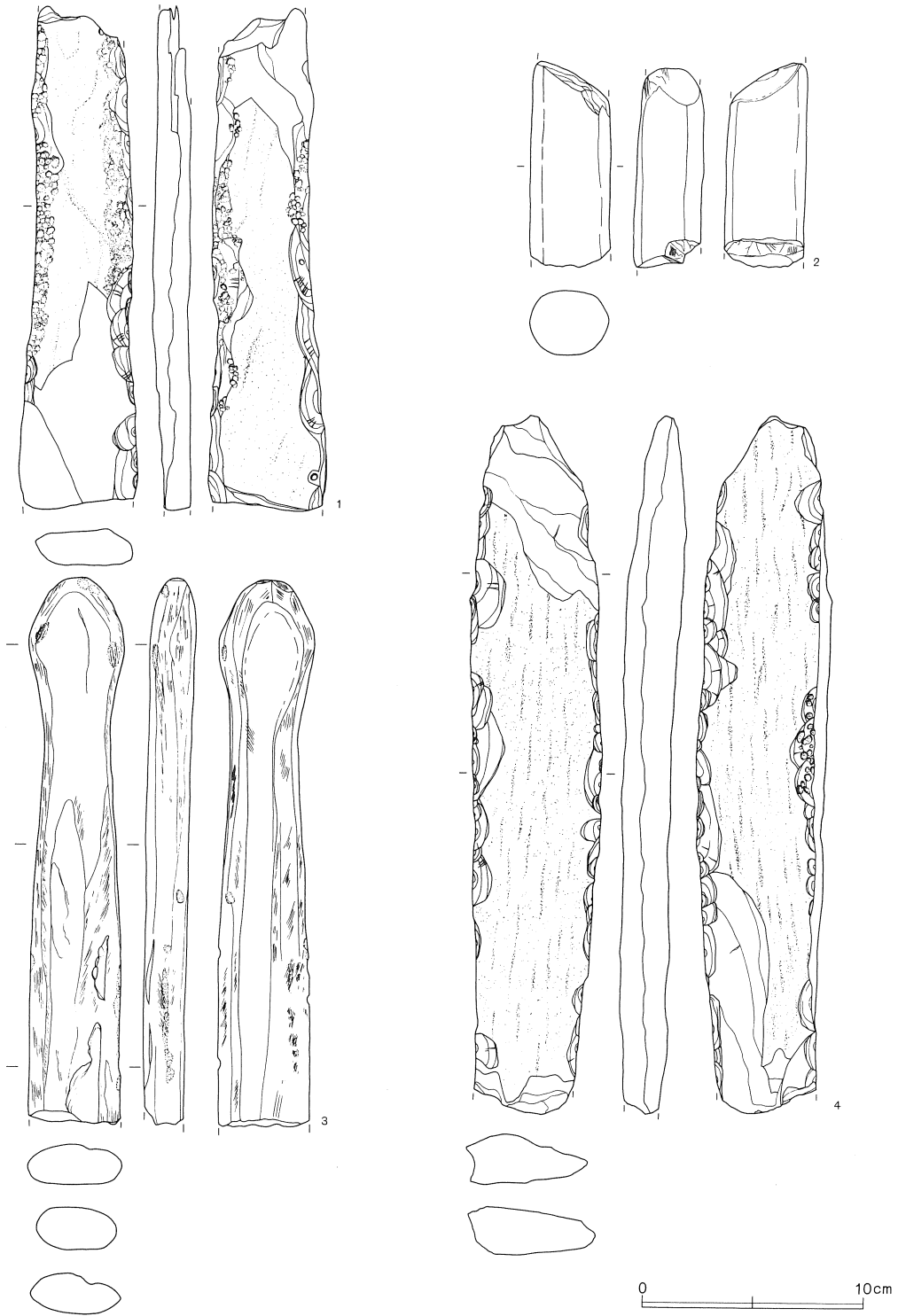
第239図 B区出土石器・石製品 (23)



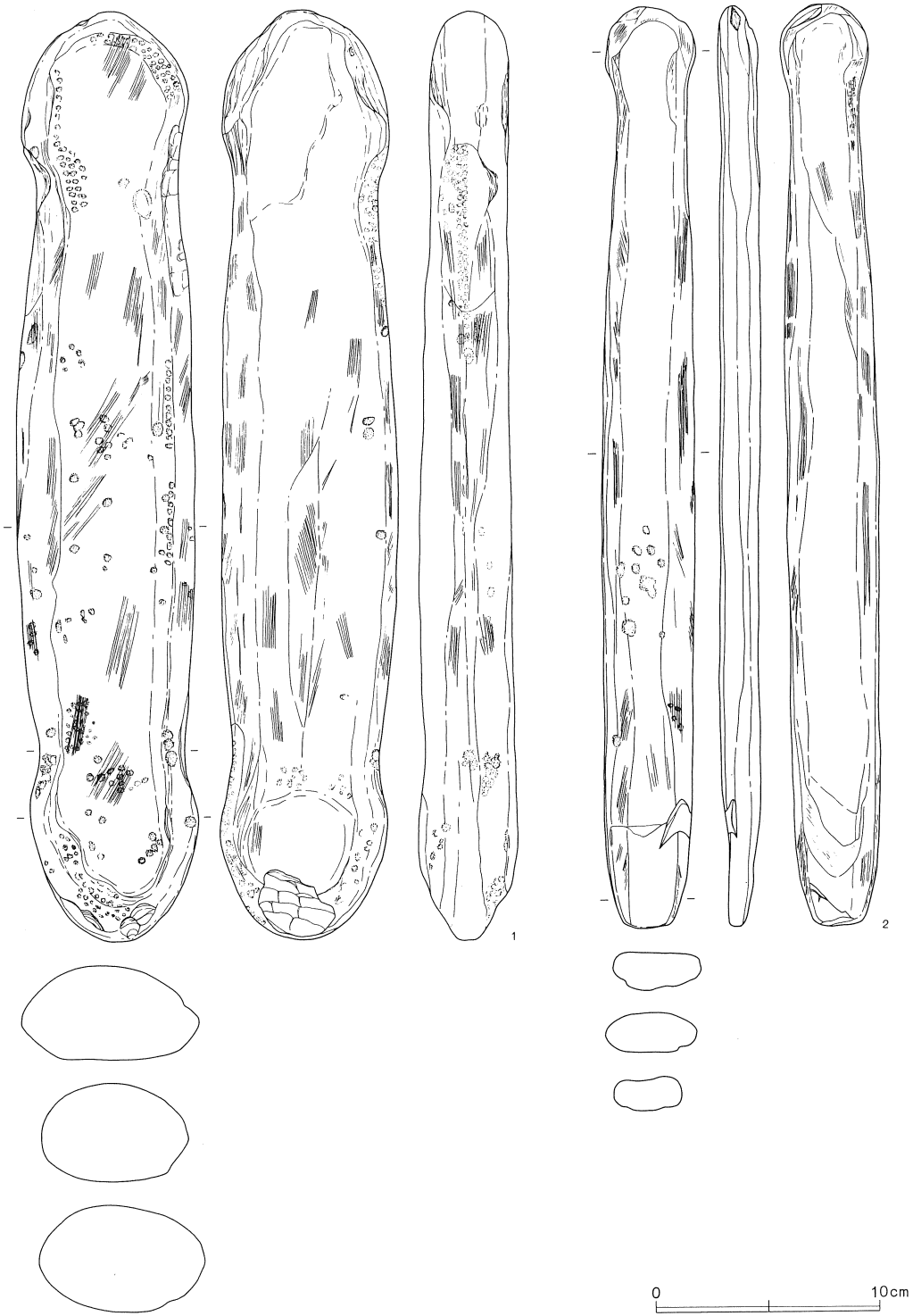
第240図 B区出土石器・石製品 (24)



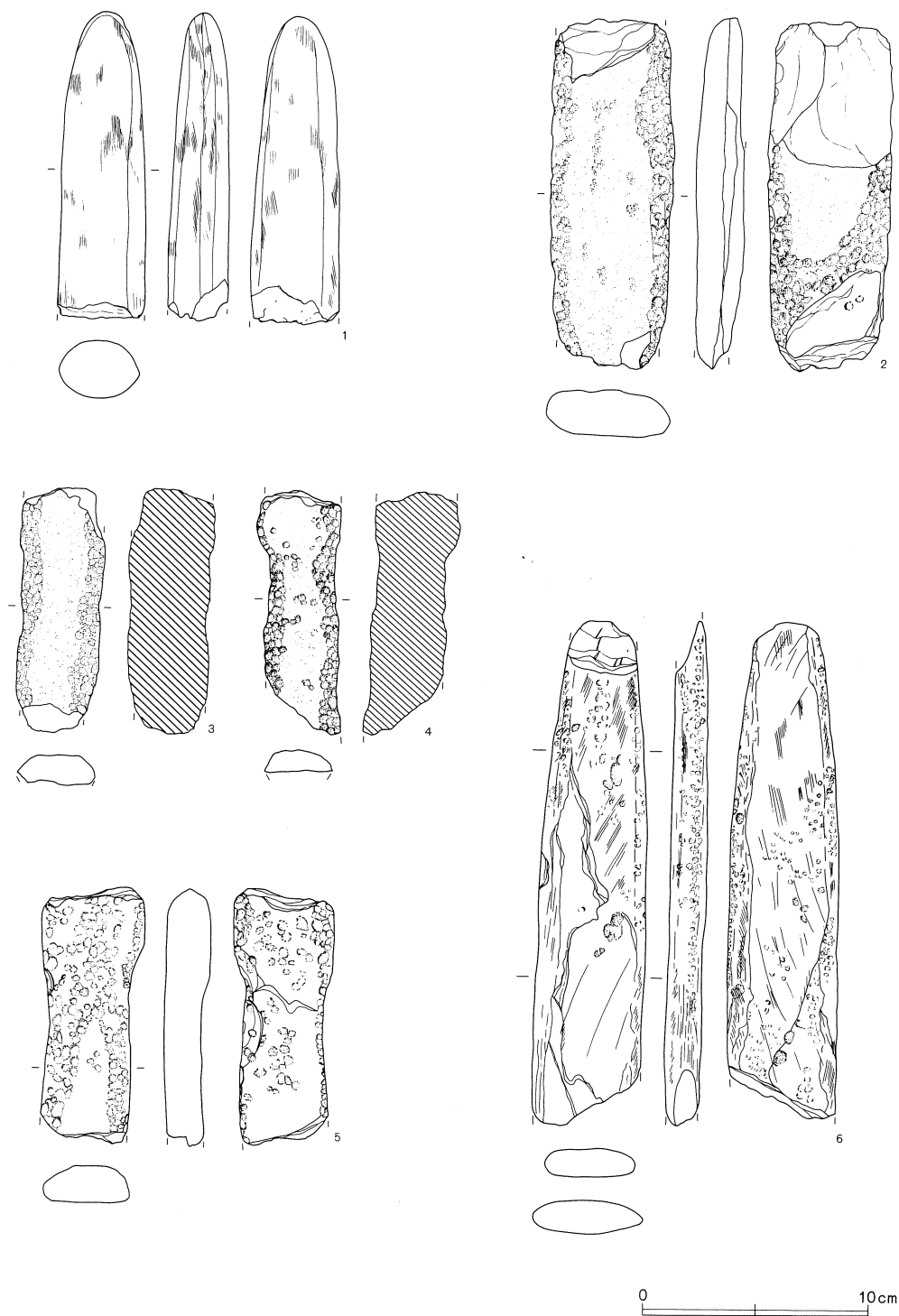
第241図 B区出土石器・石製品 (25)



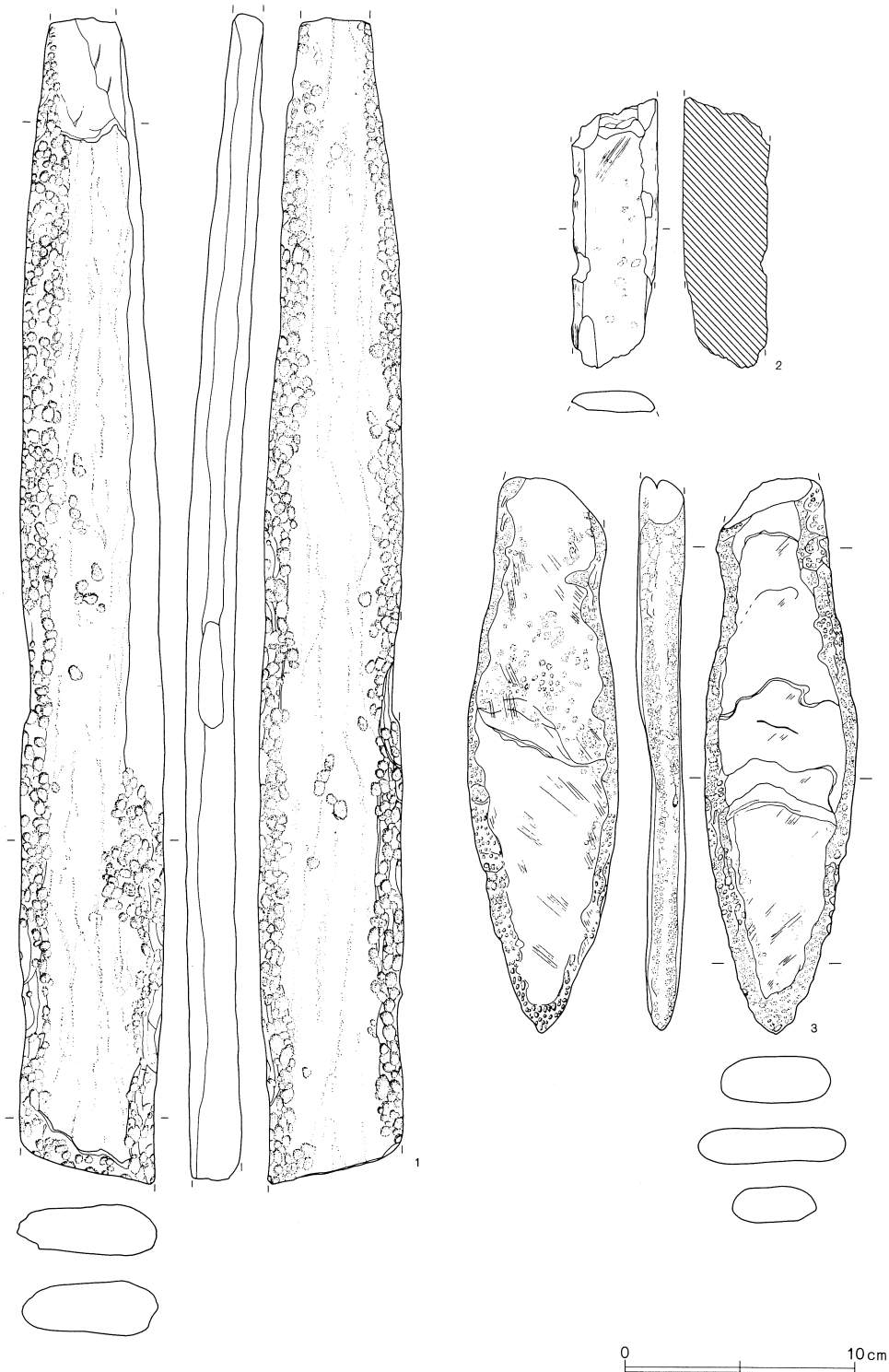
第242図 B区出土石器・石製品 (26)



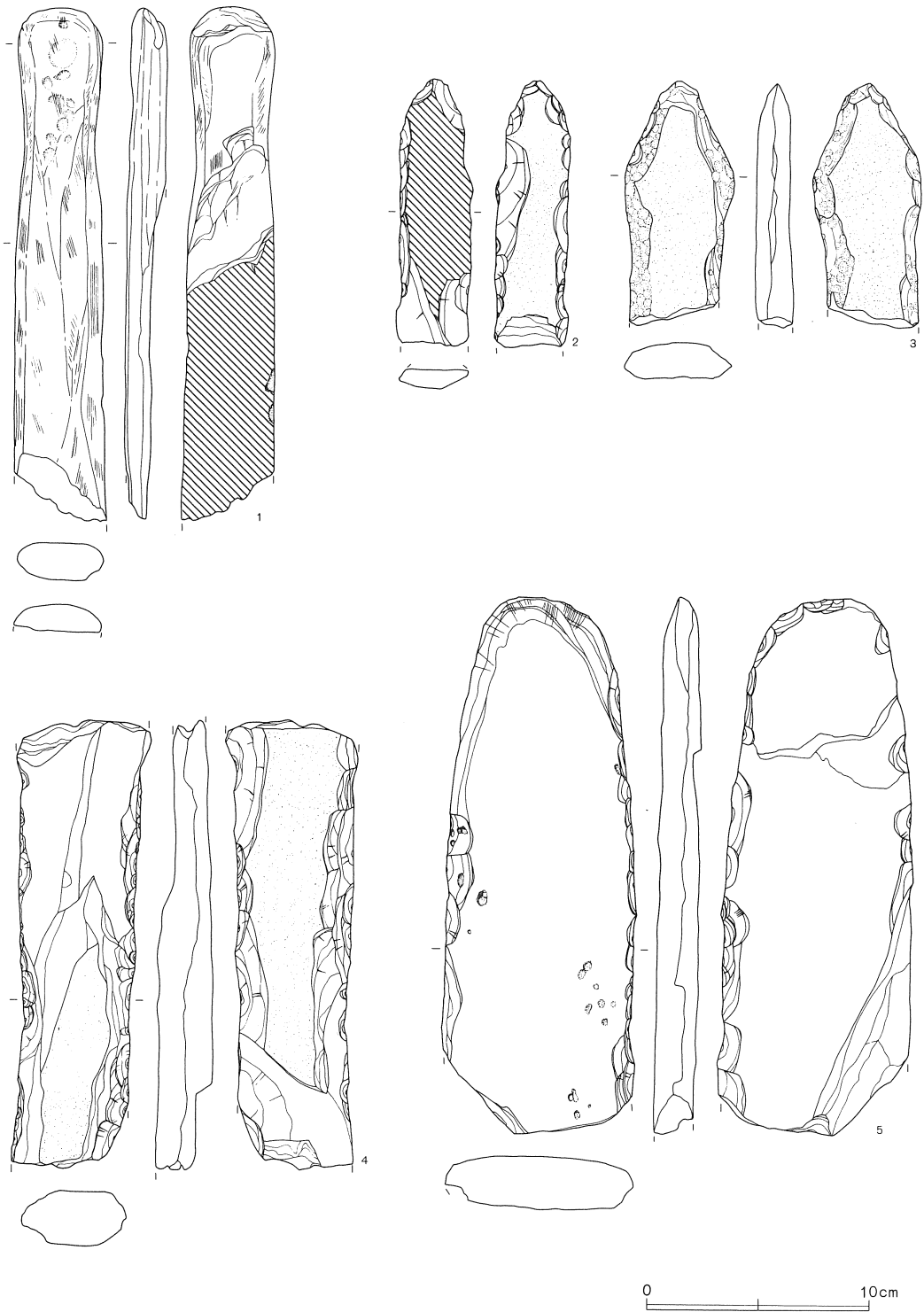
第243図 B区出土石器・石製品 (27)



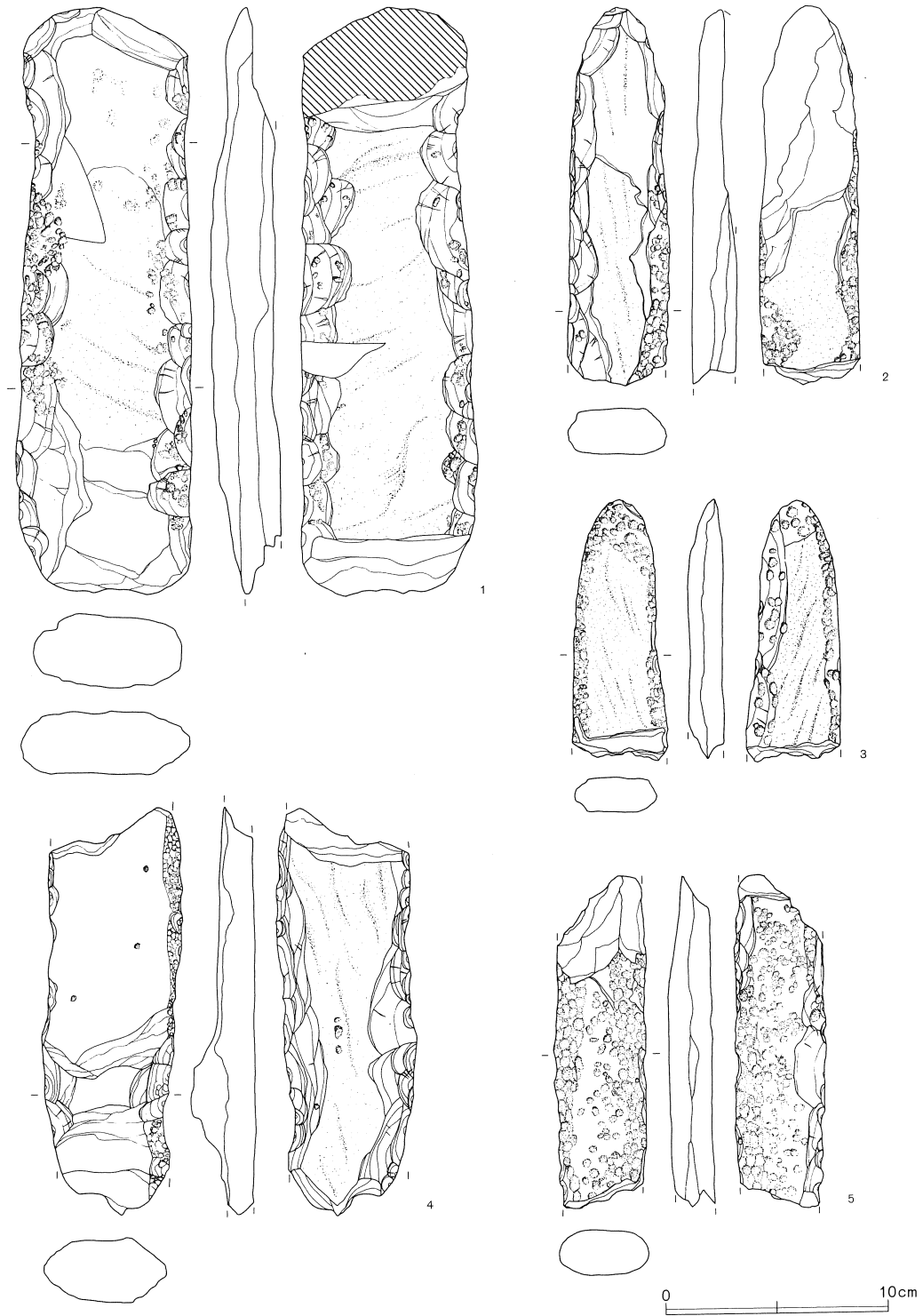
第244図 B区出土石器・石製品(28)



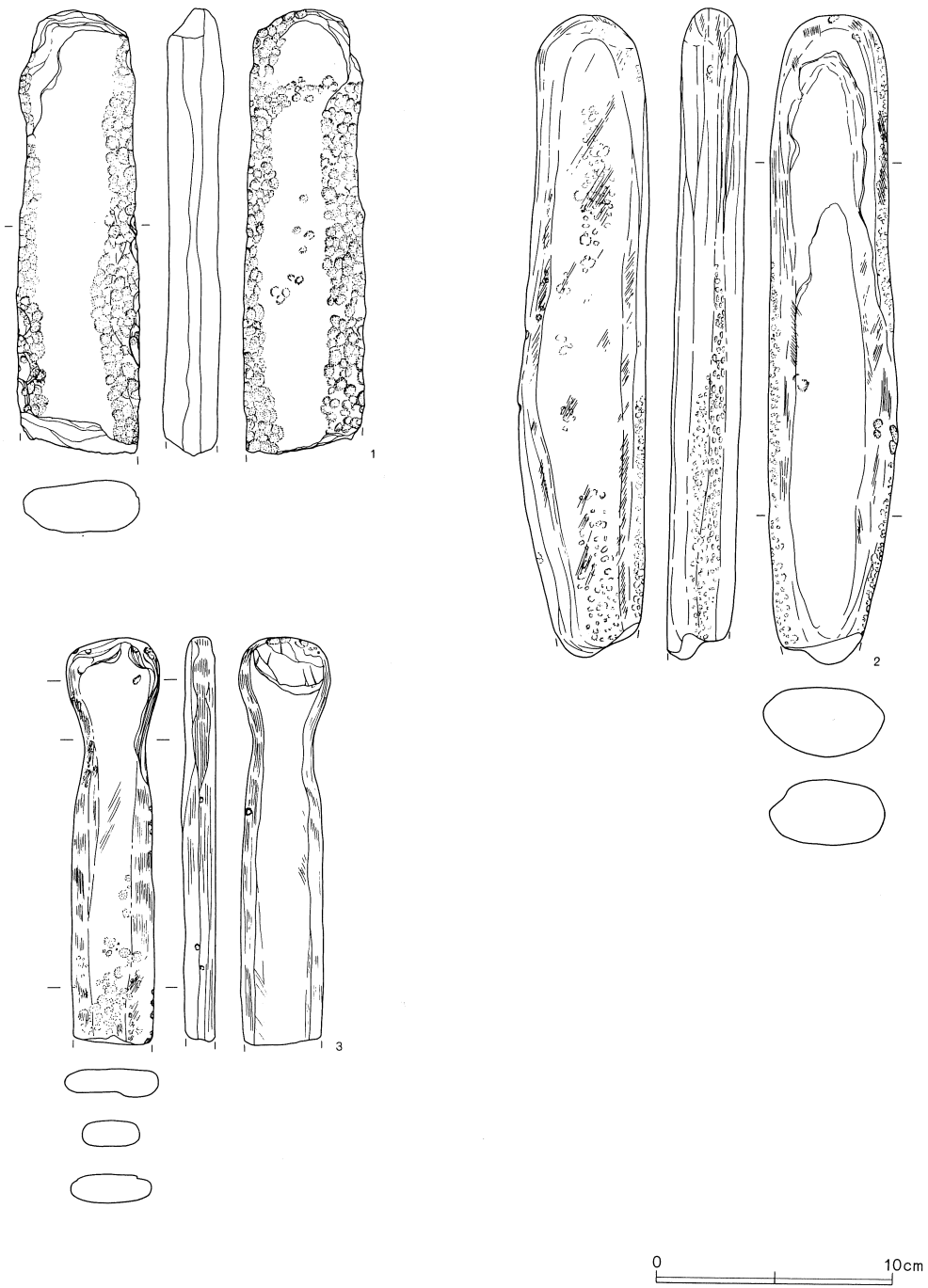
第245図 B区出土石器・石製品 (29)



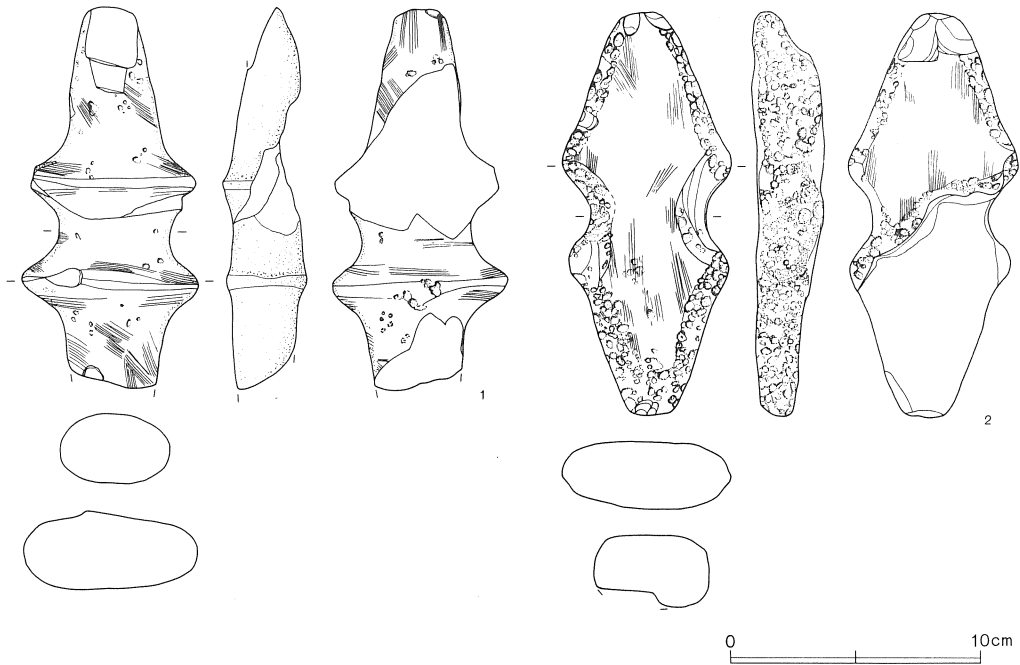
第246図 B区出土石器・石製品 (30)



第247図 B区出土石器・石製品 (31)



第248図 B区出土石器・石製品 (32)



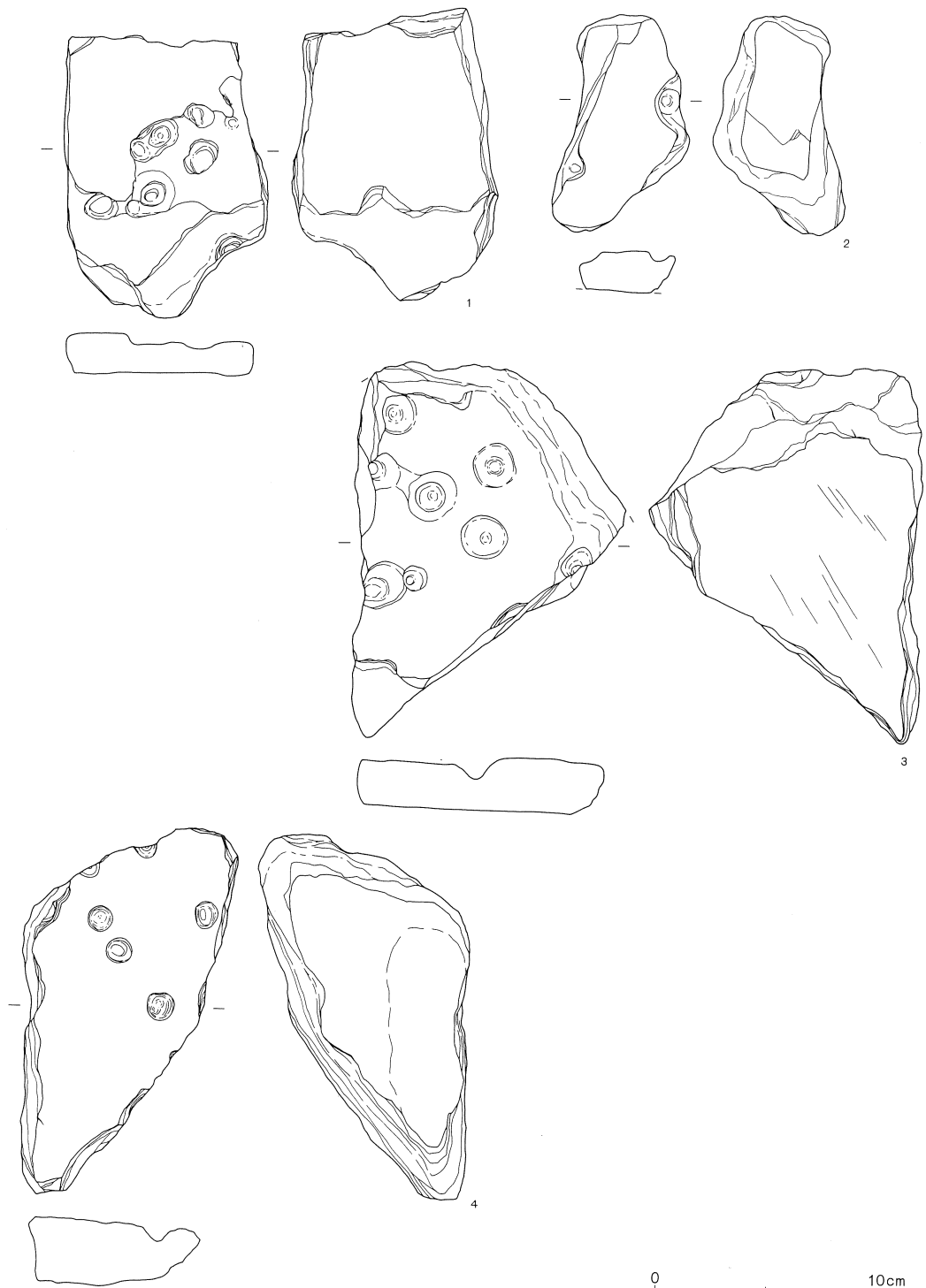
第249図 B区出土石器・石製品(33)

石剣・石棒(第242～248図)

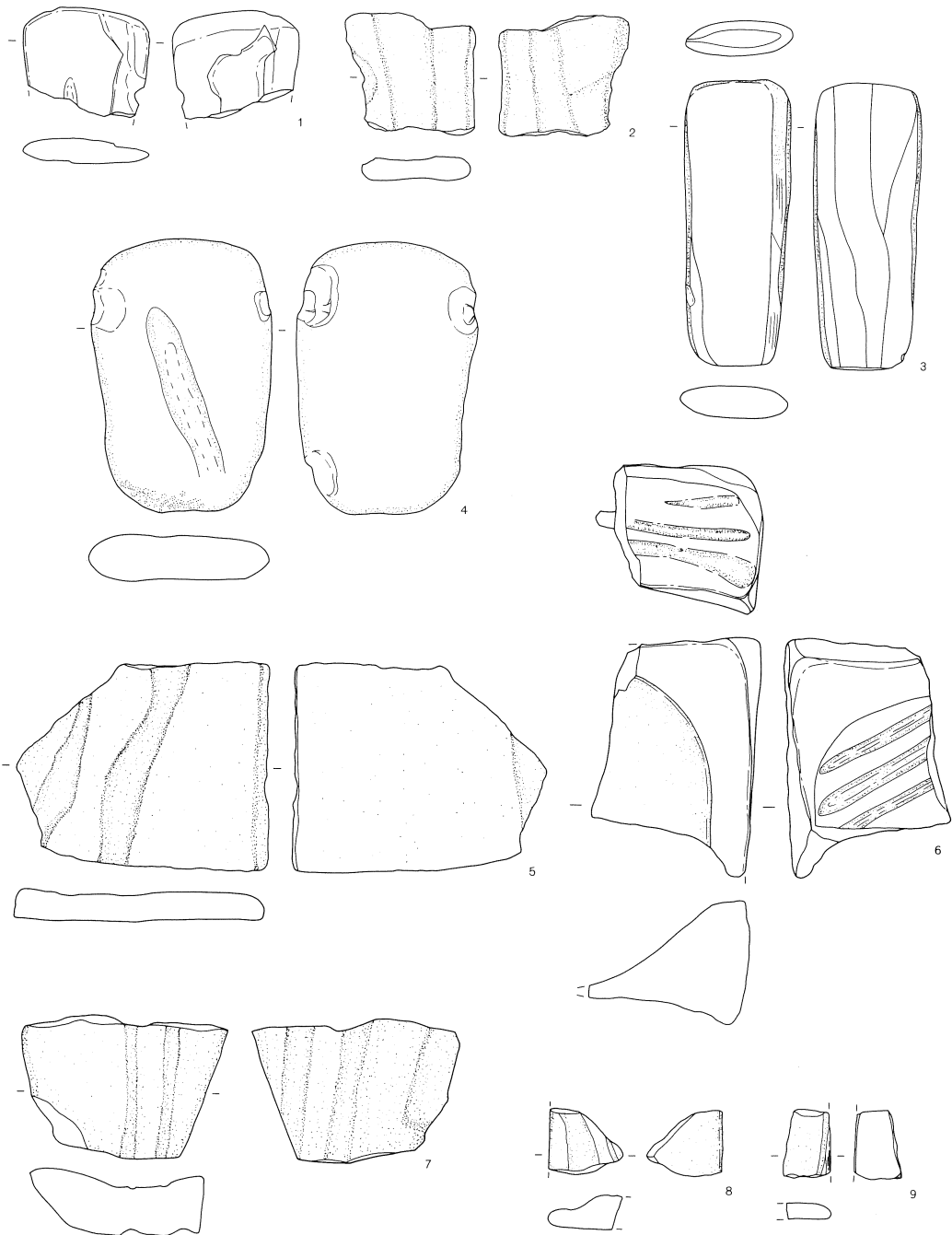
すべて緑泥片岩製である。荒割り後、剥離で整形したもの、整形後敲打を施したもの、敲打による調整後研磨が施されたもの等、製作の各段階を示す資料が見られる。図示してはいないが、緑泥片岩の小破片も多数検出されている。完成品は少なく、製作途中で放棄されたものが多い。

第246図2, 4は荒割り後の剥離痕のみが観察され、敲打はまったく認められない段階のものである。荒割り後、敲打が施された段階のものは比較的多い。第242図4はごくわずかに敲打痕が見られ、第242図1、第244図2, 4, 5、第245図1、第246図3, 4、第247図、第248図1は敲打がかなり進んだ段階のものである。周囲の剥離面部分のみに敲打痕が見られるものが多い。敲打は縁辺部分から開始され、徐々に全体に及ぼされるようである。

全形を知り得るものは少ない。第243図1は両端に把頭部を有する大形のものである。厚みもあり、横断面は楕円形を呈する。第243図2は片方の端部に把頭部を有する。第242図3、第244図4, 5、第246図1、第248図3は、欠損しているが、把頭部が確認できる。把頭部に装飾を持つものは見られない。第242図2は横断面が円形を呈する。他のものは厚みが薄く、横断面はレンズ状を呈するものが多い。第245図3は身の幅がやや膨らみ、先端が尖るものである。基部は欠けているため、全形は知り得ない。



第250図 B区出土石器・石製品 (34)



0 10cm

第251図 B区出土石器・石製品 (35)

独鈷石（第249図）

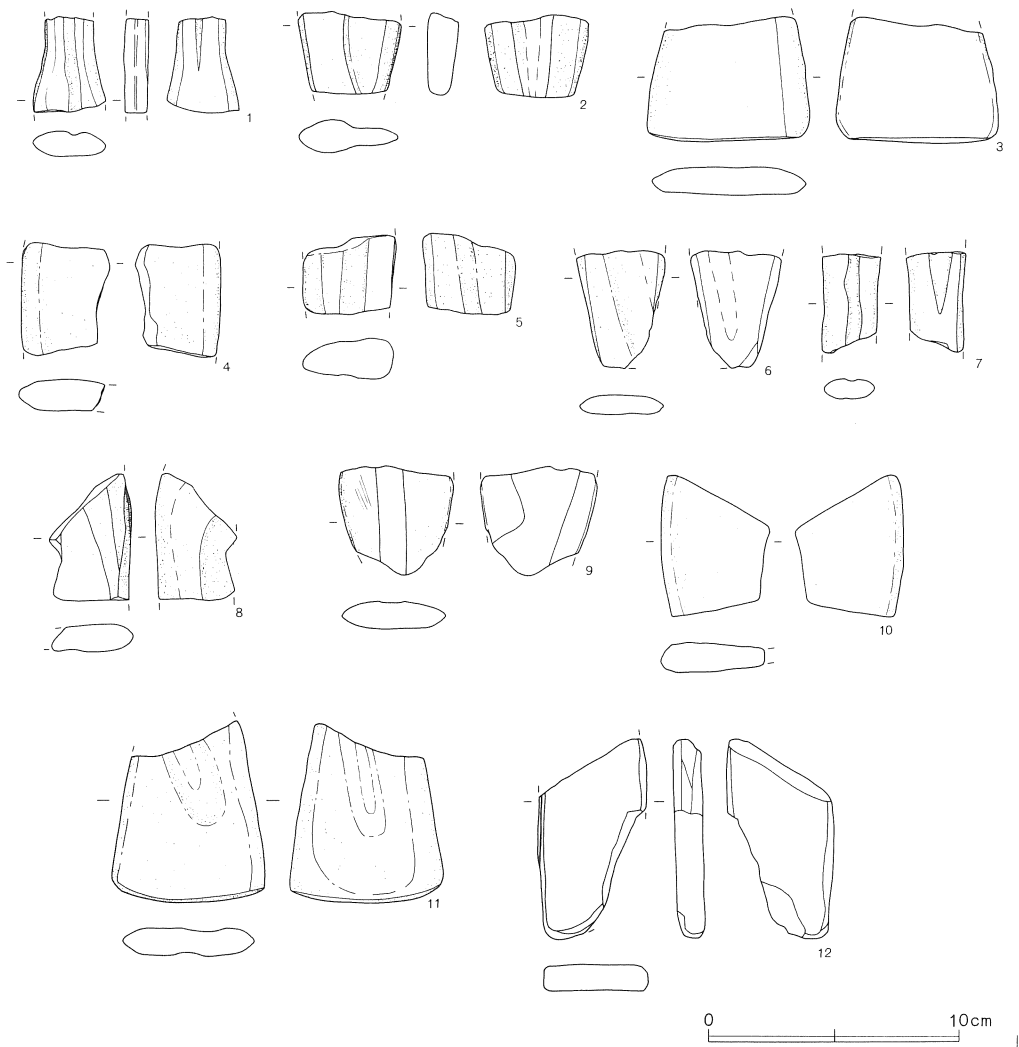
2点出土している。1は中央部に2条の稜が作り出されている。2は敲打痕が周囲にみられ、中央部には擦痕が観察される。未製品と考えられる。

加工痕ある片岩（第250図）

緑泥片岩製で、径1～3cm程の凹みがあけられているものを一括した。いずれも断面は平坦で、剥離と凹み以外には加工の痕跡は見られない。

砥石（第251, 252図）

すべて砂岩製である。全形を知り得るものは少ないが、平面形は長方形、または、長軸の長い台



第252図 B区出土石器・石製品 (36)

形を呈するものが多いようである。縁辺部分に鑄状の摩耗痕が見られるもの、中央部に1～2条の溝状の摩耗痕を持つものがある。第251図6は石皿状であるが、一部に溝状の摩耗痕を持つ。

石錘（第253図1～4）

4点検出された。1, 4は平面が楕円形、2, 3は隅丸の長方形を呈する。1～3は縦位に溝を持つ。3は片面が大きく剝落している。4は長軸と短軸の端部に1単位ずつの刻みを持つ。

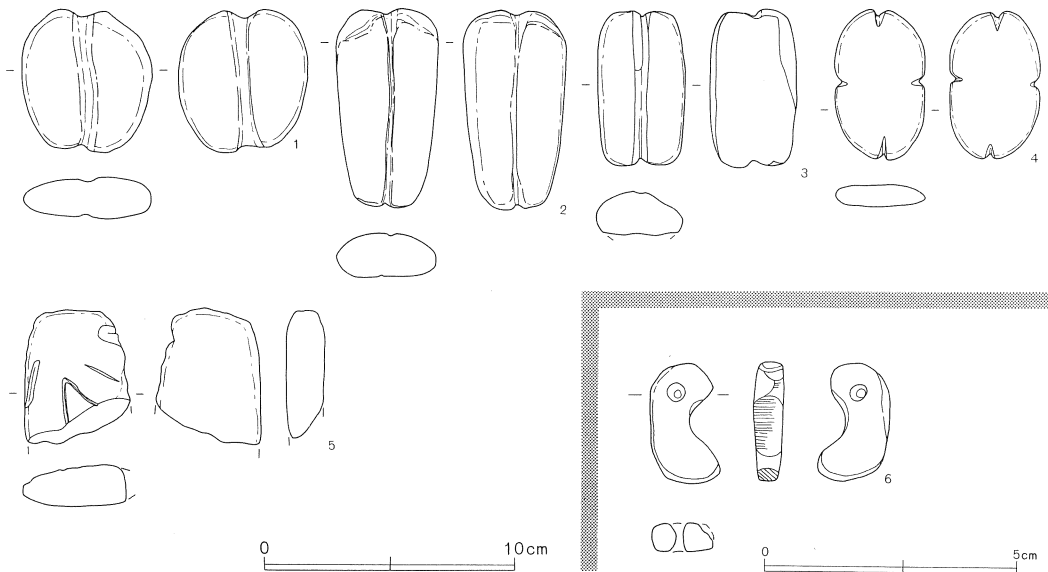
線刻礫（第253図5）

多孔質安山岩製の礫の片面に沈線が彫り込まれている。欠損が大きく、モチーフの構成は不明である。

勾玉（第253図6）

滑石製の勾玉である。厚さは6mm程である。湾曲部には横方向の擦痕が見られる。形状、製作技法等から、縄文時代のものと考えられる。

図示したもの以外に、黒耀石、チャート製の剥片が少量、安山岩製の剥片が多数出土している。黒耀石は約40点、総重量175g、チャート製剥片は6点総重量22gである。



第253図 B区出土石器・石製品 (37)



第254図 石棒・独鈷石出土位置図

石器・石製品属性表(1)

図版番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 材	
第217図	1	SJ5?	石 鏃	(2.7)	1.5	0.4	1.0	チャート
	2	"	"	1.9	1.1	0.4	0.6	メノウ
	3	エ-191-25-30	"	(2.4)	1.5	0.6	1.3	チャート
	4	オ-191-10	"	3.0	1.3	0.7	2.3	"
	5	不明	"	(2.3)	1.5	0.7	1.4	安山岩
	6	オ-192-2-15	"	(2.1)	1.6	0.5	1.1	チャート
	7	SJ1?	"	2.4	1.2	0.7	1.0	粘板岩
	8	エ-191-24	ドリル	4.0	0.7	0.8	1.8	安山岩
	9	オ-191-5-34	"	(2.5)	0.6	0.4	0.5	チャート
	10	オ-192-1-35	スクレイパー	(3.1)	4.5	1.3	16.5	粘板岩
	11	SJ1?	ドリル	(4.8)	2.2	1.4	12.8	安山岩
	12	エ-191-24	スクレイパー	6.0	4.3	2.4	44.2	"
第218図	1	SJ1?	"	7.6	4.3	1.8	45.5	"
	2	SJ2?	"	4.7	2.9	0.9	12.1	"
	3	SJ1?	角錐状石器	(7.5)	2.8	2.5	57.7	チャート
第219図	1	SJ1	打製石斧	15.5	9.5	4.7	647.9	安山岩
	2	SJ5?	"	7.4	6.4	1.3	60.2	粘板岩
	3	SJ1	"	9.4	6.1	2.5	165.6	ホルンフェルス
	4	SJ3,4・9?	"	(10.0)	6.3	2.3	177.6	片岩
	5	"	"	11.8	5.2	2.1	133.0	粘板岩
	6	SJ5?	"	9.5	8.2	2.5	297.4	ホルンフェルス
第220図	1	SJ6	"	(10.9)	8.3	(1.7)	141.7	"
	2	SJ7?	"	(9.7)	8.3	1.4	168.7	片岩
	3	SJ8	"	12.6	8.8	1.8	225.6	ホルンフェルス
	4	SJ2?	スクレイパー	6.0	4.3	1.6	30.0	粘板岩
	5	SD1	打製石斧	7.4	4.8	1.7	59.6	安山岩
	6	SJ3,4・9?	"	11.1	6.6	1.6	96.3	ホルンフェルス
	7	"	スクレイパー	12.7	4.4	2.3	133.7	"
第221図	1	エ-191-25	打製石斧	12.1	8.4	2.1	43.1	安山岩
	2	オ-191-9	"	10.0	5.6	1.5	93.7	粘板岩
	3	オ-192-1	"	11.7	6.7	2.2	177.9	安山岩
	4	B区一括	"	9.8	6.7	2.0	142.2	粘板岩
	5	エ-191-24	"	10.7	7.2	1.2	91.7	ホルンフェルス
	6	"	"	(11.6)	(7.5)	(2.2)	219.7	玄武岩
	7	オ-192-6	"	(7.1)	5.5	1.8	57.5	粘板岩
	8	エ-191-4	"	9.1	5.6	1.3	73.4	砂岩
第222図	1	B区一括	"	(16.1)	8.7	3.5	352.1	ホルンフェルス
	2	オ-191-4	"	13.2	6.8	2.7	229.8	安山岩
	3	オ-192-6-32	"	9.0	6.6	2.7	183.4	"
	4	オ-191-9	"	12.9	8.4	3.0	329.3	"
	5	オ-192-6	"	7.7	5.5	1.9	97.1	粘板岩
	6	オ-191-5	"	(5.1)	(4.3)	(2.5)	61.8	安山岩
	7	オ-191-4	"	18.1	9.3	3.0	509.3	砂岩
第223図	1	オ-192-6	"	15.8	6.6	3.0	378.7	安山岩
	2	エ-191-25	"	11.0	5.4	2.4	146.1	ホルンフェルス
	3	オ-192-1	"	7.6	4.9	0.9	36.8	粘板岩
	4	B区一括	"	9.9	5.4	1.6	82.0	"
	5	オ-191-30	"	7.7	5.4	1.3	52.2	安山岩
	6	オ-191-5-7	"	9.5	5.0	1.7	109.6	粘板岩
	7	オ-191-19	"	11.6	4.4	1.5	90.9	安山岩

石器・石製品属性表(2)

図版番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材
第223図	8 オ-191-5	打製石斧	(9.9)	5.6	1.5	71.7	ホルンフェルス
第224図	1 オ-192-6	"	11.4	5.2	2.7	171.5	安山岩
	2 オ-192-7-1	"	(3.4)	3.9	1.1	17.6	"
	3 オ-191-4-17	スクレイパー	9.9	5.8	1.8	82.1	"
	4 エ-191-24	打製石斧	11.0	8.0	(1.3)	128.0	"
	5 エ-191-24	"	9.7	7.7	2.1	130.4	粘板岩
	6 オ-191-19	"	11.2	10.6	3.1	270.3	ホルンフェルス
	7 オ-192-6	"	8.2	5.9	1.3	51.1	安山岩
第225図	1 オ-192-2-31	"	10.0	6.5	2.1	91.2	ホルンフェルス
	2 B区一括	"	(8.5)	5.8	1.7	88.8	"
第226図	3 "	"	24.6	11.3	2.0	735.5	片岩
	1 SJ2?	磨製石斧	(15.4)	(9.6)	(4.8)	635.6	砂岩
	2 オ-191-9	"	9.1	4.0	1.8	100.8	蛇紋岩
	3 "	"	13.5	5.5	3.2	346.6	砂岩
	4 エ-191-25	"	16.3	6.1	2.8	495.6	緑色岩
	5 "	"	(9.9)	6.1	(3.5)	338.8	蛇紋岩
第227図	6 オ-191-9	"	13.2	6.4	3.4	413.9	"
	1 "	"	13.4	5.8	3.2	354.8	粘板岩
	2 SJ2?	"	13.8	5.2	2.2	209.7	片岩
	3 オ-191-9	"	12.7	4.7	3.0	267.5	砂岩
	4 オ-191-15~ オ-192-10	"	(4.0)	(3.5)	(1.9)	40.9	蛇紋岩
	5 オ-191-4-28	"	(3.8)	3.0	1.1	16.9	珪岩
	6 オ-191-10	"	(7.9)	(4.7)	(2.8)	163.5	蛇紋岩
	7 B区一括	"	(3.3)	(1.3)	(0.8)	3.2	"
第228図	8 オ-191-22	"	12.6	5.3	3.0	281.6	"
	9 オ-191-4	"	13.9	5.5	2.5	307.3	片岩
	1 SJ1?	石 皿	15.7	14.2	5.6	735.9	多孔質安山岩
	2 SJ1?	"	(15.3)	(10.1)	(6.3)	1350.0	安山岩
	3 SJ1?	"	(12.1)	(7.1)	(3.2)	187.4	多孔質安山岩
	4 SJ5	"	10.8	9.7	3.8	376.2	"
	5 SJ1	"	20.5	(3.6)	(3.7)	1064.0	安山岩
	6 SJ7?	"	8.9	6.7	3.1	217.7	"
	7 SJ5,4・9?	"	(18.6)	15.2	6.7	1979.4	"
第229図	1 SJ2?	"	29.6	16.5	5.2	2169.2	多孔質安山岩
	2 SK18	"	17.9	14.5	8.1	1094.6	"
	3 B区一括	"	(13.9)	11.3	3.8	443.7	"
	4 SK5	"	22.6	10.4	2.5	899.8	片岩
第230図	1 B区一括	"	19.5	(12.1)	2.3	680.0	緑泥片岩
	2 B区一括	"	(8.8)	(10.2)	1.9	133.4	砂岩
	3 オ-192-2-8	"	9.0	6.3	3.4	136.8	多孔質安山岩
	4 オ-192-2-31	"	(17.0)	(18.9)	5.6	1649.5	"
第231図	5 B区一括	"	(19.7)	(16.1)	7.9	1252.5	"
	1 SJ1	磨 石	13.3	6.6	4.8	684.6	安山岩
	2 "	"	11.7	8.7	7.0	938.0	砂岩
	3 "	"	10.1	7.4	5.9	596.4	安山岩
	4 "	"	10.4	8.6	4.7	567.2	"
	5 "	"	12.5	8.1	5.2	829.0	"
	6 SJ1?	"	9.9	7.9	4.4	545.6	"
	7 "	"	13.3	8.8	7.9	1157.6	"
8 "	"	11.8	7.8	4.1	495.9	"	

石器・石製品属性表(3)

図版番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	
第231図	9	SJ1?	磨石	5.4	5.0	4.6	164.7	安山岩
第232図	1	"	"	10.6	6.4	4.1	370.0	"
	2	SJ2?	"	6.9	6.1	4.3	252.6	"
	3	SJ1	"	7.4	7.4	3.5	276.2	"
	4	SJ2?	"	10.4	6.4	5.3	465.0	"
	5	SJ1?	"	5.2	4.0	3.9	63.0	"
	6	SJ2?	"	11.1	8.0	5.5	699.0	"
	7	SJ1?	"	8.1	6.8	5.7	391.4	"
	8	SJ2?	"	7.3	5.1	4.7	263.6	"
第233図	9	"	"	15.2	9.8	7.3	1435.7	"
	1	"	"	6.8	5.8	5.8	293.6	"
	2	SJ2,3?	"	13.8	8.5	5.1	829.8	"
	3	SJ5,4・9?	"	9.0	6.8	5.2	378.6	"
	4	SJ3,4・9?	"	8.1	5.2	4.8	218.4	"
	5	SJ5	"	(7.6)	(7.2)	(3.3)	278.9	"
	6	SJ5,4・9?	"	10.7	8.5	7.6	921.8	"
	7	SJ5?	"	12.4	8.5	6.3	946.5	"
第234図	8	SJ7,8?	"	9.9	7.8	4.9	559.6	"
	1	SJ6	"	11.9	9.0	7.5	1181.0	"
	2	"	"	11.1	7.9	6.5	832.8	"
	3	"	"	8.7	5.6	4.2	307.4	"
	4	"	"	12.2	7.1	3.9	488.8	"
	5	"	"	13.6	10.1	8.1	1303.8	"
	6	SK5	"	6.9	6.4	4.2	213.6	"
	7	SJ6	"	10.7	8.7	4.8	550.9	"
	8	SJ10	"	9.1	6.8	5.9	476.6	"
	9	SK5	"	8.2	7.6	6.0	562.6	"
	10	SK15	"	12.5	8.3	6.2	908.8	"
第235図	11	"	"	10.1	7.3	4.8	476.6	"
	1	SJ2	"	9.3	8.0	6.5	650.7	"
	2	オ-192-11-19	"	9.2	7.6	4.8	460.8	"
	3	B区一括	"	10.1	7.1	4.0	412.6	"
	4	オ-192-2-35	"	10.7	7.8	6.1	760.4	"
	5	オ-192-1-12	"	9.3	6.5	5.8	405.2	"
	6	オ-191-9-11	"	8.1	7.5	4.7	333.2	"
	7	エ-191-20-13	"	6.9	6.3	5.3	316.1	"
第236図	8	オ-192-11-19	"	10.2	6.8	4.7	388.4	"
	1	オ-192-10	"	11.3	10.7	7.8	1228.8	"
	2	B区一括	"	8.3	7.4	3.4	279.7	"
	3	オ-191-5	"	10.1	8.0	5.7	581.3	"
	4	エ-191-24	"	9.7	7.8	4.9	500.7	"
	5	エ-191-25	"	9.4	8.3	5.3	520.3	"
	6	B区一括	"	11.8	9.3	6.7	730.8	"
	7	オ-191-5	"	8.6	8.7	5.3	426.7	"
第237図	8	オ-192-1	"	10.1	8.5	4.7	592.0	"
	1	B区一括	"	14.7	9.7	3.3	619.7	"
	2	オ-191-10	"	9.2	8.6	5.9	662.7	"
	3	不明	"	8.9	7.0	5.2	421.3	"
	4	オ-192-6	"	8.4	7.6	5.5	421.3	"
	5	オ-191-5	"	10.5	7.4	6.2	587.5	"

石器・石製品属性表(4)

図版番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	
第237図	6	オ-192-1	磨石	9.7	7.4	4.8	479.0	安山岩
	7	エ-191-24		8.7	7.2	5.1	484.1	〃
第238図	1	オ-191-10	〃	7.2	7.0	4.8	281.3	〃
	2	エ-192-21	〃	6.7	5.2	4.6	210.8	〃
	3	エ-191-29	〃	9.7	8.2	5.2	580.0	〃
	4	エ-191-24	〃	10.2	8.5	5.7	578.7	〃
	5	不明	〃	13.5	8.9	6.8	1299.5	〃
	6	B区一括	〃	8.6	7.2	3.7	347.8	〃
	7	オ-191-5	〃	12.8	8.1	5.7	860.7	〃
第239図	1	B区一括	〃	11.2	8.6	6.5	720.9	〃
	2	オ-191-4	〃	4.5	4.0	3.2	62.9	〃
	3	オ-191-5	〃	8.4	6.8	4.6	386.7	〃
	4	オ-192-6	〃	9.7	7.8	7.5	693.4	〃
	5	B区一括	〃	11.3	9.9	6.8	1040.7	〃
	6	〃	〃	9.4	7.0	5.3	483.8	〃
	7	エ-192-21	〃	7.8	6.2	4.8	329.2	砂岩
第240図	8	オ-192-6	〃	7.2	7.1	4.6	303.1	安山岩
	1	オ-191-5	〃	11.0	9.9	6.0	826.7	〃
	2	エ-191-24	〃	13.8	8.7	5.4	771.8	〃
	3	オ-191-14	〃	10.4	10.7	6.1	818.4	〃
	4	オ-191-10	〃	8.3	6.9	5.1	417.9	〃
	5	不明	〃	8.4	6.6	5.0	393.0	〃
	6	オ-191-5	〃	8.7	7.5	4.7	412.7	〃
	7	不明	〃	5.6	5.0	4.3	173.3	〃
第241図	8	オ-192-1	〃	5.3	5.0	4.3	150.3	〃
	9	エ-191-25	〃	5.9	5.7	3.1	146.0	〃
	1	エ-191-24	〃	10.5	6.2	4.1	338.9	〃
	2	B区一括	〃	17.4	9.9	6.6	1633.3	〃
	3	〃	〃	7.8	6.8	4.4	332.2	〃
	4	〃	〃	9.5	9.0	5.7	617.0	〃
	5	〃	〃	14.7	6.9	3.2	459.4	〃
	6	〃	〃	9.6	6.2	5.3	440.2	〃
	7	〃	〃	7.8	5.9	4.9	304.9	〃
第242図	1	SJ1?	石剣・石棒	(22.8)	5.5	1.7	305.1	緑泥片岩
	2	SJ1		(9.3)	3.7	3.1	148.5	〃
	3	SJ2?		(24.5)	4.3	2.3	373.9	〃
	4	SJ2,3?		(31.4)	6.2	2.8	675.3	〃
第243図	1	SJ5?	〃	41.5	8.3	4.5	2575.2	〃
	2	〃	〃	41.3	4.2	1.7	513.6	〃
第244図	1	SJ5	〃	(13.6)	(3.9)	(2.7)	232.5	〃
	2	SJ3,4・9?	〃	(15.5)	(4.9)	(2.1)	282.3	〃
	3	SJ6	〃	(10.9)	3.8	1.3	83.2	〃
	4	SJ7	〃	(12.3)	(4.6)	(2.1)	170.7	〃
	5	SJ7,8?	〃	(10.8)	(3.9)	(1.0)	59.2	〃
	6	SJ7?	〃	(22.1)	(5.0)	(1.6)	302.9	〃
第245図	1	SJ7,8?	〃	(50.5)	(6.4)	(3.2)	1274.9	〃
	2	SJ8	〃	(11.7)	(3.8)	(0.9)	50.0	〃
	3	SJ7,8?	〃	(24.1)	(6.7)	(2.1)	464.6	〃
第246図	1	SJ8?	〃	(23.2)	(4.0)	(1.7)	225.7	〃
	2	SK-5	〃	(12.1)	(3.3)	(0.9)	56.7	〃

石器・石製品属性表(5)

図版番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材
第246図	3 SD1	石剣・石棒	(11.0)	(4.9)	(1.7)	143.0	緑泥片岩
	4 エ-191-25	〃	(20.2)	(6.0)	(2.5)	408.4	〃
	5 オ-191-5	〃	(24.2)	(8.7)	(2.0)	693.7	〃
第247図	1 オ-191-10-36	〃	(26.5)	(8.0)	(3.1)	1008.4	〃
	2 SJ4・9?	〃	(17.1)	(4.6)	(2.5)	222.1	〃
	3 B区一括	〃	(11.8)	(4.3)	(1.6)	131.1	〃
	4 エ-191-26	〃	(18.3)	(6.1)	(2.9)	363.7	〃
	5 オ-192-1-16	〃	(15.0)	(4.2)	(1.9)	208.9	〃
第248図	1 エ-192-21-2	〃	(18.8)	(5.4)	(2.5)	415.2	〃
	2 エ-191-24	〃	(27.4)	(5.5)	(3.2)	825.3	〃
	3 〃	〃	(17.3)	(3.9)	(1.5)	153.8	〃
第249図	1 SJ7,8?	独 鈷 石	(15.2)	(7.2)	(3.4)	305.8	緑色岩
	2 SJ8?	〃	16.2	6.8	2.8	634.4	安山岩
第250図	1 SJ1?	加工痕ある片岩	12.7	9.3	1.9	293.1	緑泥片岩
	2 SJ2?	〃	9.9	6.2	1.9	119.1	〃
	3 B区一括	〃	17.0	12.4	2.5	645.1	〃
	4 〃	〃	16.6	9.7	3.1	545.4	〃
第251図	1 SJ2,3?	砥 石	(4.8)	5.5	1.1	27.1	砂岩
	2 SJ6	〃	5.3	5.2	1.0	31.8	〃
	3 SJ2	〃	12.4	4.7	1.4	110.3	〃
	4 SJ4・9?	〃	11.8	7.8	2.3	257.1	〃
	5 SJ6	〃	9.1	10.1	1.4	185.8	〃
	6 SJ5,4・9?	〃	(10.4)	(7.2)	(5.4)	356.4	〃
	7 SD1	〃	(4.9)	(6.5)	(1.1)	209.0	〃
	8 B区一括	〃	(2.9)	(3.3)	(1.5)	10.7	〃
	9 オ-192-2-8	〃	(3.0)	(2.1)	(0.7)	5.7	〃
	第252図	1 エ-191-21	〃	(3.8)	(2.9)	(1.0)	27.1
2 オ-191-9		〃	(3.3)	(4.1)	(1.2)	15.0	〃
3 B区一括		〃	(5.0)	(6.5)	(1.1)	40.5	〃
4 オ-191-14		〃	(4.0)	(3.6)	(1.3)	21.9	〃
5 B区一括		〃	(3.2)	(3.9)	(1.6)	13.3	〃
6 エ-192-21		〃	(4.7)	(3.7)	(0.8)	14.3	〃
7 エ-191-19		〃	(4.0)	(2.2)	(0.8)	7.3	〃
8 B区一括		〃	(5.0)	(3.3)	(1.1)	15.9	〃
9 不明		〃	(4.3)	(4.6)	(1.1)	21.0	〃
10 エ-191-19		〃	(5.8)	(4.3)	(1.2)	31.7	〃
11 オ-191-4		〃	(8.2)	(6.1)	(1.2)	46.7	〃
12 エ-191-2		〃	(8.0)	(4.4)	(1.0)	47.6	〃
第253図	1 SJ2?	石 錘	5.7	5.2	1.7	62.9	〃
	2 〃	〃	8.0	4.1	1.8	85.0	〃
	3 B区一括	〃	6.2	3.5	(1.8)	59.7	安山岩
	4 SJ7,8?	〃	6.0	3.7	0.8	28.5	ホルンフェルス
	5 SJ4?	線 刻 礫	(5.5)	(4.2)	(1.7)	16.1	多孔質安山岩
	6 オ-192-不明	勾 玉	2.4	1.4	0.6	2.4	滑石

(3) その他の遺構と遺物

第11号住居跡 (第255図)

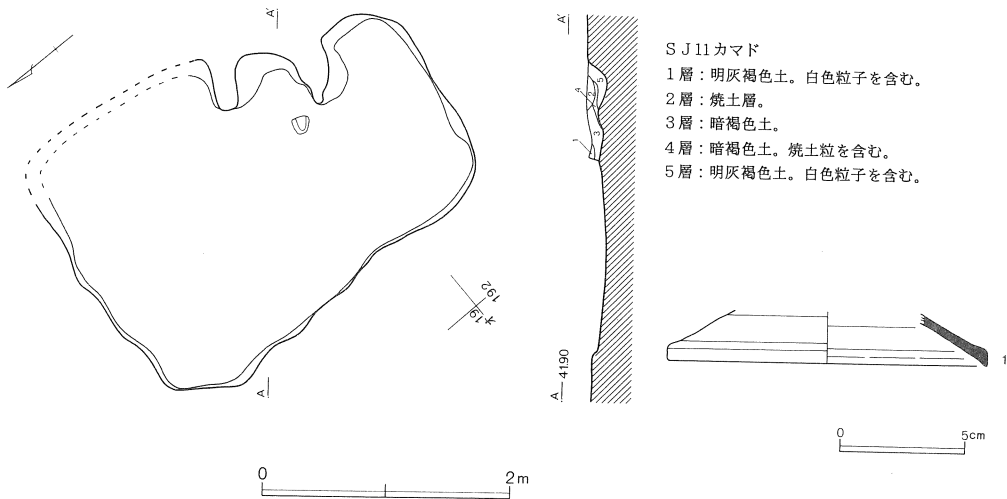
カ-192-3 グリッドに位置する。遺存状態は不良で全形は知り得ない。遺存状態における規模は、長軸3.3m、短軸1.3mである。南東隅にカマドが付設されている。柱穴等のピットは検出できなかった。

遺物はほとんど出土していない。図示した遺物はカマド内から出土したもので、須恵器の坏蓋である。内面の中央部が黒色化しており、転用硯の可能性もある。

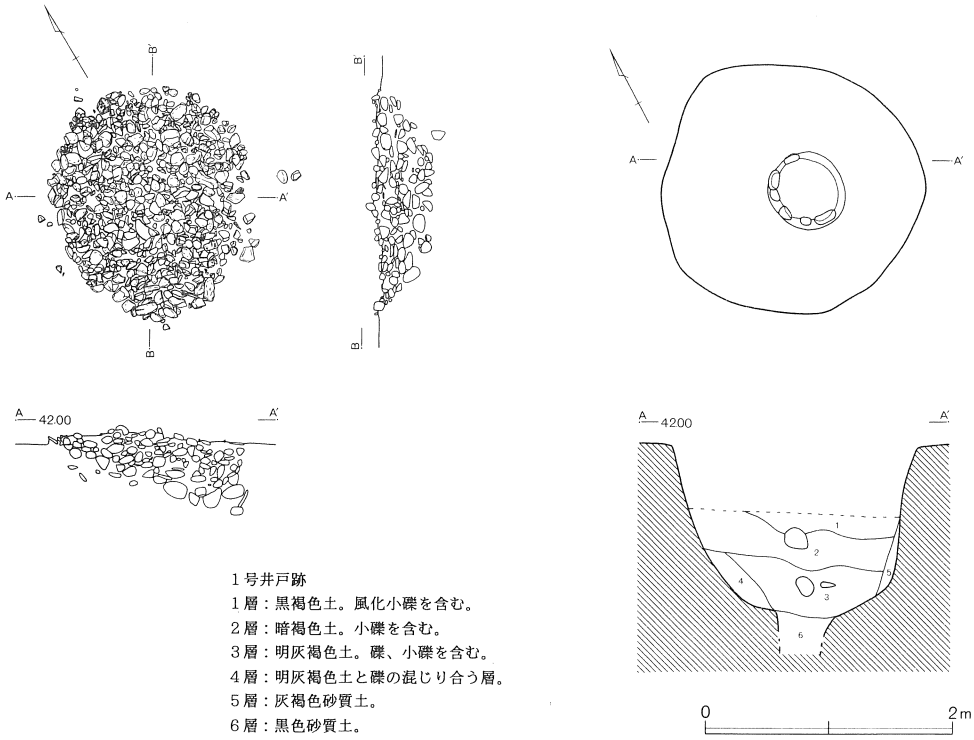
第1号井戸跡 (第256図)

オ-192-16に位置する。埋没後、上面に礫が集積されている。確認面における規模は1.9m×2.1mである。底面は緩やかに凹んでおり、中心部に径約40cm程のピット状の施設がある。このピット状部分の埋土は砂質土である。危険防止のため、完掘はあえて行なわなかった。埋土には礫、小礫が含まれている。集石部からは近代に属する陶器が検出されており、本井戸跡の廃絶は近代以降と考えられる。

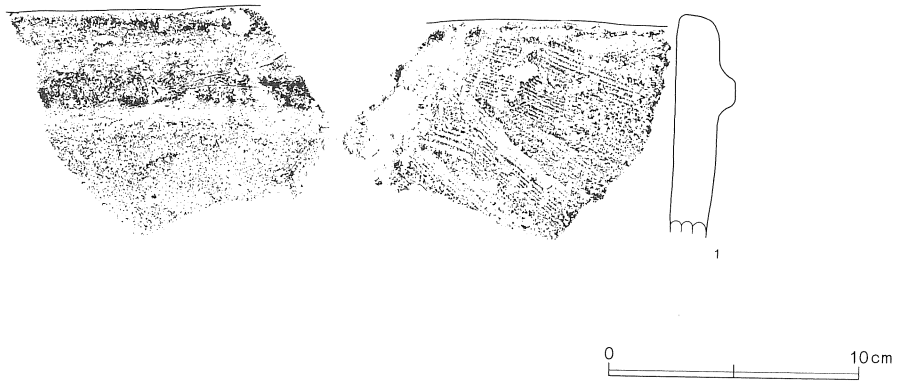
第257図は本調査区から表採された円筒埴輪の破片である。上端部は透かし部の下端である。透かし孔の形状は明かにし得ない。突帯の上面は平坦に整形されている。内面にハケ目が見られる。全体に摩耗が激しく、外面の調整は明かではないが、突帯の上下に貼付後の横ナデがわずかに観察される。



第255図 第11号住居跡及び出土遺物



第256図 第1号井戸跡



第257図 B区出土埴輪

3 C区の調査

C区は櫛挽台地下の後背湿地上に立地する。地形面はほぼ水平で、標高約41mを測る。調査区の東半から水田跡が検出されている。

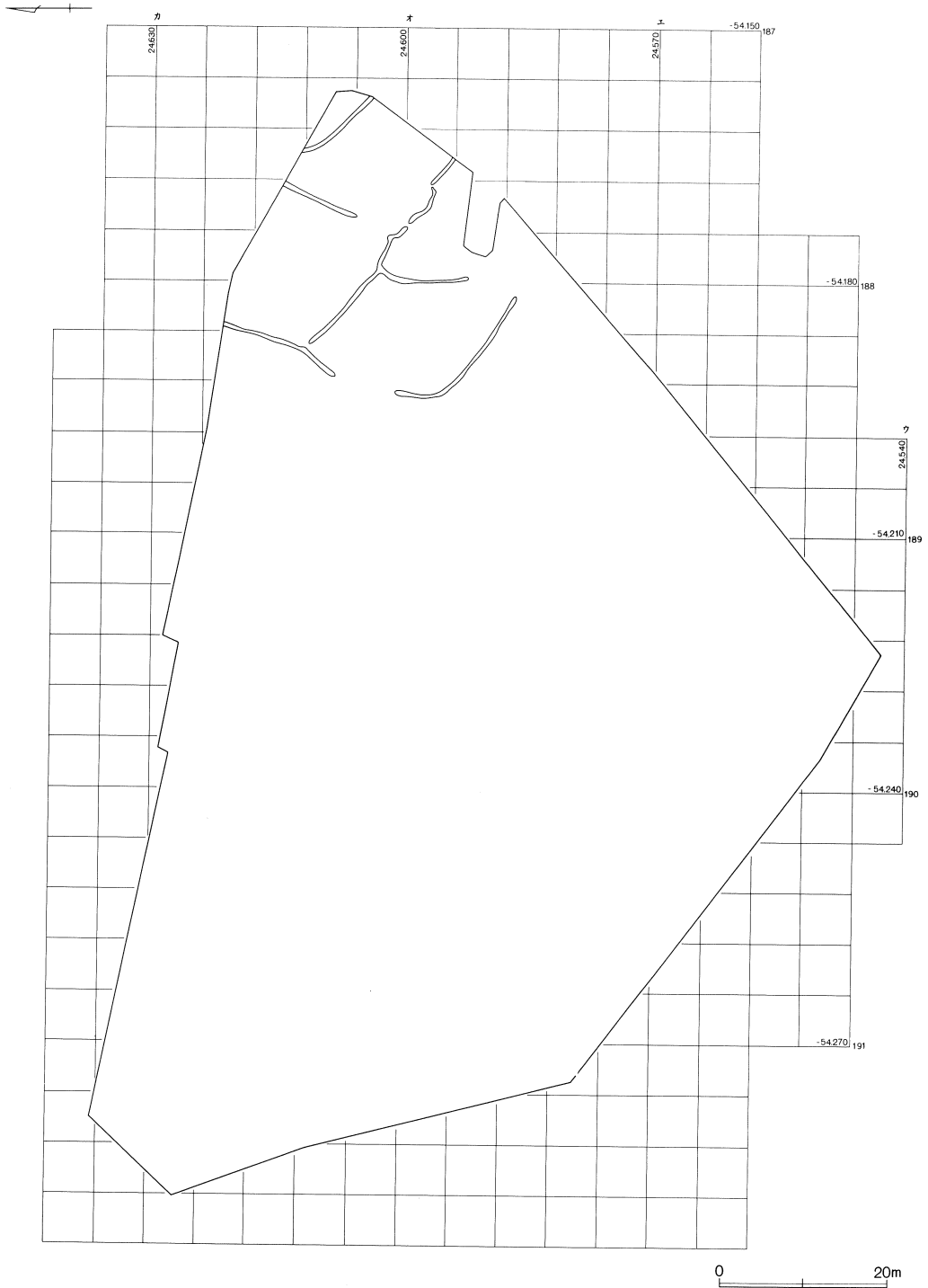
水田跡は河川の氾濫によると考えられる砂礫層によって覆われている。検出された水田の範囲は約900㎡である。水田跡からは6条の畦畔が検出された。畦畔は上端幅が約20～40cm、下端幅が約40～60cmである。畦畔の方向はおおよそN-22°-Eと、N-50°-Wのものが交差している。水田耕作土と認定された土壌は、灰色の粘土で、上層との境界に5～20cm程の凹凸がみられる。耕作土直下の土層は紫黒色粘質土で、紫色の粒子が含まれていた。おそらく、マンガン粒と考えられる。水田面はほぼ水平であるが、南がやや高く、北に向かって極めて緩やかに傾斜している。水口と考えられる部分が数カ所検出されている。

水田区画の形態はやや不整形な菱形を呈する。確認された範囲における、1区画の面積は約210㎡である。

水田上層より、台付甕の脚部が検出されている。10世紀代のものと考えられる。遺構に伴う遺物が少ないため、断定はできないが、水田跡の廃絶もこれに近い時期と考えられる。



C区 東半



第258図 C区全測図



第259図 C区水田跡及び出土遺物

4 F 区の調査

F 区は櫛挽台地下の後背湿地上に立地する。標高は約40mを測る。調査区からは2条の溝跡と、縄文時代後晩期の遺物包含層が検出された。

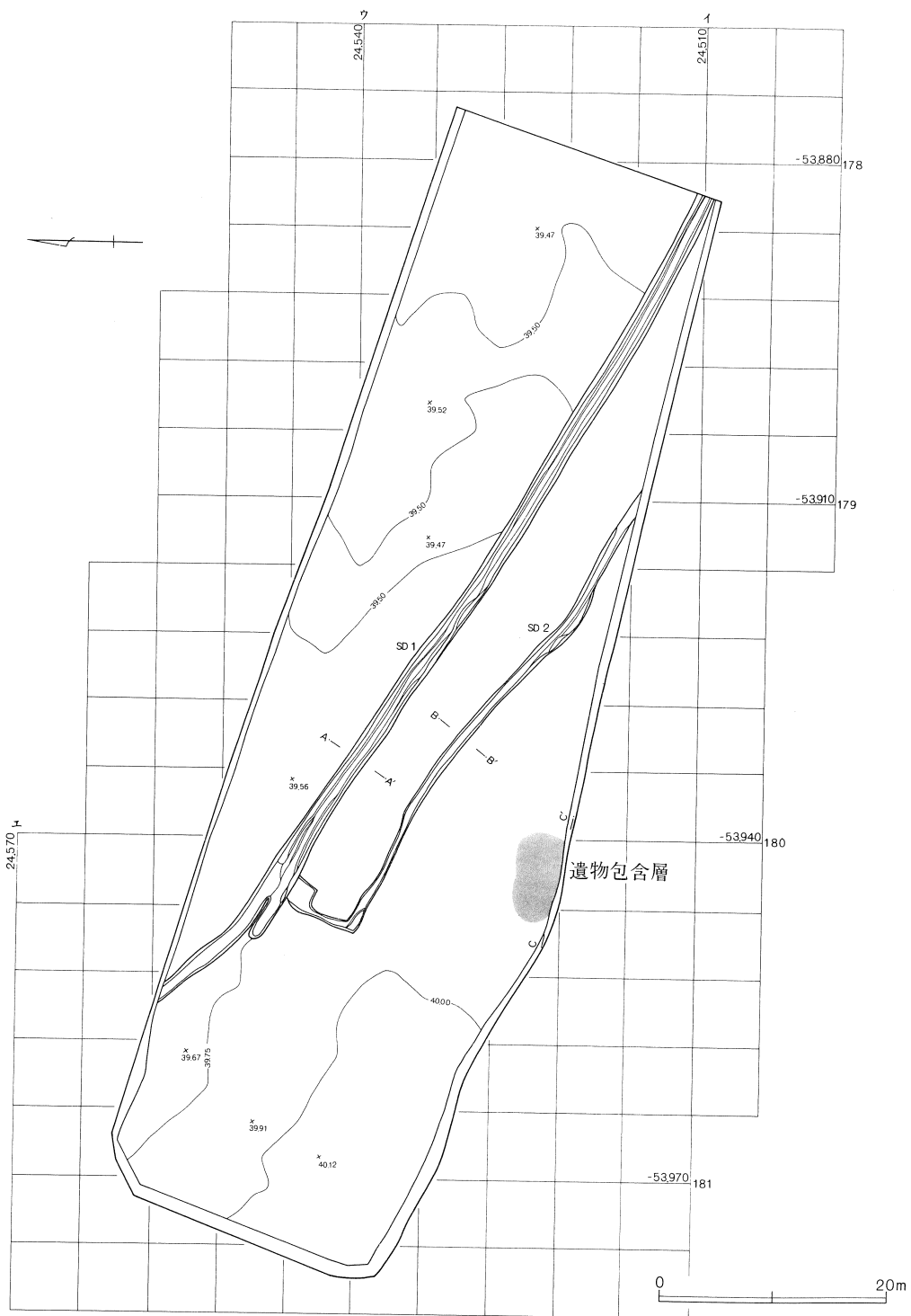
溝跡は櫛挽台地北縁に沿うように、南東から北西方向に向かって伸びている。検出された部分だけで、延長約160mを測る。遺物が検出されなかったため、時期は明確にし得ないが、第1号、第2号溝跡とも、埋土上層に浅間b軽石が堆積しており、同軽石降下以前に廃絶したものと考えられる。

遺物包含層

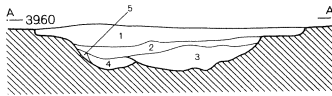
イ-180-11グリッドと、その周辺から縄文時代後晩期の遺物がまとまって検出された。遺物の分布範囲は約40㎡である。

出土遺物は第262～278図に掲載した。出土土器は後期中葉加曾利B式期から晩期中葉にかけてのものである。接合率は不良で、完形に近く復元できるものはない。また器面の摩耗が激しく、再堆積の可能性が強い。

第262図は加曾利B式期の精製土器である。1～10は3単位の把手を持つもの、その他の精製土器と、それに対応する胴部破片である。11～19は平縁で外傾し、口縁部内面に沈線を有するものである。外面の装飾は、無文、矢羽状沈線を持つもの、縦位の沈線を持つもの、口唇部外面に刻みをもつものがある。20～23は内面に沈線の無いものである。第263図1～6は波状縁の深鉢とその体部である。1は波頂部内面に突起が貼付されている。7, 8は算盤玉型鉢形土器の体部であろう。9～14は口縁部が内湾する鉢。15～20は算盤玉型の鉢形土器である。21～23はその他の鉢である。21は口縁部が内屈し、屈曲部に沈線が施される。22は無文で、口唇部直下がやや凹んでいる。23は口唇部がやや肥厚して、外面には沈線間に刺突が施されて口唇部下に巡っている。第264図は口縁部が屈曲するもので、1～6は口縁部に縄文が施されるもの、7, 8は口縁部が無文で、体部に条線が施されるもの、9～26は無文である。第265図1～5は平縁で、屈曲する口縁部に沈線、縄文が施されるもの。6～16, 20, 21は波状縁である。6, 7, 9, 10は口縁部に縄文が施されている。13は波状部に細密沈線で稲妻状のモチーフが描かれている。16は橋状の把手が突起下に貼付されている。17は沈線と刺突が組み合うもので、弧線が重畳している。22～25は後期安行式。26は口唇部に刻みを持ち、体部に集合沈線で鋸歯状に垂下するモチーフが描かれているが、所属時期は不明。第266図1～4は同一個体である。波状縁で、波頂下に縦長の瘤を持ち、幅の広い沈線で渦巻文、三叉文が描かれている。地文はLR。5, 6は波状縁深鉢。6は突起上面に縄文が施されている。7, 8は安行3b式期の鉢形土器。9, 11は胴部破片で、曲線的なへら描き文が施されている。13～15, 17, 18は沈線と刺突が組み合うもので、安行3c式と考えられる。21～23は縄文施文の土器。22は晩期中葉大洞系。23は綾繰文を伴う。19は大洞C₁式期の壺。20は下向きの「コ」の字状モチーフを中心に、矩形の沈線が重畳するものである。湾曲からみて、かなり大形の土器と考えられる。地文は擬縄文と思われるが原体不明。須和田式に属すると思われる。第267図は加曾利B式期の粗

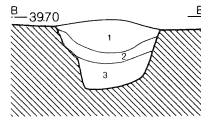


第260図 F区全測図



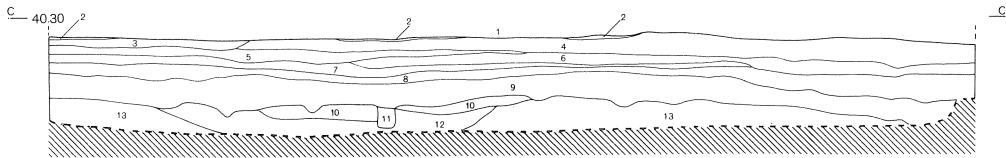
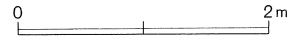
1号溝

- 1層：暗灰褐色粘土。浅間b軽石を含む。
 2層：暗灰褐色粘土。軽石は含まない。砂礫を含む。
 3層：暗灰褐色砂層。
 4層：暗灰褐色粘土。2層に比べ、やや粘性が強い。
 5層：暗灰褐色土。紫黒色粒子を含む。



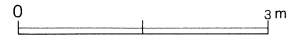
2号溝

- 1層：暗灰褐色土。浅間b軽石を含む。
 2層：暗灰褐色砂質土。紫黒色粘土ブロックを含む。
 3層：暗灰褐色粘土と暗灰褐色砂質土の互層。



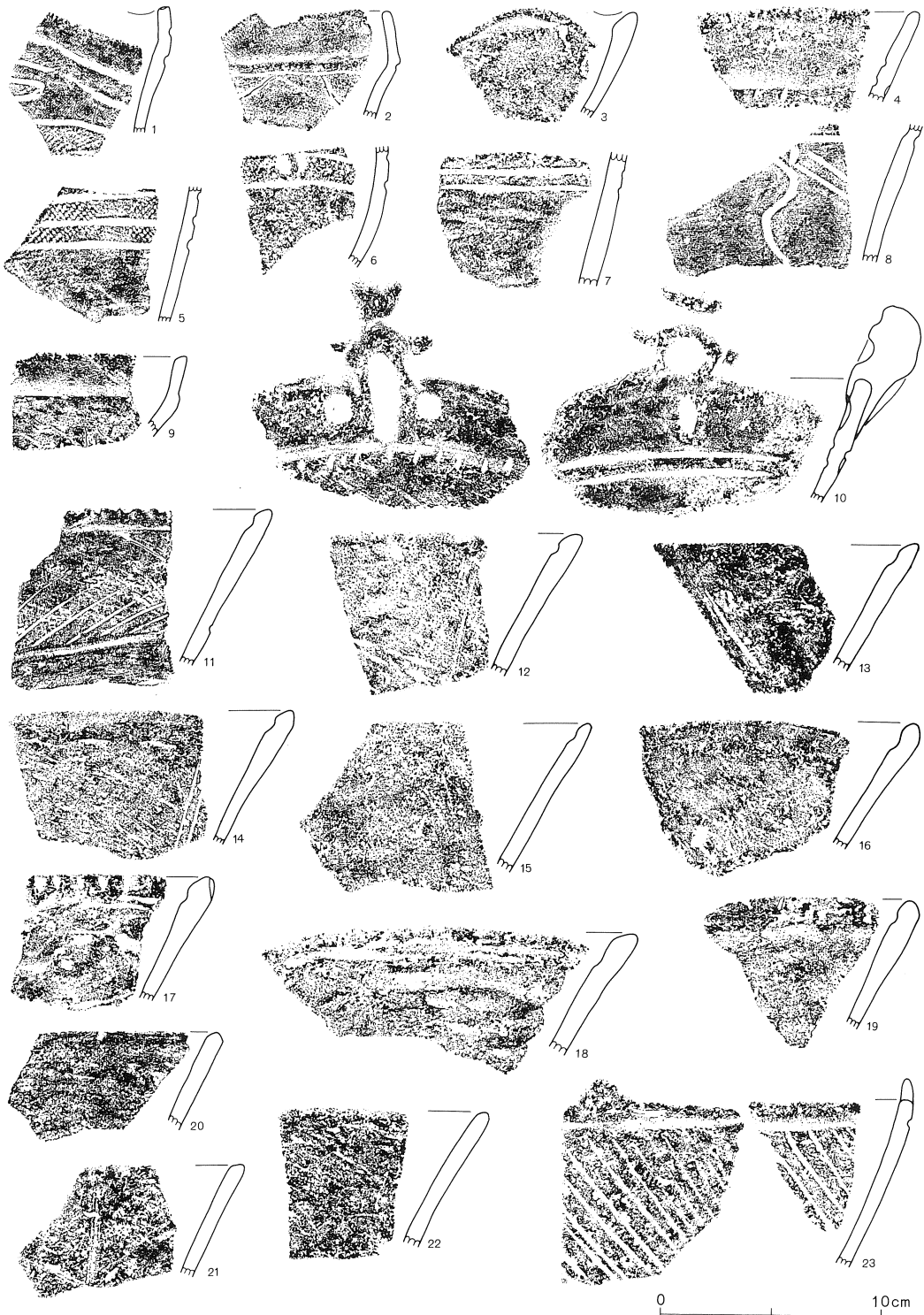
遺物包含層断面

- | | |
|----------------------------|--------------------------|
| 1層：暗灰褐色土。現耕作土。浅間a軽石を含む。 | 8層：灰褐色粘質土。礫を含む。 |
| 2層：浅間a軽石層。 | 9層：黒色土。炭化物を多く含む。遺物包含層。 |
| 3層：灰褐色土。粘性弱い。 | 10層：暗灰色粘質土。遺物を含む。 |
| 4層：灰褐色土。3層に比べ色調やや暗い。粘性強い。 | 11層：黒色土。炭化物を多く含む。 |
| 5層：灰褐色土。3層に比べ色調やや明るい。 | 12層：暗灰色粘質土。底面に炭化物を帯状に含む。 |
| 6層：暗灰褐色土。粘性やや強く、砂礫を含む。 | 13層：青灰色粘質土。 |
| 7層：暗灰色土。やや紫色を帯びる。浅間b軽石を含む。 | |

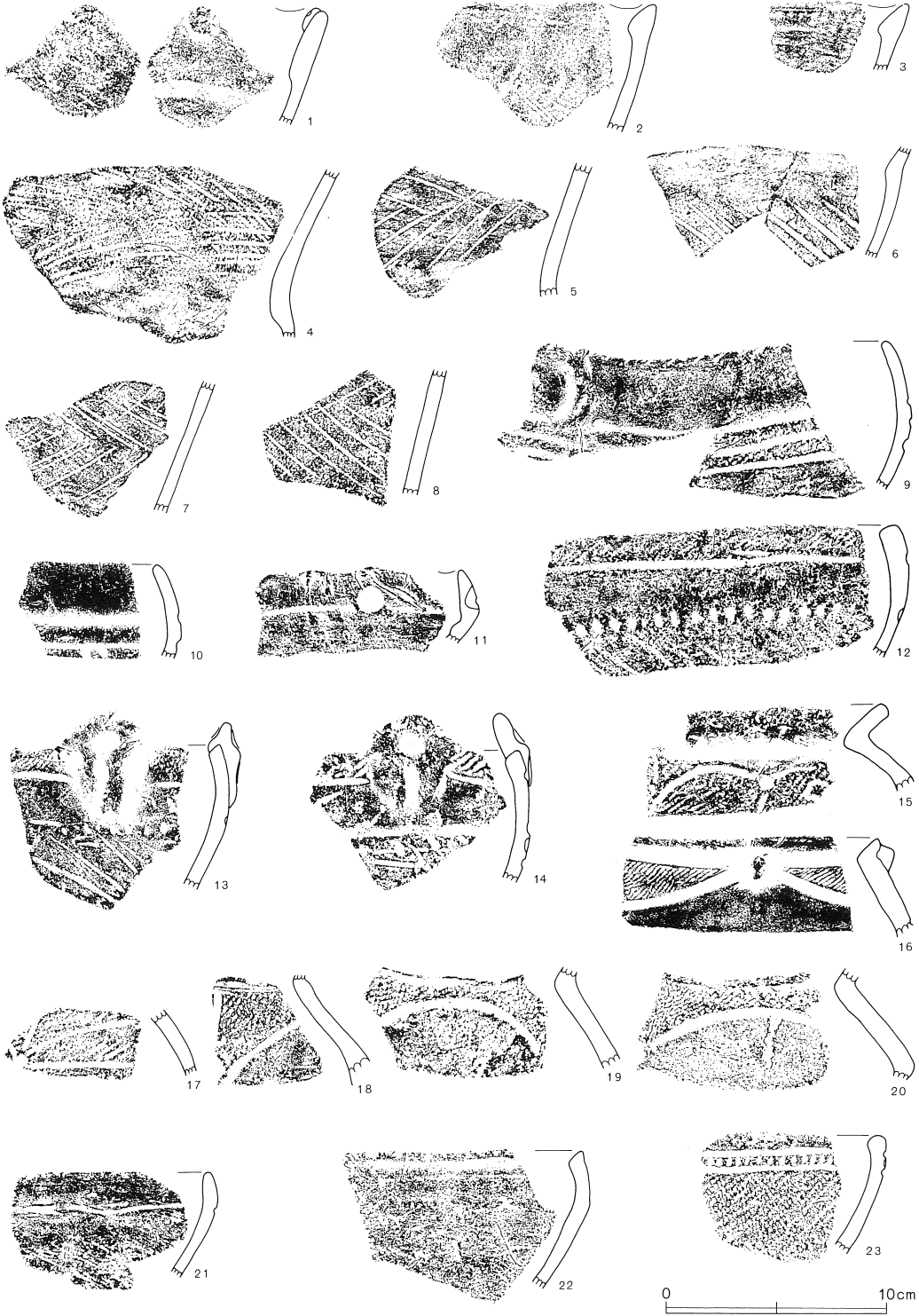


第261図 F区溝跡及び遺物包含層断面図

製土器とその胴部破片である。1～3, 5は紐線文が口唇部下に貼付されるものである。8～10は厚手の隆帯上に指頭圧痕が施されるものである。隆帯は口縁部の上端に貼付され、紐線文のように口唇部下に貼付されることはない。加曽利B2式であろう。第268図1～13も同様である。7には縦位の沈線が見られる。14～21、第269図1～9は口唇部外面に厚手の隆帯が貼付されるが、隆帯上には指頭圧痕が見られないか、またはごくわずかな凹みの見られるものである。体部の器厚は薄手である。第269図10～25は口唇部の内外面がわずかに肥厚するもので、外面の隆帯下部に稜線が見られるものである。第268図22、第270図1～23は口唇部の内面もしくは外面が滑らかに肥厚するものである。断面形にはいくつかの変異が認められる。口唇部に隆帯を持つものは、口縁部が外傾、または直立するものが多いが、滑らかに肥厚するものは口縁部が内湾するものの割合が増す。第270図24～30、第271図1～14は、口唇端部付近のみが滑らかに肥厚するものである。15～24は安行系の紐線文土器である。24には口縁部に入り組み孤線文が描かれている。第272図、第273図1～14は折返し口縁の深鉢。13, 14は口縁部に刺突が見られる。15～26、第274図1～14は口縁部が肥厚しない無文土器、15, 16は頸部が外反するものである。第275図1～3は小形土器で、1は内面に円形の刺突列が施されている。第277図1の土偶は、隆帯によって眉、眼が表現されている。2は耳栓。3, 4は打製石斧である。4は自然面を大きく残している。第278図は磨石、石皿である。



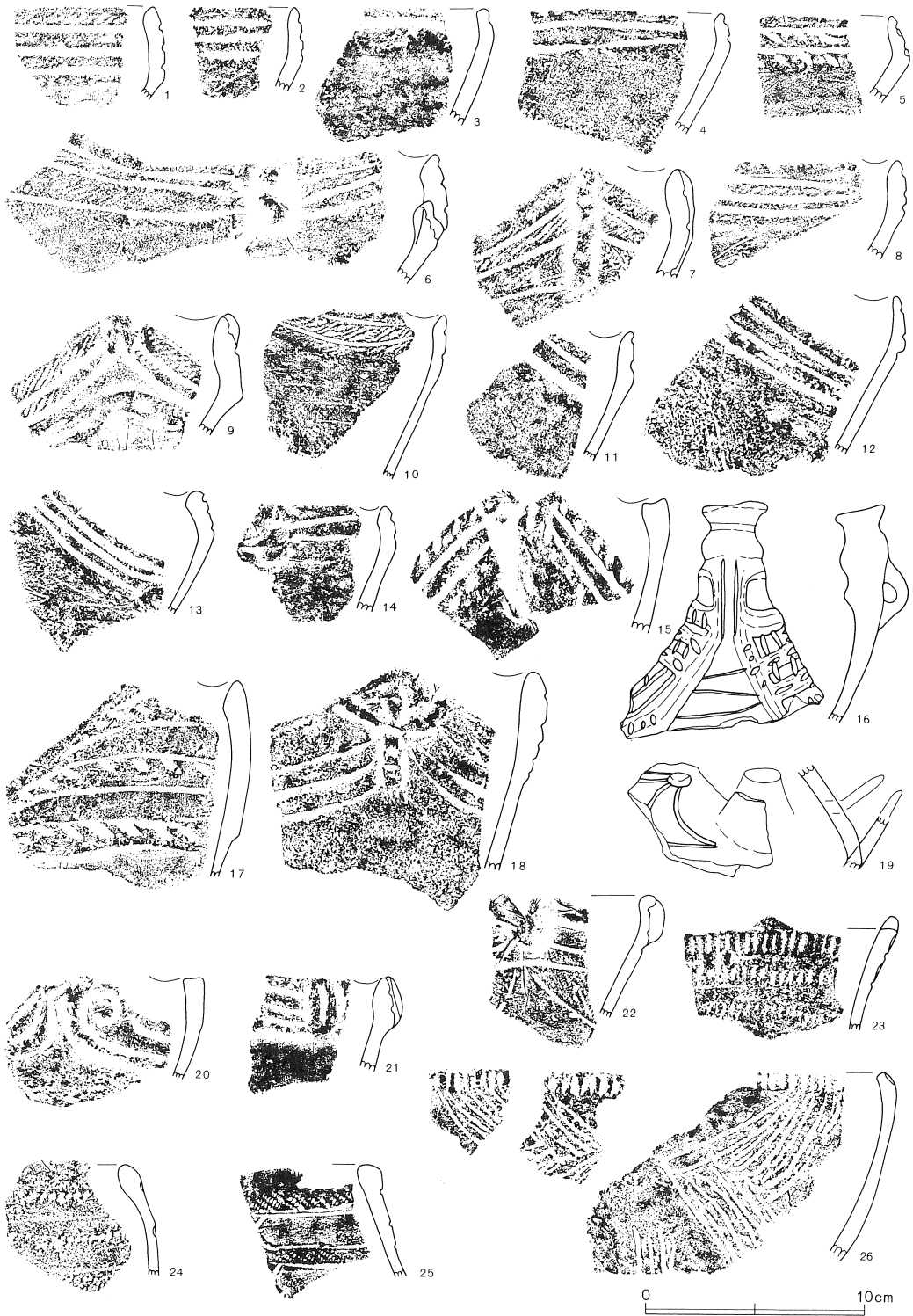
第262図 F区出土土器(1)



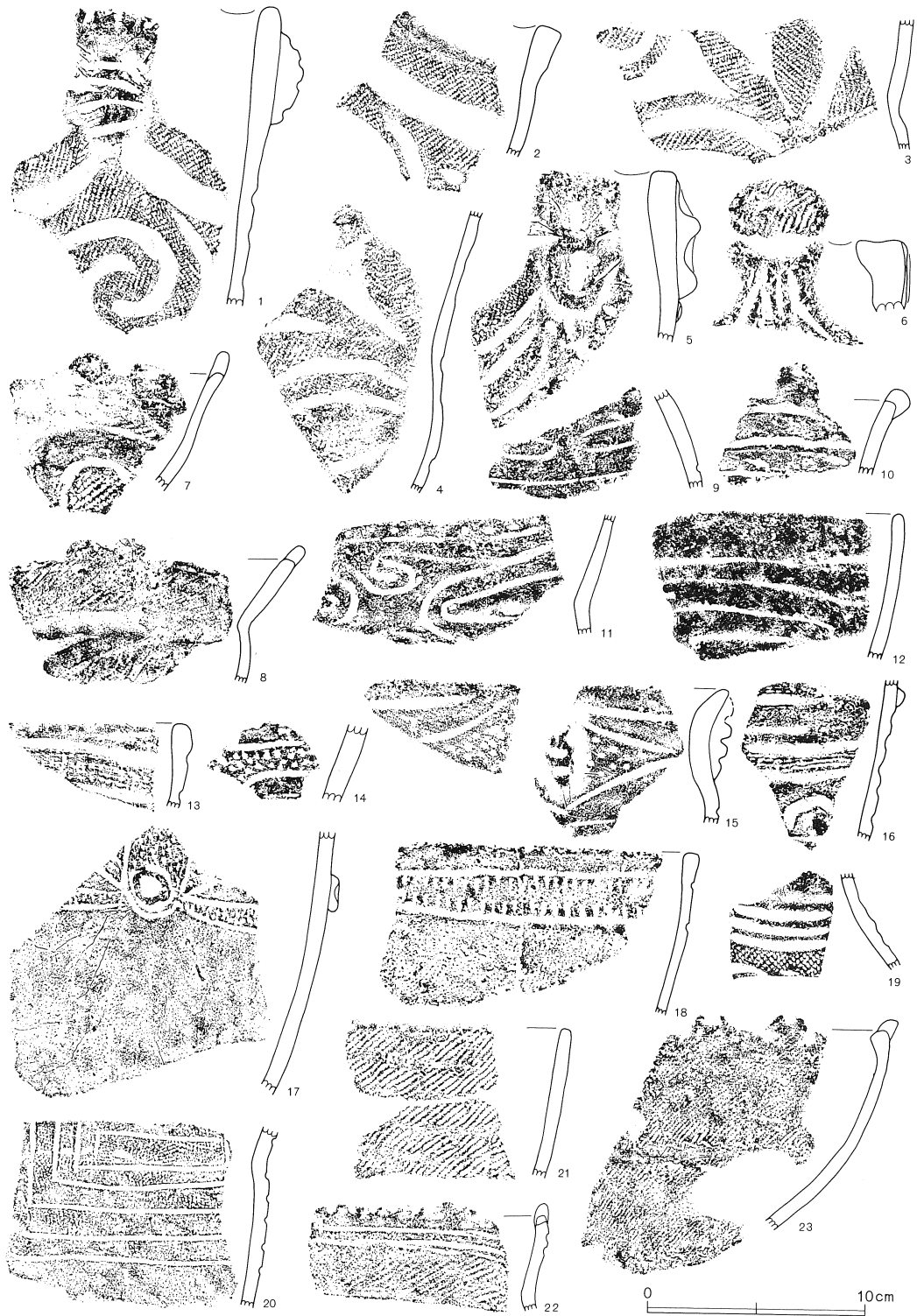
第263図 F区出土土器(2)



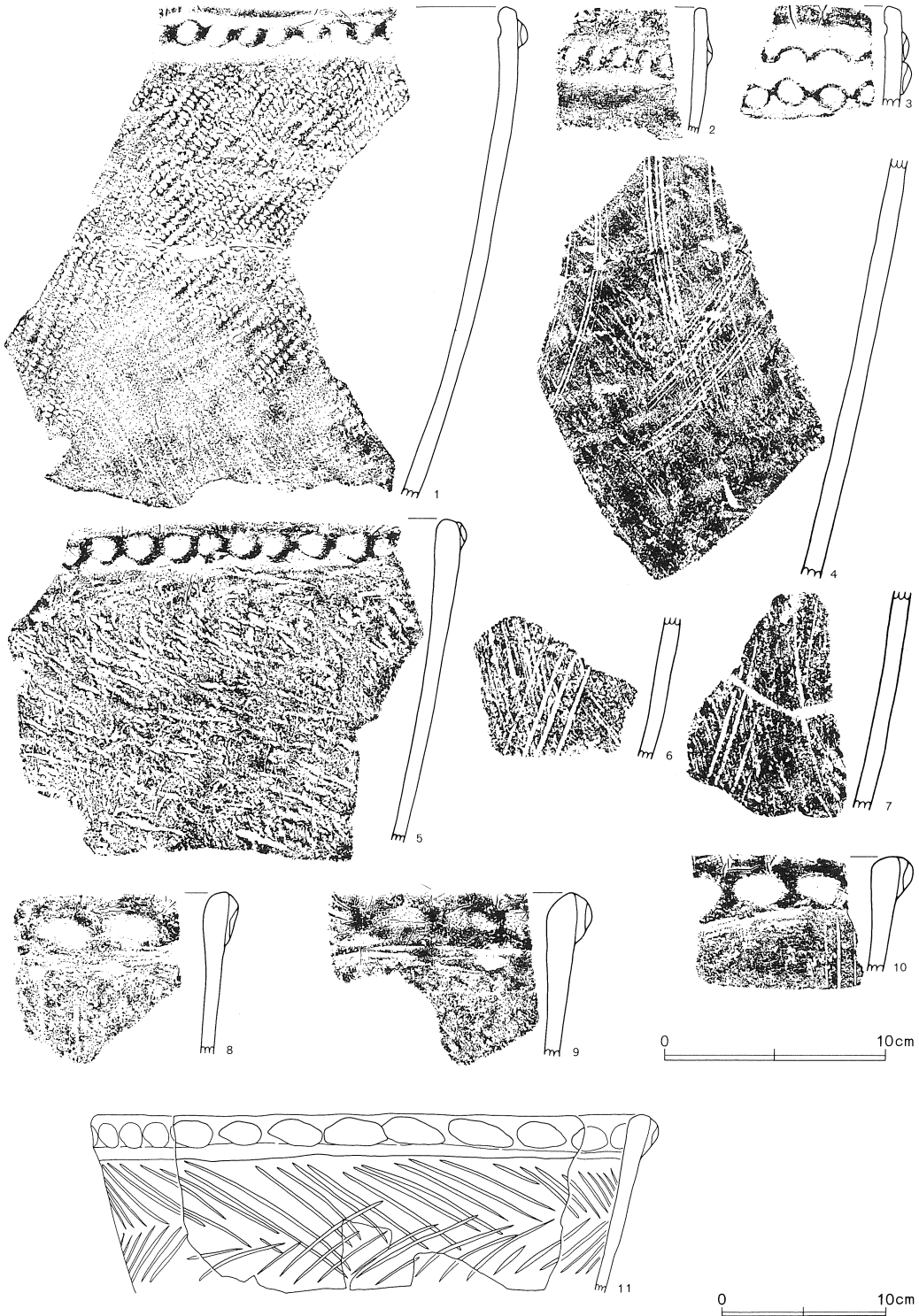
第264図 F区出土土器(3)



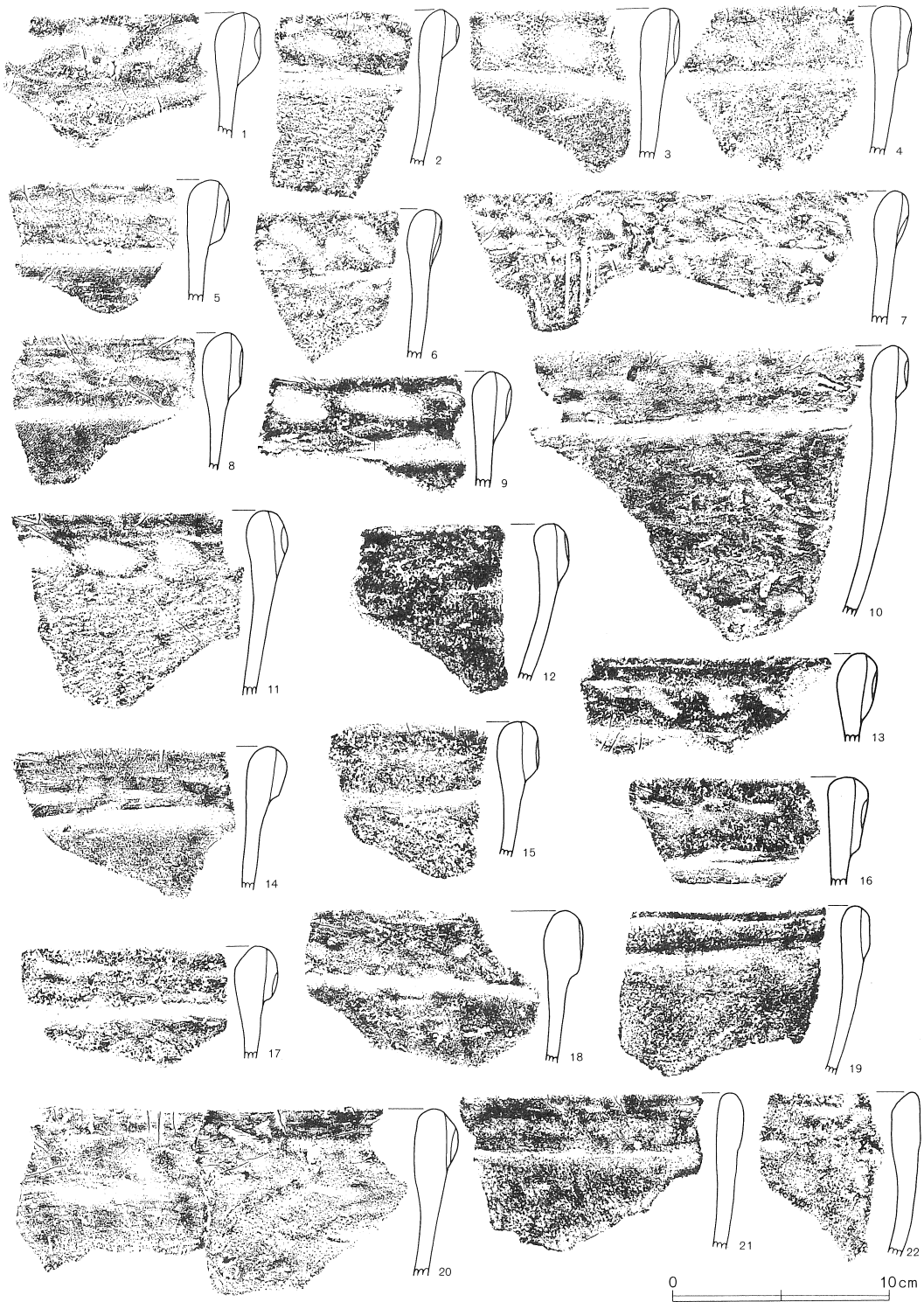
第265図 F区出土土器(4)



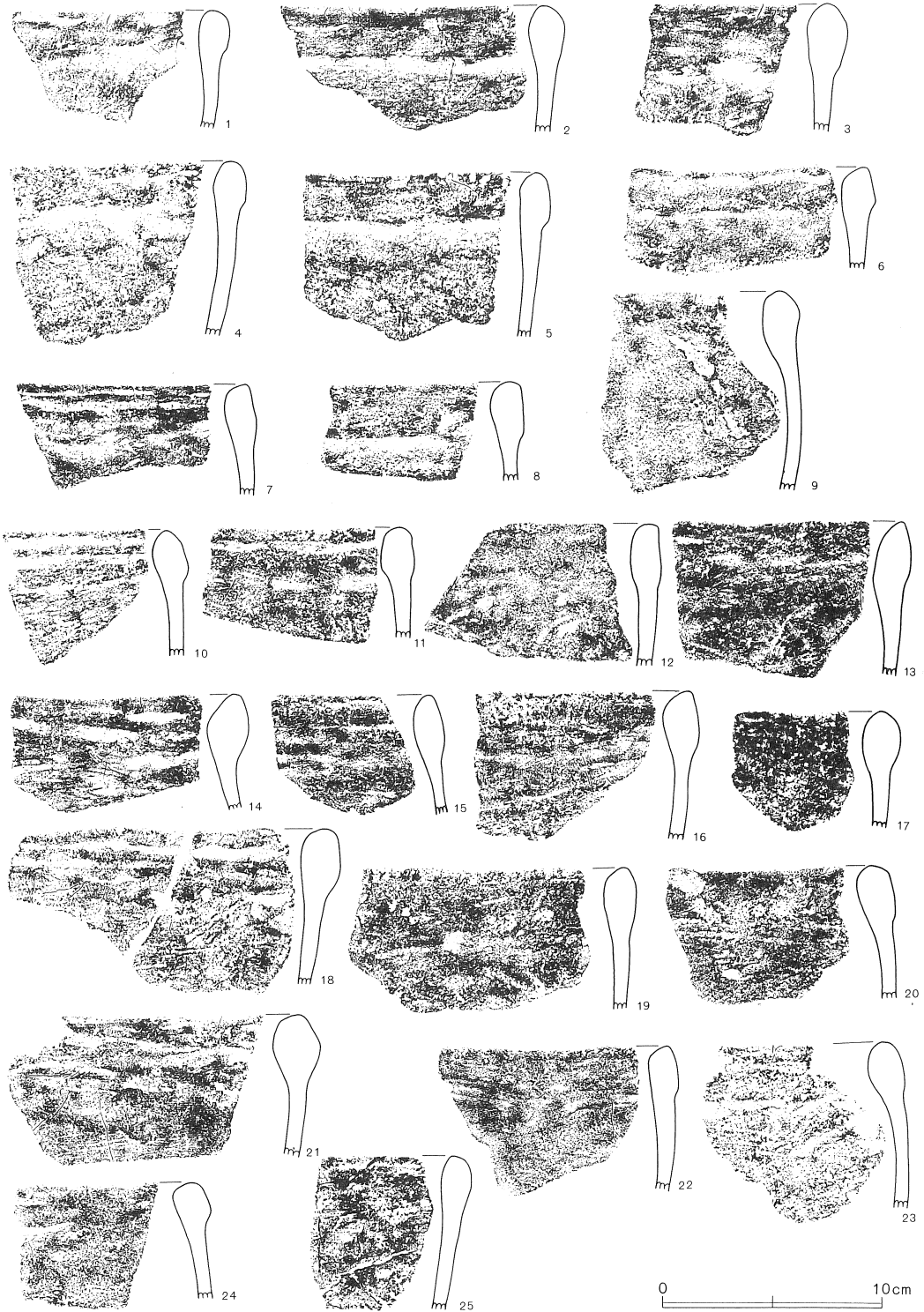
第266図 F区出土土器(5)



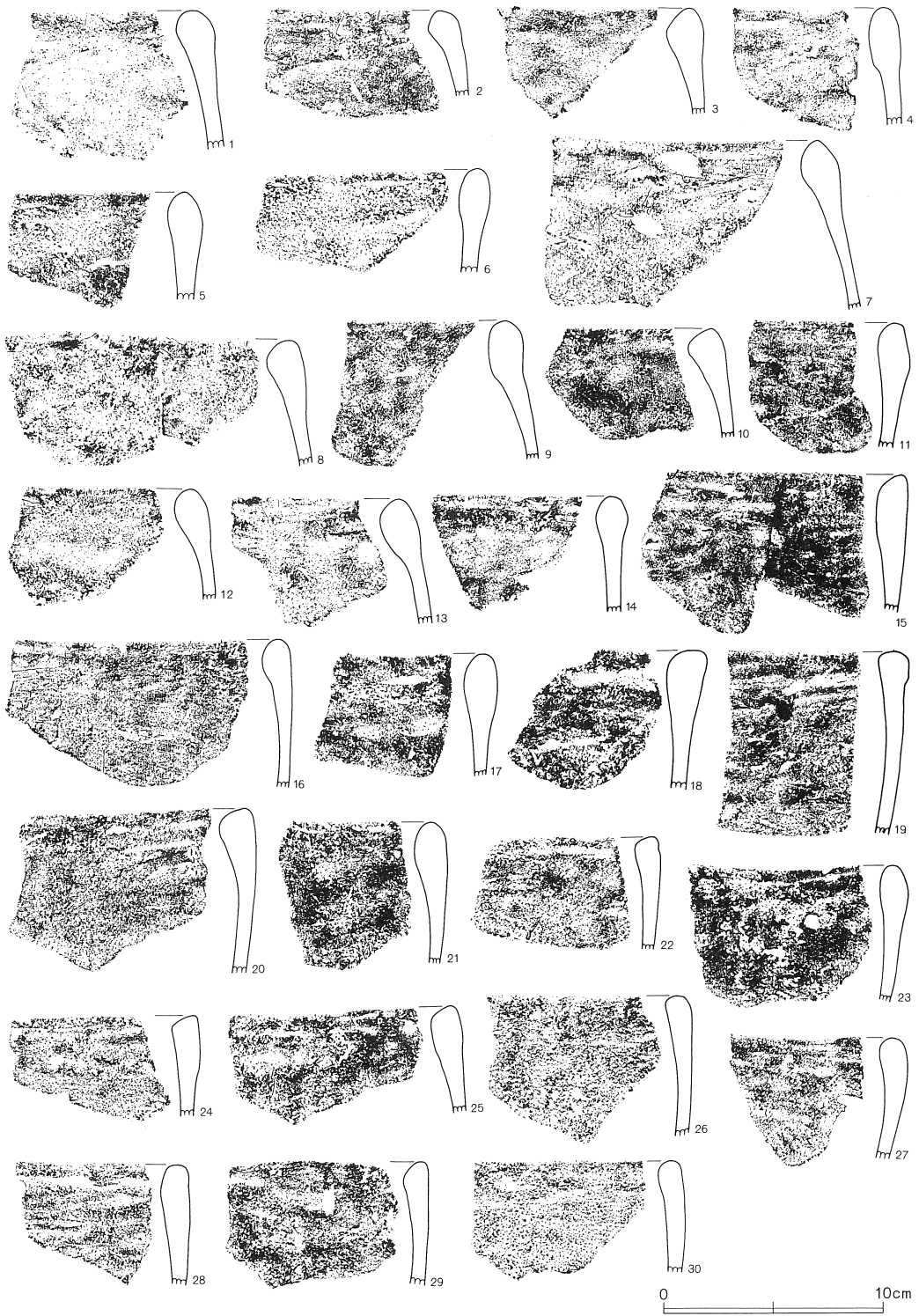
第267図 F区出土土器(6)



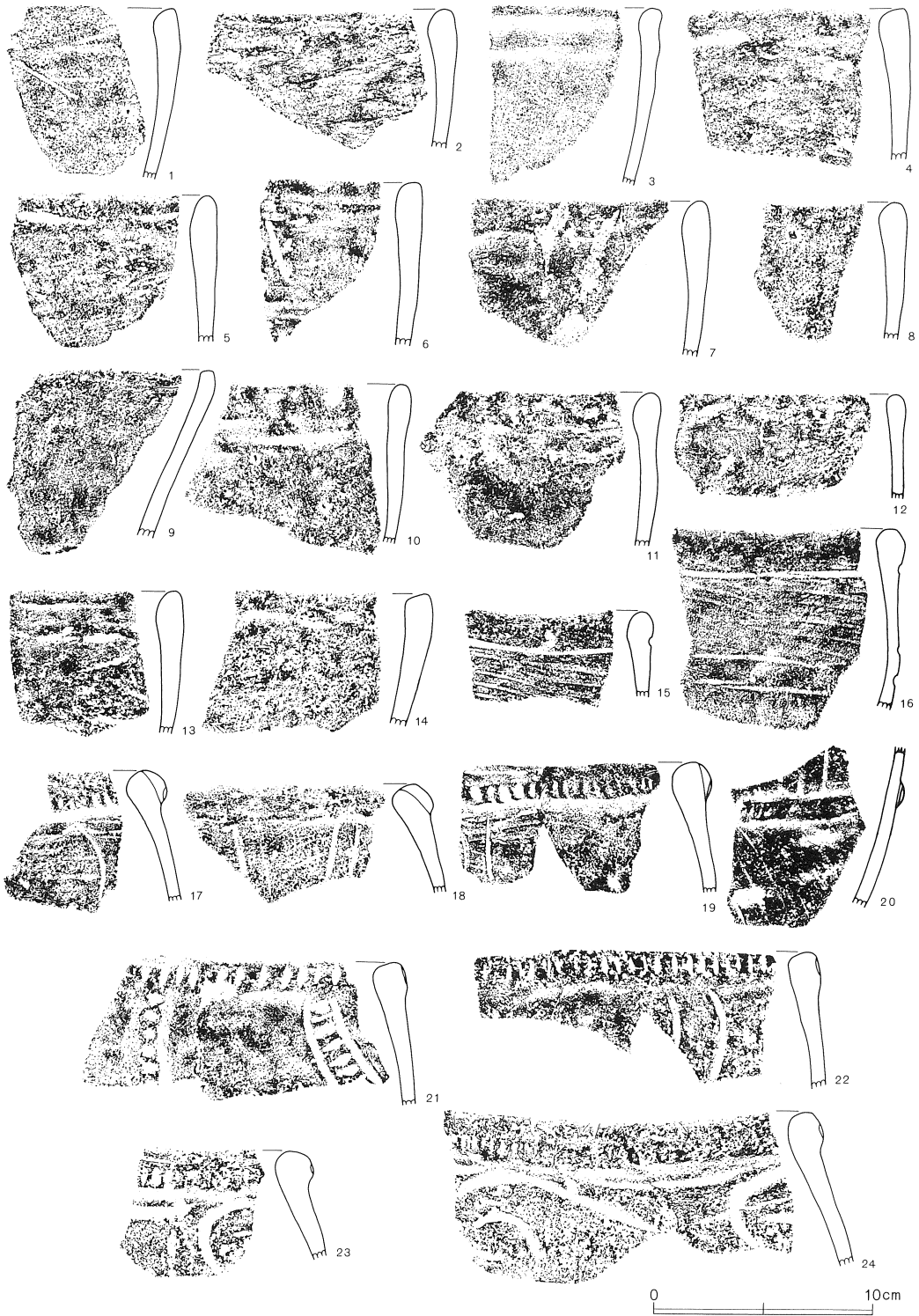
第268図 F区出土土器(7)



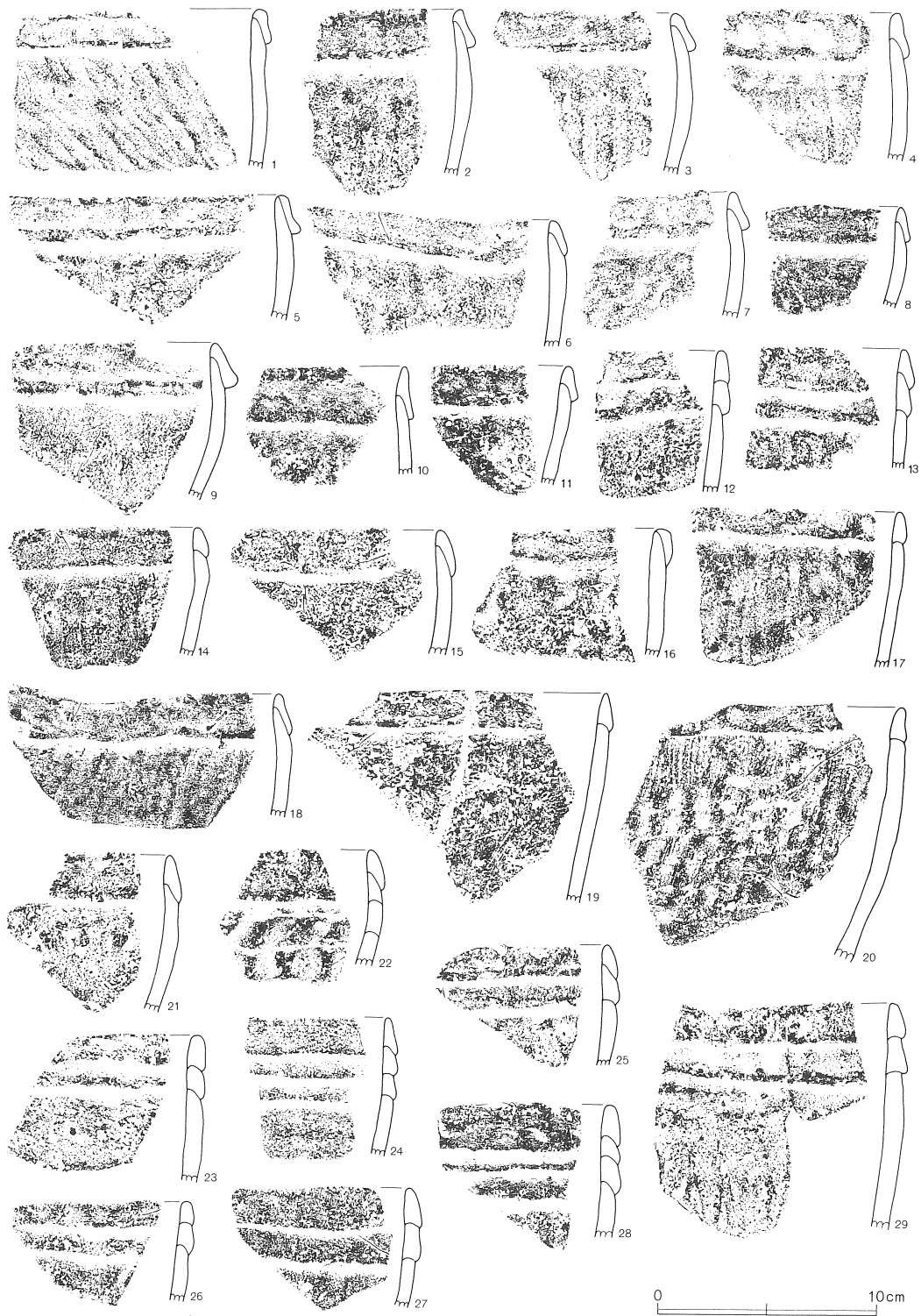
第269図 F区出土土器(8)



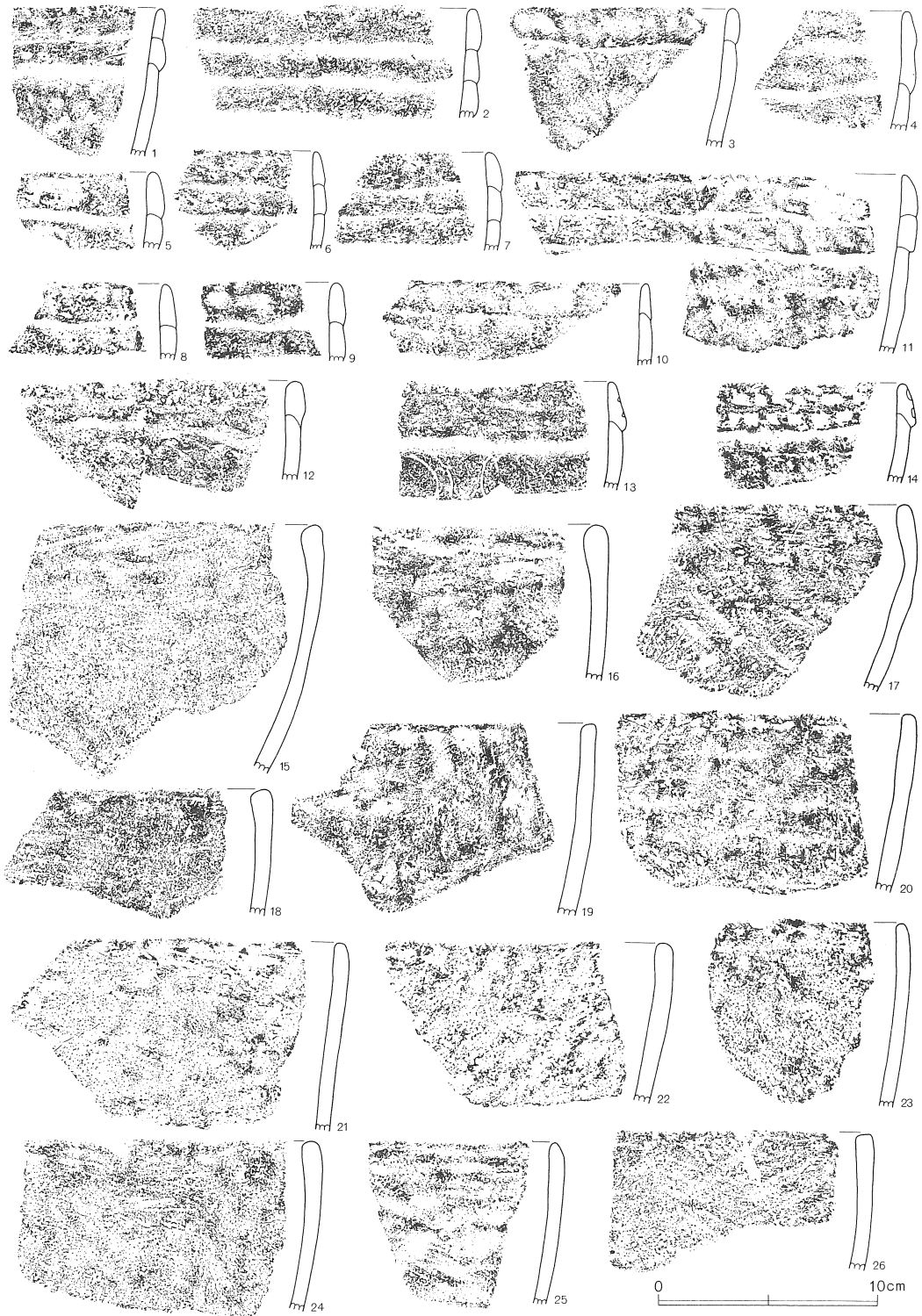
第270図 F区出土土器(9)



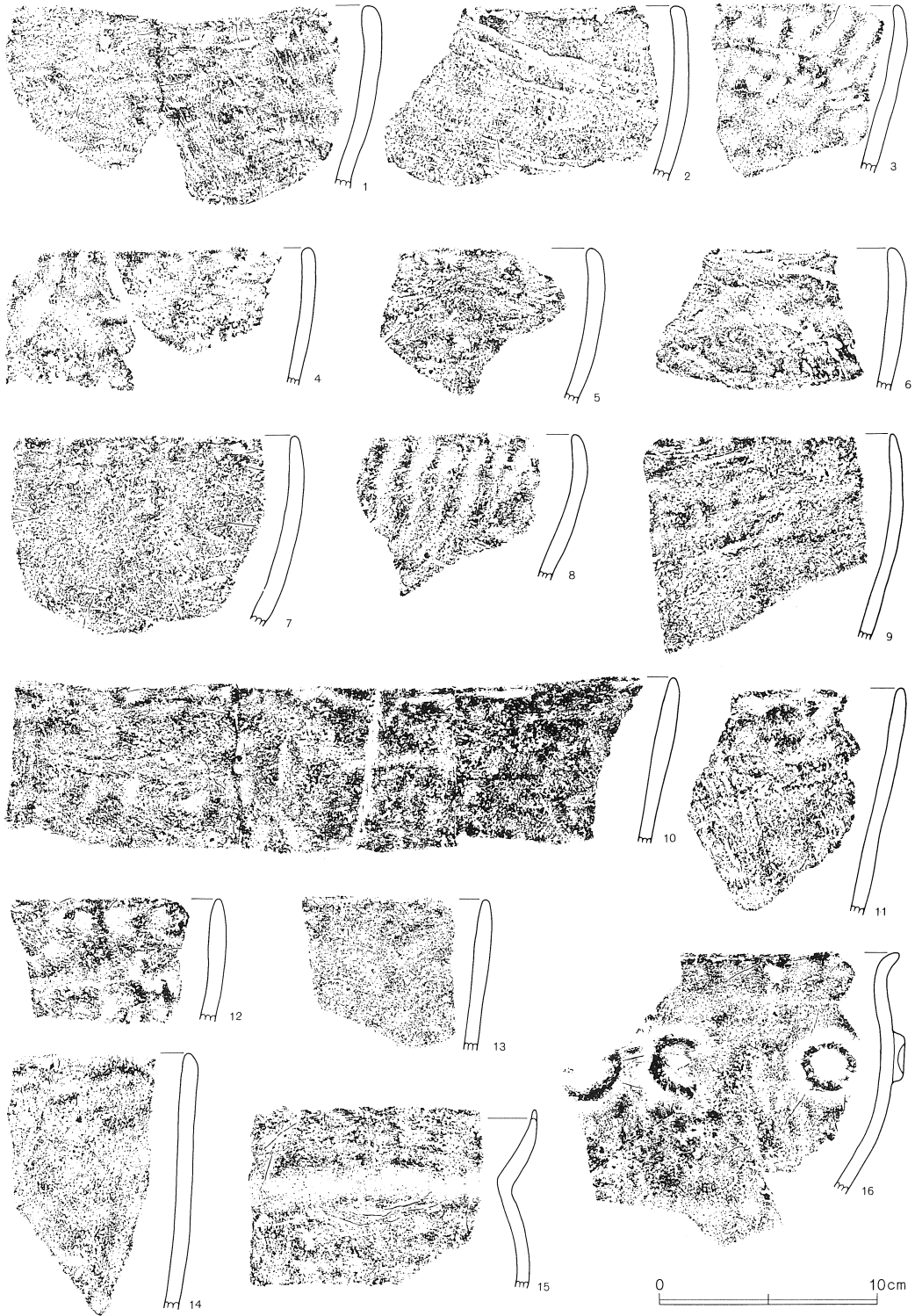
第271図 F区出土土器 (10)



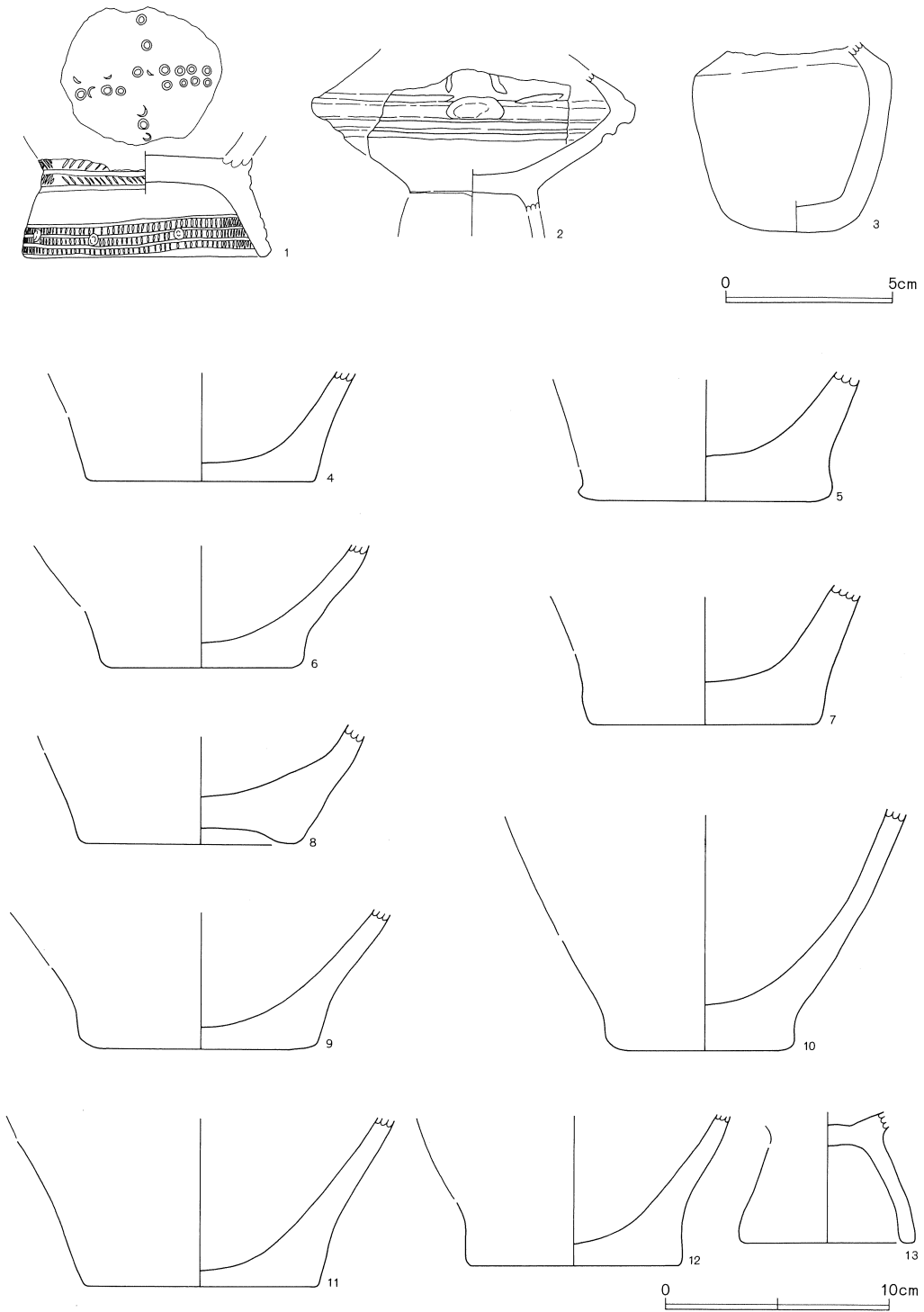
第272図 F区出土土器(11)



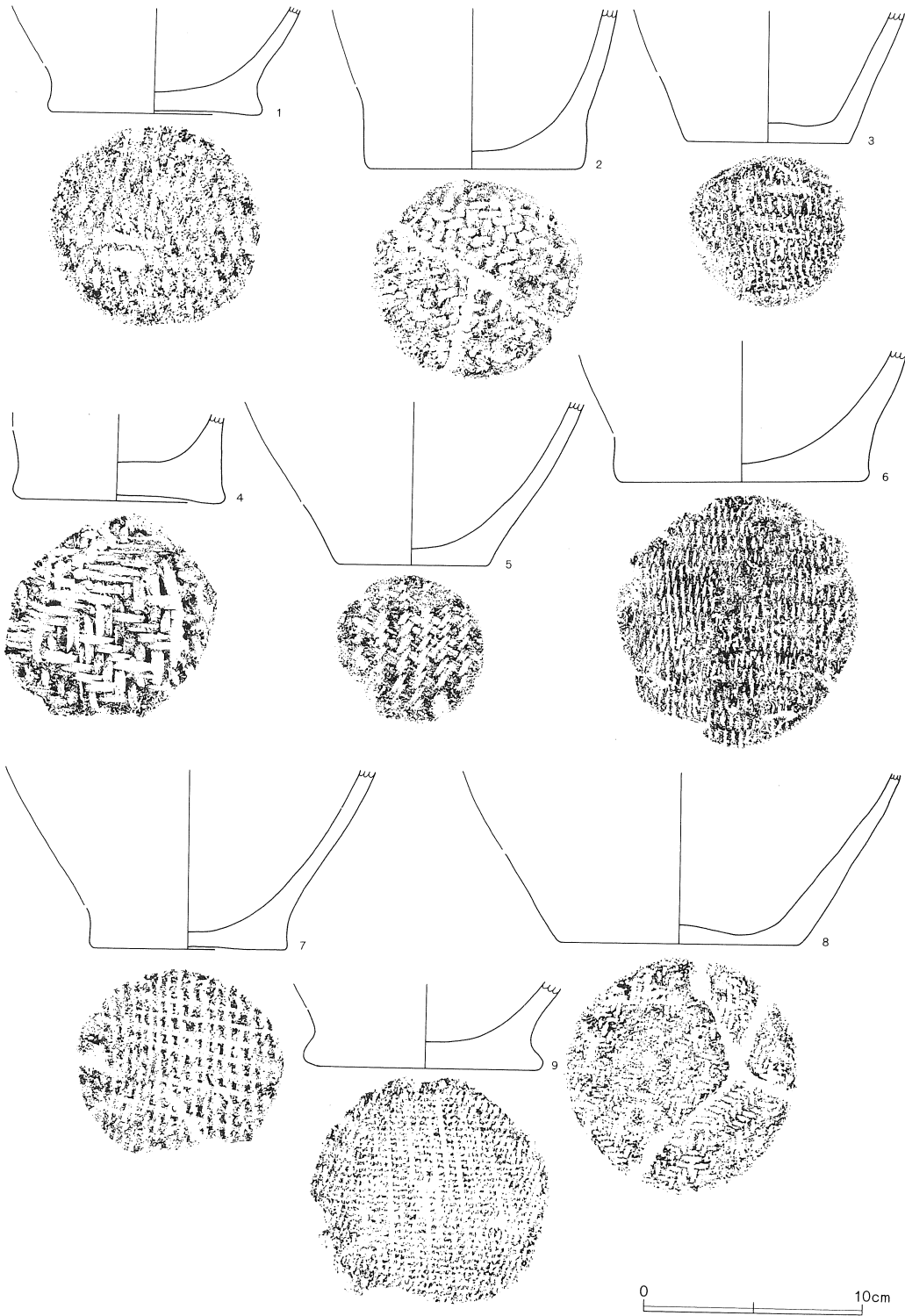
第273図 F区出土土器 (12)



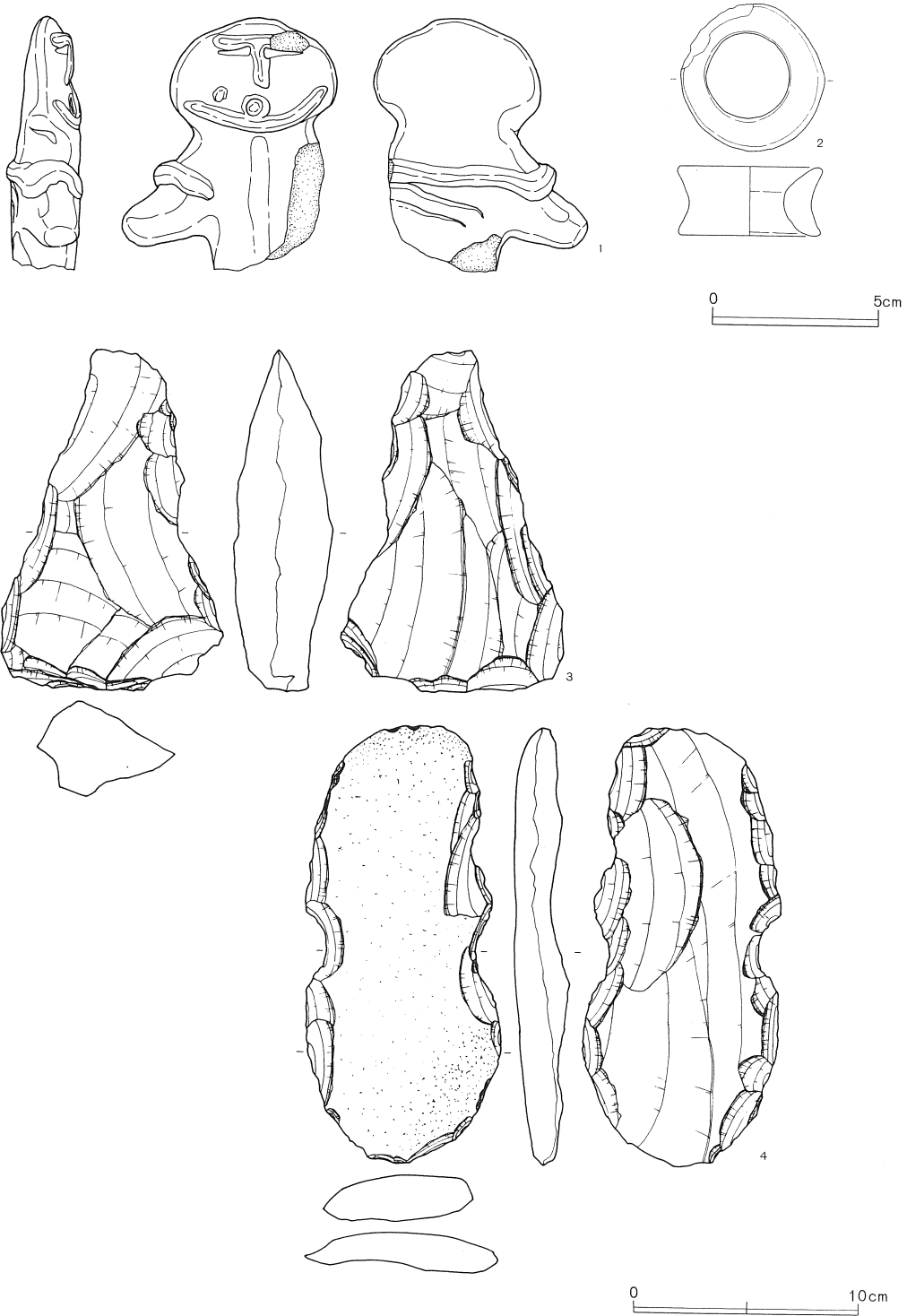
第274図 F区出土土器 (13)



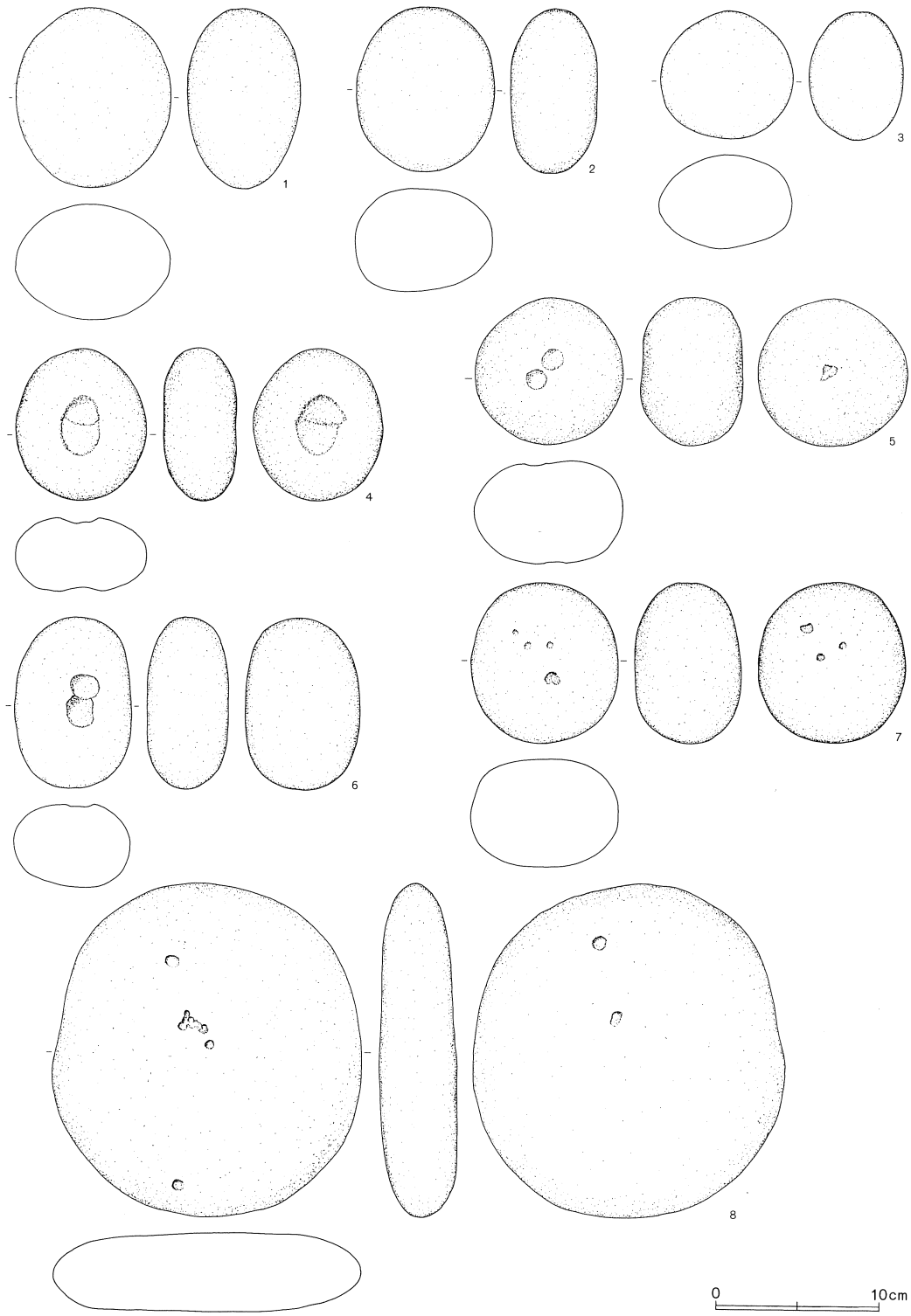
第275図 F区出土土器(14)



第276図 F区出土土器 (15)



第277図 F区出土土製品・石器



第278図 F区出土石器

IV 滝下遺跡の調査

1 調査の概要

滝下遺跡は原ヶ谷戸遺跡の東側、櫛挽台地の北縁に接する後背湿地上に立地する。標高約37m、台地との比高差は約4mである。調査の範囲は、東西600m近くに及ぶ。

調査は、東からA～Cの調査区が設定されて行なわれた。グリッドの設定はされていない。各調査区は現道等によって区切られている。B区は1～3区に分けられているが、境界についての記録はなく、遺構のまとまりによって捉えておく。

第281図は本遺跡B-3区における基本土層である。表土下に浅間a軽石が堆積する。浅間a軽石層下の土層には、黄色、黒色、白色粒子が含まれていたと記録されている。恐らく、鉄分、マンガンの沈着と考えられ、水田が営まれていた可能性が高い。表土下1m弱で、浅間b軽石層に至る。浅間b軽石層下からは、水田跡が検出されている。浅間b軽石層下約70～80cm程で、グライ化が見られる土層が堆積している。

A、B区からは溝跡、水田跡、土師器、須恵器、瓦等が検出されている。C区からは遺構、遺物は検出されなかった。以下、地区ごとに記述を行なう。

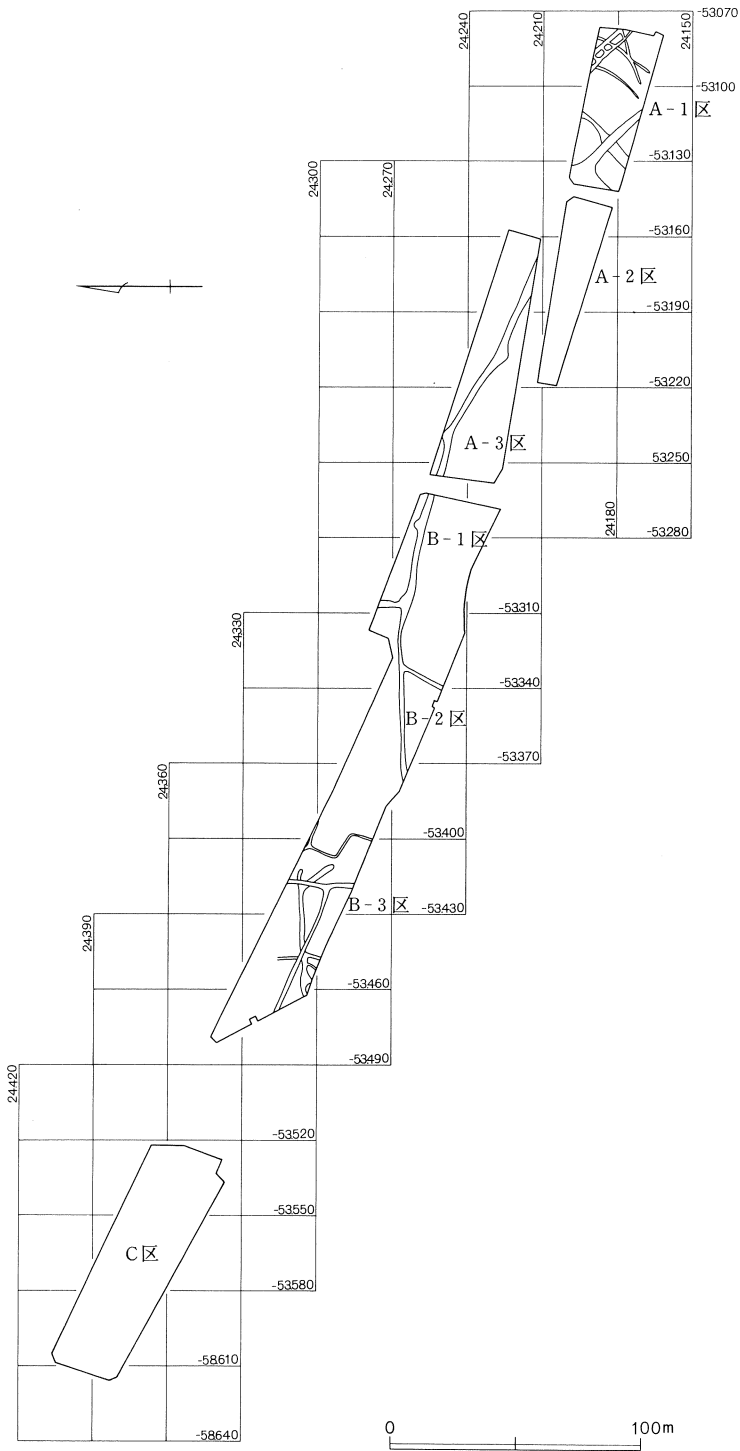
2 遺構と遺物

A-1区溝跡（第282図）

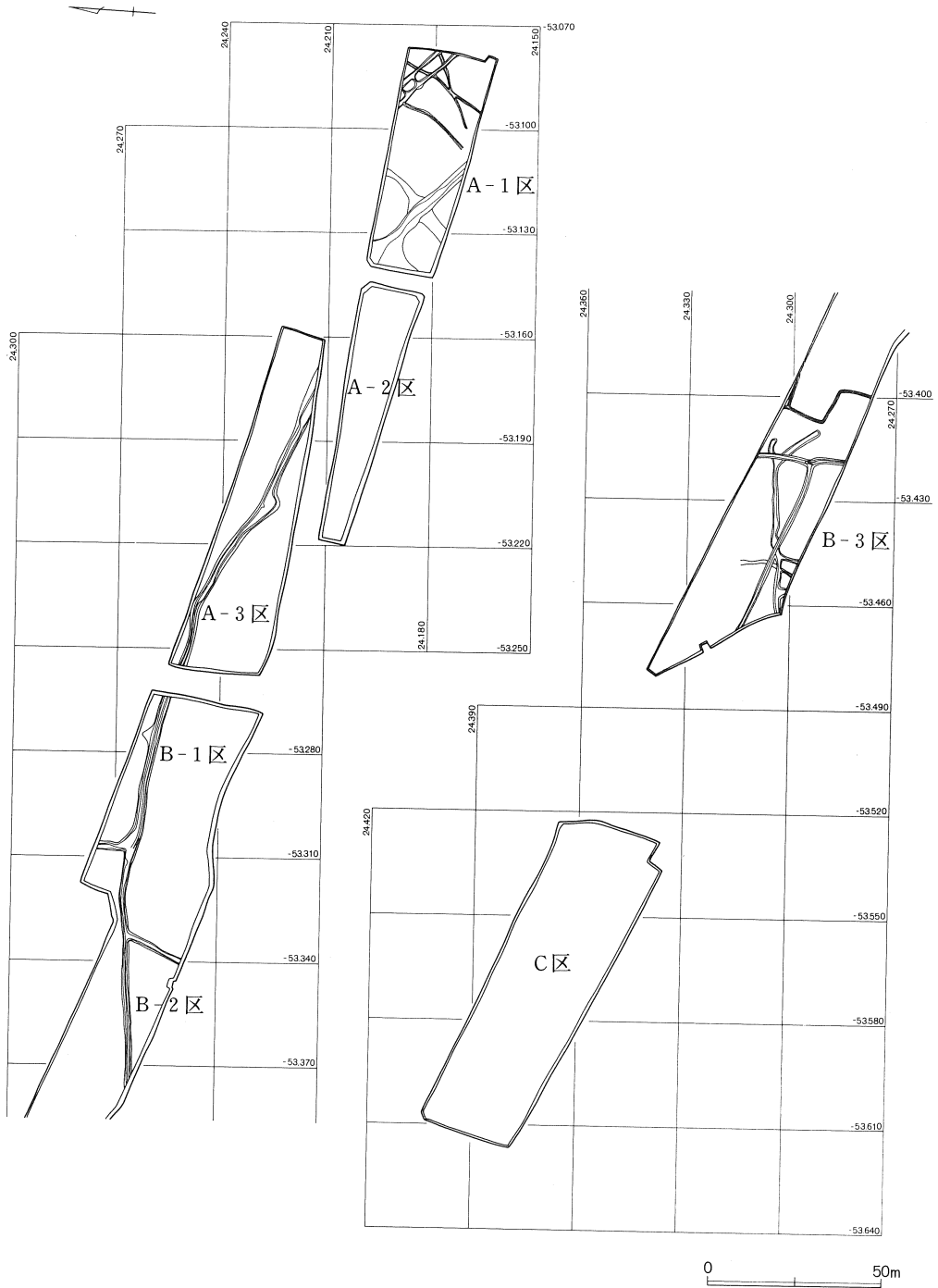
A-1区からは5条の溝跡が検出された（第282図）。南東から北西に向かうものが2条、南西から北東に向かうものが3条である。前者の方が新しい時期のものであると考えられる。前者はほぼ平行して走り、規模もほぼ同じである。検出面における幅が70～80cmあり、深さは約50cm程である。2条の溝をつなぐ短い溝跡も確認されている。後者は、検出面における幅が前者よりも狭く、深さも約30cm程である。やや蛇行している。本溝跡群からは遺物は検出されなかった。また、A-2区から、第291図9の須恵器片が出土している。平行叩き成形、内面には同心円状のあて目が見られる。本溝跡は出土遺物が少なく、性格を明らかにすることは困難であるが、恐らくは水利関係の溝跡と考えられる。

A-3～B-2区溝跡（第283～285図）

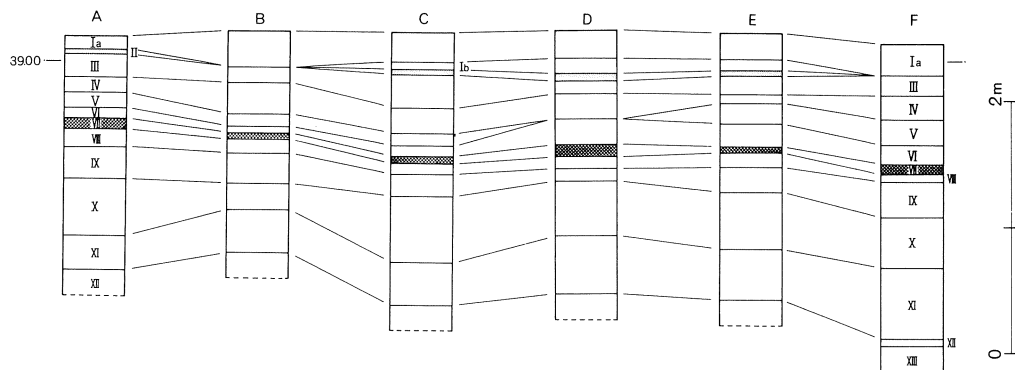
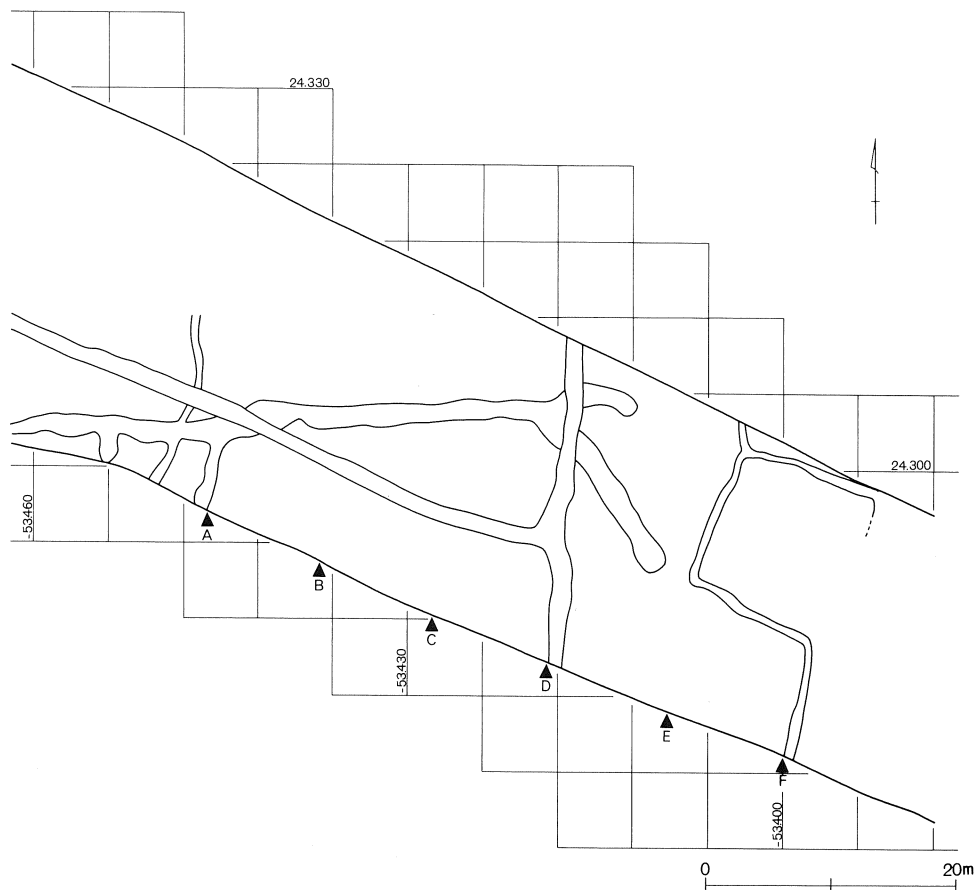
A-3区からはB-1、2区にかけて大規模な溝跡が検出された（第283～285図）。本溝跡は櫛挽台地北縁に沿うように掘り込まれており、検出された部分だけでも270mを超える大規模なものである。検出面における幅は2～3m、深さは約1m程である。A-1区の西半においても、土質の



第279図 滝下遺跡調査区配置図



第280図 滝下遺跡全測図



B-3区基本土層

I a層：黒褐色土。浅間a軽石をわずかに含む。

I b層：暗褐色土。浅間a軽石を含む。

II層：浅間a軽石層。

III層：褐色土。黄色粒子、黒色粒子を含む。

IV層：暗褐色土。白色粒子、褐色粒子を含む。

V層：褐色土。III層にくらべやや暗い。鉄分を含む。

VI層：黒褐色土。浅間b軽石、鉄分を含む。

VII層：浅間b軽石層。

VIII層：黒褐色粘質土。黒色粒子、浅間b軽石を含む。浅間b軽石降下直前の水田面。

IX層：暗灰褐色土。鉄分を含み、粘性が強い。

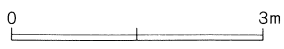
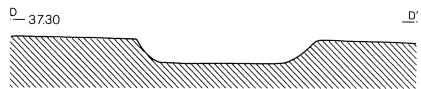
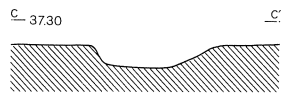
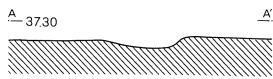
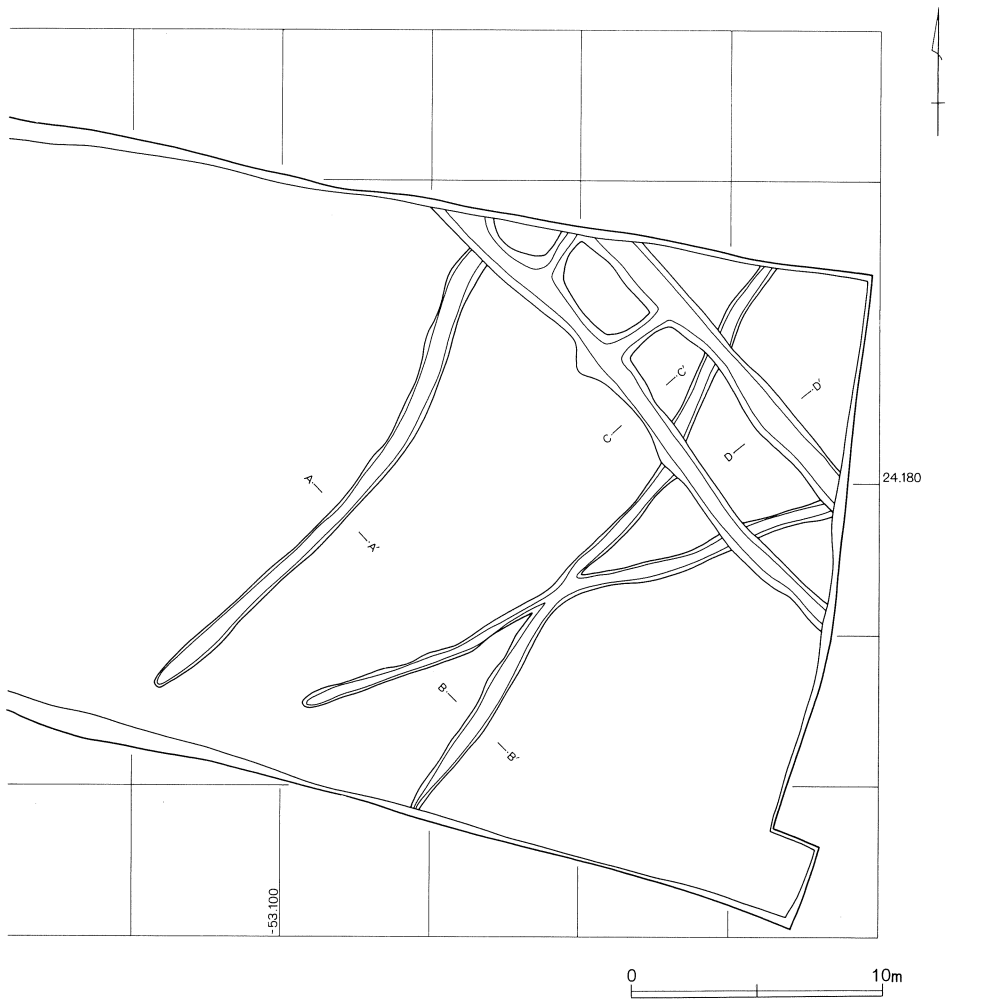
X層：灰褐色土。赤褐色の鉄分を多く含む。

XI層：暗青灰色粘質土。X層のブロックを多く含む。

XII層：青灰色粘土。

XIII層：青色砂質土。

第281図 B-3区基本土層



第282図 A-1区溝跡

違いの範囲のみが記録されているが（第280図）、本溝跡の続きと考えてよいだろう。

本溝跡は弧状に大きくに湾曲しながら東西方向に伸びている。A-3区では1条のみであるが、B-1, 2区で、北と南に分岐する溝跡があり、調査区外に伸びている。本溝跡と同時期のものであることはほぼ確実である。

本溝跡群の性格は、規模、形状から見て、水利、水運に関するものと考えられる。溝跡底面のレベルは記録されておらず、水流の方向は明確にし得ないが、確認面の標高が西高東低であることから見て、東に向かって流れていたと推定される。

本溝跡において埋土が記録された部分では、浅間b軽石を多量に含む層が断面上半部で確認されている。本溝跡の埋没がある程度進行した段階で、浅間b軽石が降下したと言えよう。埋土の状況から判断する限り、本溝跡は自然堆積によって埋没が完了したと考えられる。

第288図1～8は、本溝跡のB-1区より出土したものである。1～4は坏、6～8は甕である。1は口縁部が屈曲して、直立気味に立ち上がるもの。2～3は胴部上半が緩やかに括れ、外反する。括れ部より下位には、ケズリ痕がわずかに観察される。何れも器面の摩耗が著しい。6, 7は口縁部がわずかに外反しながら、強く外傾する甕、8は口縁部の外傾が弱い形態のものである。甕も器面の摩耗が著しい。

5は鉢形を呈している。口唇部内面にごく細い沈線が巡り、口唇部端面は狭い。口唇部直下には、幅2mmほどの沈線が巡り、沈線直下に隆帯状の盛り上がりが見られる。その下には幅5mm程の、ごく浅い沈線が巡る。金属製品の模倣品の可能性もある。1は他の坏よりもやや古手の様相を持ち、5については時期的なことは不明であるが、他の遺物は8世紀前半のものと考えられる。

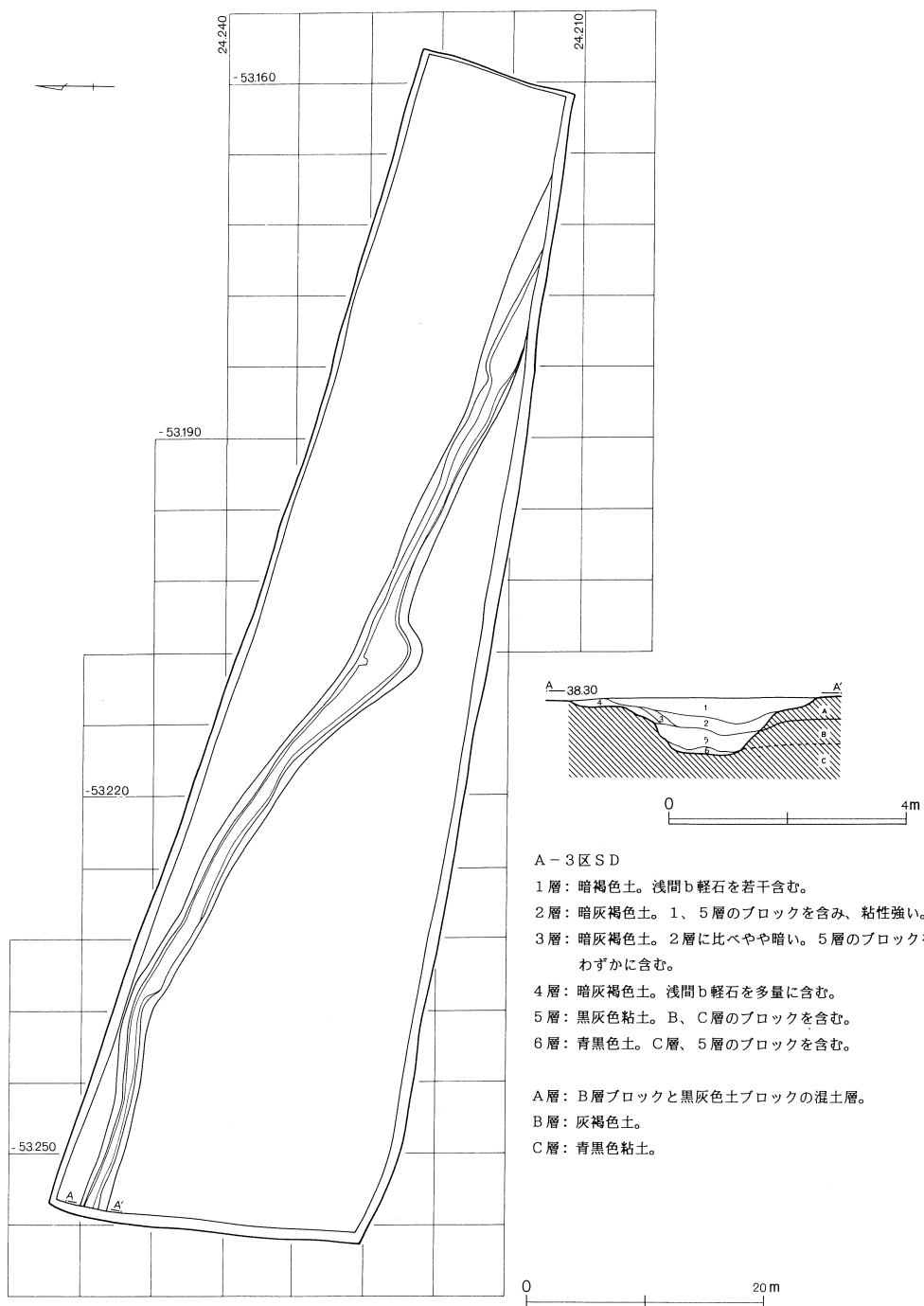
本溝跡開削の時期は明確にはし得ないが、検出された遺物から、8世紀前半以前と考えられる。そして12世紀前半には、埋没が進行したと考えられる。

B-1, 2区からは、溝跡以外から遺物が検出されている（第288図9, 10、第289図、第291図1～3, 7、第292図5）。出土位置の記録はなく、遺構確認面出土と考えられる。第288図9は須恵器坏で、B-1区から出土している。底部内面に墨書が観察された。「井」字と点が認められる（註1）。底部は回転糸切り離し。第288図10は須恵器で高台が付く坏、または碗である。底部は回転糸切り離し、後に高台をナデつけている。

第289図はB-2区出土である。1は須恵器大甕の頸部破片である。2は体部にハケ目を持つ甕である。口縁部は無文でやや外反している。頸部の下端近くに2段の高まりがあり、その上下には横方向のナデが見られる。S字状口縁の系譜を引く台付甕と考えられる。五領期の後半に位置づけられよう。2は甕の口縁部。口唇部端面が肥厚し、断面は丸く収まる。4は口縁部がわずかに屈曲して直立気味に立ち上がる坏である。3, 4とも器面の摩耗が著しい。

第291図1, 3はB-1区出土の須恵器片である。いずれも大甕の体部である。平行叩き成形で、内面には、1が無文、3が同心円状のあて目が見られる。2はB-2区出土の大甕口縁部である。口唇部が肥厚し、外面に楕円波状文が施されている。

7はB-1出土の陶器片である。第292図5は円筒埴輪の破片である。突帯は断面三角形を呈する。B-1区出土。

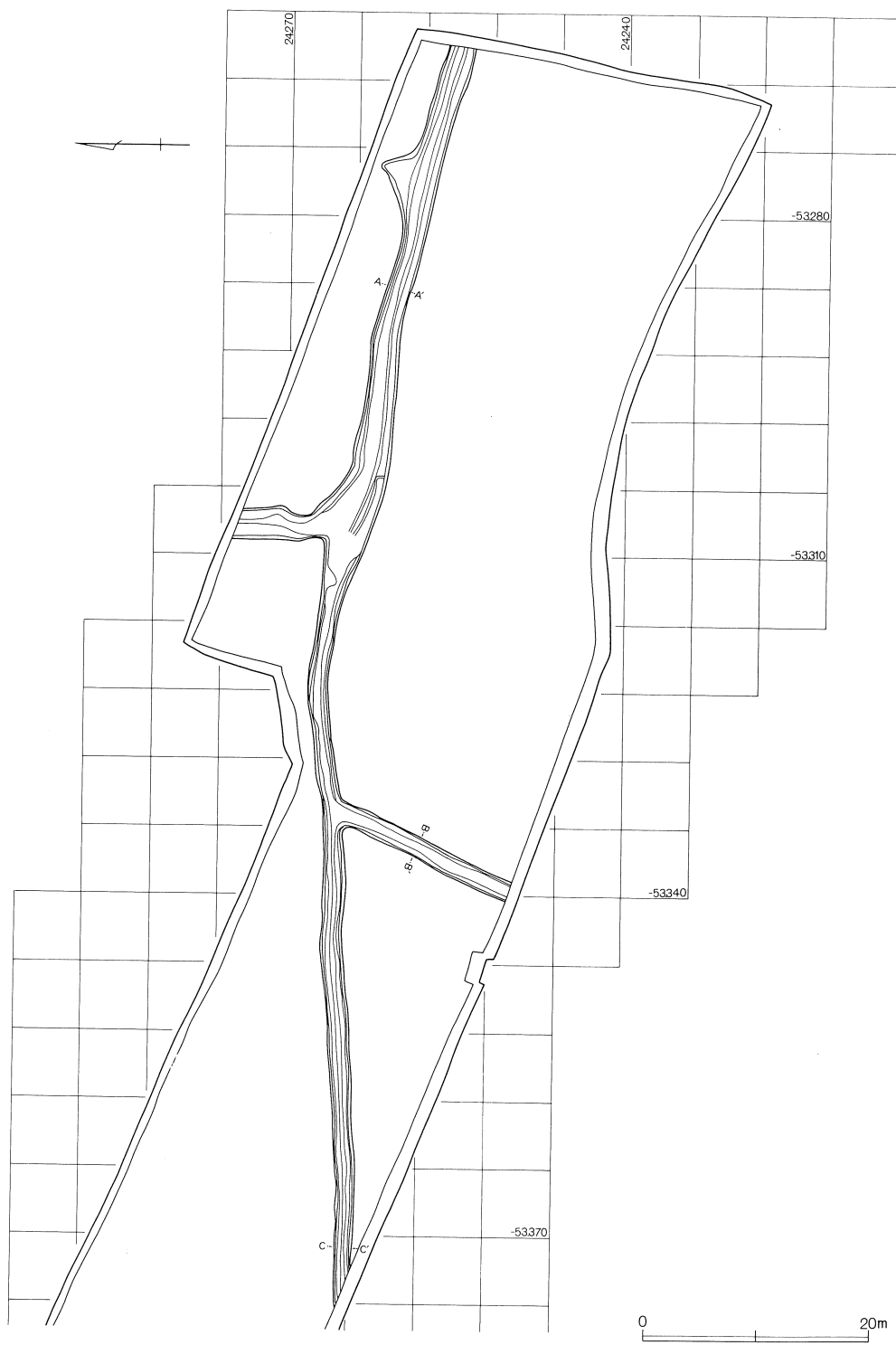


A-3区SD

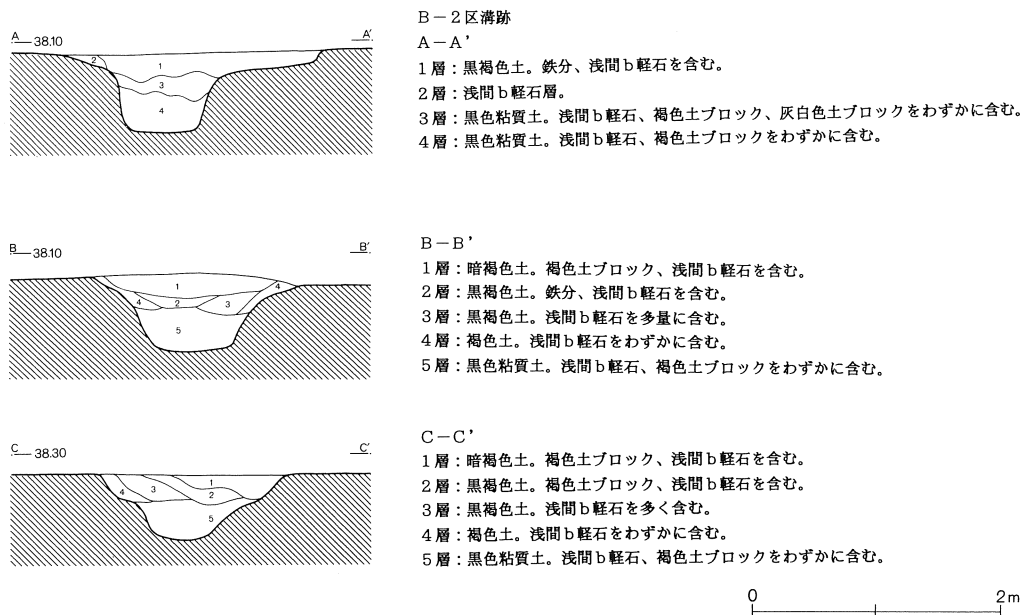
- 1層：暗褐色土。浅間b軽石を若干含む。
- 2層：暗灰褐色土。1、5層のブロックを含み、粘性強い。
- 3層：暗灰褐色土。2層に比べやや暗い。5層のブロックをわずかに含む。
- 4層：暗灰褐色土。浅間b軽石を多量に含む。
- 5層：黒灰色粘土。B、C層のブロックを含む。
- 6層：青黒色土。C層、5層のブロックを含む。

A層：B層ブロックと黒灰色土ブロックの混土层。
 B層：灰褐色土。
 C層：青黒色粘土。

第283図 A-3区溝跡



第284図 B-1, 2区溝跡



第285図 B-1, 2区溝跡断面図

B-3区溝跡 (第286図)

B-3区からは溝跡と水田跡が検出された。溝跡には2つのまとまりが見られる。第1号溝跡と第2号溝跡は、第3号溝跡埋没後に掘り込まれている。

第1号溝跡は南東から北西方向に伸び、東端は第2号溝跡に接続している。第2号溝跡はほぼ南北方向に伸びている。底面のレベルは、第1号溝跡は東、第2号溝跡は南が低く、この方向に水流があったと考えられる。

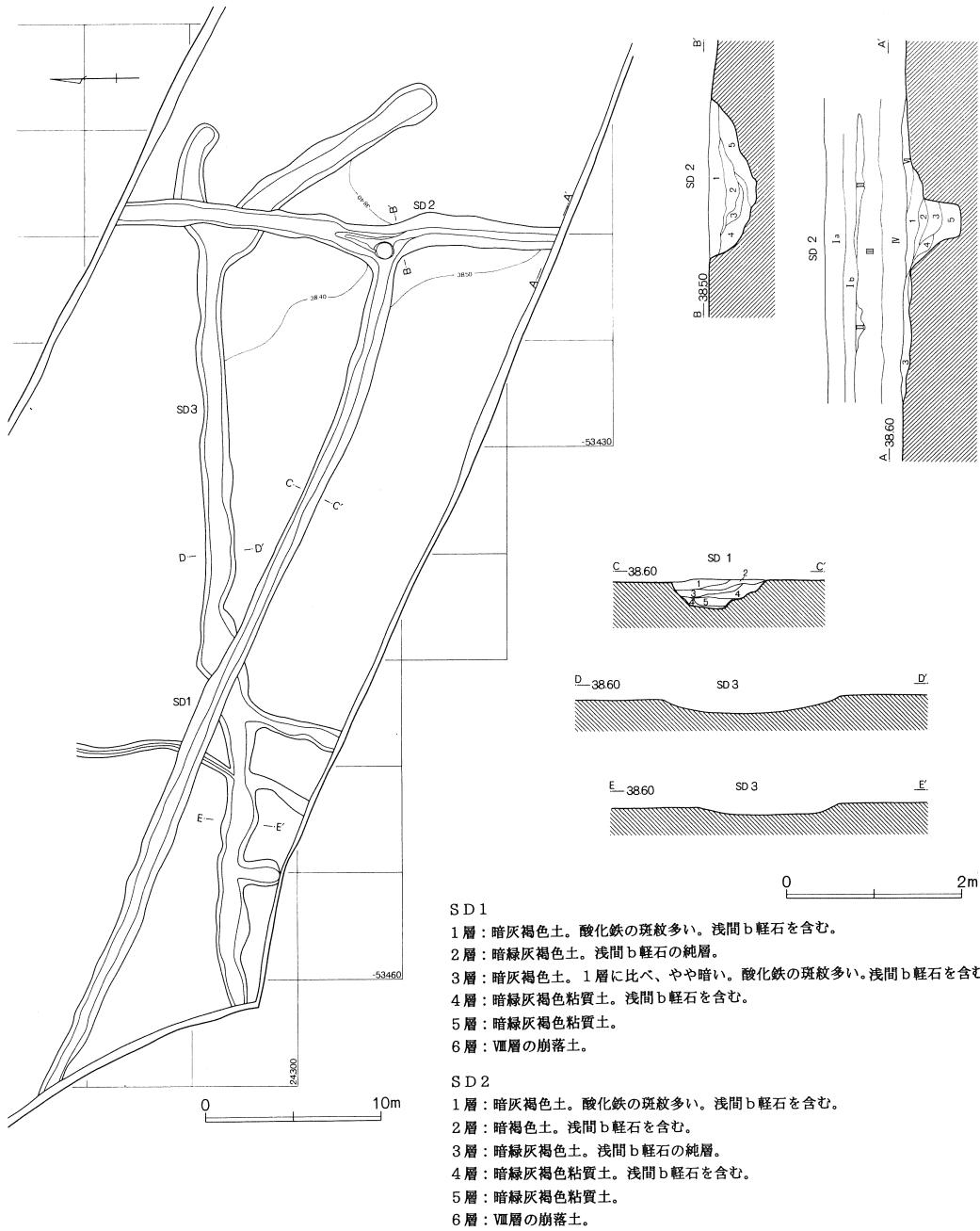
第1, 2号溝跡は幅1.5~2m、深さ約40~60cmである。埋土が記録された部分では、断面の中位から上位にかけて浅間b軽石が観察されている。

第3号溝跡は第1, 2号溝跡に切られている。ほぼ東西方向に伸び、西側の部分で、南北方向に伸びる溝4条が分岐している。南に伸びるものが3条、北に進むものが1条である。北行するものはわずかに蛇行しながら進み、9m程で平面、掘り込みとも確認できなくなる。溝跡底面のレベルに明確な方向性は見られない。

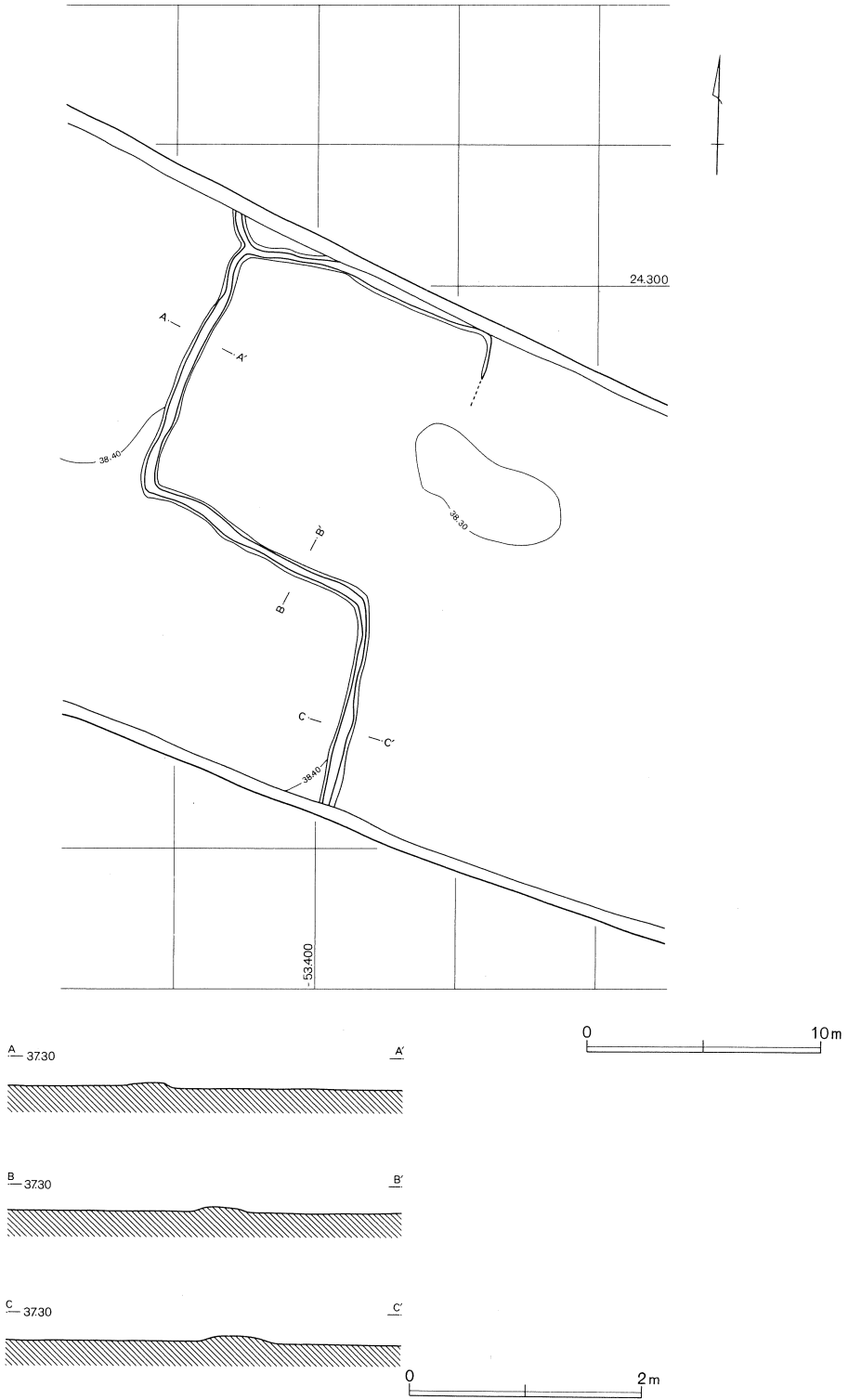
東側は2条に分岐している。1条はわずかに湾曲して東へ進み、分岐点から5m程で、止まっている。また、1条は直線的に南東方向に伸び、15m程進んで収束している。第3号溝跡は埋土に関する記録は残っていない。

第290図は第1, 2号溝跡出土として一括されていたものである。1は須恵器の大甕、2は須恵器坏である。3は、かわらけである。

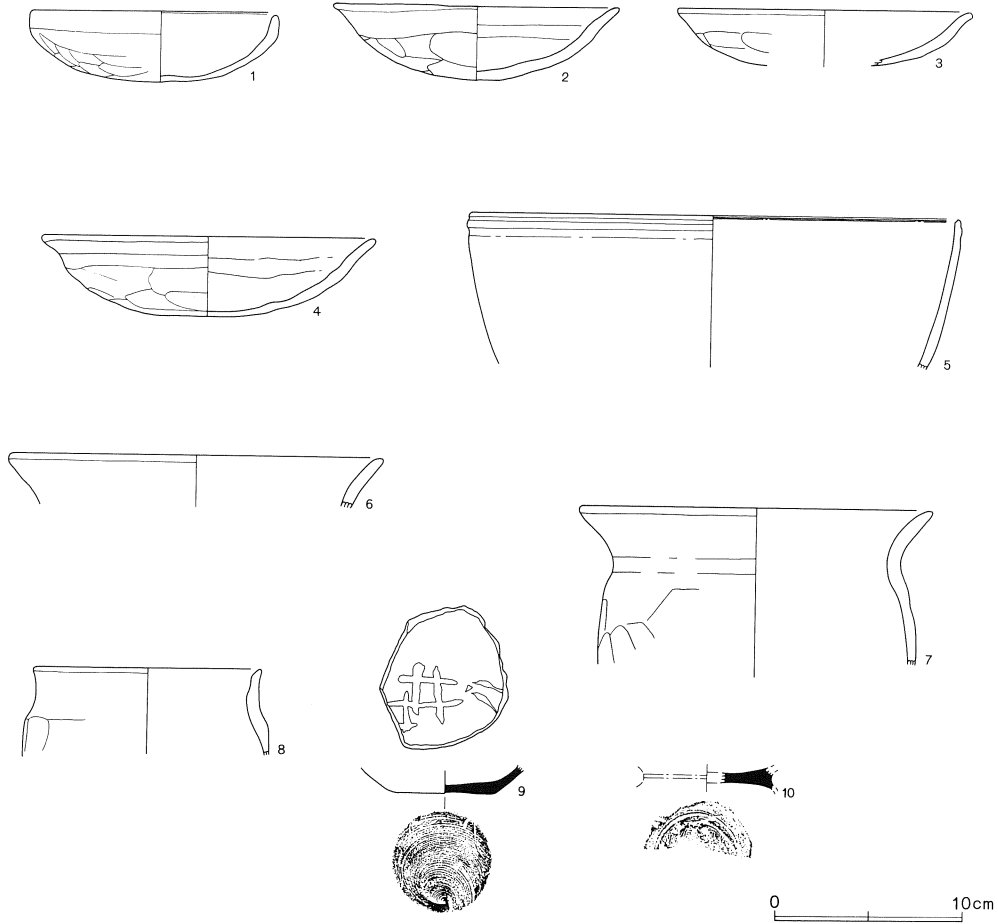
第292図3の瓦も第1, 2号溝跡出土である。平瓦で、内面には桶巻の痕跡が見られる。



第286図 B-3区溝跡



第287図 B-3区水田跡



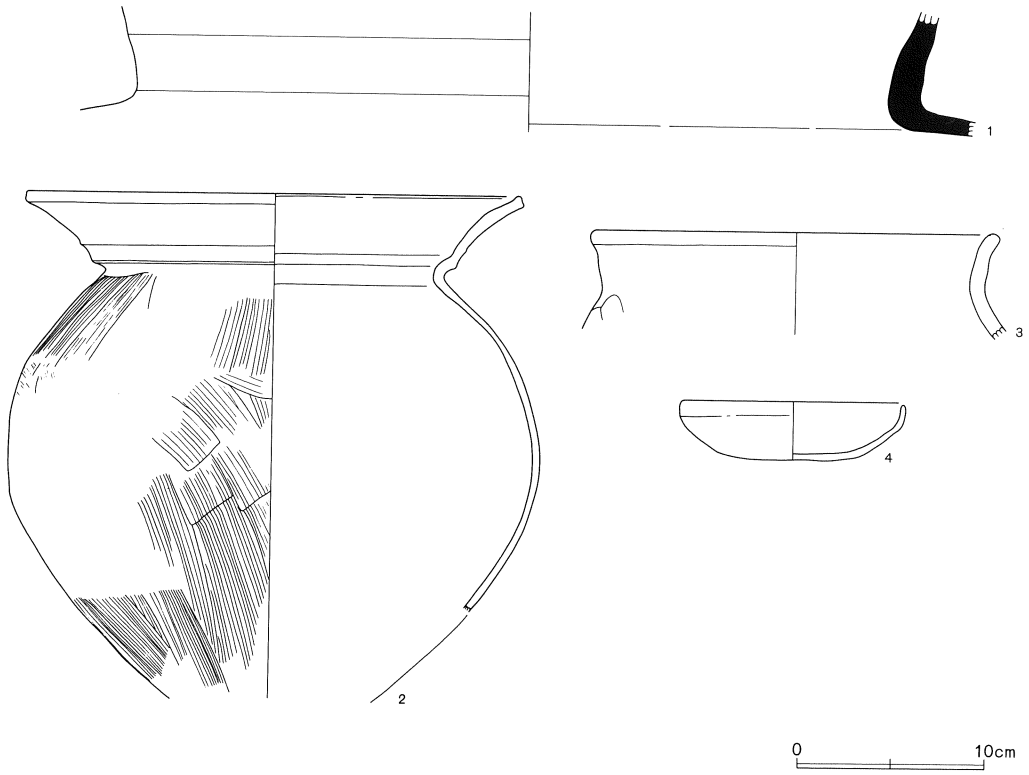
第288図 B-1区出土遺物

B-3区水田跡（第287図）

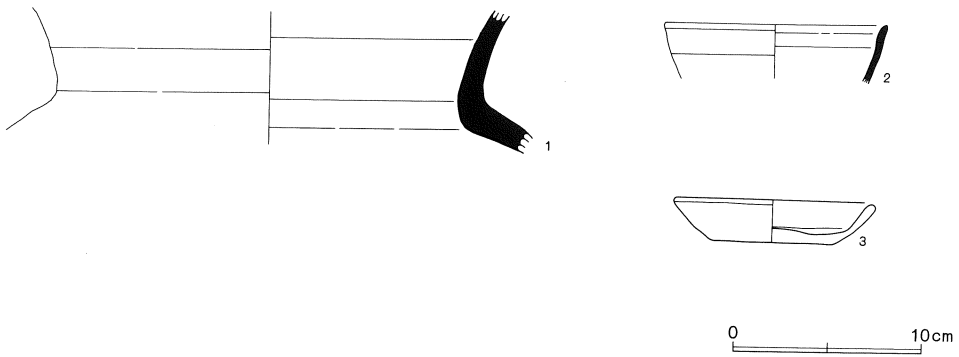
溝跡群の東側に位置する。浅間b軽石層直下で検出された。本遺跡では浅間b軽石下に水田跡の存在が予想されたので、軽石の除去は慎重に行なわれたが、他の地区では水田跡は検出されなかった。

地形面はほぼ平坦である。確認された範囲の面積は約260㎡である。調査時に水田耕作土と認定された土層は、基本土層第Ⅷ層である（第281図）。黒褐色の粘質土で、マンガン粒と考えられる黒色粒子を含んでいる。水田耕作土直下の層は、基本土層第Ⅸ層であり、鉄分を多く含んだ暗灰褐色土である。この水田跡に伴う水路跡は、検出されていない。立地から見て、恐らく湿田であったと考えられる。畦畔には大小の区別は認められない。畦畔の下端幅は40～50cm、上端幅は30cm前後である。水口は検出されていない。

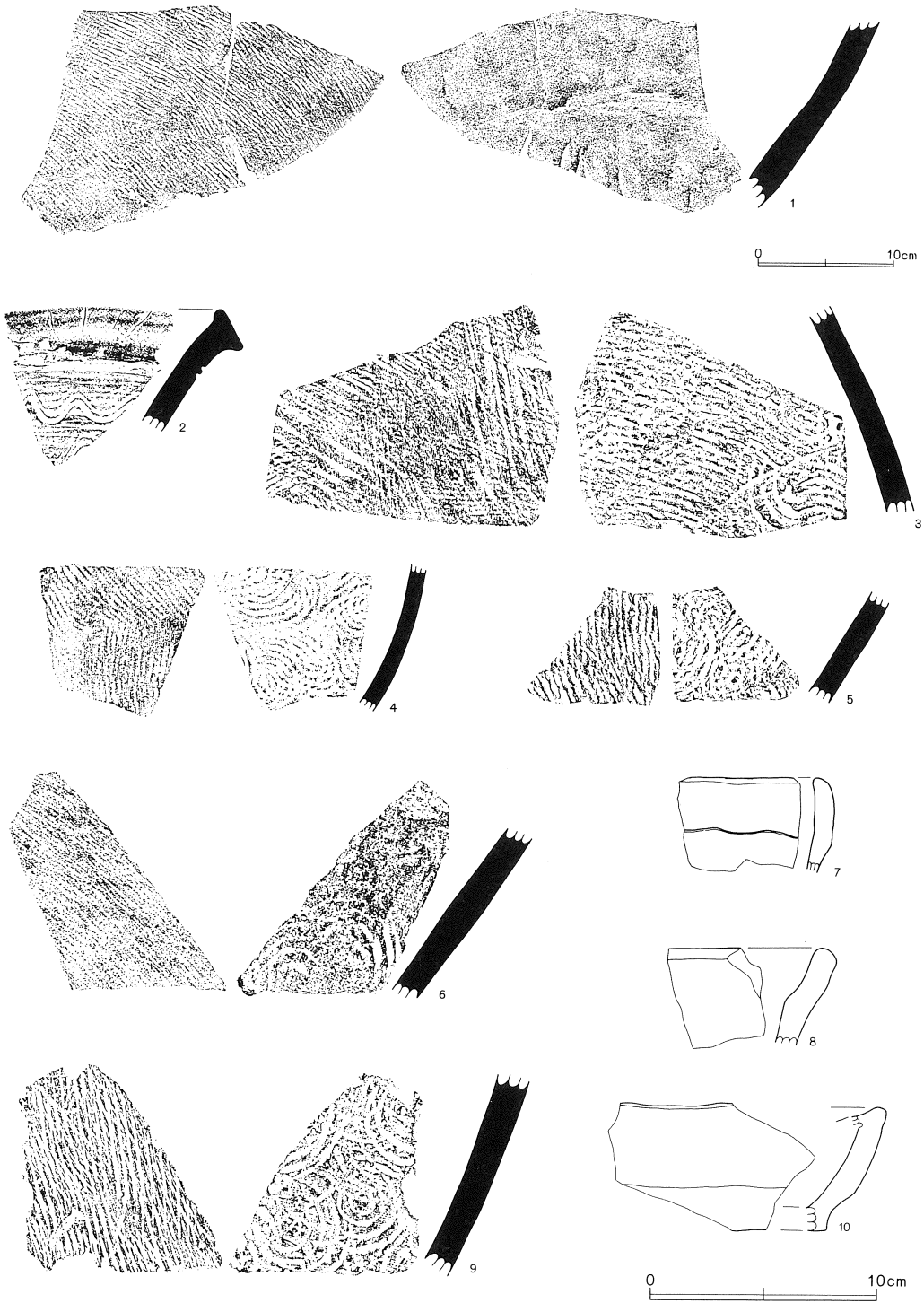
畦畔は、確認された限りでは、クランク状を呈しており、畦畔が分岐する部分が調査区北端においてわずかに確認できる。区画される水田面は確認できない。恐らくは、未確認の畦畔と組み合せて水田面を区画していたと考えられる。水田面の形態は不明だが、方形が基本であった可能性が強



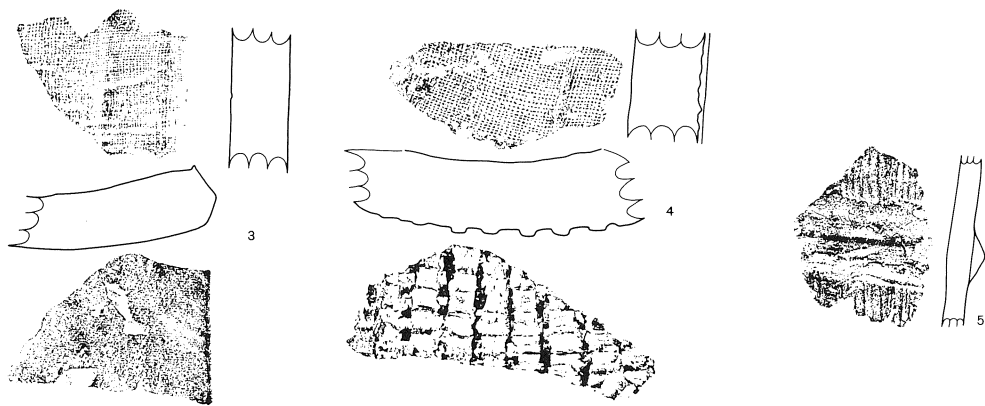
第289図 B-2区出土遺物



第290図 B-3区第1, 2号溝跡出土遺物

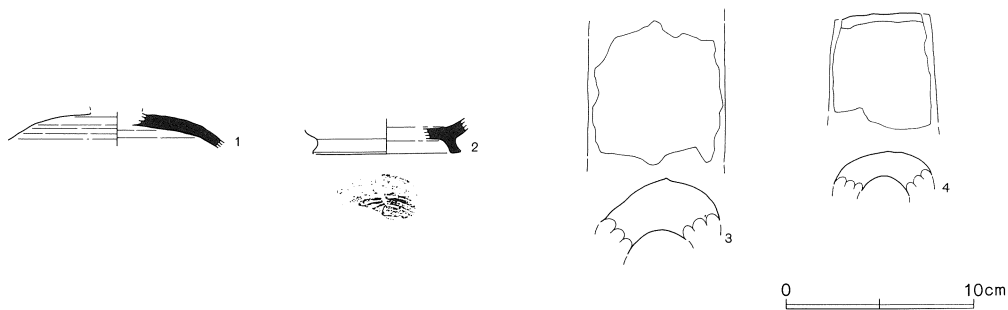


第291図 滝下遺跡出土須恵器・陶器



0 10cm

第292図 滝下遺跡出土瓦・埴輪



0 10cm

第293図 滝下遺跡表採遺物

い。畦畔は、南北軸のものがN-10°～20°-E、東西軸のものがN-70°～80°-W、座標北からずれている。

水田跡直上からは、第291図9,10、第292図2の遺物が検出されている。第291図9,10は素焼の陶器で、9はほうろく、または内耳鍋、10は内耳鍋である。第292図2は平瓦で、内面に布目が見られる。

表採資料（第291図4～6,第292図1,4、第293図）

第291図4～6は、須恵器大甕の破片である。いずれも平行叩き成形、内面には同心円状のあて目が見られる。第292図1,4は平瓦の破片である。1は桶巻技法の痕跡が認められる。端部には2条の沈線が施文されている。4は内面に布目、外面に格子目叩きが認められる。第293図1は須恵器蓋である。下端と、つまみ部が欠損している。外面回転ヘラケズリ。2は高台坏の脚部である。回転糸切離し、後に高台をナデつけている。3,4は羽口である。3は口部、基部とも欠損している。部分的に発泡している。4は口部が残存している。基部がやや太い。

註1 「井」字については、魔除記号の可能性が平川 南氏によって指摘されている（平川 1991）。

V 自然科学的分析

1 原ヶ谷戸遺跡出土縄文土器の胎土分析

(株)第四紀 地質研究所 井上巖

X線回折及び電子顕微鏡観察

1 実験条件

1-1 試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示すとうりである。

X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、 $\phi 10\text{m}/\text{m}$ の試料台にシルバーペーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

1-2 X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JDX-8020X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target : Cu、Filter : Ni、Voltage : 40Kv、Current : 30mA、ステップ角度 : 0.20° 、計数時間 : 0.5SEC。

1-3 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物及びガラス生成の度合についての観察は電子顕微鏡によって行なった。観察には日本電子製T-20を用い、倍率は、35、350、750、1500、5000、の5段階で行ない、写真撮影をした。

35~350倍は胎土の組織、750~5000倍は粘土鉱物及びガラスの生成状態を観察した。

2 実験結果の取扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示すとうりである。

第1表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組成が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行なった結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの強度を測定したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト (Mullite)、クリストバーライト (Cristobalite) 等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

2-1 組成分類

1) Mo-Mi-Hb三角ダイアグラム

第294図左に示すように三角ダイアグラムを1～13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表わした。

Mo, Mi, Hb, の三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、のX線回折試験におけるチャートのピーク強度をパーセント (%) で表示する。

モンモリロナイトは $Mo / (Mo + Mi + Hb) \times 100$ でパーセントとして求め、同様にMi, Hb、も計算し、三角ダイアグラム内に記載する。

三角ダイアグラム内の1～4はMo, Mi, Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分によりなっていることを表わしている。

位置分類についての基本原則は第294図に示すとうりである。

2) Mo-Ch, Mi-Hb菱形ダイアグラム

第294図右に示すように菱形ダイアグラムを1～19に区別し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch)、のうち、a) 三成分以上含まれない、b) Mont, Ch, の2成分が含まれない、c) Mi, Hb, の2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイアグラム内はMont-Ch, Mica-Hbの組合せを表示するものである。Mont-Ch, Mica-HbのそれぞれのX線回折試験のチャートの強度を各々の組合せ毎にパーセントで表わすもので、例えば、 $Mo / (Mo + Ch) \times 100$ と計算し、Mi, Hb, Ch, も各々同様に計算し、記載する。

菱形ダイアグラム内にある1～7はMo, Mi, Hb, Ch, の4成分を含み、各辺はMo, Mi, Hb, Ch, うち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

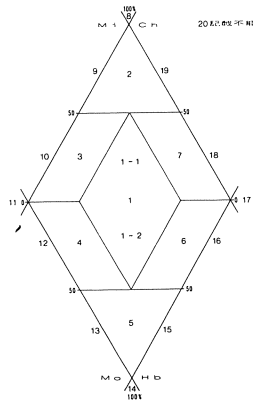
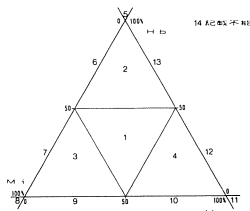
位置分類についての基本原則は第294図に示すとうりである。

2-2 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行なった。

ムライト (Mullite) は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバーライト (Cristobalite) はムライトより低い温度、ガラスはクリストバーライトよりさらに低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクを



第294図 三角・菱形ダイアグラム位置図

第1表 胎土性状表

試料 No	タイプ分類	焼成ランク	組成分類										粘土鉱物 および 造岩鉱物					ガラス		備考
			Mo	Mi	Hb	Mont	Mica	Hb	Ch	Fe	Ch	Mo	Kao	Kfels	Albite	Q1	P1	Cr	Ma	
1	B	Ⅲ	6	10		127	133	182							974	790			中粒	中粒砂を混入した砕屑性粘土
2	H	Ⅱ～Ⅲ	14	20											1955	270	188		中～粗粒	粗粒砂を混入した砕屑性粘土
3	D	Ⅲ	7	9		123	104	181			90				3508	1072	124		中粒	細粒砂を混入した砕屑性粘土
4	G	Ⅲ	11	20	173										2246	487			中粒	中粒砂を混入した砕屑性粘土
5	D	Ⅱ～Ⅲ	7	9		133	107	223	107						2148	463	181		中～粗粒	中粒砂を混入した砕屑性粘土
6	A	Ⅲ	5	20											1711	417	120		中粒	粗粒砂を混入した砕屑性粘土
7	F	Ⅲ	8	20		110						175			2993	460	212		中粒	細粒砂を含む砕屑性粘土
8	E	Ⅲ	7	20		103	85								3033	731			中粒	粗粒砂を混入した砕屑性粘土
9	C	Ⅲ	6	20		128	138								2599	1417			中粒	細粒砂を含む砕屑性粘土
10	A	Ⅲ	5	20			91								2576	598	126		中粒	細粒砂を含む砕屑性粘土

焼成ランク Mu:Ⅰ Mu-Cr:Ⅱ Cr-glass:Ⅲ glass:Ⅳ 原土:Ⅴ Mont:モンモリロナイト
Mica:雲母類 Hb:角閃石 Ch:緑泥石 Ka:カオリナイト Hy:紫蘇輝石 Qt:石英 P1:斜長石
Cr:クリストバーライト Mu:ムライト

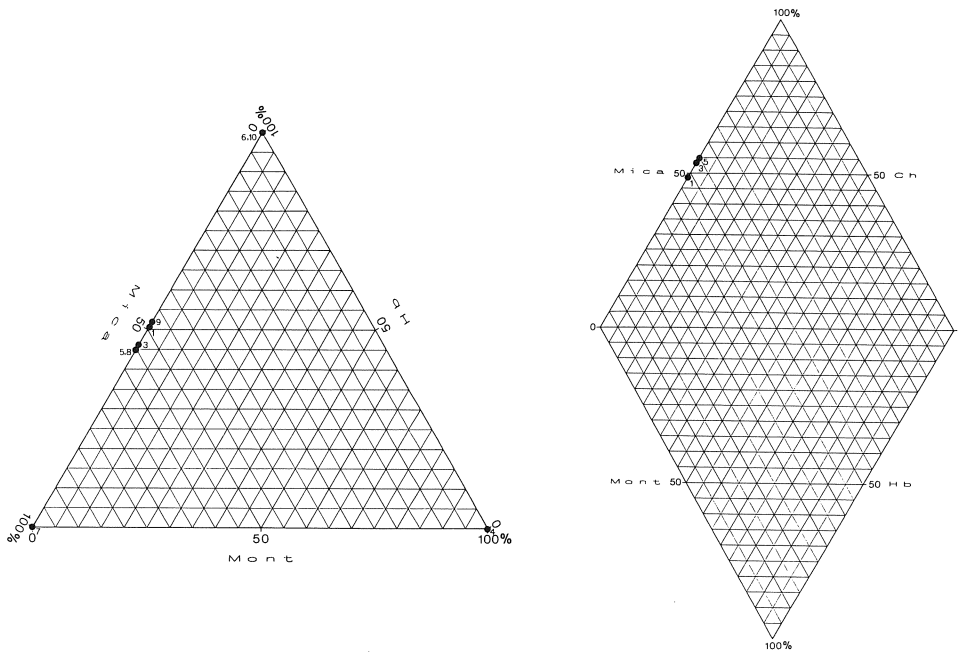
I～Vの5段階に区分した。

- a) 焼成ランクⅠ：ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発泡している。
- b) 焼成ランクⅡ：ムライトとクリストバーライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。
- c) 焼成ランクⅢ：ガラスの中にクリストバーライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。
- d) 焼成ランクⅣ：ガラスのみが生成し、原土（素地土）の組織をかなり残している。ガラスは微小な葉状を呈する。
- e) 焼成ランクⅤ：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のI～Vの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバーライトなどの組合せといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第1表の右端の備考に理由を記した。

2-3タイプ分類

タイプ分類は各々の土器胎土の組成分類に基づくもので、三角ダイアグラム、菱形ダイアグラムの位置分類による組合せで行なった。同じ組成を持った土器胎土は、位置分類の数字組合せも同じはずである。



第295図 三角・菱形ダイヤグラム

タイプ分類は、三角ダイヤグラムの位置分類における数字の小さいものの組合せから作られるもので、便宜上、アルファベットの大文字を使用し、同じ組合せのものは同じ文字を使用し、表現した。

例えば、三角ダイヤグラムの1と菱形ダイヤグラムの1の組合せはA、三角ダイヤグラムの2と菱形ダイヤグラムの15はBという具合にである。なお、タイプ分類のA, B, C, などは便宜上つけたものであり、今後試料数の増加にともなって統一した分類名称を与える考えである。

3 実験結果

3-1 タイプ分類

土器胎土は第1表胎土性状表に示すように三角ダイヤグラム、菱形ダイヤグラムの位置分類、焼成ランクに基づいてA~Hの8タイプに分類された。分析した土器10個に対して8タイプというのは明らかに多すぎる。その理由として、在地の粗製土器、在地の精製土器、東北系の土器、北陸系の土器など多種にわたっているからであろう。

電子顕微鏡によるガラスの分析では原ヶ谷戸-2, 5は中~粗のガラスが生成し、焼成ランクはⅡ~Ⅲと高い。他の土器は中粒のガラスが生成し、焼成ランクはⅢと幾分低い。

Aタイプ…原ヶ谷戸-6, 10

Hbl成分を含み、Mont, Mica, Chの3成分にかける。

Bタイプ…原ヶ谷戸-1

Mica, Hb, Chの3成分を含み、Mont 1成分にかける。

Cタイプ…原ヶ谷戸-9

Mica, Hbの2成分を含み、Mont, Chの2成分にかける。

Dタイプ…原ヶ谷戸-3, 5

Mica, Hb, Chの3成分を含み、Mont 1成分にかける。組成的にはBタイプと類似するが位置分類が異なる。

Eタイプ…原ヶ谷戸-8

Mica, Hbの2成分を含み、Mont, Chの2成分にかける。組成的にはCタイプと類似するが位置分類が異なっている。

Fタイプ…原ヶ谷戸-7

Mica 1成分を含み、Mont, Hb, Chの3成分にかける。

Gタイプ…原ヶ谷戸-4

Mont, Mica, Hb, Chの4成分にかける。

主に、アルミナゲル ($n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot 1\text{H}_2\text{O}$) で構成される。

以上のように、土器胎土の組成は8タイプに分類され、AタイプとDタイプのみが2個ずつで、他は各々1個体ずつである。この結果は先に述べたように、多種にわたる土器を分析したこととよく対比されるものである。

3-2 石英 (Qt) - 斜長石 (Pl) の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器製作上の固有の技術であると考えられる。

自然状態における各地の砂は個々の石英と斜長石の比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なっているものであり、言い換えれば、各地域における砂は各々固有の石英-斜長石比を有しているといえる。

この固有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは前記のように各々の集団を有する固有の技術の一端である。

第296図Qt-Pl相関図に示すように、土器はIとIIグループと“その他”に分類された。

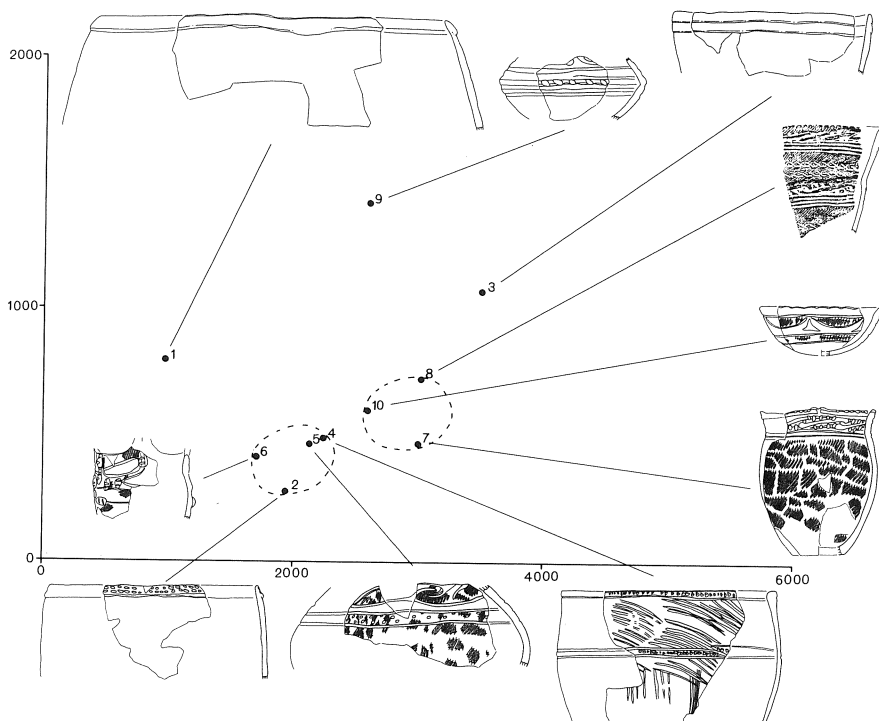
Iグループ…原ヶ谷戸-2, 4, 5, 6

個体数は4個で、全体に分散傾向である。2はH、4HはG、5はD、6はAと
いうように土器胎土の組成は異なっている。土器の型式としては4, 5, 6の3個
は安行式の土器で、2のみが在地の粗製土器である。

IIグループ…原ヶ谷戸-7, 8, 10

個体数は3個で、分散傾向にある。7はF、8はE、10はAタイプというように、
土器胎土の組成は異なっている。この3個の土器は大洞系の土器である。

“その他”…原ヶ谷戸-1, 3, 9



第296図 石英-斜長石相関図

1は石英の強度が低く、斜長石の強度が高い在地の粗製土器で、Bタイプである。3は石英と斜長石の強度が高い在地の粗製土器で、Dタイプである。9は斜長石の強度が非常に高い大洞系の土器で、Cタイプである。この3個は明らかにIとIIグループからはなれており、各々が一つのグループを代表しているもので、異質である。

Iグループは在地で安行系の土器グループ、IIグループは大洞系の土器で構成され、明らかに型式で異なるグループを形成していることがわかる。“その他”は各々異質であり、各々が1つのグループを代表しているものであろう。

4 まとめ

- i) 土器胎土はA～Hの8タイプに分類された。10個の土器に対して8タイプというには多すぎる。これは在地の精製土器、粗製土器、東北系の土器など多種にわたっているためである。
- ii) 電子顕微鏡によるガラスの分析では、中～粗粒のガラスが生成している焼成ランクがII～IIIと幾分高い土器が2個検出された。残りの土器は中粒のガラスが生成し、焼成ランクはIIIである。
- iii) 石英と斜長石の相関では、IとIIの2つのグループと“その他”に分類された。Iグループは安行系土器が集中し、IIグループには東北系土器が集中し、明らかに型式でグループが違っている。“その他”の土器は明らかに異質であり、各々が集団を代表しているものと推察された。

2 原ヶ谷戸遺跡出土の獣骨について

宮崎重雄

I. はじめに

原ヶ谷戸遺跡は埼玉県大里郡岡部町大字四十坂にあり、ロームの再堆積によって形成された自然堤防上に立地し、縄文時代後、晩期の加曾利BⅢ～安行Ⅲbを中心に加曾利BⅡから安行Ⅲdまでの期間に営まれた遺跡である。発掘調査は昭和61年4月4日～昭和62年4月30日まで行なわれ、縄文時代の竪穴式住居址12棟、そのほかの土壌、ピットが検出されている。また、住居址やその周辺から80片以上の骨片が出土したが、いずれも焼骨で、細片化しており、最大でも81.2mmを計るのみである。

肉食動物による咬痕や齧歯類による齧痕などのある骨片はない。また、解体痕・加工痕も観察されず、疾病の痕跡のある骨片も見当らない。

ほとんどの焼骨が亀裂の発達や、歪みがあり、変形・変色が目立つ。このことは骨の焼成時点では、まだ筋肉や腱などの有機物質が腐食し去っていない、生の骨であったことを表わしている。実験例(平野, 1935)によれば、このような特徴を示す焼骨の加熱温度は800℃程度に達していて、現代の火葬場で発生させる温度に匹敵している。このような高温だと肉類や骨髄は焼失してしまい、食料として残るものはなにもなく、料理用に加熱したものでないことは明らかである。

骨は焼成されると縮小し、それにとまって亀裂や歪みを生じるが、人骨の場合、Ubelaker(1989)によれば、最大で25%ほど縮小する。獣骨類においても同様のはずで、焼骨と生の骨の大きさを比較するのは厳密さに欠けるが、本稿ではこのことを念頭において、獣類の個体の大きさにも言及している。

なお、本稿をまとめるにあたり、群馬県教育委員会の飯島義雄氏、群馬県前橋市教育委員会の前原 豊氏、桐生市教育委員会の伊藤晋祐氏、増田 修氏、群馬県館林市の川島正一氏、薮塚本町教育委員会の塩月美智子氏、栃木県立博物館の橋本澄朗氏、長野県佐久市教育委員会の羽毛田卓也氏には遺跡の状況について詳しいご教示をいただいた。ここに記して感謝の意を表する。

II. 記載(写真図版第121, 122)

出土した骨片はすべて熱を受けて、細片化しており、同定不可能な骨片が含まれているが、検出された種類はニホンイノシシ(*Sus scrofa*)とニホンシカ(*Cervus nippon*)の2種類のみである。

A. No.1

1. ニホンシカ

a. 部位: ①右橈骨遠位骨端(図版1-2)^(註) ②角片(図版1-1)

①右遠位骨端で、若令のため骨幹から離脱したものである。Lewall & Cowan(1963)によれば、オグロジカの橈骨の遠位端が成長を止めるのが34か月めである。このデータはニホンシカにそのまま当てはめることはできないが、本標本がまだ34か月にいたっていない個体であることを示唆している。また、遠位骨端の左右幅が、29.5mmであるのに対して、足尾産の1才と推定されるそれは

29.6mmである。したがって1才程度の年齢を推定するのが妥当のようである。

②角片は角座付近の破片で、保存最大長は、24.8mmである。この角は落角で、角座の発達もきわめて悪く、いわゆる“ソロッポ”か、せいぜい第一枝を持った若い個体の角と思われる。落ちていたものを拾ってきたか、落角直前の角が加熱で角座骨から分離したものであろう。もし後者であれば、春の終り頃に捕獲された個体の角であろう。①の右橈骨片とは別個体であろう。

2. ニホンイノシシ

a. 部位：①左肩甲骨遠位端（図版1-3）、後縁部片（図版1-4）、肩甲棘片（図版1-5）②頭蓋骨片2（図版1-9）③下顎結合部片（図版1-7）④肋骨片5（図版1-14～18）⑤中節骨（図版1-6）⑥右下顎骨片（図版1-8）⑦仙骨片3（図版1-11～13）

①これらの3片の破片は同一個体のものと判断され、最大保存全長を有するのは左肩甲骨遠位端で69.4mmである。肩甲頸、間接面最大前後径、同内外径はそれぞれ、25.5mm、29.7mm、23.0mmを計測でき、2.5才と推定される岐阜県産現生標本（雄）のそれは23.1mm、27.6mm、22.3mmであることからすると、本標本は亜成獣～成獣との判断ができる。

③下顎結合部片は保存全長22.2mmの遠心端部片で、癒合は完了している。その大きさは現生標本の0.5～1才ほどの個体に匹敵している。左の犬歯の歯槽が残存しており、その径は雌である可能性を示している。

④5片の肋骨片のうちの保存最大長は59.2mmである。

⑤全長19.9mmの中節骨で、近位、遠位とも骨端はすでに癒合している。Silver（1969）によれば豚の中節骨骨端の癒合年齢は1才である。さらに上記現生標本よりやや小さめであるので、1～2才と思われる。

⑥右下顎骨片は保存全長が42.3mmで、後臼歯の右側歯槽骨である。

⑦仙骨は椎頭部の骨端が離脱しており、まだ若い個体であることを示している。椎頭部の上下径は12.0mmを計測でき、骨端癒合の完了していない上記現生標本のそれは15.4mmである。このことから1～2才程度の年齢が推察される。

B. No. 2

1. ニホンシカ

a. 部位：角（図版2）

角幹部の破片で保存全長は28.7mmである。角幹の緻密質はまだ薄く6.8mmしかなく、海綿質の径が大きいことから、まだvelvetの剝離していない未完成の角であると思われる。

C. No. 3

1. ニホンシカ

a. 部位：①中足骨片（図版3-1）②椎体片（図版3-2）

①中足骨片は保存最大長が36.4mmで、骨幹部後側片である。その大きさは現生獣と比較すると1才前後であることを示している。

②椎体片は保存長が27.2mmで椎体骨端部が離脱していることから、成獣ではない。

D. No. 4

1. ニホンイノシシ

a. 部位：左下顎歯槽骨（図版4）

残存しているのは第四乳臼歯と第一後臼歯の頰側半歯槽骨で保存全長56.7mmである。歯槽で見るとかぎり第一後臼歯近遠心径は $16.7 + (1?)$ mmで、0.5~1才と推定される現生標本のそれが17.0mmであることからすると、0.5~1才程度の年齢が予想される。若獣の特徴である緻密さに欠けた下顎骨の骨表面をなし、近遠心方向に無数の亀裂が走っている。

E. No. 5

1. ニホンイノシシ

a. 部位：①腰椎（図版5-1）②左脛骨（図版5-2, 3）

①腰椎は保存最大長が42mmで、左横突起と左乳頭関節突起が一部残った椎体部である。

b. 年齢：亜成獣

椎体の近位・遠位の両骨端とも離脱している。2.5才と推定される岐阜県産現生雄イノシシの椎体骨端はまだ癒合していない。全体的な大きさもこの現生標本に近いが、多少小さめであり、2才前後の年齢が想定される。

②左脛骨は近位骨幹部で保存全長は56mmである。亀裂・歪みとも著しい。

b. 年齢：亜成獣

脛骨には近位骨端部の離脱した痕が観察される。Silver (1869) 豚の脛骨の近位骨端は3.5才で癒合する。また2.5才と推定される上記現生標本も骨端を離脱していて、本標本と大きさを比べると骨端離脱面の最遠位端での骨幹前後径は本標本が26.1mmであるのに対して、現生標本は34.0mmである。これらのことから1~2才ほどの年齢が想定される。また、腰椎とは同一個体である可能性もある。

F. No. 6

保存全長31.7mmの種不明の四肢骨片である（図版6）。

G. No. 7

1. ニホンイノシシ

a. 部位：①左下顎関節突起片②下顎結合部片③後頭骨後稜部右破片（図版7）④頭蓋骨片など細骨片8片

①左下顎関節突起片は保存最大長が37.1mmあり、関節顆を一部しか残していないが、その大きさは上記岐阜県産現生標本とほぼ同じ大きさの印象がある。

②下顎結合部片は保存最大長が12.1mmあり、結合部後端がわずかに残ったもので、結合部の癒合は完了している。本標本は細骨片すぎて、明確なことは言えないが幼獣程度の印象を受ける。

③後頭骨後稜部右破片で保存最大長が36.2mmあり、上記現生標本標本と比べると、本標本の方が、頑丈にできていて、サイズ大きめである。年齢的には現生標本に近いが、やや年長であると思われる。

H. No. 8

1. ニホンイノシシ

a. 部位：肋骨片（図版8-1, 2）

保存最大長34mmの肋骨体破片である。焼骨であることは確実であるが、残存部位で見ると限り、亀裂や歪みは少ない。

I. No.9

1. ニホンイノシシ

a. 部位：左上腕骨（図版9）

遠位骨幹右半部の残存した保存全長47mmの焼骨である。残存部位で見ると限り亀裂・歪みは少ない。全体的には亜成獣といった印象の大きさである。

J. No.10

1. ニホンシカ

a. 部位：①角3片（図版10-1～3）②中足骨片（図版10-4～7）③下顎骨片

①最大長33.0mmの角片で、直径は16.4mmである。この角のものと思われる他の破片が2片ある。

②中足骨片は保存最大長52.8mmの骨幹部片で、骨幹部左右径は12.3mmである。一方足尾産の1才と推定される現生標本のそれは12.4mmで、本個体が1才かそれを少し下回る年齢であろうと思われる。この他に中足骨の一部と思われる骨片2片がある。

K. No.11

1. ニホンイノシシ

a. 部位：下顎結合部（図版11）

左右の犬歯歯槽、第一切歯・第二切歯の根尖部歯槽が残存する。亀裂・歪みの状況は、上記標本と同様である。保存最大長は42mmである。イノシシは吻部で掘り起こし土中の動植物を食べる習性があり、下顎結合の癒合も生後数カ月という早期におこり、頑丈な顎先にできてる。このため他の部位に比較して残存しやすい。No.11にはこの他に2片の骨片が伴出している。

b. 年齢：幼獣～亜成獣

下顎結合はすでに癒合している。全体的大きさから見ると、現生の1.5～2才程度の標本に相当し、本標本についても、この程度の年齢が予想される。

c. 性別：雄

残存している犬歯は永久歯のもので、その頬舌型は6.7mmを計るのみであり、また犬歯歯根は下顎結合部遠心端付近までしかのびていない。このことは本個体が雌であることを示している。

L. No.12

1. ニホンイノシシ

a. 部位：①腰椎椎体（図版12-5）②右下顎関節突起下顎頭（図版12-2）③右橈骨近位端（図版12-1）④肋骨片2（図版12-3, 4）、四肢骨片3いずれも、焼骨である。

①腰椎椎体は保存最大長が27.3mmであり、一方の骨端を破損しているが、骨端の癒合はすでに完了している。左右径は27.8mm、背腹径（上下径）は17.0mmである。したがって成獣のものである。

②右下顎関節突起は保存最大長が27.0mmあり、関節顆の左右径は24mmあり、前記現生標本のそれが23.8mmあるのを比べると、両者はほぼ同じ体格の年齢の近い個体であったと推定される。

③右橈骨近位端は保存最大長が36.0mmあり、骨端は癒合が完了している。Silver（1969）によれば

豚の橈骨近位端の癒合年齢は1年であり、前記現生標本の橈骨近位端左右径・前後径が20.8mm、17.7mmであるのに対して本標本では23.4mm、15.8mmであることからすると、両者は年齢の近い(約2.5才)ほぼ同じ体格の個体であったと推定される。

M. No.13

1. ニホンイノシシ

a. 部位：下顎骨片(図版13-1, 2)

大きな破片として残存しているのは下顎骨の左近心部と切歯歯槽骨左半部である。前者は犬歯から第四前臼歯までの下顎体の破片で、ほとんどの歯槽に歯根が残存しているが、歯冠部は熱のために破損してしまっている。後者では、第二切歯の歯根が残っている。両破片は接合する部分があり、同一個体のものであると思われる。保存最大長は68.6mmである。骨表面、破断面のようすはNo.15と同様であるが、犬歯歯槽骨(残存部近心端)部分における歪みと亀裂が特に著しい。縄文時代には犬歯は意図的に抜き取られている場合がほとんどである(土肥, 1985)が、本標本の下顎骨の破断面は亀裂によるものか、人工的なものかの区別は困難である。この他にも7片の細骨片があり、うち1片はニホンシカの幼獣の中手骨の疑いがある。

b. 年齢：亜成獣

すべての切歯・犬歯・前臼歯の歯槽及び歯根の様子を確認すると、どれも永久歯である。また、下顎体の大きさが2.5才と推定される現生雄標本にほぼ匹敵するか、多少大きめであり、年齢は2.5才前後が推察される。高熱のための歯冠部が崩壊していて、咬耗度を観察することができず、それ以上の詳しい年齢推定はできない。

c. 性別：雄

本標本の犬歯の歯槽最大近遠心径は19mmである。犬歯の歯根はこれよりさらに根尖側へ径を増している観があり、少なくとも第四前臼歯まで歯槽が続いていたことが分かる。この大きさの犬歯だと、林ほか(1977)によれば雄ということになる。現生標本との歯槽の大きさの比較を右に示す。

	単位mm					
	本 標 本			現生♂ 標本		
	犬歯第三切歯第二切歯			犬歯第三切歯第二切歯		
唇(頬)舌径	6.5	9.1		12.0	5.7	9.9
近遠心径	19.0	6.7	7.6	17.5	5.1	7.4

N. No.14

1. ニホンイノシシ

a. 部位：胸椎(図版14)

保存最大長は45mmである。棘突起先端部、左横突起などを欠く。前記岐阜県産現生標本より全体的に大きめである。

b. 年齢：成獣

椎体の近位・遠位の両骨端ともすでに癒合が完了している。2.5才と推定される岐阜県産現生雄イノシシの椎体骨端はまだ癒合していない。また佐藤(1967)によれば豚の椎体骨端は4~7才になってはじめて癒合する。これらの事実は本個体が4~7才か、それ以上の年齢の可能性を示唆しているとはいえよう。性別を知る手がかりはない。

O. No.15

1. ニホンイノシシ

a. 部位：左上腕骨骨幹近位部（図版15）

保存全長は81.2mmである。骨表面には無数の微細な亀裂が走っており、歪みも生じている。遠位破断面はいわゆるspiral片のような状況を呈しているが、人工的に打砕されたものでなく亀裂に沿って土圧で割れたもののように思われる。

b. 年齢：亜成獣

近位骨端が離脱していることにより成獣にいたっていないことが分かる。Silver（1969）によれば豚の上腕骨近位骨端が癒合する年齢は3～3.5才である。家畜である豚のデータをそのまま野生のニホンイノシシに適用できないが、このことは、本標本が3～3.5才に達していないことを示唆している。また2.5才と推定される近位骨端の離脱した岐阜県産現生イノシシ（雄）の上腕骨と比べてみると、骨幹近位端の前後径・左右径が現生で54.8mm・31.1mmであるのに対して本標本では47.5mm・25.0mmである。熱で骨が収縮することや縄文時代のイノシシが現生のものに比べて大きめであったことなどを考えても、本標本は2.5才未満と考えられる。

Ⅲ. 考察

A. 個体数について

イノシシ：本遺跡において、個体数を算出するもっとも有効な部位は、各個体につき1個しか保有していない下顎結合部で、合計4個出土している。すなわち、本遺跡の最小個体数は4である。しかし下顎結合部から得られた推定年齢より年長のものと思われる個体もあり、これを入れれば、5個体となる。

ニホンシカ：それぞれ別個体に属する角が出土していることで雄2頭が確認され、さらに枯角を保有するにいたっていない1才前後の個体もあり、最小個体数は3である。

B. 性別について

イノシシ：イノシシの性別は犬歯の大きさと判別できる。それによると、雄が1頭、雌が2頭で、残り1頭は性別不明である。これとは別個体の成獣の犬歯は保存されず、やはり性別不明である。

ニホンシカ：ニホンシカはこのような細骨片で性別を判断するのは不可能である。それぞれ別個体に属する角が出土していることで雄2頭までは確認されるが、雌の存在は不明である。

C. 年齢について

高熱を受け、歯冠部が崩壊していて、歯の咬耗度や萌出状況を細かく知ることができない。年齢も大ざっぱに捕らえた推定年齢は以下のものである。イノシシでは幼獣といえるものは少なくとも1個体はいるが、2才前後の亜成獣が主体を占めている印象があり、成獣も確認される。下顎接合部保有の標本だけについてみると、いずれも亜成獣である。焼獣骨を伴う縄文後・晩期遺跡では焼かれている骨のほとんどが幼若獣であり本遺跡の場合も当該時期の他の一般的傾向から外れていないとは言える。ニホンシカでは成獣のものと思われる角片が1片あり、1才の秋くらいの角片を持つもの、1才前後の年齢のものもある。概して若い個体が多いような印象を受ける。

D. 周辺遺跡との関係について

本遺跡出土の獣骨は上述のようにニホンイノシシとニホンシカの2種類に限られるが、すべて焼骨である。小破片になっていて、四肢骨片には打碎されたような破断面を呈するものもあるが、加熱で生じた亀裂に沿って割れたと思われるのも多く、その区別は困難である。したがって、骨が破砕され骨髓食された後に儀礼的処置として焼き払われたのか、獣骨破砕禁忌の風習(渡辺, 1977)があって、骨髓が食されることなく、火に掛けられたのか、知ることができない。

いずれにしても、獣骨がすべて火を受けているのは火を介在する送りの儀礼があったことを窺わせ、この種の類似の性格を持った遺跡は、関東甲信越地方、東北地方南部に広く分布しており、当地方の縄文後・晩期には送りの儀礼(狩猟儀礼)が一般化していたとみて良さそうである。ここで、縄文後・晩期の類例遺跡を列記すると、埼玉県桶川市後谷遺跡、富士見市正網遺跡、群馬県桐生市千網谷戸遺跡、新田郡薮塚町石の塔遺跡、邑楽郡明和村矢島遺跡、群馬県榛東村茅野遺跡、利根郡月夜野町矢瀬遺跡、藤岡市谷地遺跡、伊勢崎市八坂遺跡、利根郡昭和村糸井遺跡、同村中棚遺跡、東京都なすな原遺跡、栃木県小山市乙女不動原北浦遺跡、下都賀郡藤岡町後藤遺跡、福島県大熊町道平遺跡、長野県大町市一津遺跡、御代田町宮平遺跡、山梨県北巨摩郡大泉村金生遺跡などである。

原ヶ谷戸遺跡の場合、焼獣骨は住居址内、遺物包含層から出土している。このうち、時代の明確な遺構は安行Ⅲ a 期に営まれた6号住居址のみである。焼獣骨は、床面より少し浮いたレベルから出土しており、住居が廃棄された後に、捨てられたか、流れ込んだものであろう。いずれにしても、この遺跡は全体としては後期後半の加曾利BⅢ～安行Ⅲ b 式を中心とする遺跡であり、焼獣骨もこの時期の全体に及んでいると思われる。

一方、群馬県桐生市の千網谷戸遺跡では、焼獣骨が出現し始めるのは後期中葉の加曾利BⅠ式頃からで、晩期終末の大洞C₁式まで続く。なかでも焼獣骨の出土量が多いのは安行Ⅲ b～安行Ⅲ c 式である。また群馬県明和村矢島遺跡では安行Ⅱ式から焼骨が出現し始め安行Ⅲ d 式まで続き、最も多いのは安行Ⅲ b～安行Ⅲ d 式である。このように原ヶ谷戸遺跡の周辺に位置する後期から晩期遺跡には、焼獣骨の出土時期に著しい類似性があり、さらに、呪具・石棒・耳飾りなどの共伴遺物にも共通点が多い。上に列挙した各遺跡を始めとして、これに類するその他の遺跡についても、焼骨の出現時期、最盛期、終焉時期の検討や、地理的広がりやの追跡、出土獣骨の分析など、詳しく進めて行くことによって、縄文時代後～晩期の焼骨を伴う東日本の一つの文化圏の実態がさらに浮かび上がってくるに違いない。

引用文献

Ubelaker, D.H. (1989) *Human skeletal remains*. 2nd ed. Taraxacum, Washington.

平野賢二 (1935), 歯牙の熱処理に対する研究(第一編)人類歯牙の熱処理について. 口腔病雑誌. 9. 375-393

Silver, I.A. (1969) The ageing of domestic animals. In Brothwell, D., and Higgs E., eds.

Science in archaeology. Thames and Hudson, 283-302.

Hayashi, S., Nishida, T., Mochizuki, K., and Seta, S. (1977) Sex and age determination of the Japanese wild boar (*Sus scrofa leucomystax*) by the lower teeth. *The Japanese Journal of Veterinary Science*, Vol. 39, No. 2, 165-174

佐藤幸雄 (1967), 「家畜の発生・解剖要説」, 学窓社、東京。

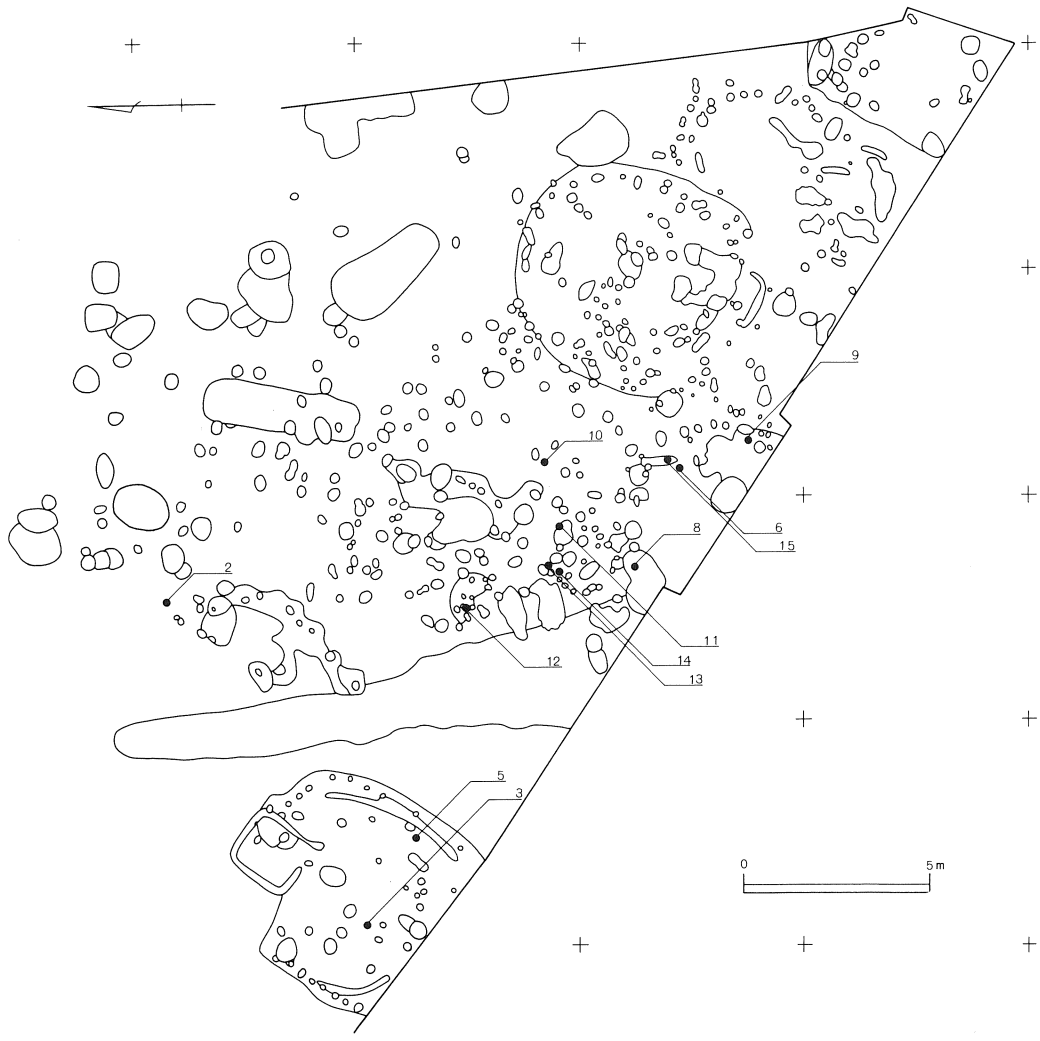
Lewall.E.F. and Cowan.I.McT.(1963)Age determination in black-tail deer by degree of ossification of the epiphyseal plate in the long bones. *Canadian Journal of Zoology*, Vol.41 , 629-636

渡辺 仁 (1977) 獣骨破碎禁忌. 北方先史学に関する土俗考古学的新問題. 人類学雑誌, 85 (4), 293-299.

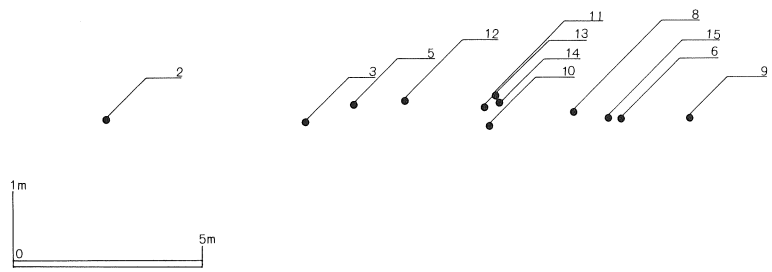
なお、原ヶ谷戸遺跡類似遺跡に関する文献は下に列記する。

- 1) 後谷遺跡：金子浩昌 (1979) 後谷遺跡出土の獣骨類「後谷遺跡」, 埼玉県後谷遺跡発掘調査会
- 2) 正網遺跡：金子浩昌 (1989) 正網遺跡出土の獣骨と骨の加工品「正網遺跡」, 埼玉県富士見市遺跡調査会.
- 3) 千網谷戸遺跡：宮崎重雄 (1978) 群馬県桐生市千網谷戸遺跡星野昭司宅内1号住居址出土獣骨類「群馬県桐生市千網谷戸遺跡発掘調査報告書」, 桐生市教育委員会.
- 4) 石の塔遺跡：群馬県薮塚本町教育委員会 (1987) 「岡登中部遺跡群発掘調査概報 - 石の塔遺跡」
- 5) 矢島遺跡：宮崎重雄 (1991) 矢島遺跡出土の焼獣骨類について 「矢島遺跡発掘調査報告書」, 群馬県邑楽郡明和村教育委員会. 44-48.
- 6) 茅野遺跡：群馬県榛東村教育委員会 (1989) 「茅野遺跡発掘調査の概要」
- 7) 矢瀬遺跡：朝日新聞群馬版、「矢瀬の人々②」(1992. 12. 9) より
- 8) 谷地遺跡：群馬県藤岡市教育委員会 (1981) 「小野地区遺跡群」
- 9) 八坂遺跡：東国古文化研究所・前橋育英高等学校郷土部・伊勢崎市教育委員会 (1973) 「八坂遺跡調査概報」
- 10) 糸井遺跡：山崎義雄 (1958) 先史時代「勢多郡誌」, 勢多郡誌編纂委員会. 139 p
- 11) 中棚遺跡：昭和村教育委員会・群馬県教育委員会・日本道路公団 (1985) 「中棚遺跡」
- 12) なすな原遺跡：金子浩昌 (1984) 動物遺存体「なすな原遺跡」, なすな原遺跡調査会. 580-596.
- 13) 乙女不動原北浦遺跡：茂原信生・小野寺 覚・桜井秀雄 (1982) 乙女不動原北浦遺跡出土の哺乳動物遺存体について「乙女不動原北浦遺跡報告書」, 栃木県小山市教育委員会. 433-436.
- 14) 後藤遺跡：(栃木県立博物館主任研究員・橋本澄朗氏からの私信)
- 15) 道平遺跡：茂原信生・馬場悠男・芹澤雅夫・小野寺 覚・江藤盛治 (1982) 道平遺跡出土の獣骨について「道平遺跡の研究」, 福島県大熊町教育委員会. 212-215
- 16) 一津遺跡：西沢晃寿 (1990) 一津遺跡出土の骨類について「一津」長野県大町市教育委員会
- 17) 宮平遺跡：御代田町教育委員会 (1985) 「宮平遺跡-遺構編」.
- 18) 金生遺跡：金子浩昌 (1989) 金生遺跡出土の獣骨「金生遺跡」(縄文時代編) 山梨県埋蔵文化財センター
222 - 242

註：図版の指示は、写真図版第121, 122の中のキャプションを表わす。



4250



第297图 獸骨出土位置图

VI 結語

1 原ヶ谷戸遺跡

(1) 縄文時代

ア 土器

B区出土の土器の中で、グリッド出土土器について分類し、概述する。前～後期前葉のものをわずかに含むが、これについては省略し、後期中葉以降のものについてのみ分類を行なう。

深鉢形土器

A類：口縁部が直線的に外傾する平縁のもの。胴部は緩やかに湾曲するか、弱く屈曲する。加曾利B式後半に属する。内外面とも無文のもの（第139図21、第145図4、第149図4～6、第153図14、第161図5、7、第164図16、第166図22、第167図1、第169図4、第180図5、8、11、14、16）、無文で、口縁部内面に1条の沈線、または稜を有するもの（第118図5、第130図8、12、第131図29、33、34、第139図19、20、22、第144図25、26、第145図3、5、第149図1～3、7、9、第153図9～13、第160図20、第161図1～4、6、第165図13、第166図20、21、23、第171図13、第172図7、第180図3、6、7、9、10、12、13、15、17～21）、数条の沈線が束になった条線が、間隔を開けて、縦位、斜位に施されるもの（第128図15、16、第131図31、第135図18～20、第139図8～11、第144図18～22、第145図1、第153図4～8、第160図12～19、第161図15、第165図6、7、第166図19、第169図5、第171図12、第179図17～22、第180図1、2）、矢羽状沈線が施されるもの（第126図23、第128図14、第130図21、第131図35、第135図21～27、第136図8、第139図12～18、第144図23、24、第145図6、第153図15、第161図9～12、第165図14、15、第167図2～6、第169図6、8、第170図11、第171図14、第173図8、第181図1～16）、口唇部直下に無文帯が画され、無文帯下に沈線文が施されるもの（第135図17、第161図13、第169図7）がある。無文で口唇部内面に1条の沈線を持つもの、矢羽状沈線を持つものには、口唇部に刻みが施されるものも見られる。第153図13、第180図20は外面口唇部下に凹線を有し、第180図21は口唇端部に縄文を持つ。第153図15、第165図14、第167図2は沈線下に無文帯が画される。

B類：平縁で、3単位の突起を持つ深鉢。胴部が外傾し、口縁部はわずかに屈曲して立ち上がる。屈曲部内面に2条の沈線を有するものがほとんどである。突起は非対称形の系統を引くが、本遺跡のものは形骸化が進み、対称形になっている段階のものが多い。加曾利B2～3式に相当する（第125図1、第126図11、13、第128図3、第130図4、5、第134図7、12～15、第138図2～4、第143図9～12、第151図2、4、18、第156図1～3、7、17、21、第165図2、第172図23、第174図8～10、14、第175図4、6～9、第180図4）。

C類：5単位の波状口縁を有し、体部には矢羽状沈線文が施される深鉢。加曾利B式後半に属する。波頂部が緩やかなカーブを描き、肥厚するもの（第135図3、第138図9、第143図20、21、25、第147図14、15、第151図23、第152図9、10、第157図8、9、第168図12、第171図9、10、第176図1～

4)、波頂部先端が鋭く尖るもの(第131図21、第135図2、第152図8、第158図12、第159図3、第168図13)が見られる。

D類：胴部が張り出して屈曲し、口縁部が内傾するもの。口縁部に磨消縄文を伴う装飾が施される(第115図1、3、第134図4)。第115図3は、屈曲の度合がやや弱い。加曽利B式後半に属する。

E類：口縁部文様帯、胴部文様帯に磨消縄文を伴う装飾が展開するもの。口縁部に刺突列を有し、その装飾手法に変異が見られる。波状口縁を持つもの(第131図15、第143図1)、平縁のもの(第126図15、第171図2)がある。加曽利B3式～曾谷式に属する。

F類：靴べら状の突起を有し、口唇部下に刺突帯を有するもの(第154図23、第179図6)。曾谷式。

G類：口縁部に縄文帯を有し、縄文帯内部に羽状縄文が施されるもの(第145図21)。加曽利B式後半の所産と考えられる。

H類：体部が直線的に外傾し、口縁部が「く」の字状に屈曲する平縁のもの。胴部は無文、または矢羽状の沈線文が施されるものがある。曾谷式高井東系列に属する。

H1類：口縁部が無文のもの(第118図1、2、第119図1、2、第135図14、15、第139図4～6、第144図9～13、第148図15～19、第152図22、23、第153図1～3、第159図16～20、第165図5、第169図1、第171図5、6、第178図6～14)。

H2類：口縁部に縄文が施されるもの。縄文はLR、Lr、LRrが多く見られる(第117図5、第119図3、第130図6、第131図25～27、第139図2、3、第144図6～8、第148図13、14、第151図17、第152図20、21、25、第159図13、14、第178図5)。

H3類：無文地に平行沈線文が施されるもの(第159図9、第173図4)。

H4類：口縁部に凹線状の沈線が施されるもの(第126図16、第159図8)。

H5類：口縁部に鋸歯状の沈線を有するもの(第128図10、第144図5)。

H6類：縄文地文の平行沈線を有するもの(第117図6、第126図17、第130図20、第135図13、第139図1、第144図4、第148図11、第152図12、15、19、第159図10、第178図1～4)口縁部には縦長、またはボタン状の突起が貼付されるものが多い。

H7類：口縁部にへら描きの弧線文が施され、磨消縄文を伴うもの(第131図24、第144図14、第152図13、16、第159図12、第166図16)。

H8類：口縁部に杵状文、刺突を有するもの(第135図7、12、第176図20)。

I類：4単位の大波状口縁を持つ深鉢。波状部分には稲妻状のモチーフが細密な沈線で施される場合がある。曾谷式高井東系列に属する。

I1類：緩やかな波状で、口縁部が明瞭に内屈する。口縁部下端と上端の幅は波頂部下で広がる。波頂部に粘土粒が貼付されるものが多い(第132図1、第143図22、第148図6、第177図5、6)。

I2類：波状縁に沿って沈線文のみが巡るもの。口縁部は内側に屈曲するものと、内湾するものがある(第131図19、第148図4、第151図24、27、第152図18、第158図13、第159図2、第164図12、第166図13、14、第177図8)。

I3類：波状縁に沿って隆帯のみが巡るもの。口唇端部の内屈は弱い。隆帯上に刺突が施されるものもある(第148図5、第151図25、第157図16、18、21、22、第176図11、13、22、第177図3、9)。

I 4類：地文に縄文が施され、波状縁に沿って沈線文のみが巡るもの。口縁部は内屈する（第152図1、第164図13、第176図17、第177図7）。第176図17は擬縄文の可能性がある。

I 5類：波状縁に沿って隆帯と沈線文が組み合って装飾が施されるもの。口縁部には縦位の隆帯や、突起が貼付され、杵状のモチーフを持つものもある（第143図23、第148図3、第152図7、第158図2、第159図11、第176図6, 18, 21、第177図1）。

I 6類：先端がやや緩やかな波頂部を持ち、沈線と刺突が組み合う装飾が施されるもの。装飾は波状縁に沿わず、波状部分を横断するように展開するものと、口縁に沿って施文されるものがある（第135図5、第138図16、第143図26、第152図4～6、第158図3, 5～9、第177図10）。

I 7類：波状縁に沿って沈線、隆帯、刺突が組み合う装飾が施されるもの。口唇部は肥厚する。波底部に突起が貼付されるものが多い（第131図18, 23、第138図10, 17、第144図2、第148図1, 2、第151図26、第157図10, 12～15, 17, 19、第158図1, 4、第171図3、第176図7～10, 12, 16, 20、第177図2）。

I 8類：波頂部がやや尖り、口縁部の内屈が弱い。口唇部の断面は内側に傾斜する。波頂部下に縦位の隆帯が貼付され、隆帯上には刺突、または押圧が施される。口縁部の装飾は3条の沈線がほとんどである（第126図20、第132図3, 4、第135図10, 11、第138図13、第159図4, 5、第165図4）。第165図4は地文にLR縄文が施される。

I 9類：波頂部、または波底部の破片のみで、装飾の詳細が不明なもの（第135図8, 9、第138図11, 12, 14、第141図1、第148図7、第152図2, 3、第157図11、第159図1, 15、第166図15、第172図9、第176図5, 15, 19, 23、第177図4, 13, 14）。

J類：瓢形を呈するもの（第116図4、第129図26、第146図19、第168図3、第185図1, 2）。曾谷式～安行1式に属する。

K類：胴部が括れ、緩やかに内湾して口唇部にいたるもの。沈線文で意匠が描かれる（第117図4）。曾谷式に属する。

L類：無文地で口縁部に平行沈線を有するもの（第125図2、第127図9、第160図10）。曾谷式高井東系列のものか。

M類：地文が施されず、突起、隆帯、刺突のみが施されるもの。

M 1類：平縁のもの。口縁部に縦位の隆帯が貼付されるもの（第129図17、第138図15、第148図9、第149図8、第165図8、第167図9、第184図7、第186図15）、口唇部に断面円形の突起が貼付され、突起上面に縦位の刻みが施されるもの（第137図19、第146図16、第168図17, 18、第186図16）、口縁部に円形、ボタン状の粘土粒、縦長の粘土粒、2個縦列の突起が貼付されるもの（第129図20、第130図11、第146図27、第150図19、第179図9、第184図1）、口唇部に台形状の突起が施され、突起上面、口唇部に縦位の刻みが施されるもの（第125図24、第129図19、第130図17、第133図27、第146図17）、口縁部に隆帯が貼付されるもの（第143図24、第160図9）、口唇部にB突起を有するもの（第133図19、第162図12）、刺突列を有するもの（第187図14）がある。第130図17は体部に文様帯を有すると思われる。

M 2類：波状縁のもの。突起が確認できないもの（第184図4）、波底部に三日月状、その他の形

状の突起を持つもの（第119図4、第125図19、第133図28、第141図22）、波頂部に円形、楕円形の突起を有するもの（第127図13、第129図19、第132図11、第141図20、第184図2、3）、口縁部に隆帯を持つもの（第128図13）がある。第184図2は粘土粒上面に縦位の刻みが施される。

N類：無文地に1～2条の沈線で、弧線、大柄な鋸歯文を描くもの（第133図1、第159図6、第164図15、第173図5、第179図1～5）。高井東系列に属する。

O類：安行系の波状口縁深鉢。

O1類：口縁部に隆起帯縄文が施されるもの。縄文帯を縦断して隆帯が貼付される（第130図7、第132図2、第140図12、第145図20、第154図14、第163図1、2、第169図9、第183図5、6、9）。安行1式に属する。

O2類：頸部に、刻文帯で構成される三角形区画文を持つもの。豚鼻状の突起が貼付される（第140図13、第163図3、5、第169図11、14、第183図7、8）。安行2式に属する。

O3類：口縁部に沿って、刻み列が施された2条の隆帯を有する。瘤付系土器との関連が窺われる（第117図3）。安行2式併行であろう。

O4類：三角形区画文が隆起帯縄文で構成されるもの。縄文はLRが主体となる（第120図4、第126図25、第136図14、第172図10、第183図10、13）。安行3a式。

O5類：三角形区画文の斜線が弧状になるもの。縄文帯に隆起は見られなくなる（第127図1、第132図9～11、第136図15、第146図4、第154図18、第183図11、12、14、16、17、第184図14、17、18）。安行3a～3b式。

O6類：頸部に菱形状の構成が用いられるもの。姥山Ⅱ式の在地化したものであろう（第163図9、第170図8、第183図18、19）。

O7類：波頂部に円形の突起が貼付され、突起を起点に弧線が施されるもの（第136図16、第141図2、第155図10、第163図7、第168図14、第183図20）。安行3b～3c式。

O8類：緩やかな波状縁に沈線でモチーフが描かれるもの（第136図20）。安行3c式。

P類：帯縄文系の平縁深鉢。縄文帯の隆起が顕著なもの（第128図21～24、第140図9、11、第150図1～3、第169図10、第184図5、第185図5）、刻文帯が併用されるもの、または縦長の突起に横位の刻みが施されるもの（第119図6、第120図1、第128図27、第163図13、第184図10）、縄文帯の隆起があまり顕著ではないもの（第126図24、第128図25、26、第184図13）、縄文帯が斜位の構成をとるもの（第154図17、第183図15）がある。

Q類：口縁部に三叉文系のモチーフが展開するもの。安行3a式のもの（第126図26、27、第129図2～4、14、第136図18、第141図3、第146図5、第163図17、第170図5、第172図11、12、第184図26）、安行3c式のもの（第125図16、17、第150図11、第184図33）がある。

R類：口縁部に沈線によって稲妻状、レンズ状のモチーフが描かれるもの（第126図32、第129図16、第154図19、第163図25、第169図20、第184図23、第185図12）。安行1～2式と考えられる。

S類：口縁部に綾杉状のモチーフが描かれるもの（第127図14、第132図18）。

T類：無文地に対向する弧線が施されるもの（第125図13、第126図2）。第125図13は、晩期前葉、第126図2は曾谷式高井東系列と考えられる。

U類：瘤付系の影響のあるもの、または入り組み文が施されるもの。弧線文と刺突列が施されるもの（第135図1）、粘土粒の貼付が見られるもの（第140図17）、入り組み文内部に刻みが施されるもの（第128図28、第130図14、15、第140図20～22、第150図9、10、第163図14～16、第170図1）、入り組み文内部に縄文が施されるもの（第132図5、第170図2）、入り組み文内部が無文のもの（第141図12）、その他のもの（第150図7、第155図1）がある。第141図12は安行3 a式か。

V類：大洞系の影響の見られるもの（第125図14、第127図7、8、第185図20、21、23）。

W類：ヘラ描きで曲線的なモチーフが施され、刺突文が中心的に用いられるもの。北関東晩期中葉の資料に類例が多い（第127図12、第129図6、第132図15～17、第136図21～27、第185図13、14）。

X類：口縁部にヘラ描きで斜位の沈線を持つもの。意匠の構成は不明（第132図19、第164図14）。

鉢形土器

A類：加曾利B式に属し、口縁部が内湾するもの。屈曲が明瞭で、体部に磨消縄文が施されるもの（第146図20、第166図7）、口縁部に磨消縄文を伴う弧線文、または縄文帯が施され、体部に刺突列を持つもの（第128図4、6、第134図5、6、9、10、第138図1、5、第143図8、13～15、17、18、第147図10、11、第151図6～9、13、15、第156図4、9、12、14、16、第165図1、第166図1、2、第171図7、第174図17、第175図1）、体部に屈曲を持ち、屈曲部に刺突が施され、胴部に矢羽状の沈線文が施されるもの（第131図2、第156図11、第172図19、第174図7）、口縁部に磨消縄文を伴う弧線文、帯縄文が施され、口縁下に刺突列を有するもので、体部が直線的に立ち上がるもの（第126図1、12、第128図7、第131図8、10、11、第134図8、11、16、第138図6～8、第147図12、第151図3、5、10～12、第156図5、6、10、15、18、第165図3、第166図3、6、第171図8、第172図18、20、第173図11、第174図11～13、15、16、第175図2、3）がある。小破片のため区別ができないものは最後の類に含める。

B類：算盤型を呈する鉢形土器。口縁部が内傾、または直立するもの（第134図17～19、第147図3、4、第166図9、第173図1、第175図17、18）、口縁部が外傾するもの（第126図14、第157図2、第175図10）、胴部破片（第128図9、第130図19、22、第131図3～7、9、第134図20～22、第143図3～5、7、第147図5～9、第157図1、3～5、第165図12、第166図10、11、第168図9、第171図1、第172図8、第173図2、第175図11～16、19、20）がある。口縁部が内傾、または直立するものは加曾利B 2式、外傾するものは加曾利B 3式。

C類：口縁部が外傾、またはやや外反する鉢。無文のもの（第115図6、第116図1、第127図18、第130図9、第131図32、第137図20、第145図2）、平行沈線が施され、円形、三日月状の突起が施されるもの（第119図5）、括れ部以下に矢羽状の沈線文（第115図5）、弧線文（第116図2）が施されるもの、口唇部が肥厚し、波頂部には縦位の刻みを持つもの（第143図19、第166図12、第177図11）がある。

D類：体部が直線的に外傾し、口縁部が短く屈曲するもの。屈曲部に凹線、刺突が施される。体部は無文のものがほとんどだが、斜行する沈線を有するものもある（第116図6、7、第126図18、第138図19、20、第144図1、第152図17、第156図13、第166図17、第168図11、第177図12、第179図13～15）。高井東系列に属する。

E類：器形はD類に類似し、口縁部下に隆帯が施されるもの。隆帯上には刺突を持つものもある

(第126図21、第152図11、第176図14)。高井東系列であろう。

F類：体部が直線的に外傾し、口縁部が内傾するもの(第128図8、第131図13、第151図14、16、第156図8、第168図10)。口縁部には縄文帯が施される。

G類：口縁部が内湾し、無文地に平行沈線が施されるもの(第148図12、第169図3)。

H類：帯縄文系の鉢形土器。頸部が外反し、帯縄文間に沈線、刺突を有するもの(第140図10、第160図1、第163図12)、頸部が外傾、またはやや内湾し、帯縄文を有するもの(第140図8、第184図6、8、9)、刻文帯を持つもの(第154図16、第167図8)がある。

I類：外傾する頸部に縄文を持つもの、胴部に三叉文、入り組み文が施されるものを一括する(第120図9、第127図2、第129図15、第132図8、12、20、第136図19、第141図4、5、17、第146図9、第163図18、第170図3、第184図28、31、32)。安行3a～3b式に属する。

J類：外傾する頸部にヘラ描き文が施されるもの(第130図16)。安行3a式。

K類：内湾する口縁部に沈線文で弧状のモチーフが斜位に描かれるもの(第137図3、第145図12)。

L類：大洞系の鉢形土器(第120図11、第129図7、10、11、第136図29、30、第141図10、11、第146図18、第150図12、15、第155図7、13、第163図19、第172図15、第185図19、第186図12)。

M類：その他の鉢形土器(第129図21、第137図6、第179図7、第185図3、10)。

N類：稲妻状のモチーフが施されるもの(第153図16)。

O類：関西系の影響が見られるもの(第163図22)。

P類：台付鉢

P1類：平縁で、口縁部が外反するもの(第160図11)。

P2類：安行系の台付鉢(第120図2、第121図2、第126図31、第154図22、第163図26、第170図23、第184図34)。

P3類：その他の台部(第116図5、第117図2、第118図6、第142図12、第149図17、18、第153図17、19、第166図18)。

浅鉢形土器

A類：小波状口縁を有し、胴部がわずかに屈曲して口縁部が立ち上がるもの。胴部には刺突が施される(第156図20、第168図8、第179図16)。加曾利B2式に属する。

B類：体部が直線的に外傾し、口縁部はやや緩やかに屈曲して内湾気味に立ち上がるもの。口縁部と体部の段差が明瞭なもの(第131図14、第156図19、第157図6、第175図5)、口縁部と体部の段差が小さく、口縁部が強く内湾するもの(第135図6、第139図7、第165図10、第169図2、第172図22)がある。加曾利B式後半の所産であろう。

C類：直線的に外傾する器形で、口縁部に平行沈線を有するもの。先端の粗い工具による沈線文を持つものと(第125図20、第126図22)、凹線状の沈線を持つもの(第172図1)がある。

D類：頸部が外傾し、体部に弧線、三叉文、入り組み文等が施されるもの(第125図7、第154図20、第184図24、25)。安行3a式。

E類：体部に屈曲を持ち、屈曲部に突帯を有するもの(第127図5、第140図23)。安行3a式。

F類：口縁部がやや内湾し、体部には弧線文、三叉文を持つもの（第126図28、29、33、第166図5）。安行3 a式。

G類：直線的に外傾し、体部にはレンズ状の磨消縄文が施されるもの（第184図11、12）。安行2式。

H類：大洞系の影響を受けた浅鉢（第121図3、4、第125図10、第132図21、第137図1、第141図14、第146図10、第150図14、第155図2、3、第163図21、第185図22、第186図1～6、第186図13）。

I類：異系統と考えられるもので、大洞系以外のもの（第121図6、第150図17、第155図9）。

J類：無文のもの。口唇部に刺突を有するものもある（第120図8、10、第127図31、32、第135図16、第142図9、第146図15、26、第172図2）。

壺形土器

A類：瘤付系の影響が見られるもの（第120図6）。

B類：大洞系の影響が見られるもの（第125図11、第129図12、第132図22、第136図28、第150図13、第155図4～6、第163図20、第172図13、第186図7～9、11、14）。第172図13は注口の可能性もある。

C類：その他の壺形土器（第120図5、7、第132図23、第133図20、第137図9、第155図8、第188図6、9）。

注口土器

A類：矢羽状沈線を有するもの（第160図7）。

B類：2条1組の沈線文が施されるもの（第116図3）。高井東系列に属する。

C類：帯縄文系の注口土器（第136図13、第146図2、8、第150図4～6、第154図15、第163図6、10、第169図12、13、15、第184図19～21）。

D類：大洞系、または大洞系の影響が見られるもの。第121図1、5、第150図16は大洞系、第125図9、第132図28、第141図7、15、第146図6、7は大洞系の影響の見られるもの。

E類：その他の注口土器（第115図2、第137図10、第160図8）。

その他の器種

吊り手形土器（第125図4、第128図11、第144図17、第157図7、第165図11、第172図21、第175図21～24）、異形台付土器（第132図27、第137図4、第146図25）。

粗製深鉢

A類：口唇部にやや厚めの隆帯が貼付されるもので、頸部が緩やかに括れ、口縁部が外傾するもの。隆帯上には指頭圧痕が施される。

A 1類：体部に弧状の条線が施されるもの（第145図13、第181図26）。

A 2類：頸部に矢羽状、格子目状、縦位の沈線を持つもの（第115図4、第132図29、30、第136図3、5、第139図25、27、28、第145図14、15、第154図1、4、10、11、第161図18、第162図1、第167図13、14、第181図17）。

A 3 類：2 条以上の粘土紐が密に貼付されるもの（第125図3、第167図10、第173図7）。

A 4 類：頸部が無文で、押圧がやや密なもの（第161図16、17、第162図4）。

A 5 類：頸部が無文で、押圧がやや粗なもの（第132図31、第149図11、第154図3、5、8、9）。

A 6 類：頸部が無文で、押圧が間延びしたもの（第171図17、第182図2）。

A 7 類：頸部が無文で、隆帯上が無文のもの（第136図12）。

B 類：紐線文系の深鉢で、直立、またはやや内湾するもの。装飾は指頭圧痕による。

B 1 類：2 条以上の粘土紐が密に貼付されるもの（第170図12、第181図23）。

B 2 類：押圧が密なもの（第117図1、第132図35、第140図1、第164図2、第181図19、22）。

B 3 類：押圧がやや粗なもの（第127図16、17、第132図32、33、第136図6、7、9、第139図23、第149図12、第154図2、6、第162図2、3、第167図11、第170図13、第171図15、第181図18、20、21、24）。

B 4 類：押圧が間延びし、痕跡的なもの（第118図3、第128図18～20、第139図24、26、第140図2、第149図13、第154図7、第162図7、第167図12、15、16、第171図16、第173図13、第182図1～8）。

B 5 類：幅の広い隆帯が貼付され、隆帯上は無文のもの（第133図2、第136図10、11、第140図3～7、第145図17～19、第149図14、15、第154図12、第162図6、第173図10、12、第182図9～13）。

B 6 類：口唇部が滑らかに肥厚するもの（第118図4、第130図24、第133図3、第145図16、第149図16、第154図13、第162図8、10、11、第167図17、18、第171図18、第182図14、16、第183図1～3）。

B 7 類：隆帯が斜位に貼付されるもの（第186図30）。

B 8 類：口唇部が滑らかに肥厚し、体部に条線を持つもの（第161図8、第187図1）。第161図8は、口縁部がやや内屈する。

C 類：紐線文系深鉢で、粘土紐上に細かい刻み、刺突による装飾を持つもの。頸部が括れ、口縁部が外反するもの（第130図23、第164図6）、口縁部が直立するもの（第155図15、16、第164図5、第170図16、第186図17、22）、口縁部が内湾するもの（第126図8、第127図19、20、第129図28～30、第137図14、第164図1、4、第168図1、2、第172図3、第186図28、31）がある。

D 類：紐線文系の深鉢で、沈線間に刻みが施される装飾を有するもの。頸部が括れ、口縁部が外反するもの（第132図34、第141図25、第149図10、第155図14）、口縁部が直立するもの（第129図24、第137図13、第150図21、第155図17、第164図3、第170図17、18、第186図18、19、21）、口縁部がやや内湾するもの（第129図25、第146図22、第150図22、第155図18、第172図17、第186図20、23～26、29）、口縁部が内湾し、円形の刺突を持つもの（第162図5、第172図4）がある。

E 類：無文のもの。器面の調整はケズリ、ナデのみで、ミガキを持つものはない。口縁部が緩やかに内湾するもの（第122図5～7、第124図1～3、第126図5～7、第129図36、38、第130図2、第133図18、第150図20、第155図23～25、第168図4、6、第170図21、第173図9、第188図4、5、7）、口縁部が直立、または直線的に外傾するもの（第123図1～3、第125図21、第130図1、第133図22～25、第137図11、17、第141図21、第142図1、2、4～7、第150図25、第164図9、10、第173図3、第187図15、19～22、第188図1～3、8）、口縁部が外傾するもの（第127図33、第129図37、第133図21、第155図21、22、第164図20、第172図6）がある。口唇部に刻みを有するものもある。

F 類：所謂折返し口縁を有するもの（実際は粘土帯の貼付による）。折返し部が無文のもの（第122

図1～3、第125図25～30、第127図22～26、第129図31、第130図18、第133図4～9、11～14、第137図15、16、18、第141図26、第146図24、第150図23、第164図7、8、19、第170図19、20、第187図2～11)、折返し上に刺突、刻み等の装飾を有するもの(第122図4、第125図32、33、第127図27～30、第129図32～35、第133図10、第141図27、第146図23、第155図20、第172図5、第187図12、13)がある。折返しが2段以上のものがかなりの量存在する。

G類：口縁部に斜位の刺突帯を持つもの(第146図21)。

H類：縄文が全面を覆うもの(第141図23、24)。

I類：その他の粗製深鉢。隆帯部に縄文が施文されるもの(第155図19)、口縁部に1条の沈線を持つもの(第125図23、第129図23、第131図30、第164図18、第187図16、17)、口縁部のみに刺突帯を持つもの(第130図10)がある。

胴部破片

A類：後期中葉に属するもの。磨消縄文を伴う連弧文、弧線文が施されるもの(第131図16、17、第134図23、24、第148図8、第151図22、第177図17)、無文地に2条1組の沈線で直線的なモチーフが描かれるもの(第126図10、第131図28、第138図18、21～23、第144図3、16、第145図7、9、10、第148図10、第183図21)、それ以外のもの(第128図12、17、第136図2、第156図23、第162図9、第166図8、第168図15、第177図15、第185図10、18)が見られる。

B類：後期後葉に属するもの。磨消縄文を伴う弧線文が施されるもの(第151図19、20、第177図16、18)、隆起帯縄文を有するもの(第140図15、第145図8、第184図16、第185図15)、刻文帯を有するもの(第146図1、第163図11、第185図18)、それ以外のもの(第125図6、第127図21、第130図13、第132図7、14、第140図14、16、第150図8、第151図21、第154図24、第155図11、第160図2～4、第167図7、第169図16、18、第173図6、第183図22、23、第185図7、16、17)が見られる。

C類：晩期前葉に属するもの。三叉文、三叉状入り組み文が主体となるもの(第125図12、第126図30、第127図4、第129図5、8、第132図13、24、第140図18、第141図6、第154図21、第163図8、第170図4、第184図27)、それ以外のもの(第129図1、第136図17、第140図24、第141図9、13、第146図3、第169図17、19、第183図24～26、第184図29、30、第185図6)がある。

D類：晩期中葉に属するもの。安行系のもの(第125図18、第126図19、第127図3、6)、大洞系のもの(第129図9、第132図6、第137図2、第146図11、12、第170図10、第172図14)が見られる。

本遺跡出土の後晩期土器について、問題点の若干の指摘を行なう。本遺跡からは曾谷式高井東系列に属する土器群が多量に検出されている。良好な一括資料としては、A区第4号住居跡、B区第1号住居跡、第4号土壇、第15号土壇があげられる。第4号土壇からは、加曾利B3式～安行2式が出土しているが、主体となるのは曾谷式期のものである。B区第15号土壇出土資料は高井東系列の良好なまとまりを示している。特に第70図1、2の注口土器が共伴したことが注目される。

これらの一括資料に共伴する粗製深鉢は、B5類が主体を占める。粗製深鉢B5類は、高井東遺跡の報告では安行1式に伴うとされた(田部井 市川 他1974)。器形の特徴からすれば首肯され

る指摘である。しかし本遺跡では、口唇部隆帯に押圧が加えられる土器は、加曾利B式期の紐線文土器から粗製深鉢B 5類まで、型式学的断絶は認められない。粗製深鉢B 3, 4類が加曾利B式後半に伴うとすれば、安行1式との間で時間的断絶を想定しなければならない。高井東系列の新段階のものは安行1式に伴うことが指摘されており(鈴木 1980、橋本 1990)、その関連から、安行1式にB 5類が併行する可能性はある。しかし第15号土壌出土資料は、従来の見解に従えば高井東系列の中でも前半に属すると考えられ(鈴木 1980、市川 1981)、本遺跡における出土状況からすれば、B 5類は高井東系列前半の段階にも共伴する可能性が高い。

晩期前葉に属する粗製土器は、大宮台地周辺のそれとは際だった差異を見せる。粗製深鉢C, D類などの紐線文系土器も存在するが、全体に占める割合は少ない。それに比して多くを占めるのが粗製深鉢F類である。B区第1号住居跡重複部分出土資料は、晩期前葉以前のものに限られるが、本類が共伴している。本類が晩期前葉に共伴することは確実である。本類は大宮台地周辺でも晩期前葉に共伴する出土事例が見られる。大宮市東北原遺跡第2号住居跡茶褐色土層(立木 山形 1985)、高井東遺跡第8号住居跡で、晩期前葉の土器群に共伴している。北関東では、桐生市千網谷戸遺跡石塚Ⅲa層において安行3a式に共伴している(増田 他 1978)。

晩期中葉になると在地土器の様相はやや不明になり、北部関東に分布の中心がある刺突文系の土器が見られるようになる。これに対し、大洞系土器群は大洞C₁式から大洞C₂式前半のものが主体を占める。精製、半精製の鉢、浅鉢が多いようである。関西系土器も検出されており、土器に見られる地域間の交流を窺うことができる。本遺跡出土土器は、同じ埼玉県下でも大宮台地周辺の土器群とはかなり様相を異にしており、地域性の解明が今後課題となろう。

イ その他の遺物

土製品の中では、3点の「有孔球状土製品」が検出されたことが注目される。「有孔球状土製品」については、近年小島俊彰が集成、分析を行なっている(小島 1980, 1991)。小島の集成によれば埼玉県下での出土は見られない。分布の中心は北陸、中部である。また、東京、千葉にも類例があり、関東西部はいわば分布の空白地帯であった。本例は当該地域における貴重な出土事例と言える。

土偶はその多くが後期中葉段階に帰属すると考えられる。後期後葉から晩期に属するものは少ない。他の土製品、土器に見られる継続性とは異なる傾向を見せている。

石棒類では、未製品と考えられる資料が多数検出されている。図示できなかったが、片岩製の剥片も多数検出されている。接合例はなかったが、未製品と考えられる資料の存在から、本遺跡において石棒製作が行なわれていた可能性はきわめて高い。

本遺跡からは焼けた獣骨が検出されている。前述の通り、周辺地域で類例が多数確認されている。本遺跡の例も幼獣、亜成獣が中心であり、しかも相当の高温で焼かれている。儀礼的な色彩が強いものである。

ウ 小結

当地域の後晩期資料は、報告例が少なく、文化的様相は不明な点が多々ある。本遺跡では、遺構、

遺物の本来的なまとまりの大半が捉えられなかったことは遺憾であったが、土器以外にも、土偶、土製品類が検出され、文化要素の内容は、今後検討可能である。また、焼骨の検出も見られるなど、当地域における縄文後晩期社会の実態解明にとって、重要な資料を提供した遺跡と言える。

(2) 古墳時代

本遺跡A区から検出された古墳時代の遺構は、住居跡3軒、方形周溝墓5基、円形周溝墓1基、円筒埴輪棺、礫槨、古墳の周溝と考えられる溝跡である。住居跡は五領期、方形周溝墓の中で構築時期の明確なものは、すべて五領期の末のものである。これまでの周辺遺跡の調査から、櫛挽台地北部が古墳時代に墓域として利用されたことが明らかにされている(鳥羽 平田 1991)。今回の調査によって、本調査区周辺が、五領期のある段階までは居住域として利用されていたことが確認された。五領期末以降、墓域としての性格を持つようになったと考えられる。

2 滝下遺跡

調査の成果として、櫛挽台地の縁辺に沿って掘り込まれた大規模な溝跡が検出されたことがあげられる。本溝跡は、8世紀前半以前に掘削され、12世紀前半には、埋没が進行していた可能性が高い。台地上の中宿遺跡からは、径1mあまりの柱穴からなる総柱建物跡が検出されており、郡衙に伴う正倉の可能性が指摘されている(鳥羽 平田 1991、鳥羽 1992)。その存続年代は7世紀前半から8世紀代であることが確認されている。位置関係、所属時期から、本溝跡は中宿遺跡の建物群と密接な関連を有していたと推定される。また、本遺跡の東側に隣接する砂田前遺跡からも溝跡が検出されている(岩瀬 1991)。当該時期において、本遺跡周辺の低地に水利関係の様々な施設が構築され、台地上の遺跡群と有機的な関連を有していたことが窺える。

引用文献

- 市川 修 他 1981 「妻沼西南遺跡群Ⅰ - 道ヶ谷戸条理・道ヶ谷戸・飯塚南 -」妻沼町埋蔵文化財調査報告 第1集 妻沼町教育委員会
- 岩瀬 譲 1991 「一般国道17号深谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告 -Ⅱ- 樋詰・砂田前」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第102集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 柿沼幹夫 1979 「埼玉県北部における縄文時代の遺跡立地について」『埼玉考古』第18号 pp. 8～12 埼玉考古学会
- 栗原文蔵 小林達雄 1961 「埼玉県西谷遺跡出土の土器群とその編年的位置」『考古学雑誌』第47巻第2号 pp.38～46
- 栗原文蔵 佐藤忠雄 1976 「水窪・新井遺跡の調査」 岡部町教育委員会
- 栗原文蔵 佐藤忠雄 1977 「水窪遺跡の調査 -第二次-」 岡部町教育委員会
- 小島俊彰 1980 「有孔球状土製品」『考古学研究』第27巻第1号 pp.48～72
- 小島俊彰 1991 「有孔球状土製品と硬玉製小珠」『縄文時代』2 pp. 1～16
- 埼玉県 1978 「土地分類基本調査 高崎・深谷」

- 埼玉県教育委員会 1989 「埼玉県埋蔵文化財調査年報 平成2年度」
- 佐藤忠雄 1979 「大寄B遺跡・西浦北遺跡 - 圃場整備事業に伴う棒沢遺跡群の調査概報 - 」岡部町教育委員会
- 鈴木正博 1980 「「曾谷式」研究序説」『古代探叢』pp.79~98
- 立木新一郎 山形洋一 1985 「東北原遺跡発掘調査報告 - 第6次調査 - 」大宮市文化財調査報告第19集
大宮市教育委員会
- 田部井功 市川 修他 1974 「高井東遺跡調査報告書」 埼玉県遺跡調査会報告第25集 埼玉県遺跡調査会
- 鳥羽政之 1992 「岡部町中宿遺跡の調査」『第25回 遺跡発掘調査報告会発表要旨』 pp.18~21 埼玉考古学会
- 鳥羽政之 平田重之 1992 「新田遺跡」 岡部町遺跡調査会発掘調査報告書第3集
- 橋本 勉 1990 「県立蓮田養護学校関係埋蔵文化財発掘調査報告 雅楽谷遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第93集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 平川 南 1991 「墨書土器とその字形 - 古代村落における文字の実相 - 」『国立歴史民俗博物館研究報告』 第35号 pp.67~129
- 藤沼邦彦 1983 「文様の描き方 - 亀ヶ岡式土器の雲形文の場合 - 」『縄文文化の研究5 縄文土器Ⅲ』 pp.151~167
- 増田 修 他 1978 「千網谷戸遺跡発掘調査報告」 桐生市文化財調査報告第3集 桐生市教育委員会
- 水村孝行 中島宏 他 1981 「関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告 - X I - 清水谷・安光寺・北坂」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第1集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

遺構名新旧対照表

新 番 号	旧 番 号	新 番 号	旧 番 号	新 番 号	旧 番 号	新 番 号	旧 番 号
A区 SK12	A区 SK13	SK4	SK6	SJ2 P 30	P 28	SJ4・9 P 37	P 80
13	14	5	7	32	26	38	83
14	15	6	8	33	25	40	85
15	17	7	9	34	37	49	97
16	18	8	10			50	106
17	19	9	11	SJ3 P 2	P 66	52	108
18	20	10	12	5	129	53	109
19	21	11	13	6	72	54	144
20	22	12	14	7	75	57	111
21	23	13	15	8	78	58	133
22	24	14	16	9	80	59	132
23	25	15	17	10	79	60	131
24	26	16	18	11	97	61	120
25	27	17	19	12	108	62	129
26	28	18	20	13	109	63	72
27	30	19	21	14	111	66	75
28	31			15	144		
29	32			16	132		
30	33	SJ2 P 1	P39	17	133		
31	35	2	66				
		5	50				
		9	122	SJ4・9 P 2	P 89		
B区 SJ10	B区 SK1	16	15	4	95		
11	5	17	16	17	164		
SK1	2	26	33	34	76		
2	3	27	34	35	78		
3	4	28	30	36	79		